熊本県文化財調査報告　第121集

うてな遺跡

県代行台堀切線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査

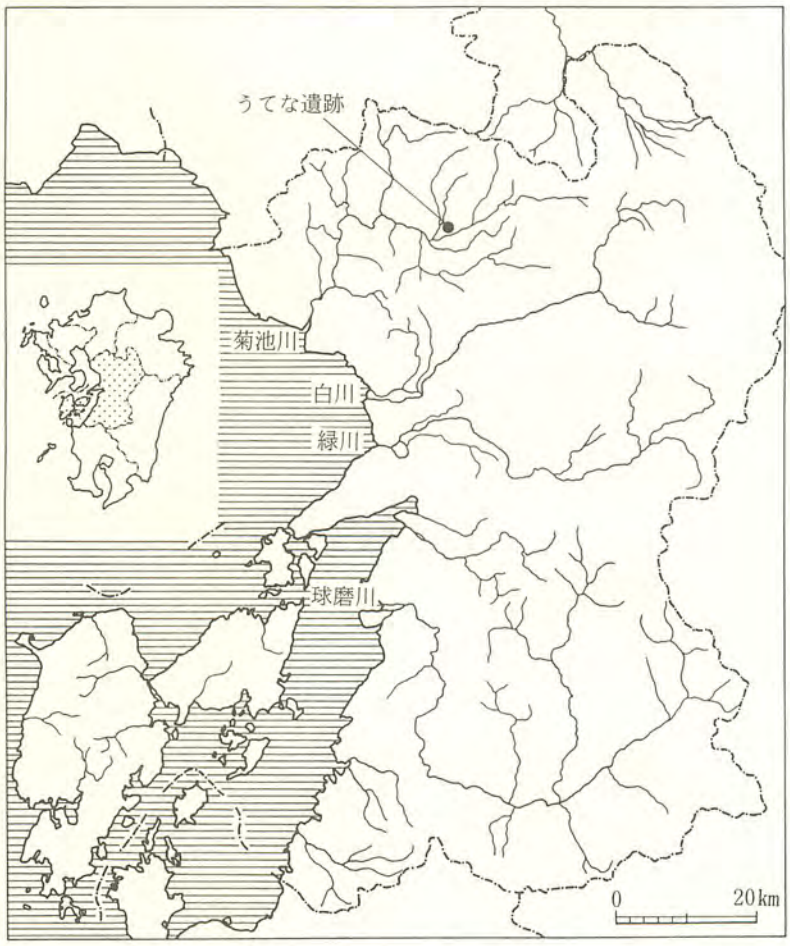
1992

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第121集

うてな遺跡

県代行台堀切線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査



1992

熊本県教育委員会

▲うてな遺跡航空写真(南上空より)

凝灰岩製腰掛け▶

序　　文

熊本県教育委員会では、開発工事などに伴う埋蔵文化財の発掘調査を行っております。

ここに報告する熊本県菊池郡七城町うてな遺跡の発掘調査は、県代行台（うてな）堀切線道路改良工事に伴うものです。調査は平成2年度から平成3年度に実施しました。

この発掘調査では、縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代、鎌倉・室町時代の遺構や遺物を検出しました。特に、弥生時代後期の環濠からは、多量の土器と共に凝灰岩を加工した腰掛けが出土しました。この腰掛けは、全国でも出土例のない大変貴重なものです。また、その他の時代の遺構や遺物も、菊池川中流域から上流域の古代・中世文化を考える際の重要な資料です。

この報告書が広く活用され、文化財保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたりましては、専門調査員の先生方の多大な御指導・御助言を賜り、また、県土木部道路建設課・菊池土木事務所工務課をはじめ、七城町教育委員会の御協力を受けました。ここに心から厚く御礼申し上げます。

平成4年3月31日

熊本県教育長　　佐　藤　幸　一

例　言

1．本書は、1990年10月から1991年10月に行った県代行台（うてな）堀切線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘現場での遺構の実測・写真撮影・遺物の取り上げは、調査員で行った。遺物の実測は、主として西住欣一郎・植野治代があたり、一部、福原博信・六田育子・本山千絵が行った。遺構・遺物のトレースは、西住・植野・連河由紀・白井勝子・丹生英里・日置正香・六田が行った。その他、坂田朋子の協力があった。遺物の写真撮影は西住が行った。

3．本書の執筆は、西住が行った。

4．本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、西住が担当した。

凡　例

1．本書に使用した方位は、磁北である。

2．遺構の規模について記述した数値は、検出面のものである。

3．土師器に赤色顔料を塗布したものは、SCREEN－TONEで表現した。

4．図版に掲載した遺物の縮尺は、弥生土器が約1/4、壺棺が約1/7、銅鏡・銅鏃・鉄砲玉・古銭・玉類が約1/2であり、その他の遺物が約1/3である。

本　文　目　次

報告書抄録

第Ⅰ章　調査の経過

1．調査に至る経過……1

2．調査の組織……1

3．調査の方法……2

4．調査の進行状況……3

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と地理的環境……4

2．遺跡の歴史的環境……5

第Ⅲ章　調査の成果

1．遺跡の層序について……9

2．縄文時代の調査……10

3．弥生時代の調査

（1）遺構について……11

（2）遺物について……29

4．古墳時代の調査

（1）遺構について……79

（2）遺物について……92

5．奈良・平安時代の調査

（1）遺構について……98

（2）遺物について……129

6．鎌倉・室町時代の調査

（1）遺構について……156

（2）遺物について……178

第Ⅳ章　まとめ

1．縄文時代について……209

2．弥生時代について……209

3．古墳時代について……219

4．奈良・平安時代について……222

5．鎌倉・室町時代について……225

挿　図　目　次

第 1 図　周辺遺跡分布図…… 4
第 2 図　遺跡周辺地形図…… 7
第 3 図　土層実測図 …… 9
第 4 図　縄文時代調査区位置図…… 10
第 5 図　遺物実測図…… 10
第 6 図　石鏃実測図…… 11
第 7 図　遺構配置図…… 11
第 8 図　10 号溝跡実測図…… 13
第 9 図　10 号—B 溝跡実測図…… 14
第 10 図　10 号—B 溝跡実測図…… 15
第 11 図　10 号—B 溝跡実測図…… 16
第 12 図　10 号—B 溝跡土層断面図…… 17
第 13 図　10 号—A 溝跡遺物出土状況実測図…… 18
第 14 図　10 号—A 溝跡遺物出土状況実測図…… 19
第 15 図　10 号—B 溝跡 3 層遺物出土状況実測図 …… 21
第 16 図　10 号—B 溝跡 3 層遺物出土状況実測図 …… 22
第 17 図　10 号—B 溝跡 3 層遺物出土状況実測図 …… 23
第 18 図　10 号溝跡 4 層遺物出土状況実測図…… 24
第 19 図　10 号溝跡 4 層遺物出土状況実測図…… 25
第 20 図　10 号—B 溝跡 4 層遺物出土状況実測図 …… 26
第 21 図　10 号—B 溝跡 4 層遺物出土状況実測図 …… 27
第 22 図　10 号—B 溝跡 4 層遺物出土状況実測図 …… 28
第 23 図　10 号—A 溝跡 2 層出土土器実測図…… 30
第 24 図　10 号—A 溝跡 2 層出土土器実測図…… 31
第 25 図　10 号—A 溝跡 2 層出土土器実測図…… 32
第 26 図　10 号—A 溝跡 3 層出土土器実測図…… 33
第 27 図　10 号—A 溝跡 3 層出土土器実測図…… 34
第 28 図　10 号—A 溝跡 3 層出土土器実測図…… 35
第 29 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 37
第 30 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 38
第 31 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 39
第 32 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 40
第 33 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 41
第 34 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 42
第 35 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 43
第 36 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 44
第 37 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 45

第 38 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 46
第 39 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 47
第 40 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 48
第 41 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 50
第 42 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 51
第 43 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 52
第 44 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 54
第 45 図　10 号—B 溝跡 3 層出土土器実測図…… 55
第 46 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 56
第 47 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 57
第 48 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 58
第 49 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 59
第 50 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 60
第 51 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 61
第 52 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 62
第 53 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 63
第 54 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 64
第 55 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 65
第 56 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土器実測図…… 66
第 57 図　10 号—B 溝跡 4 層出土土製品実測図…… 67
第 58 図　10 号—B 溝跡 3 層・4 層出土土器実測図…… 68
第 59 図　10 号—A 溝跡・10 号—B 溝跡出土鉄器実測図…… 69
第 60 図　10 号・10 号—B 溝跡出土石器実測図…… 70
第 61 図　10 号—B 溝跡出土石器実測図‥ 71
第 62 図　10 号—B 溝跡出土石器実測図‥ 72
第 63 図　10 号・10 号—B 溝跡出土石器実測図…… 73
第 64 図　10 号—B 溝跡出土石器実測図　74
第 65 図　10 号—B 溝跡出土石器実測図　75
第 66 図　10 号—B 溝跡出土石器実測図　76
第 67 図　10 号—A 溝跡出土遺物実測図　77
第 68 図　10 号—A 溝跡出土遺物実測図　77
第 69 図　石製腰掛け実測図…… 78
第 70 図　遺構配置図…… 79
第 71 図　1 号方形周溝墓実測図…… 80
第 72 図　1 号方形周溝墓土層断面図　81
第 73 図　1 号方形周溝墓主体部実測図82
第 74 図　2 号方形周溝墓実測図…… 83
第 75 図　2 号方形周溝墓土層断面図　84
第 76 図　3 号方形周溝墓実測図…… 85
第 77 図　1 号木棺(1)実測図…… 86
第 78 図　1 号木棺(2)実測図…… 87

第 79 図　2 号木棺実測図……　88
第 80 図　3 号木棺実測図……　88
第 81 図　4 号木棺(1)実測図……　89
第 82 図　4 号木棺(2)実測図……　90
第 83 図　1 号壺棺(1)実測図……　91
第 84 図　1 号壺棺(2)実測図……　91
第 85 図　1 号方形周溝墓周溝内出土土師器実測図……　92
第 86 図　2 号方形周溝墓周溝内出土土師器実測図……　92
第 87 図　2 号方形周溝墓周溝内出土土師器実測図……　93
第 88 図　2 号方形周溝墓周溝内出土遺物実測図……　94
第 89 図　1 号木棺出土玉実測図……　95
第 90 図　3 号木棺出土玉実測図……　95
第 91 図　3 号木棺・4 号木棺出土鉄器実測図……　96
第 92 図　4 号木棺出土玉実測図……　96
第 93 図　1 号壺棺実測図……　97
第 94 図　遺構配置図……　98
第 95 図　1 号～3 号竪穴住居址実測図　100
第 96 図　4 号～8 号・22 号竪穴住居址実測図……　101
第 97 図　9 号～12 号竪穴住居址実測図　103
第 98 図　9 号住居址竈実測図……　104
第 99 図　13 号～18 号竪穴住居址実測図　105
第 100 図　18 号住居址内甕出土状況実測図……　106
第 101 図　19 号・20 号竪穴住居址実測図　108
第 102 図　21 号・24 号竪穴住居址実測図　109
第 103 図　25 号～28 号竪穴住居址実測図　111
第 104 図　29 号～32 号竪穴住居址実測図　113
第 105 図　33 号竪穴住居址出土遺物分布図　115
第 106 図　33 号竪穴住居址実測図……　116
第 107 図　34 号～36 号竪穴住居址実測図　117
第 108 図　37 号・38 号竪穴住居址実測図　118
第 109 図　39 号竪穴住居址実測図……　119
第 110 図　40 号～46 号竪穴住居址実測図　121
第 111 図　遺構配置図(1)……　122
第 112 図　遺構配置図(2)……　123
第 113 図　1 号掘立柱建物跡実測図……　124
第 114 図　2 号掘立柱建物跡実測図……　124
第 115 図　3 号掘立柱建物跡実測図……　125
第 116 図　4 号掘立柱建物跡実測図……　126
第 117 図　5 号掘立柱建物跡実測図……　126
第 118 図　12 号道路跡実測図……　127
第 119 図　12 号道路跡土層断面図……　128
第 120 図　竪穴住居址出土遺物実測図　130
第 121 図　竪穴住居址出土遺物実測図　132
第 122 図　18 号竪穴住居址出土須恵器実測図……　133
第 123 図　18 号竪穴住居址出土石器実測図……　133
第 124 図　竪穴住居址出土遺物実測図　134
第 125 図　竪穴住居址出土遺物実測図　135
第 126 図　竪穴住居址出土遺物実測図　137
第 127 図　紡錘車実測図……　138
第 128 図　33 号竪穴住居址出土石器実測図　139
第 129 図　33 号竪穴住居址出土石器実測図　140
第 130 図　土錘実測図……　140
第 131 図　竪穴住居址出土遺物実測図　141
第 132 図　37 号竪穴住居址出土石器実測図　142
第 133 図　竪穴住居址出土遺物実測図　143
第 134 図　44 号竪穴住居址出土遺物実測図　144
第 135 図　竪穴住居址出土遺物実測図　145

第136図　土錘実測図・・・・・・・・・・・・・・　145
第137図　46号竪穴住居址出土石器実測図　146
第138図　竪穴住居址出土鉄器実測図・・　146
第139図　12号道路跡出土須恵器実測図　147
第140図　12号道路跡出土土師器実測図　148
第141図　12号道路跡出土鉄器実測図・・　149
第142図　1号溝跡出土須恵器実測図・・　149
第143図　鉄製品・スラグ・ふいごの羽口
出土分布図・・・・・・・・・・・・・・・・　150
第144図　るつぼ・ふいごの羽口実測図　151
第145図　III層出土鉄器実測図・・・・・・・・　152
第146図　III層出土遺物実測図・・・・・・・・　152
第147図　III層出土石器実測図・・・・・・・・　153
第148図　古銭拓影・・・・・・・・・・・・・・・・・・　154
第149図　III層出土遺物実測図・・・・・・・・　154
第150図　車輪文タタキ目をもつ須恵器
実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　155
第151図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・　156
第152図　1号・2号道路跡実測図・・・・　157
第153図　2号～5号道路跡実測図・・・・　159
第154図　2号道路跡実測図・・・・・・・・・・　160
第155図　1号・2号道路跡実測図・・・・　161
第156図　6号道路跡実測図・・・・・・・・・・　162
第157図　7号道路跡実測図・・・・・・・・・・　163
第158図　8号・9号道路跡実測図・・・・　164
第159図　8号・9号道路跡実測図・・・・　165
第160図　8号道路跡実測図・・・・・・・・・・　166
第161図　8号道路跡下部遺構実測図・・　167
第162図　8号道路跡下部遺構実測図・・　168
第163図　10号道路跡実測図・・・・・・・・・・　169
第164図　土壙実測図・・・・・・・・・・・・・・・・　170
第165図　7号・8号溝跡実測図・・・・・・　171
第166図　11号溝跡実測図・・・・・・・・・・・・　172
第167図　11号溝跡実測図・・・・・・・・・・　173
第168図　11号溝跡実測図・・・・・・・・・・　174
第169図　6号掘立柱建物跡実測図・・　175
第170図　7号掘立柱建物跡実測図・・　176
第171図　8号掘立柱建物跡実測図・・　177
第172図　溝跡出土遺物実測図・・・・・・　178
第173図　道路跡出土遺物実測図・・・・　179
第174図　鉄砲玉実測図・・・・・・・・・・・・・　180
第175図　うてな遺跡弥生時代の全体図210
第176図　城ノ上I，II区遺構配置と貨泉
出土住居および大型住居跡
（高木正文『日本考古学年報』
41　1990年より・・・・・・・・・・　211
第177図　うてな遺跡土器編年図（案）214
第178図　津袋大塚遺跡の土器編年図　218
第179図　うてな遺跡古墳時代の全体図221
第180図　うてな遺跡奈良・平安時代の
全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・　223
第181図　七ツ枝II区遺構配置図（高木
正文『日本考古学年報』41
1990年より・・・・・・・・・・・・・・　224
第182図　うてな遺跡鎌倉・室町時代の
全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・　227
第183図　観音塚の火葬墓配置図（高木
正文『日本考古学年報』41
1990年より・・・・・・・・・・・・・・　228

表　目　次

第１表　調査進行表……　3　第２表　周辺遺跡地名表……　5
第３表　遺物観察表……　181

図　版　目　次

図版１　うてな遺跡遠景、10号－Ａ溝跡・Ｃ－25②層遺物出土状況
図版２　10号－Ａ溝跡ＣＤ地点土層断面、10号－Ａ・10号－Ｂ溝跡Ａ地点土層断面
図版３　10号－Ｂ溝跡・Ｄ－23③層遺物出土状況
図版４　10号－Ｂ溝跡・Ｄ－24③層遺物出土状況、10号－Ｂ溝跡・Ｃ－22③層遺物出土状況
図版５　10号－Ｂ溝跡・Ｃ－22③層遺物出土状況、10号－Ｂ溝跡・Ｃ－20③層遺物出土状況
図版６　10号－Ｂ溝跡・Ｃ－20③層遺物出土状況、10号－Ｂ溝跡・Ｃ－22④層遺物出土状況
図版７　10号－Ｂ溝跡・Ｃ－22④層遺物出土状況、
図版８　10号－Ａ溝跡・10号－Ｂ溝跡完掘全景、10号－Ａ溝跡・Ｃ－25完掘
図版９　10号－Ａ溝跡・Ｂ－23完掘、10号－Ｂ溝跡完掘全景
図版10　１号方形周溝墓遺物出土状況、１号方形周溝墓土層断面
図版11　１号方形周溝墓主体部、２号方形周溝墓全景
図版12　２号方形周溝墓内掘り込み、２号方形周溝墓立橋部北側土師器出土状況
図版13　１号木棺検出状況、１号木棺完掘
図版14　１号木棺掘り込み、３号木棺完掘
図版15　４号木棺完掘、４号木棺刀子出土状況
図版16　１号壺棺検出状況、１号壺棺出土状況
図版17　１号壺棺掘り込み、I区全景
図版18　１号竪穴住居址、４号～12号竪穴住居址
図版19　13号～19号・22号・23号竪穴住居址、18号竪穴住居址内甕出土状況
図版20　24号竪穴住居址、25号竪穴住居址
図版21　29号～31号竪穴住居址、33号～35号竪穴住居址
図版22　33号竪穴住居址遺物出土状況、33号竪穴住居址
図版23　40号～46号竪穴住居址、１号掘立柱建物跡
図版24　２号・３号掘立柱建物跡、４号・５号掘立柱建物跡
図版25　12号道路跡・Ｄ－24、12号道路跡・Ｄ－25
図版26　１号・２号道路跡、２号～４号道路跡
図版27　６号道路跡、８号・９号道路跡

図版28　8号道路跡の凹部、8号道路跡下部遺構
図版29　8号道路跡下部遺構礫配置状況、8号道路跡下部遺構礫配置状況近景
図版30　11号道路跡凹部検出状況、6号～8号掘立柱建物跡
図版31　7号・8号掘立柱建物跡、11号溝跡
図版32　縄文時代の遺物、10号－A溝跡②層出土土器
図版33　10号－A溝跡②層出土土器
図版34　10号－A溝跡③層出土土器
図版35　10号－B溝跡③層出土土器
図版36　10号－B溝跡③層出土土器
図版37　10号－B溝跡③層出土土器
図版38　10号－B溝跡③層出土土器
図版39　10号－B溝跡③層出土土器
図版40　10号－B溝跡③層出土土器
図版41　10号－B溝跡③層出土土器、10号－B溝跡③層出土腰掛け
図版42　10号－B溝跡③層出土腰掛け、10号－B溝跡④層出土土器
図版43　10号－B溝跡④層出土土器
図版44　10号－B溝跡④層出土土器
図版45　10号－B溝跡④層出土土器
図版46　10号－B溝跡④層出土土器
図版47　10号－B溝跡④層出土土器
図版48　10号－B溝跡④層出土土器
図版49　10号－B溝跡④層出土土器、10号－A溝跡②層出土銅製品、1号方形周溝墓出土土師器
図版50　2号方形周溝墓出土遺物
図版51　2号方形周溝墓出土土師器、1号・3号木棺出土玉、3号・4号出土鉄製品
図版52　4号木棺出土玉、1号壺棺
図版53　7号・9号・20号・28号竪穴住居址出土遺物
図版54　25号・28号・33号・36号・38号・39号・44号・46号竪穴住居址出土遺物
図版55　12号道路跡出土遺物、ふいごの羽口
図版56　皇宋通宝、2号道路跡出土鉄砲玉、車輪文タタキ目をもつ須恵器

報告書抄録

書　　名	うてな遺跡
副　書　名	県代行堀切線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第121集
編著者名	西住欣一郎
編集機関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒862　熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	西暦　1992年3月31日

所収遺跡名	所　在　地	コ　ー　ド	調査期間	調査面積	調査原因
うてな	菊池郡七城町大字台	市町村：遺跡番号 ：	19901023－ 19911029	約8,000 m²	道路建設

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
縄文時代後期		西平式・三万田式土器 石器	
弥生時代後期	環濠の一部(2)	後期土器多数・青銅器 鉄器・石器・石製品	凝灰岩製の腰掛け 後期土器の一括遺物
古墳時代前期	1号方形周溝墓 2号方形周溝墓 3号方形周溝墓 1号～4号木棺 1号壺棺	土師器 土師器・鉄器・青銅器 小玉・管玉・鉄鎌・刀子 壺(2)	土師器の壺は県内最古
奈良・平安時代	竪穴住居址(46) 掘立柱建物跡(5) 土坑(2) 溝跡(3)・道路跡(1)	土師器・須恵器・鉄製品・スラグ・ふいごの羽口・るつぼ・石器・古銭	鍛冶関連の遺構 墨書土器・車輪文タタキ目をもつ須恵器 集落への道
鎌倉・室町時代	掘立柱建物跡(3) 土坑(2) 道路跡(10) 溝跡(3)	青磁・白磁・土師器 瓦質土器・須恵器	分棟型二棟造りの構造 8号道路跡の下部遺構 (暗渠様の構造をもつ)

第Ⅰ章　調査の経過

1．調査に至る経過

うてな遺跡の今回の発掘調査は、県代行台（うてな）堀切線道路改良工事に伴うものである。県土木部道路建設課・県菊池土木事務所より、県教育委員会文化課に、台堀切線の道路改良工事について発掘調査の問い合わせがあった。文化課では、うてな遺跡が周知の遺跡であることより、試掘調査の必要があると応答した。1991年9月、文化課の西住は、県菊池土木事務所工務課の高木剛正氏とともに、路線幅の確認と試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺構・遺物が埋蔵されていることが確認できた。文化課は本調査が必要である旨を県土木部道路建設課・県菊池土木事務所に伝えた。その結果、発掘調査を1991年10月23日から実施することになり、文化課の西住が担当することになった。

2．調査の組織

平成2年度～平成3年度の発掘調査と整理作業・報告書作成の組織は、下記の通りである。

平成2年度

調査責任者	文化課長	江崎　正
	教育審議委員（課長補佐）	隈　昭志
	教育審議委員（課長補佐）	中川義孝
	主幹（文化財調査第2係長）	桑原憲彰
調査事務	経理係長	上村忠道
	主任主事	大広美枝子
	主任主事	川上勝美
調査担当	文化財保護主事	西住欣一郎

平成3年度

調査責任者	文化課長	大塚正信
	教育審議委員（課長補佐）	隈　昭志
	課長補佐	松崎厚生
	文化財調査第2係長	松本健郎
調査事務	経理係長	木下英治
	主任主事	大広美枝子

	主任主事	川上勝美
調査担当	文化財保護主事	西住欣一郎
	嘱託	植野治代
	嘱託（協力）	福原博信
	嘱託（協力）	六田育子
整理担当	文化財保護主事	西住欣一郎
	嘱託	植野治代
	嘱託	連河由紀
	臨時	白井勝子
	嘱託（協力）	福原博信
	嘱託（協力）	六田育子

調査協力

七城町役場（土地改良区）・七城町教育委員会・七城町文化財保護委員会・県菊池土木事務所・高木正文・安達武敏

調査作業員

坂本兼男・下田生子・村上邦子・佐藤澄江・高木シゲコ・上田スミ子・坂本兼子・佐藤幸夫愛垣慶一・中原実幸・村上新一・荅よしめ・栄八千代・村上タカ子・内村定之・立野トシエ古閑親子・富田ツル・岩津シズヲ・池田芳江・河津豊子・村上多喜子・佐藤松男・徳永美代子・佐藤和子・松岡泰子・石渕寿乃・岩津アイコ・赤星シズカ・赤星忠次・佐藤真一・白木栄・長尾トヨ子・金光豊子・高宮京子

3．　調査の方法

Ⅰ層及びⅡ層は、重機によって剝ぎ取り、Ⅲ層以下を調査した（第Ⅲ章－1．遺跡の層序についてを参照)。Ⅲ層が残っている箇所は、Ⅰ区・Ⅱ区の一部及びⅢ区である。この部分はⅢ層の調査終了後に、Ⅳ層上面で遺構検出を行った。その他の箇所は、基本的にはⅣ層上面で遺構検出を行い、遺構の調査をした。しかし、Ⅳ層まで削平を受けている箇所は、Ⅴ層上面及び下面で遺構検出を行い、調査を行った。

Ⅲ層の調査では、10m×10mのグリッドを必要に応じて用いた。Ⅲ層より出土した遺物については、その出土地点を記録して取り上げた。

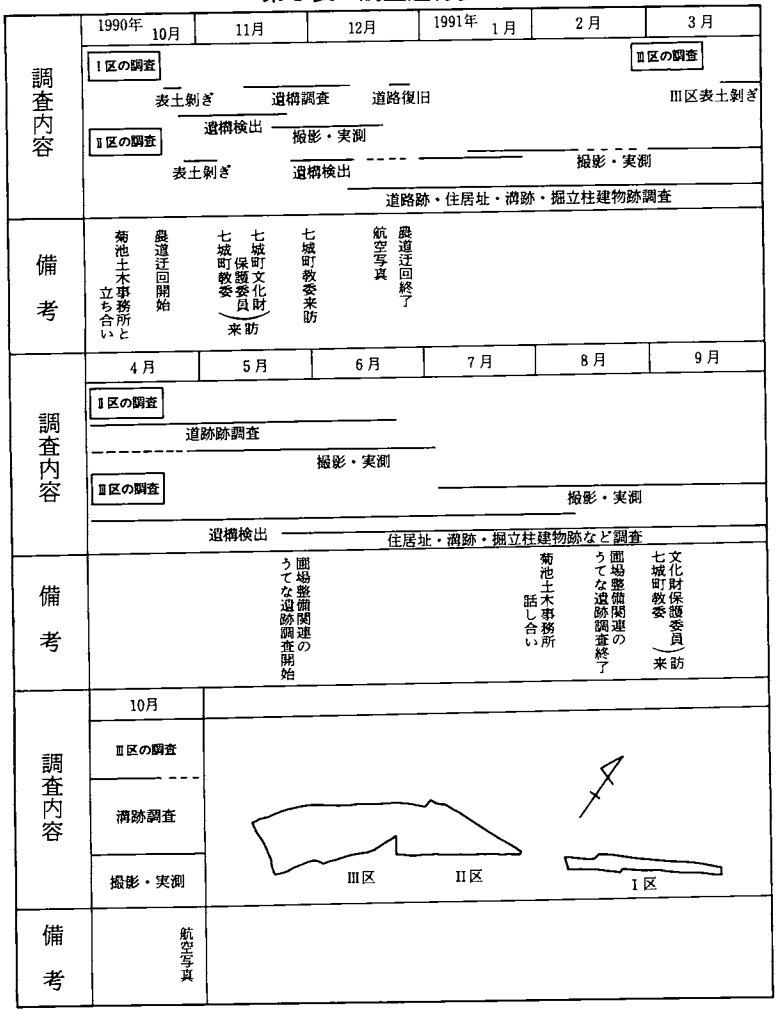
4．　調査の進行状況

うてな遺跡の調査は、1990年10月23日から1991年10月29日まで行った。調査区は細長く、全体を一度に調査するのが困難であるため、I区・II区・III区に分けて、調査を進行した。I区は現在の農道部分と重なるため、調査を行うには、通行止めの必要があった。農道の通行止めをするにあたっては、七城町土地改良区・七城町教育委員会の協力により、調査区付近での耕作者の方々に理解をしていただいた。農道の通行止めの期間をできるだけ短くするために、最初、調査の全力をI区に注いだ。I区は調査終了後、航空写真撮影を行い、農道部分は調査前の状況に現状復原した。

その後、調査はII区・III区を順次行い、調査終了後に、遺跡全体の航空写真撮影を行った。調査の進行状況の詳細については、第1表に示した通りである。

遺物の整理作業・報告書作成は、熊本県文化財収蔵庫（熊本市渡鹿3丁目15の12）で、1991年11月1日から3月31日まで行った。出土遺物は熊本県文化財収蔵庫で保管している。

第1表　調査進行表



第 II 章　遺 跡 の 位 置 と 環 境

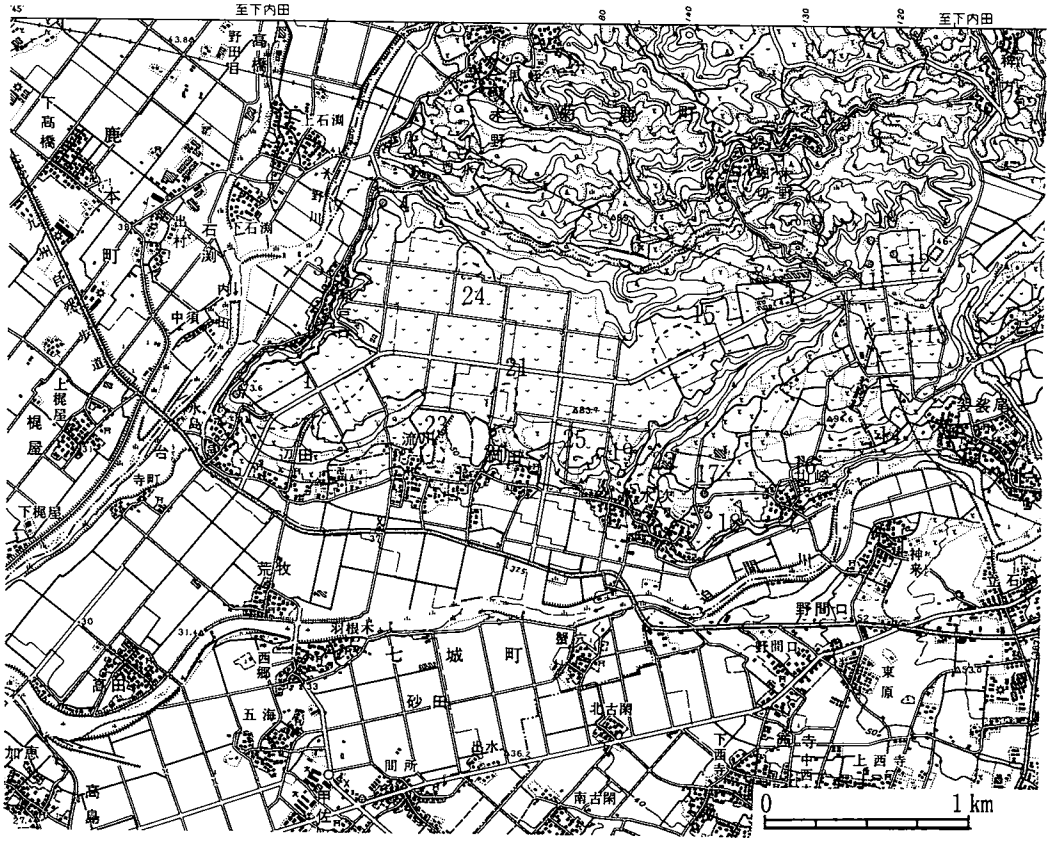
1．　遺跡の位置と地理的環境　（第１図・第２図）

うてな遺跡の所在地は、熊本県菊池郡七城町大字台である。

七城町は、熊本県北部の主要河川である菊池川の中流域に位置し、東の菊池市と西の山鹿市・鹿本町との間にあり、北は菊鹿町、南は泗水町と境を接している。

七城町の北側には、うてな台地が東西方向にのびている。うてな台地は南北を菊池川の支流に挟まれている。台地の北・北西側には内田川・木野川があり、二河川は合流している。南側には迫間川が流れている。うてな遺跡は、その台地上の西側端部に位置している。台地の標高は約 70m～80m で、ほぼ平坦な面が続いている。その平坦面は、西側端部から東方向へと南側端部から北東方向へ入り込む二つの谷によって、くびれている。この二つの谷以外に、小さな谷が数か所に入り込んでいる。台地の西・北西端部には、阿蘇凝灰岩の露頭があり、急な傾斜になっている。南側端部は、西・北西端部よりは緩やかな傾斜である。

1：25,000 地形図　NI-52-11-3-3
きくち　　（熊本３号-３）



第１図　周辺遺跡分布図

第2表　周辺遺跡地名表

1．うてな遺跡	10.袈裟尾丸山古墳	19.ハヤマ塚古墳
2．うてな古墳	11.袈裟尾茶臼塚古墳	20.岡田支石墓（参考地）
3．瀬戸口横穴墓群	12.袈裟尾高塚古墳	21.岡田遺跡
4．北上原古墳	13.西村上遺跡	22.水次遺跡
5．豊水横穴墓群	14.竹ノ上原遺跡	23.流川遺跡
6．ヒジュウ谷横穴墓群	15.一本松遺跡	24.岡田野寺遺跡
7．樋之口Ｂ横穴墓群	16.山崎古墳	25.西ノ平遺跡
8．山田・樋之口Ａ横穴墓群	17.十蓮寺跡（石棺）	
9．井樋谷・大井樋横穴墓群	18.十五社宮古墳	

2．　遺跡の歴史的環境（第1図・第2表）

うてな遺跡が立地するうてな台地とその周辺に分布する遺跡について、概観してみる。

縄文時代の遺跡には、西ノ平遺跡・岡田遺跡・岡田野寺遺跡・竹の上原遺跡・西村上遺跡・一本松遺跡がある。西ノ平遺跡からは押型文土器が出土している。[1] 岡田遺跡では、中期の竹崎式土器が包含層より出土した。[2] 岡田野寺遺跡では、晩期の土器片が多数包含層より出土し、埋甕が検出された。[3] 竹の上原遺跡は土器が散発的に出土し、遺構は確認されていない。[4] 西村上遺跡は縄文時代晩期と平安時代の複合遺跡である。[5] 一本松遺跡については、後・晩期の土器や勾玉などが採集されているが、詳しい内容が不明である。[6]

弥生時代の遺跡としては、岡田遺跡・水次遺跡が挙げられる。岡田遺跡では、弥生時代前期～中期の甕棺墓群が検出されている。[7] 岡田遺跡の近くには、支石墓の上石と思われるものが露出している（岡田支石墓参考地）。水次遺跡では、弥生時代前期～中期の甕棺墓（35基）・土壙墓（28基）が検出されている。[8]

古墳時代の遺跡を見ると、うてな台地の東部には、袈裟尾丸山古墳・袈裟尾茶臼塚古墳・袈裟尾高塚古墳の3基がまとまっている。その古墳群の北西方向の谷に、樋之口Ｂ横穴墓群、山田・樋之口Ａ横穴墓群、井樋谷・大井樋横穴墓群が築かれている。台地の南端部には、山崎古墳・十蓮寺石棺・十五社宮古墳・ハヤマ塚古墳、水次遺跡、台地の西端部には、うてな古墳・瀬戸口横穴墓群・北上原古墳・豊水横穴墓群がある。台地の北側の谷部には、ヒジュウ谷横穴墓群が築造されている。

袈裟尾丸山古墳は直径約20mの円墳である。内部主体は破壊されているが、小型の竪穴式

石室と考えられ、6世紀前半の築造とみることができる。[9] 袈裟尾茶臼塚古墳は、横穴式石室が内部主体で、6世紀後半代の時期に考えられている。[10] 袈裟尾高塚古墳は複室構造の横穴式石室で、石屋形奥壁に靱・三角文の装飾が施されている。まぐさ石として使用している石材に、靱の浮彫がある。これらの古墳群は、袈裟尾丸山古墳→袈裟尾高塚古墳→袈裟尾茶臼塚古墳の変遷をすると考えられる。[11] 樋之口B横穴墓群、山田・樋之口A横穴墓群、井樋谷・大井樋横穴墓群については、未調査で詳細は不明である。

山崎古墳は3基の石棺よりなる。1号石棺は舟形石棺、2号石棺は箱式石棺、3号石棺は家形石棺である。1・2号石棺は埋め戻されており、3号石棺はその近くに保存されている。十蓮寺石棺は家形石棺で、墳丘は不明である。十五社宮古墳は、直径約10mの円墳と考えられ、主体部は箱式石棺である。ハヤマ塚古墳は円墳で、主体部に箱式石棺をもつ。[12] ハヤマ塚古墳の東側の水次遺跡では、古墳時代前期の方形周溝墓2基と古墳時代と思われる箱式石棺（1基）・石組み遺構（4基）が確認されている。[13]

うてな古墳は直径約30mの円墳と考えられる。主体部は不明である。瀬戸口横穴墓群は、台地西端部の凝灰岩の露頭に築造されている。正確な基数は不明であるが、300基を越えると思われ、県下最大の横穴墓群である。採土工事中に発見された4基については、緊急調査を行った。4基の横穴墓は、6世紀中頃～後半に築造され、7世紀後半～8世紀前半まで追葬している。[14] 北上原古墳は、周溝2～2.5mで、周溝より墳丘を推定すると直径24mの円墳になる。主体部はこの円の中心よりやや北側に寄った所にある。内部主体は舟形石棺であり、家形棺蓋で、棺身は平底に近い。5世紀中葉頃の年代が考えられている。[15]

平安時代の遺跡には、流川遺跡・西ノ平遺跡・十蓮寺跡がある。

流川遺跡では竪穴住居址が検出されている。出土遺物に、墨書土器・越州窯青磁・銅椀などがある。[16] 西ノ平遺跡では竪穴住居址が確認されている。[17] 十蓮寺跡では、心礎や布目瓦等が確認されている。[18]

註(1)　県文化課調査。高木正文・村井眞輝氏の御教示による。

(2)　県文化課調査。江本直・中岡昇氏の御教示による。

(3)　県文化課調査。江本直・丸山伸二氏の御教示による。

(4)　松本健郎他　『袈裟尾丸山古墳』熊本県文化財調査報告　第89集　1987年

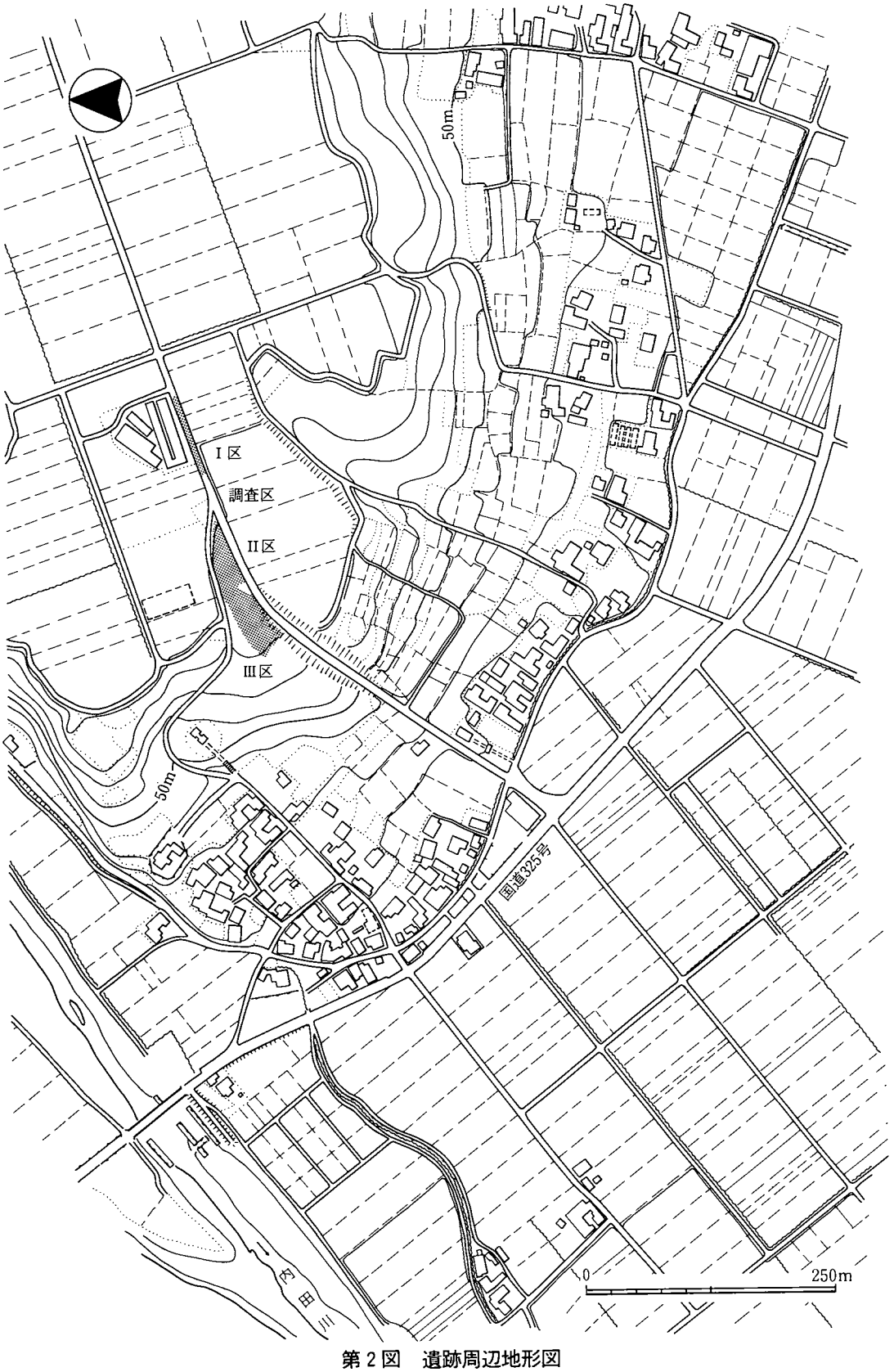
(5)　註(4)に同じ。

(6)　註(4)に同じ。

(7)　註(2)に同じ。

(8)　註(3)に同じ。

(9)　註(4)に同じ。



第2図　遺跡周辺地形図

(10) 富田紘一　「袈裟尾茶臼塚古墳」註(4)文献所収

(11) 松本健郎・西住欣一郎　『北上原古墳・瀬戸口横穴墓群』熊本県文化財調査報告第
高木正文　104集　1989年

(12) 註(4)に同じ。

(13) 註(3)に同じ。江本直・丸山伸二氏の御教示による。

(14) 註(11)に同じ。

(15) 註(4)・註(11)に同じ。

(16) 註(3)に同じ。

(17) 註(1)に同じ。

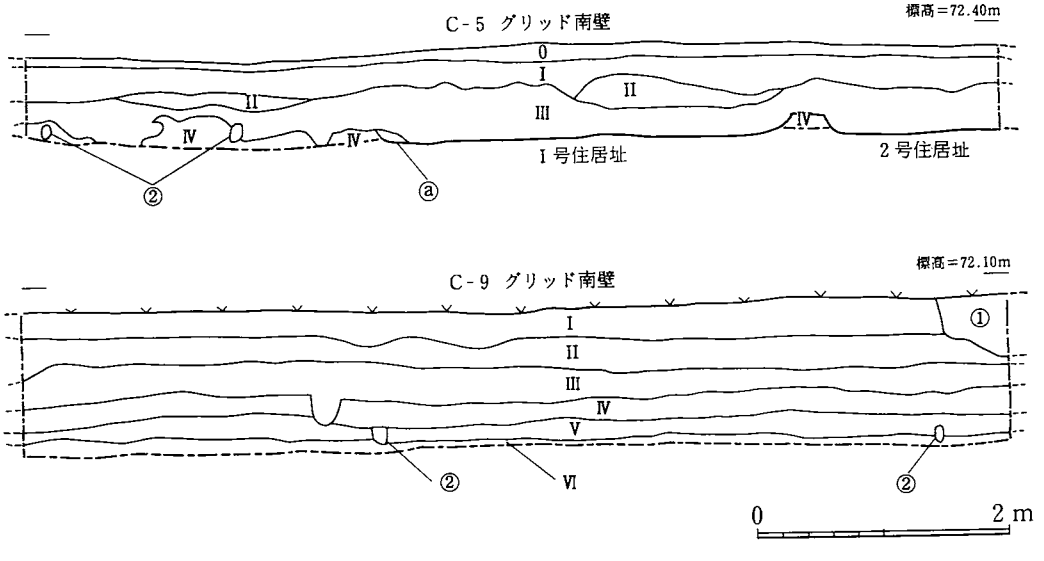
(18) 田辺哲夫編著　『熊本の上代遺跡』熊本日日新聞社　1980年

第 III 章　調 査 の 成 果

1．遺跡の層序について

今回の調査で確認した基本的な層序は、Ⅰ層～VI層である。調査区の中で最も層序の残りが良いⅠ区のC－5・9グリッドの南壁の土層断面図を用いて述べる（第3図）。

Ⅰ層；灰茶褐色土	農道工事時の客土である。
II層；灰黒褐色土	ほぼ全体が攪乱を受けている。
III層；茶褐色土	縄文時代～中世の遺物を包含する。III層及びIII層類似層が住居址・ピットの覆土になる。
IV層；黄褐色土	やや粘性がある。無遺物層である。
V層；黒褐色土	粘性が強い。無遺物層である。
VI層；褐色土	粘性が強い。無遺物層である。
0層；	クラッシャラン（砕石）の客土である。
①層；灰褐色土	耕作に伴う攪乱層である。
②層；黒褐色土	砂質でブロック状にはいる。
ⒶⒶ層；暗褐色土	IV 層が混じった住居址の覆土である。



第3図　土層実測図

2．　縄文時代の調査

縄文時代の遺物は、III層中や弥生時代以降の遺構覆土から出土していた。それで、縄文時代の調査は、包含層と考えられるIII層が残存している箇所を行った（第4図の網目部分）。

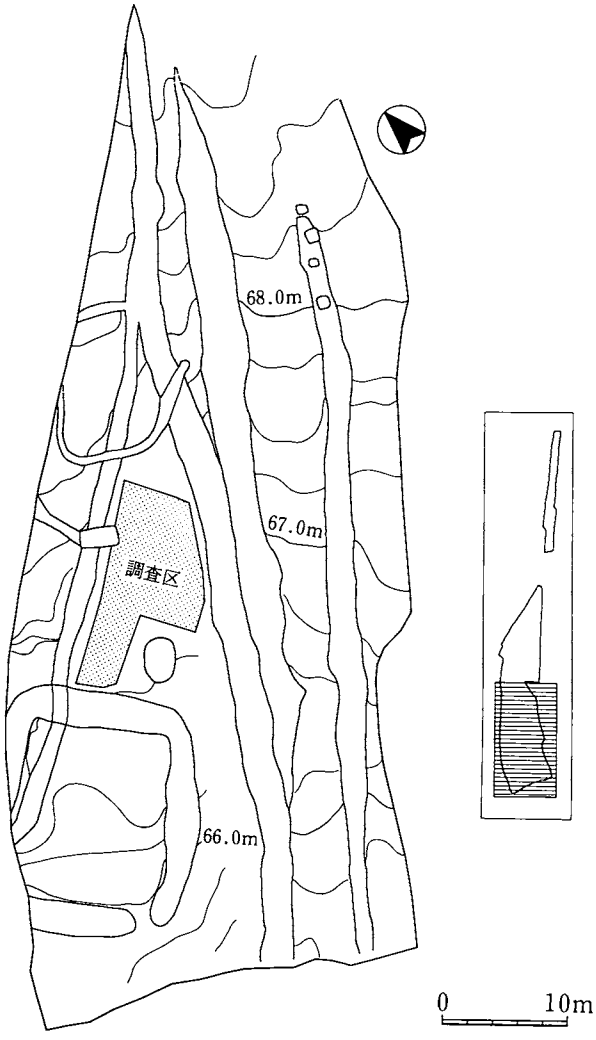
調査の結果、検出した遺構はなく、遺物のみ出土した。

出土土器（第5図）

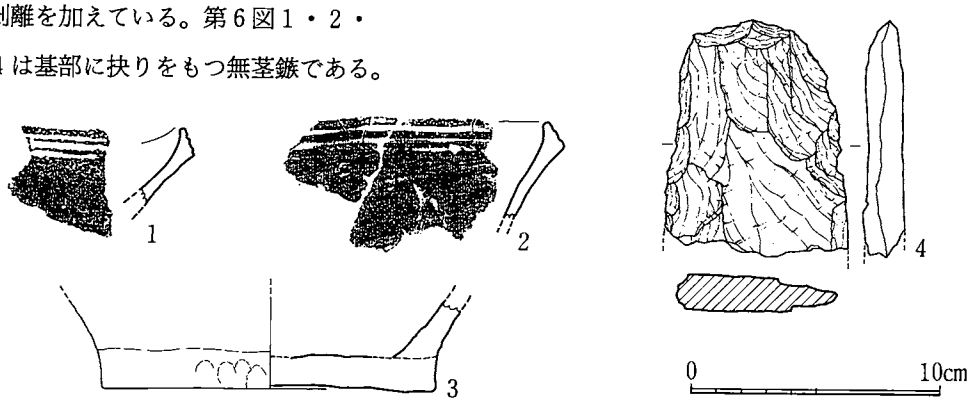
1は波状になる口縁部片で、三本の沈線をもつ。口縁端部に最も近い沈線の上位に、磨消縄文が施される。波状口縁の頂部付近に刺突文が見られる。2は二本の沈線をもつ口縁部片で、沈線の上下には、磨消縄文が施される。3は底部片で、円盤状の粘土に体部を接合した跡が観察できる。外器面の底部近くに指頭圧痕がある。

出土石器（第5・6図）

第5図4は体部の大半が欠損している打製石斧片で、縁辺部より調整剥離を加えている。第6図1・2・4は基部に抉りをもつ無茎鏃である。

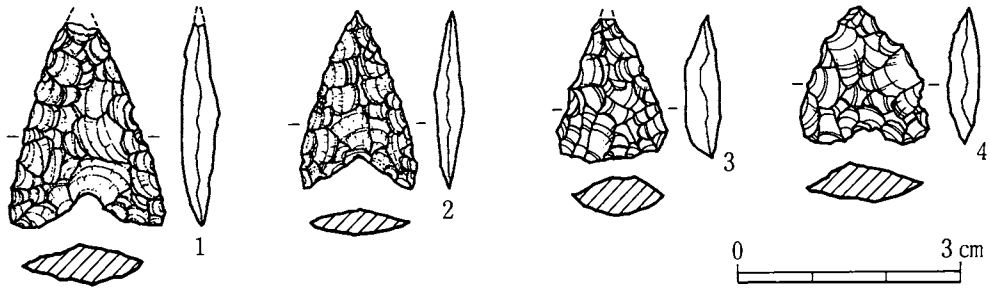


第4図　縄文時代調査区位置図



第5図　遺物実測図

抉りは1・2が深く、4が浅い。3は基部に抉りがない無茎鏃である。1・3は先端部を欠損している。



第6図　石鏃実測図

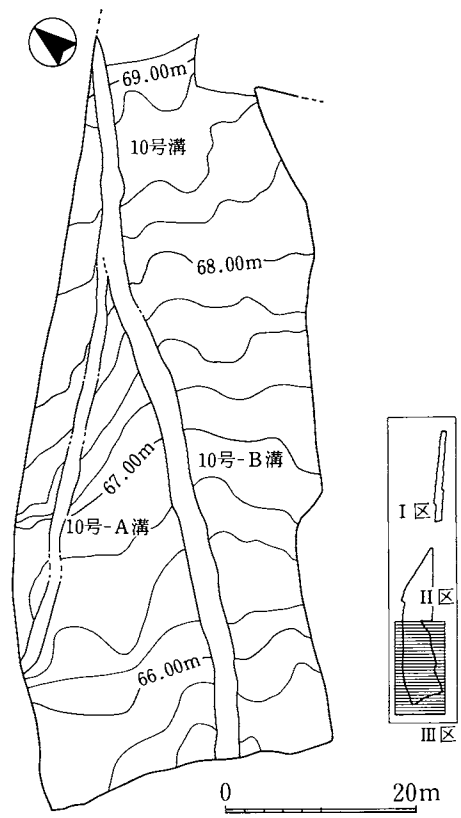
3．　弥生時代の調査

(1)遺構について

遺構分布（第7図）

弥生時代の遺構は、III区だけに分布している。検出した遺構は、環濠の一部分である。環濠は緩やかな谷の頂部に沿って、北東～南西方向にのびている。III区の北東寄りの部分で、環濠は二つに分かれる。その分かれている溝の北側部分を10号－A溝跡、南側部分を10号－B溝跡とする。二本の溝跡の分岐点での土層断面観察より、10号－B溝跡が10号－A溝跡を切っている。分岐点より東側については、10号－A溝跡と10号－B溝跡とが重複しており、明確な区分が把握できなかったため、便宜的に10号溝跡とした。

10号－B溝跡の南西端部は、台地の縁辺部まで谷の頂部に沿ってのびると思われる。また、10号－A溝跡の北西端部は、調査区の境付近で北側方向に進路を変えて台地縁辺部までのびると推定できる。10号溝跡の北東端部は、北東方向にのび、台地を横切ると考えられる。



第7図　遺構配置図

10号溝跡・10号－B溝跡（第８図～第11図）

10号溝跡とした部分は、調査区の端から二本の溝跡の分岐点までの直線距離で約25mある。10号溝跡は東側から西側への１地点～３地点に分けて、実測図を示した。１地点・２地点の溝跡は、平面形が少し凹凸しながらのびている。３地点の溝跡は、東側部分が外側に張り出し、西側壁部が二段掘りになっている。溝跡の幅は検出面で約140 ～250cm 、床面で約70～180cmある。溝跡の断面形は台形を呈している（深さ約50～60cm）。

溝跡の分岐点より西側の10号－B溝跡部分は、直線距離で約52mある。第９図には４地点・５地点の実測図を示した。４地点・５地点の溝跡も平面形が少し凹凸しながらのびている。４地点の西側壁部分は、３地点と同様に二段掘りになっている。溝跡の幅は検出面で約210 ～260cm 、床面で約70～150cm ある。溝跡の断面形は台形になるが、東側が12号道路跡より削平を受けており、低くなっている（深さ約70～140cm）。

第10図には６地点・７地点の溝跡実測図を載せた。６地点の溝跡平面形は、ほぼ直線的にのびている。７地点の溝跡の平面形は、西側が少し凹凸しながらのびており、東側一部分が丸く外側に張り出している。溝跡の幅は検出面で約230 ～290cm 、床面で約110 ～190cm ある。溝跡の断面形は台形を呈するが、６地点の東側、７地点の西側が12号道路跡より削平を受けており、低くなっている（深さ約40～180cm）。

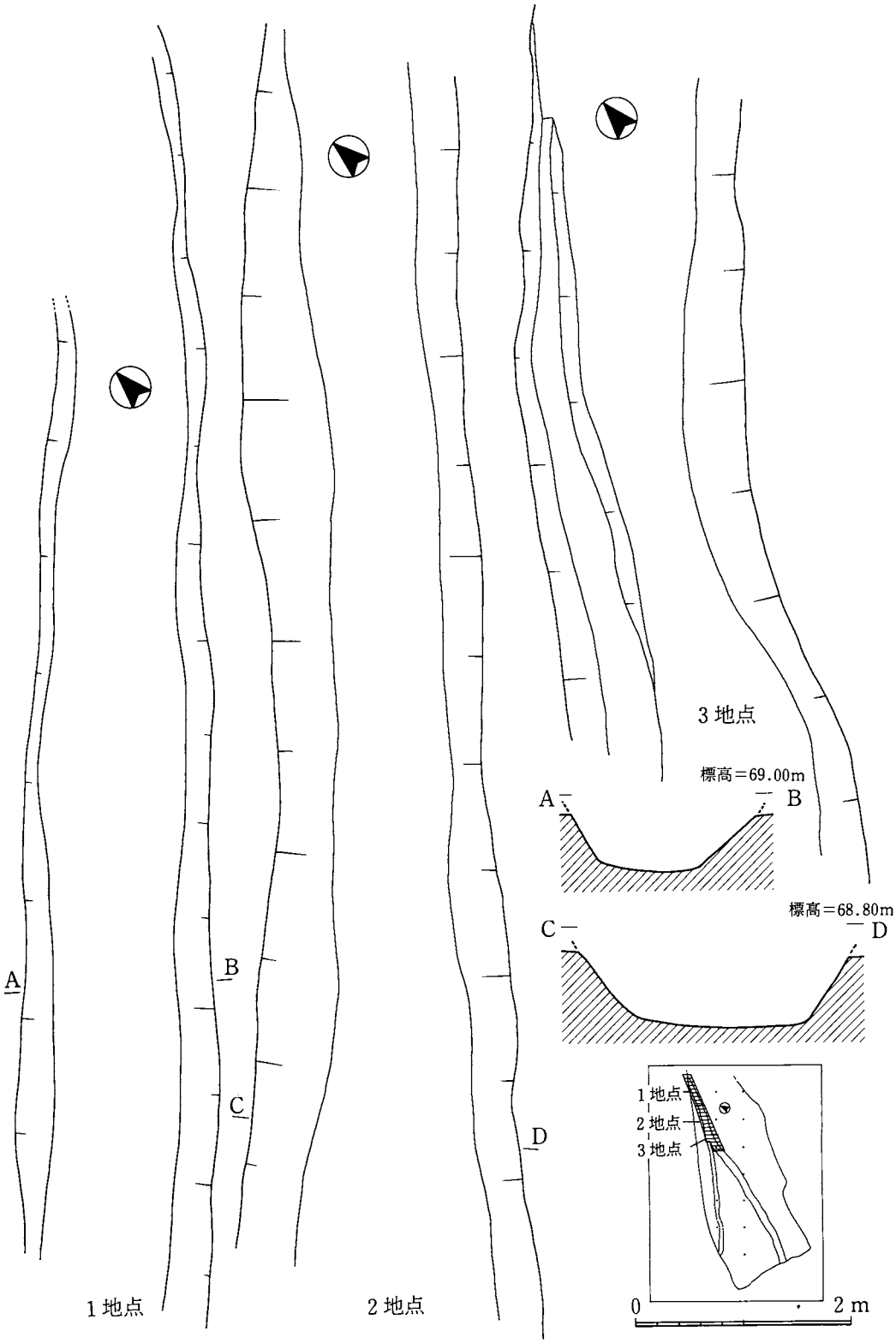
第11図には８地点・９地点の溝跡実測図を示した。両地点の溝跡は平面形が少し凸凹しながらのびている。溝跡の幅は検出面で約210 ～250cm 、床面で約70～120cm ある。溝跡の断面形は、西側の壁の傾斜が急であり、略台形を呈する（深さ約140cm）。

10号－Ａ溝跡と10号－Ｂ溝跡との分岐点であるＡ地点で土層観察を行った（第13図Ａ地点土層断面図）。10号－Ｂ溝跡は10号－Ａ溝跡が埋まった後に、掘り込まれていることが判った。Ａ地点の10号－Ｂ溝跡の覆土は①層～⑤層に分けることができる。①層は灰茶褐色土で、炭が混じった攪乱層である。②層は淡茶褐色土で、黄褐色の粒子を少量含む。③層は黄茶褐色土で、黄褐色の粒子を多量に含む。④層は茶褐色土で、黄褐色の粒子を少量含む。⑤層は黄褐色土で、やや粘性がある。⑤層は壁土の一部であるIV層が流れ込んだものである。③層・④層に遺物が包含される。

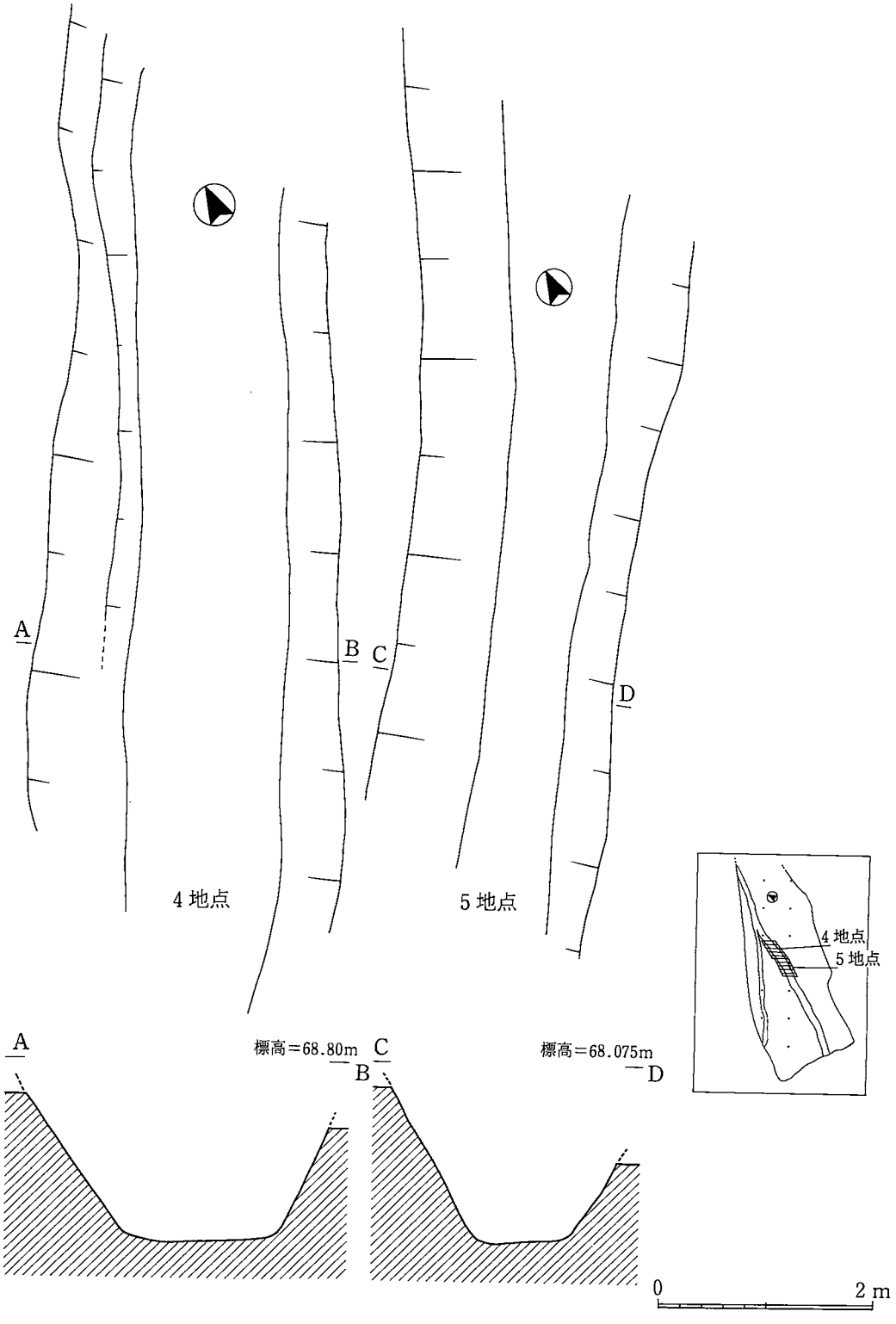
第12図には、10号－Ｂ溝跡のＡ地点・Ｂ地点・Ｃ地点の土層断面図を載せた。各地点とも、12号道路跡に切られている。各地点では、第13図Ａ地点土層断面図と同じ①層～⑤層が確認できた。ただ、Ａ地点・Ｃ地点では③－ａ層・③－ｂ層が細分できた。③－ａ層は黄褐色弱粘質土である。③－ｂ層は淡黄褐色土で、黄褐色の粒子を多量に含む。各地点とも、溝跡の断面形は略台形をしている（深さ約22～110cm）。

10号－Ａ溝跡（第13図・第14図）

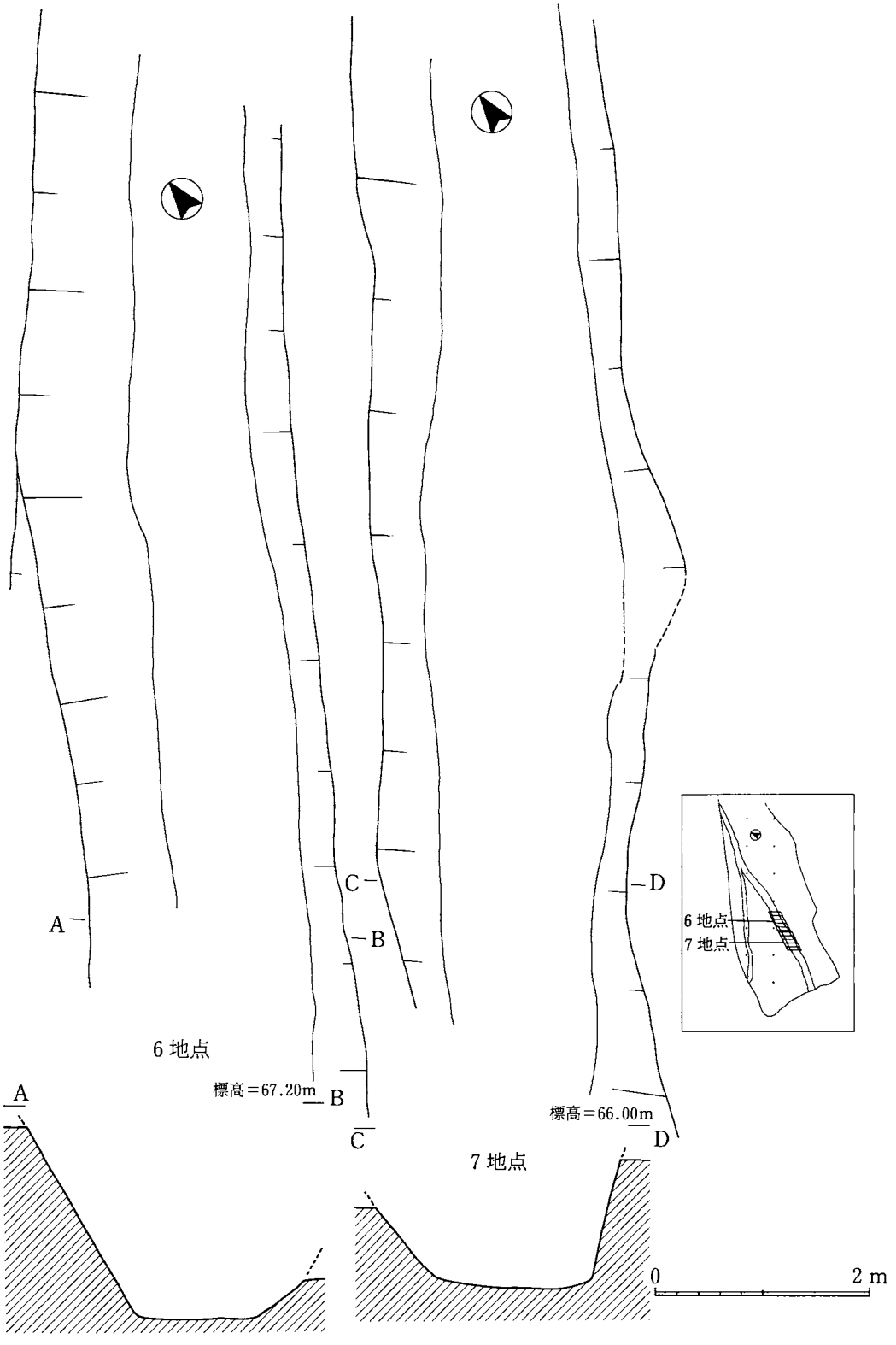
10号－Ａ溝跡の検出した部分は直線距離で約41mある。第13図には分岐点より西側の10地点・



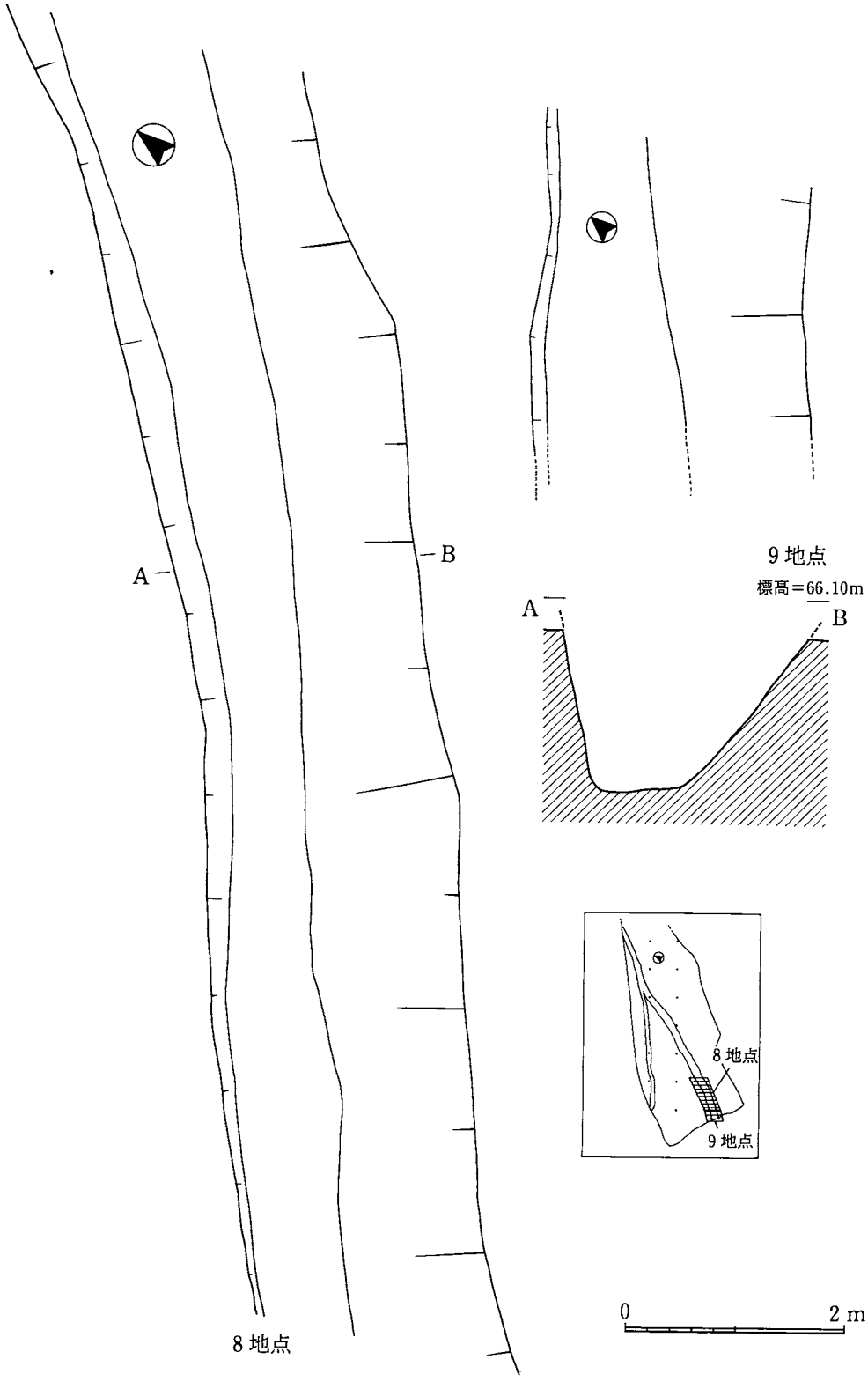
第8図　10号溝跡実測図



第９図　10号－Ｂ溝跡実測図

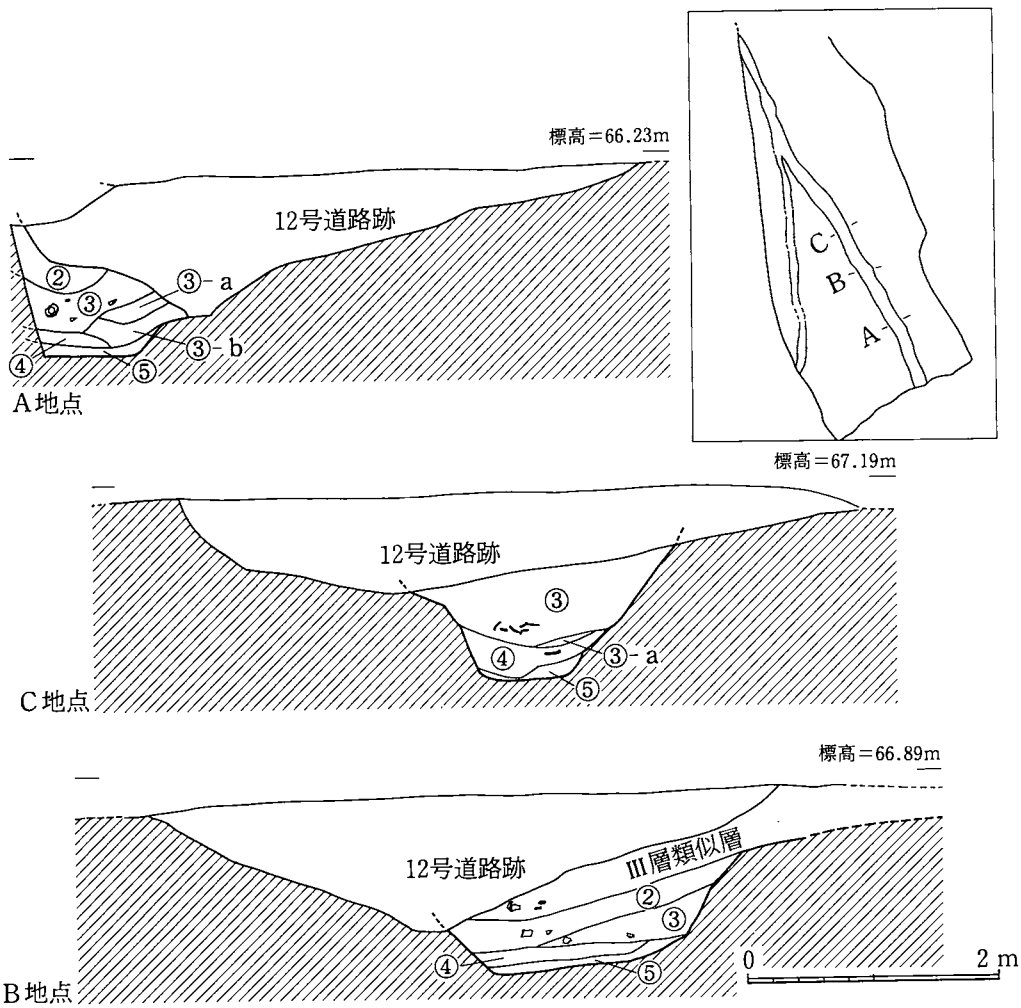


第10図　10号－B 溝跡実測図

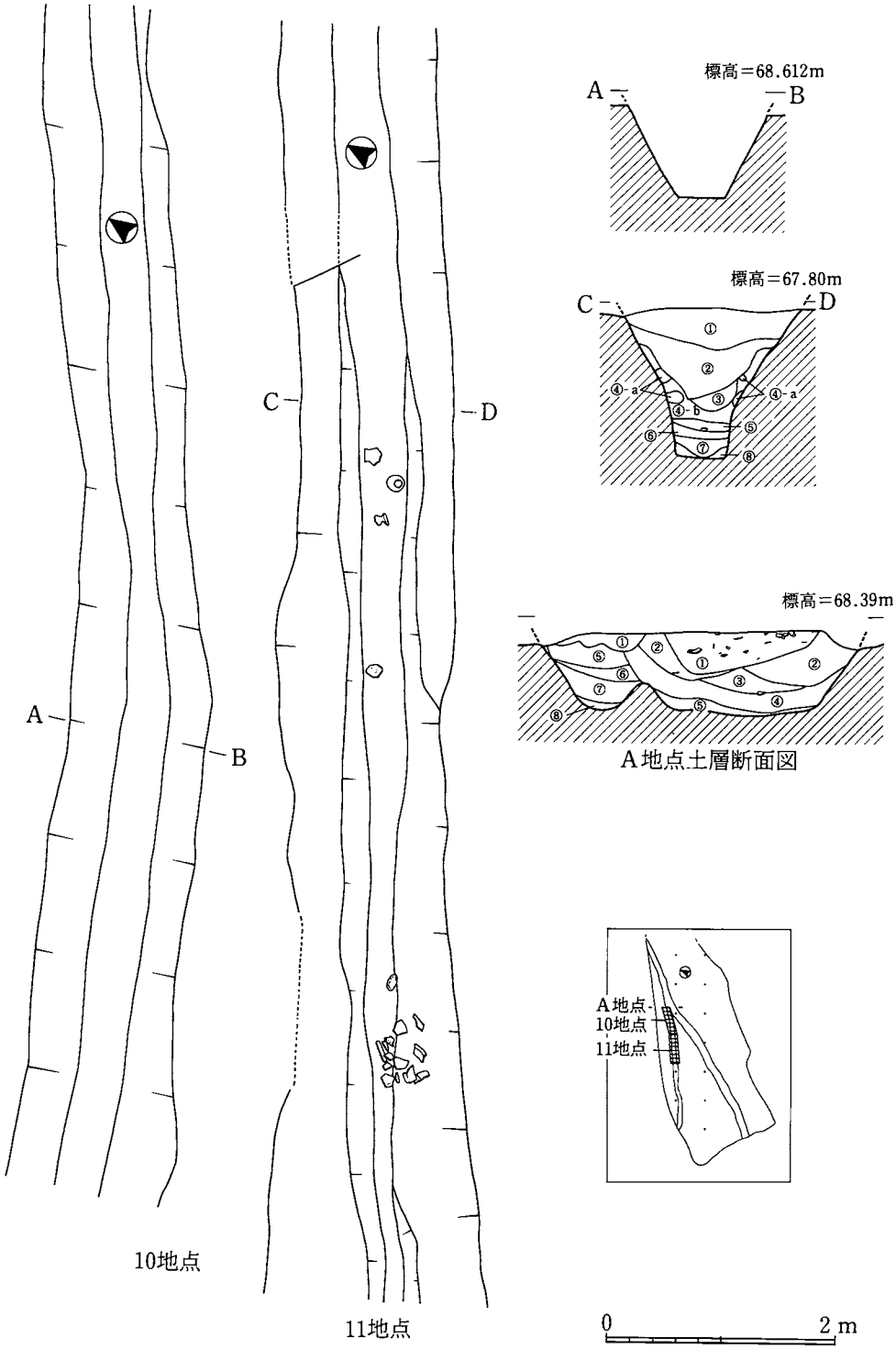


第11図　10号-B 溝跡実測図

11地点の溝跡実測図、第14図には11地点より西側の12地点・13地点の溝跡実測図を載せた。10地点の溝跡は、平面形が少し凹凸しながらのびている。溝跡の幅は検出面で約90～140cm 、床面で約20～40cmある。溝跡の断面形は台形を呈している（第13図・断面A－B、深さ約70cm)。11地点・12地点は、平面形が凹凸しながらのびている。溝跡の幅は検出面で約120 ～200cm 、床面で約16～50cmある。溝跡の断面形は、東側端部の一部が台形で、他はY字形である（第13図・断面C－D、深さ約130cm)。C－D地点で土層観察を行い、①層～⑧層に分けることができた。①層は茶褐色土で、黄褐色の粒子を多量に含む。②層は暗褐色土で、黄褐色の粒子を中量含む。③層は黒褐色土で、黄褐色の粒子を少量含む。④層はa・bに細分できる。④－a層は黄褐色土で、ブロック状にはいる。④－b層は淡黄褐色土で、黄褐色の粒子を多量に含む。⑤層は淡茶褐色土である。⑥層は黄褐色土で、やや粘性がある。⑦層は暗黒褐色土で、径1cm



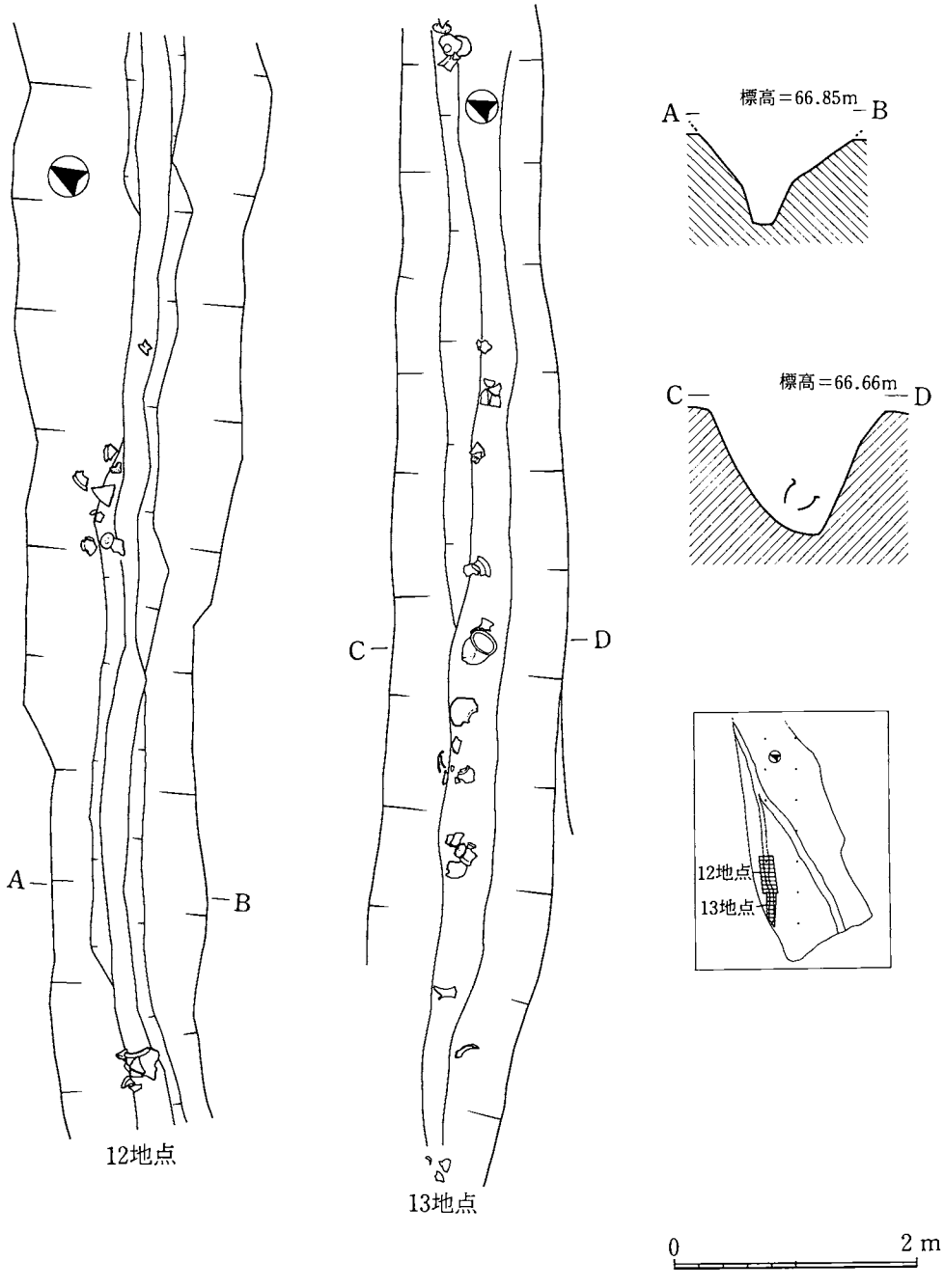
第12図　10号－B溝跡土層断面図



第13図　10号-A 溝跡遺物出土状況実測図

程度の黄褐色土がブロック状に含まれる。⑧層は黒茶褐色土である。

10号－A溝跡と10号－B溝跡との分岐点であるA地点で土層観察を行った。その結果、10号－A溝跡は10号－B溝跡に切られていることが判った（第13図A地点土層断面図）。この地点で、確認できた10号－A溝跡の覆土は、⑤層～⑧層で、これらの層は、上記のC－D地点での



第14図　10号-A溝跡遺物出土状況実測図

土層観察結果と同じである。

13地点はほぼ直線的にのびている。溝跡の幅は検出面で約120 ～140cm 、床面で約14～44cmある。溝跡の断面形については、ほぼ東側半分が壁片側が二段になった略台形を呈し、ほぼ西側半分略台形になる（第14図・断面C－D、深さ約100cm)。

10号－A溝跡の遺物出土状況（第13図・第14図)

10号－A溝跡より出土した遺物は、10号－B溝跡出土遺物より少ない。10号－A溝跡では、11地点・12地点・13地点の覆土②層・③層より遺物が出土した。これらの遺物は土器が殆どで、その出土状況は、出土点数が少数ながら大きく五つのまとまりがある。まず、11地点のほぼ中央部と西側端部寄りの二箇所で土器がまとまって出土した。12地点のほぼ中央部に、土器が集まっている部分がある。12地点の西側端部から13地点の東側端部にかけて、土器のまとまりがある。土器の密集度は他の部分より弱いが、13地点に土器がある程度まとまっている。

10号－B溝跡の遺物出土状況

10号－B溝跡では、覆土②層・③層・④層より遺物が出土した。出土遺物の大半は土器である。②層より出土した遺物は少数で、出土遺物の殆どは、③層・④層より出土したものである。ここでは③層・④層の遺物出土状況について記述する。

③層の遺物出土状況（第15図～第17図)

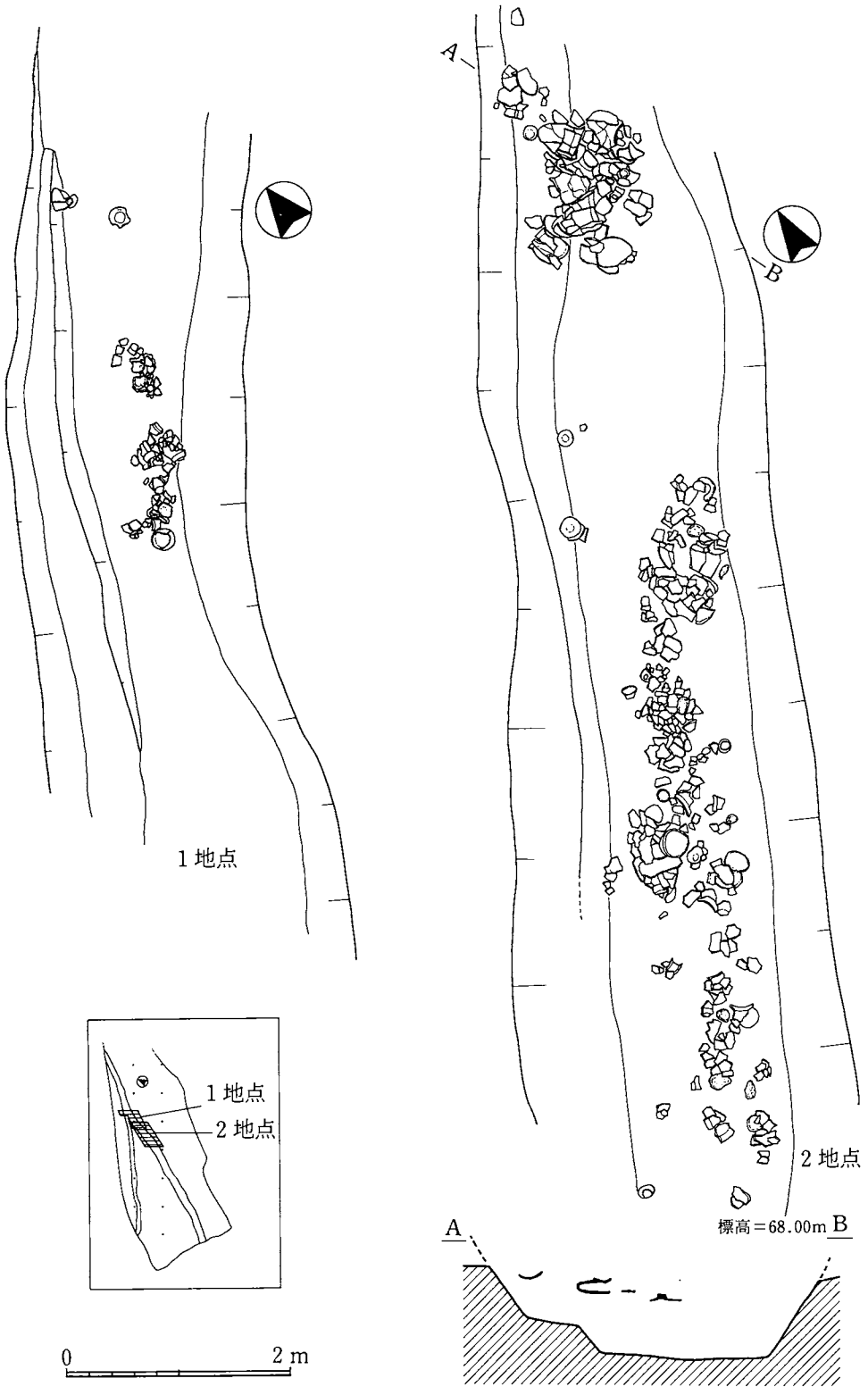
10号－B溝跡を東側から西側へ、１地点～６地点に分けて、遺物出土状況の実測図を載せた。第15図には１地点・２地点の実測図を載せた。１地点では、ほぼ中央部に遺物のまとまりが二つある。２地点では、東側端部の北壁付近に遺物のまとまりがあり、中には一個体の土器がつぶれた状態のがある。上記以外の箇所は、大きく見れば一つの遺物のまとまりであるが、六～七の小さなまとまりに分けることができる。

第16図には３地点・４地点の実測図を載せた。３地点には、ほぼ中央部に遺物の大きなまとまりがあり、そこより東側に遺物の小さなまとまりが四～五ある。４地点では、中央に寄った状態で遺物の大きなまとまりがあり、密集度が強い。そのまとまりのほぼ中央部より、凝灰岩製の腰掛けが逆さまの状態で出土した。この他に、一個体の土器がつぶれた状態で出土したり、少数が完形かほぼ完形の状態で出土した。

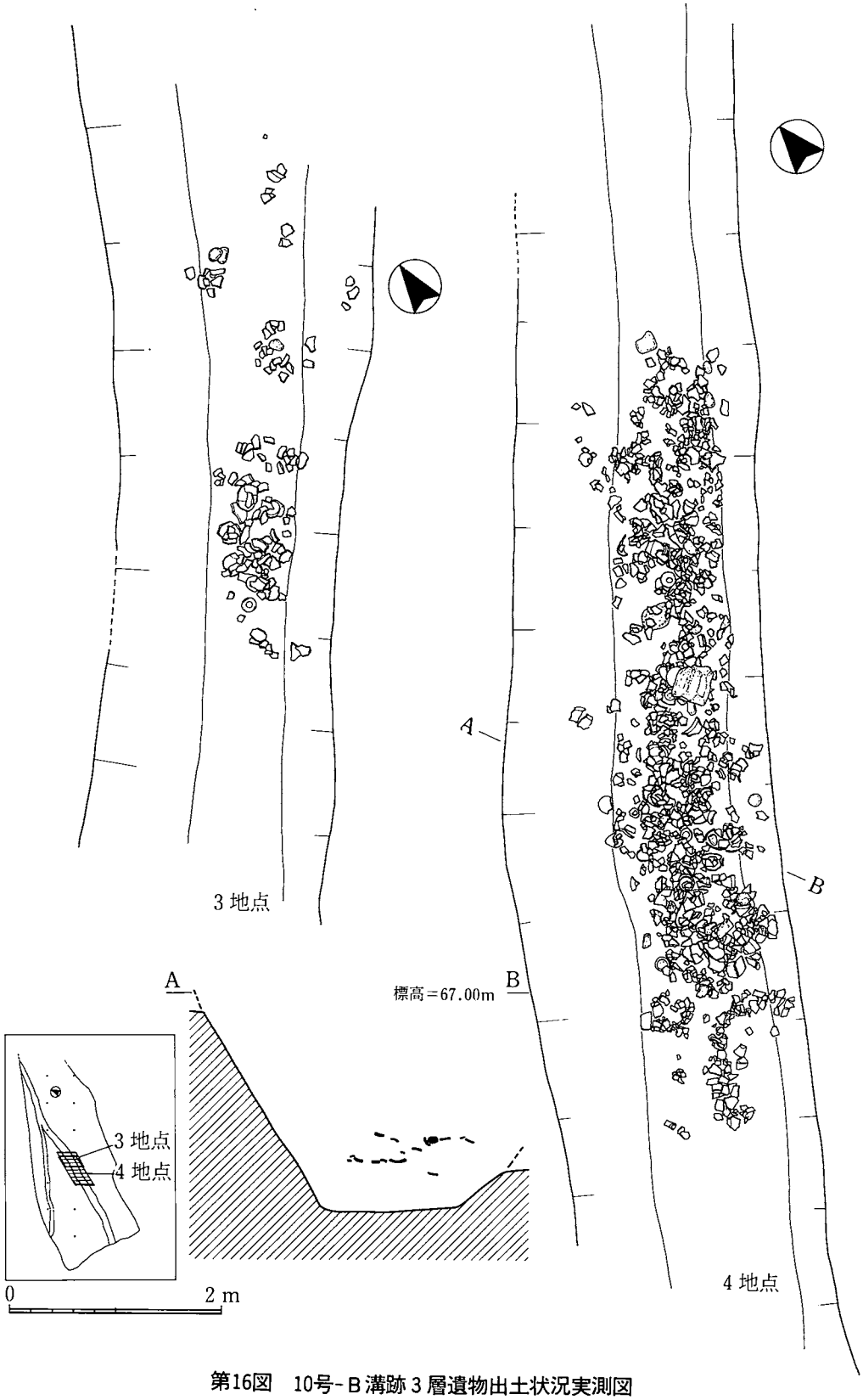
第17図には５地点・６地点の実測図を載せた。５地点では、東西両端寄りの部分に密集度が強い遺物の大きなまとまりがある。それぞれのまとまりには、小さなまとまりが数箇所ある。ほぼ中央部は、遺物の小さなまとまりが四～五ある。６地点は、東西両端に遺物の小さなまとまりが二箇所ずつあり、そのまとまりに挟まれた状態で、遺物の大きなまとまりがある。この大きなまとまりの中には、数箇所の遺物の小さな集合がある。

④層の遺物出土状況（第18図～第22図)

10号溝跡・10号－B溝跡について、東側から西側への１地点～７地点に分けて、遺物出土状

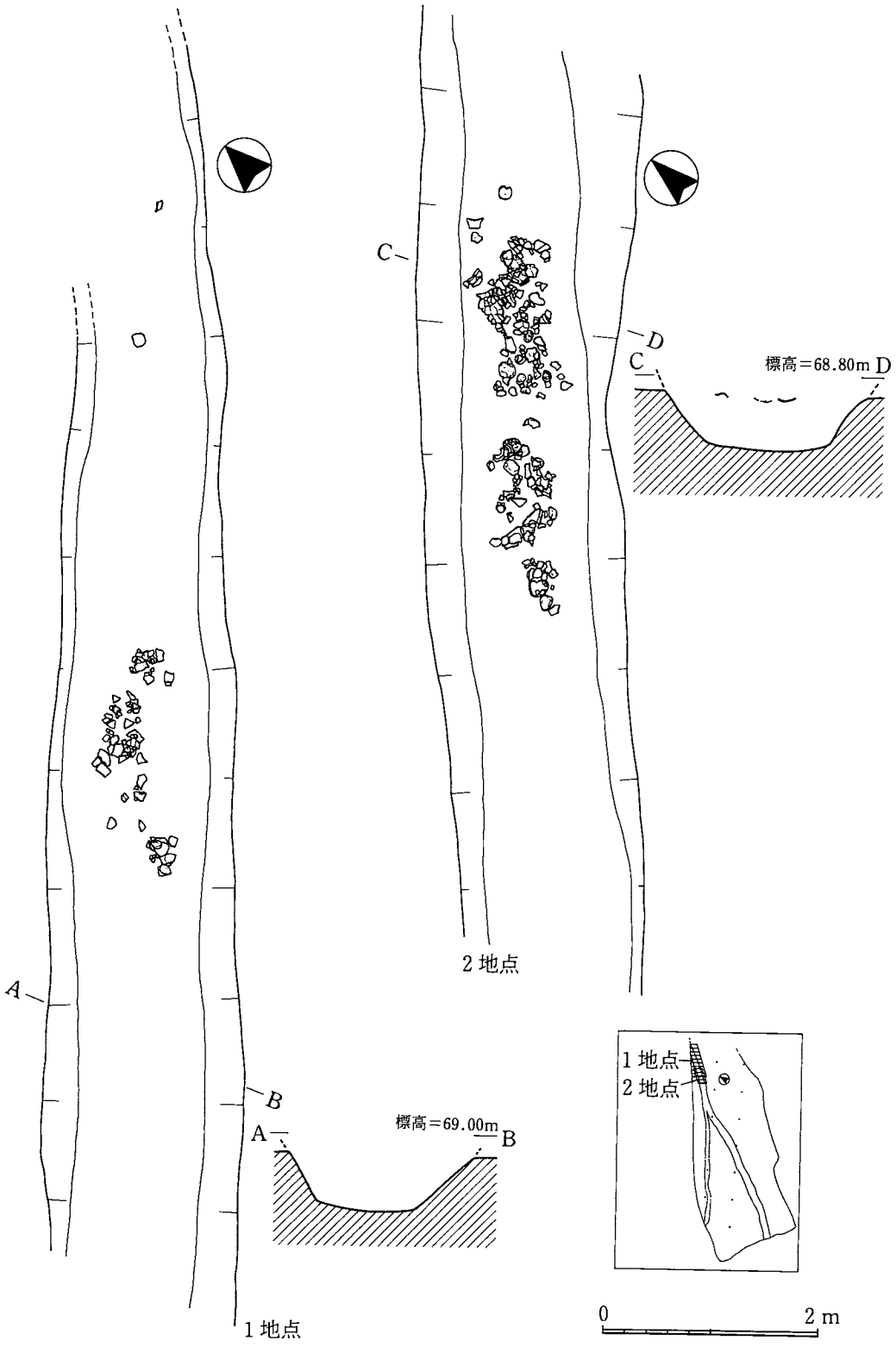


第15図　10号-B溝跡3層遺物出土状況実測図



第16図　10号-B溝跡3層遺物出土状況実測図

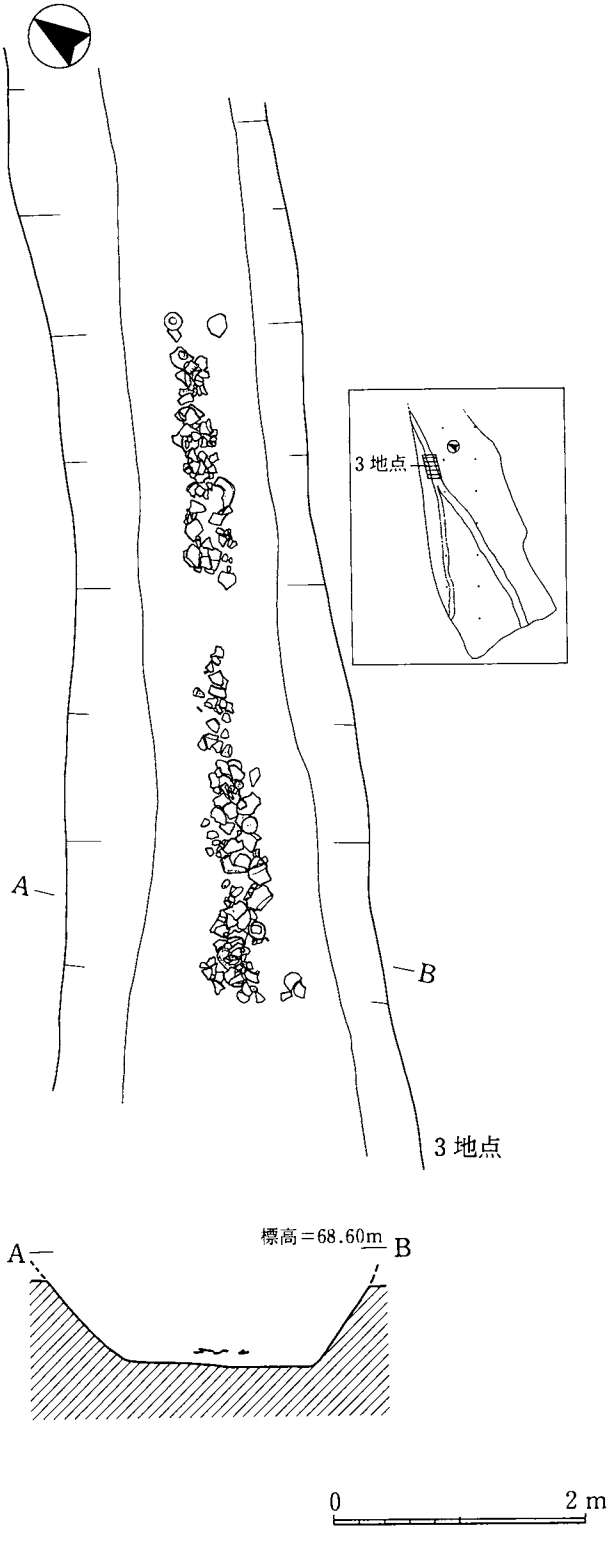
第17図　10号-B溝跡3層遺物出土状況実測図



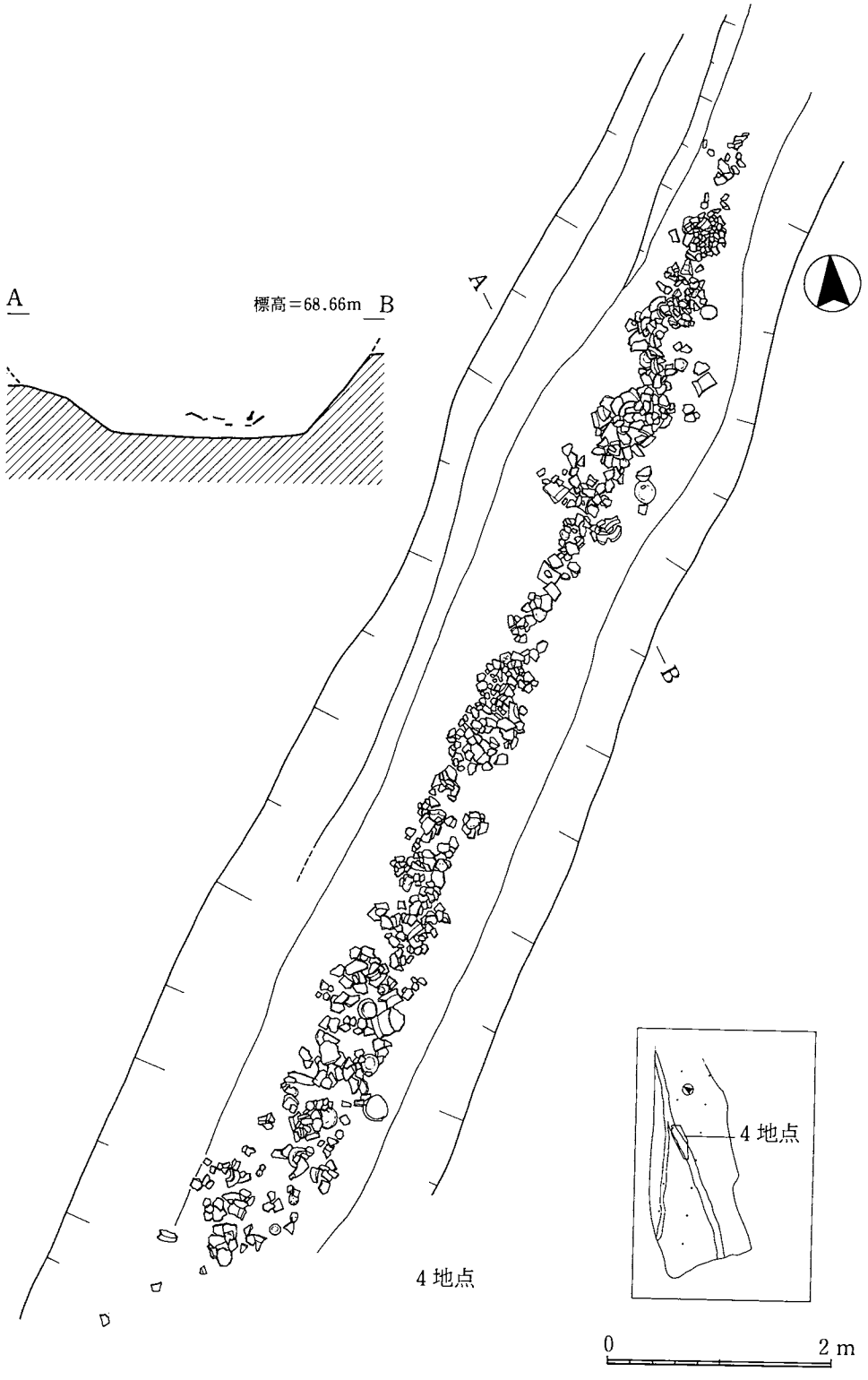
第18図　10号 溝跡 4 層遺物出土状況実測図

況実測図を載せた。第18図には10号溝跡の１地点・２地点の実測図、第19図には10号溝跡の３地点の実測図を示した。１地点では、ほぼ中央部に遺物の小さなまとまりが三～四箇所ある。２地点では三箇所の遺物のまとまりがあり、最も北側にあるまとまりの中には、一個体の土器がつぶれた状態で出土した。３地点では、東西に分かれた状態で遺物の大きなまとまりが二つあり、それぞれには数箇所の小さなまとまりがある。

第20図～第22図には、10号－Ｂ溝跡の４地点～７地点の実測図を載せた。４地点では、ほぼ全域にわたって遺物が出土し、十数箇所の小さなまとまりがある。５地点は、四～五箇所の遺物の小さなまとまりがあり、その小さなまとまりが集まって大きなまとまりになっている。６地点では、東側寄りの部分に三～四箇所の遺物の小さなまとまりがあり、それらが密集している。また、東側端部に遺物の小さなまとまりがある。７地点は東側に寄った所に、遺物の小さなまとまりが四～五箇所ある。

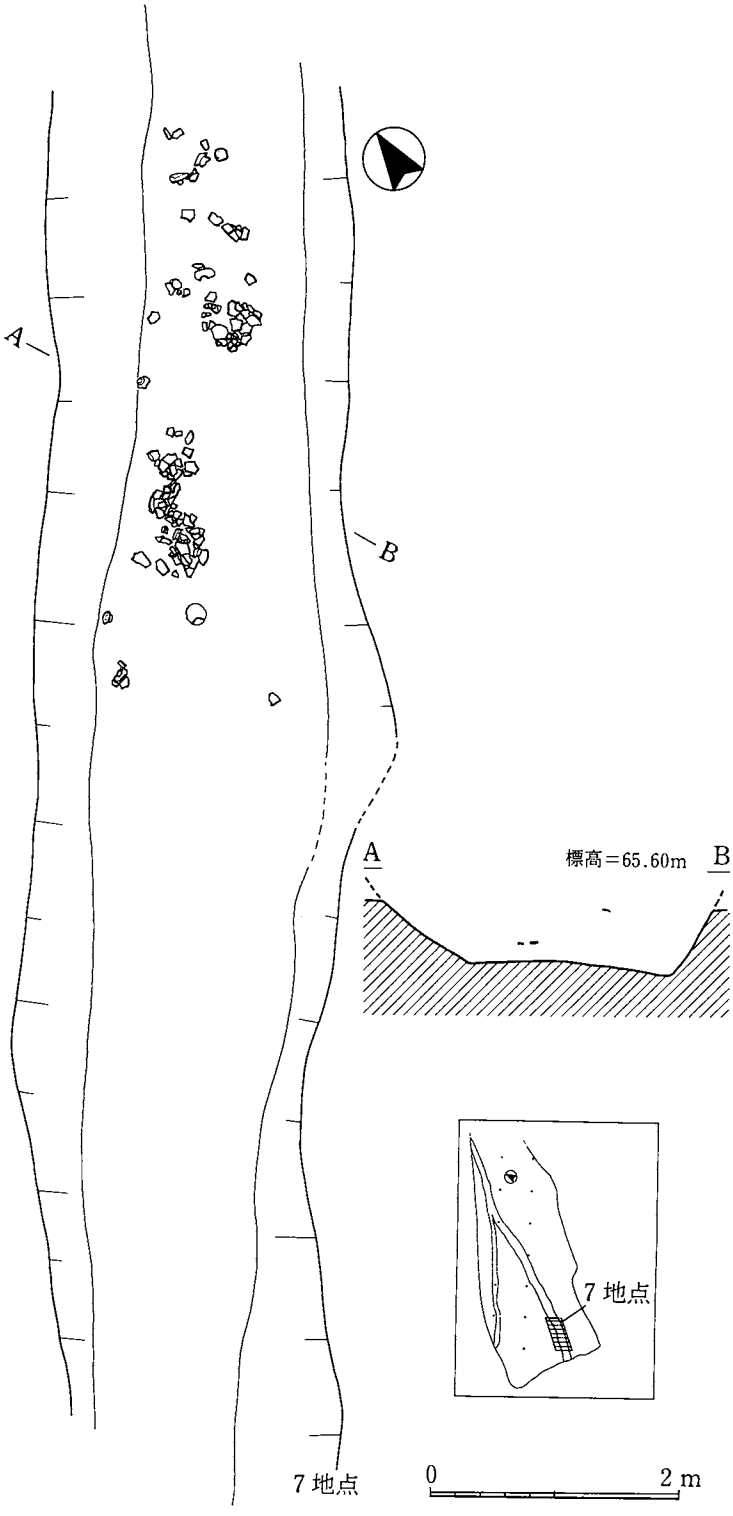


第19図　10号 溝跡４層遺物出土状況実測図



第20図　10号-B溝跡4層遺物出土状況実測図

第21図　10号-B 溝跡 4 層遺物出土状況実測図



第22図　10号-B 溝跡 4 層遺物出土状況実測図

(2)遺物について

ここでは、10号－A溝跡覆土②・③層より出土した遺物と10号－B溝跡覆土③・④層より出土した遺物を中心にして述べる。

10号－A溝跡覆土②層出土土器

甕（第23図・第24図6・8・9）

これらの甕は中型であり、口縁部が「く」の字形に屈曲し、頸部との間に明瞭な境をもつ。特に、内器面の境には稜がある。第24図6の屈曲は他のものに比べると、やや弱い。胴部は丸くなっており、胴部の最大径は中程よりやや上位にある。底部には「八」の字形を呈する脚が付き、あまり高くならない。脚には、ほぼ真っ直ぐにのびるものと端部付近で外側に開くものとがある。脚端部は、角張るものと丸くなるものとがある。第23図1・2・3・11の外底部付近には砂粒が付着する。第24図9の脚部は意識的に打ち欠いている。内外器面には、ハケ調整・ヨコナデ調整を施す。

鉢（第24図1・2・5）

鉢形土器には、脚が付くものと、付かないものとがある。1の脚部分については不明である。1の口縁部は、胴部とほぼ直角に屈曲し、丸い胴部につづく。2は脚が付き、胴部は外に開きながら丸くなってのび、口縁端部はやや角張る。5は丸底気味の平底で、胴部との境に段をもつ。胴部は丸くなり、中程より上位に最大径がある。口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部は角張る。調整はハケ目・ヨコナデである。

脚（第24図3）

3はどの器種の脚部か不明である。脚部は「八」の字形に開き、端部はさらに開く。体部との境に段があり、脚外器面に指頭痕が残る。内外器面にヨコナデ調整を施す。

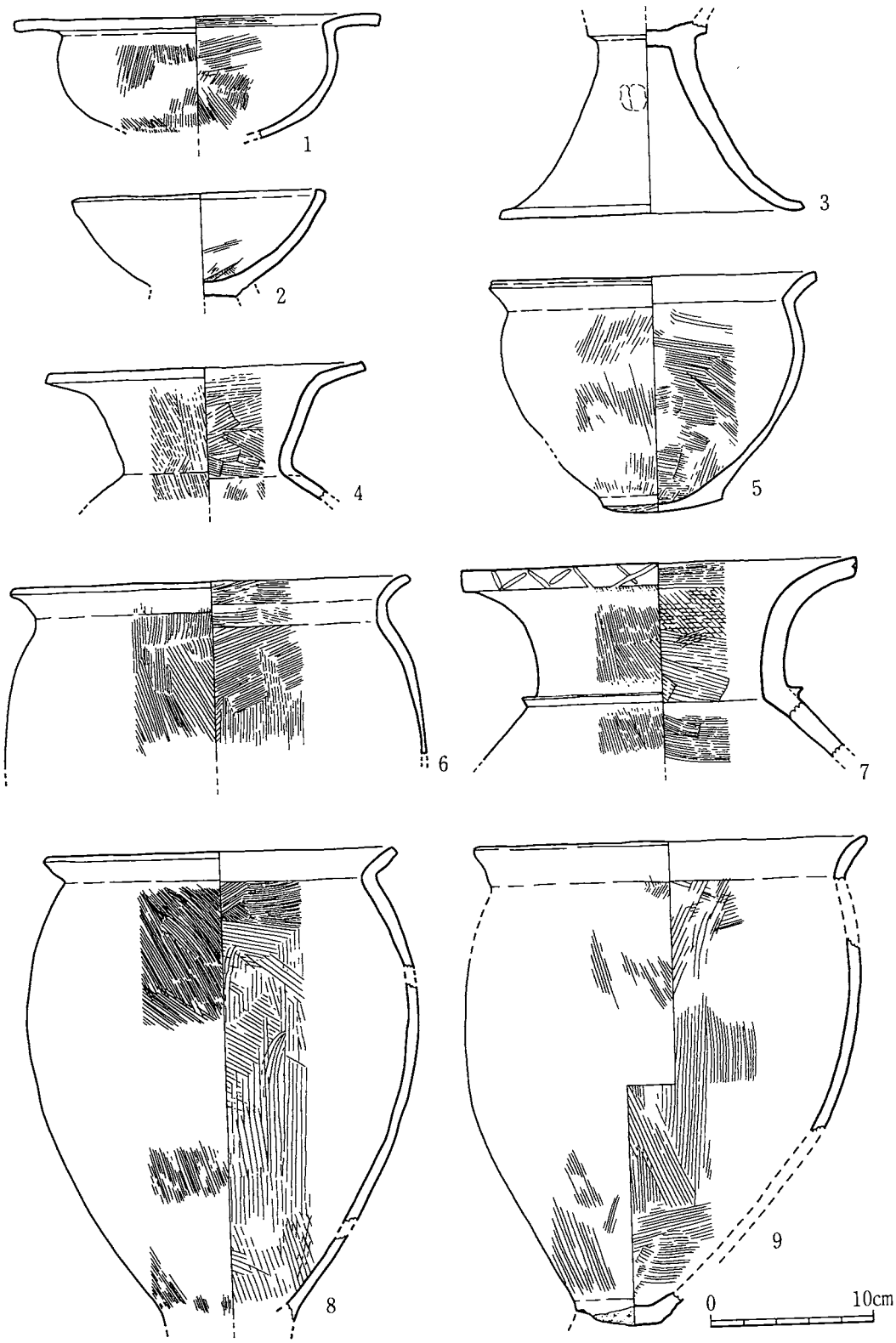
壺（第24図4・7、第25図4）

第24図4・7は大型の壺である。口縁部は外に開きながら立ち上がり、端部付近でさらに外に開く。口縁端部は角張り外器面に平坦面ができる。7は頸部外器面に断面形が三角形の凸帯を貼り付け、口縁端部外器面に鋸歯文様の沈線文を施す。内外器面の調整は、ハケ目・ヨコナデである。第25図4は算盤玉に似た形状をした小型壺である。口縁端部の一部分を欠いている。底部はほぼ平底である。内外器面には、ハケ調整・ヨコナデ調整を施す。

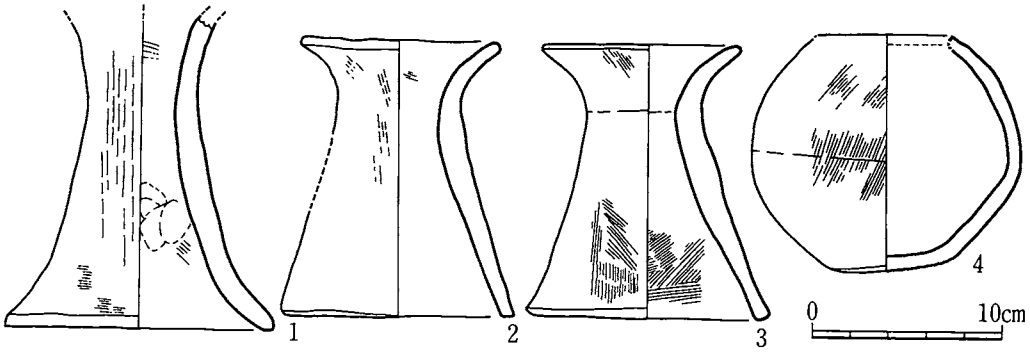
器台（第25図1・2・3）

器台には二種類ある。1は口縁部と裾部が外反する。裾端部はやや角張る。2・3は口縁部のみ外反し、裾部は外に開きながら、ほぼ真っ直ぐにのび、端部は角張る。内外器面の調整は、ハケ目・ヨコナデである。

第23図　10号－A溝跡2層出土土器実測図



第24図　10号-A溝跡2層出土土器実測図



第25図　10号-A溝跡2層出土土器実測図

10号ーA溝跡覆土③層出土土器

甕（第26図・第27図）

第26図は中型の甕、第27図は大型の甕である。中型の甕は口縁部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部が角張る。胴部は丸くなり、最大径が中程より上位にある。底部には「八」の字形に開く脚が付き、端部はやや丸くなる。第26図1・2・4の外底部には砂粒が付着する。第26図4・5・6の脚は意識的に打ち欠いている。内外器面には、ハケ調整・ヨコナデ調整を施す。

大型の甕は、口縁部が「く」の字形に屈曲し、端部が角張る。頸部外器面には断面形が三角形を呈する凸帯を貼り付ける。凸帯を付ける際の刻目が部分的に残っている。胴部は丸くなり、最大径が中位より上方にある。底部は丸底気味の平底で、胴部との境に段がある。内外器面の調整は、ハケ目とヨコナデである。

注口付小型壺（第28図1）

口縁部は外反し、頸部はほぼ真っ直ぐ立ち上がる。胴部は算盤玉状になり、最も張り出した箇所の片側に注口が付く。底部には「八」の字形に開く脚が付く。内外器面には、ハケ調整・ヨコナデ調整を施す。

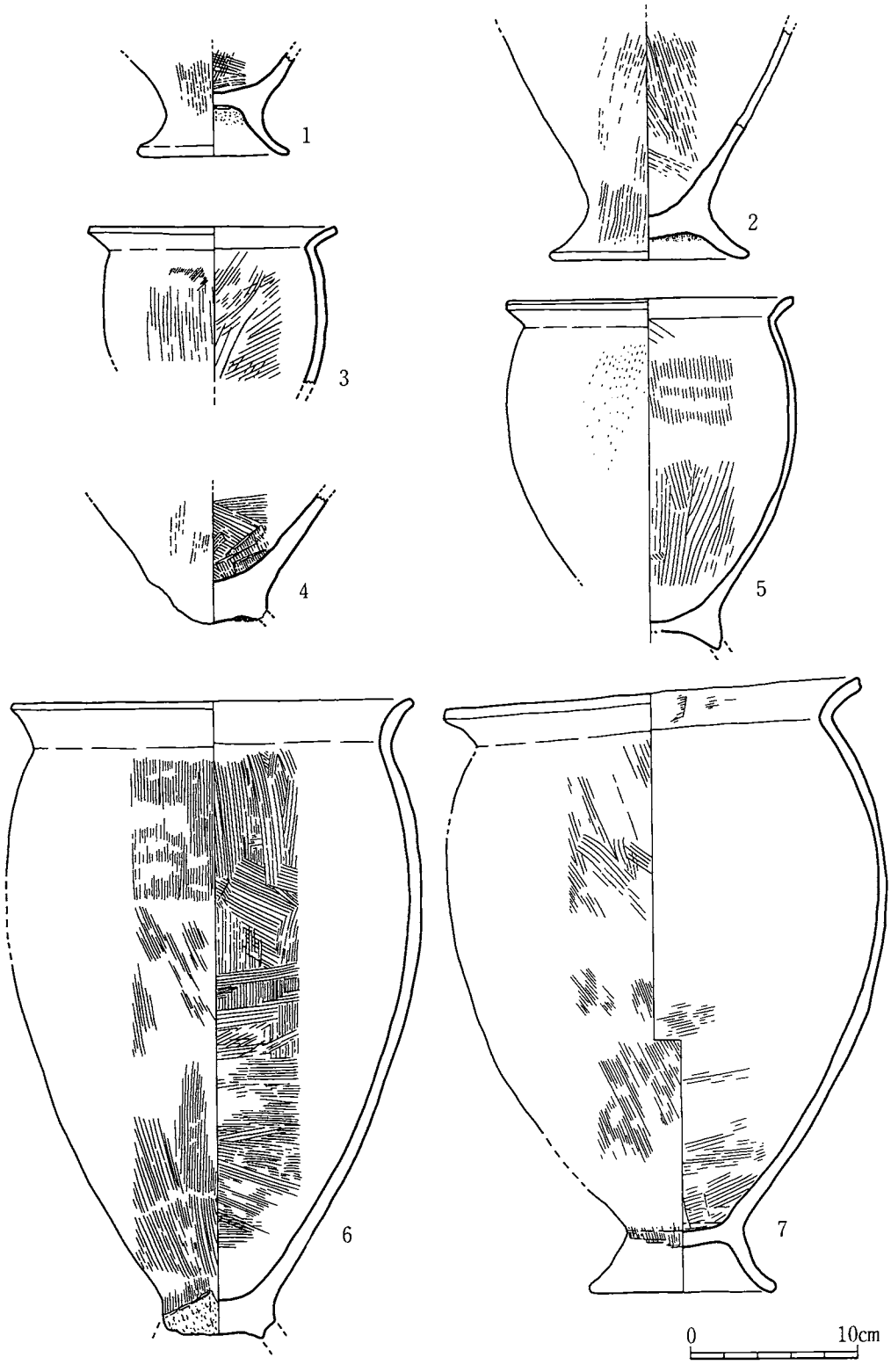
鉢（第28図2）

胴部全体が丸くなりながら口縁部までのび、端部は丸くおさまる。底部には「八」の字形に開く脚が付き、端部が欠損している。外底部には砂粒が付着する。内外器面には、ハケ調整・ヨコナデ調整を施す。

壺（第28図3・5～7）

壺には大型の壺（3・5・7）と小型の壺がある（6）。内外器面には、ハケ調整・ヨコナデ調整を施す。

3の口縁部は外反しながら立ち上がり、端部付近がさらに強く外反し、端部が角張る。頸部には断面形が三角形の凸帯を貼り付ける。5は胴部全体が丸くなり、胴部の最も張り出した箇



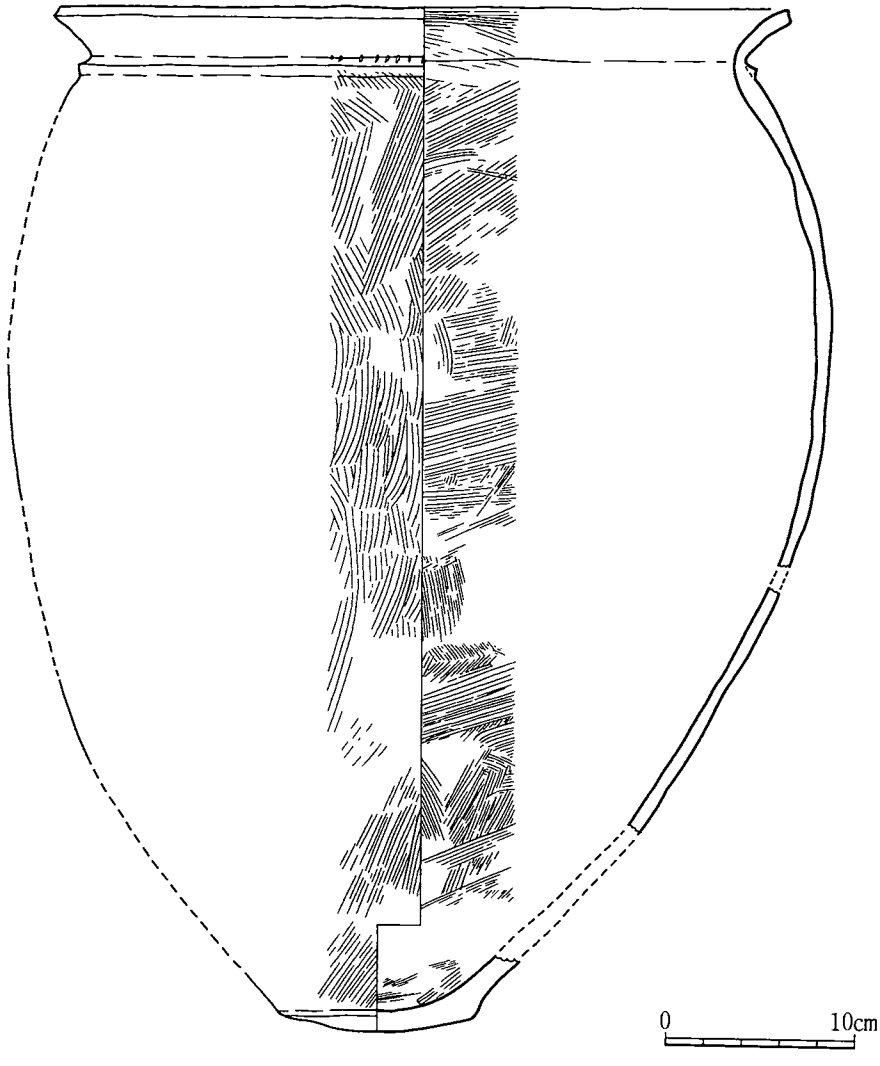
第26図　10号-A 溝跡 3 層出土土器実測図

所と頸部に、二条の凸帯を貼り付ける。凸帯の断面形は三角形を呈する。胴部の凸帯には、貼付するための刻目が部分的に残る。７の胴部も全体が丸くなり、胴部の最大径の箇所に、断面形が三角形の凸帯がある。凸帯は斜めに貼付されており、頂部には刻目が施される。

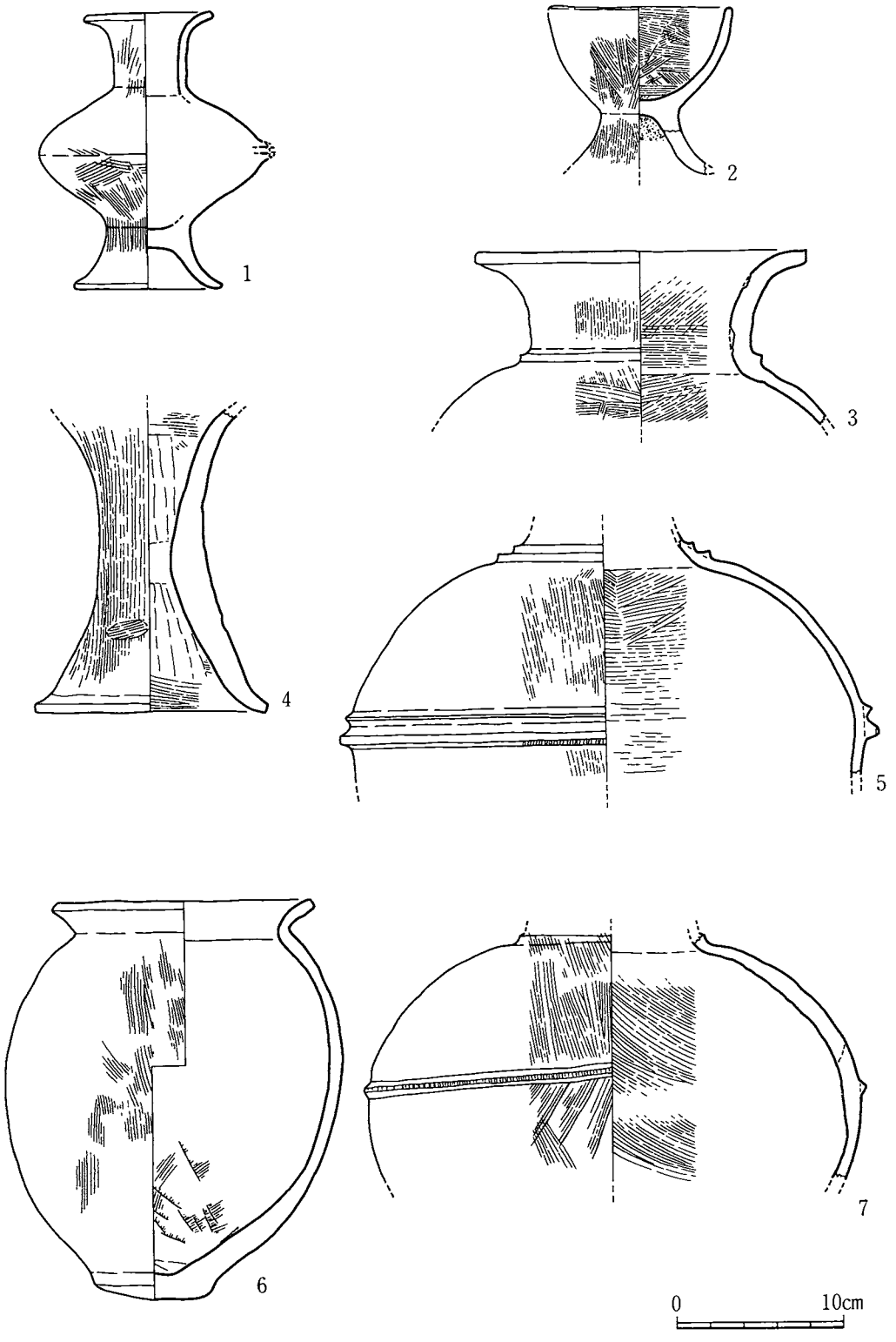
６は「く」の字形に屈曲する口縁部が丸くなる胴部に続く。胴部の最大径は中程よりやや上位にある。底部は丸底気味の平底で、胴部との境に段がある。

器台（第28図４）

４は口縁部と裾部が「八」の字形に開き、裾端部が角張る。内器面には絞り痕が残る。内外器面の調整は、ハケ目とヨコナデである。



第27図　10号－Ａ溝跡３層出土土器実測図



第28図　10号－A溝跡3層出土土器実測図

10号－B溝跡覆土③層出土土器

甕（第29図～第33図）

甕には脚が付くものと付かないものがあり、脚が付かない甕の方が多い。

第29図１～６・８は「八」の字形に開いた脚が付く甕である。１の脚部は内湾しながら、２・３・４の脚部はほぼ直線的にのびる。５・８の脚部は端部付近で外反する。１～４の外底部には砂粒が付着している。５の外底部には指頭痕が残る。６・７の脚部は意識的に欠いており、７の口縁部は「く」の字形に屈曲している。

第29図９～11、第30図２～４、第31図３・４、第32図１～４、第33図１は脚がない甕で、第30図１は脚がないと思われる甕である。第29図９・第30図１は、小型の甕で、口縁部が「く」の字形に弱く屈曲し、外器面にタタキ目が残る。第29図９の胴部はやや丸くなり、底部は丸底になる。第30図１は長胴で、底部は丸底になると思われる。第29図９・第30図１以外は中型の甕である。口縁部は「く」の字形に強く屈曲し、端部は角張り、外器面に段をもつ。胴部は長胴であり、胴部・口縁部の外器面にはタタキ目が残る。第29図10・11、第30図２・３、第31図４、第32図１～４、第33図１の底部は、丸底や僅かな平坦面をもつ丸底である。第30図４・第31図３の底部は、前者のものに比べると、尖り気味である。

第29図12、第30図５、第31図１・２の甕は、底部付近を欠いており、脚の有無が不明である。これらの甕は上記の甕と同様な形状・調整である。

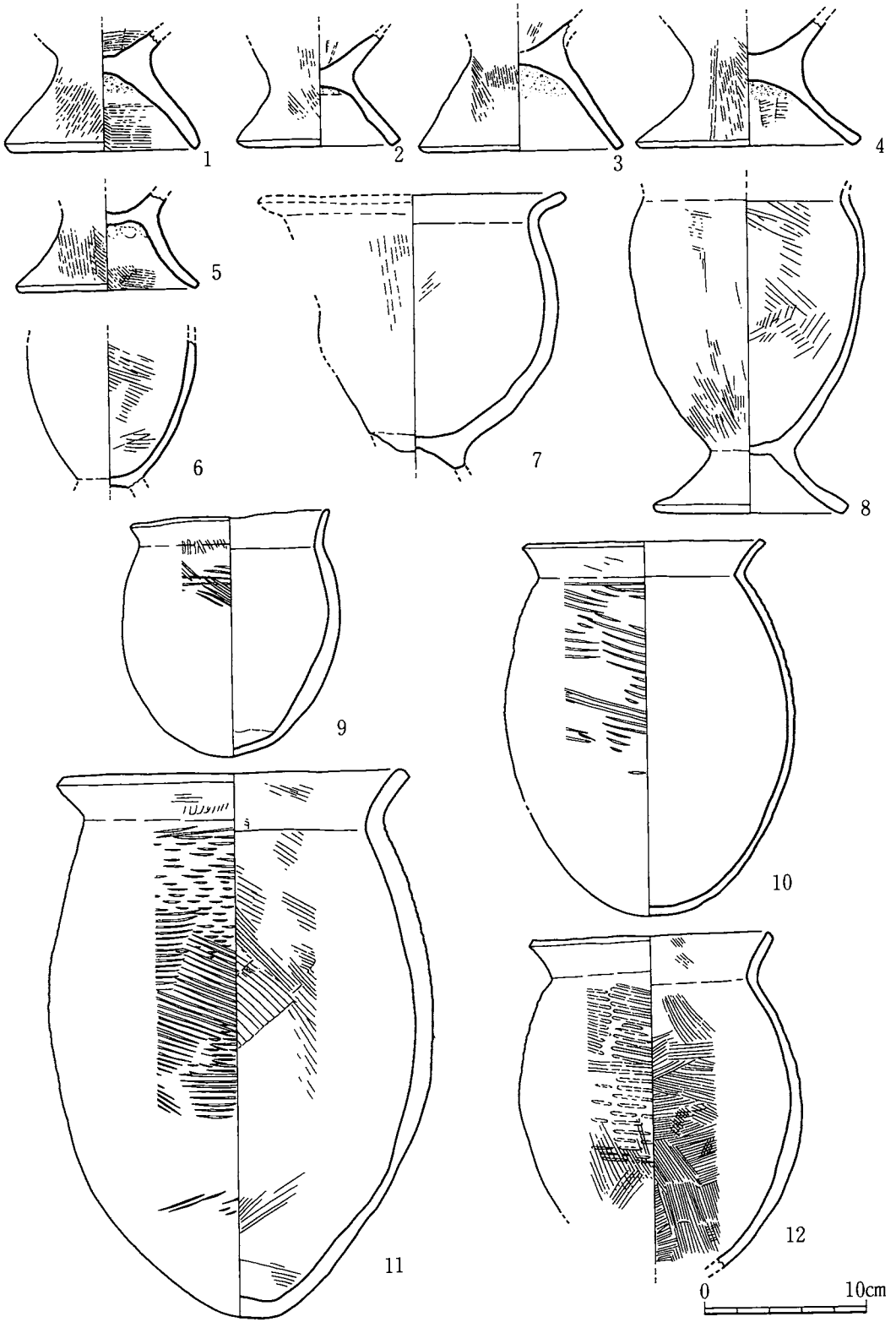
第33図２は大型の甕で、口縁部が「く」の字形に屈曲する。口縁端部は角張り、外器面に段がある。残存部では、タタキ調整は見られず、ハケ調整である。

壺（第34図～第38図）

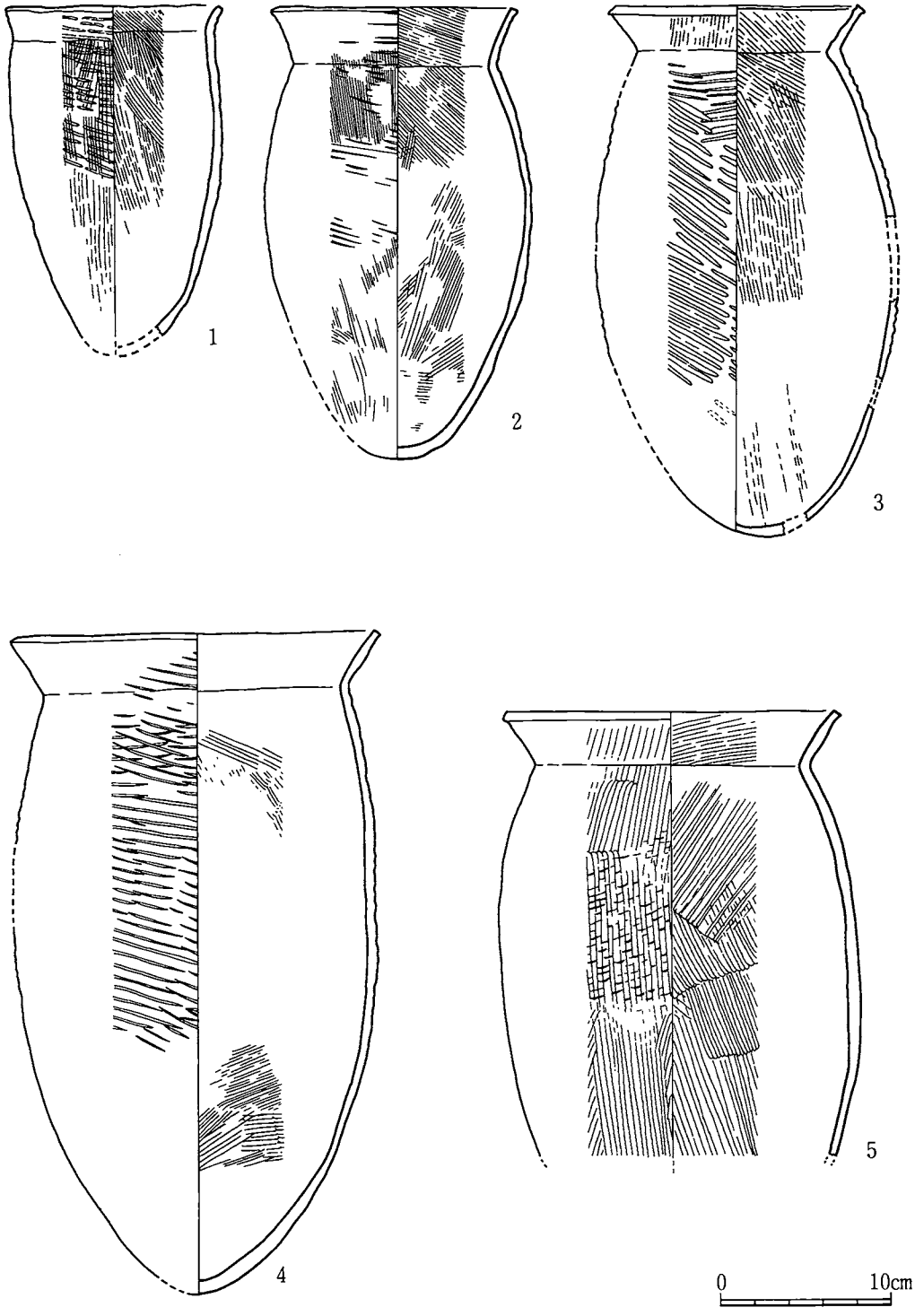
第34図～第38図に図示したものは、中型壺から大型壺で、胴部が残存しているものは長胴である。第34図１～４・第35図１は、口縁部が外に開きながら直線的に立ち上がり、胴部外器面にはタタキ目が残る。第34図１～４の口縁端部は角張り、外器面に段をもつ。２は口縁部のその段に刻目、頸部に半円の刺突文が施される。第35図１の口縁部は長く、端部が丸くなり、頸部には刺突文がある。

第35図２～４・第36図・第37図は、口縁部が外に開きながら立ち上がり、端部付近でさらに外側に開く。その口縁端部付近の開き方には大小がある。胴部にタタキ目が残るものが多い。口縁端部は角張り、外器面に段を形成する。その段に刺突文や沈線文があるのが第35図４・第36図１・３・４である。これらの土器には、頸部にも刺突文や沈線文が施文される。第35図２・第37図４は口縁部が欠損している。第35図２の頸部には小さな貼り付け凸帯がある。第37図４の頸部には沈線文が施文される。

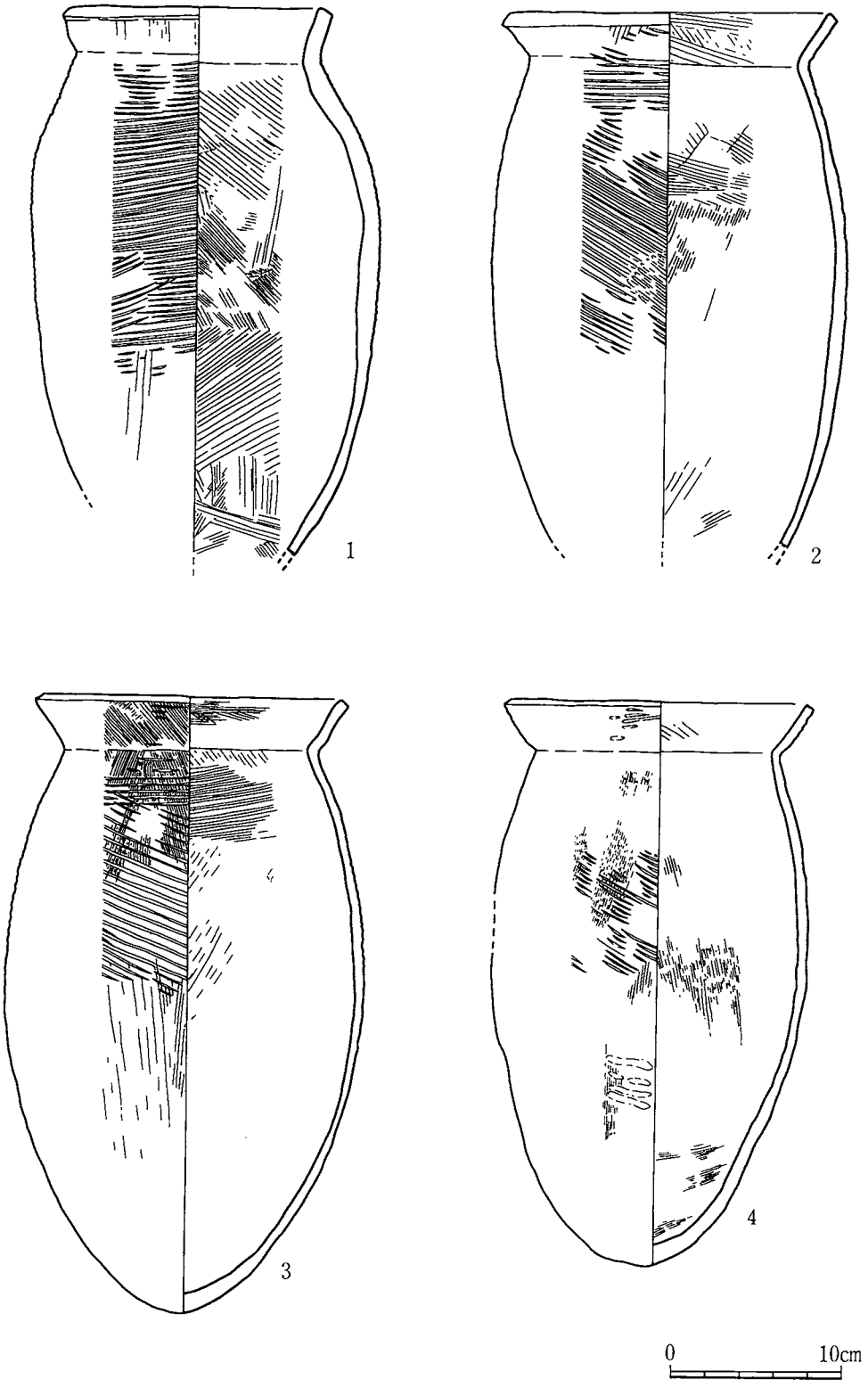
第38図は大型壺で、内傾気味の頸部に大きく開く口縁部が続く。口縁端部は丸くなり、刺突文が施される。口縁端部下位には断面形が三角形を呈する凸帯があり、その先端に小さな刻み



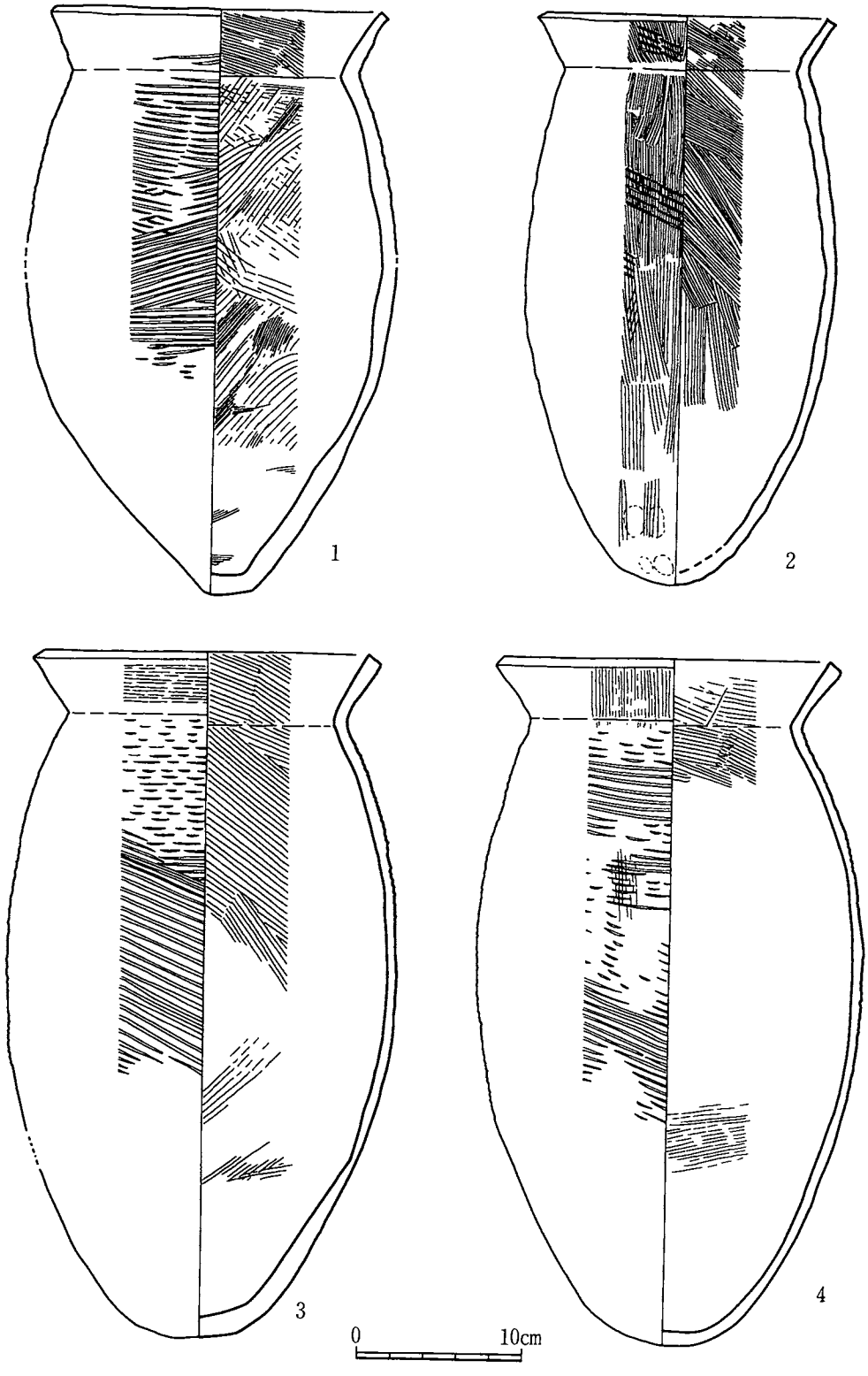
第29図　10号-B溝跡3層出土土器実測図



第30図　10号-B溝跡3層出土土器実測図



第31図　10号-B溝跡3層出土土器実測図



第32図　10号-B溝跡3層出土土器実測図

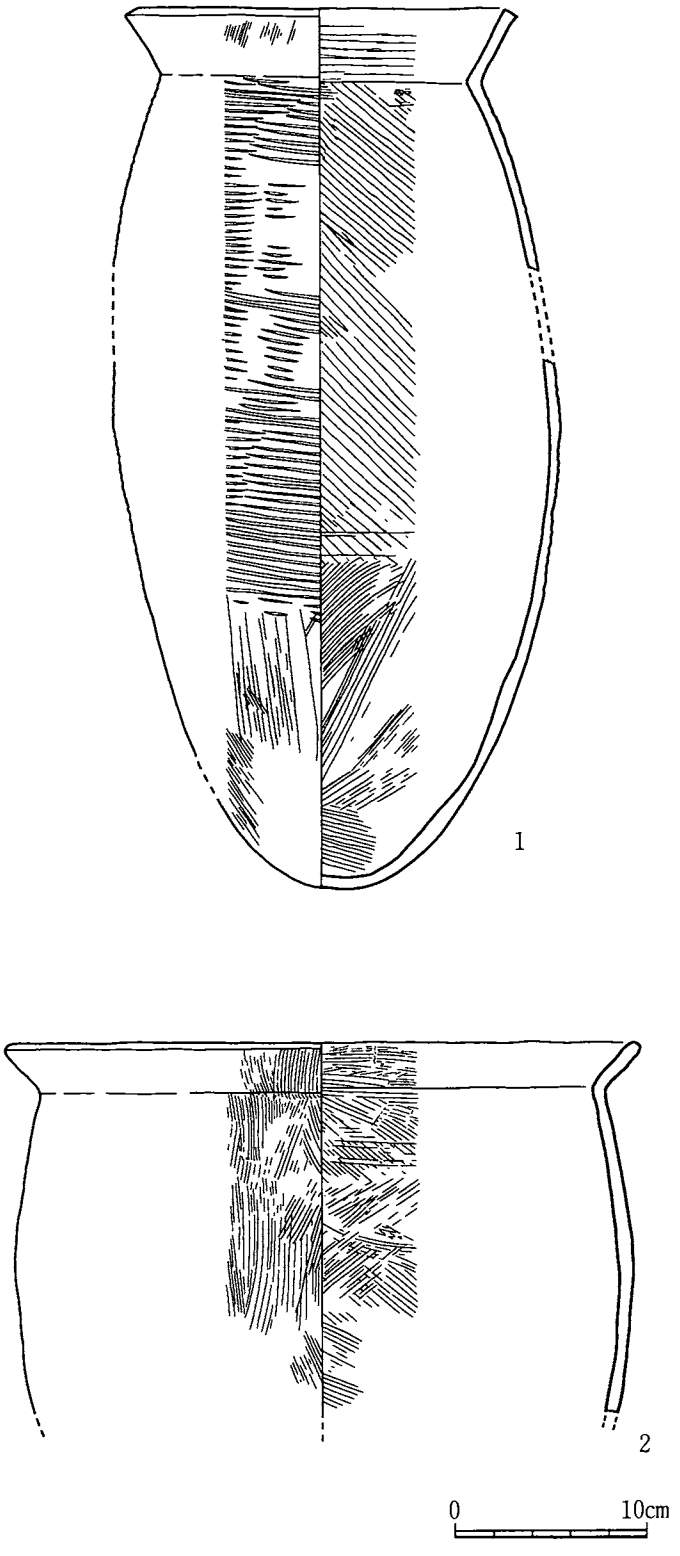
目が施される。頸部と胴部との境には、沈線文を施した凸帯が巡る。胴部は丸くなり、外器面にタタキ目が残る。

小型壺（第39図・第40図１～８）

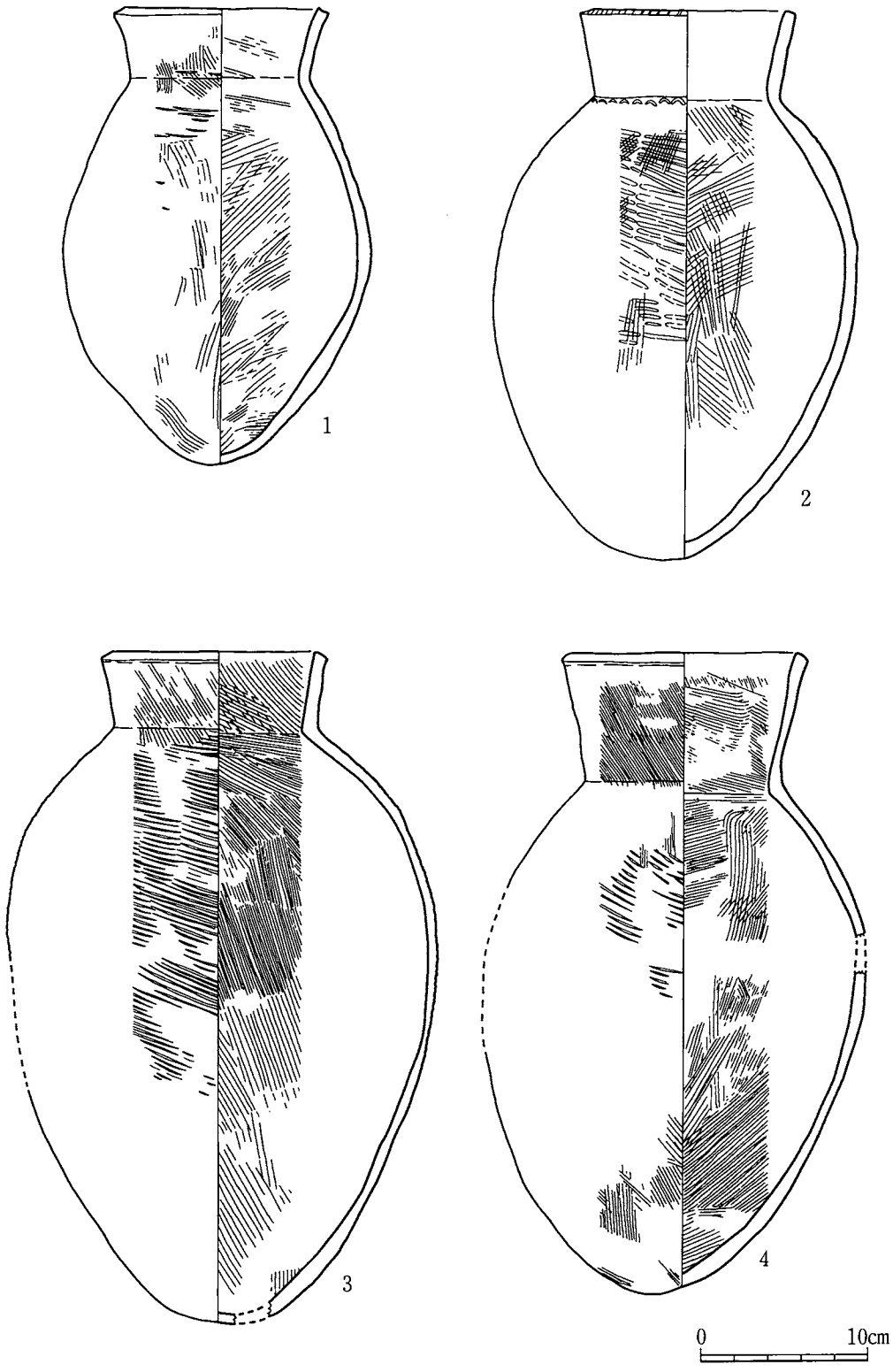
第39図の壺は、頸部で「く」の字形に折れ、口縁部が外に開きながらほぼ直線的に立ち上がる。縁端部は角張り、外器面側に段を形成する。底部は丸底である。10・11・12は他のものに比べて、器高が高い。胴部外器面にタタキ目を残すものは全体的に少なく、タタキ目が残るものは、７・９のように極一部分である。

第40図１～４は、第39図のものに比べて、口縁部の外側への開きが弱い。口縁端部は丸くなるもの（２・３）と角張るものとがある（１・４）。胴部は３が「く」の字形になるが、他のものは丸くなる。底部は１・２が丸底で、３が平坦面を僅かにもつ丸底である。４の胴部外器面には、部分的にタタキ目が残る。２の外底部付近には、ヘラ削りが施される。

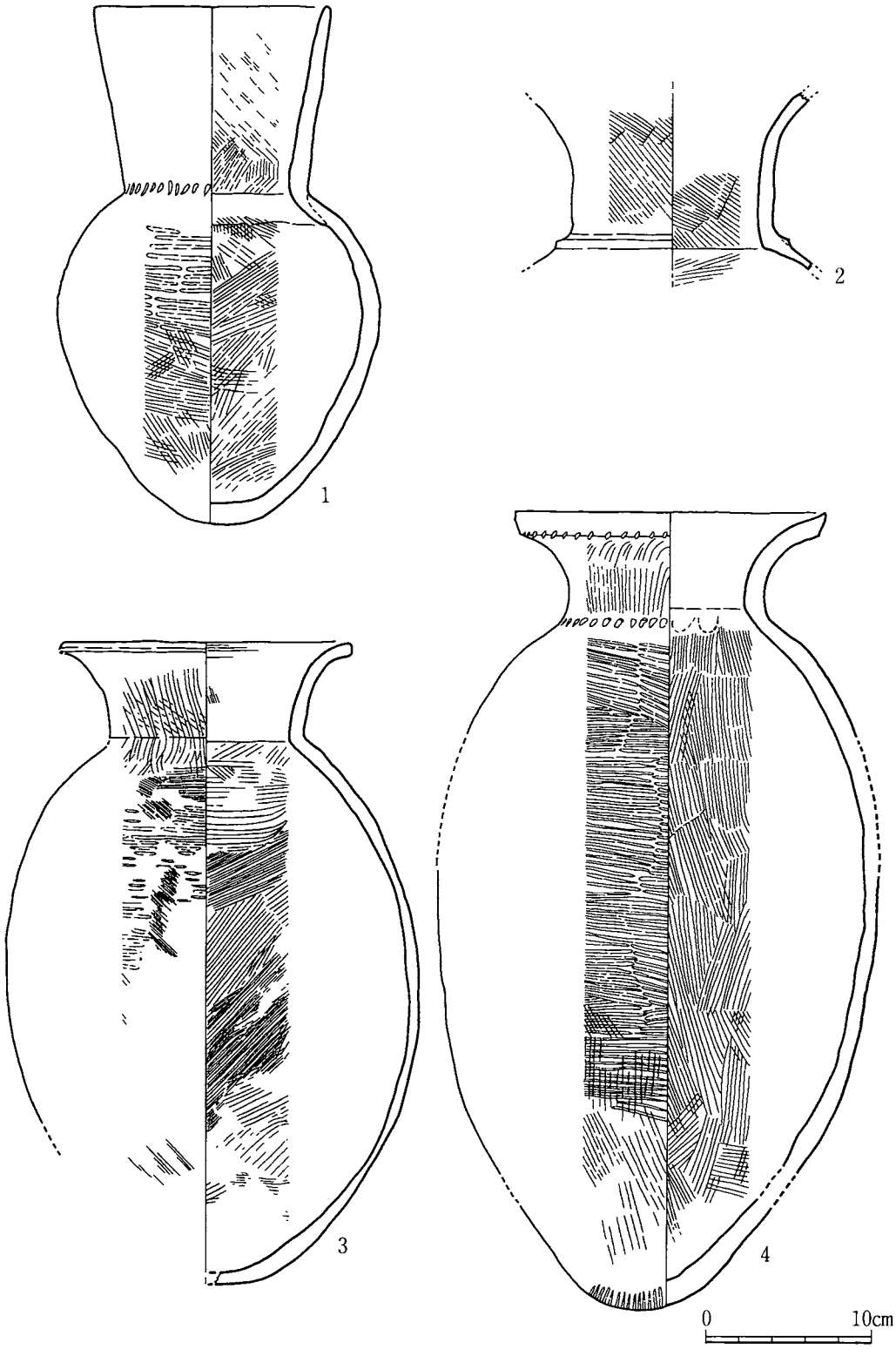
第40図５～８は、頸部で弱く「く」の字形に屈曲し、口縁部が僅かに外反しながら直線的に長く立ち上がる。口縁端部は丸



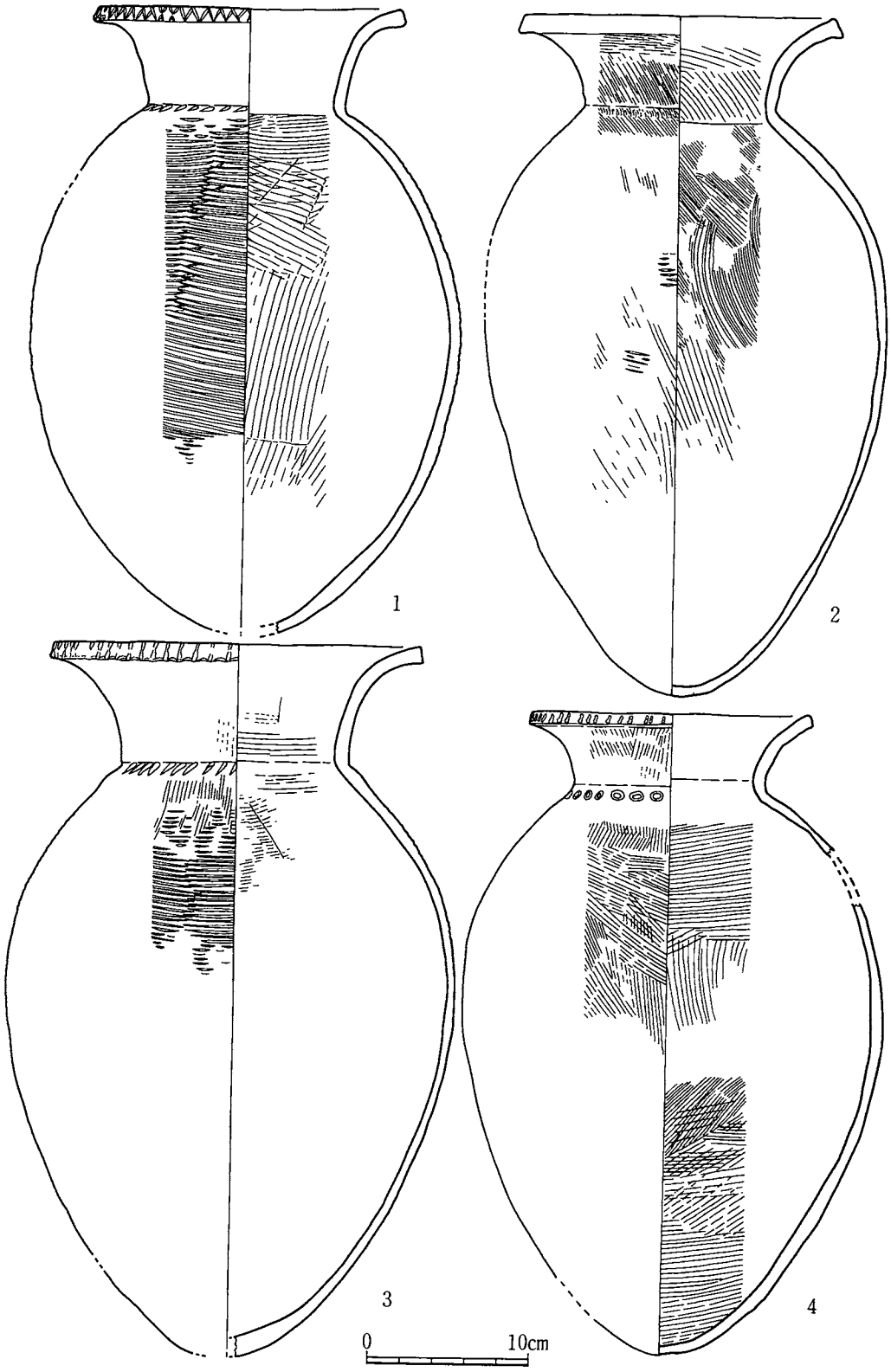
第33図　10号－Ｂ溝跡３層出土土器実測図



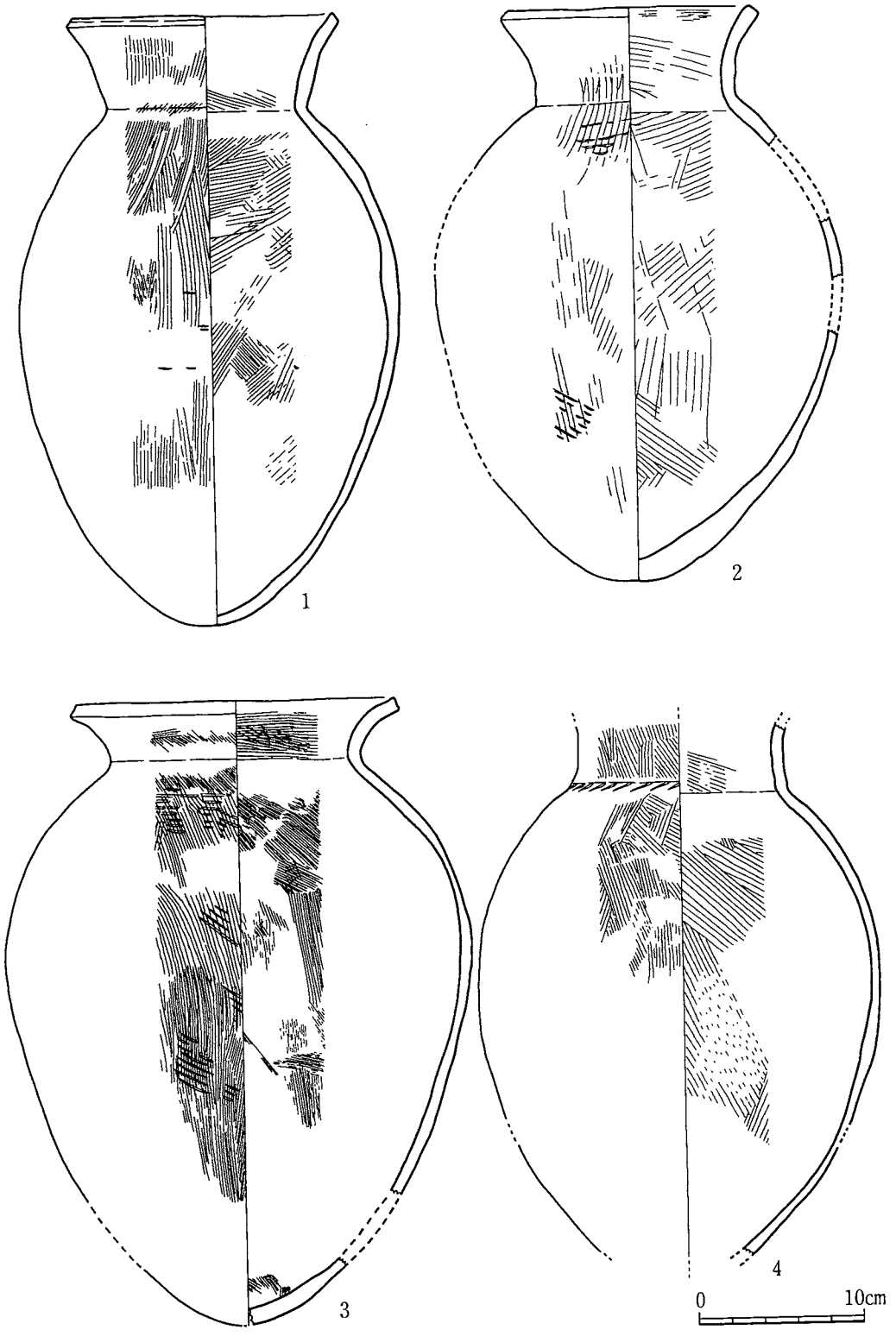
第34図　10号-B溝跡3層出土土器実測図



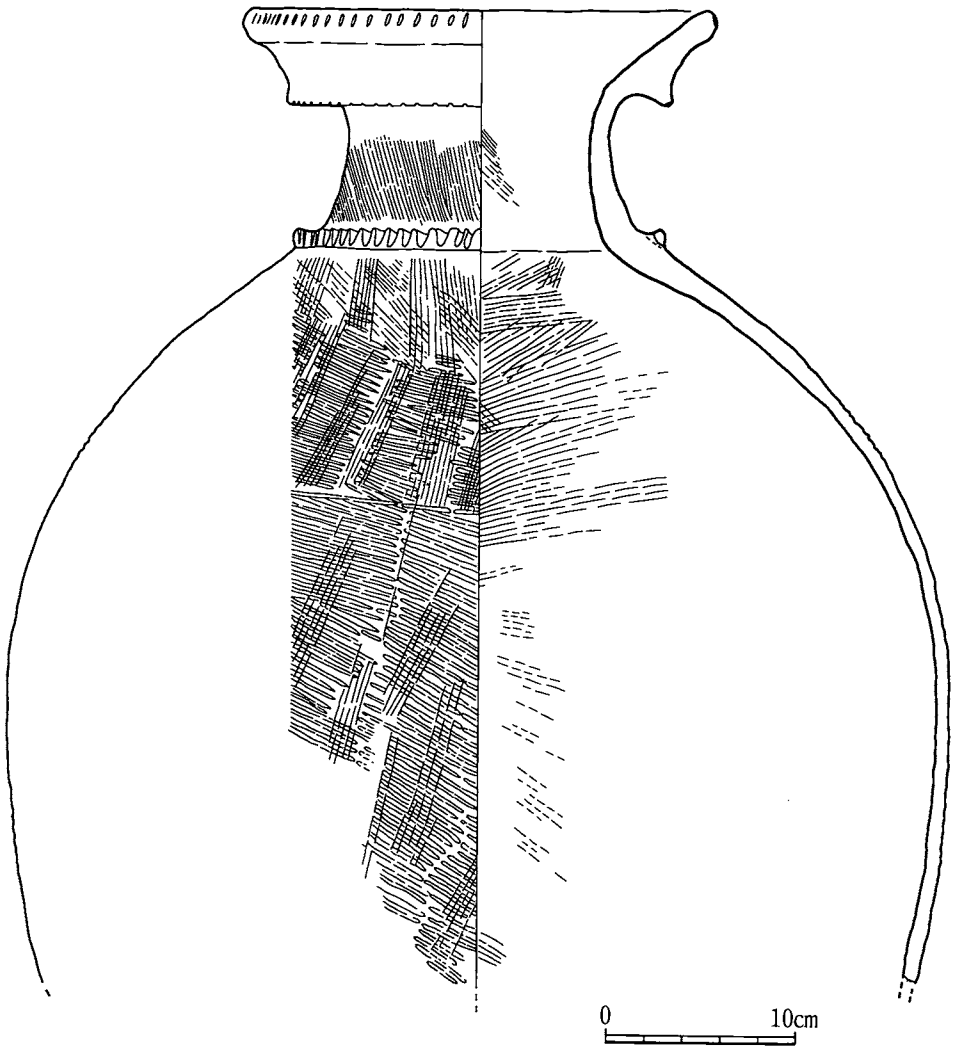
第35図　10号-B溝跡3層出土土器実測図



第36図　10号－B溝跡３層出土土器実測図



第37図　10号－B溝跡3層出土土器実測図



第38図　10号-B溝跡3層出土土器実測図

くなるもの（6）とやや角張るものとがある（5・7・8）。胴部は8が丸くなり、5・6・7が僅かに稜をもつ。

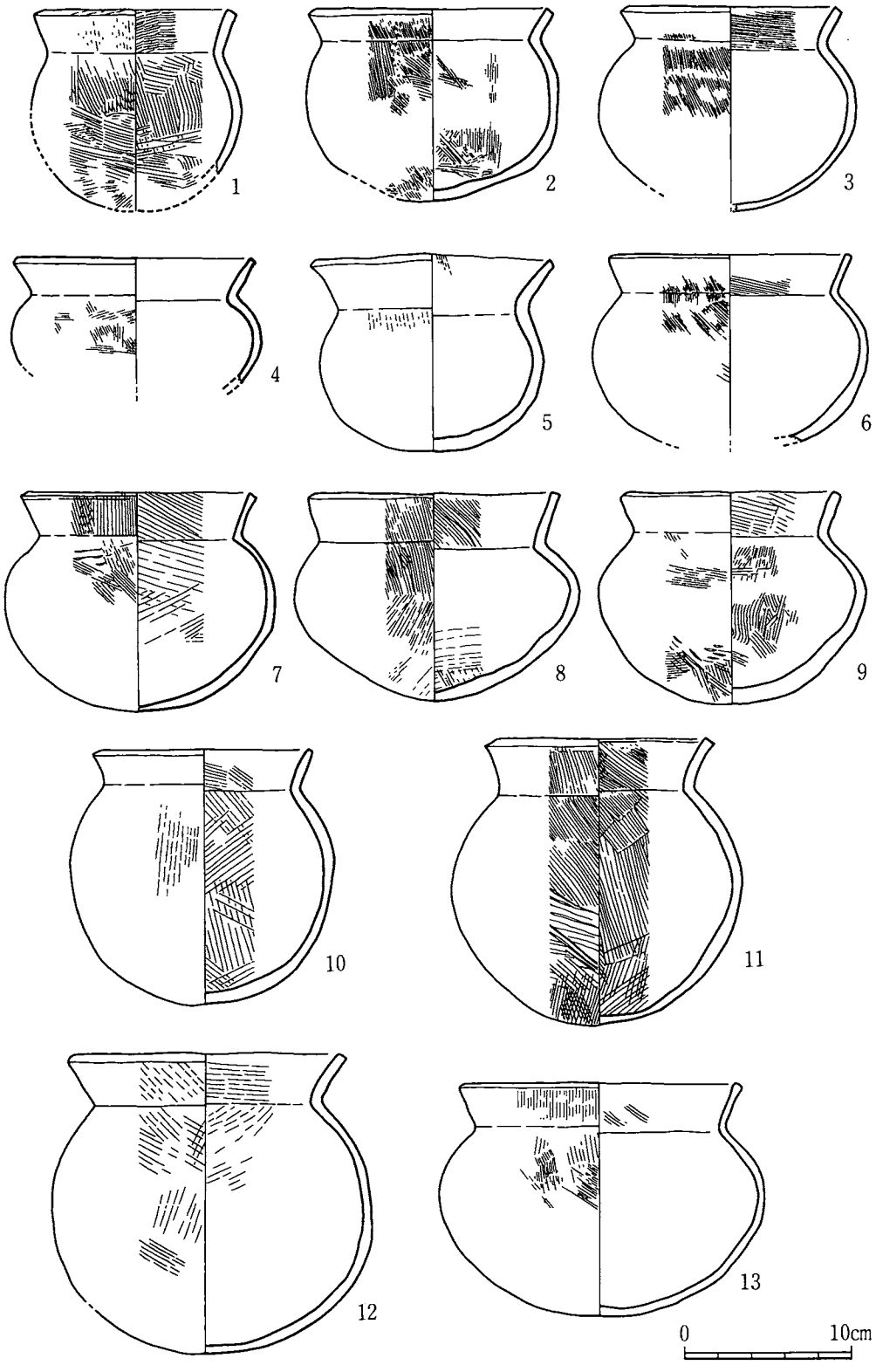
鍔付小型壺（第40図9・10）

10は胴部・口縁部がほぼ真っ直ぐに直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くなり、胴部と底部の境には、外斜め下方に突出した鍔状のものが巡る。底部は全体が丸くなっている。9は口縁部と底部を欠いているが、10と同様な形態になると思われる。

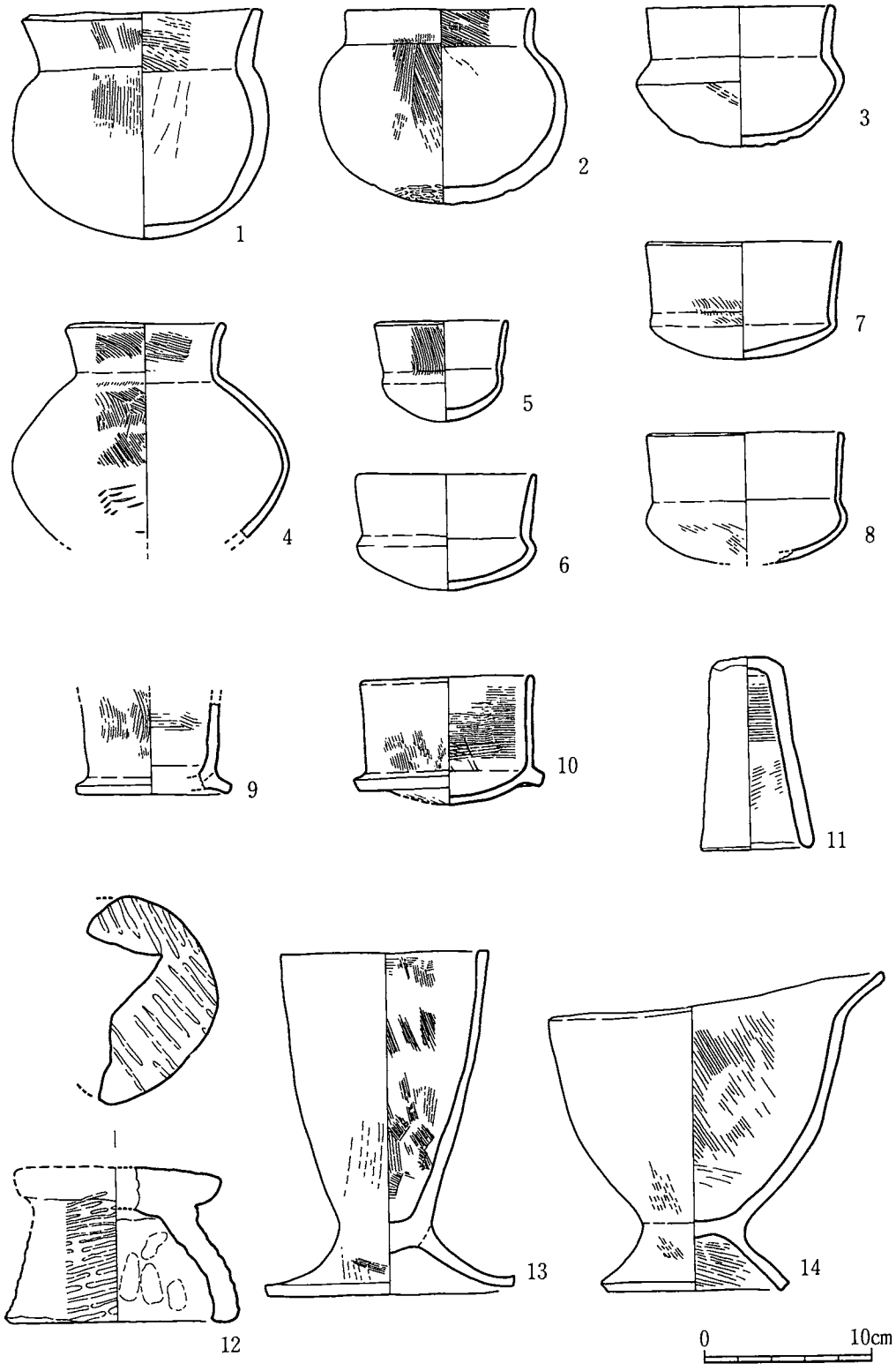
支脚（第40図11・12）

11は細長いコップを逆さにしたような形を呈する。上部はほぼ平坦で、体部は直線的に外に開きながらのびており、下部ほど開きが大きい。脚端部は丸くおさまる。

12の上部は欠損しているが、円盤状になると思われる。残存部より推定すると、上端面は僅



第39図　10号-B溝跡3層出土土器実測図



第40図　10号-B溝跡3層出土土器実測図

かに斜めになる。その上部に脚部が直接続き、左側は外反しながら、右側は内湾しながらのびている。脚端部には平坦な面がある。上部・脚部の外器面にはタタキ目が明瞭に残り、脚部内器面には指頭痕がある。

グラス形土器（第40図13）

胴部は外に開きながら僅かに丸くなって口縁部までのび、端部は角張る。底部には「八」の字形を呈する脚が付く。脚端部は角張り、外器面に段をもつ。

片口鉢（第40図14）

胴部は外に開きながら丸くなってのびる。口縁部の一箇所が「く」字形に強く屈曲し、片口部になる。底部には「八」の字形をした脚が付き、端部が角張り、外器面に段を形成する。

鉢（第41図～第43図）

第41図・第42図１・３は、丸くなりながらのびる胴部に、内傾した口縁部が続く。口縁端部は角張り、上端が平坦なものと内器面側に段があるものとがある。底部は丸底が殆どであるが、第41図３のように平底気味のものもある。第41図１・２は小型品で、１の内外器面には指頭痕がある。第41図11・14と第42図３は、他のものに比べると器高が高い。第42図３の外器面には部分的にタタキ目が残る。第41図８の外器面には籾痕がある。

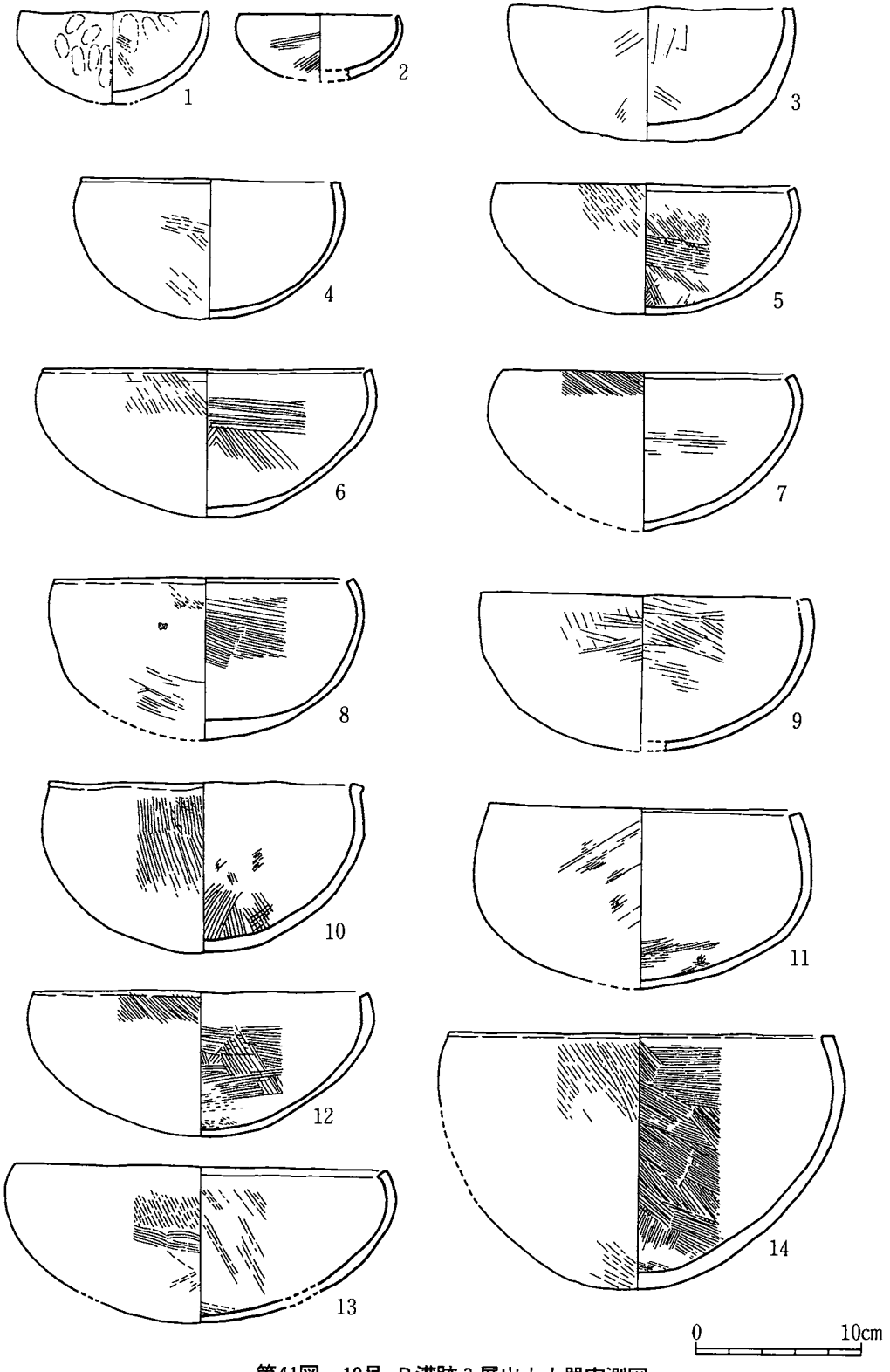
第42図２・４・５・７・８は、丸い胴部に口縁部が内傾せずにそのまま続くもので、底部は７・８が平底気味の丸底で、他は丸底である。口縁端部は丸くなるものと角張るものとがある。５・７の口縁部は内器面側に段をもつ。２・４・７・８の外器面にはタタキ目が残る。

第42図６・９・10、第43図１は、器形全体が略三角形を呈している。底部は第42図９がやや尖る丸底で、他は丸底である。口縁端部は角張り、第42図６・10、第43図１が外器面側に段をもつ。第42図９は外器面にタタキ目が残り、第42図10・第43図１の底部付近にはヘラ削りが施される。

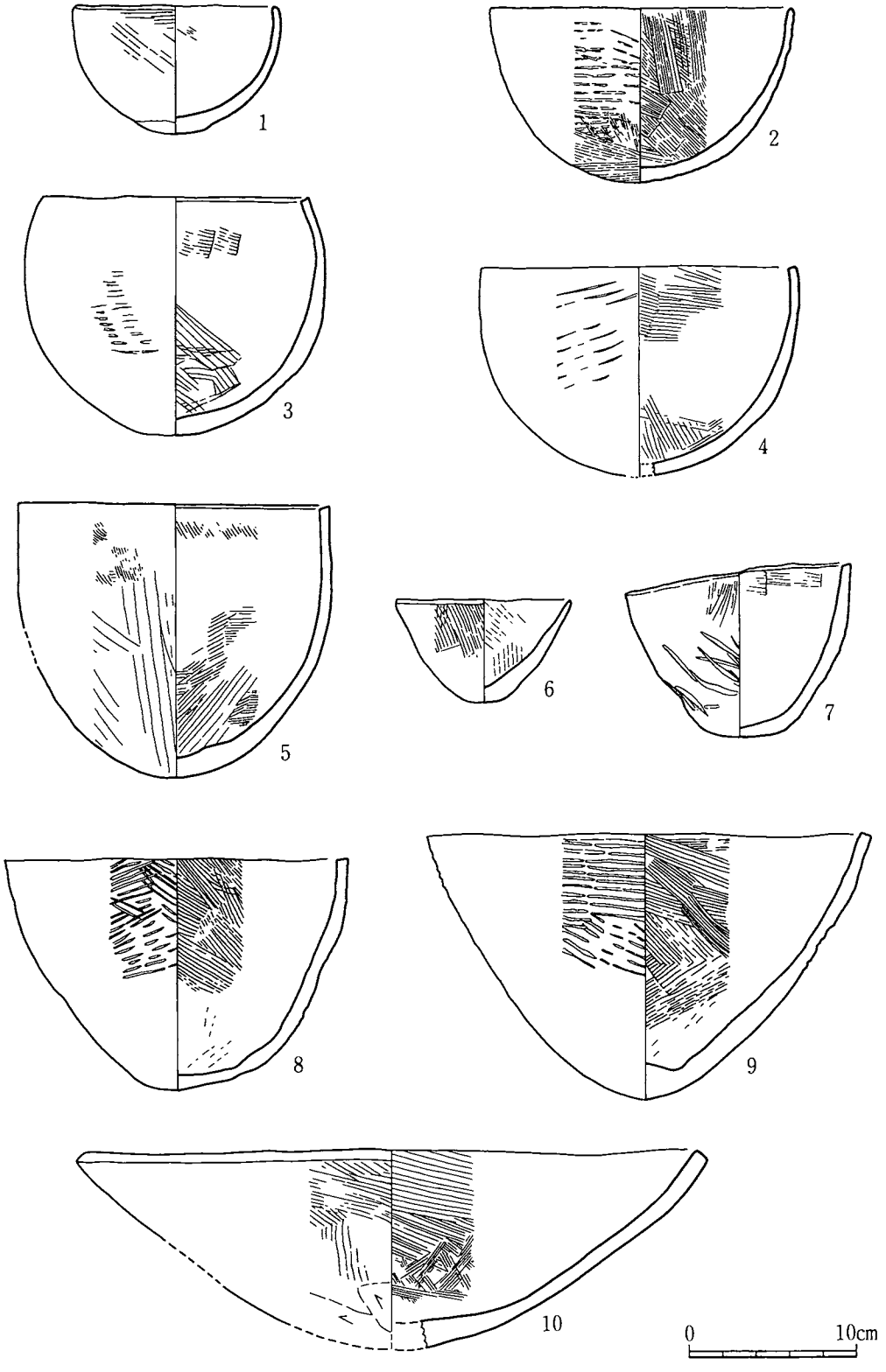
第43図２・３は、頸部で「く」の字形に屈曲し、口縁部が大きく外に開きながら直線的にのびる。口縁端部は角張り、外器面側に段がある。胴部は丸くなり、底部は丸底である。

第43図４～７は脚付鉢である。５・６・７は、丸い胴部に内傾した口縁部が続き、口縁端部は角張り、７は内器面側に段がある。６の胴部外器面にはタタキ目が残る。４は丸い胴部がそのままのびて口縁部に至り、口縁端部は角張る。４の内器面には、縦方向に施した線の暗文がある。４・５・７の脚部は「八」の字形に開きながらのび、端部付近でさらに外側に開く。脚端部は角張り、外器面側に段をもつ。脚部には二個の穴を一組にした穿孔が三箇所あり、穴の中には途中までの穿孔がある。７の脚部は低い。

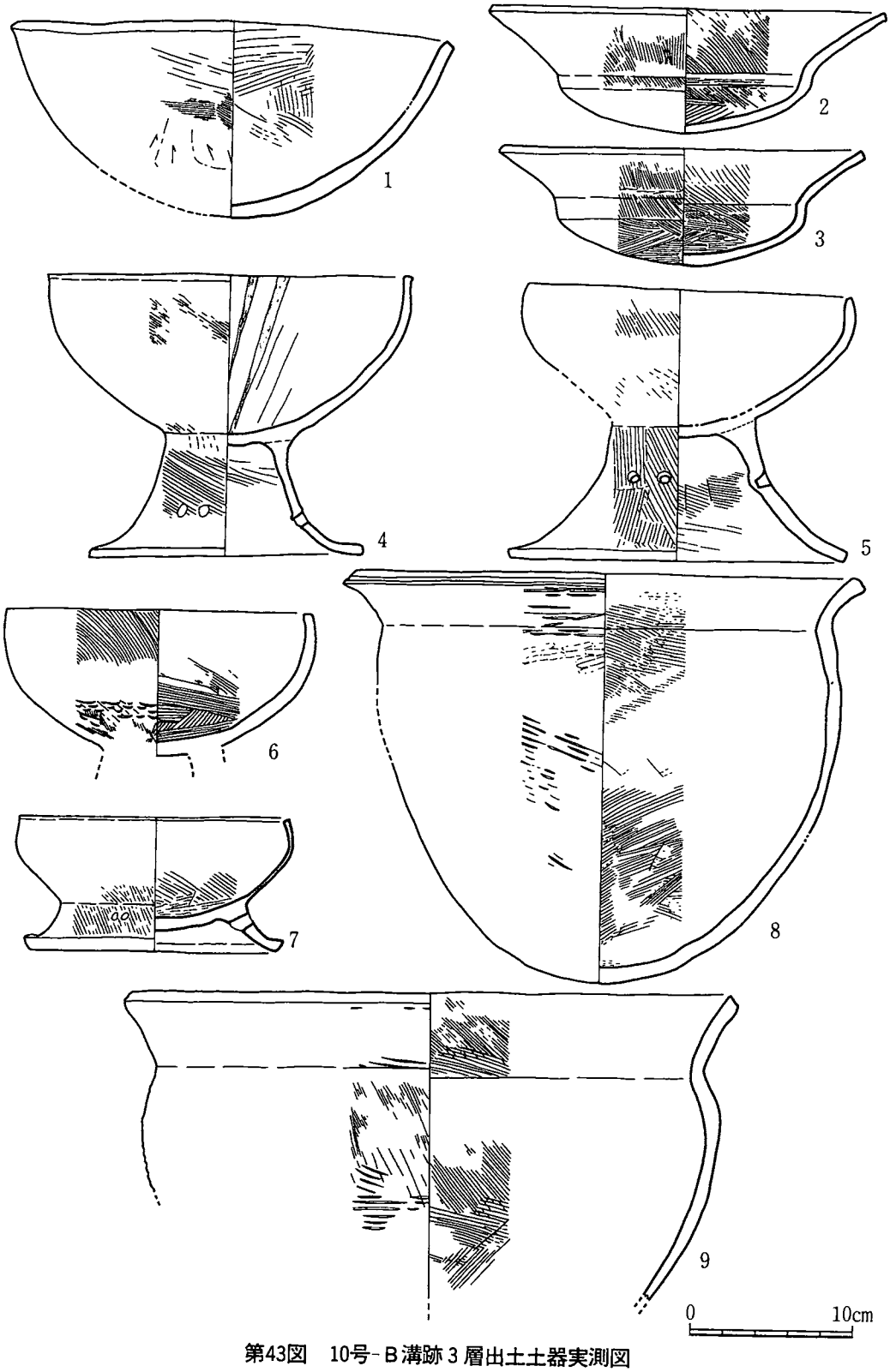
第43図８・９は大型鉢である。８・９は胴部が丸くなり、頸部が「く」の形に屈曲し、口縁部まで外に開きながらのび、端部は角張り、外器面に段がある。胴部外器面にはタタキ目が残る。８の底部は丸くなる。



第41図　10号-B溝跡3層出土土器実測図



第42図　10号－B溝跡3層出土土器実測図



第43図　10号-B溝跡3層出土土器実測図

高坏（第44図）

1～4は丸い胴部が頸部で「く」の字形に屈曲し、口縁部が外に開きながらのびる。口縁端部は角張り、外器面に段がある。4の坏部は、他のものより深く、内外器面に斜め方向の暗文が線で施されている。脚部は「八」の字形に開いており、端部付近でさらに外側に開く。脚端部は角張り、外器面に段をもつ。4の脚部には穿孔が三箇所ある。

5は僅かに丸くなってのびる胴部に強く「く」の字形に屈曲した口縁部が続く。屈曲部の端部が角張り、外器面に二つの段を作っている。その二つの段には刻目が、屈曲部より下位の内器面には、縦方向の線の暗文が施される。

6は胴部がほぼ直線的にのび、頸部で「く」の字形に折れ、外器面側に段をもつ。口縁部は外反しながら長く立ち上がり、端部は角張り、外器面が段になる。口縁端部・屈曲部の外器面の段には、刻目が施される。脚部は「八」の字形を呈しており、端部が角張り、外器面が段になる。脚残存部には二個一組の穴が三箇所にあり、欠損部にも一箇所穿孔されていたと思われる。内外器面には赤色顔料を塗布した跡が認められる。

7～9は体部のほぼ中央で「く」の字形に屈曲する。その屈曲部より下位は直線的にのび、上位は外反しながら立ち上がっている。口縁端部は角張り、外器面に段をもつ。7の内器面、9の内外器面には、線の暗文が施される。7～9の脚部は細長く、外に開きながらのび、端部付近でさらに強く開く。その開き始めた部分に三箇所の穿孔がある。

器台（第45図）

1～3は体部中央より上下両端部に向けて、「八」の字形に開き、端部付近でさらに外反する。上下端部は角張り、外器面側が段になる。体部には略長方形の上下二段の透かしが四箇所ある。その透かしの間には五条の櫛描文が巡る。2の波状文の下位には沈線文も施される。

10号－B溝跡覆土④層出土土器

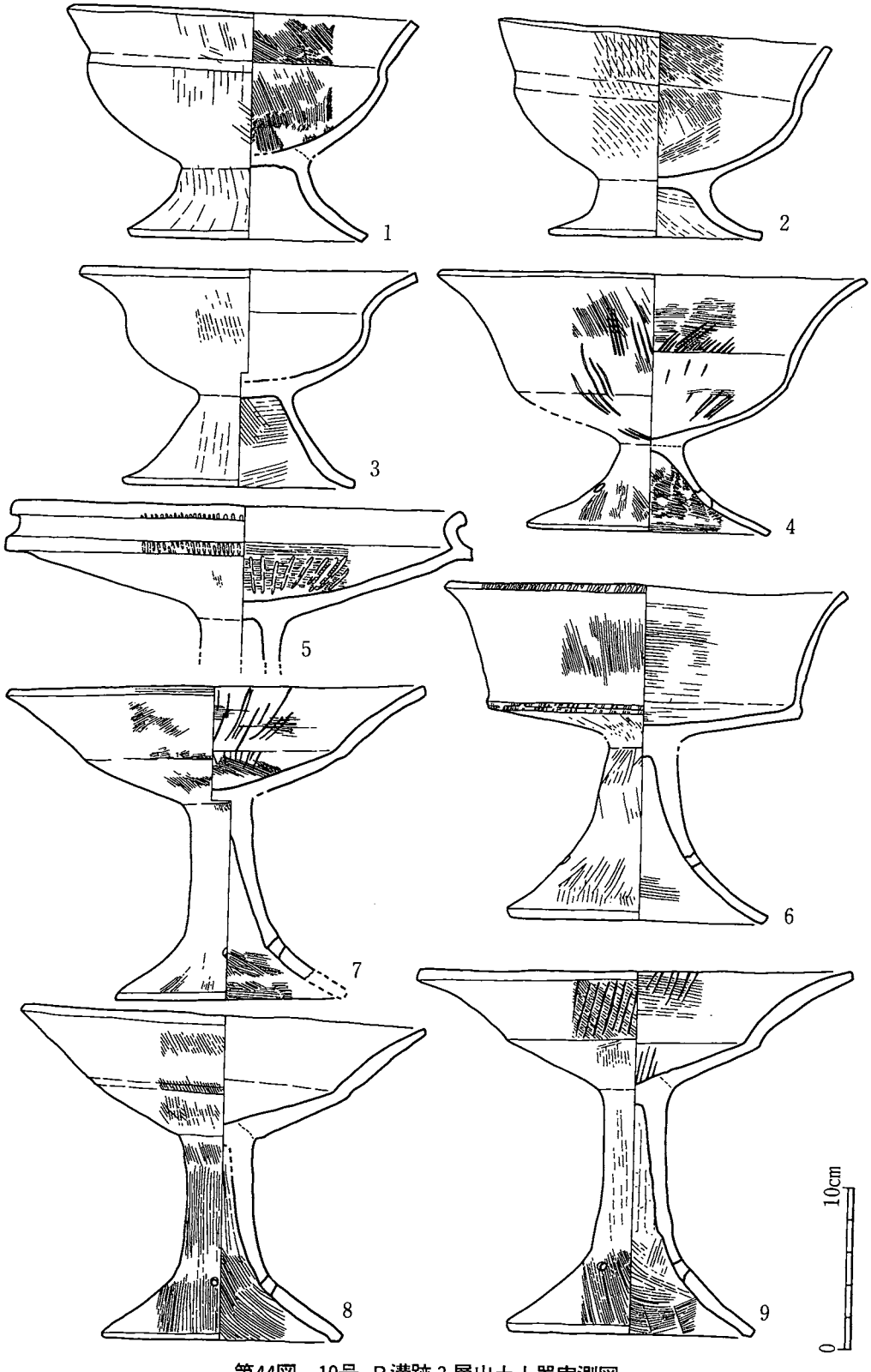
甕（第46図～第49図1）

甕には脚が付くものと付かないものがあり、後者のほうが多い。

第46図2～8・10・11には、「八」の字形に開く高い脚が付く。脚端部は5がやや尖り気味で、他は角張り外器面が段になる。7の外底部には砂粒が付着する。

第46図1は小型の甕で、口縁部が「く」の字形に屈曲する。

第46図9・12・13、第47図・第48図・第49図1は、口縁部が「く」の字形に屈曲し、端部が角張り外器面が段になる。胴部は長胴であり、外器面にはタタキ目が残る。第47図1は底部付近が残存していないので不明であるが、その他の甕は丸底であったり、丸底になると思われる。第46図9は甕と壺の中間形態を呈しているが、ここでは甕として扱った。



第44図　10号-B溝跡3層出土土器実測図

壺（第49図２～４・第50図・第51図）

これらの壺は中型・大型壺である。第49図２は頸部が外反しながら立ち上がり、頸部と胴部との境に弱い段がある。口縁部は「く」の字形に強く屈曲し、頸部との境が稜になる。

第49図３・第50図１・第51図１は、口縁部が外反しながら立ち上がり、端部付近でさらに屈曲する。口縁端部は角張り、外器面側が段になる。胴部は第50図１が丸くなり、他が長胴である。第50図１は頸部外器面に刺突文があり、第51図１の口縁端部外器面には沈線文が施される。第50図１の胴部外器面には部分的にタタキ目が残る。

第49図４・第50図２～４は、口縁部がほぼ直線的に外に開きながら立ち上がり、胴部が長胴である。口縁端部は丸くなるものと角張るものとがあり、後者は外器面側が段になる。第49図４、第50図３・４、の胴部外器面にはタタキ目が残る。

第51図２は胴部が丸くなり、胴部上位には二個の釦状の張りつけを一組みにしたものが四箇所ある。頸部外器面には、刻目を施した張り付け凸帯が巡る。胴部外器面にはタタキ目が部分的に残る。

小型壺（第52図・第53図１～４）

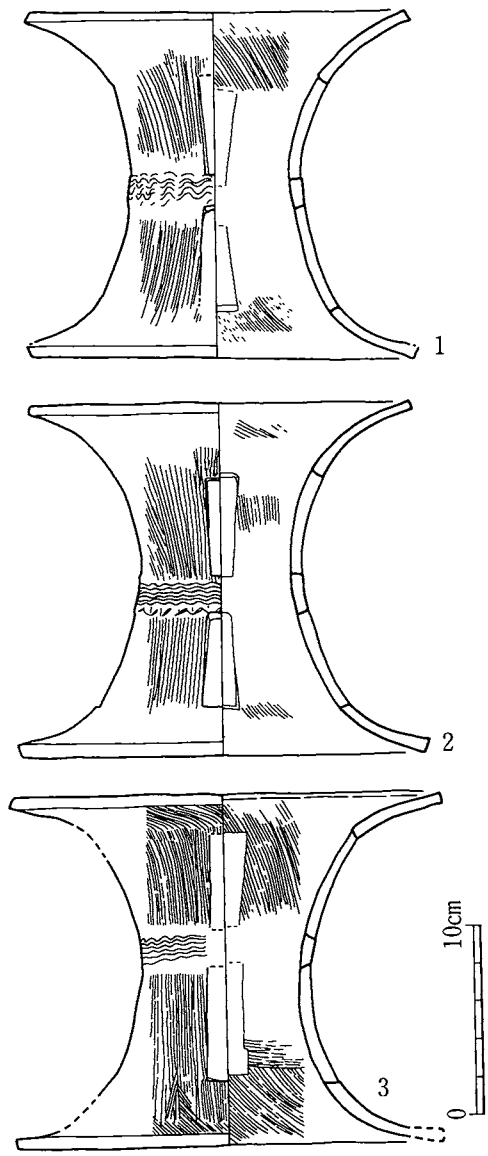
第52図１は胴部が角張り、頸部で「く」の字形に折れる。口縁部は外に開きながら立ち上がり、端部は丸くなる。底部は丸底になると思われる。

第52図２は胴部が丸くなり、頸部が「く」の字形に折れ、口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、端部は丸くなる。底部は丸底である。

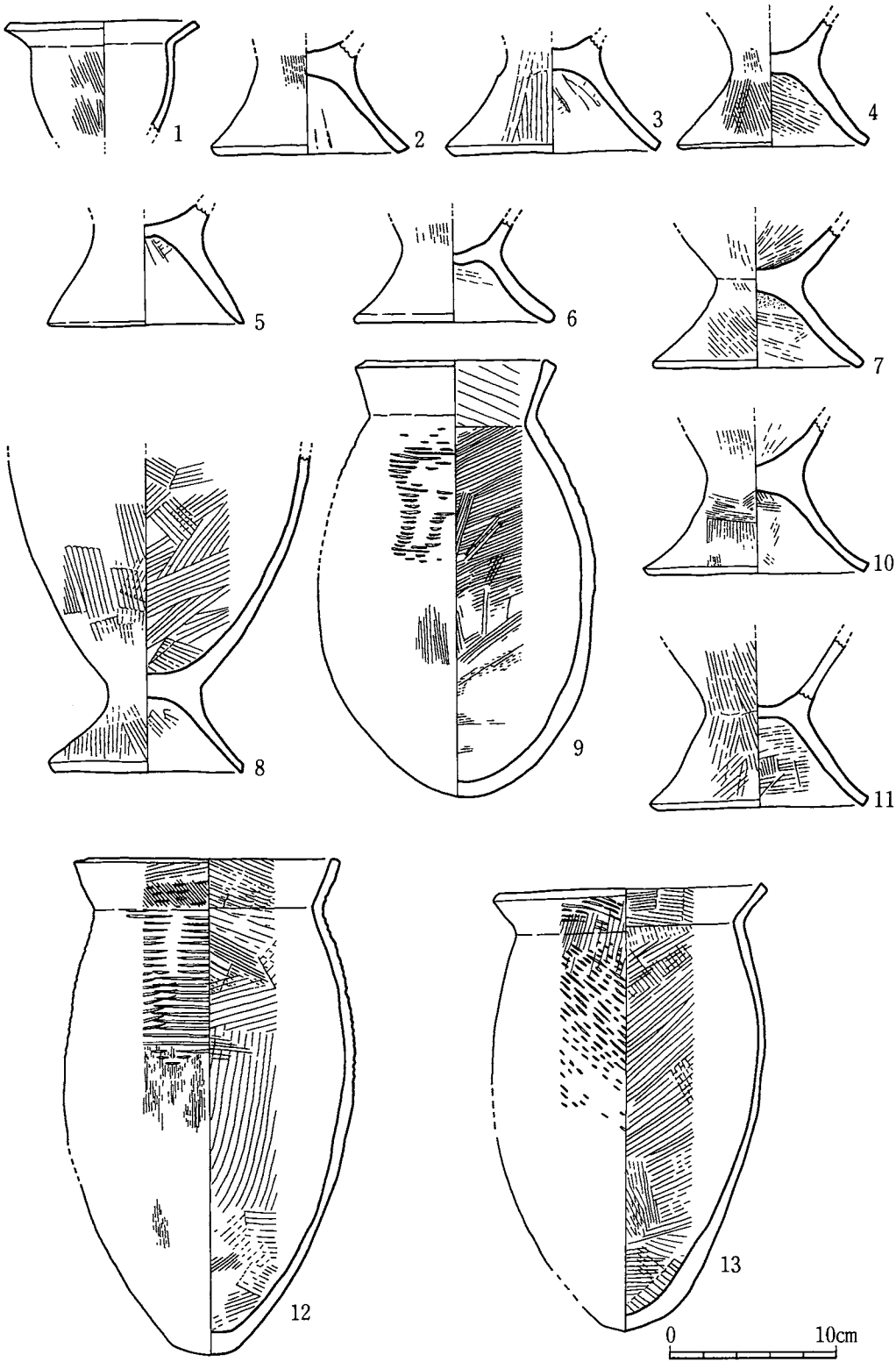
第52図３は胴部がやや角張り、頸部が「く」の字形に屈曲する。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部が丸くなる。底部には「八」の字形を呈する脚が付き、脚端部は角張り外器面側が段になる。

第52図４は胴部が丸くなり、頸部で「く」の字形に折れ、口縁部が外反しながら立ち上がる。頸部外器面には竹管状の刺突文が施される。

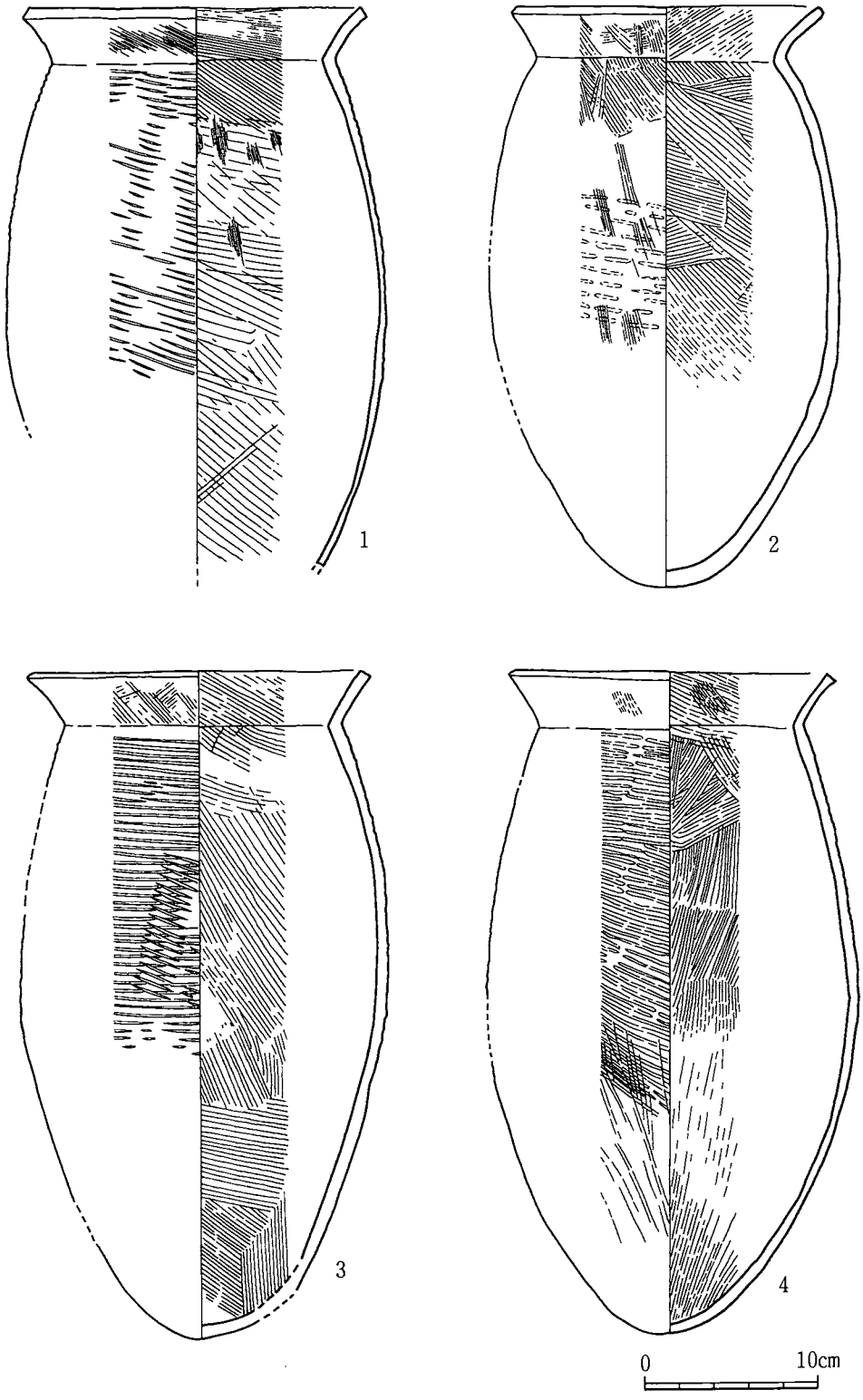
第52図５・６は算盤玉状の胴部に、ほぼ直線的に外に開きながらのびる長い頸部が続く。６の口縁端部は丸くなり、口縁部から頸部にかけての内外器面



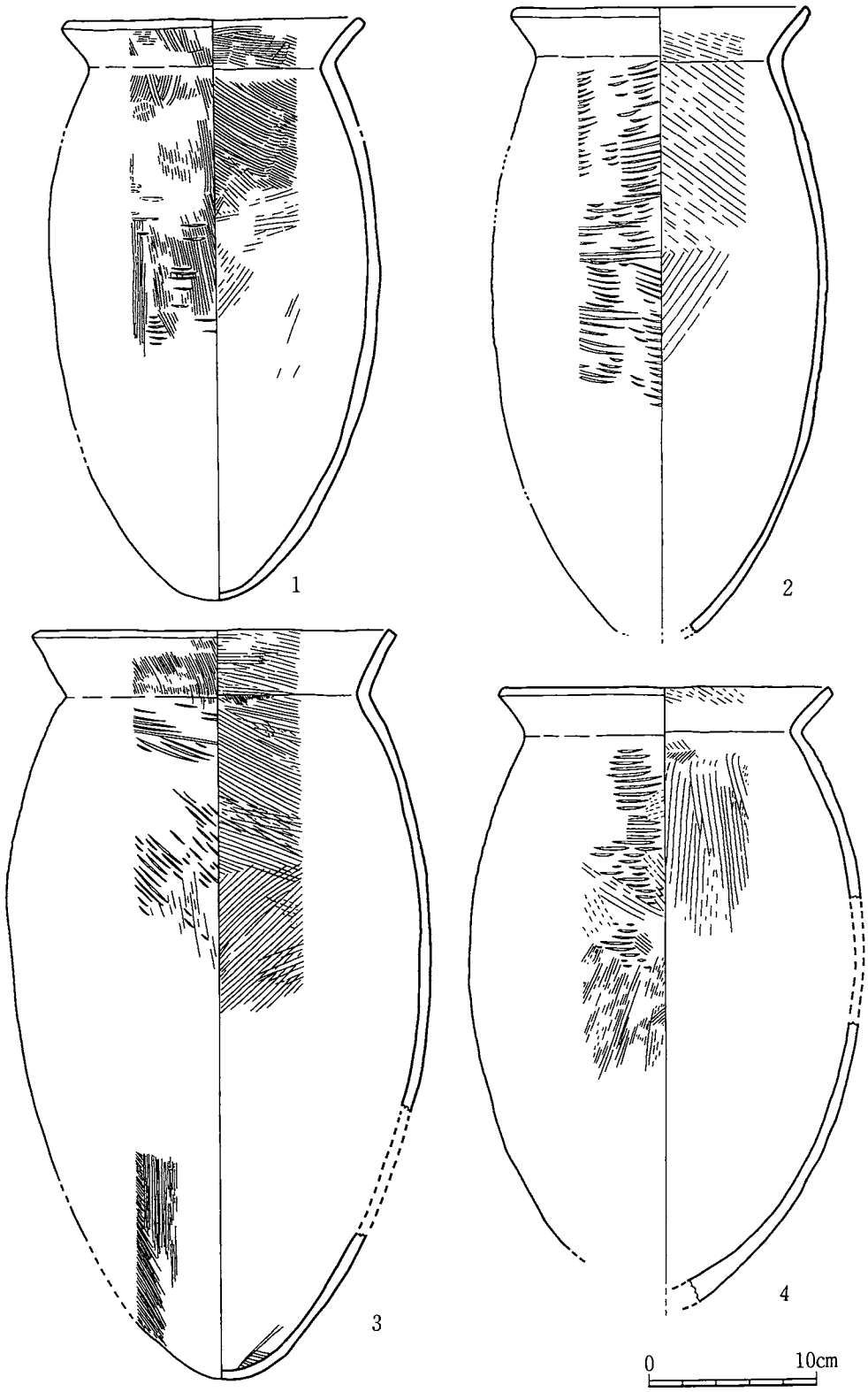
第45図　10号-Ｂ溝跡３層出土土器実測図



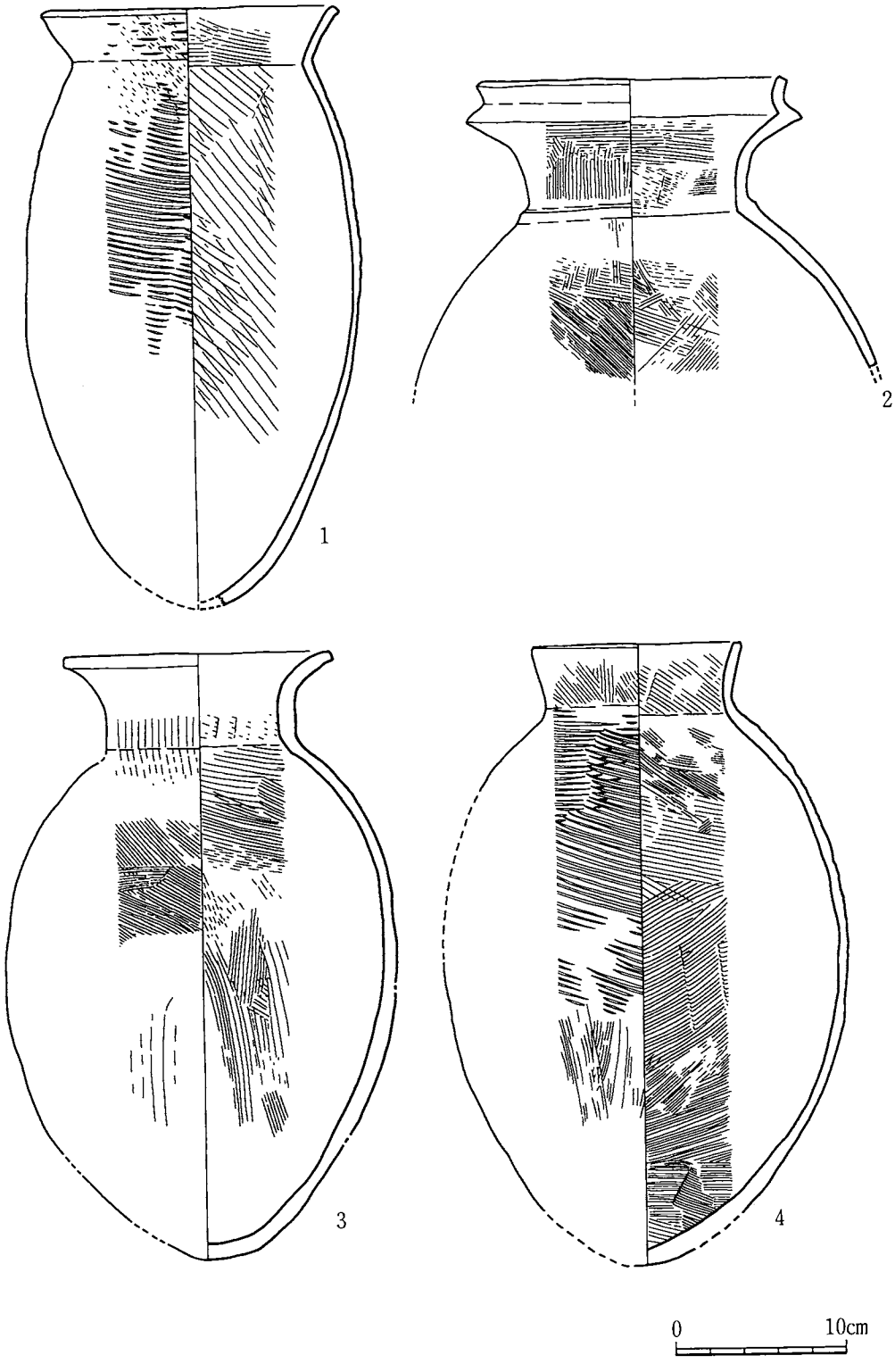
第46図　10号-B溝跡4層出土土器実測図



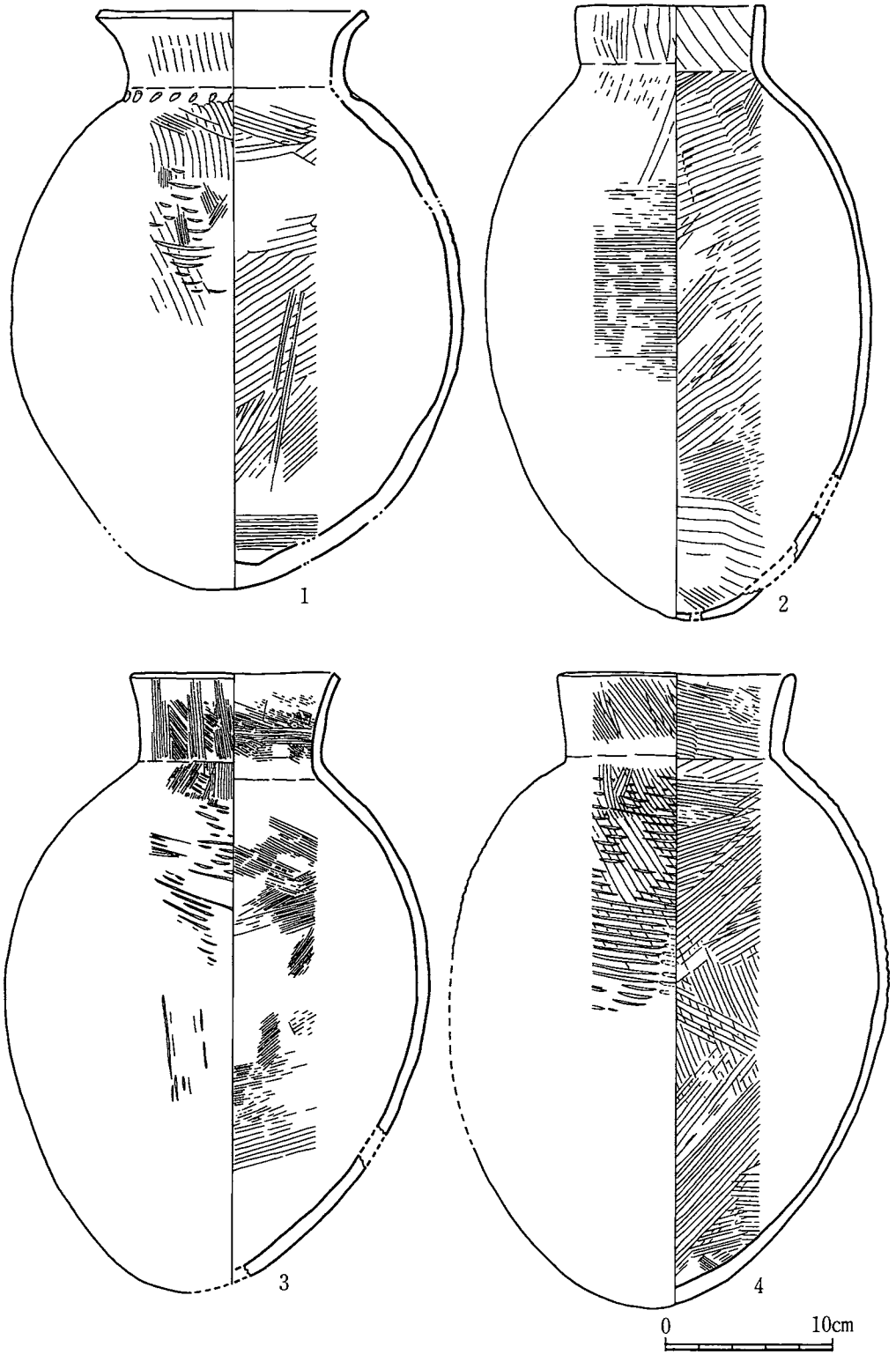
第47図　10号-B溝跡4層出土土器実測図



第48図　10号-B溝跡4層出土土器実測図



第49図　10号-B溝跡4層出土土器実測図



第50図　10号-B溝跡4層出土土器実測図

には縦方向の線暗文が施される。第52図７～第53図４は、胴部が丸くなり、頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部が外反しながらのびる。口縁端部は角張り、外器面側が段になる。第53図２・３は縦長で、第53図４は横長で、胴部外器面上半部にはタタキ目が残る。

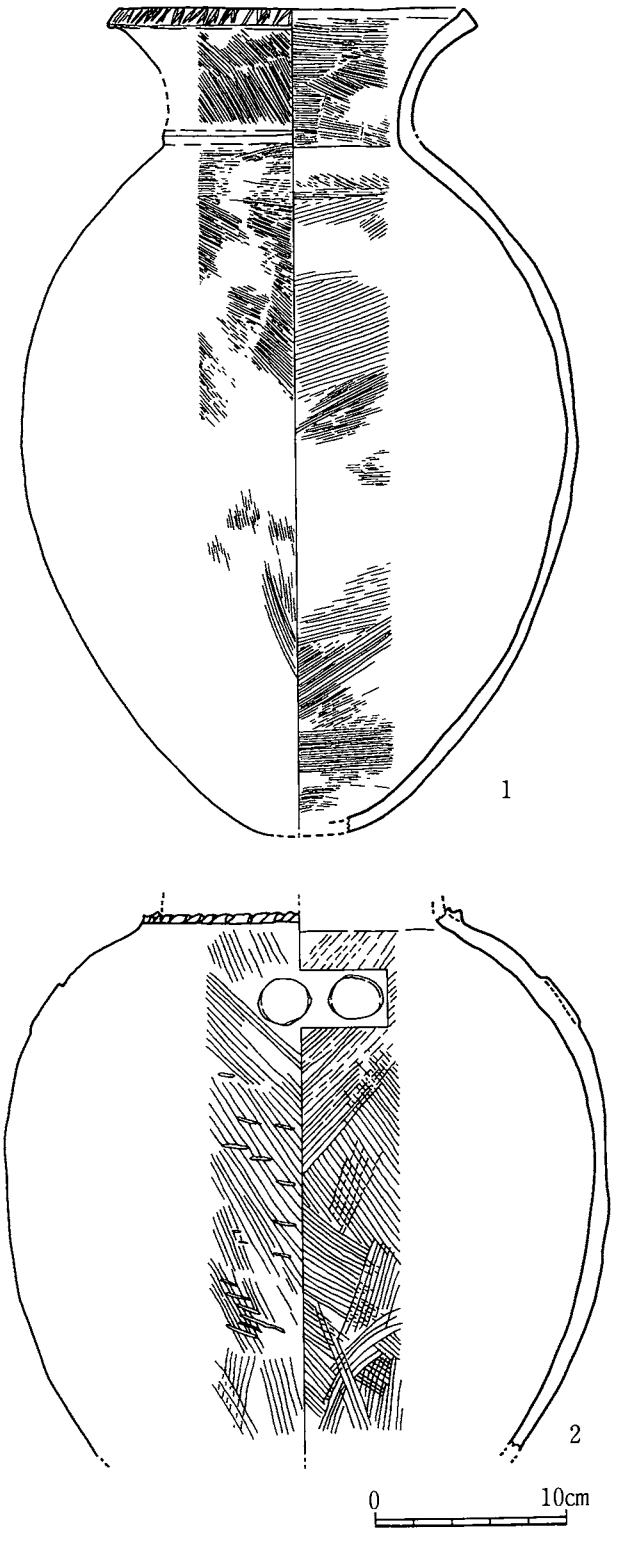
鉢（第53図５～８・第54図・第55図１～３）

第53図５～８は、丸い胴部が頸部で「く」の字形に折れ、外に開きながらのびる口縁部に続く。６は頸部の屈曲が弱い。５の底部は丸底で、他は丸底になると思われる。８の口縁部外器面には籾圧痕がある。

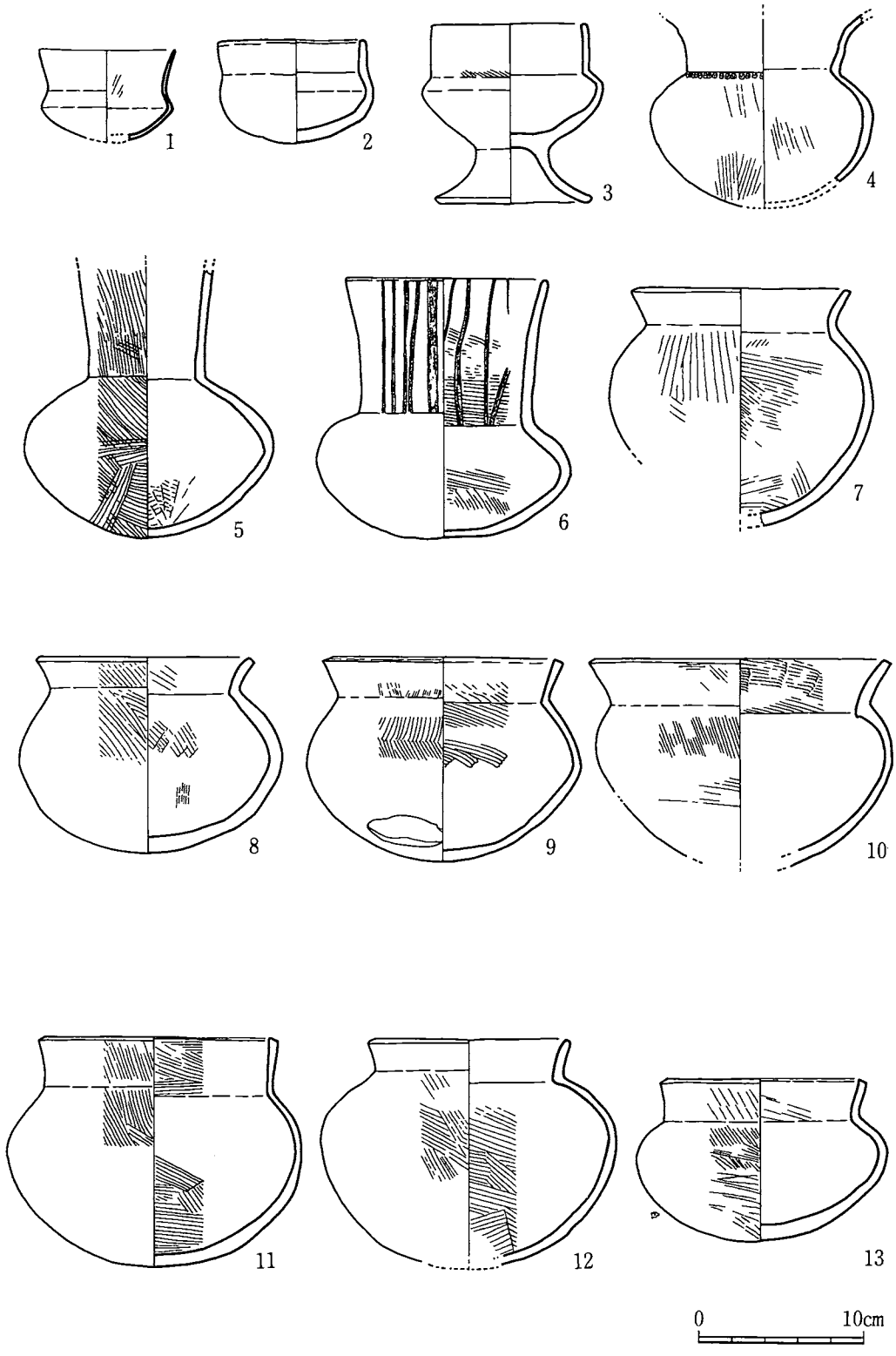
第54図１～３・５・７は、丸い胴部がそのままのびて口縁部に至る。口縁端部は１～３が丸くなり、５・７が角張る。底部は３・５・７が丸底、２が平底であり、１が丸底になると思われる。２は外器面の底部寄りの部分にタタキ目が残る。５の内器面には縦方向の線暗文が施される。

第54図４・６は胴部が丸く、口縁部が内傾し、口縁端部は角張る。底部は丸底である。４の外器面には部分的にタタキ目が残る。

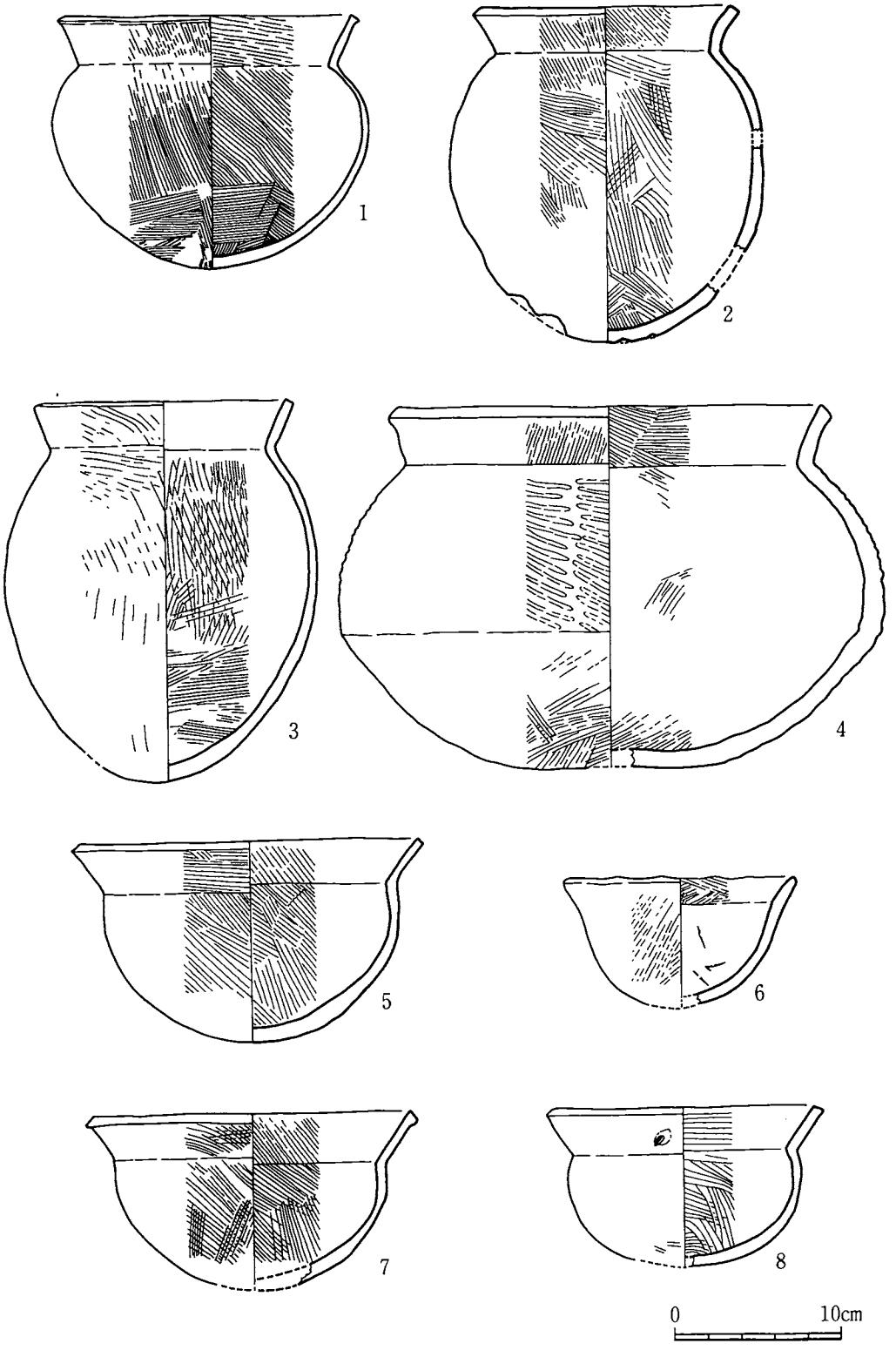
第54図９は胴部が直線的にのび、そのまま口縁部に至り、全体が三角形状を呈する。口縁端部は角張り、外器面側が段になる。底部は丸底で、胴部内器面には籾圧痕がある。



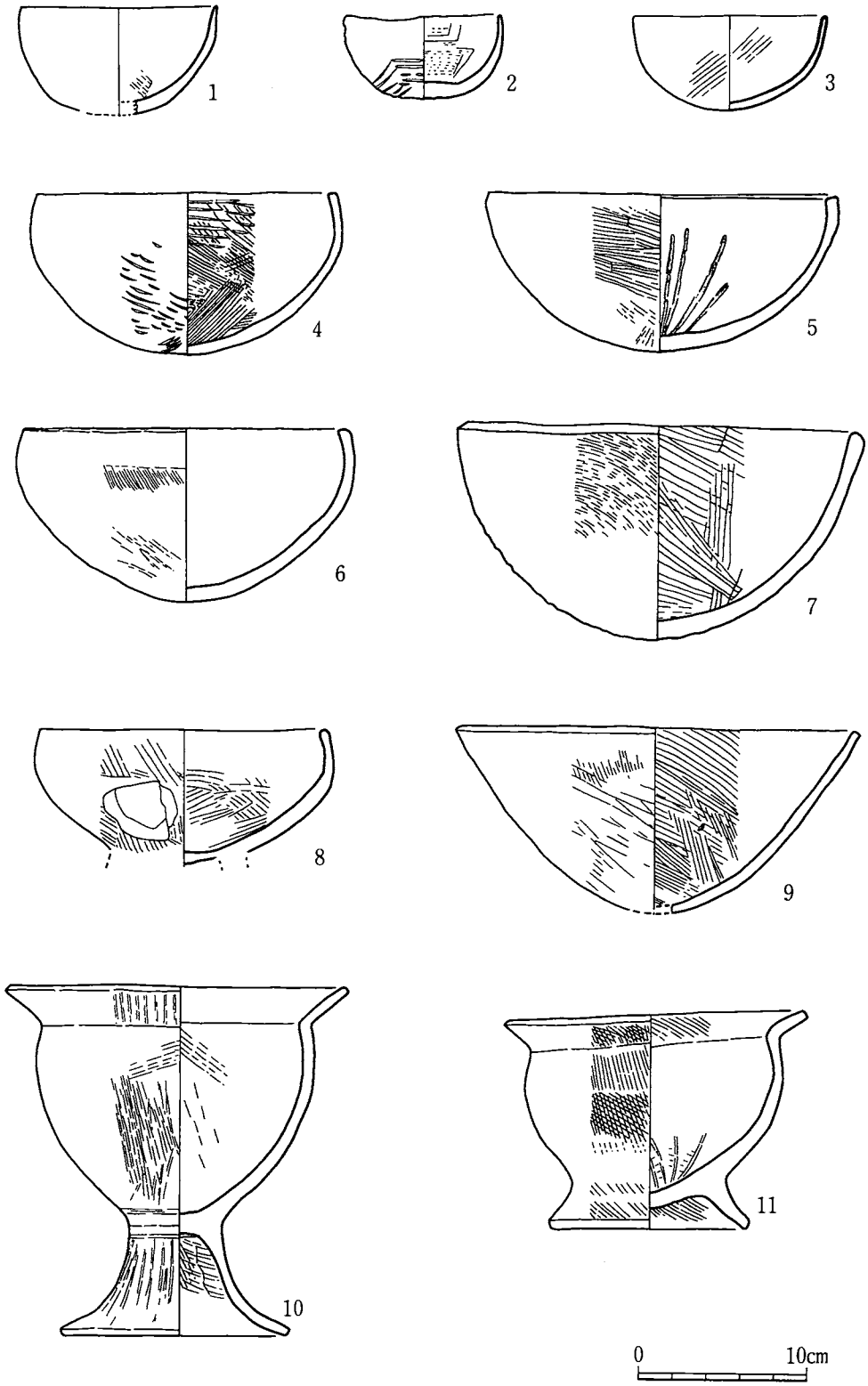
第51図　10号-Ｂ溝跡４層出土土器実測図



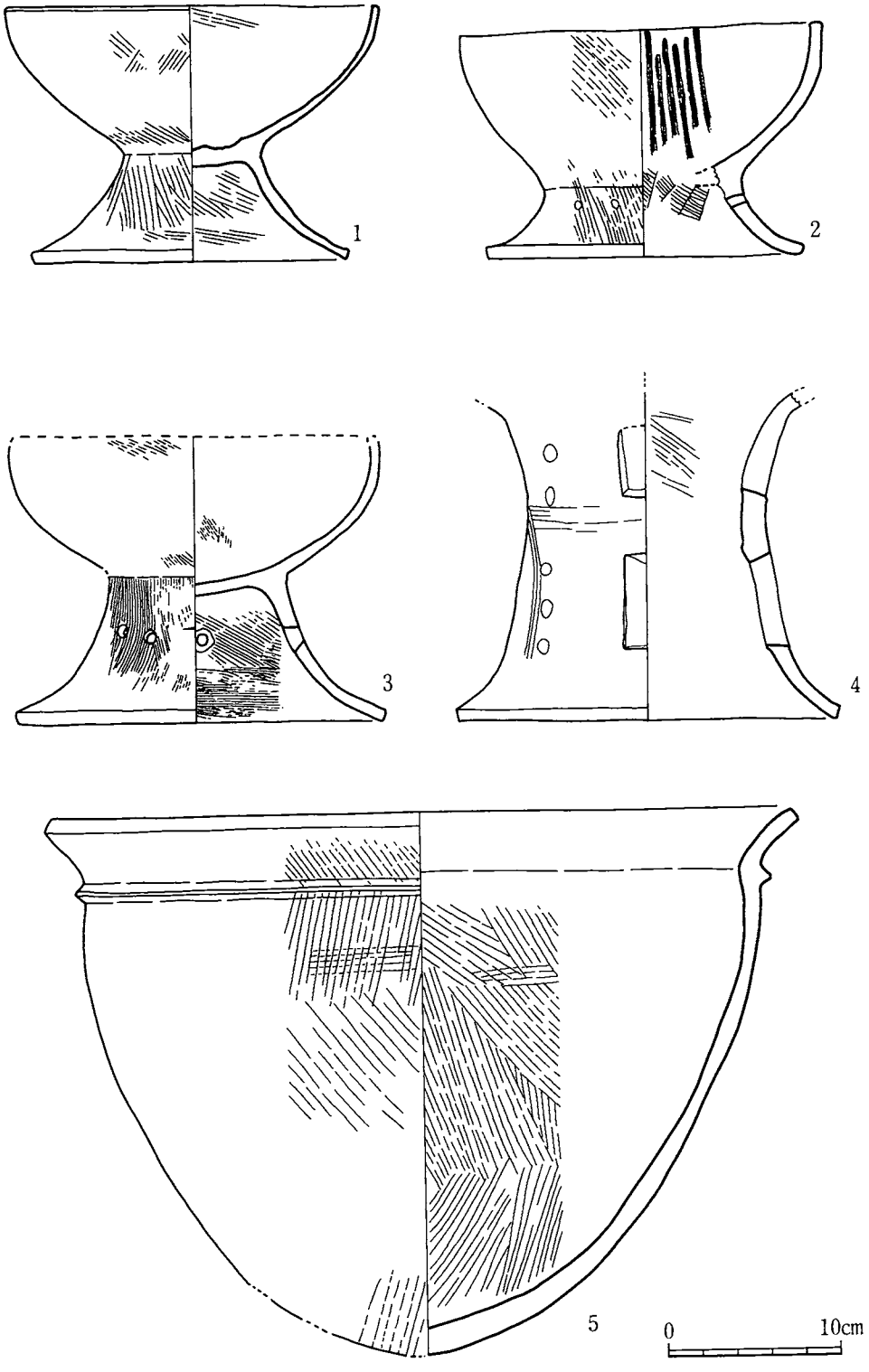
第52図　10号-B溝跡4層出土土器実測図



第53図　10号-B溝跡4層出土土器実測図



第54図　10号-B溝跡4層出土土器実測図

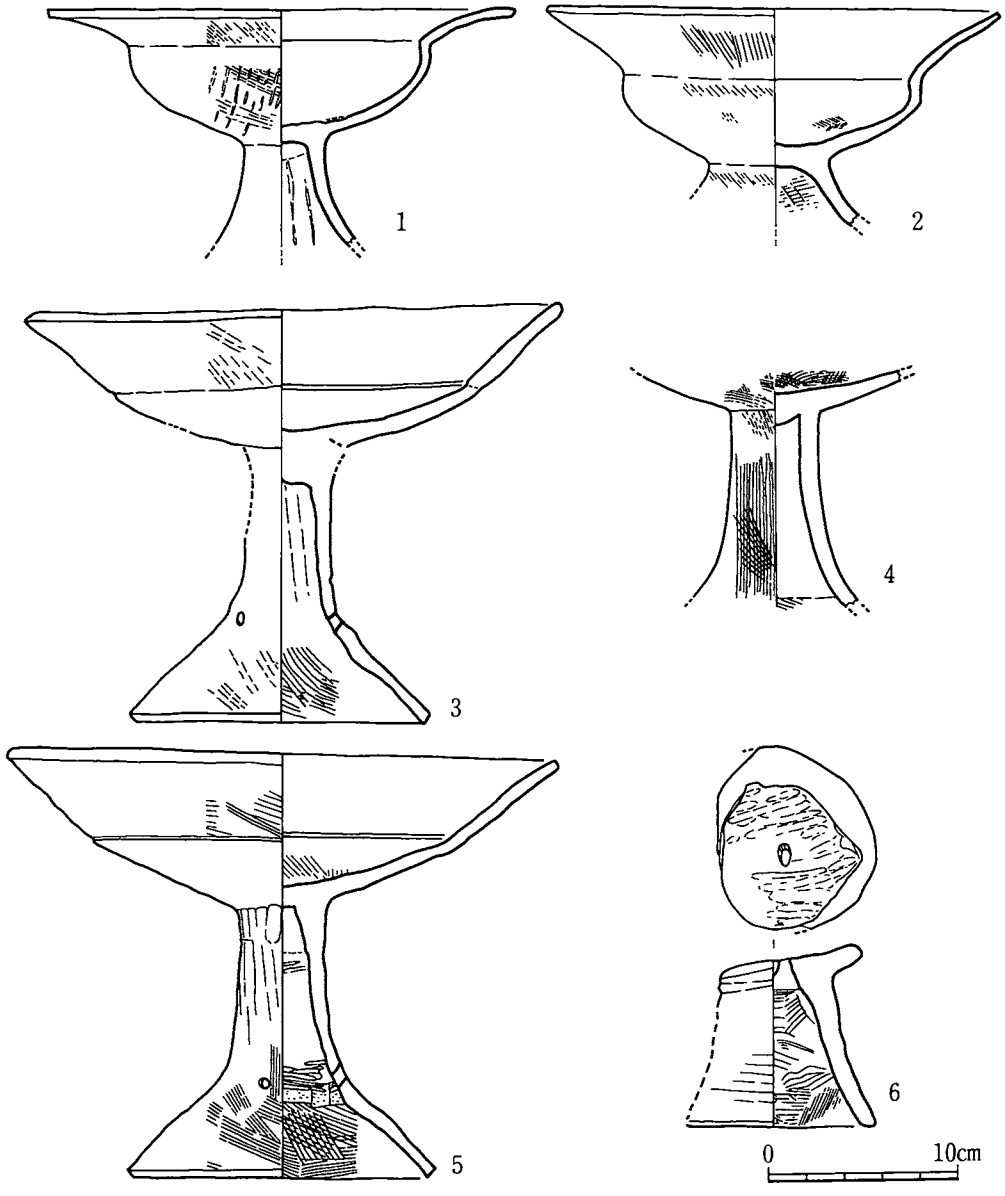


第55図　10号-B溝跡4層出土土器実測図

第54図８～11・第55図１～３は脚付の鉢である。第54図８は脚部を欠いており、鉢部は胴部が丸く、口縁部が内傾する。

第54図10・11は丸い胴部が頸部で「く」の字形に折れ、外に開きながらのびる口縁部に続く。脚部は10が長く、大きく外に開いており、11が短い「八」の字形を呈する。脚端部は角張り、外器面側が段になる。11は器高が左右で異なる。

第55図１～３は丸い胴部がそのままのびて口縁部に至る。１・２の端部は角張り、２の外器面側が段になる。脚部は大きく外に開いており、端部は角張り外器面側が段になる。２・３の



第56図　10号-Ｂ溝跡４層出土土器実測図

脚上部には二個の穴を一組みにした穿孔が三箇所ある。２の鉢部内器面には赤色顔料が塗布され、縦方向の線暗文が施される。

大型鉢（第55図５）

５は頸部が「く」の字形に折れ、口縁部が外反しながら短く立ち上がる。胴部は丸くなり、底部は丸底である。頸部には断面形が三角形を呈する貼り付け凸帯が巡る。

器台（第55図４）

４は体部中央より上下両端部に向けて、「八」の字形に開き、端部付近でさらに外反する。上端部付近は欠損して不明であるが、下端部は角張り、外器面側が段になる。体部には略長方形の上下二段の透かしが四箇所あると思われる。その透かしに挟まれた箇所には、８～９条の横位の沈線文とこれに直交する状態の縦位の沈線文が施される。横位の沈線文の下方には三個の穴が、上方には二個の穴が縦に並んで穿孔され、上方の穴は三個になると思われる。

高坏（第56図１～５）

１・２は胴部が丸く、頸部が「く」の字形に折れ、口縁部が大きく外反しながらのびる。口縁端部は角張り、外器面側が段になる。１の方が口縁部の開きが大きく、屈曲部が上位である。脚部は「八」の字形を呈している。１の坏部外器面には部分的にタタキ目が残る。

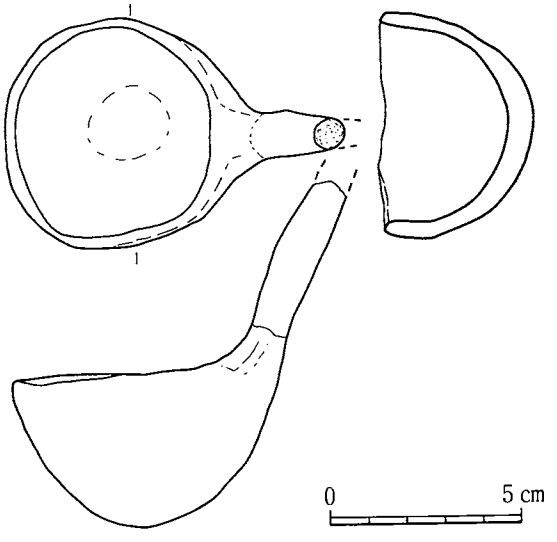
３・５は坏底部がほぼ直線的にのび、中程で屈曲して大きく外にひろがる口縁部に続く。中程の屈曲部では、内外器面が段になる。口縁端部は角張り、外器面側が段になる。脚部は坏底部より僅かに外に開きながらのび、裾部が大きく外にひらき「八」の字形を呈する。裾端部は角張り、外器面側が段になる。裾上部には穿孔がある。穿孔箇所は５が三箇所あり、３が現存部分で二箇所であり、完形では三箇所になると思われる。　４は坏底部と脚部が残存している。脚部は外に開きながらのびている。

支脚（第56図６）

上端部の平面形は、略円形の一部が突出しており、その部分が三角形を呈している。略円形の中心には穴が穿たれている。器高は突出部が最も高く、その反対側が最も低い。脚部は上端部より「八」の字形に開いてのびており、端部は角張る。上端外器面にはタタキ目が残る。

土製品（第57図）

第57図は土製匙であり、柄の上方が欠損している。体部の平面形は略円形で、断面形は半円形状を呈しており、深い。



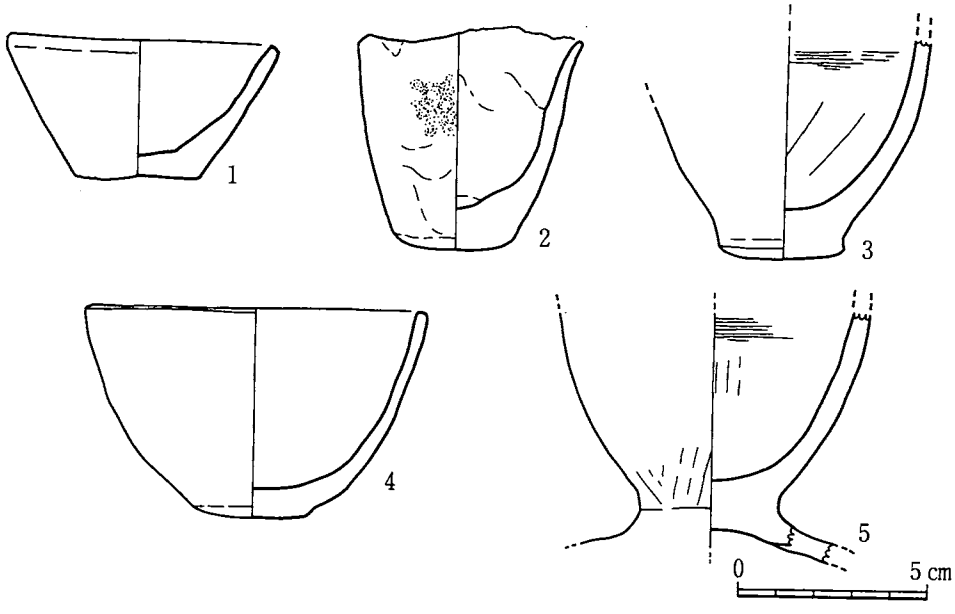
第57図　10号-Ｂ溝跡４層出土土製品実測図

ミニチュア土器（第58図）

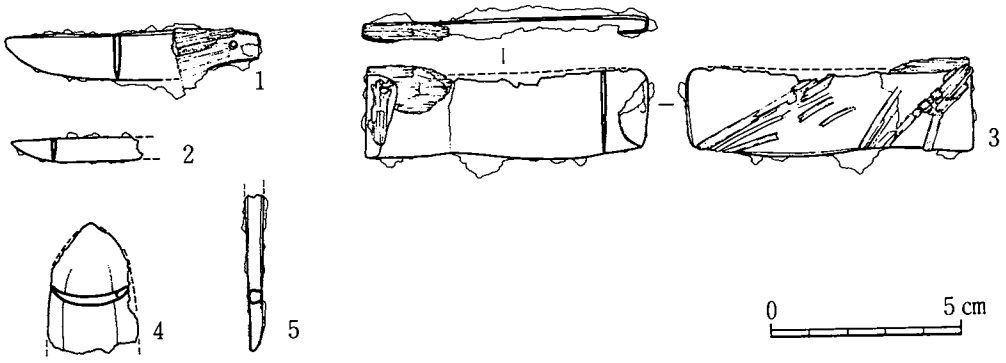
1は10号－B溝跡3層、2～5は10号－B溝跡4層より出土した。1・2・4は鉢形を呈する。1は胴部が直線的に外反しながらのび口縁部まで至る。口縁端部は角張り、外器面が弱い段になる。底部は平底である。2は胴部がやや丸みをもち、口縁部はやや外反しながらのび、波状口縁になる。底部は平底で、胴部外器面には先端が丸い工具での弱い刺突がある。4は胴部が丸くなりながら口縁部までのびる。口縁端部は角張り、外器面側が段になる。底部は胴部との境に段があり、平底になる。3は胴部と底部が残存している。胴部は丸くなり、底部は平底で、胴部との境が段になる。5は脚付鉢形を呈する。胴部は丸くなってのび、脚は鉢底部より大きく外に広がっている。

10号－A溝跡・10号－B溝跡出土鉄製品（第59図）

1は10号－A溝跡②層、2～5は10号－B溝跡③層より出土した。1・2は刀子である。1は背部が平らで、直線的にのびている。茎部には目釘穴があり、木質が付着している。関は錆のために不明である。2は先端部だけが残存している。背部は平らで、直線的にのびている。3は摘鎌である。左右両端を折り曲げており、左端付近には木質が残存している。その面の反対側には繊維質（？）が付着している。上端部は部分的に欠損しており、刃部は僅かに湾曲している。4はヤリガンナの先端部である。左右両端が内側に反っており、端部が尖る。5は鏃の茎部であろう。断面形が方形を呈している。



第58図　10号-B溝跡3層・4層出土土器実測図



第59図　10号－A溝跡・10号－B溝跡出土鉄器実測図

10号溝跡・10号－B溝跡出土石器（第60図～第66図）

磨石類（第60図・第61図）

第60図5は10号溝跡③層、他は10号－B溝跡③層・④層より出土した。磨石類は、略円形・楕円形の平面形を呈し、磨痕があるものと磨痕・敲打痕があるものとがある。

第60図4は片面に磨痕がある。第60図1・3は両面に磨痕がある。第60図2・第61図2には、磨痕・敲打痕が片面にある。第61図2は縁辺部にも磨痕があり、全体に火を受けた痕跡が確認できる。第60図5は磨痕が表裏面、敲打痕が表面にある。器面全体に火を受けた痕跡が認められる。第60図6・第61図1は、磨痕・敲打痕が表裏面にあり、第60図6は縁辺部にも敲打痕がある。第61図3には、表裏面・右側面に磨痕、裏面・縁辺部に敲打痕がある。第61図4は表裏面に磨痕、縁辺部に敲打痕がある。

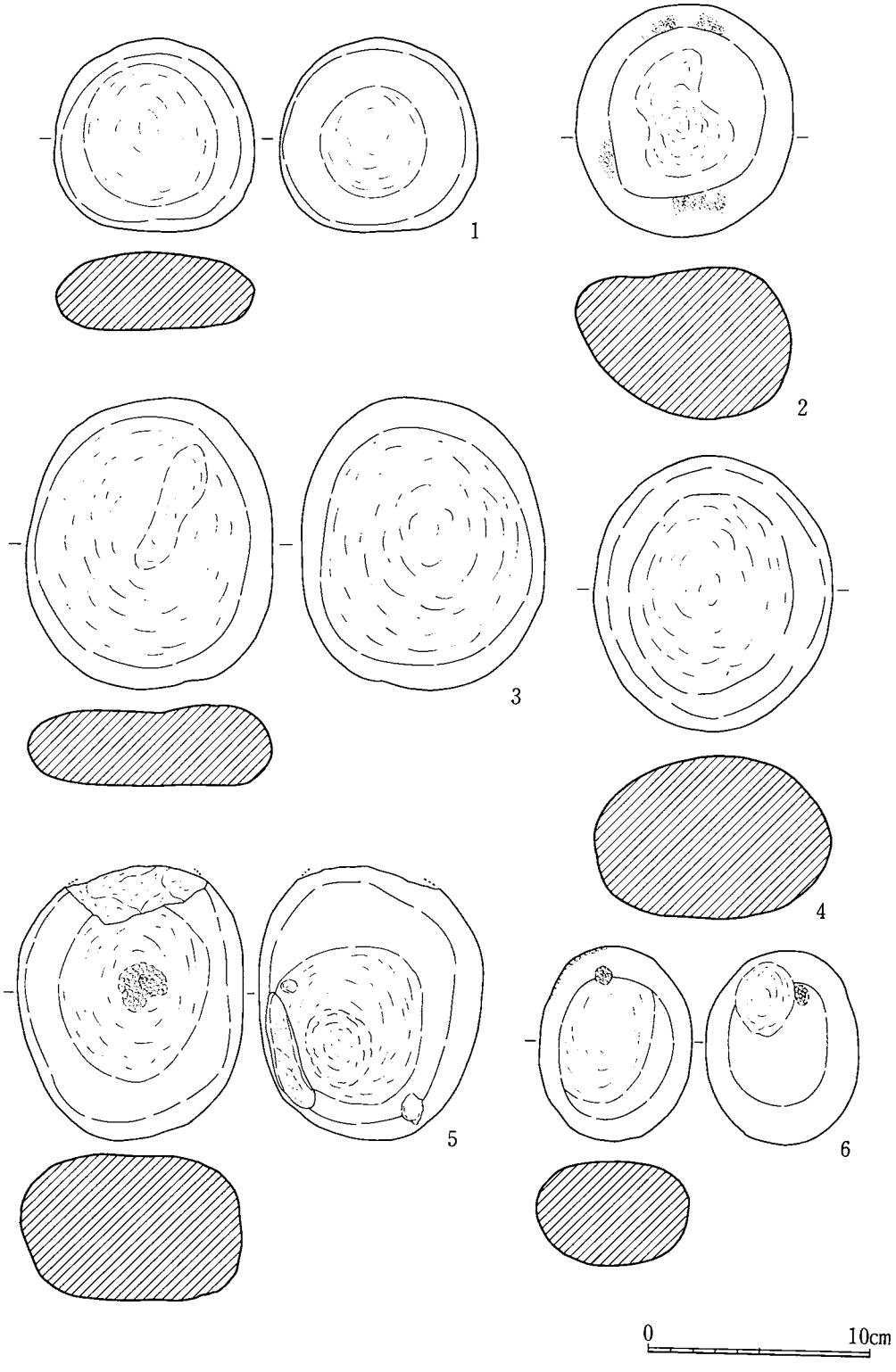
磨製石斧（第62図1）

1は10号－B溝跡③層より出土した両刃の磨製石斧である。基部から体部の一部が欠損している。表裏面・側面には表面が剝がれた跡がある。刃部の中央には刃こぼれが確認できる。刃部付近には、縦・斜め方向の擦痕が観察できる。

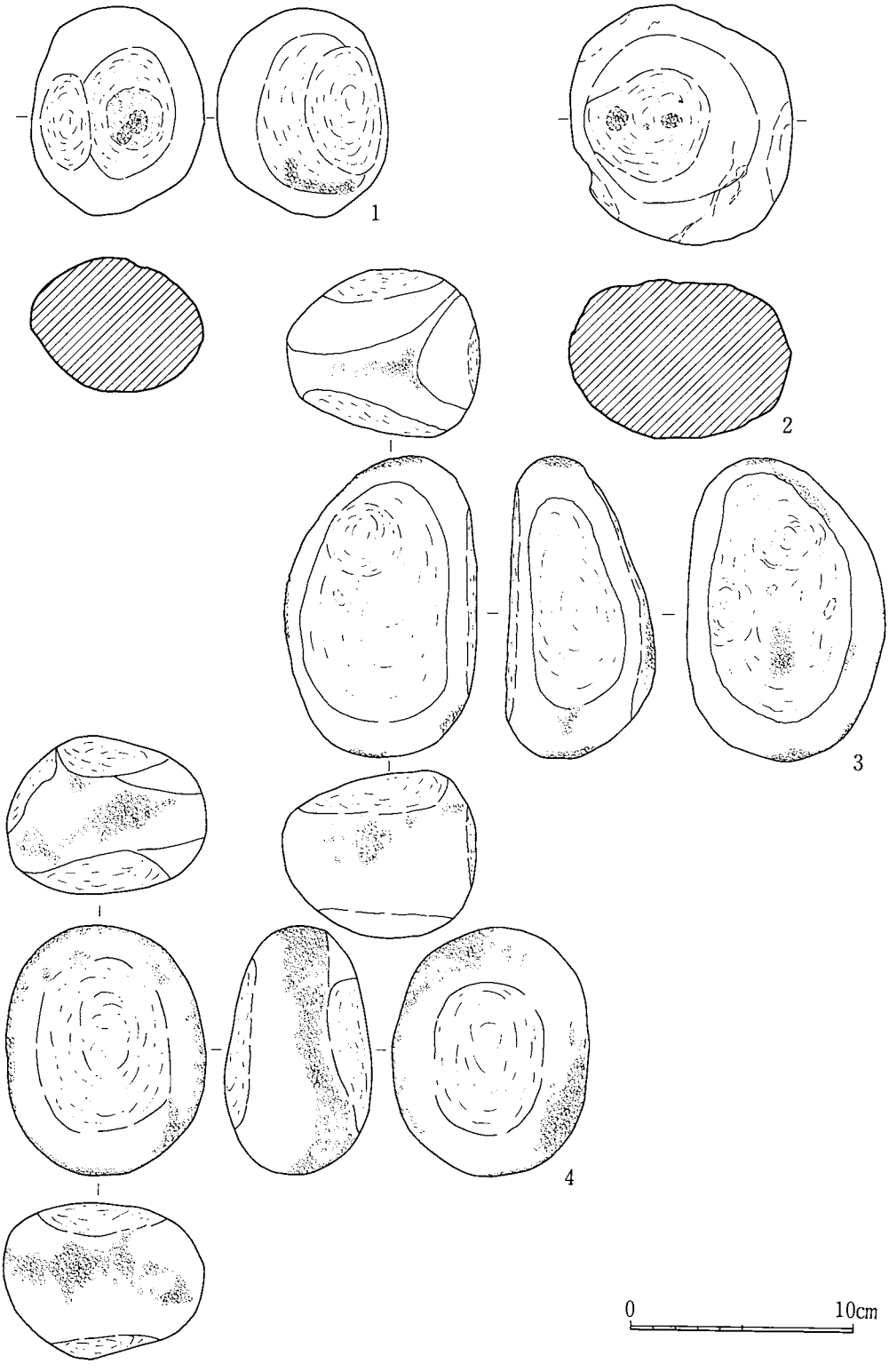
石皿・台石（第62図2～5・第63図～第66図）

石皿・台石は10号溝跡③層・10号－B溝跡③層より出土した。これらの中で平面形が分かるものは、長方形・略長方形・略方形・略楕円形を呈している。石皿・台石には磨痕があるものと磨痕・敲打痕があるものとがある。

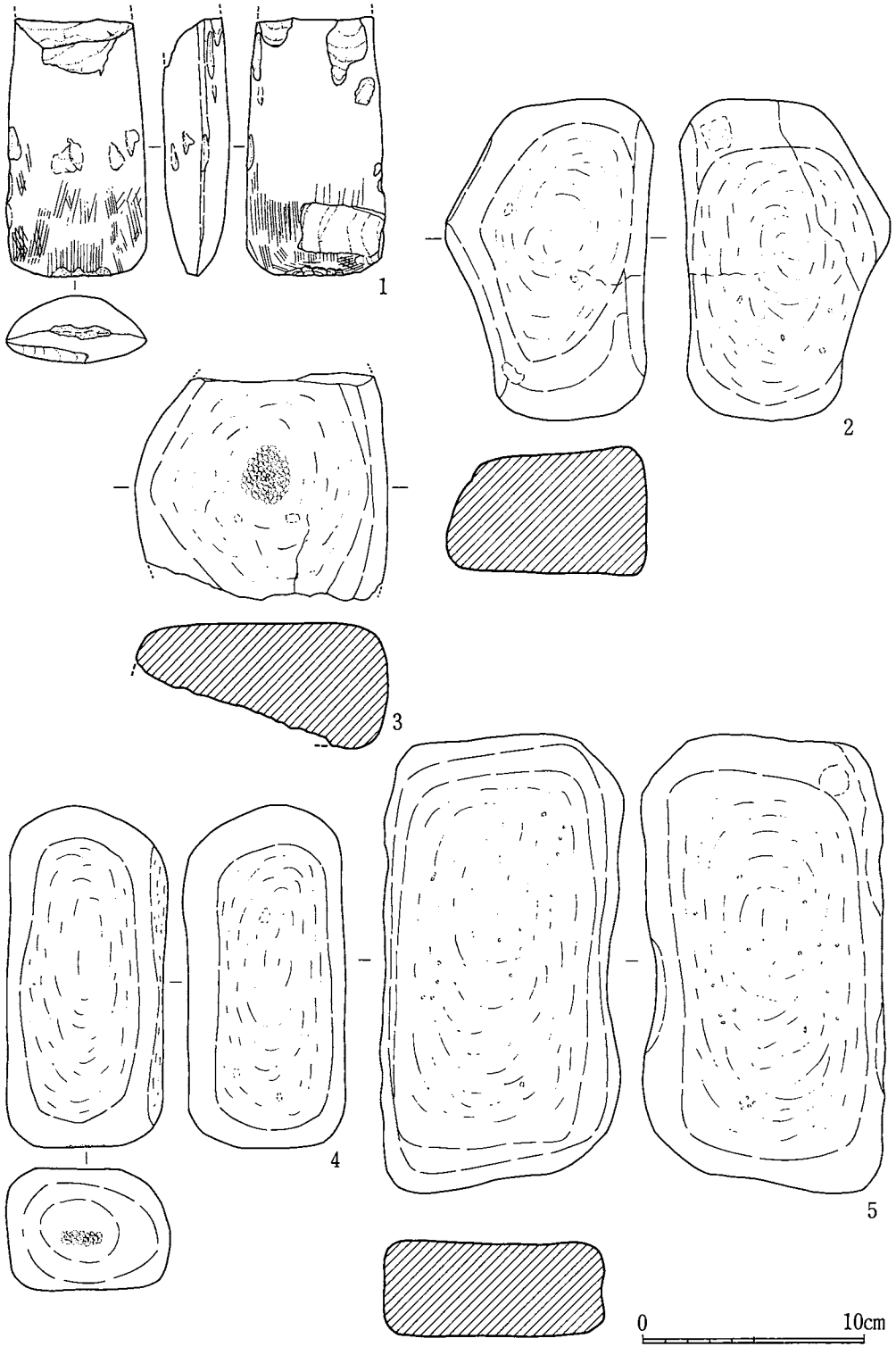
第64図2は片面に磨痕があり、部分的に縁辺部にも磨痕がある。第62図2～5、第63図1・～3、第64図1・3、第65図1・2は、表裏両面に磨痕がある。これらの中で、第62図3・第63図2・第65図1には片面に、第62図4には下端部に、第64図3・第65図2には表裏両面に敲打痕がある。第63図2・第64図3の敲打痕は弱い。第66図1・2は断面形が三角形を呈し、三面に磨痕がある。1は頂部の一つに敲打痕が観察できる。



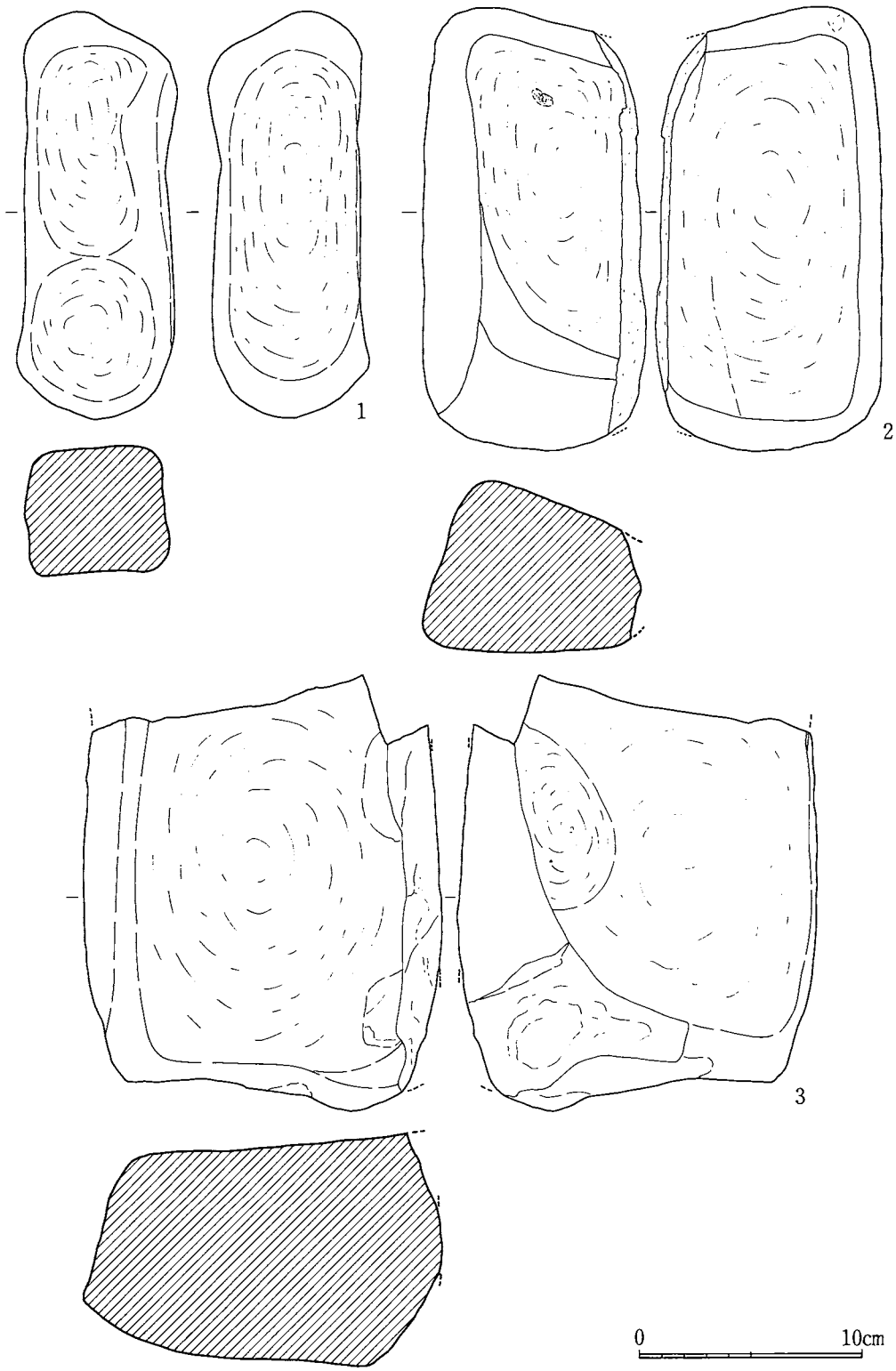
第60図　10号・10号-B溝跡出土石器実測図



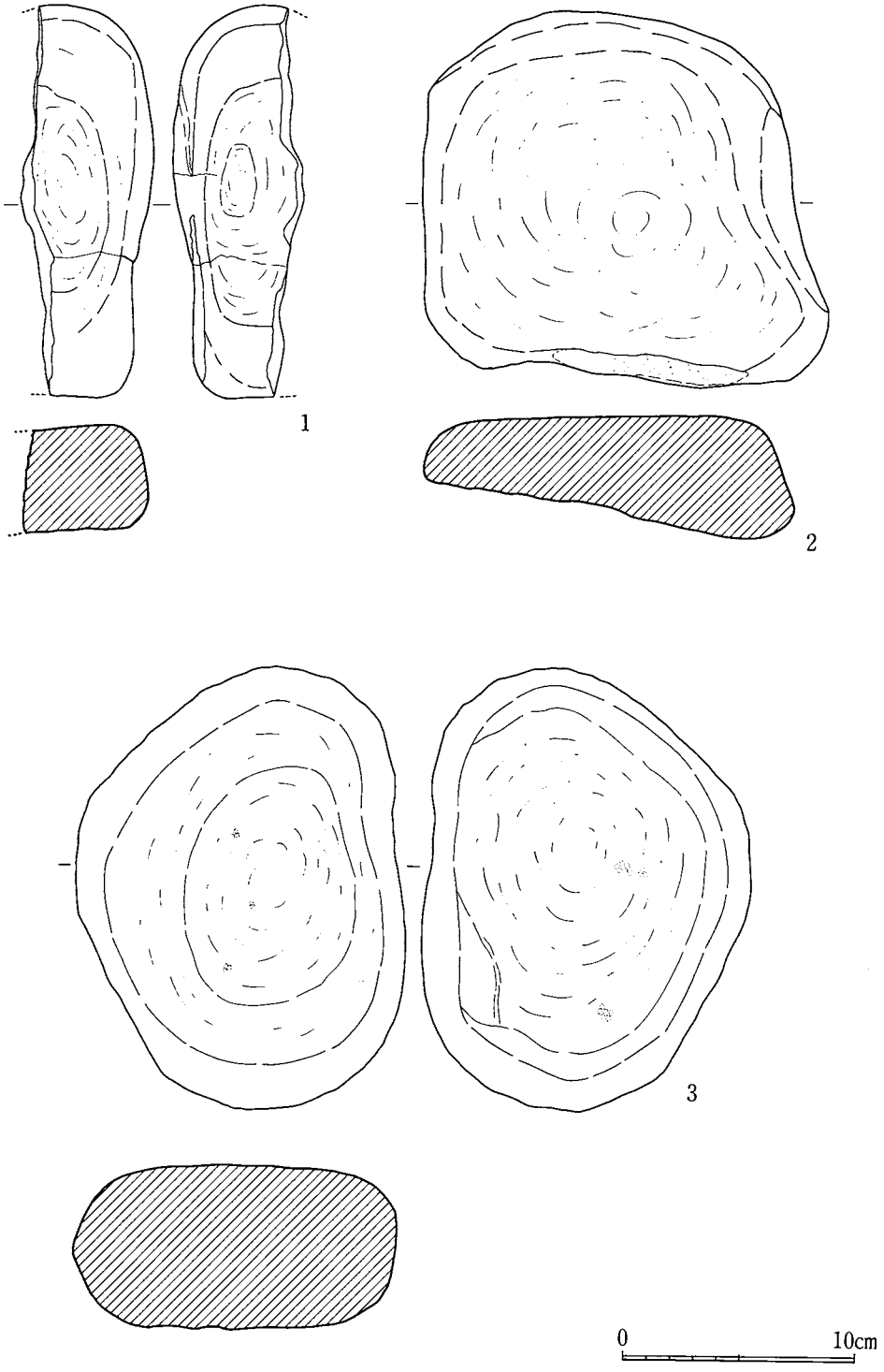
第61図　10号-B溝跡出土石器実測図



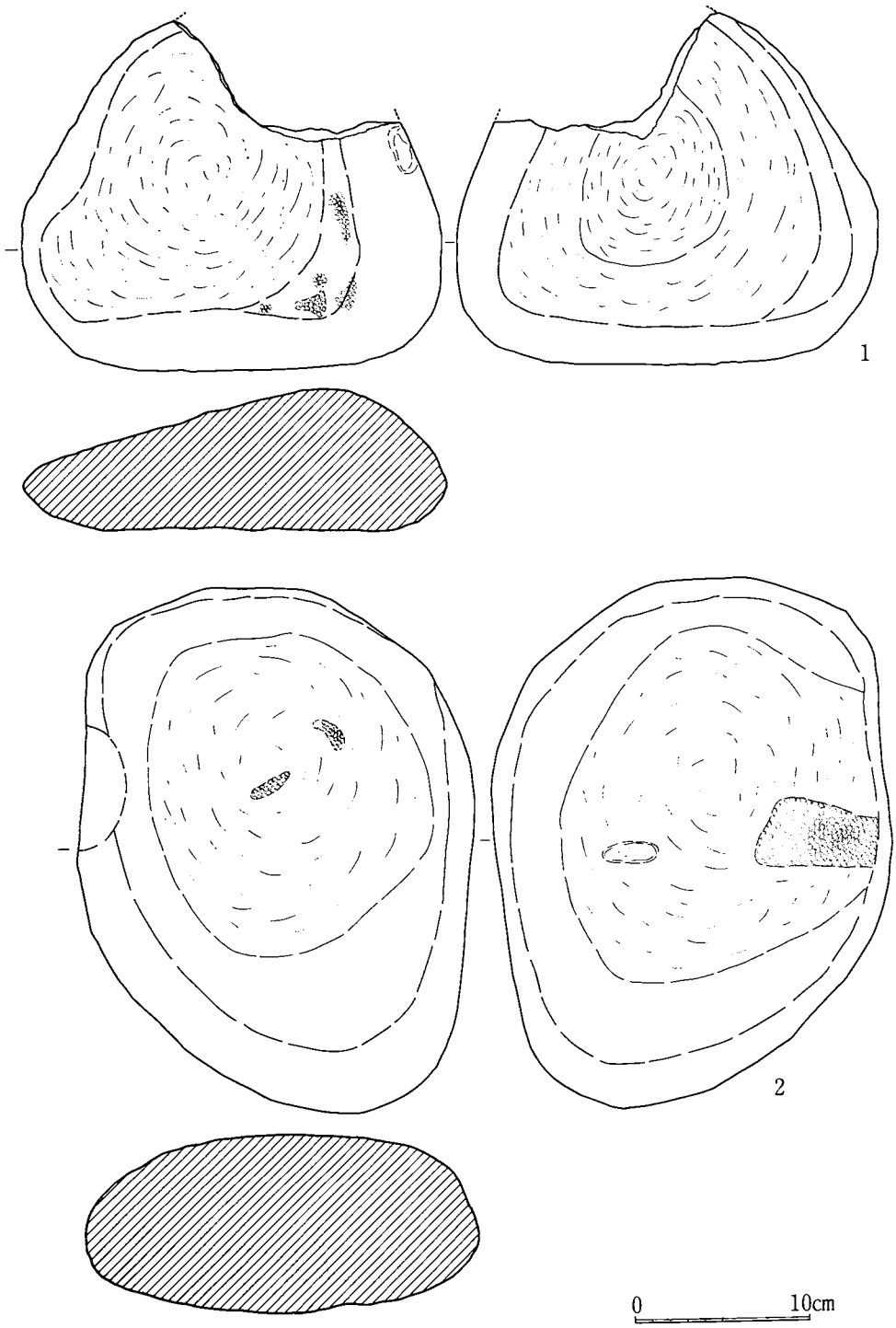
第62図　10号-B溝跡出土石器実測図



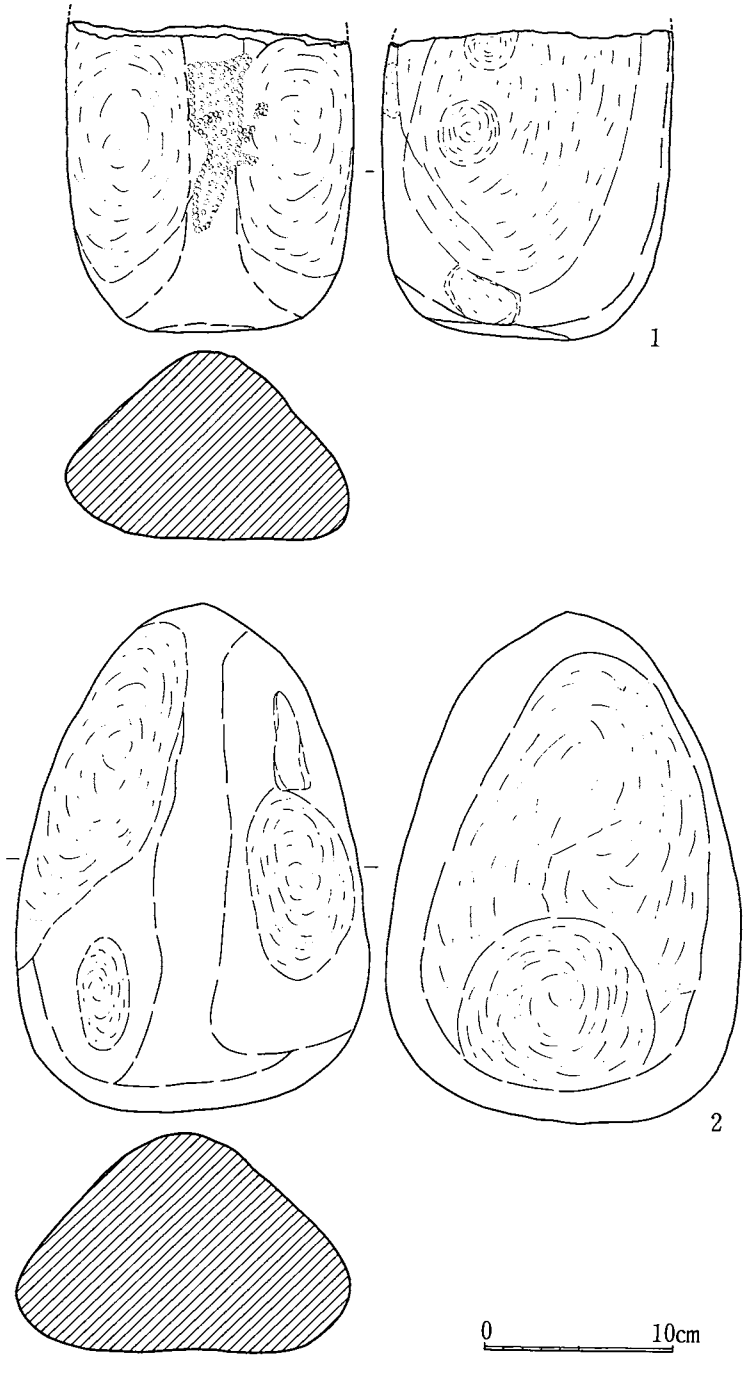
第63図　10号・10号－B溝跡出土石器実測図



第64図　10号－B溝跡出土石器実測図



第65図　10号－B溝跡出土石器実測図

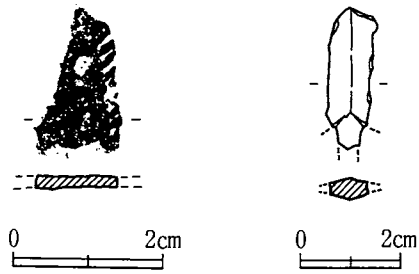


第66図　10号-B溝跡出土石器実測図

青銅器（第67図・第68図）

第67図・第68図10号－A溝跡覆土②層より出土した。第67図は小形仿製鏡片で、櫛歯文が見られる。欠損面に擦れた跡は観察できない。

第68図は銅鏃で、体部の側面、茎の一部が欠損している。体部の中央の表裏面には、縦方向の稜がある。この稜部分が最も厚く、左右端部にいくほど薄くなる。

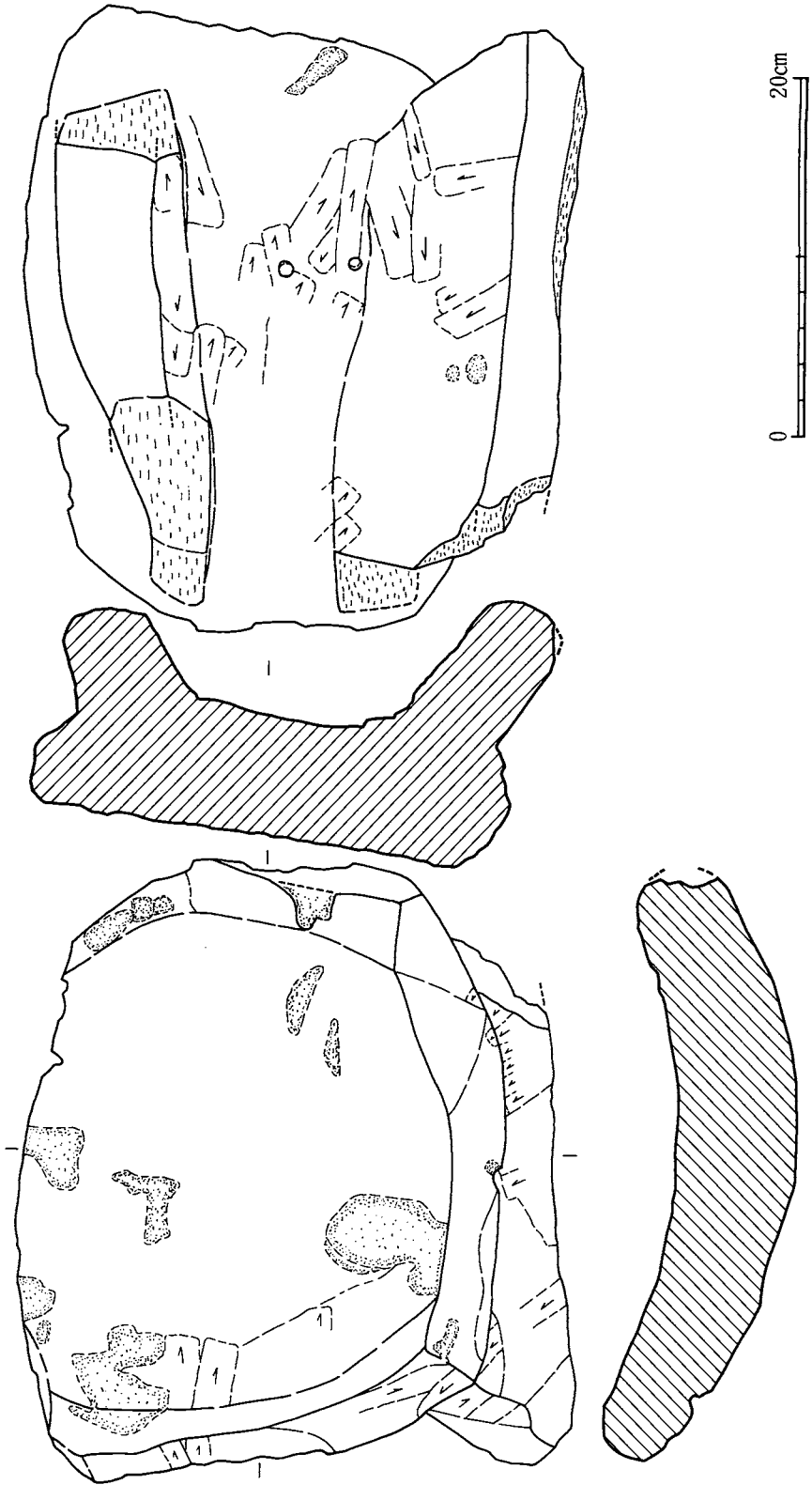


第67図　10号-A
溝跡出土遺物実測図

第68図　10号-A
溝跡出土遺物実測図

石製品（第69図）

第69図は一塊の凝灰岩を加工した腰掛けである。底面には長辺に沿った状態の二つの脚がある。脚は「八」の字形に開いており、片方が短い（脚高約６cm、約８cm）。そのために、腰掛け部の上面が傾く。腰掛け部の平面形は、略長方形を呈する（約33×27cm）。腰掛け部は長辺方向に、反っており、中央部より両短辺側が高くなる。腰掛けの側縁部は、両短辺と長辺の片側が斜めに、残りの長辺がほぼ垂直に加工されている。腰掛けの上面は、両短辺に沿って帯状に面取り加工が施される。裏面の両脚に挟まれた箇所には、二個の穴が穿たれる（径約0.8cm・深さ約1.2cm 、径約0.9cm ・深さ約１cm）。二個の穴は中央より右側面に寄った箇所にある。脚部は一部分を欠いているが、基底部が残る（基底部の長さ約26cm、約28cm）。腰掛けの表面には部分的に浅い窪みがある。腰掛け部・脚部には、部分的にノミ痕が観察できる（幅約1.4～1.8cm ）。ノミ痕の方向には、縦・横・斜めがあるが、脚表面のノミ痕は下端部からの斜め方向である。腰掛け部表面の仕上げは丁寧であるが、裏面は荒い。



第69図　石製腰掛け実測図

4．　古墳時代の調査

(1)遺構について

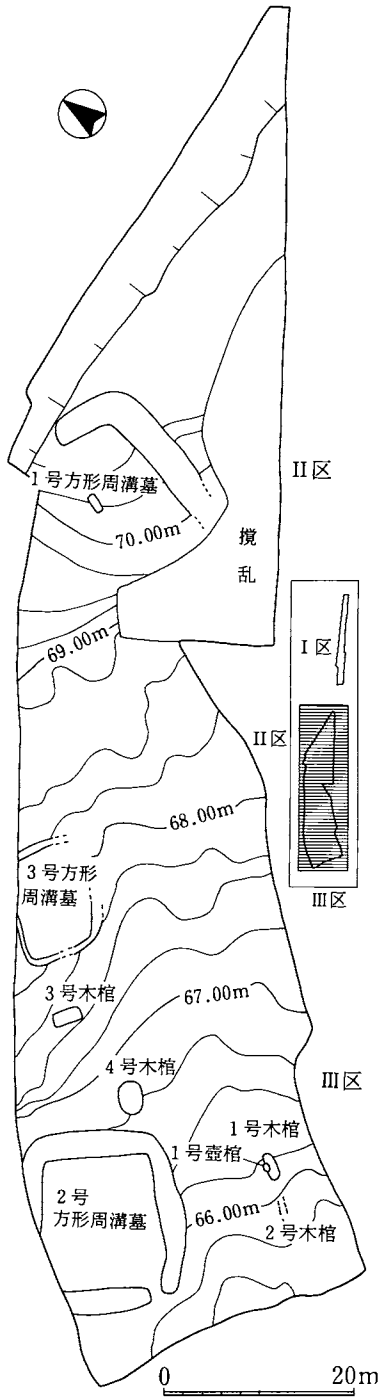
遺構分布（第70図）

検出した遺構は、1号方形周溝墓～3号方形周溝墓・1号木棺～4号木棺・1号壺棺である。これらの遺構はII区からIII区にかけての緩傾斜地に分布している。

II区の西側端部寄りの所に1号方形周溝墓があり、III区の北西端部に2号方形周溝墓がある。1号方形周溝墓と2号方形周溝墓とのほぼ中間地点に、3号方形周溝墓が位置する。2号方形周溝墓と3号方形周溝墓に挟まれた状態で、3号木棺・4号木棺が分布する。2号方形周溝墓の南側に1号木棺・2号木棺・1号壺棺がある。

1号方形周溝墓（第71図～第73図）

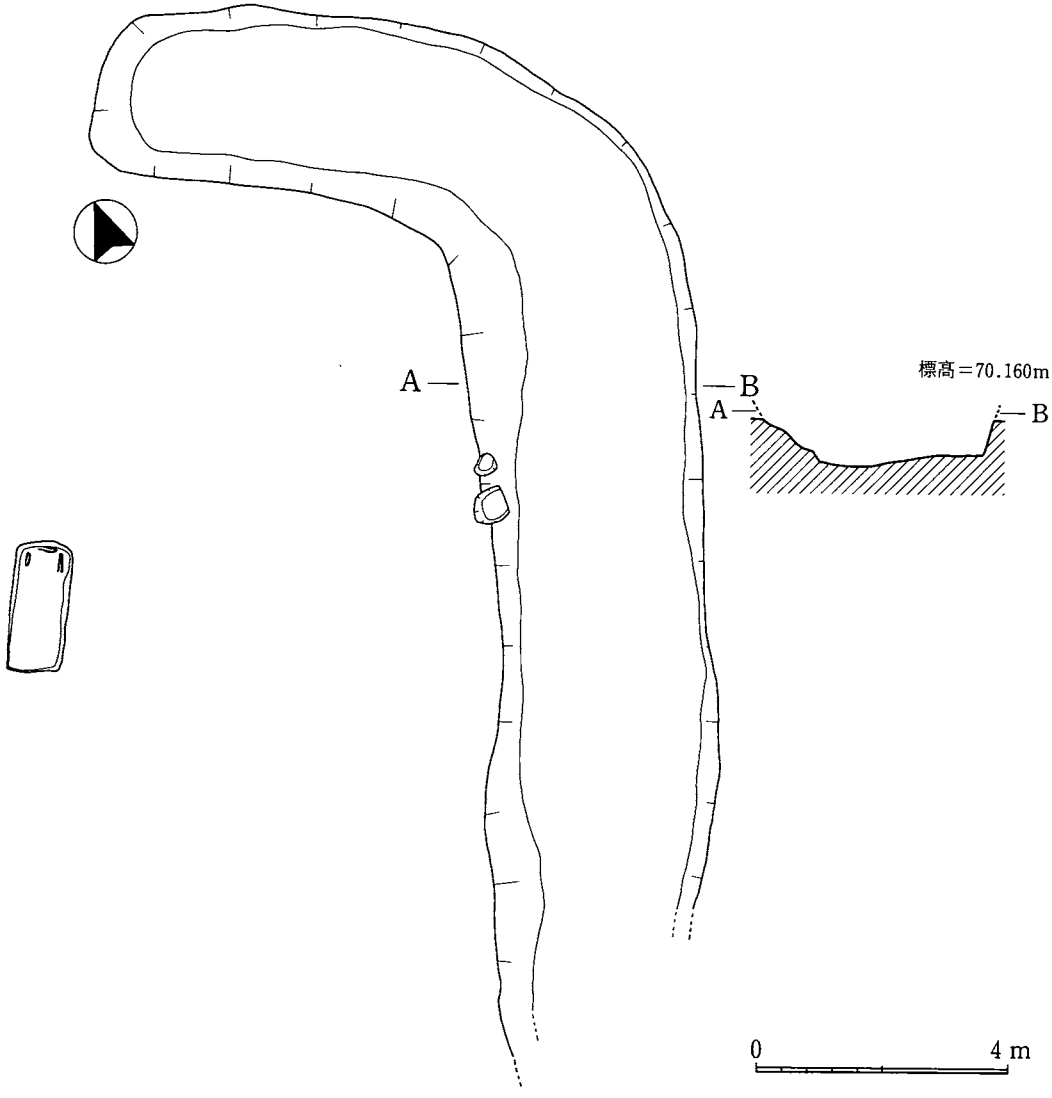
1号方形周溝墓で検出できたのは、周溝の約1／3と主体部である。確認できた周溝は東側部分で、それ以外の周溝は既に削平を受けている。検出した周溝の平面形はL字形を呈している。周溝はほぼ南北方向にのび、ほぼ直角に西側方向に屈曲し、屈曲部の先端は閉じている。その閉じている箇所の西側部分が陸橋部と考えられる。陸橋部より約7m南側にいった箇所に主体部がある。周溝の屈曲部の長さは、外側が約8.5m、内側が約5mで、幅は約2.5～3mある。南北方向にのびる周溝の長さは、外側が約11m、内側が約12mで、幅は約3.2～4mである。周溝の断面形は略台形を呈し、内側の壁の傾斜は外側に比べると緩やかである。周溝の深さは約20～70cmあり、南側ほど削平を受けており、残りが悪い。主体部の中心から東側の周溝外側まで約11mある。主体部が中央部にあると仮定して、この数値より復原すると、東西方向の規模は約22mになる。周溝の壁に掘り込まれた2基のピットは、平安時代のもので、方形周溝墓には伴わない（第71図）。



第70図　遺構配置図

周溝内の覆土は①層～⑩層に分けることができた。①層は暗褐色土。②層は黒褐色土。③層は茶褐色土。④層は褐色土で、黄褐色の粒子を多量に含む。⑤層は暗黄褐色土で、Ⅳ層に類似する。⑥層は明褐色土で、径1mm～3mmの砂粒を多量に含む。⑦は灰黒褐色土で、径1mm～3mmの砂粒を少量に含む。⑧層は明黄褐色土で、径1mm～10mmの砂粒を多量に含む。⑨層は黒褐色土で、黄褐色土の粒子を少量含む。⑩層は黄褐色土で、Ⅳ層に類似する(第72図)。周溝内の⑦層より土師器片が出土した。

主体部は残りが悪く、検出できたのは床面付近である。残存部より考えると、主体部は組み合わせの木棺と思われる。主体部はⅣ層を掘り込んでおり、平面形が略長方形、断面形が皿



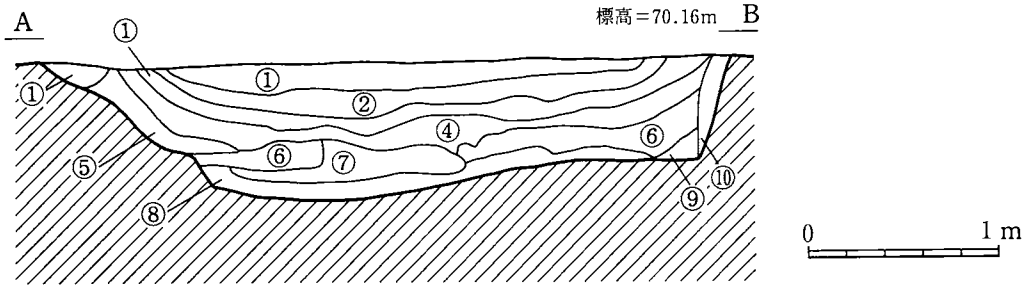
第71図　1号方形周溝墓実測図

状を呈する（約200×80cm、深さ約5～14cm）。掘り込みの床面が残っているのは、南北両端である。その北端部には、床面より掘り込んだ小溝がある。この小溝は短辺側と長辺側に分かれており、西側の長辺側の小溝はさらに二つに分かれている。掘り込み内の覆土は①層・②層に分けることができた。①層は茶褐色土で、褐色の粒子を少量含む。②層は小溝部分の覆土で、しまりがないフカフカした黒褐色土である。②層は木棺の痕跡と考えられる（第73図）。

2号方形周溝墓（第74図・第75図）

2号方形周溝墓で検出できたのは周溝部分だけである。主体部は、既に削平されており検出できなかった。周溝の北側一部分は調査区外になる。周溝の幅は約180～260cmあり、周溝外側の東西方向の長さは約19mある。周溝外側の南北方向の長さは、検出部の計測可能な箇所で約15mある。周溝が廻る平面形は、東西方向に長い長方形を呈する。周溝の断面形は略台形を呈し、外側に比べて内側の傾斜が緩やかである。2号方形周溝墓の陸橋部は南西隅にあり、1号方形周溝墓陸橋部の位置と異なる。東側の周溝床面の北側寄りの箇所に約10cmの段差があり、南側寄りの箇所には平面形が長方形で、断面形が皿状を呈する掘り込みがある。これは覆土③層（第75図断面図A－B）より掘り込まれているが、南端部が確認できなかった（検出部約140×70cm、深さ約20cm）。また、南側周溝の東側寄りの部分にも約20cmの段差がある。この段差がある箇所には、赤色顔料が径約30cmの範囲で分布していた。陸橋部北側の周溝内で、陸橋部寄りの箇所の床面には、土師器の壺形土器が据えられていた。その他の土師器は覆土より出土した（第74図）。

周溝の覆土は次の三地点で確認した。最も多く分層できたのが断面図E－F地点で、①層から⑭層まである（深さ約120cm）。①層は灰褐色土で、攪乱層である。②層は茶褐色土で、黄褐色の粒子を少量含む。③層は淡茶褐色土で、黄褐色の粒子を中量含む。④層は褐色土で、黄褐色の粒子を多量に含む。⑤層は黄褐色土。⑥層は暗褐色土。⑦層は⑥層に類似するが、⑥層よりは明るい暗褐色土である。⑧層は淡暗褐色土。⑨層は明褐色土で、黄褐色の粒子を多量に含む。⑩層は明黄褐色土で、弱粘性がある。⑪層は暗黄褐色土で、砂質である。⑫層は⑩層に



第72図　1号方形周溝墓土層断面図

類似する明黄褐色土であるが、⑩層よりやや明るい。⑬層は黒褐色土で、弱粘性がある。⑭層は黄褐色土で、⑤層に類似するが、⑤層より粘性が強い（第75図）。

断面図A－B地点では①層～⑥層に分層できた（深さ約110cm）。①層は断面図E－F地点の⑨層と同じ（以下、断面図E－F地点の覆土と比較する）。②層は⑪層と同じ。③層は⑫層と同じ。④層は⑬層と同じ。⑤層は⑬層に類似するが、⑤層がやや暗い。⑥層は⑭層と同じ。

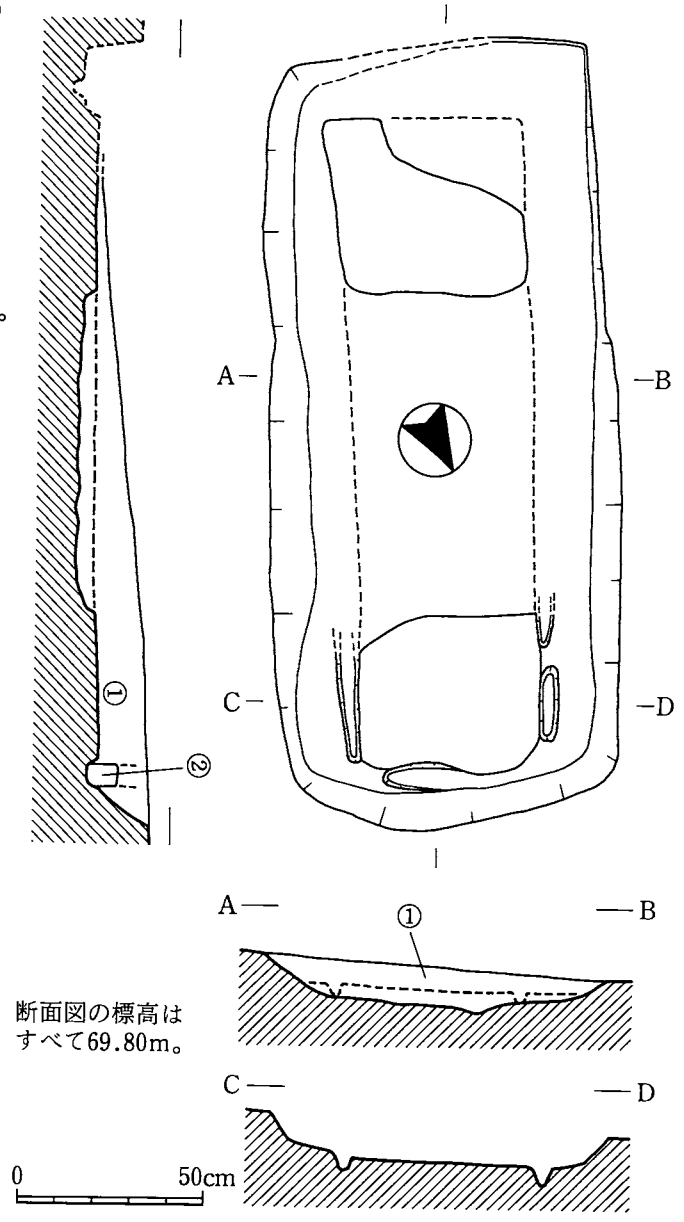
断面図C－D地点では①層～④層に分層できた（深さ約110cm）。①層は断面図E－F地点の⑨層と同じ（以下、断面図E－F地点の覆土と比較する）。②層は⑫層と同じ。③層は⑬層と同じ。④層は⑭層と同じ（第75図）。

3号方形周溝墓（第76図）

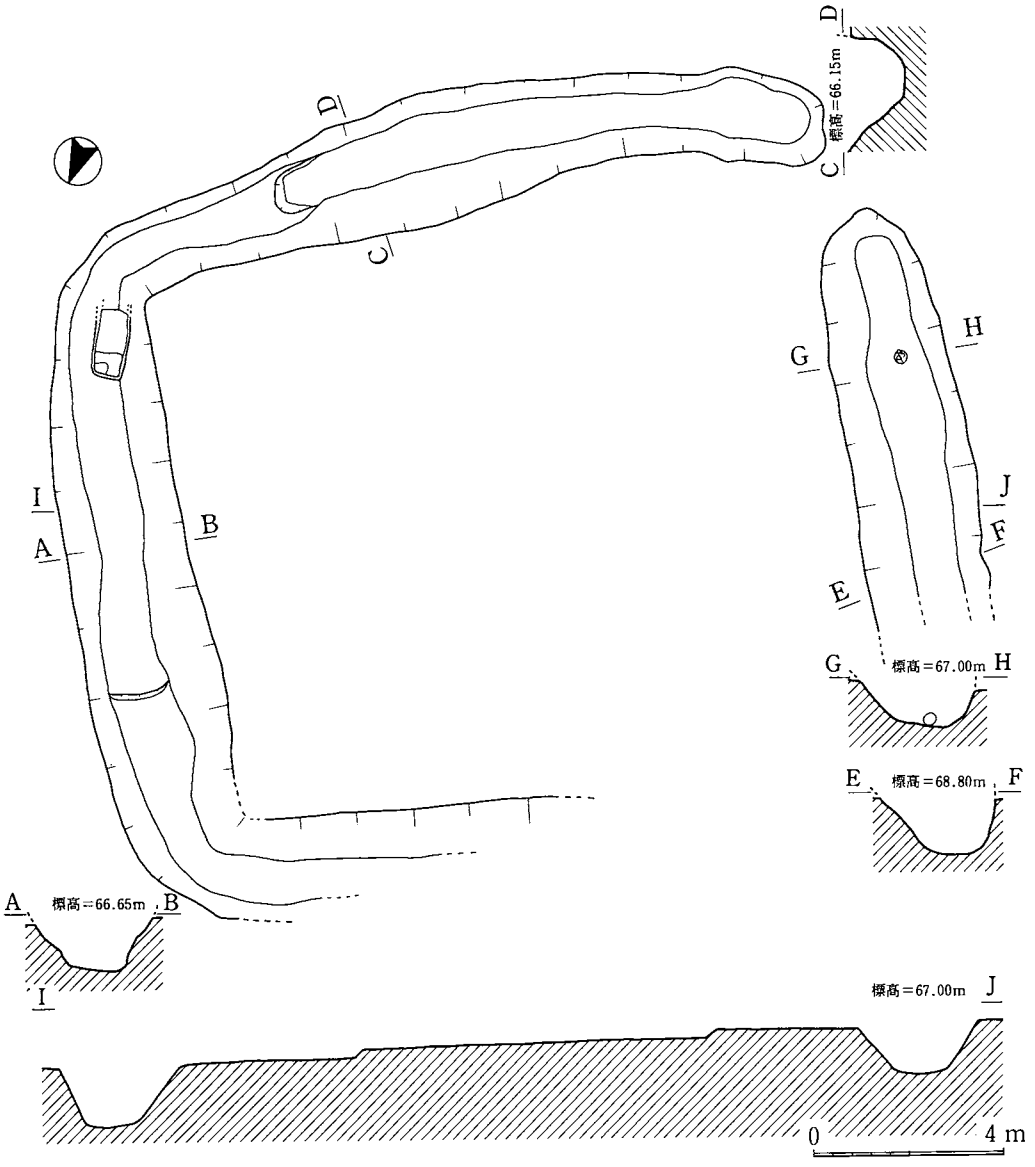
3号方形周溝墓も1号・2号方形周溝墓と同様に削平を受けており、検出できたのは周溝部分だけである。3号方形周溝墓は、周溝も部分的に削平を受けている。周溝全体の正確な規模が把握できないが、検出部で計測可能な東西方向の周溝外側の長さは約12.6mで、周溝の幅は約50～90cmある。検出部分より考えると、周溝が廻る平面形は長方形になると思われる。削平箇所が多く、陸橋部も正確な場所が不明である。周溝が閉じている箇所もその先が削平されている可能性がある。周溝の断面形も残りが悪いため、現状では皿状を呈している（深さ約10～30cm）。遺物は出土しなかった。

1号木棺（第77図・第78図）

1号木棺の西側は、1号壺棺より切られている。掘り込みの平面形は楕円形で（長軸約290cm、短軸約135cm）、断面形は深い皿状を呈す



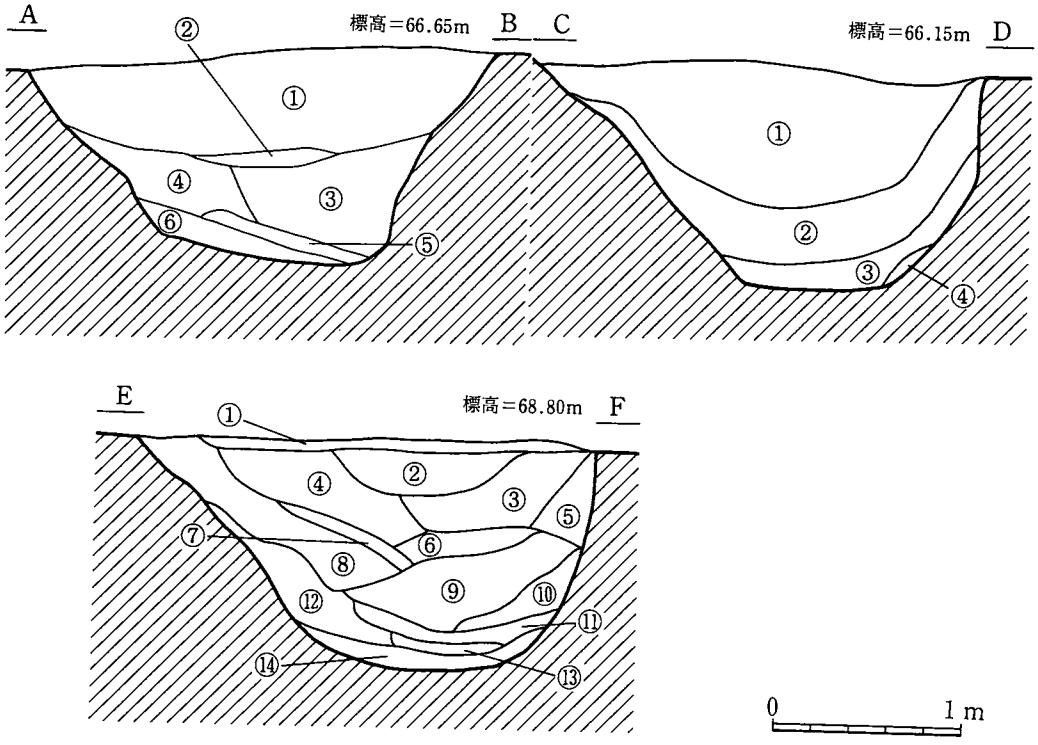
第73図　1号方形周溝墓主体部実測図



第74図　2号方形周溝墓実測図

る（深さ約25cm）。この掘り込みの中央部に、長方形の組み合わせた木棺を据え、その外側周囲を粘土で覆っている（厚さ約12～15cm）。その粘土は木が朽ちたために、内側に傾いている。棺内からガラス製小玉（16点）と碧石製管玉（2点）が出土した。その出土地点の平面分布は、棺の中央部より西側で、端部に集中している。立面分布状況は、床面・床面直上や床面から約10cmまでの範囲である。棺内排土より、ガラス製小玉（20点）・碧石製管玉（1点）が検出できた。棺外の掘り込み内の覆土は、①層～③層に分けることができた。①層は明茶褐色土で、黄褐色の粒子を多量に含む。②層は黒褐色土。③層は茶褐色土（第77図）。

第78図は木棺を覆っている粘土を外した後の実測図である。掘り込み内の床面に、小溝を設けており、小溝に囲まれた平面形が長方形になる。短辺は西側の方が東側より長い（溝内側



第75図　2号方形周溝墓土層断面図

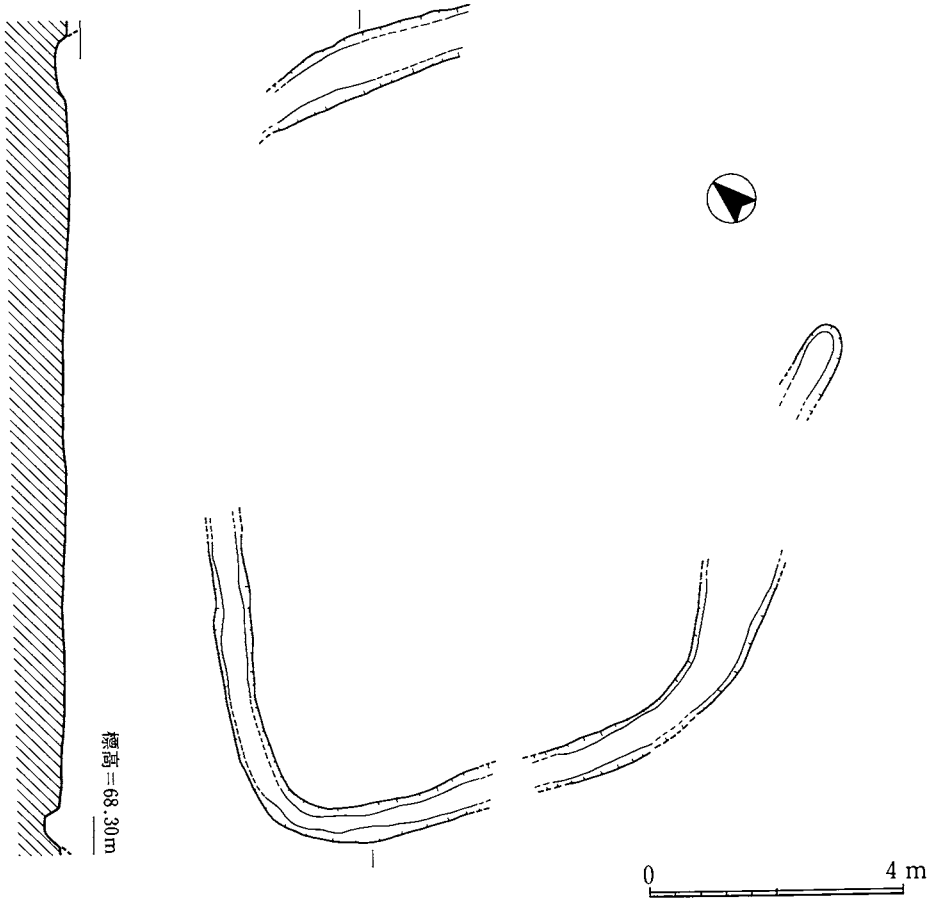
の規模約190×25～40cm)。溝の断面形は略台形を呈している（深さ約5～15cm)。棺内の覆土は暗褐色土であるが、溝の部分の覆土は棺内覆土とは異なり軟らかい。溝は短辺と長辺それぞれに分かれて掘り込まれており、南側の長辺はさらに二つに分かれている。このことより、東西の短辺と北側長辺は一枚の木材、南側長辺は二枚の木材を用いて組み合わせていたと考えられる。棺内の床面は2～4cmの厚さで灰白色粘土を敷いている。また、木材の外側周囲の粘土は一度に覆ったのでなく、数回に分けて版築状にしている。粘土部分は①層～⑤層に分層できた。①層は灰白色粘土。②層は黒褐色粘質土。③層は茶褐色粘質土。④層は明茶褐色の粘土混じりの土である。⑤層は明茶色の軟らかい土で、もぐら等による攪乱層である。

2号木棺（第79図）

2号木棺は耕作に伴う攪乱とイモ穴攪乱を受けている。また、削平が底面近くまで及び残存状況が悪く、全体の構造が不明である。長方形になると思われる棺内の東西両端に灰白色粘土が部分的に残り（幅約3～15cm、厚さ約1～2cm)、棺内底面の南側に赤色顔料が僅かに残っている。2号木棺は1号木棺に近接しており、主軸も1号木棺とほぼ同じである。出土遺物はない。

3号木棺（第80図）

3号木棺の掘り込み平面形は、略長方形を呈する（約280×120～150cm)。断面形は深い皿



第76図　3号方形周溝墓実測図

状になる（深さ約10～18cm）。掘り込みの中央部に、略長方形に小溝が回っている（幅約6～9cm、深さ約3～6cm）。この小溝の覆土はフカフカした褐色土であり、木材の腐食したものと考えられる。小溝内に木材を立て、その内外を粘土で覆っている（厚さ約2～3cm）。縦断面の土層観察より、粘土で覆われている箇所は上半分であることが判った。また、溝より内側の棺内床面の全体にも粘土を敷いている（厚さ約1～3cm）。床面及び内壁には赤色顔料が塗布されている。棺内床面の短辺は南側の方が北側よりやや長い（長辺約183cm、短辺約29～32cm）。南側短辺寄りで、北側長辺に沿った状態で鉄製の鎌が床面の粘土上より出土した。また、棺内覆土の排土中より、ガラス製の小玉（10点）を検出した。棺外の掘り込み内の覆土は①層～③層に分けることができる。①層は黒褐色土。②層は暗褐色土で、黄褐色の粒子を少量含む。③層は灰褐色土である。

4号木棺（第81図・第82図）

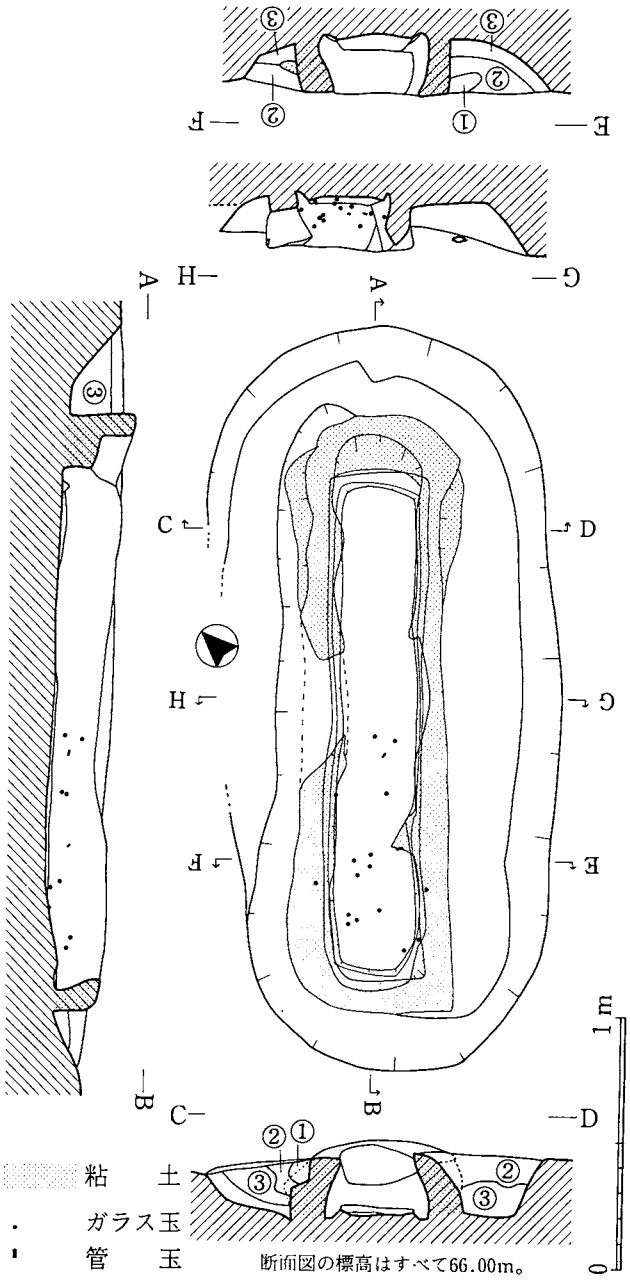
4号木棺の掘り込みの平面形は、楕円形である（長軸約355cm、短軸約237cm）。その楕円形の掘り込み内をさらに略長方形の平面形に掘り込んでいる（約253×75～85cm）。断面形は二段の皿状になる（一段目の深さ約10～15cm、二段目の深さ8cm）。さらに、二段目の略

長方形の掘り込み内には、小溝が長方形に巡っている（幅約４～12cm、深さ約３～６cm）。小溝内側は東側短辺の方が西側短辺より長い（約180×32～38cm）。小溝の覆土は茶褐色土で、フカフカしており、木質が腐食したものと考えられる。小溝内に木材を据え、その外側及び上面を灰白色の粘土で覆っている。また、一段目の掘り込みの外側にも上部だけ灰白色の粘土を被せている箇所がある（第81図網目部分）。この粘土と粘土に挟まれた部分は、茶褐色のフカフカした土である（第81図①層）。この①層部分が木質が腐食したものであれば、棺の外側に槨のようなものがあったことになる。

棺内の東側端部に赤色顔料が集中して分布している。ガラス製小玉５点が棺内の東側端部より出土し、33点が棺内のほぼ中央部より集中して出土した。これらのガラス製小玉は床面上と床面上から約８cmの範囲にある。また、棺内排土中よりガラス製小玉（22点）が検出できた。内側の粘土上面の東側寄りの箇所からは、先端部を東側に向けた状態の刀子が出土した。この刀子が出土した粘土上面は棺身の上端部で、棺蓋と合わさる部分と考えられる（第81図）。

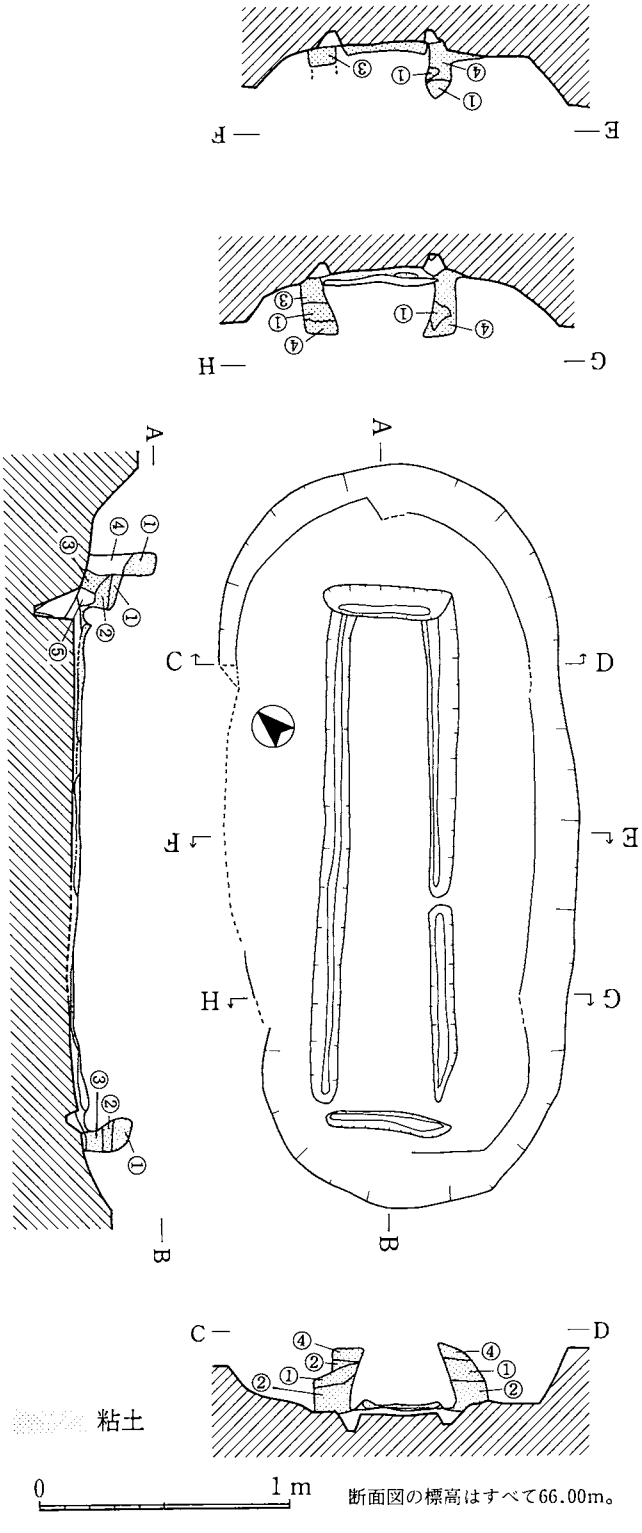
１号壺棺（第83図・第84図）

１号壺棺は１号木棺を切っている。第83図は１号壺棺の上面を検出した時の実測図で、第84図は第83図の壺形土器取り上げ後の下面の状況を示したものである。１号壺棺は略円形の掘り込み内（径約80～86cm）に、壺形土器の口縁部を東側にして横位に据えたものである。検出時には、土器がつぶれた状態であった。この壺形土器は底部を打ち欠いている。また、口縁部

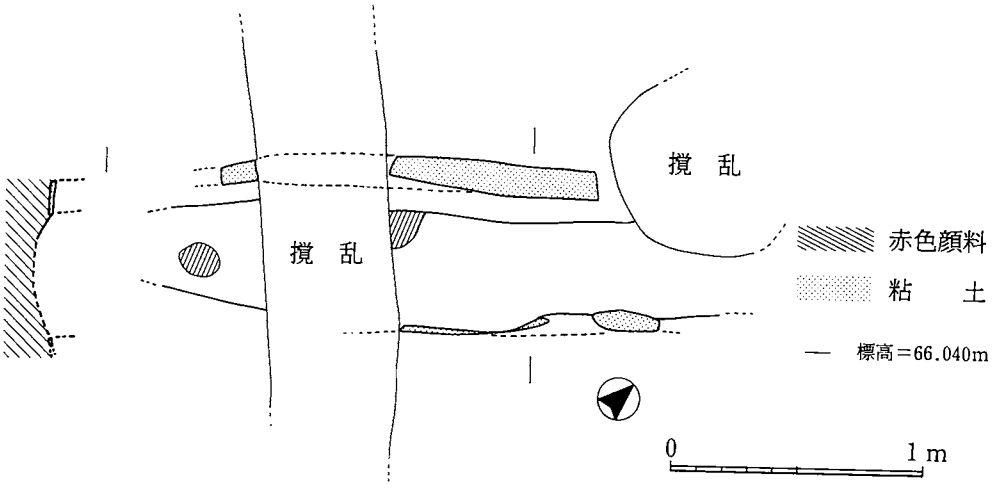


第77図　１号木棺(1)実測図

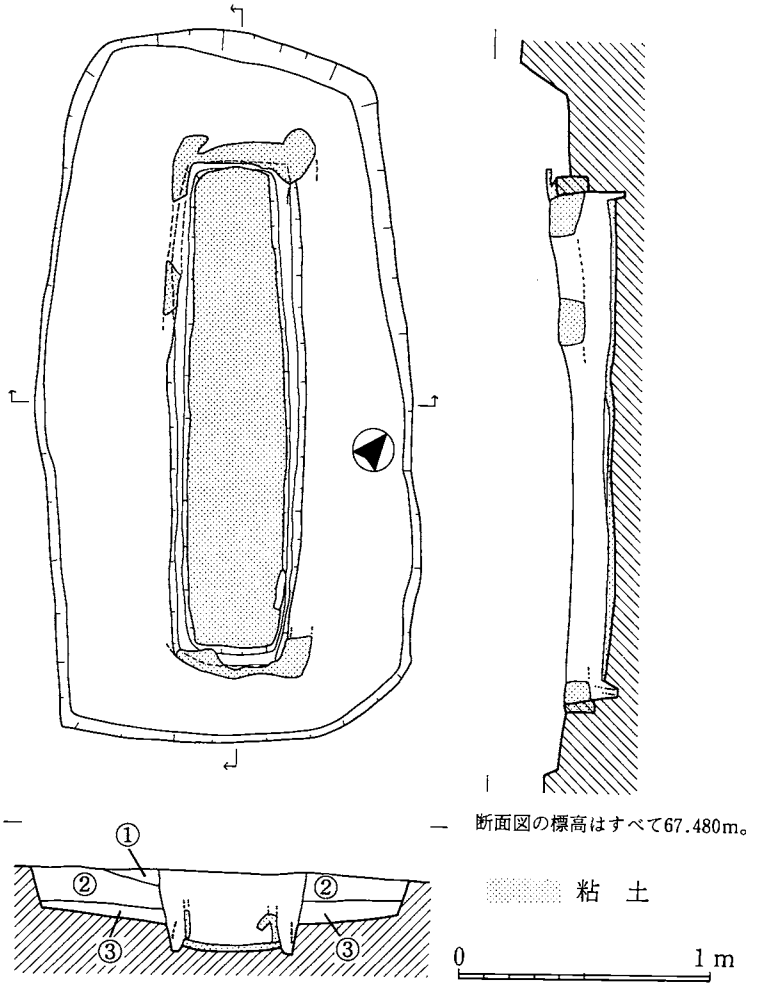
は一部分だけが出土しており、底部と同様に打ち欠いた可能性がある（第93図）。この壺形土器の底部付近を覆う状態で、別個体の壺形土器の底部のみが出土した。掘り込みの床面には粘土が敷いてある（厚さ約2～4cm）。掘り下げ時に、粘土の一部分を取り除いたため、実測図には粘土のない箇所がある。本来は床面全体に粘土を敷いていたものと考えられる。また、掘り込み床面の東側端部からは赤色顔料を点在状態で検出した。



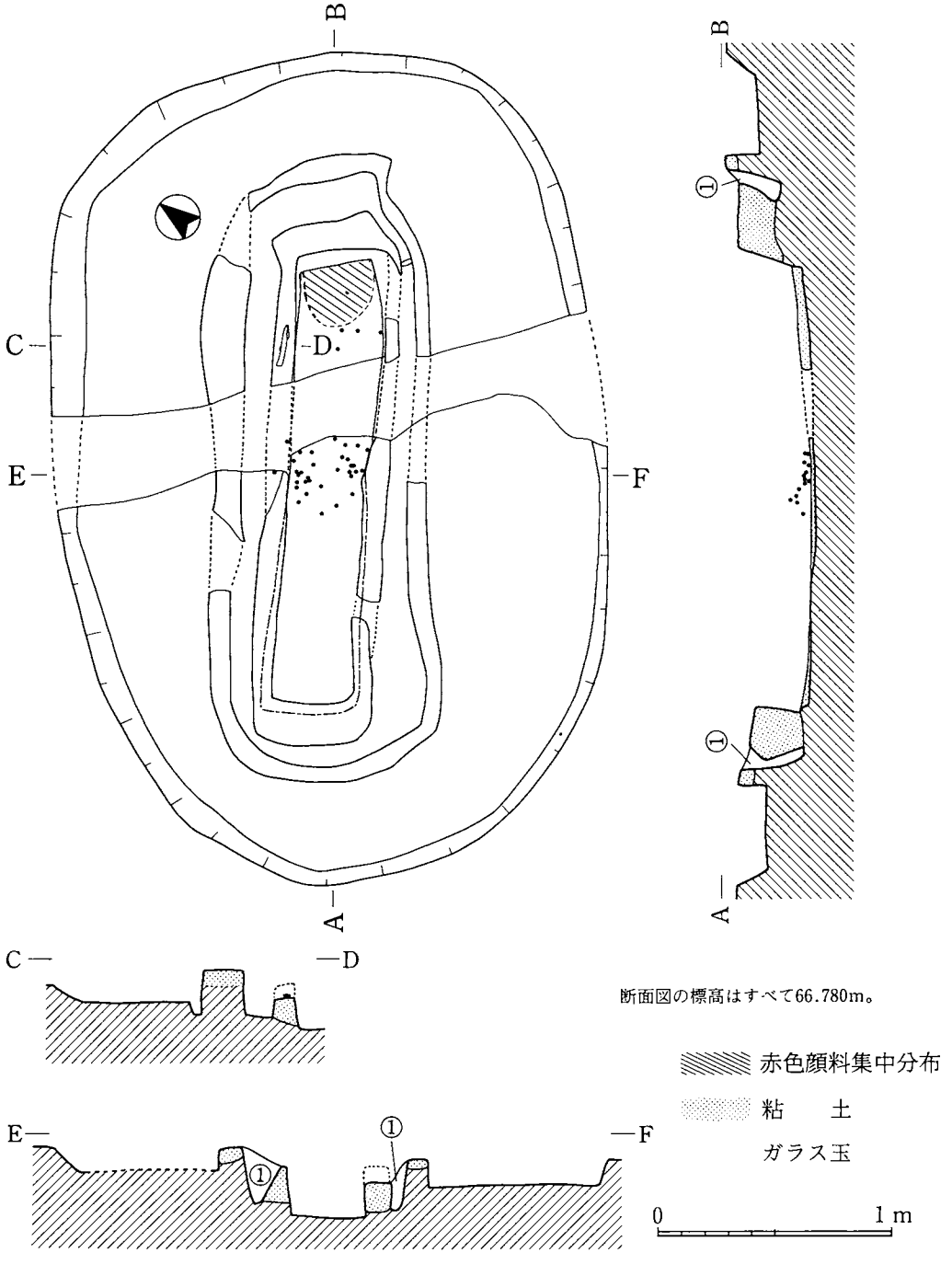
第78図　1号木棺(2)実測図



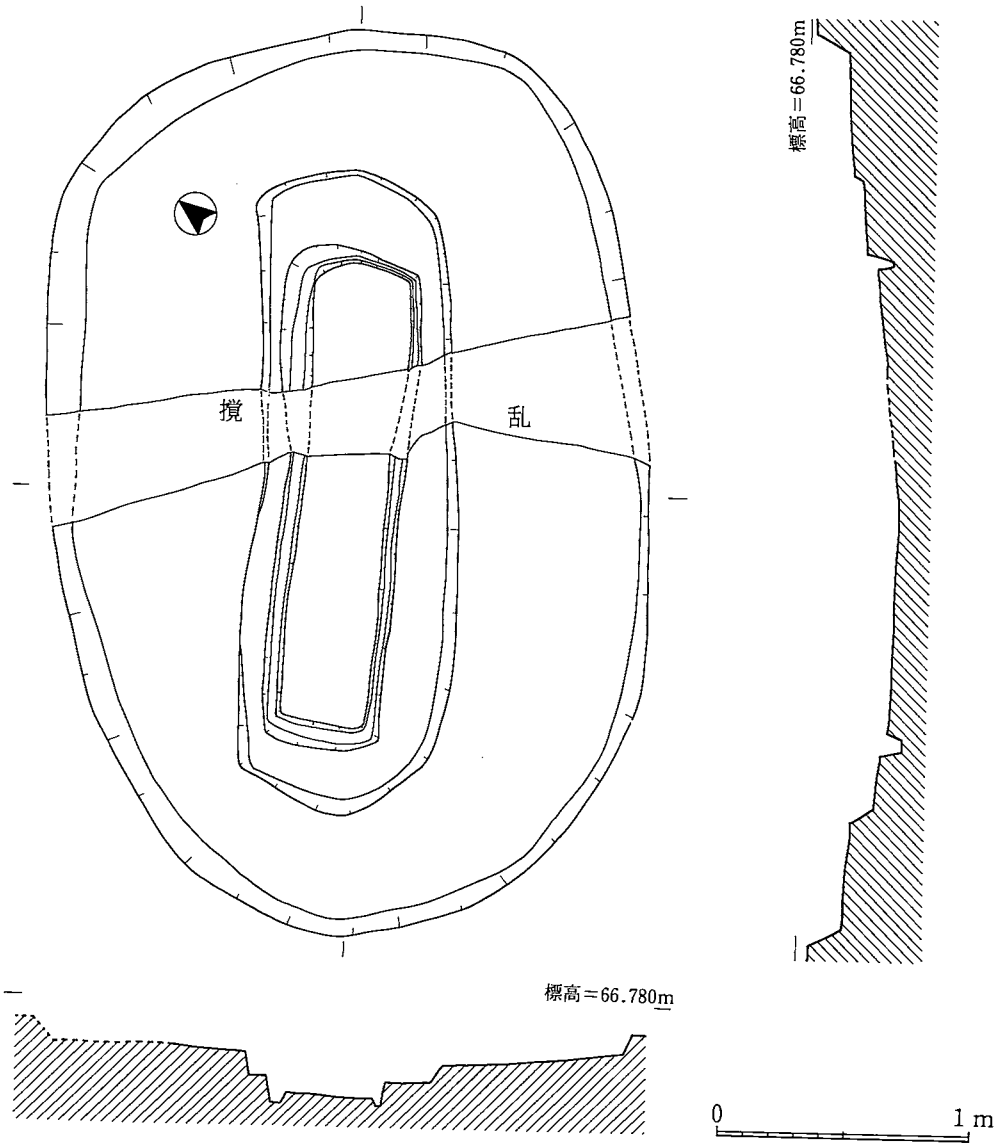
第79図　2号木棺実測図



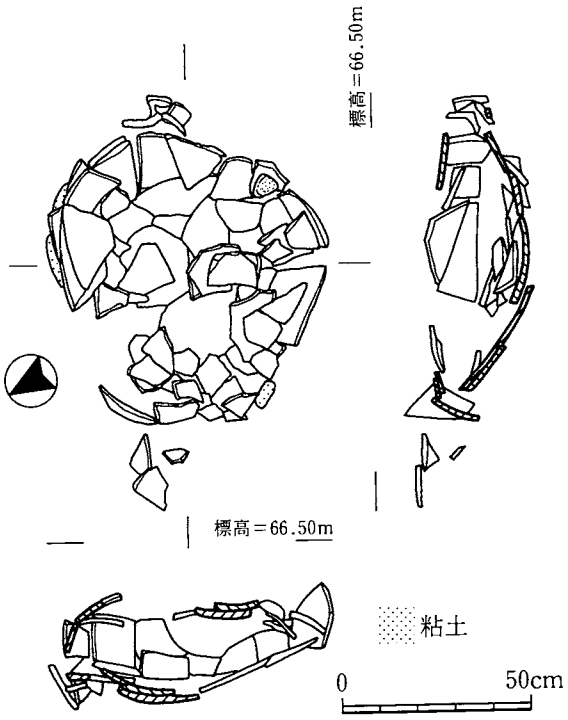
第80図　3号木棺実測図



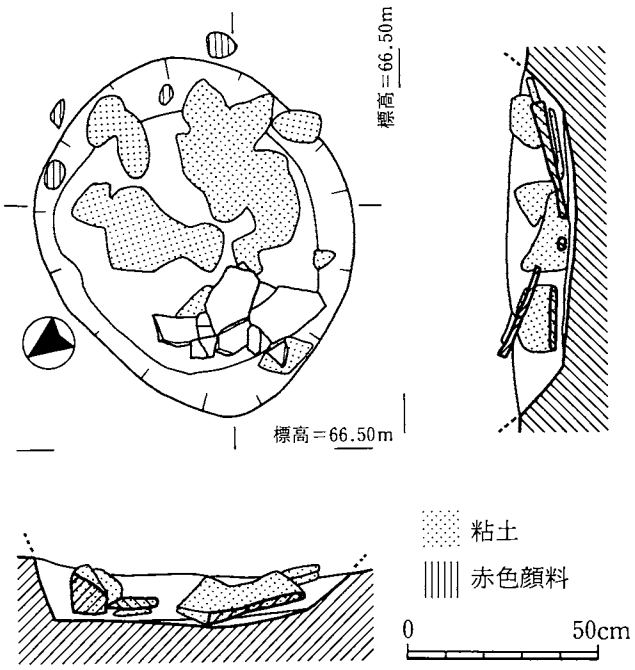
第81図　4号木棺(1)実測図



第82図　4号木棺(2)実測図



第83図　1号壺棺(1)実測図

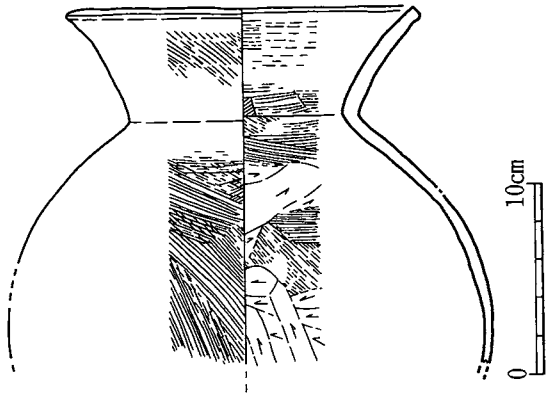


第84図　1号壺棺(2)実測図

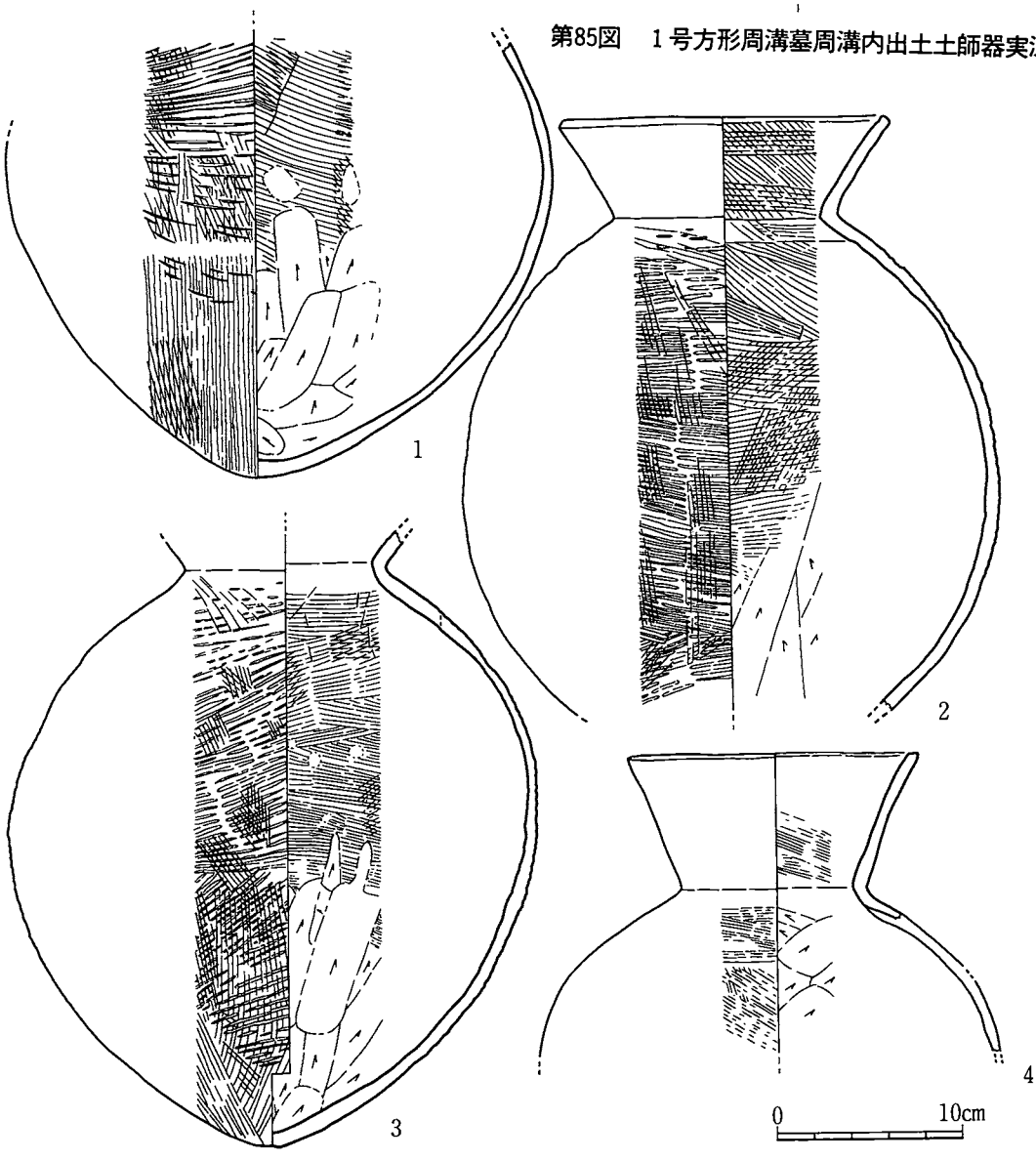
(2)遺物について

1号方形周溝墓出土遺物について（第85図）

第85図は土師器の壺形土器で、周溝の覆土⑦層より出土した。口縁部は外反しながら、立ち上がり、端部はヨコナデされており、外器面が少し突出し、内器面に僅かな稜がある。胴部内器面に



第85図　1号方形周溝墓周溝内出土土師器実測図



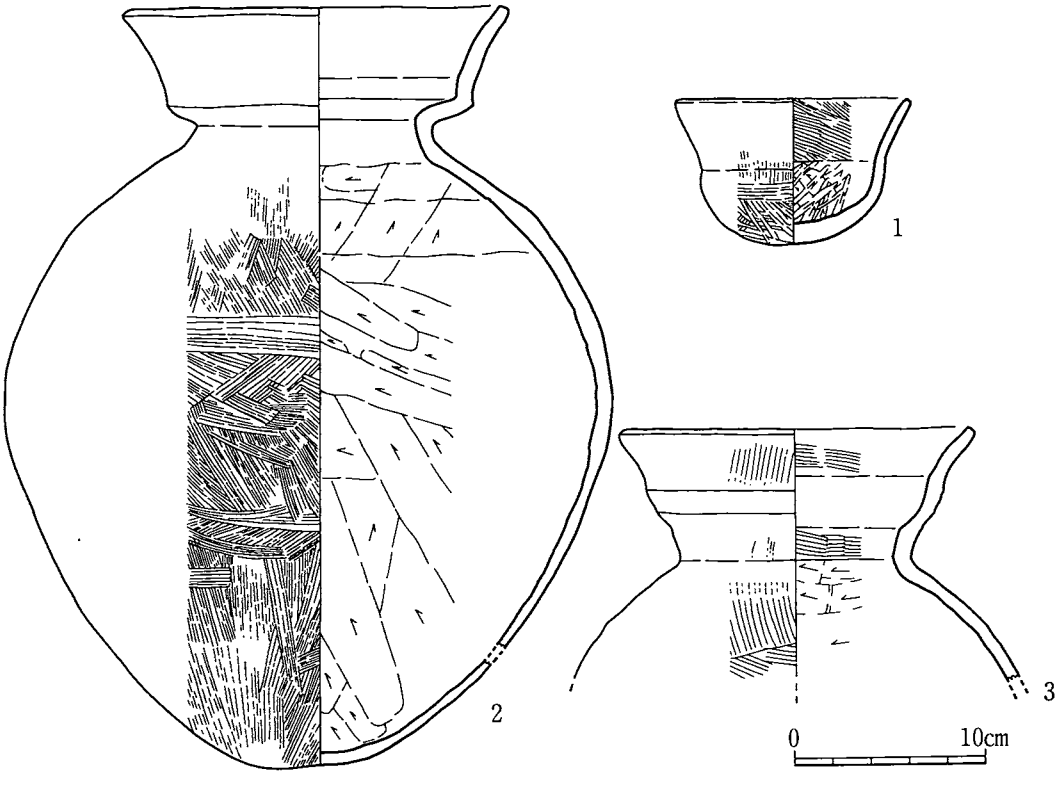
第86図　2号方形周溝墓周溝内出土土師器実測図

ヘラケズリが認められ、その他の部分は、ハケ調整・ヨコナデ調整が行われている。

2号方形周溝墓出土遺物について（第86図～第88図）

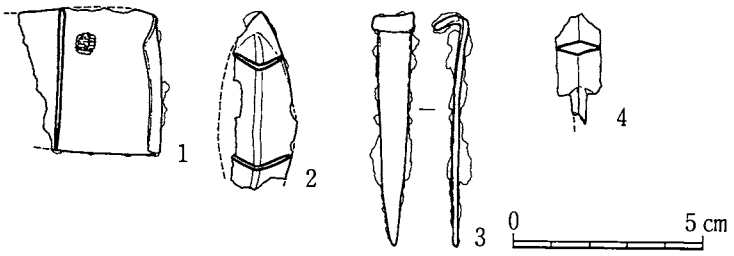
第86図3が陸橋部北側の周溝床面に据えられていた。その他の遺物は、周溝の覆土より出土した。

第86図1・3は胴部が倒卵形をした土師器の壺形土器である。底部がやや尖り気味である。胴部の最大径がほぼ中程にあり、それより下位の内器面にはヘラケズリが行われている。ヘラケズリ部分より上位は、ハケ調整が施され、部分的に指頭痕がある。外器面はハケ調整と目の細かいタタキ調整が認められる。第86図2・4は土師器の壺形土器である。2・4とも口縁部が外反しながらのび、端部寄りの内器面に弱い稜がある。口縁部は4の方が長い。2は胴部の最大径が中位にあり、内器面は底部寄りの箇所にヘラケズリが、その他の箇所にはハケ調整が施される。口縁部内器面には弱いヨコナデがある。外器面は頸部下位に、ハケ調整・タタキ調整が、口縁部にヨコナデ調整が施される。2の外器面と口縁部内器面には、赤色顔料が塗布される。4の調整は内器面が胴部にヘラケズリ、口縁部にハケ、ヨコナデがあり、外器面が胴



第87図　2号方形周溝墓周溝内出土土師器実測図

部にハケ、口縁部にヨコナデがある。第87図1は小型丸底壺である。調整は内器面の頸部より下位がヘラケズリ、上位がハケであり、外器面の頸部付近にハケが残り、底部寄りの箇所にヘラナデがある。



第88図　2号方形周溝墓周溝内出土遺物実測図

第87図2・3は複合口縁の壺形土器である。2は内器面の頸部より下部にヘラケズリ調整、外器面の胴部にハケ調整を施す。口縁部から頸部付近の内外器面には、ヨコナデ調整がおこなわれている。3は複合口縁部の屈曲が明瞭でない。内器面は頸部下位にヘラケズリ調整、口縁部にハケ調整・ヨコナデ調整を施す。外器面には頸部下部にハケ調整、口縁部にハケ調整・ヨコナデ調整が行われる。

第88図は1は鉄製摘鎌であり、ほぼ半分が欠損している。端部が折れ曲がっており、内側に柄の木質が残存している。2は鉄製ヤリガンナの刃部で、約1／3が欠損している。刃部は中央部が窪み、スプーン状を呈しており、先端が尖る。3は鉄製釘で、基部が折れ曲がっている。基部が幅広く、先端部ほど細くなり、端部が尖る。4は銅鏃で鏃身部と茎部の一部が残っている。断面形は、鏃身が菱形、茎部が隅丸方形を呈する。

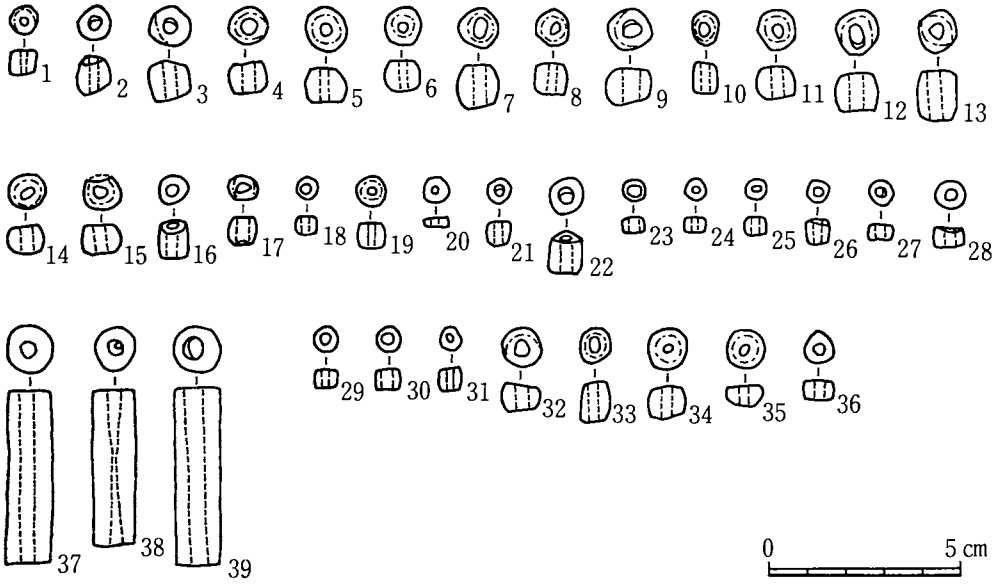
1号木棺出土遺物（第89図）

1～16・37・38は、棺内の原位置で出土した。他の玉は棺内の排土より検出したものである。1～36はガラス製小玉、37～39は碧石製管玉である。ガラス製小玉は、平面形が円形やほぼ円形をしており、偏平なものから分厚いものまである（径約0.3～0.6cm、厚さ約0.15～0.6cm）。ガラス製小玉は緑青色・青緑色やそれらの濃色の色調をしている。碧石製管玉は、長さ約2.1～2.3cm、径0.5～0.6cmで、緑色や黄緑色を呈している。37・39は片側からの穿孔で、38は両端からの穿孔である。

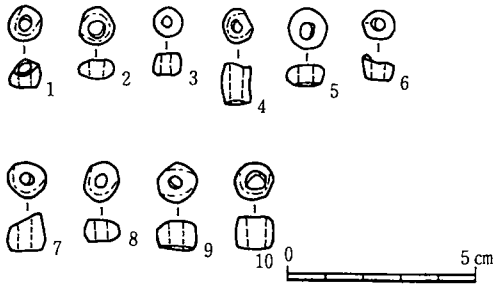
3号木棺出土遺物（第90図・第91図）

第90図1～10は棺内排土より検出したガラス製小玉である。ガラス製小玉は、平面形がほぼ円形で、厚さにはばらつきがある（径約0.35～0.55cm、厚さ約0.3～0.55cm）。ガラス製小玉の色調は緑青色や青緑色であり、それらの濃色のものもある。

第91図2は棺内の床面より出土した鉄製の鎌である。鎌は全体が湾曲している。鎌の右端部は折り曲がっており、刃部に対して柄が鈍角に装着できるようになっている。体部背寄りの二箇所には穿孔が施されている。刃部のほぼ中央部は内側に入り込んだ状態であり、使用した



第89図　1号木棺出土玉実測図



第90図　3号木棺出土玉実測図

痕跡であると思われる。

4号木棺出土遺物（第91図・第92図）

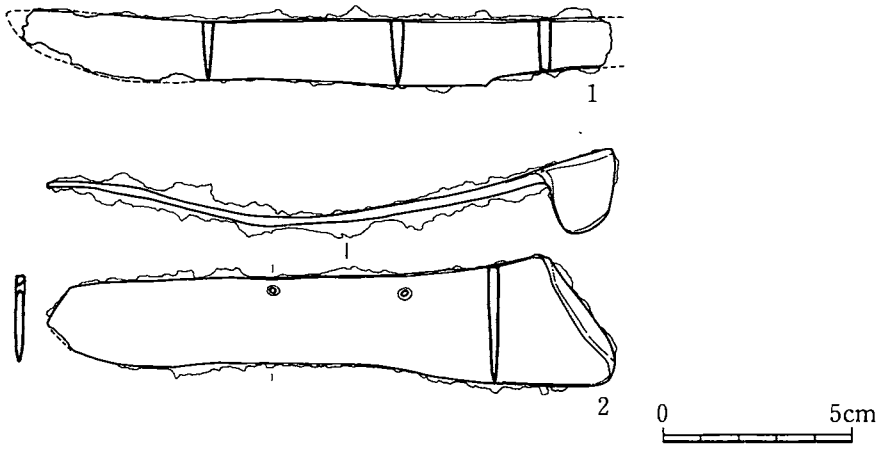
第92図はガラス製小玉である。1～36は棺内の原位置で出土したもので、37～60は棺内排土より検出したものである。原位置より出土した2点は破損した小片であるため、図化していない。ガラス製小玉は、平面形がほぼ円形を呈し、偏平なものから分厚いものまである（径約0.4～0.6cm、厚さ約0.25～0.7cm）。小玉の色調は緑青色や青緑色であり、それらの濃いものもある。

第91図1は棺身の上端部と考えられる部分より出土した鉄製刀子である。刀子は刃部の一部、切先、茎の一部を欠いている。刃部が僅かに内側に入り込んでおり、背は平らである。関が確認でき、刃部から鈍角に茎に続く。茎の断面形は長方形を呈する。

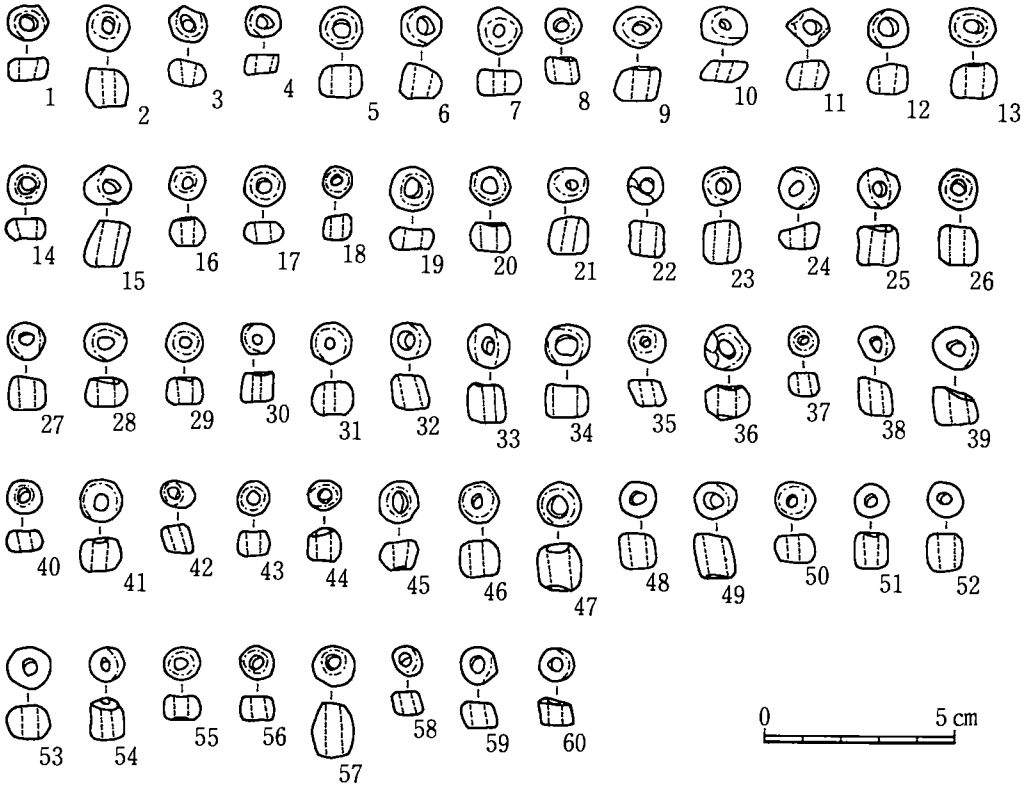
1号壺棺（第93図）

1・2が楕円形の掘り込み内より出土した。1の底部を覆う状態で、2が出土した。

1は口縁部が強く「く」の字形に屈曲し、短い頸部をもつ壺形土器である。底部付近は意識的に打ち欠いたものである。また、口縁部も全体の1／5程度しか残っていなく、打ち欠いた可能性が強い。口縁部外器面には、上位に不整な山形の沈線文、下位に5本～7本を単位とした櫛描文が施されている。胴部の最大径が中位よりやや上方にある。その箇所より上位の内器



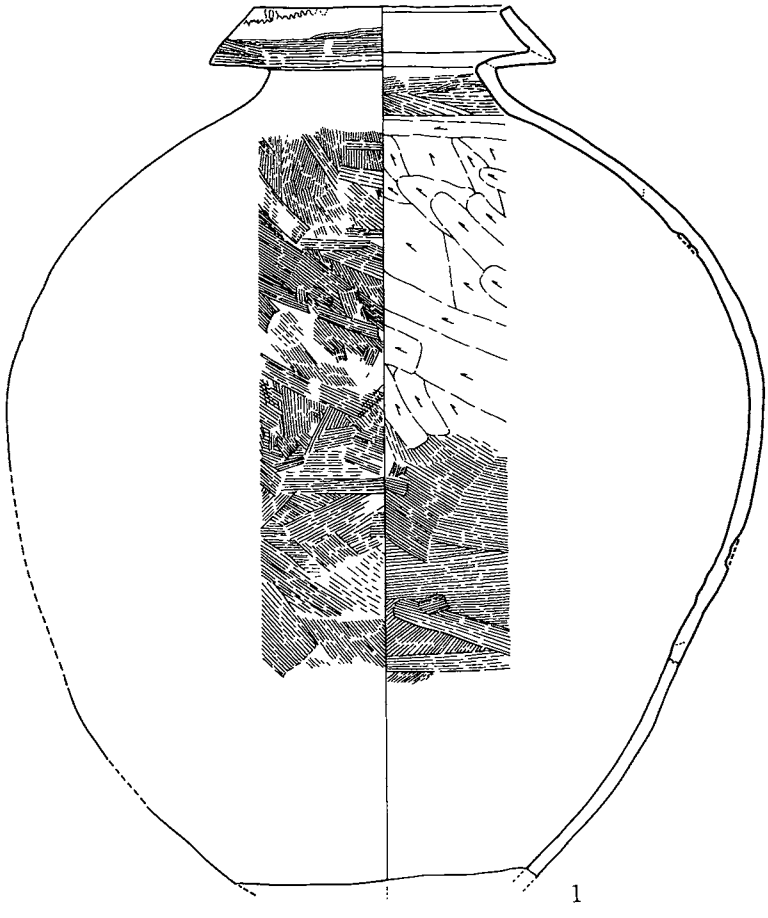
第91図　３号木棺・４号木棺出土鉄器実測図

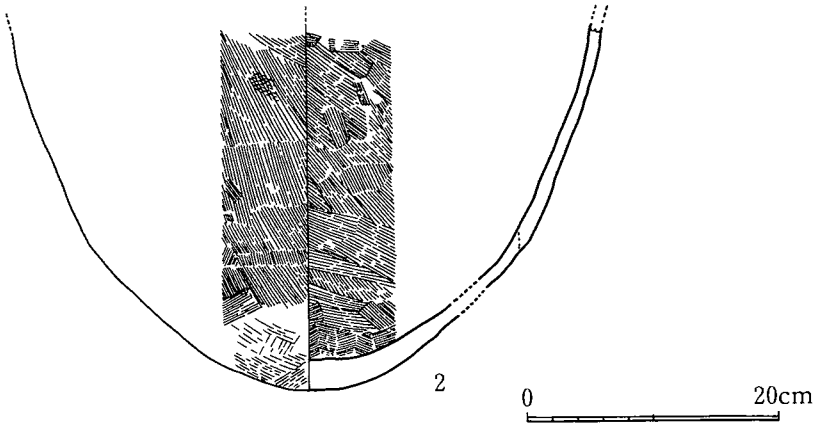


第92図　４号木棺出土玉実測図

面には、頸部の屈曲部までヘラ削りが行われ、頸部ではハケ目調整が施される。ヘラ削りより下位の内器面にはハケ目が残る。外器面では、頸部より下位にハケ目が残る。内外器面とも底部寄りの箇所では、ハケ目が認められない。また、口縁部付近の外器面に赤色顔料が良く残っており、その他の外器面でも、赤色顔料が点々と残存している。

２は底部付近のみの壺形土器である。底部は僅かに平らな面をもった丸底である。内外器面ともハケ目調整を施している。ただ、外器面の底部付近のハケ目は弱い。





第93図　1号壺棺実測図

5．　奈良・平安時代の調査

(1)遺構について

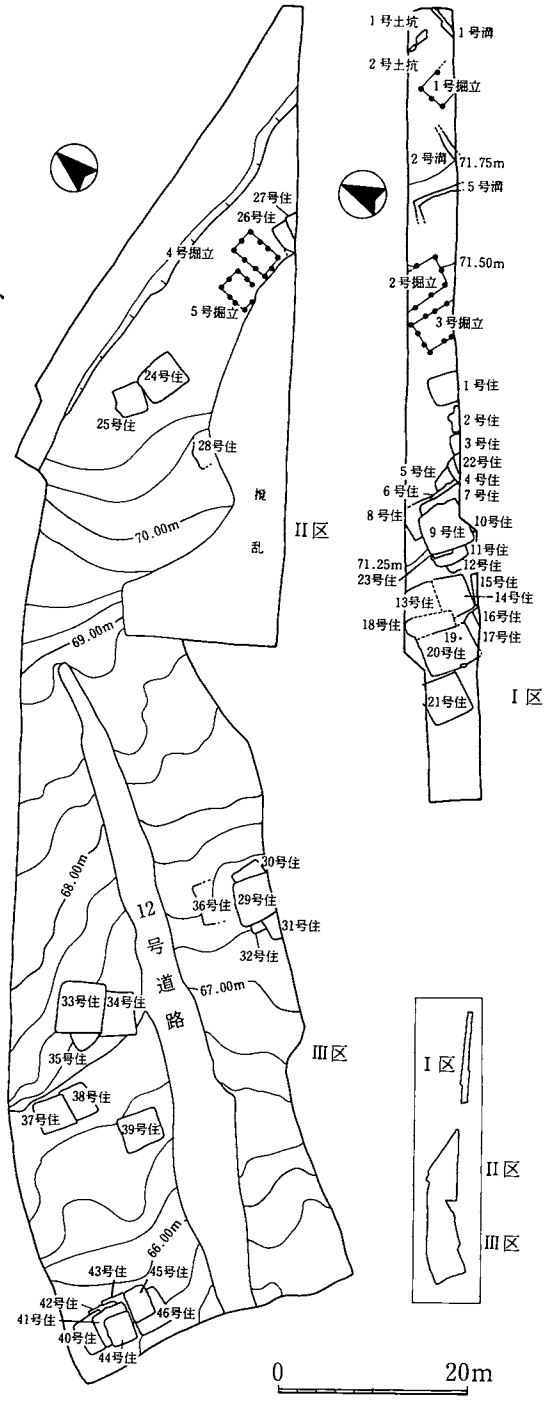
遺構分布（第94図）

検出した遺構は、竪穴住居址46軒・掘立柱建物跡5棟・土坑2基・溝跡3本・道路跡1本である。以下、調査区ごとに見てみる。

I区では、1号～23号竪穴住居址が調査区の西側半分に集中して分布している。その東側半分に、1号～3号掘立柱建物跡、1・2号土坑、1号・2号・5号溝跡がある。これらの遺構は、標高71.25～71.75mの緩傾斜面に分布している。調査区の中に限って見れば、竪穴住居址と掘立柱建物跡との分布域が異なる。

II区には、24号～28号竪穴住居址、4号・5号掘立柱建物跡が標高75mのほぼ平坦な面に分布している。II区の南端寄りの攪乱されている箇所にも遺構の存在が予想でき、本来の遺構数は増えると思われる。

III区に分布している遺構は、29号～46号竪穴住居址・12号道路跡で、緩やかな傾斜地に分布している。調査区のほぼ中央部を北東から南西方向に12号道路跡がのびている。道路跡がのびる方向は谷が入り込む方向と一致する。その道路跡の南北に分かれて、竪穴住居址が分布している。南側に29号～32号・36号竪穴住居址がまとまっている。北側には、33号～35号・37号～39号竪穴住居址と40号～46号竪穴住居址とが東西に分かれて分布している。



第94図　遺構配置図

1号竪穴住居址（第95図）

住居址の南側が調査区外にのびる。検出した部

分より推定すると、長方形のプランになると思われる（約320×約320cm＋α、深さ約10cm）。床面のほぼ中央部は硬化しており、その西側端部に不定形プランの主柱穴（約50×40cm、深さ約50cm）が1基ある。この柱穴に対応する柱穴は調査区外にあると考えられる。主柱穴以外に浅いピットが5基が穿たれている（径約16～38cm、深さ約6～12cm）。住居址の覆土は茶褐色砂質土（焼土・カーボンを少量含む。）であり、分層できない。北東部の壁に沿って、竈が作られている。竈の両袖は粘土が焼けて、固くしまっている。竈内の覆土は①～⑦層に分層できる。①層は赤褐色の焼土で、ブロック状にはいる。②層は茶褐色土で、焼土を多量に含む。③層は灰褐色土で、灰を多量に含む。④層は淡茶褐色土で、焼土・灰を多量に含む。⑤層は黒褐色土で、焼土・灰を少量含む。⑥層は褐色砂質土で、焼土を少量含む。⑦層は灰褐色土で、焼土・灰を多量に含み、③層に類似する。

2号竪穴住居址（第95図）

住居址の一部を検出した。他の部分は調査区外にのびる（検出部の規模約280×120cm、深さ約8cm）。南側の壁のほぼ中央部に、外に張り出した竈がある。住居址内の角にピット2基を検出した（径約40～44cm、深さ約18～20cm）。住居址の覆土は茶褐色砂質土（焼土・カーボンを少量含む）で、分層できない。

3号竪穴住居址（第95図）

3号住居址も2号住居址と同様に、住居址の一部を検出した（検出部の規模約206×120cm、深さ約8～12cm）。22号住居址が3号住居址を切っている。西側の壁近くで、ピット1基を検出した（径約28cm、深さ約10cm）。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。床面より、土師器が出土した。

4号竪穴住居址（第96図）

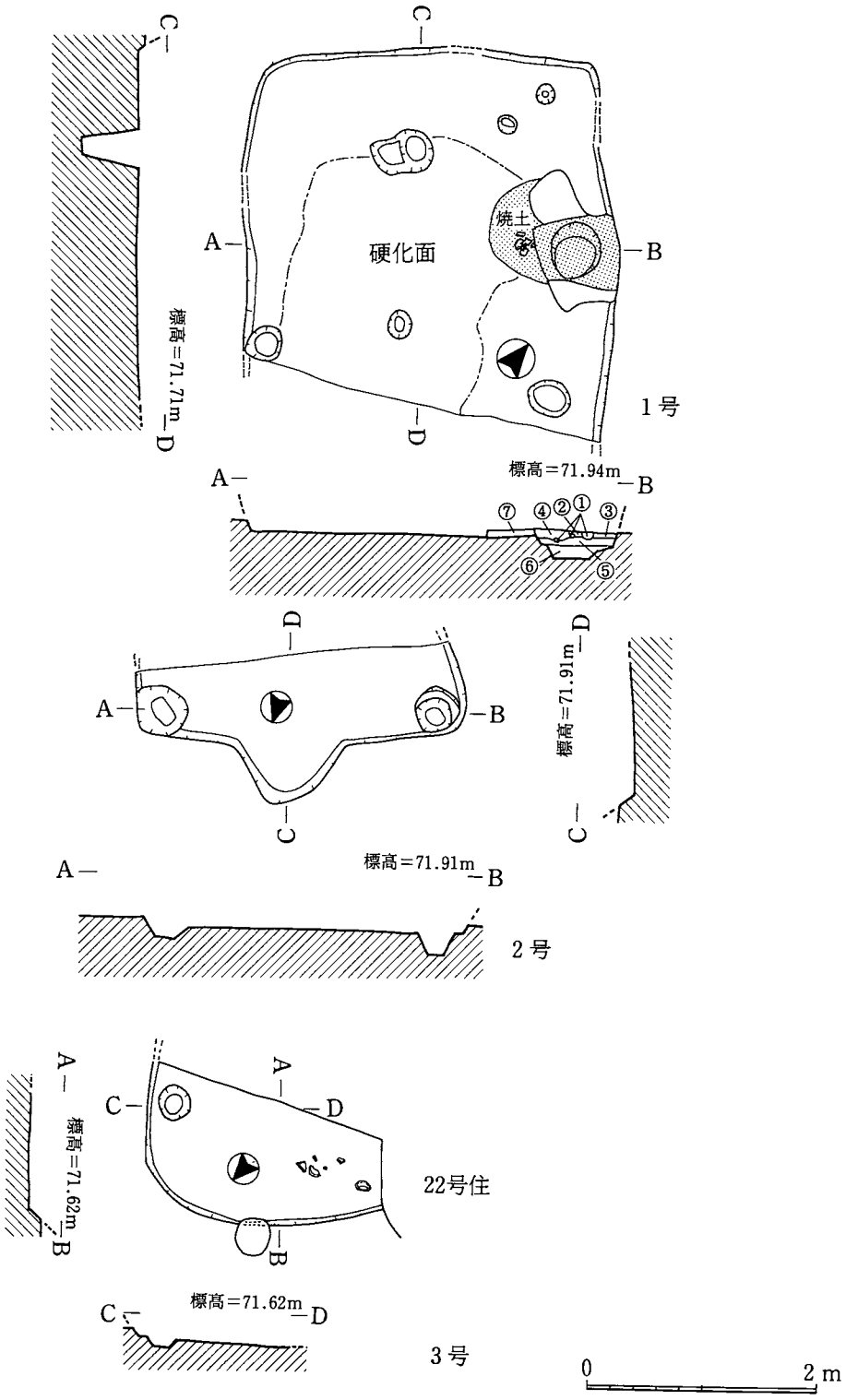
4号住居址は22号住居址によって切られており、一部分が残存している（検出部の規模約270×110cm、深さ約12cm）。他の部分は調査区外にのびる。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

5号竪穴住居址（第96図）

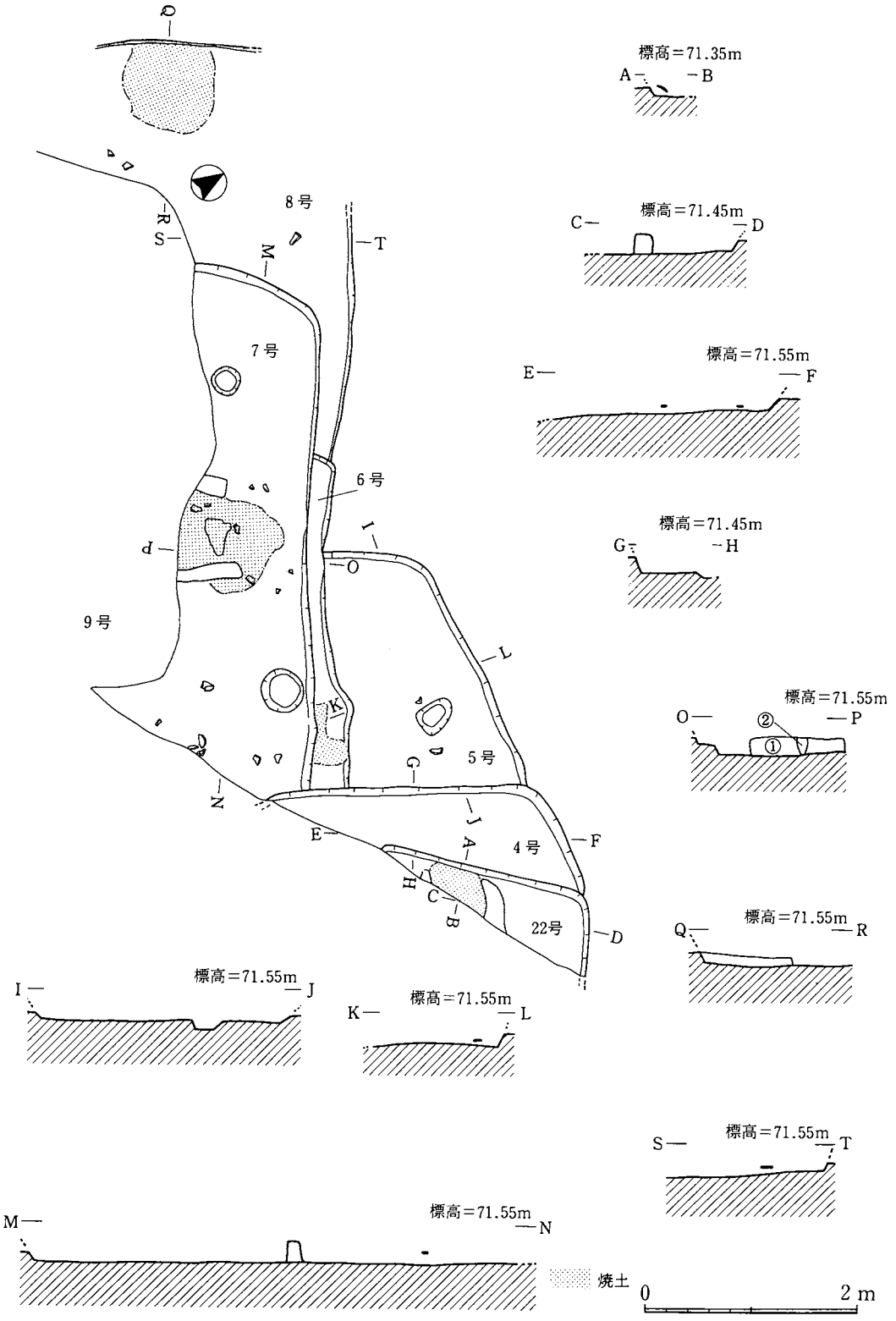
5号住居址は、4号・6号住居址によって切られており、残存しているのは一部分である（検出部の規模約210×90cm、深さ約6～10cm）。北側の壁寄りの箇所に、ピット1基を検出した（径約26～38cm、深さ約8cm）。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。ピットの周りの床面より、遺物が出土した。

6号竪穴住居址（第96図）

6号住居址は、4号・7号住居址によって切られている。残存しているのは、北側の壁周辺と竈の一部分である（検出部の規模約300×20cm、深さ約6cm）。竈の箇所には焼土（灰・カーボンを多量に含む）が確認できた。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。



第95図　1号～3号竪穴住居址実測図



第96図　4号～8号・22号竪穴住居址実測図

7号竪穴住居址（第96図）

7号住居址は、9号住居址によって切られている。北側・西側の壁周辺と竈の一部分が残存している（検出部の規模約440×120cm、深さ約8cm）。竈の両袖は底部が残っていて、灰白色粘土が焼けて固くなっている。竈内の覆土は①層・②層に分層できる。①層は淡黒褐色土で、焼土・カーボン・灰を多量に含む。②層は赤褐色の焼土で、ブロック状にはいる。床面を掘り込んだ2基のピットを検出した（径約22～40cm、深さ約11～16cm）。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。床面・竈内より遺物が出土した。

8号竪穴住居址（第96図）

8号住居址は、6号・7号・9号住居址によって切られている。残存しているのは、北側・西側の壁周辺の一部分である。北側の隅周囲は攪乱されているため、確認できなかった。（検出した北側壁約220cm、西側壁約150cm、深さ約10cm）。西側の壁に沿って、焼土（灰・カーボンを多量に含む）が残る竈の基底部を検出した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。床面より遺物が出土した。

22号竪穴住居址（第96図）

22号住居址は、4号住居址を切っている。検出したのは竈の周辺部分である。（検出部の規模約200×70cm、深さ約10cm）。竈の両袖は黄白色粘土が焼けて固くなっている。竈内には灰とカーボンを少量含んだ焼土がある。床面を掘り込んだ2基のピットを検出した（径約22～40cm、深さ約11～16cm）。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

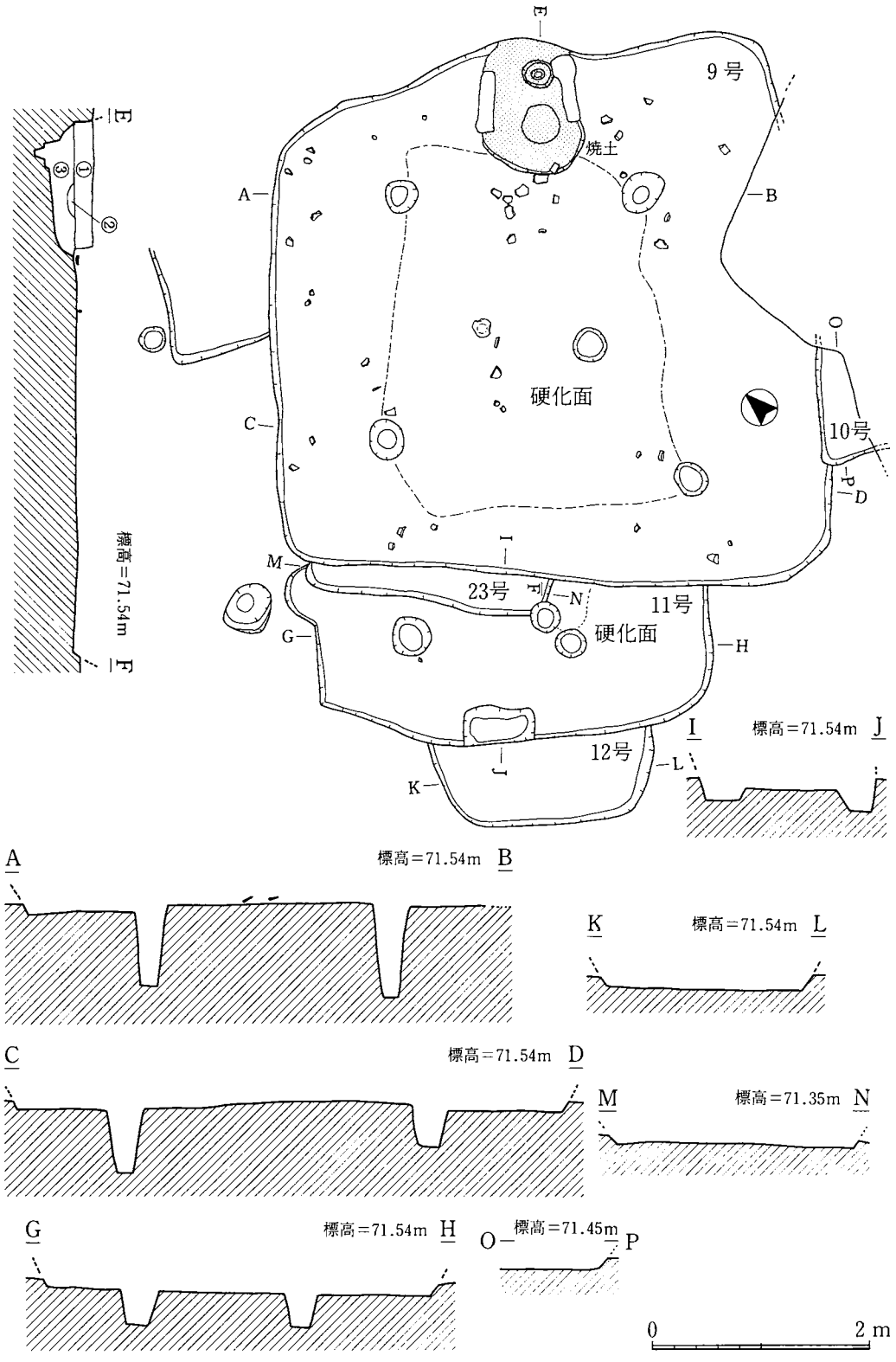
9号竪穴住居址（第97図）

9号住居址は、7号・8号・11号・23号住居址を切っており、10号住居址に切られている。東側の壁周辺の一部が調査区外になるが、略方形プランの住居址のほぼ全面を検出した。（約490×500cm、深さ約8～12cm）。壁寄りに4基の主柱穴があり（径約30～40cm、深さ約40～90cm）、その内側の床面が硬化している。その硬化面内にピット1基を検出した（径約30cm、深さ約13cm）。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。北側壁のほぼ中央部に沿って、残存状態の良い竈がある。硬化面上の中央や竈の前面、壁の周囲の床面より遺物が出土した。

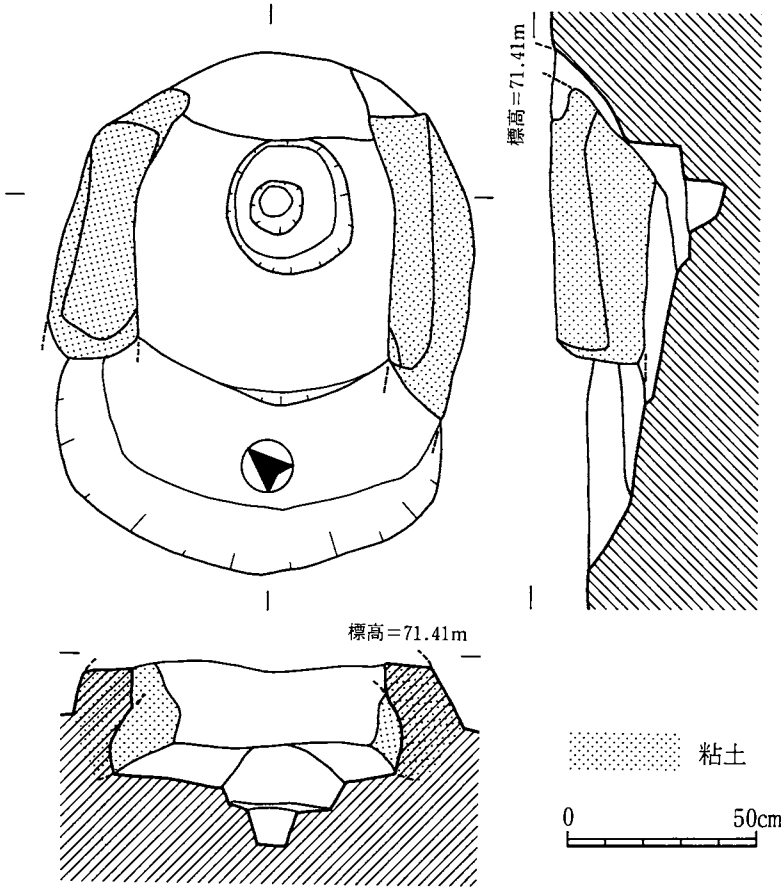
竈について（第97図・第98図）　楕円形の深い皿状の二段の掘り込みがあり（長軸約135cm、短軸100cm、深さ約10～20cm）、その左右両端に灰白色の粘土で袖部を作っている（第97図①層）。その両袖部は焼けて、固くなっており、前面部が欠損している。楕円形の掘り込み内の奥寄りの箇所には、二段の円形掘り込みがある（径約35cm、深さ約40～45cm）。楕円や円形の掘り込み内の覆土は、二つに分けることができる。第97図②層は赤褐色の焼土がブロック状になる。③層は赤褐色の焼土で、灰・カーボンを多量に含む。

10号竪穴住居址（第97図）

10号住居址は、西側隅の周辺一部分を検出した（検出部の規模約100×40cm、深さ約10cm）。



第97図　9号～12号竪穴住居址実測図



第98図　9号住居址竈実測図

住居址の大半が調査区外にはいる。10号住居址は9号住居址を切っている。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

11号竪穴住居址（第97図）

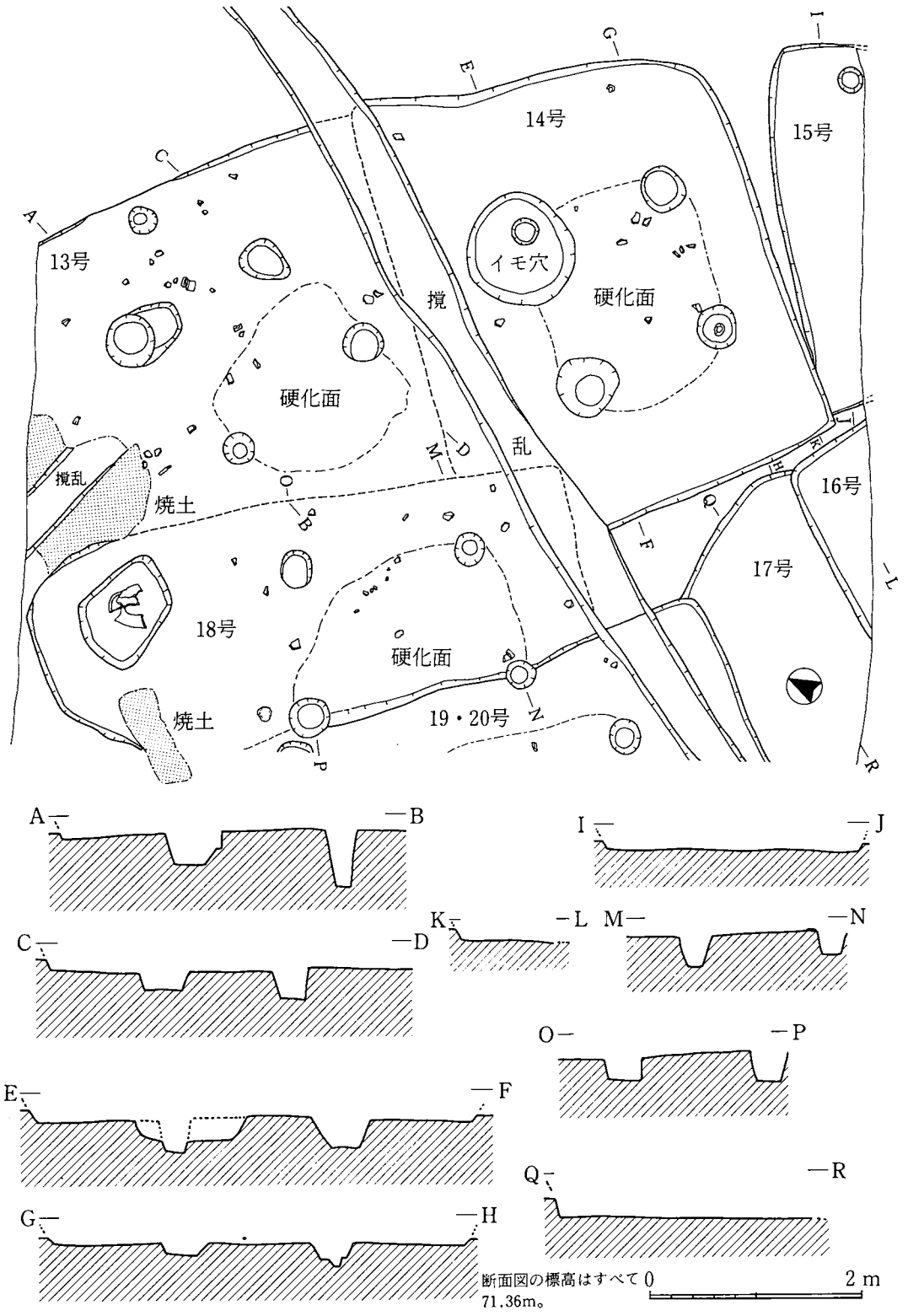
11号住居址は、12号住居址を切り、9号・23号住居址に切られている。残存しているのは、住居址の一部分である（検出部の規模約350×120cm、深さ約8～10cm）。西側の壁寄りに主柱穴2基を検出した（径約28～38cm、深さ約30～34cm）。その南側の柱穴の近くの床面には、硬化面が僅かに残っている。西側の壁に沿ったほぼ中央部に、長方形の掘り込みがある（30×66cm、深さ約10cm）。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

12号竪穴住居址（第97図）

12号住居址は、西側部分の一部分を検出した（検出部の規模約160×80cm、深さ約8～14cm）。12号住居址は11号住居址によって切られている。覆土は茶褐色土で、分層できない。

23号竪穴住居址（第97図）

23号住居址の検出した部分は、西側の一部分である（検出部の規模約220×30cm、深さ約



第99図　13号～18号竪穴住居址実測図

6～10cm)。23号住居址は11号住居址を切り、9号住居址より切られている。覆土は茶褐色土で、分層できない。

13号竪穴住居址（第99図）

13号住居址の壁は北側だけ確認することができ、14号・18号住居址との境部分の壁は攪乱などにより、明確に検出できなかった（検出部の規模約280cm、深さ約4～10cm)。実測図では、13号住居址の壁の推定線を破線で示した。床面内に4基の主柱穴を検出した（径約30～50cm、深さ約20～50cm)。その中で、南側2基の柱穴周辺の床面に、硬化面が残っている。西側の壁近では竈の焼土を確認した。北側の壁寄りの箇所で、ピット1基を検出した（径約28cm、深さ約10cm)。住居址内の床面より遺物が出土し、北側にその多くが分布している。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

14号竪穴住居址（第99図）

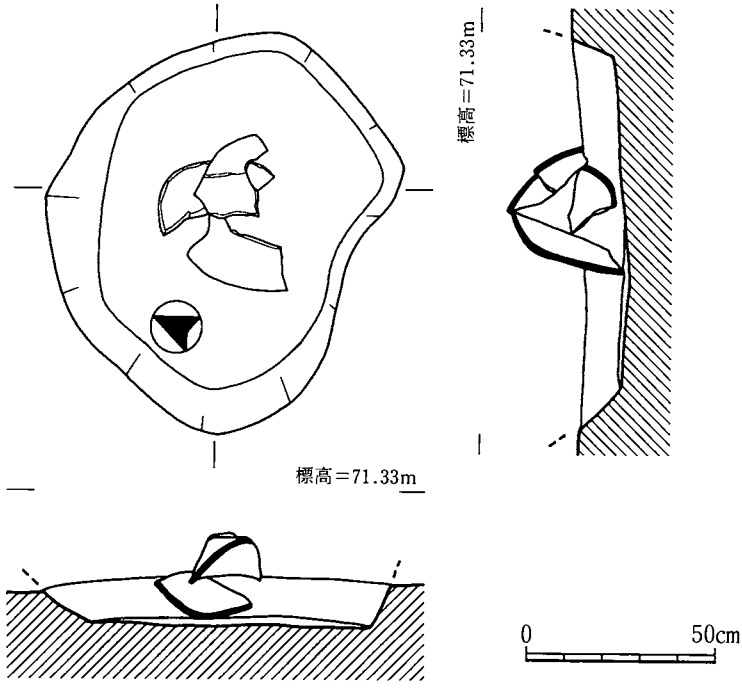
14号住居址は13号住居址と同じように、住居址の西壁の検出が困難であり、破線で推定線を表現した。南・北・東側の壁周辺は確認することができた（検出部の規模約360×300cm、深さ約8～12cm)。住居址のほぼ中央部に、4基の主柱穴を確認した。その中で、南東隅は二段掘りで、北隅はイモ穴で攪乱されている（径約24～60cm、深さ約10～30cm)。4基の主柱穴を結んだ線より内側の床面では、硬化面を確認した。出土した遺物は、その硬化面上が多く、少数が硬化面より外側の床面からである。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

15号竪穴住居址（第99図）

15号住居址は西側一部分を検出した（検出部の規模約350×80cm、深さ約8cm)。残りの部分は調査区外にのびる。15号住居址は14号住居址によって切られる。北壁近くより、ピット1基を検出した（径約24cm、深さ約10cm)。住居址覆土は茶褐色土であり、分層できない。

16号竪穴住居址（第99図）

検出したのは、住居址北側の一部分だけである（検出部の規模約170×80cm、深さ約10cm)。残りの部分は調



第100図　18号住居址内甕出土状況実測図

査区外にのびる。16号住居址は17号住居址を切っている。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

17号竪穴住居址（第99図）

17号住居址は、16号、19・20号住居址に切られており、検出したのは一部分だけである（検出部の規模約155cm、深さ約20cm）。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

18号竪穴住居址（第99図）

18号住居址は、19・20号に切られており、検出したのは北側のほぼ半分である（検出部の規模約180×100cm）。13号住居址との境は、北側隅で確認した以外は明確でない。確認した部分より、18号住居址は13号住居址を切っている。住居址内より、4基の主柱穴を検出した（径約28～38cm、深さ約20～30cm）。その柱穴より内側の床面には、硬化面が残っている。出土した遺物はこの硬化面を中心に分布している。西側の壁付近より、甕を伴う掘り込みと竈の焼土を確認した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

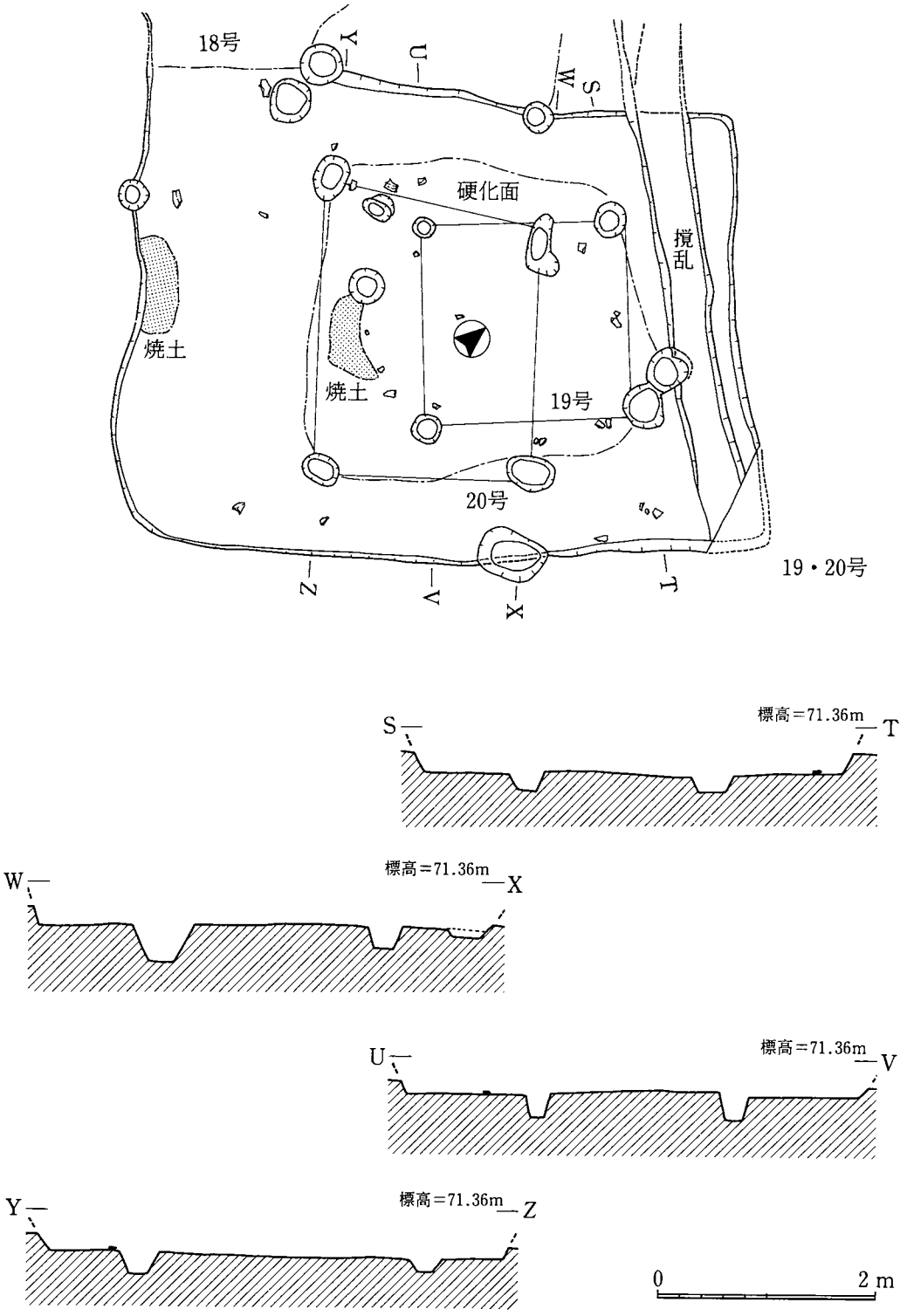
甕を伴う掘り込み（第100図）　掘り込みの平面形は不整な楕円形を呈する（長軸約105cm、短軸約80cm）。断面形は深い皿状である（深さ約10～13cm）。その掘り込みのほぼ中央部に、口縁部を欠いた須恵器の甕が伏せた状態で据えられている。甕が割れた状態で出土したため、甕内部には掘り込み覆土と同様な土が入っていたが、伏せた甕の内部は、本来空洞であったと思われる。掘り込みの覆土は、住居址の覆土と同様な茶褐色土である。

19・20号竪穴住居址（第101図）

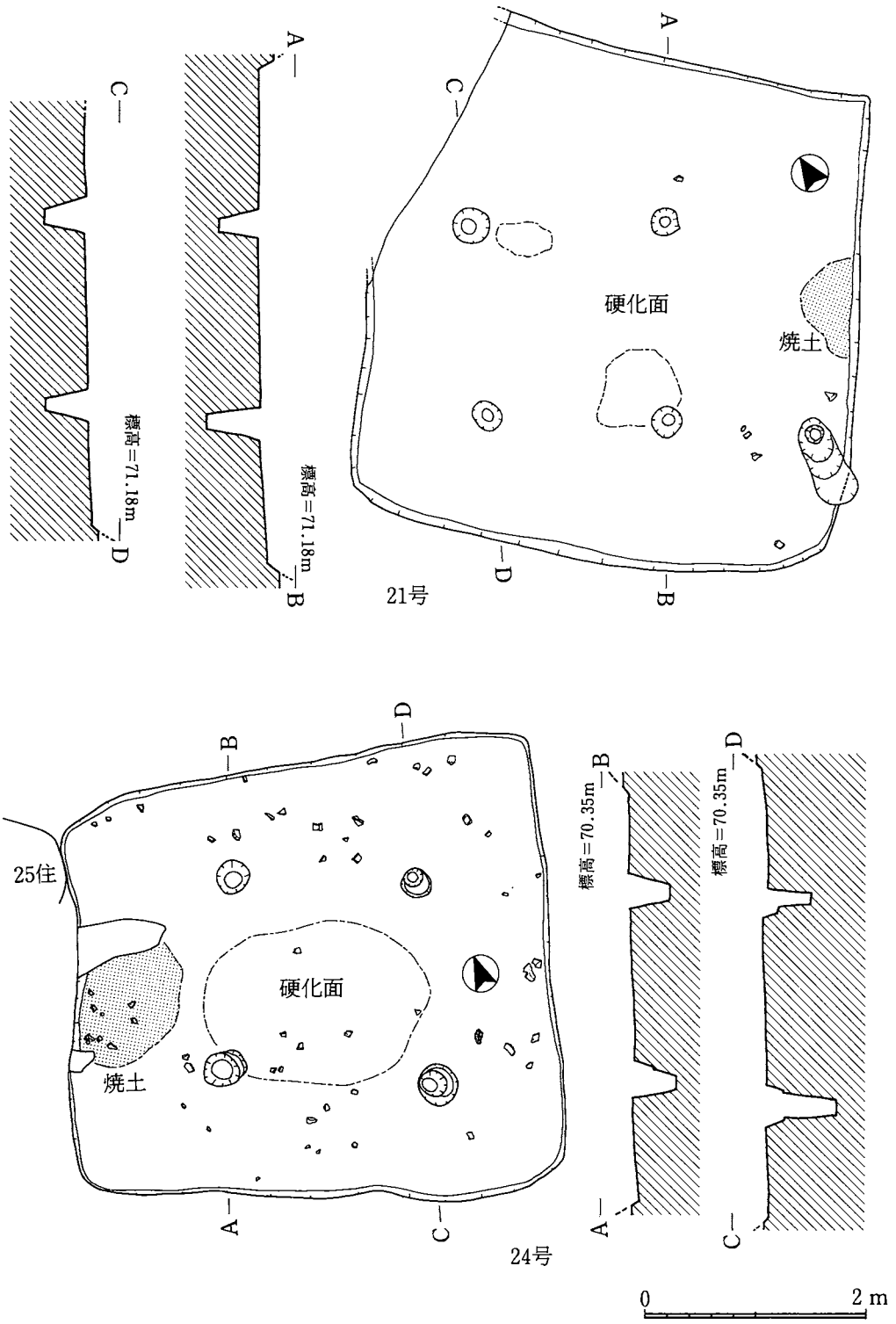
19・20号住居址は18号住居址を切っている。19・20号住居址としたのは、2軒の住居址が重複しているが、その境が不明確であるためである（検出部の規模約420×580cm、深さ約10～20cm）。しかし、柱穴については2軒分の推定が可能であった。それぞれの住居址の主柱穴は4基である（径約30～50cm、深さ約14～34cm）。これらの柱穴の内側及び周辺の床面で、硬化面を確認した。この硬化面も2軒分が重なっている。住居址内の二か所には焼土があり、西側が20号住居址、東側が19号住居址に伴うものと考えられる。主柱穴以外に、4基のピットを住居址内で検出した（径約30～40cm、深さ約8～15cm）。住居址内の床面より、遺物が散在状態で出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

21号竪穴住居址（第102図）

住居址の北西隅が調査区外にのびる。検出した部分は、方形の平面プランを呈する（検出部の規模約430×400cm、深さ約8～12cm）。床面に掘り込んだ4基の主柱穴がある（径約24～34cm、深さ約34～50cm）。その中の2基の柱穴周辺の床面に、硬化面が部分的に残っている。東側の壁の中央部に沿って、竈の焼土だけが残存していた。その南側に、楕円形の三段掘りのピット1基がある（長軸約80cm、短軸約30cm、深さ約15cm）。東側の壁寄りの床面より、遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。



第101図　19号・20号竪穴住居址実測図



第102図　21号・24号竪穴住居址実測図

24号竪穴住居址（第102図）

24号住居址は25号住居址を切っている。24号住居址は略方形の平面形を呈する（約440×320～390cm、深さ約4～8cm）。床面に掘り込んだ4基の主柱穴を検出した。その中の2基は二段掘りである（径約28～38cm、深さ約38～64cm）。その主柱穴より内側の床面には、硬化面が残っている。西側の壁に沿ったほぼ中央部に、粘土で作られた竈の両袖部底面を検出した。その両袖に挟まれた所には焼土がある。床面や焼土より出土した遺物は散在状態を呈している。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

25号竪穴住居址（第103図）

25号住居址の平面形は、竈部分の壁が張り出した略方形である（約280×310cm、深さ約10～14cm）。25号住居址は24号住居址より切られている。4基の主柱穴があり、その中の東側2基は壁に沿った状態で掘り込まれている（径約24～32cm、深さ約40～58cm）。西側の壁は張り出しており、その内側に焼土が残る竈の底面を検出した。竈内には円形の掘り込みがある（径約50cm、深さ約20cm）。掘り込みの覆土は二つに分層できる。③層は灰褐色土で、焼土とカーボンを多量に含む。④層は赤褐色の焼土である。床面より遺物が散在状態で出土した。住居址の覆土は二層に分けられ、①層が茶褐色土、②層が黒褐色土である。

26号竪穴住居址（第103図）

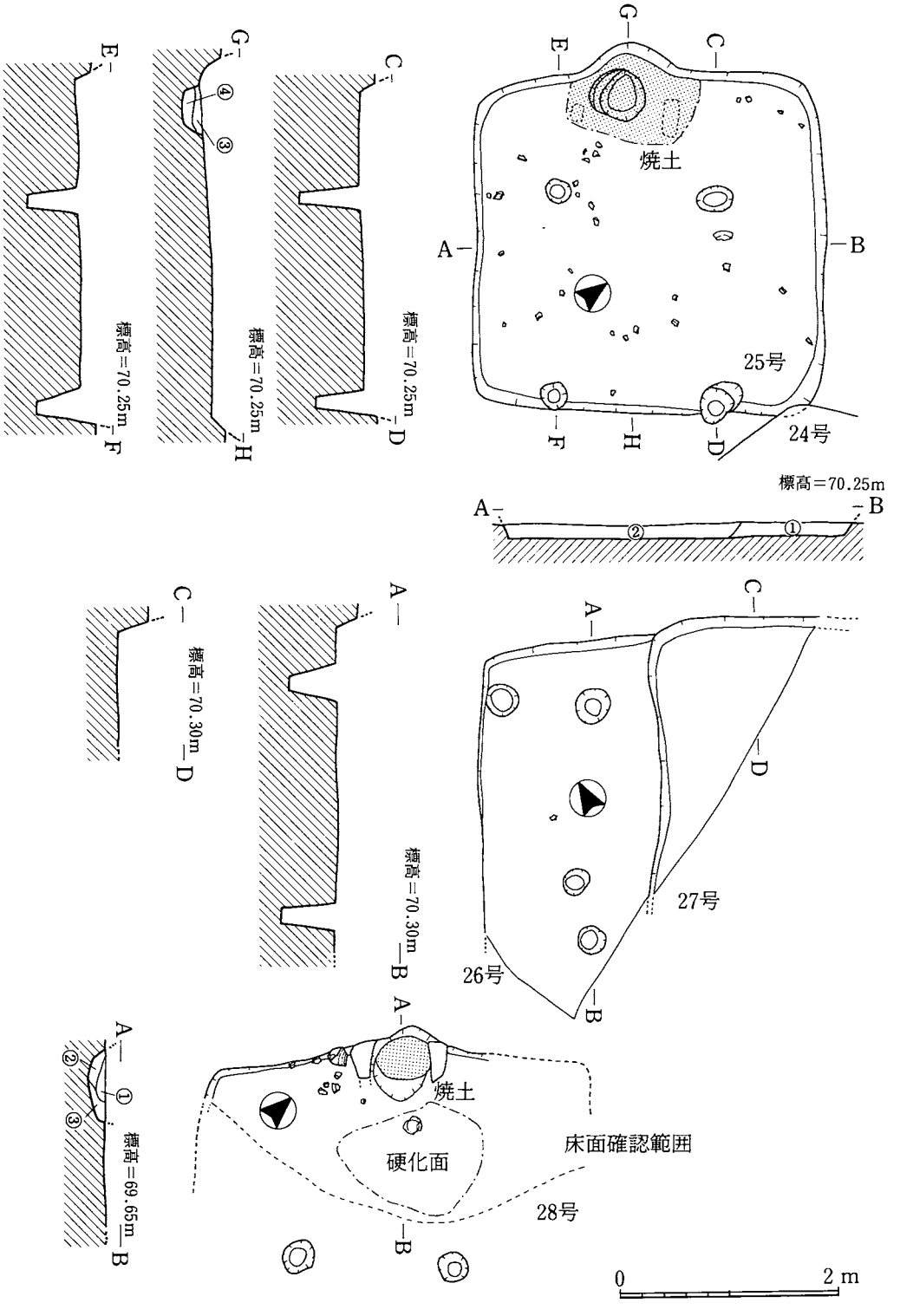
26号住居址は、南東側が調査区外にのび、27号住居址によって切られており、検出したのは一部分である（検出部の規模約250×160cm、深さ約20cm）。2基の主柱穴を確認した（径約26～30cm、深さ約44～50cm）。主柱穴以外に2基のピットを検出した（径約20～30cm、深さ約10～15cm）。床面より須恵器片が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

27号竪穴住居址（第103図）

27号住居址で検出したのは、一部分であり、南東側が調査区外にのびる（検出部の規模約240×130cm、深さ約28cm）。27号住居址は26号住居址を切っている。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

28号竪穴住居址（第103図）

28号住居址は、東側が攪乱されており、確認したのは一部分である（検出部の規模約250×20cm、深さ約8cm）。西側の壁が張り出した箇所に、竈の底面を確認した。竈の両袖は灰白色粘質土で作られており、両袖に挟まれた部分が皿状に窪んでいる。その窪みの覆土は三つに分層できる。①層は赤褐色土で、焼土・灰を多量に含んでいる。②層は灰とカーボンを多量に含んだ黒褐色土である。③層は灰黒褐色土で、焼土・灰を少量含む。竈の前面の床面に、硬化面が残っている。床面を確認できたのは、硬化面より僅かに東側に寄った範囲である。その床面確認範囲より東側に、2基の柱穴を確認した（径約28～30cm、深さ約35～40cm）。竈の周囲の床面より、遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。



第103図　25号～28号 竪穴住居址実測図

29号竪穴住居址（第104図）

29号住居址は東側部分が調査区外にのびるが、平面形は略方形になると思われる（検出部の規模約460×390cm、深さ約5～12cm）。29号住居址は30～32号住居址を切っている。4基の主柱穴を確認した（径約30～50cm、深さ約30～50cm）。この他に、3基のピットを検出した（径約20～30cm、深さ約10～50cm）。西側の壁に沿ったほぼ中央部に、竈の底面がある。竈の袖部は灰白色の粘質土で作られ、北側だけ残っていた。竈の周辺には焼土がある。床面より遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

30号竪穴住居址（第104図）

30号住居址は、29号住居址に切られており、検出したのは一部分である（検出部の規模約320×160cm、深さ約8cm）。29号住居址寄りの床面には、硬化面が残っている。硬化面・床面より遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

31号竪穴住居址（第104図）

31号住居址は、北側を29号住居址より切られ、東側部分が調査区外にのびるため、検出したのは一部分である（検出部の規模約240×110cm、深さ約8cm）。1基の柱穴を確認した（径約30～50cm、深さ約30～50cm）。検出部の東側の床面に硬化面がある。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

32号竪穴住居址（第104図）

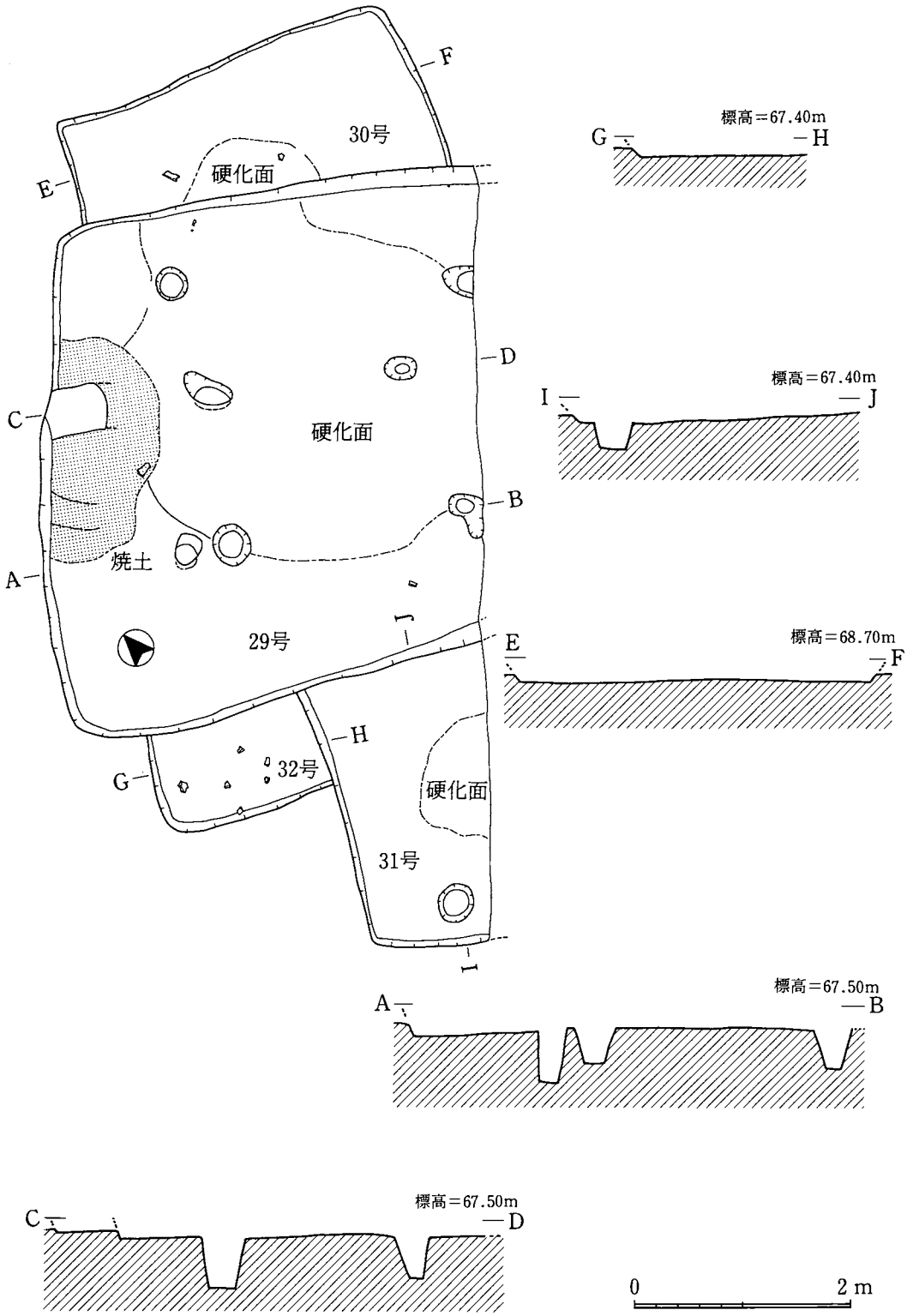
32号住居址は、29号・31号住居址より切られており、検出したのは一部分である（検出部の規模約160×90cm、深さ約8cm）。床面より遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

33号竪穴住居址（第105図・第106図）

33号住居址は、他の住居址と比べて構造や出土遺物の構成が特異である。第105図には住居址覆土中の遺物出土地点を示した。住居址の東・南壁寄りの部分には、遺物が散在的に分布している。遺物が集まっているのは、2基の掘り込み（第106図掘り込み1・2）の上部及びその周辺部分である。遺物分布を細かく見ると、住居址の南西部に石器・自然礫が集中しており、西側に鉄製品・スラグが多い。ふいごの羽口が掘り込み1の上面より出土した。

第106図は完掘後の実測図で、床面より出土した遺物などを記入している。33号住居址は、34号・35号住居址を切っている。平面形は略方形である（規模約520×500cm、深さ約10～20cm）。4基の主柱穴を確認した（径約30～40cm、深さ約20～60cm）。4基の柱穴の中で、西隅のものは二段掘りになっており、北隅のものは掘り込み内にある。住居址内には、床面を穿った不定形の掘り込みが2基ある（掘り込み1・2）。

掘り込み1は、住居址の中央より北側に寄った箇所にあり、その北側端部は壁近くまでのびている。平面形は隅丸の不定な長方形、断面形は深い皿状を呈する（約220×80～140cm、深



第104図　29号～32号 竪穴住居址実測図

さ約10～14cm)。掘り込み内の床面は全体が弱く硬化しており、その面より遺物が出土した。また、東側の壁近くには強く硬化した面があり、そこより焼土・炭が出土した。掘り込みの東壁に寄った箇所に、さらにピットを穿っている（径約24、深さ約8cm)。掘り込みの北側端部から住居址の北壁・壁外にかけて、①層～③層が堆積していた。①層は赤褐色土で、焼土・カーボンを多量に含んでいる。②層は茶褐色土で、焼土・カーボンを中量含む。③層は赤色の細粒で、赤色顔料に酷似している。

掘り込み2は、住居址の西壁に沿った箇所にある。平面形は不定形で（最大長約180cm、最大幅約160cm)、内部をさらに不定形に掘り込んでいる（最大長約90cm、最大幅約70cm)。断面形は二段の深い皿状を呈する（深さ約8～22cm)。掘り込み内の上段の床面は、東側部分が硬化している。上段の床面には、遺物・炭が残っており、南側に焼土のまとまりがある。下段の床面からは、遺物・粘土を検出した。

34号竪穴住居址（第107図）

34号住居址は、33号住居址に切られているが、平面形は略方形になると思われる（検出部の規模約380×340cm、深さ約6～10cm)。4基の主柱穴を確認した（径約28～40cm、深さ約30～50cm)。これらの柱穴の内側を中心にして、硬化面が残っている。遺物は硬化面や東側の壁寄りの床面から出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

35号竪穴住居址（第107図）

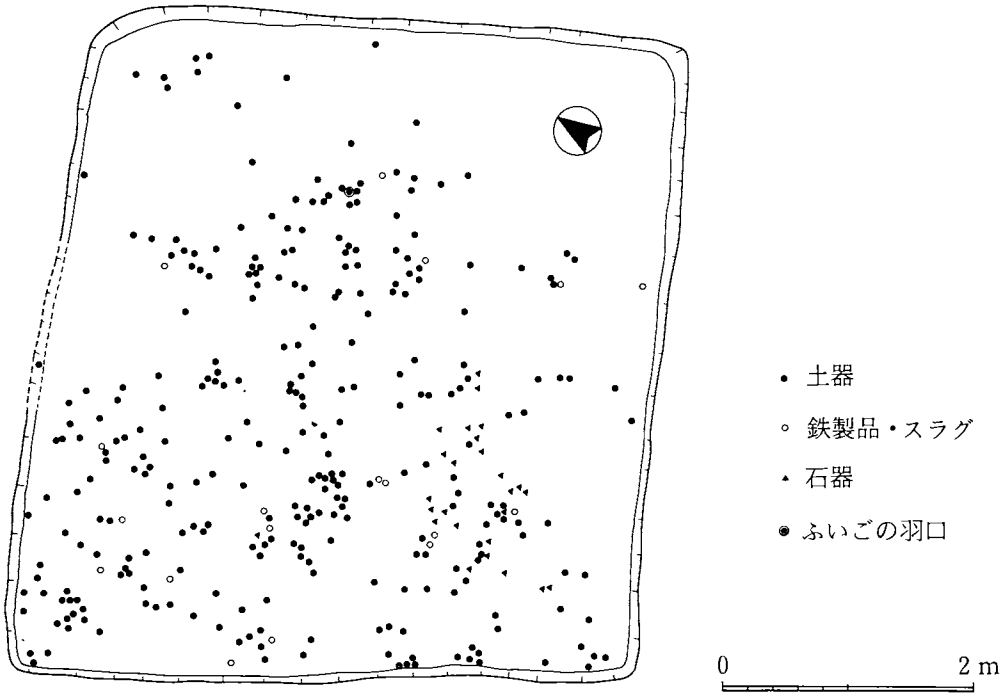
35号住居址は、33号住居址より切られており、検出したのは一部分である（検出部の規模約300×200cm、深さ約8cm)。南側の壁近くに、柱穴2基を確認した（径約26～32cm、深さ約30～40cm)。床面より遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

36号竪穴住居址（第107図）

36号住居址は、南側部分が攪乱を受けており、検出できたのは一部分である（検出部の規模約400×130cm、深さ約8～12cm)。北側の壁寄りの箇所で、2基の柱穴を確認し、東側のものは二段掘りになっている（径約30～50cm、深さ約40～60cm)。北側の壁に沿ったほぼ中央部に、竈の底面が残っている。竈の袖部は灰白色の粘質土で作られている。袖部の内側にはカーボンを含んだ焼土がある。竈の前面で、柱穴に挟まれた床面には、硬化面が残っていた。硬化面・床面より遺物が出土した。住居址の覆土は暗褐色土で、分層できない。

37号竪穴住居址（第108図）

37号住居址の平面形は略方形である（約380×330cm、深さ約6～8cm)。37号住居址は38号住居址を切っている。37号住居址のほぼ中央部を耕作による攪乱溝が東西方向に二本走っている。床面に掘り込んだ4基の柱穴を確認し、北側の2基は耕作溝で攪乱を受けている（径約32～34cm、深さ約44～60cm)。東側の壁に沿ったほぼ中央部には、竈に伴う焼土が残っていた。床面から遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。



第105図　33号竪穴住居址出土遺物分布図

38号竪穴住居址（第108図）

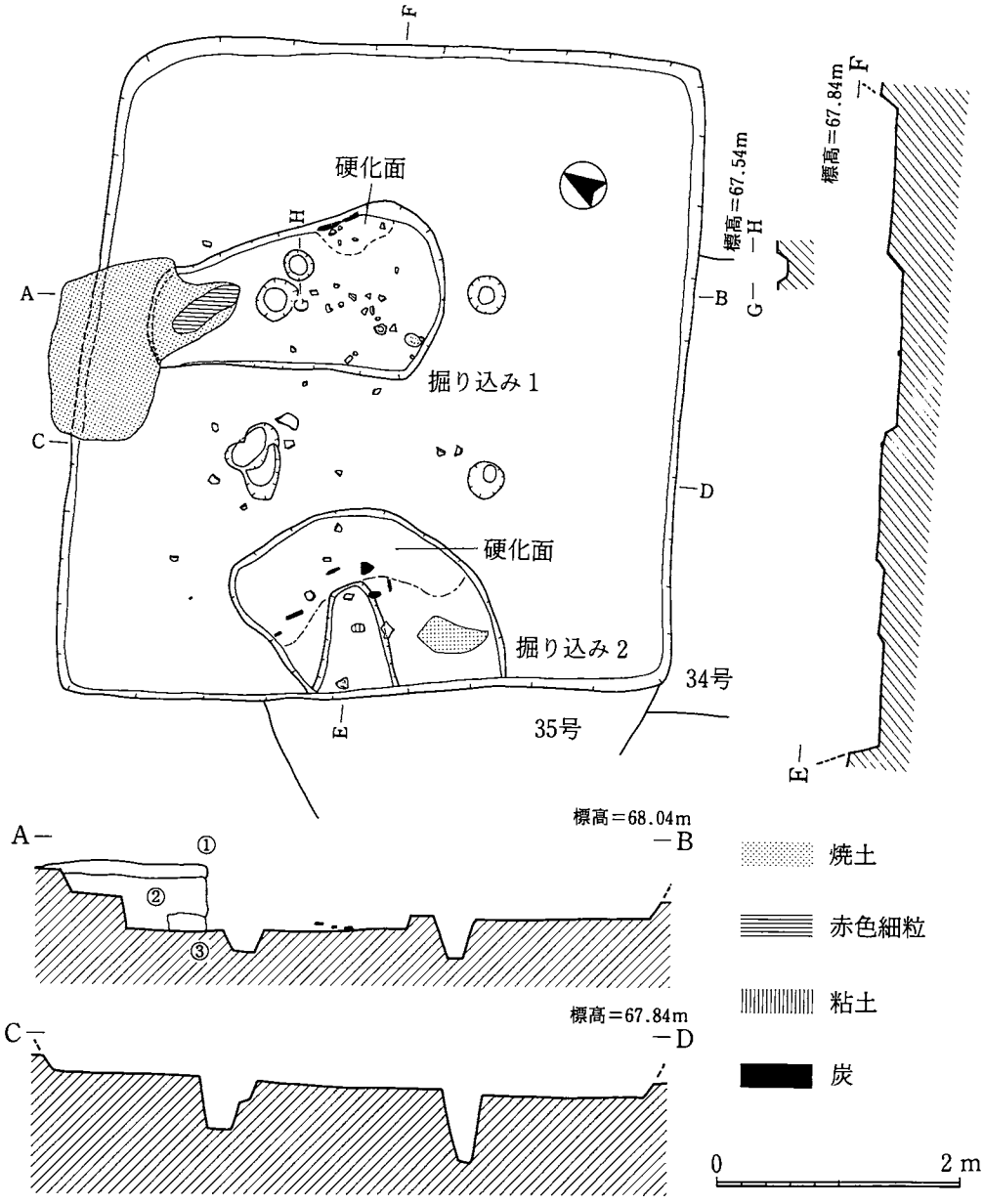
38号住居址は、37号住居址より切られているが、略方形の平面形を呈すると思われる（約320×280cm、深さ約20～28cm）。37号住居址と同様に耕作による攪乱の溝2本がある。床面に掘り込んだ4基の柱穴を検出し、そのうち3基は二段掘りになっている（径約22～40cm、深さ約30～64cm）。床面から遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

39号竪穴住居址（第109図）

39号住居址の平面形は略方形を呈する（約420×380cm、深さ約8～10cm）。床面に掘り込んだ4基の柱穴を確認した（径約24～32cm、深さ約38～44cm）。西側の壁に沿ったほぼ中央部には、竈の底面が残っていた。確認できたのは、灰白色の粘土で作った袖部の片側と断面形が皿状になる円形の掘り込みである（径約70cm、深さ約22cm）。円形の掘り込みの覆土は①層～⑥層に分層できた。①層は壁土と灰が混じる淡灰褐色土。②層は焼土を多量に含む黒褐色土。③層は焼土を含む黄褐色土。④層は橙色の焼土の固まりである。⑤層は黒褐色土。⑥層は焼土を少量含んだ黒褐色土。床面から遺物が散在状態で出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

40号竪穴住居址（第110図）

40号住居址は、41号住居址より切られており、ほぼ半分を検出した（検出部の規模約390×330cm、深さ約2cm）。床面に掘り込んだ2基の柱穴を検出した（径約22～28cm、深さ約

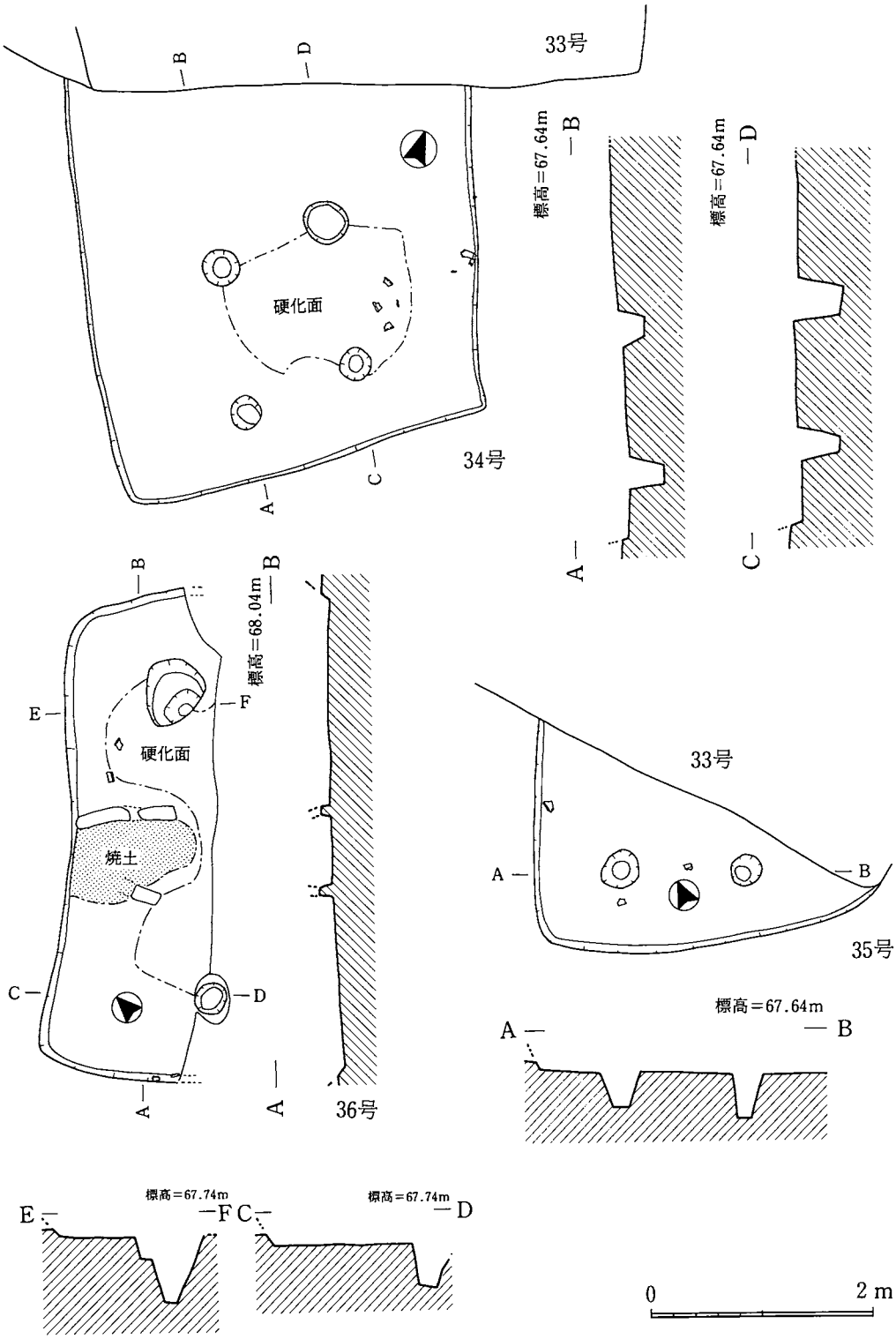


第106図　33号竪穴住居址実測図

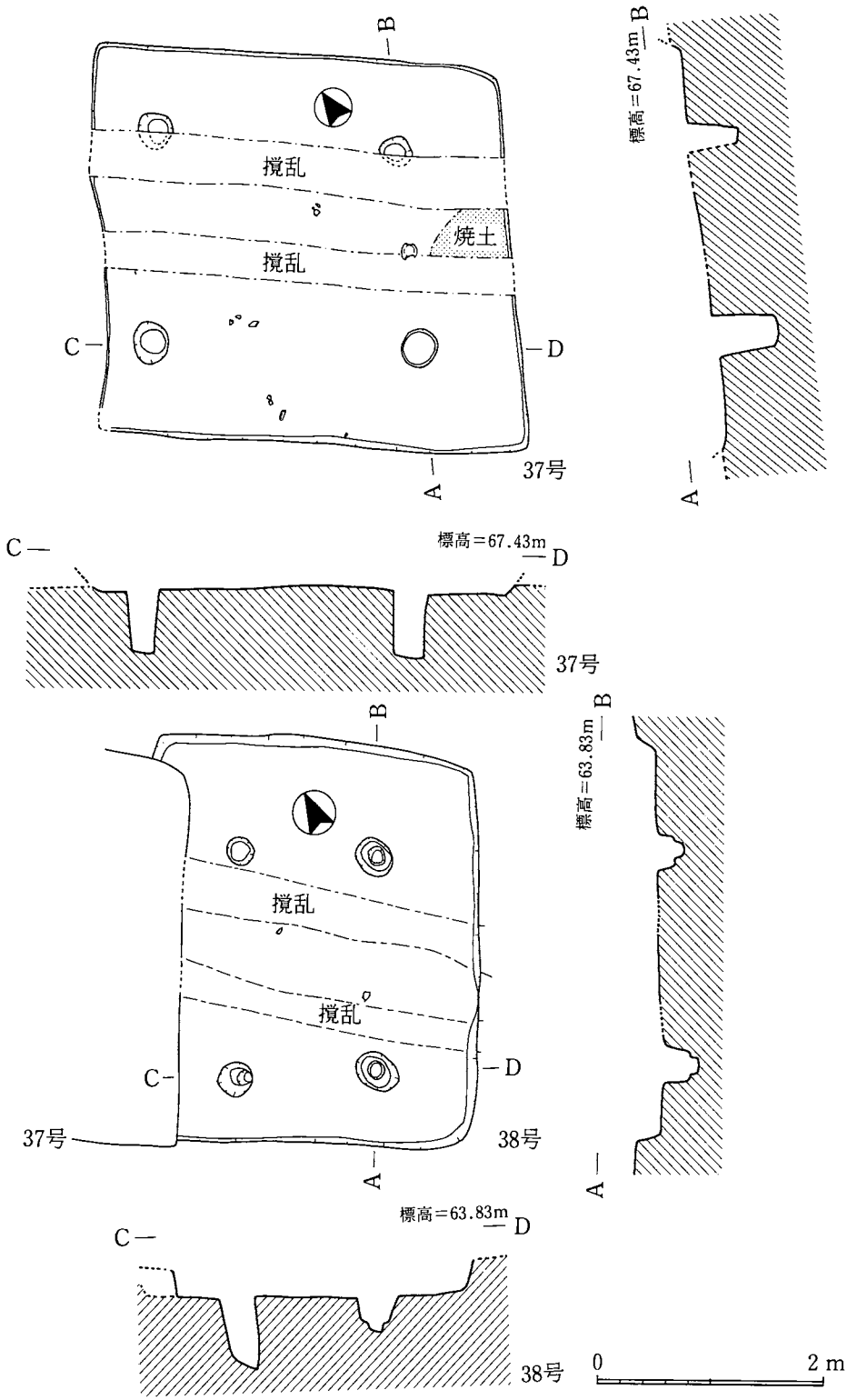
24～30cm)。その柱穴の並びより東側の床面には、硬化面が残っている。西側の壁寄りの中央部には竈がある。竈は灰白色粘土で作った両袖部の底面及び円形の掘り込みが残存していた。掘り込み内には焼土が入っていた。床面・硬化面より、遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

41号竪穴住居址（第110図）

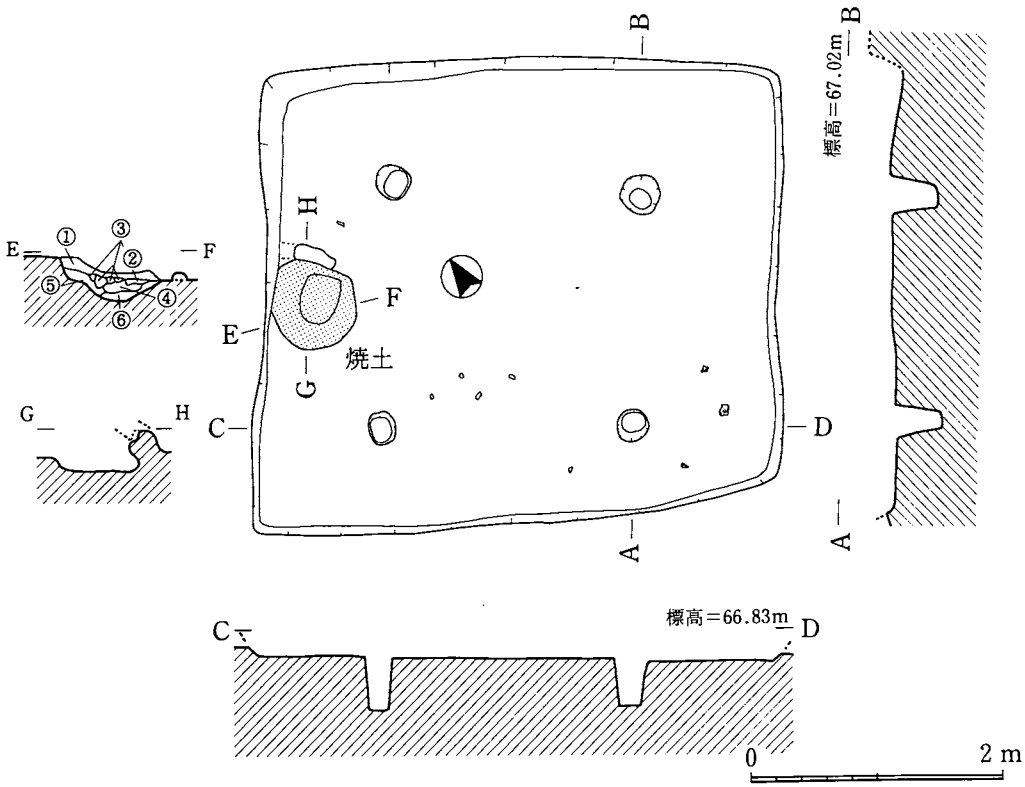
41号住居址は、44号住居址より切られており、検出したのは一部分である（検出部の規模約360×330cm、深さ約2cm)。3基の柱穴が床面より掘り込まれている（径約24～50cm、



第107図　34号～36号竪穴住居址実測図



第108図　37号・38号竪穴住居址実測図



第109図　39号竪穴住居址実測図

深さ約18～50cm)。西側の壁寄りの床面に、硬化面が残っている。北側の壁に沿った中央部に、竈がある。竈は灰白色粘土で作った袖部の片側底面及び焼土が入る円形の掘り込みが残存していた。床面・硬化面より、遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

42号竪穴住居址（第110図）

42号住居址は40号・41号住居址より切られており、検出できたのは一部分だけである（検出部の規模約320×60cm、深さ約2cm)。北側の壁に沿った中央部に、竈の底面の掘り込みだけが残っていた。掘り込み内には焼土が入る。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

43号竪穴住居址（第110図）

43号住居址は、40号・42号・44号住居址より切られている。そのため、住居址の一部分しか検出できなかった（検出部の規模約340×240cm、深さ約10cm)。床面より遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

44号竪穴住居址（第110図))

44号住居址の平面形は略方形を呈する（約300×290cm、深さ約8～14cm)。床面に掘り込んだ4基の柱穴を確認した（径約24～30cm、深さ約14～40cm)。4基中の1基の柱穴は二つの柱穴が重複している。4基の柱穴を結んだ線の内側を中心にして、硬化面がある。西側の壁に沿ったほぼ中央部には、竈が残っていた。竈の検出部分は、灰白色の粘土で作った両袖部と

両袖に挟まれた断面形が皿状になる楕円形の掘り込みである（長軸約60cm、短軸約30cm、深さ約24cm）。楕円形の掘り込みの覆土は①層～⑤層に分層できた。①層は灰白色土で、焼土と灰を多量に含む。②層は焼土・灰を少量含む茶灰白色土。③層は焼土・カーボンを少量含む淡茶褐色土。④層は赤褐色の焼土である。⑤層は焼土を少量含む茶褐色土である。竈の前面の硬化面には焼土がほぼ円形に広がっている。床面や硬化面から遺物が散在状態で出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

45号竪穴住居址（第110図）

45号住居址は、43号住居址より切られているが、略方形の平面形を呈すると思われる（約330×250cm、深さ約4cm）。床面に掘り込んだ4基の柱穴を検出した（径約22～30cm、深さ約14～50cm）。4基の柱穴の内側を中心に、硬化面が残っている。床面・硬化面から遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

46号竪穴住居址（第110図）

46号住居址は、45号住居址より切られており、約半分を検出した。住居址の平面形は略方形を呈すると思われる（約400×390cm、深さ約4～8cm）。床面に掘り込んだ3基の柱穴を検出した（径約22～28cm、深さ約10～30cm）。南隅の柱穴には礫が入っていた。南側の2基の柱穴の周辺に、硬化面が残っている。床面から遺物が出土した。住居址の覆土は茶褐色土で、分層できない。

ピット群（第111図・第112図）

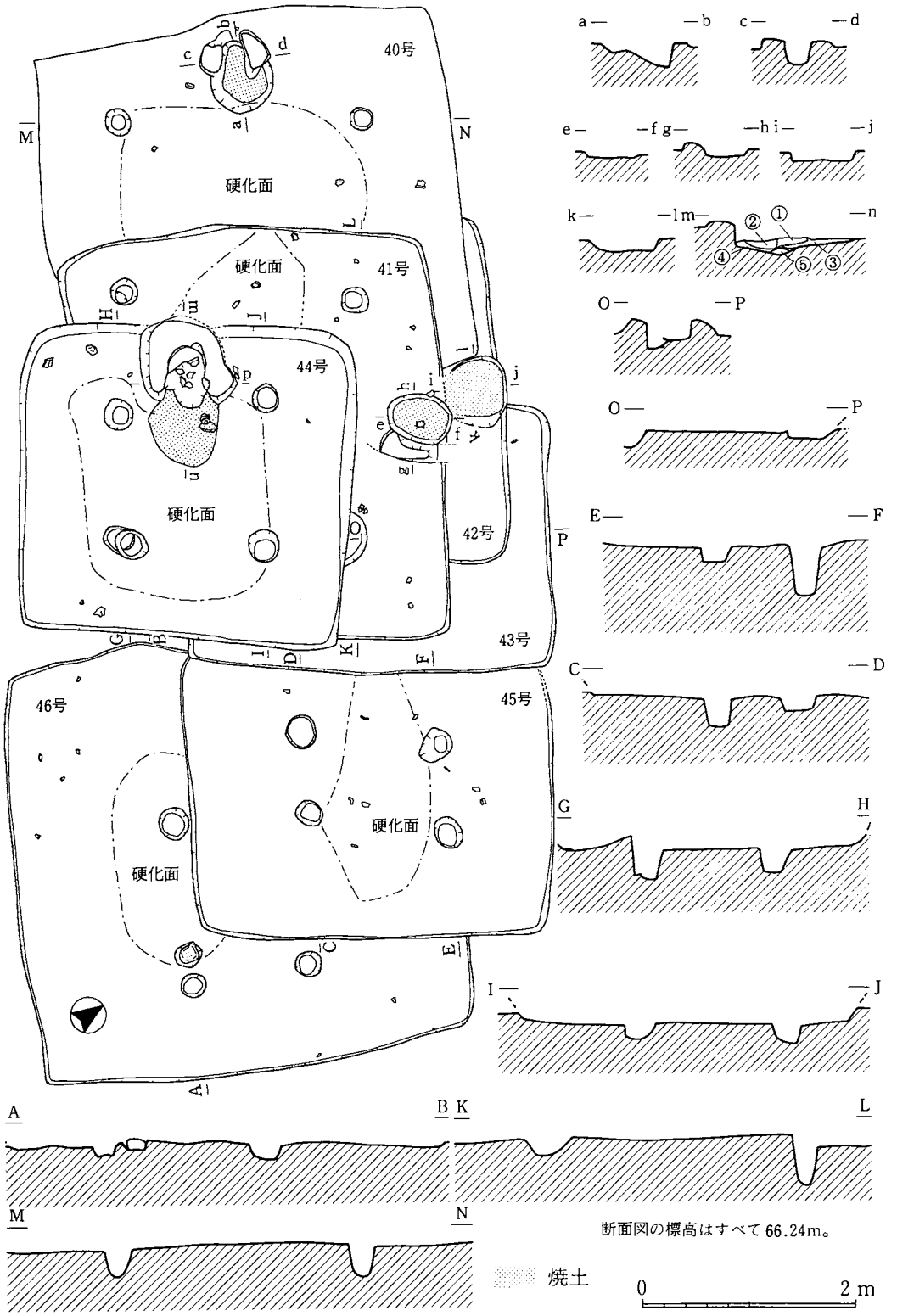
ピットはⅠ区のほぼ中央より東側と西側端部とⅡ区の東側端部にある。Ⅰ区のほぼ中央部にあるピットは、2号・3号掘立柱建物跡の西側に多くが密集している。また、21号竪穴住居址の西側にも、少数のピットが分布している（第111図）。Ⅱ区に分布しているピットは、4号・5号掘立柱建物跡の周辺に密集している（第112図）。

1号掘立柱建物跡（第113図）

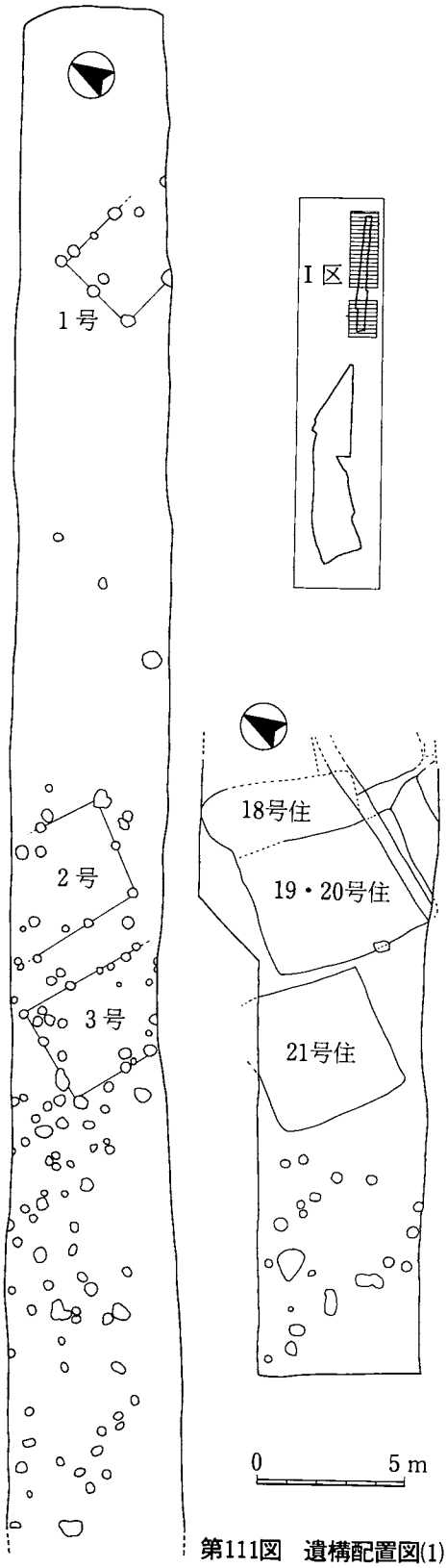
1号掘立柱建物跡は、桁行方向が調査区外にのび、検出したのは1間分である。柱間寸法は、北側桁部が約240cm（8尺）、南側桁部が約210cm（7尺）である。確認できた梁部分は西側だけであり、2間（約300cm、10尺）で、柱間寸法は等間である（約150cm、5尺）。柱穴の平面形は、ほぼ円形である（径約40～44cm）。柱穴の断面形は1基が二段掘りで、他は筒状を呈している（深さ約30～60cm）。柱穴の覆土は黒褐色土であり、柱痕跡は確認できなかった。

2号掘立柱建物跡（第114図）

2号掘立柱建物跡は、桁行方向の一部が調査区外にのびる。検出できた桁部分は、北東側1間分、南西側が2間分である。北東側桁部の柱間寸法は約210cm（7尺）である。南西側桁部の柱間寸法は西側から、約240cm（8尺）、約150cm（5尺）である。梁部分は東側だけ確認で



第110図　40号～46号竪穴住居址実測図



第111図　遺構配置図(1)

き、2間である。梁行は約330cm(11尺)あり、柱間寸法は北側から、約150cm(5尺)、約180cm(6尺)である。柱穴の平面形は、東隅の柱穴以外がほぼ円形である(径約26～34cm)。東隅の柱穴平面形は、3基が重なり不定形になっている(約64×52cm)。柱穴の断面形は筒状になる(深さ約20～60cm)。柱穴の覆土は黒褐色土であり、柱痕跡は確認できなかった。

3号掘立柱建物跡(第115図)

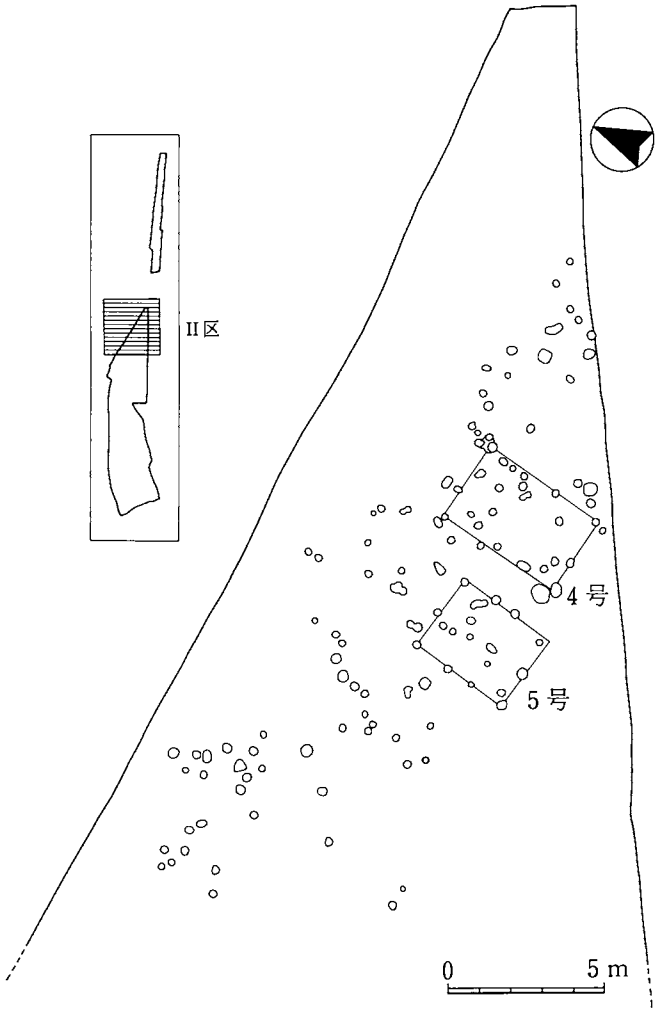
3号掘立柱建物跡は、桁行方向の一部が調査区外にのび、検出できた桁部分は、北側3間分、南側が2間分である。北側桁行部の柱間寸法は西側から、約180cm(6尺)、約105cm(3.5尺)、約150cm(5尺)である。南側桁部の柱間寸法は西側から、約195cm(6.5尺)、約90cm(3尺)である。梁部分で確認できたのは西側だけで、3間である。梁行は約345cm(11.5尺)あり、柱間寸法は北側から、約120cm(4尺)、約120cm(4尺)、約105cm(3.5尺)である。柱穴の平面形は、西側梁部の1基の柱穴以外がほぼ円形である(径約20～50cm)。西側梁部の1基の柱穴の平面形は、楕円形を呈している(長軸約70cm、短軸約40cm)。柱穴の断面形は、梁部の両端、南側桁部の東端部の柱穴が二段掘りになり、それら以外が筒状になる(深さ約18～100cm)。柱穴の覆土は黒褐色土であり、柱痕跡は確認できなかった。

4号掘立柱建物跡(第116図)

4号掘立柱建物跡は、2間×3間の建物で、主軸がほぼ南北方向である。北側の梁行は約255cm(8.5尺)で、柱間寸法は西側から、約

165cm(5.5尺)、約90cm（3尺）である。南側の梁行は約240cm(8尺)で、柱間寸法は西側から、約150cm(5尺)、約90cm（3尺）である。西側の桁行は約405cm(13.5尺)で、柱間寸法は北側から、約135cm(4.5尺)、約105cm(3.5尺)、約165cm(5.5尺）である。東側の桁行は約435cm(14.5尺)で、柱間寸法は北側から、約150cm(5尺)、約150cm(5尺)、約135cm(4.5尺）である。柱穴の平面形は、北側梁部の東端部と東側桁部の2基以外がほぼ円形である(径約20～40cm)。南側梁部の西端部の柱穴平面形は、3基が重なり不定形で（約70×40cm)、西側梁部の1基の柱穴平面形は、楕円形を呈する（長軸約48cm、短軸約30cm)。柱穴の断面形は2基が二段掘りになり、他は筒状になる（深さ約30～60cm)。柱穴の覆土は黒褐色土であり、柱痕跡は確認できなかった。

5号掘立柱建物跡（第117図）　5号掘立柱建物跡は、1基の柱穴が攪乱により、確認できなかったが、2間×3間の建物になると考えられる。主軸は4号掘立柱建物跡と同じで、ほぼ南北方向である。北側の梁行は約255cm(8.5尺)で、柱間寸法は東側から、約135cm(4.5尺)、約120cm(4尺）である。南側の梁行は1間分だけ確認でき、柱間寸法は約120cm(4尺）である。東側の桁行は2間分だけ検出できた。柱間寸法は北側から約125cm(4尺)、約75cm(2.5尺）である。西側の桁行は約330cm(11尺)で、柱間寸法は北側から、約120cm(4尺)、約90cm（3尺）、約120cm(4尺）である。柱穴の平面形はほぼ円形である（径約20～36cm)。柱穴の断面形は筒状を呈する（深さ約22～40cm)。柱穴覆土は黒褐色土で、柱痕跡は確認できなかった。

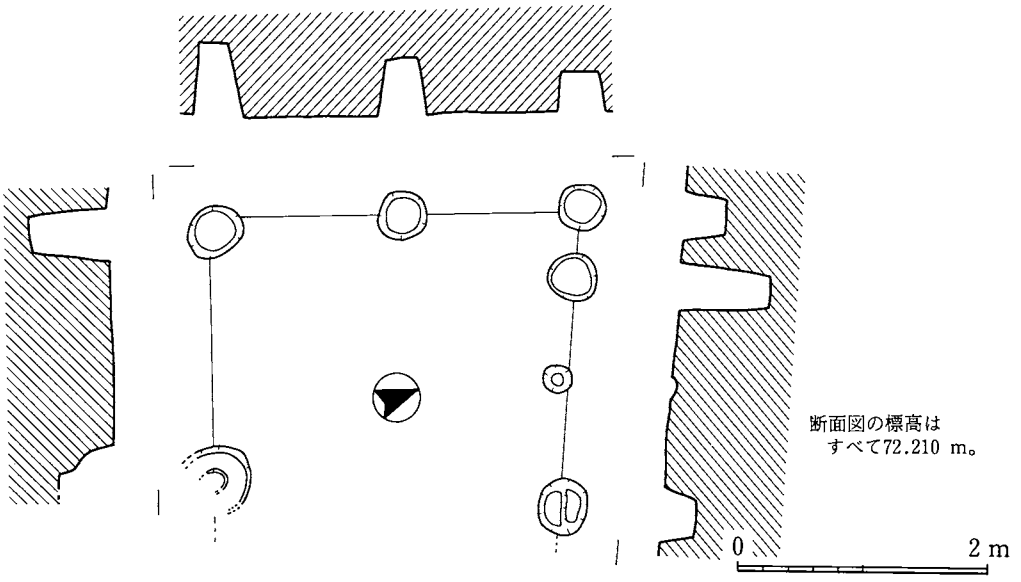


第112図　遺構配置図(2)

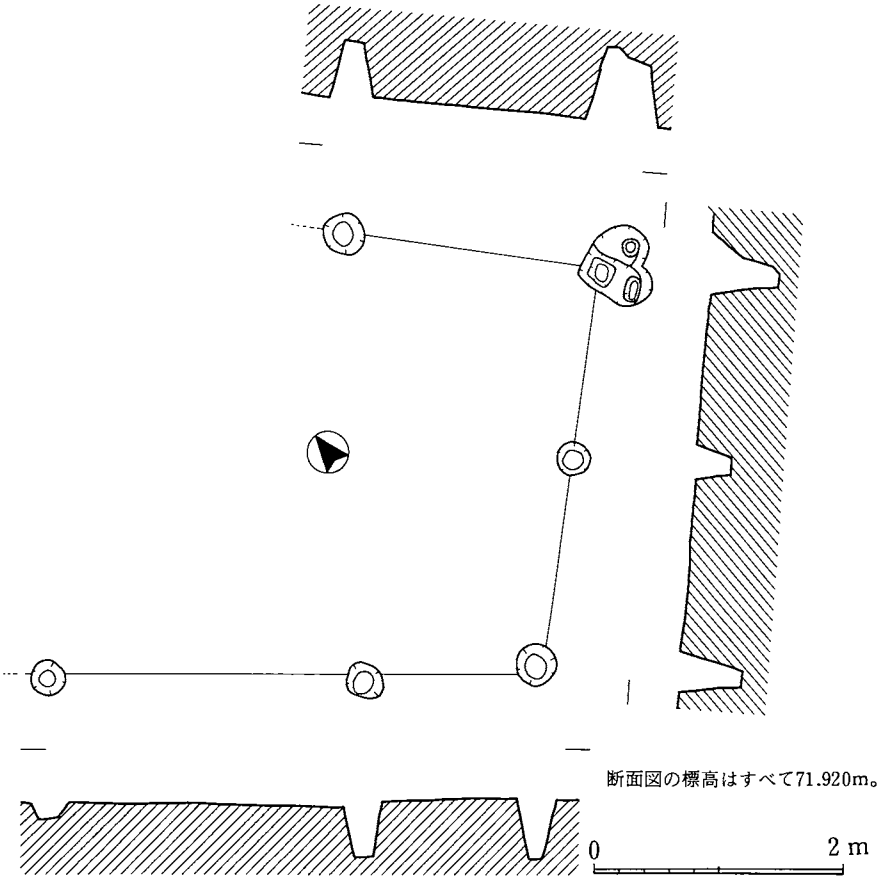
12号道路跡

（第118図・第119図）

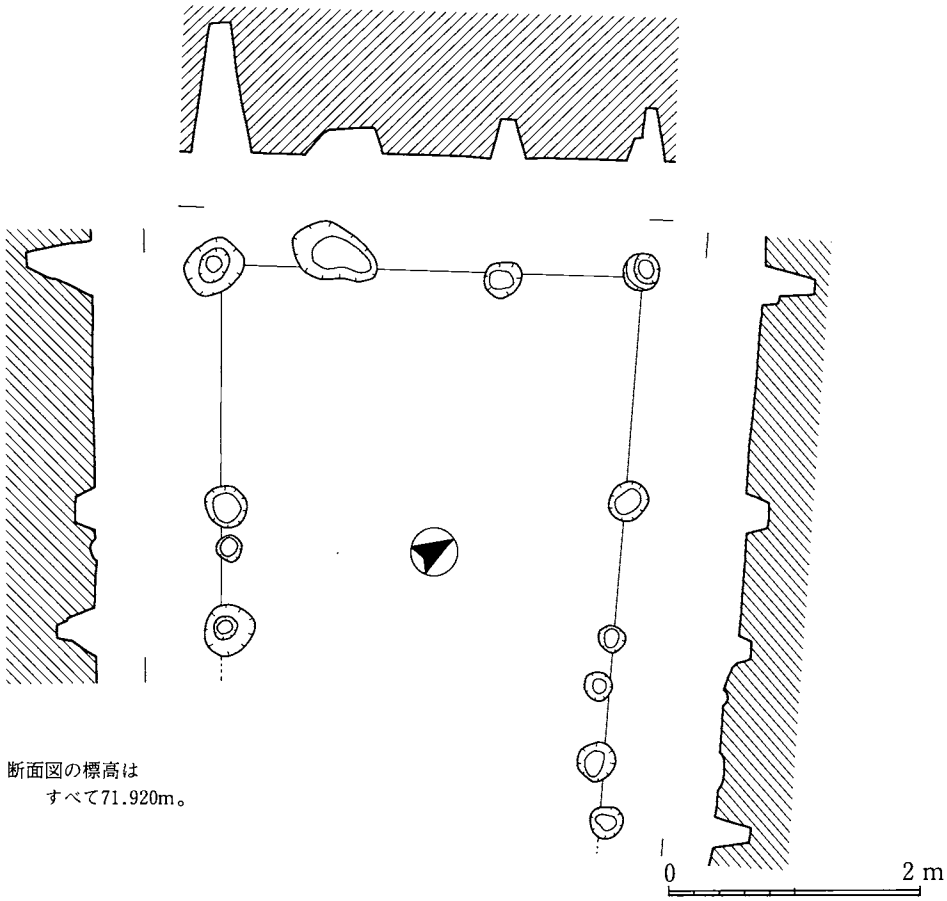
第118図には道路跡を東西の二箇所に分けて示した（1地点・2



第113図　1号掘立柱建物跡実測図



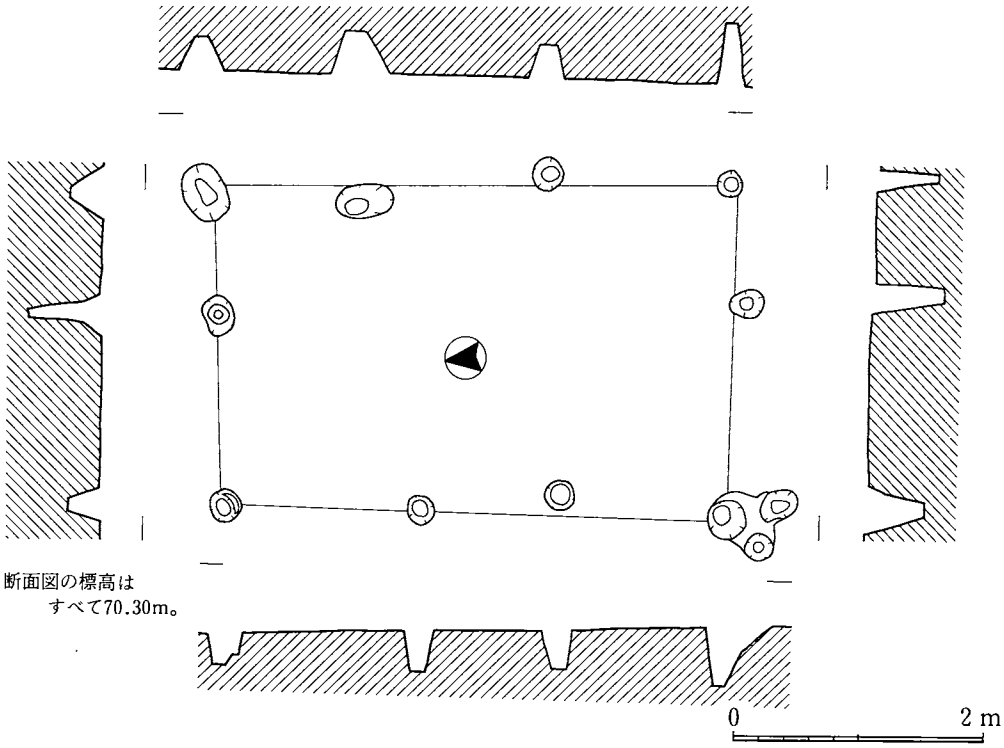
第114図　2号掘立柱建物跡実測図



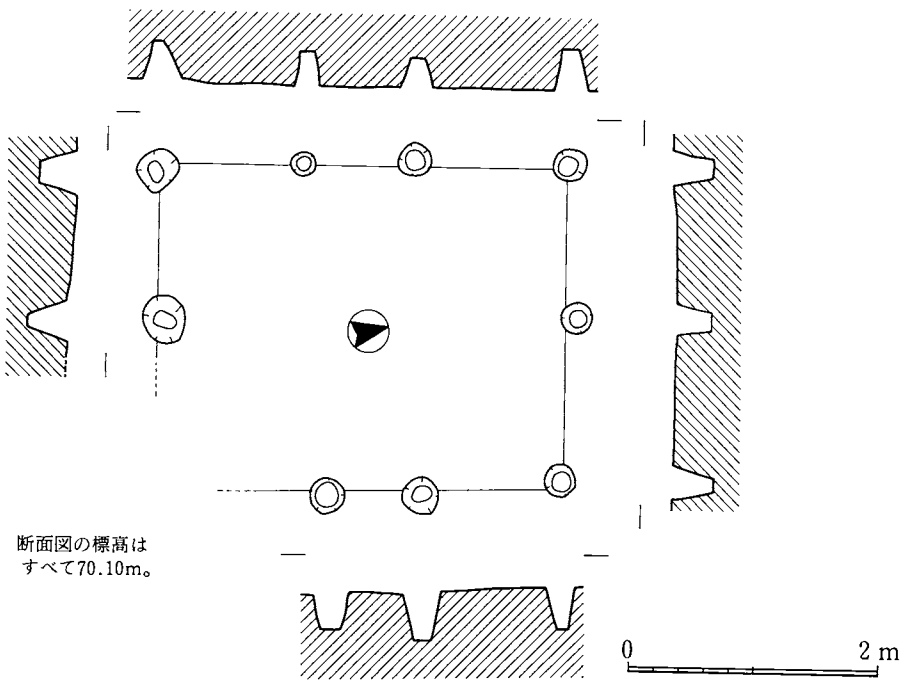
第115図　3号掘立柱建物跡実測図

地点)。道路跡は直線距離で約70mある。12号道路跡は凹道であり、窪んだ底面が硬化している。道路跡がのびる方向は、谷が入り込む方向と一致しており、凹道全体が傾斜している。その傾斜は、東側端部から西側端部にかけて、低くなる。凹道の平面形は、高い部分が狭く、低い部分が広くなっており、凹道の壁には凹凸がある。2地点の中央より西側の北壁は、二段掘りになる（凹部上面の幅、約1.2～7m)。凹道を登りつめた東側端部は凹部が閉じる。1地点のほぼ中央部より東側は、硬化面の幅が広くなる。硬化面の幅が広い箇所は、凹道の傾斜が緩やかである（硬化面の幅約40～170cm）。

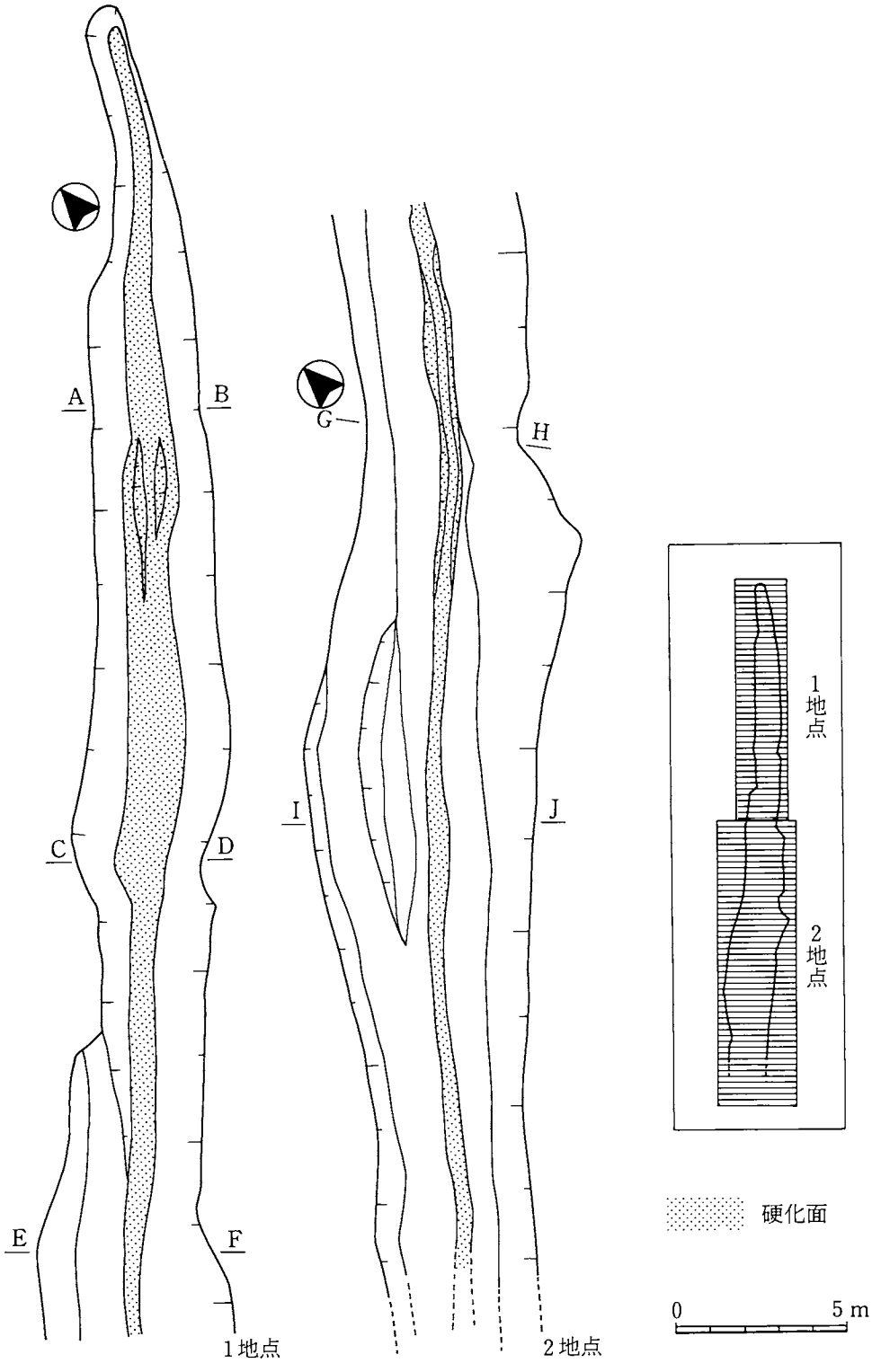
第119図には五箇所の断面図を載せた。断面図A－B・C－D・E－Fの断面形は、深い皿状を呈する（深さ約60～80cm)。断面図G－H・I－Jの断面形は、深い皿状の底面がさらにU字形に窪んでいる（深さ約110cm）。断面図A－Bの硬化面上には偏平な礫が置かれる。道路跡の覆土は大きく①層～⑤層に分層できる。①層は茶褐色土で、黄褐色土の粒子を少量含む。②層は淡黄褐色土で、黄褐色土の粒子を中量含む。②層中には②－a層（黄褐色土）がブロッ



第116図　4号掘立柱建物跡実測図

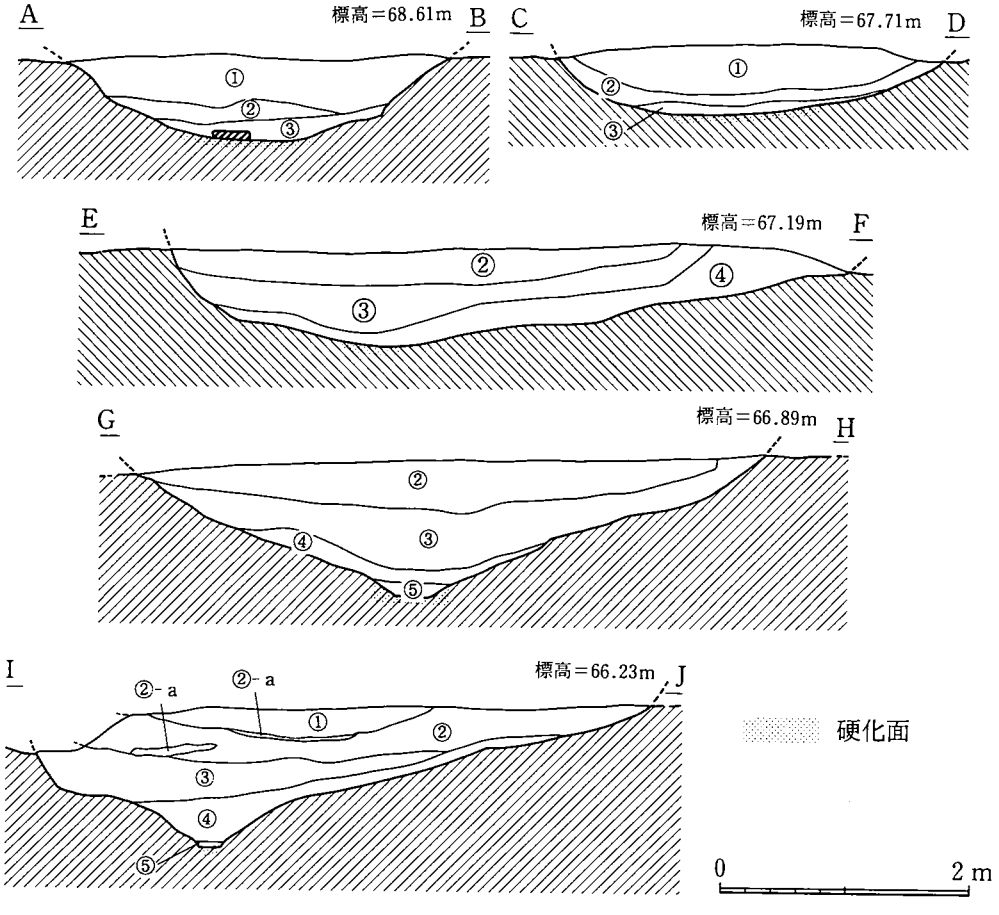


第117図　5号掘立柱建物跡実測図



第118図　12号道路跡実測図

ク状に入る。③層は暗褐色土で、黄褐色土の粒子を少量含む。④層は褐色土で、黄褐色土の粒子を多量に含む。⑤層は灰褐色砂質土で、径約１～３mmの砂粒を多量に含み、水成層である。遺物は硬化面上や覆土より出土した。



第119図　12号道路跡土層断面図

(2)遺物について

遺物については、竪穴住居址・12号道路跡・1号溝跡より出土したものと、遺物包含層(III層）より出土したものについて述べる。竪穴住居址より出土した遺物は、床面出土のものを中心にした。

①竪穴住居址出土の遺物

3号竪穴住居址（第120図1・2）

1は須恵器の高台付坏で、高台部と坏部の接合面が観察できる。体部は外に開きながらのび、口縁端部は丸くなる。2はヘラ切りの土師器の坏で、外に開きながらのびる体部、丸くなる口縁端部をもつ。体部の内外器面には横方向のヘラ磨きが施される。

4号竪穴住居址（第120図3）

3は口縁部が外反する土師器の甕形土器である。外器面には荒い斜め方向のハケ目、内器面には斜め方向のヘラ削りが施される。内器面の口縁部と体部との境には段をもつ。

5号竪穴住居址（第120図4・5）

4は土師器の甕形土器の口縁部片で、「く」の字形に外反している。5は土師器の坏で、口縁部が僅かに外反する。

7号竪穴住居址（第120図6～13）

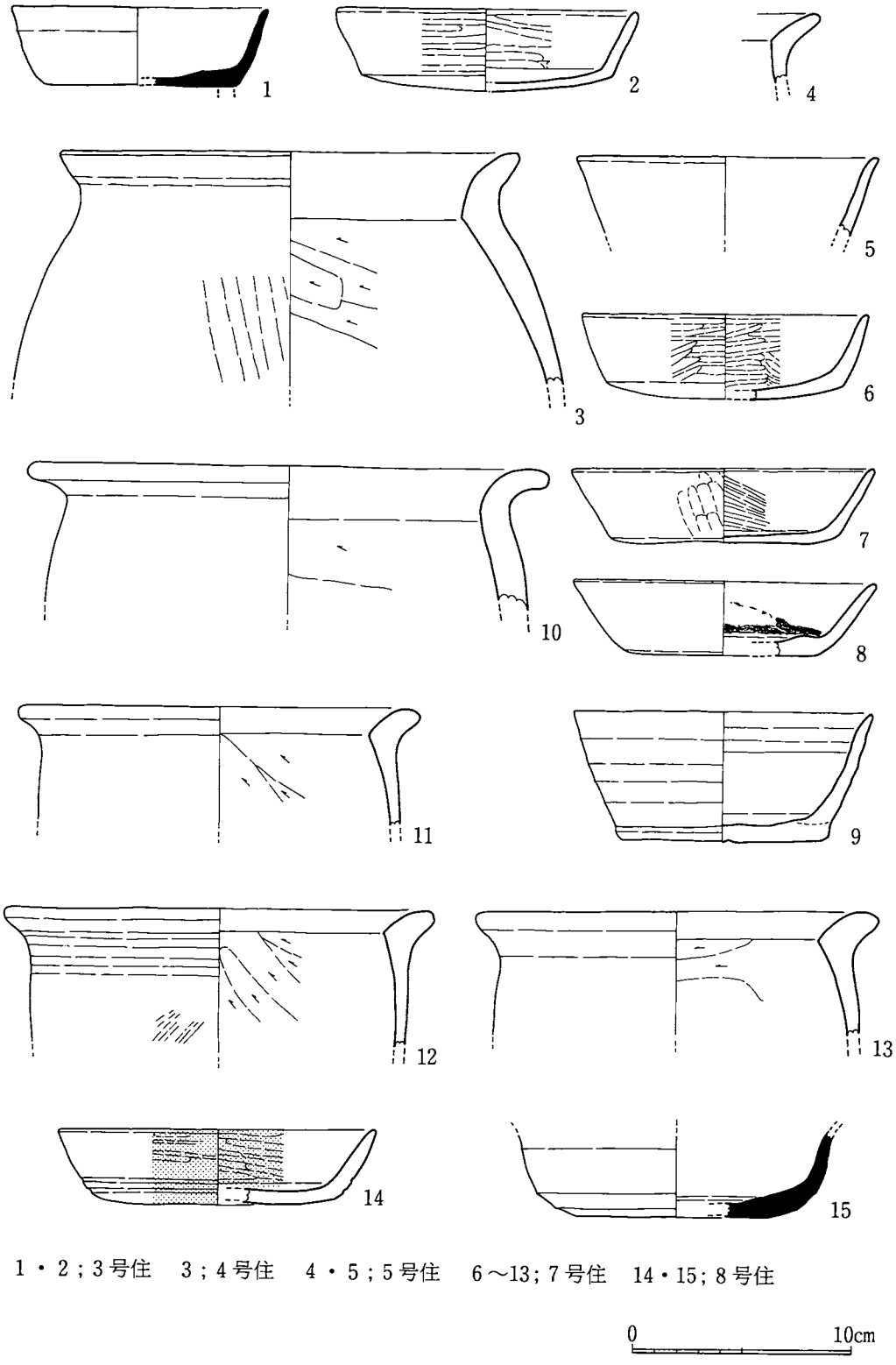
6～9はヘラ切り底の土師器の坏である。器高は9が高く、6～8が低い。7・8の体部はほぼ直線的に伸び、6の体部は僅かに内側に丸くなりながら立ち上がる。9は口縁端部が少し外反する。6・7の内外器面には横・斜め方向のヘラ磨きがある。8の内器面には煤が付着している。10～13は土師器の甕形土器である。10の口縁部は「く」の字形に強く屈曲する。11～13の口縁部は「く」の字に外反し、内器面に明瞭な段をもつ。10～13の体部内器面には横及び斜め方向のヘラ削りが施され、12の外器面には斜め方向のハケ目が僅かに残る。

8号竪穴住居址（第120図14・15）

14はヘラ切り底の土師器の坏で、底部近くの体部外器面に、二条の沈線がある。内外器面にはヘラ磨きが施され、赤色顔料が塗布される。15は須恵器の坏で、体部の中位から口縁部にかけて外反し、外器面の体部下方にはヘラ削りが施される。

9号竪穴住居址（第121図1～6）

1～3は須恵器で、1・3は高台付坏、2は蓋坏である。1の外器面には三条の沈線があり、体部と底部の境が下がり気味である。3の口縁端部は弱く外反する。2の体部上位にはヘラ削りが施される。4～6は体部内器面に斜め方向のヘラ削りが施される土師器の甕形土器である。



1・2；3号住　3；4号住　4・5；5号住　6～13；7号住　14・15；8号住

第120図　竪穴住居址出土遺物実測図

口縁部は「く」の字形に外反し、4の外反度は強い。5の体部外器面には縦方向のハケ目がある。

13号竪穴住居址（第121図7～10）

7～10は須恵器である。7は高台付坏で、口縁端部が丸くなる。8～10は蓋坏で、8・9の端部は下方に短く屈曲する。

14号竪穴住居址（第121図11～14）

11・14は土師器、12・13は須恵器である。11はヘラ切り底の坏で、体部が内側に丸くなりながら立ち上がる。内外器面にはヘラ磨きが施される。14は甑の把手である。12は高台付坏で、口縁端部が薄くなって、弱く外反する。13は蓋坏で、つまみ部の立ち上がりが僅かに残っている。端部がほぼ直角に屈曲する。

18号竪穴住居址（第121図15～17・第122図・第123図）

15・16はヘラ切り底の土師器坏である。15は内側にやや丸くなりながら立ち上がる。内外器面にはヘラ磨きが施される。16の内外器面には赤色顔料が塗布される。17は黒色土器Aで、丁寧なヘラ磨きが施される。第122図は住居址内の掘り込みから出土した須恵器の甕で、口縁部と底部を欠いている。胴部の中位に最大径がある。外器面には格子タタキ目が施され、内器面の上位には同心円文タタキ目、それより下位には平行タタキ目が施される。第123図は磨石類で、上面に磨痕・敲打痕があり、縁辺部が欠損している。

19・20号竪穴住居址（第121図18～21・第124図1～6）

第121図18・19・21は須恵器、20はヘラ切り底の土師器である。18・19は坏（高台部不明）で、口縁端部が丸くなる。18の体部外器面にはヘラ削りが施される。21は蓋坏で、端部が短く屈曲する。20は器高が低い坏で、内外器面には赤色顔料が塗布される。第124図1～5は土師器の甕形土器である。すべて口縁部と胴部の境で屈曲するが、1の口縁部はほぼ直線的にのび、2～5の口縁部は外反する。6は須恵器の高台付坏で、体部がほぼ直線的にのびる。

21号竪穴住居址（第124図7）

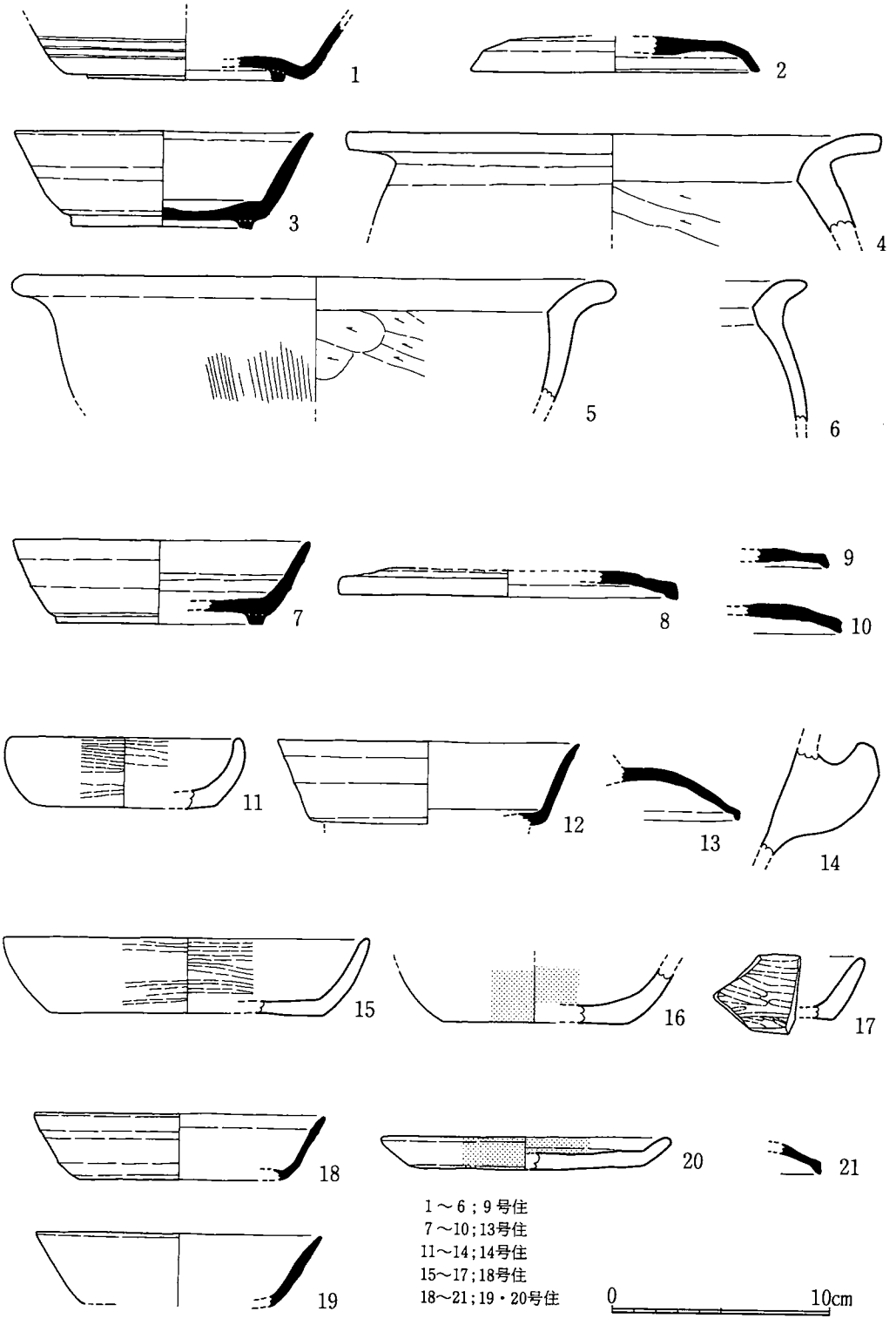
7は須恵器の高台付坏である。高台の外器面に窪んだ段があり、体部は直線的にのびる。

24号竪穴住居址（第124図8～12）

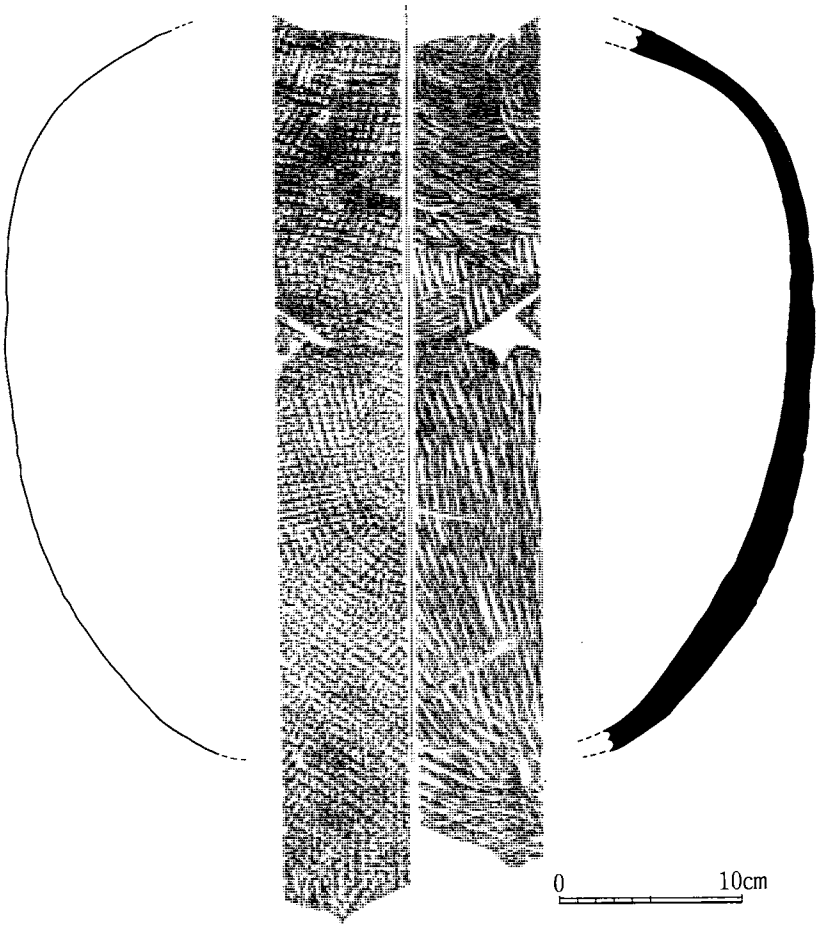
8～12は土師器である。8～10は坏で、8・10はヘラ切りの底部である。8は器高が低く、10の口縁部は僅かに外反し、底部近くの体部をヘラナデしている。11・12は高台付坏で、12の高台部は外に開く。8・9・11は内器面、10は内外器面に赤色顔料が塗布される。

25号竪穴住居址（第124図13～16））

13・14はヘラ切りの底部をもつ土師器の坏である。体部はほぼ直線的にのび、口縁端部は僅かに外反しながら丸くなる。13・14は他の坏に比べると、器高が高い。15・16は須恵器である。15は小型の甕形土器で、頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部をつまみ上げている。



第121図　竪穴住居址出土遺物実測図

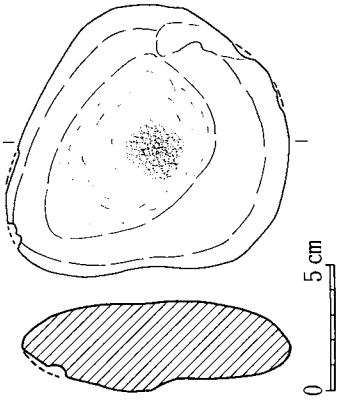


第122図　18号竪穴住居址出土須恵器実測図

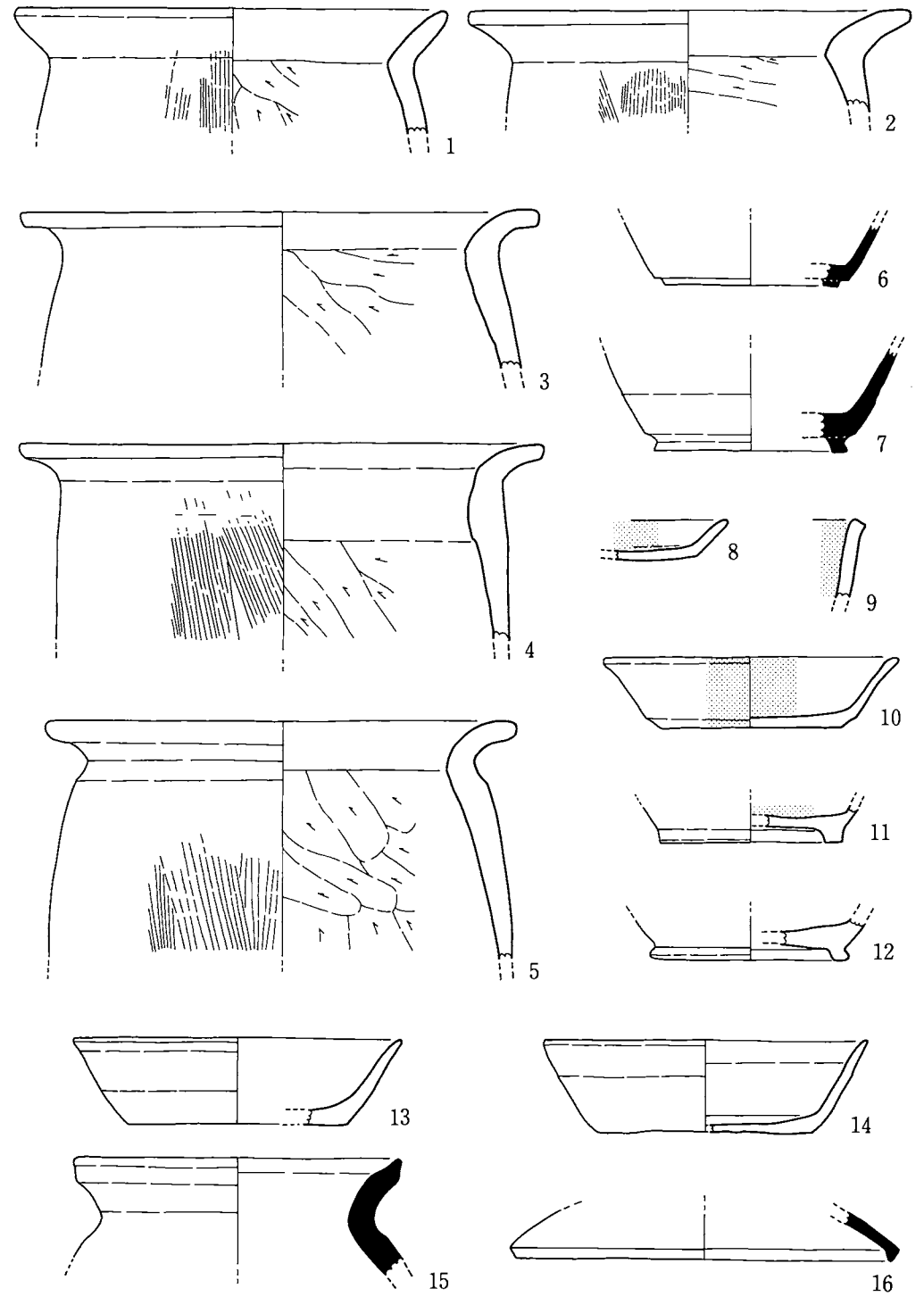
16は蓋坏で、端部は内傾しながら尖る。

28号竪穴住居址（第125図1～8）

1～4・5・8は、土師器の甕形土器である。1～4は口縁部片で、5は口縁部から胴部にかけての部位が残っている。5の外器面には部分的にハケ目があり、内器面にはヘラ削りが施される。8は大型の甕形土器で、外器面に赤色顔料が塗布される。調整は外器面の胴部下半にハケ目が残り、内器面の頸部下位にヘラ削りが施される。6・7はヘラ切りの底部をもつ土師器の坏である。体部は6が直線的に、7がやや丸くなりながら立ち上がる。両者とも外器面の体部下半にヘラ削りが施され、その部分が稜になっている。

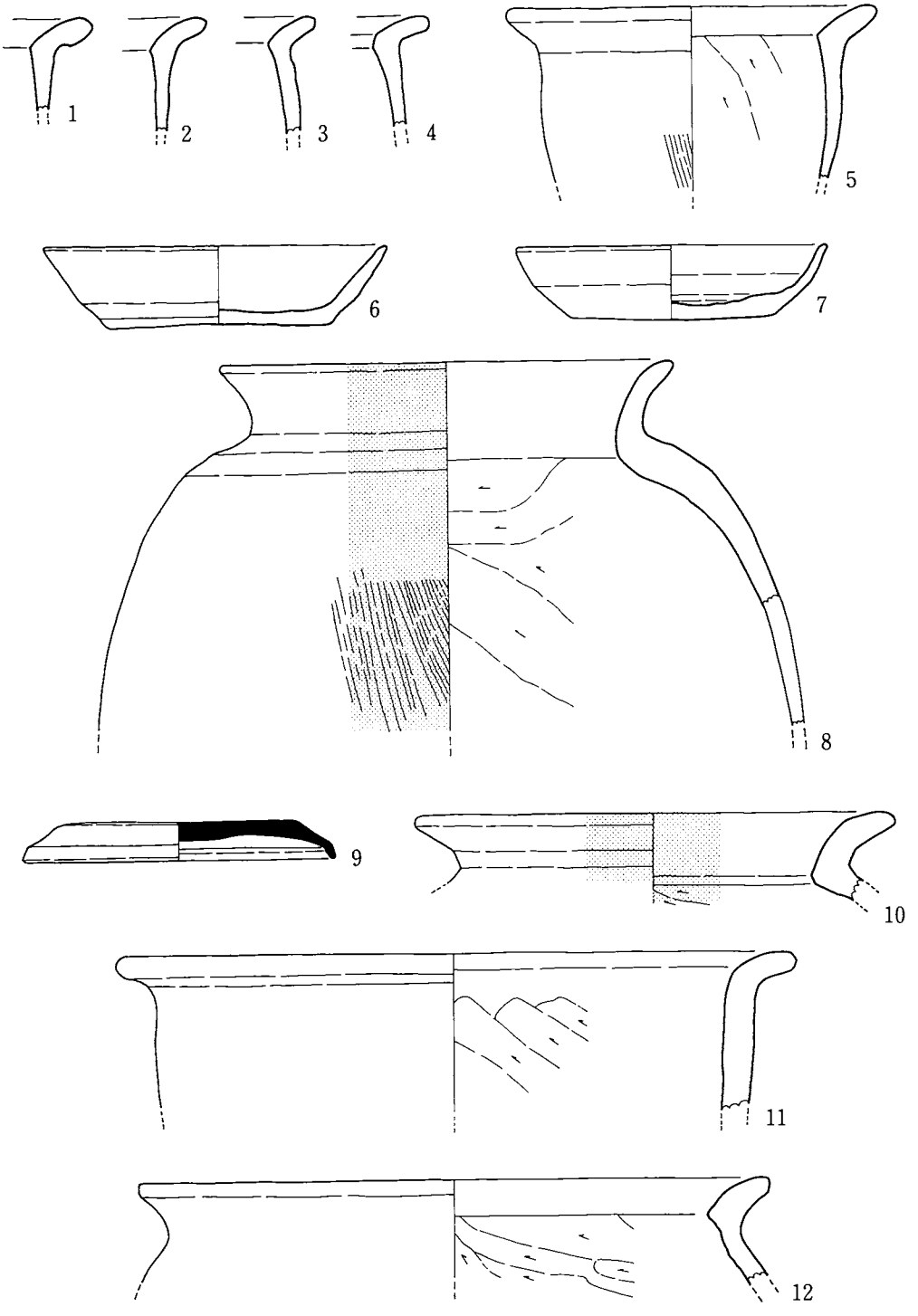


第123図　18号竪穴住居址出土石器実測図



1～6；19・20号住　7；21号住　8～12；24号住
13～16；25号住

第124図　竪穴住居址出土遺物実測図



1～8；28号住　9～11；29号住　12；30号住

0　10cm

第125図　竪穴住居址出土遺物実測図

29号竪穴住居址（第125図9～11）

9は須恵器の蓋坏で、天井部はヘラ削りが施され、口縁端部が屈曲する。10・11は土師器の甕形土器である。10の口縁部の外反は二段になり、内外器面に赤色顔料が塗布される。11は「く」の字形に強く屈曲した口縁部をもつ。10・11の内器面にはヘラ削りが施される。

30号竪穴住居址（第125図12）

12は口縁部が「く」の字形に外反する土師器の甕形土器で、内器面にヘラ削りが施される。

32号竪穴住居址（第126図1）

1は須恵器の高台付坏で、坏部と高台部の接合面が観察できる。

33号竪穴住居址（第126図2～15・第127図・第128図・第129図）

2～7は土師器の甕形土器である。2～5は屈曲した口縁部片で、6・7は強く外反する口縁部をもち、胴部内器面にはヘラ削りが施される。8・9はヘラ切りの底部をもつ土師器の坏である。8の体部はほぼ直線的にのび、口縁端部が丸くなる。9は大型で、外反気味にのびる体部に丸くなる口縁端部が続く。内外器面に赤色顔料が塗布される。10・11は土師器の高台付坏である。11の高台は高く、坏部との接合面が観察できる。10の内器面には赤色顔料が塗布される。12～15は須恵器である。12は坏の口縁部で、端部が丸くなる。13は蓋坏で、釦状のつまみをもち、口縁端部が僅かに突出する。14はヘラ切りの底部をもつ坏である。15は高台付坏で、高台は突出した先端で接地し、坏部との接合面が観察できる。

第127図は石製紡錘車で、約半分が欠損し、部分的に上面が剝落している。表裏面とも磨痕が顕著である。

第128図・第129図は磨石類である。表面に磨痕があるのは第128図1・3、第129図1である。表裏面に磨痕があるのが第128図2・5、第129図2である。第128図2の側面にはススが付着している。第128図4は表裏面・側面に敲打痕がある。磨痕が残っている石器は砥石的な使用も考えられる。図示した以外に、砥石的な使用が考えられる石器が1点、火を受けて表面が剝落している礫が2点、自然礫が18点出土している。

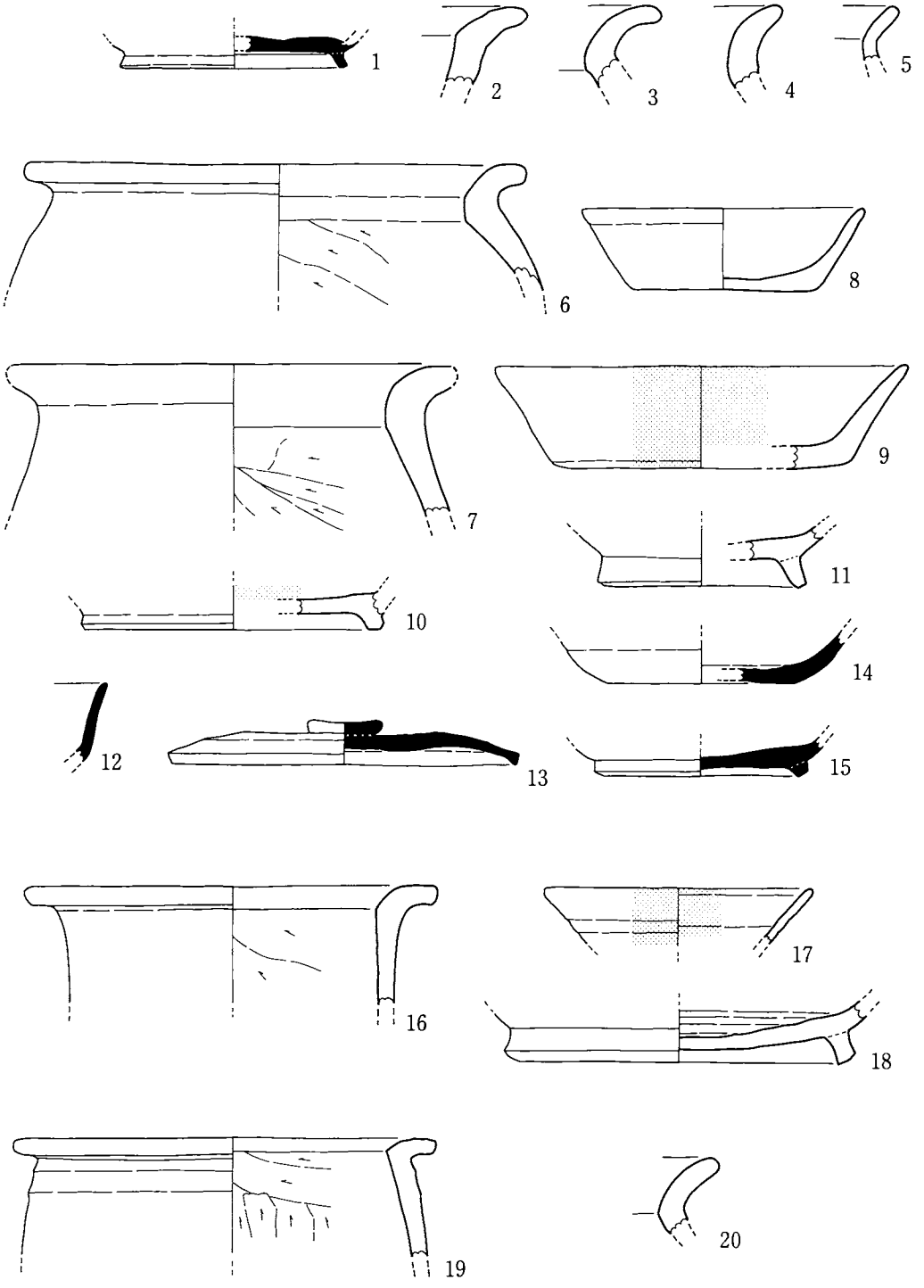
34号竪穴住居址（第126図16～18・第130図）

16は土師器の甕形土器で、口縁部が強く外反し、内器面にヘラ削りが施される。17は土師器の坏で、内外器面に赤色顔料が塗布される。18は土師器の高台付坏で、高台部は先端で接地し、坏部との接合面が観察できる。

第130図は土錘である。上端部が部分的に欠損している。

36号竪穴住居址（第126図19・20）

19・20は土師器の甕形土器である。19の口縁部は直角に近い外反をしており、内器面にはヘラ削りが施される。20は「く」の字形に屈曲した口縁部片である。



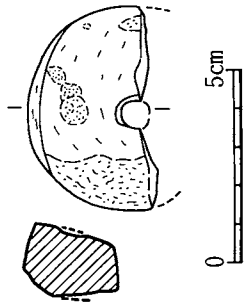
1；32号住　2～15；33号住　16～18；34号住　19・20；36号住

第126図　竪穴住居址出土遺物実測図

37号竪穴住居址（第131図1～12・第132図）

1～9はヘラ切り底の土師器の坏・高台付坏である。3は内器面、4は内外器面に横方向のヘラ磨きが施される。5～9の内外器面には赤色顔料が塗布される。10・12は土師器の甕形土器である。12は大型で、口縁部を欠いている。11は須恵器の胴部片で、外器面に格子タタキ目、内器面に平行・同心円文タタキ目がある。

第132図1・2は磨石類で、表裏面に磨痕をもつ。1は約半分が欠損している。



第127図　紡錘車実測図

38号竪穴住居址（第131図13～19）

13は土師器の甑の把手である。14は土師器の甕形土器で、口縁部が屈曲している。15～19は土師器の坏・高台付坏である。15・17の底部はヘラ切りである。15～17・18の内外器面には赤色顔料が塗布される。

39号竪穴住居址（第133図1～6）

1・2は須恵器の蓋坏で、口縁端部が短く屈曲する。3は土師器の坏で、ヘラ切りの底部をもつ。4～6は土師器の甕形土器である。4・6の口縁部は「く」の字形に屈曲する。5の口縁部は全体が外反する。

40号竪穴住居址（第133図7～9）

7はヘラ切り底の土師器の坏で、内外器面に赤色顔料が塗布される。8は須恵器の鉢である。9は須恵器の高台付坏で、高台の接地面はやや尖る。

41号竪穴住居址（第133図10～13）

10は土師器の甕形土器で、口縁部が屈曲する。11は須恵器の鉢で、口縁端部が角ばる。12・13はヘラ切り底の土師器の坏で、両者とも内外器面に赤色顔料が塗布される。

42号竪穴住居址（第133図14）

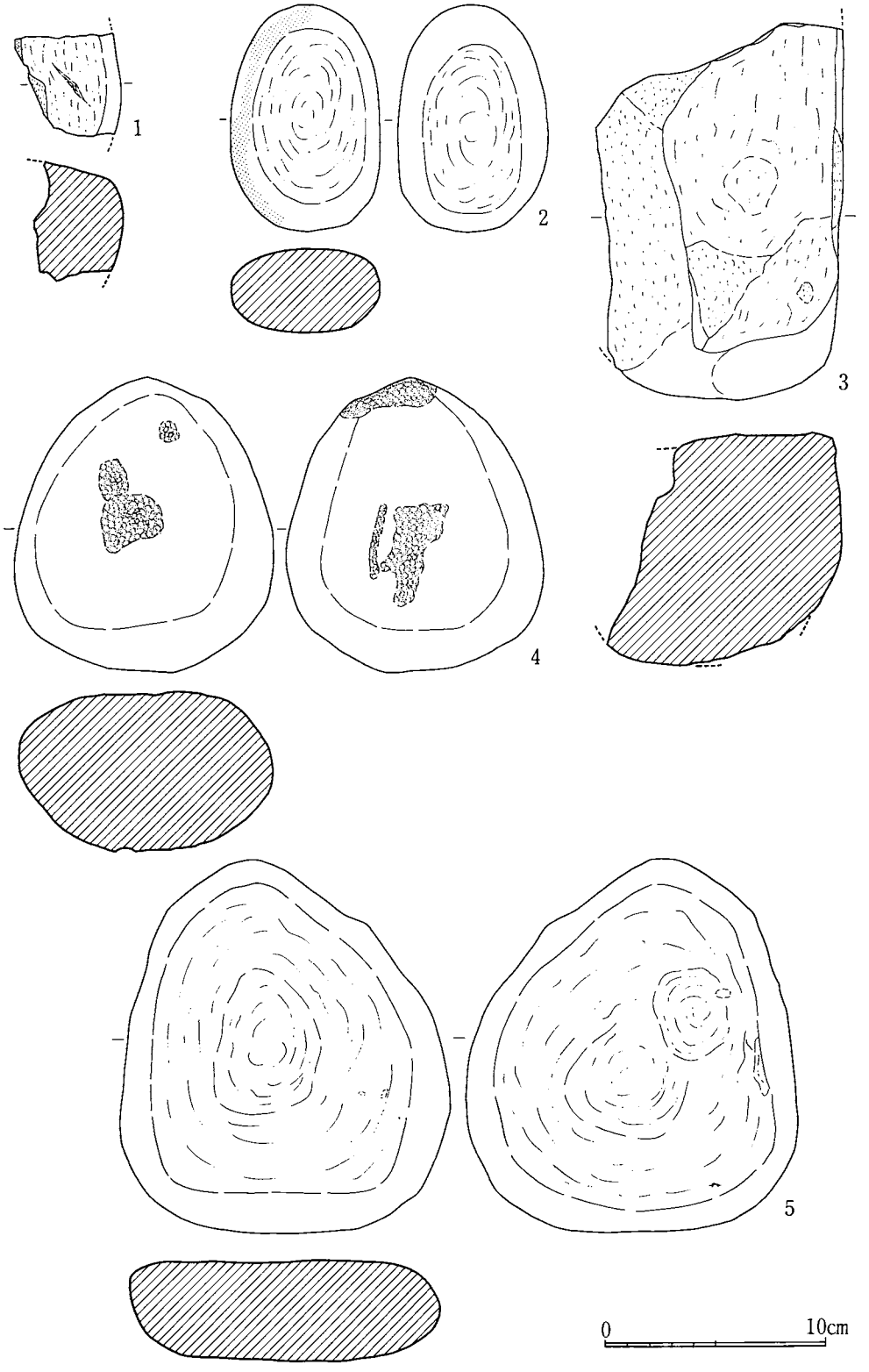
14は土師器の甕形土器で、口縁部が外反する。口縁部の内器面に面取り様の調整がある。

43号竪穴住居址（第133図15～17）

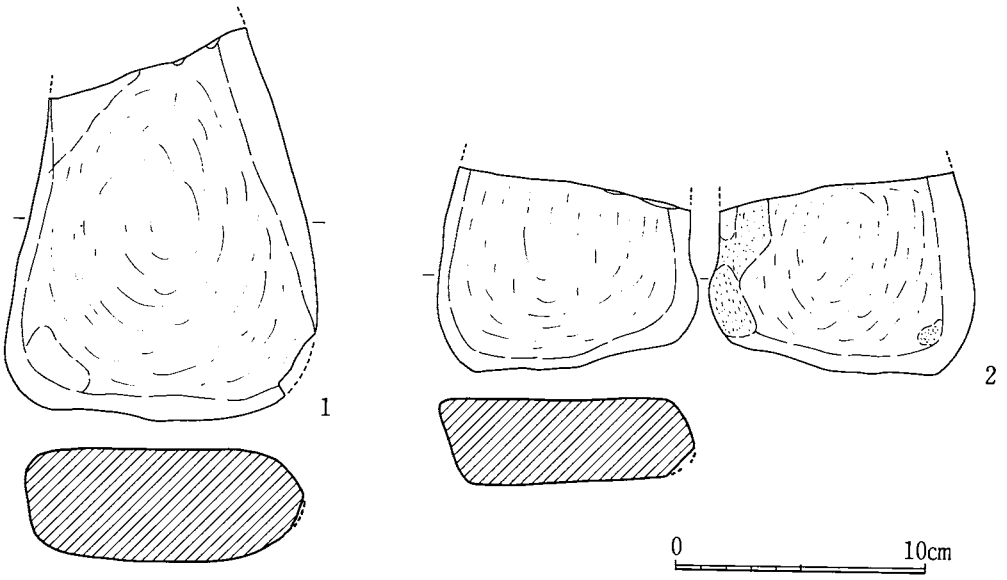
15は土師器の甕形土器の口縁部片で、口縁端部が強く屈曲する。16・17は土師器の坏で、内外器面に赤色顔料が塗布される。

44号竪穴住居址（第134図）

第134図1～4はヘラ切りの底部をもつ土師器の坏・高台付坏である。1・2の内外器面には赤色顔料が塗布される。3の内器面には横線の暗文が四条施される。3・4の外底部には墨書があるが、文字は不明である。5は須恵器の蓋坏、6～8は須恵器の坏・高台付坏である。底部が観察できるものは、ヘラ切りである。9・10は土師器の甕形土器で、両者とも口縁部の外反が強い。11は須恵器の壺である。頸部は外に開き、口縁部との境に段をもち、口縁部

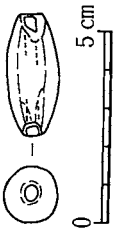


第128図　33号竪穴住居址出土石器実測図



第129図　33号竪穴住居址出土石器実測図

は外反する。口縁部の内器面にヘラ記号がある。12は須恵器の甕で、頸部外器面にヘラ記号をもつ。外器面に格子タタキ目、内器面に同心円文タタキ目がある。



第130図 土錘実測図

45号竪穴住居址（第135図1～8・第136図）

1～6はヘラ切り底の土師器の坏・高台付坏である。2の内器面にはススが付着している。3の内器面には横方向のヘラ磨きがある。4・5の内外器面に赤色顔料が塗布される。5の外底部には墨書が観察できるが、文字は不明である。7は土師器の短頸壺で、口縁部はほぼ直立し、端部が丸くなる。8は土師器の甕形土器で、口縁部が強く屈曲している。

第136図は土錘で、上下両端が欠損している。

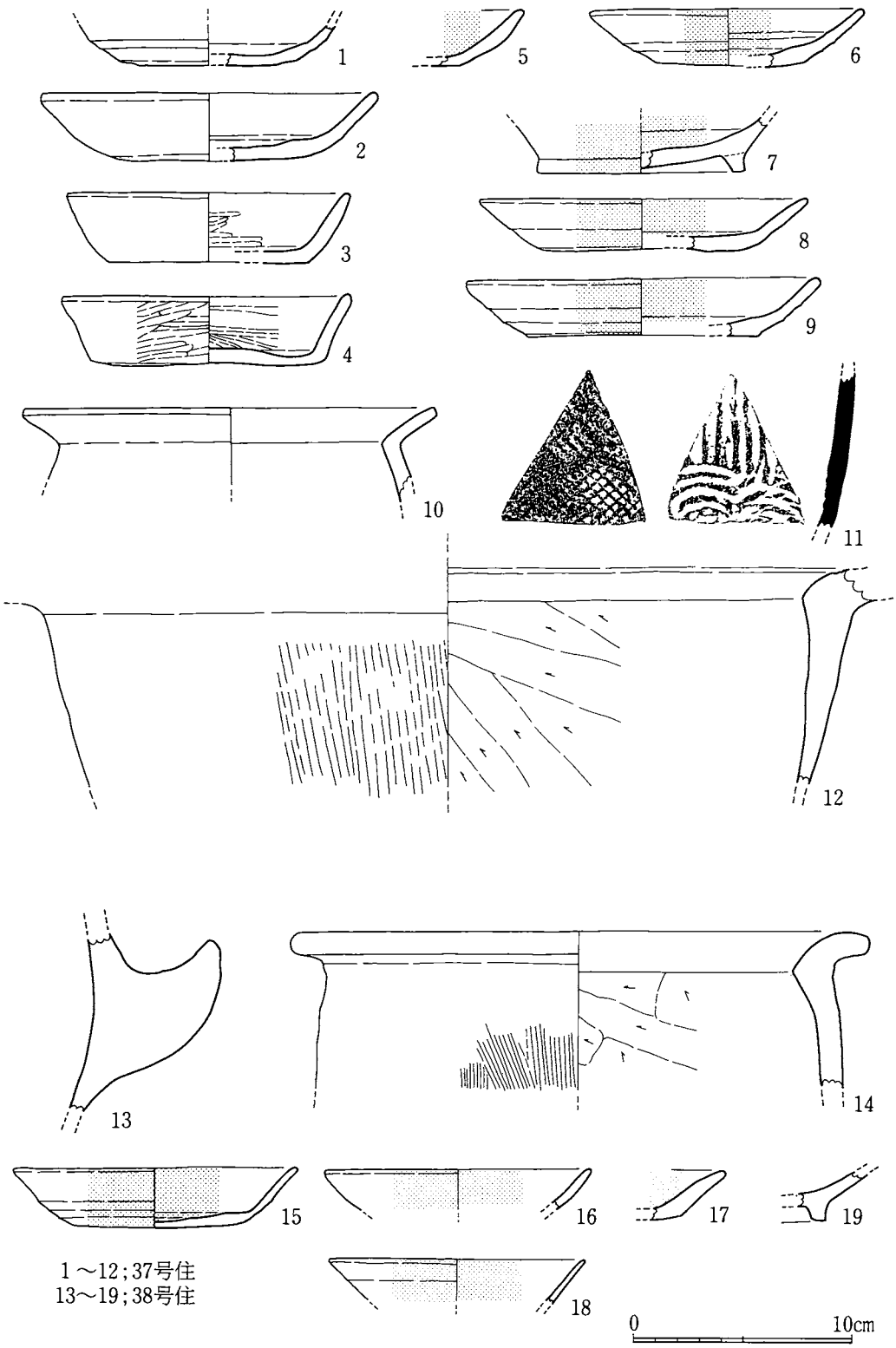
46号竪穴住居址（第135図9～10・第137図）

第135図9は須恵器の坏で、口縁端部が丸くなる。10は土師器の甕形土器で、口縁部が「く」の字形に屈曲する。

第137図は台石片である。表面の中央部と縁辺部の一部に磨痕があり、部分的に敲打痕が残る。裏面のほぼ中央部には磨痕と敲打痕がある。

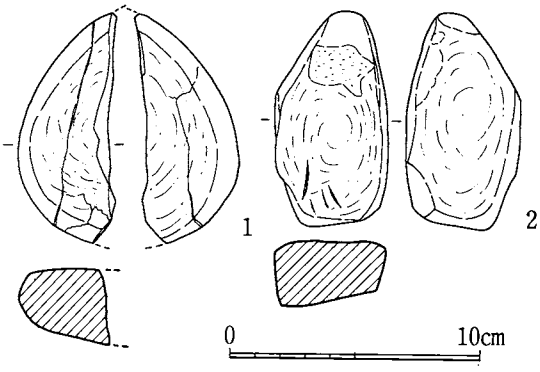
第138図には、竪穴住居址の床面より出土した鉄器を掲載した。

1は38号竪穴住居址出土の鉄斧で、柄の挿入部に木質が残存している。2は13号竪穴住居址出土の刀子である。背はほぼ水平であるが、刃部はやや内反りになる。刃部側に関があり、茎部の一部には木質が残存している。3・4は33号竪穴住居址より出土した。3は不明鉄器



第131図　竪穴住居址出土遺物実測図

で、短冊状の鉄板の端部を折り曲げている。4は刀子の茎部であろう。部分的に木質が残っている。5は38号竪穴住居址出土で、短頸の斧箭式鉄鏃で、鏃身は平造りである。6は9号竪穴住居址、7は34号竪穴住居址、8は29号竪穴住居址、9は33号竪穴住居址より出土した長頸鏃の茎部である。6には篦被がある。



第132図　37号竪穴住居址出土石器実測図

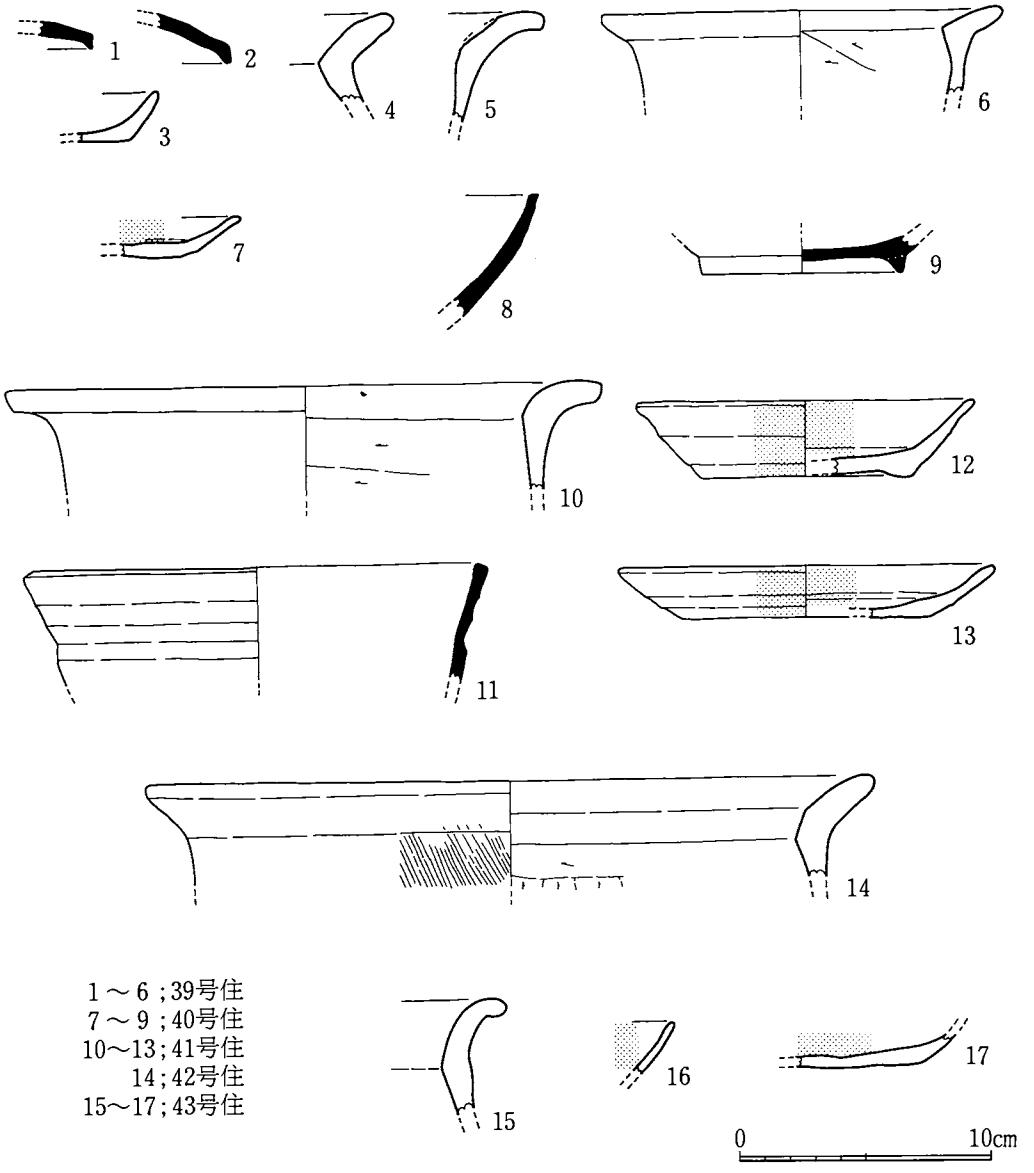
②12号道路跡出土の遺物（第139図～第141図）

ここでは、道路跡の硬化面上より出土した遺物を中心にしており、覆土より出土した遺物も一部取り上げる。

第139図は須恵器である。1は蓋坏で、つまみが付く。端部がほぼ直角に折れる。2～5は高台付坏である。3の高台の開きは強い。2・5の高台はハの字形になる。4は高台が高く、底部の中央が厚くなる。6は小型の甕の口縁部で、外反している。7～12は壺及び長頸壺の口縁部・底部である。7は口縁端部が強く外反している。8・9は口縁部と頸部の境に段をもち、口縁部が外反する。8の頸部外器面には櫛描波状文を施し、9の頸部外器面にはヘラ記号がある。10の頸部は外に開きながら直線的にのび、口縁部は弱い段を作り、さらに外反する。11は平底で、外底部に車輪文タタキ目がある。外器面には平行タタキ目が施される。12には外に開く高台が付き、内器面には同心円文タタキ目がある。

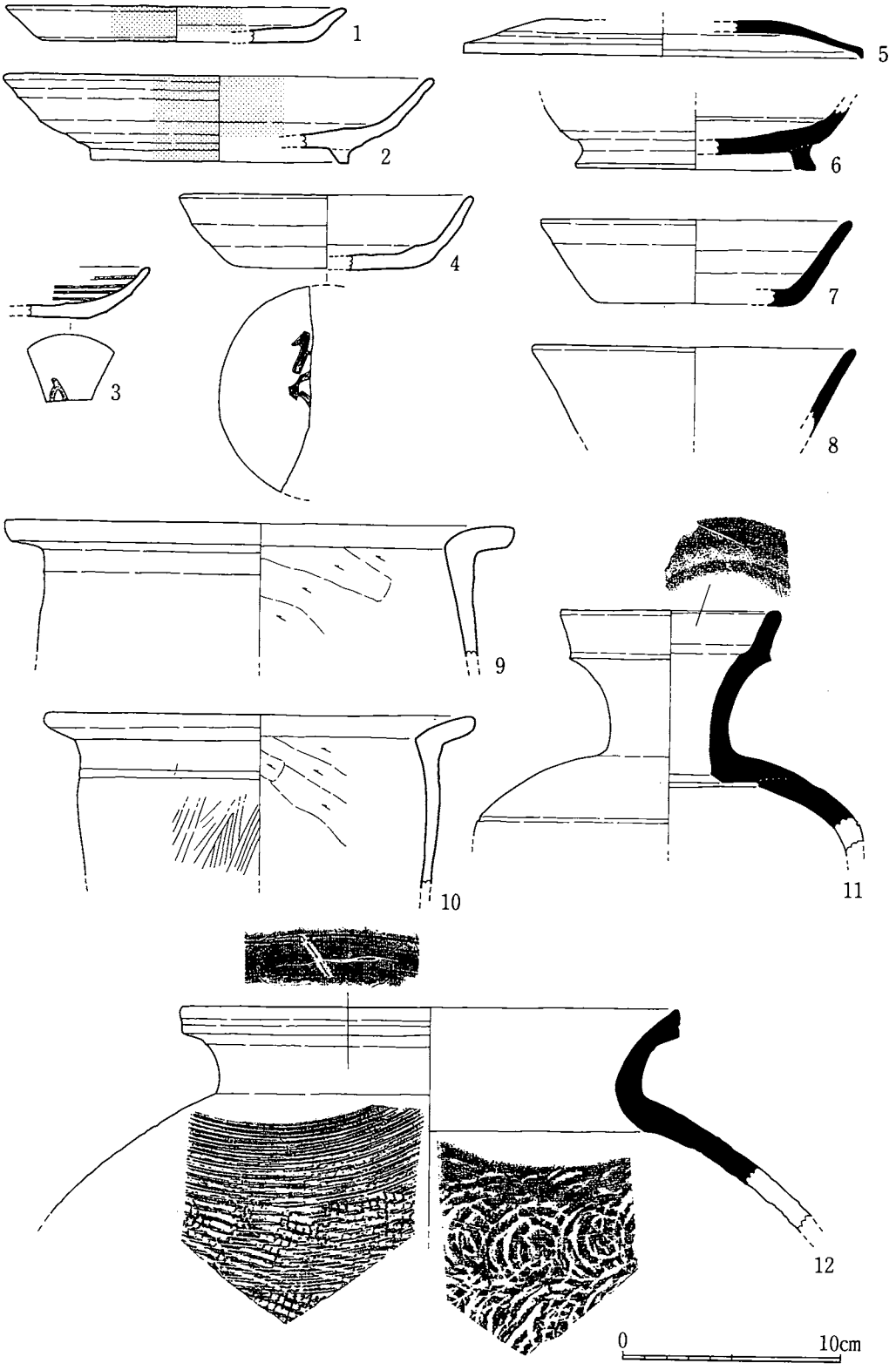
第140図は土師器の坏・高台付坏・皿である。1の体部はほぼ真っ直ぐのび、口縁部は弱く外反し、端部が丸くなる。高台は1・2が低く、3・4が高い。5は短い体部に外反する口縁部が続く。6の体部・口縁部は、ほぼ真っ直ぐにのび、口縁端部が丸くなる。7は端部が丸くなる口縁部である。8の外底部には、墨書が認められる。9は大型の製品で、僅かに丸くなりながらのびる体部に外反する口縁部が続く。口縁端部は丸くなる。

第141図には鉄製品を載せた。1～4は鉄鏃である。1は長頸長三角形式で、鏃身は片丸造りである。篦被が確認できる。2は短頸斧箭式で、鏃身は平造りである。3は長頸鑿箭式である。4は長頸鏃の頸部で、棘篦被がある。5・18は鉄鎌である。5は先端部付近の破片であり、先端部が下方に曲がる。18は大型品で、身が二つに割れている。身の端部を折り返して柄の装着部を作っている。柄は身に大して鋭角に装着される。身全体が湾曲しており、先端部は丸くなっている。6は鉄鎌の柄装着部分で、身の折り返し部分で欠損していると思われる。7～11・13・17は角釘である。いずれも先端部は折れ曲がっており、11は他の物に比べると、先端部の折れ曲がりが小さい。17は大型品、7・11は小型品で、その他は両者の中間の大き

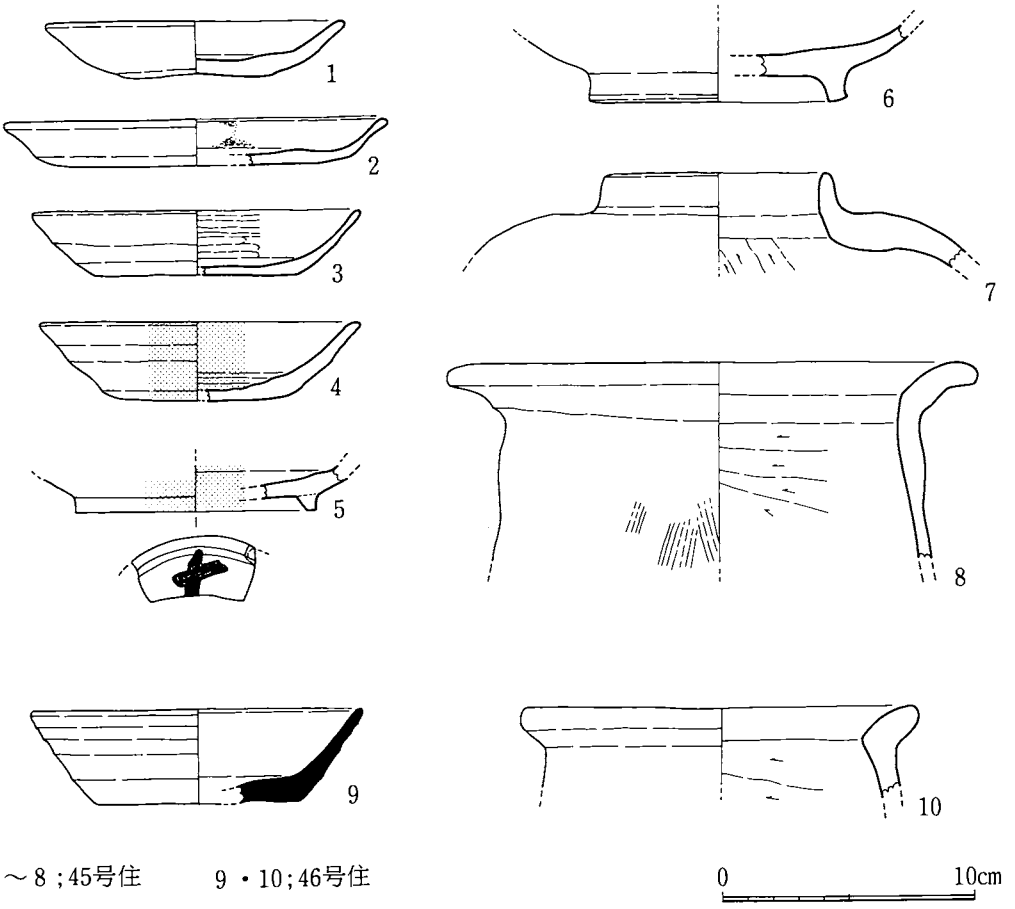


第133図　竪穴住居址出土遺物実測図

さである。12・15・16は棒状の製品を加工したもので、用途不明である。12はU字形、16は三角形に曲げている。15は楕円形の環になっており、一部が上方に盛り上がっている。14も不明鉄器で、板状の鉄片の下端にV字状の抉り込みがある。



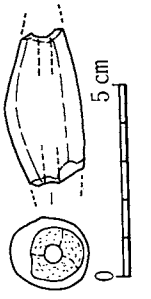
第134図　44号竪穴住居址出土遺物実測図



第135図　竪穴住居址出土遺物実測図

③1号溝跡出土の遺物（第142図）

1は須恵器の蓋坏で、口縁端部が外下方に折れ曲がる。体部の口縁部寄りの箇所がほぼ水平にのびている。2は高台付坏で、高台がハの字形になり、端部がやや角ばる。

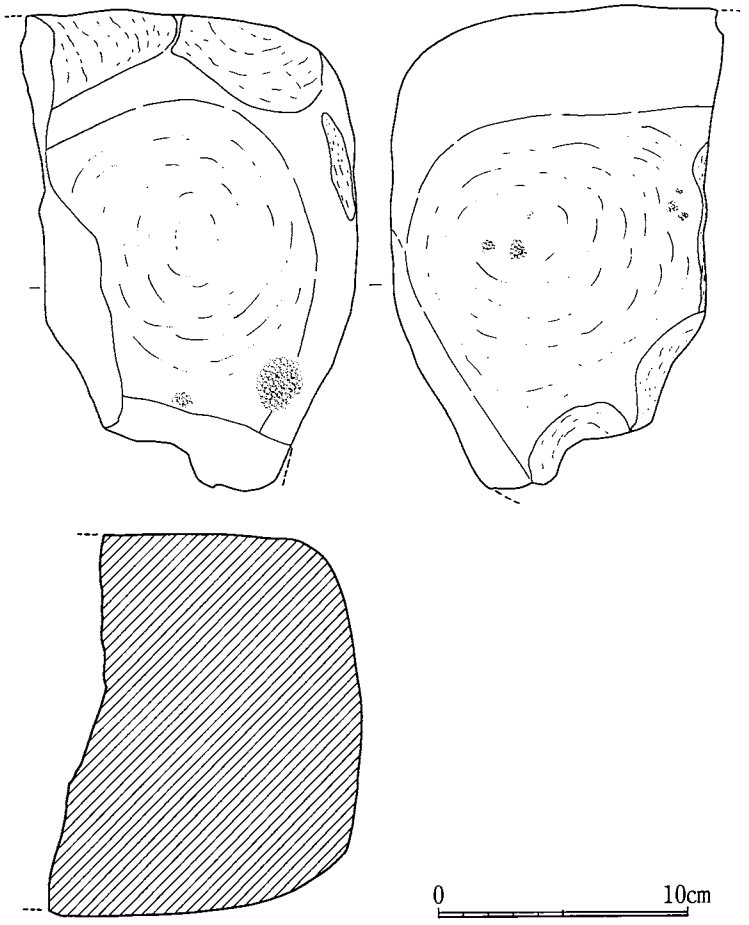


第136図　土錘実測図

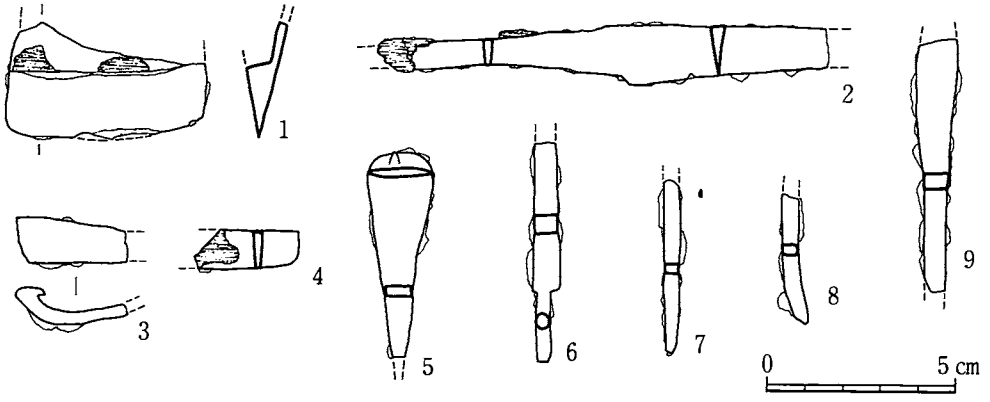
④III層出土の遺物

鉄製品・スラグ・ふいごの羽口・るつぼについて（第143図～第145図）

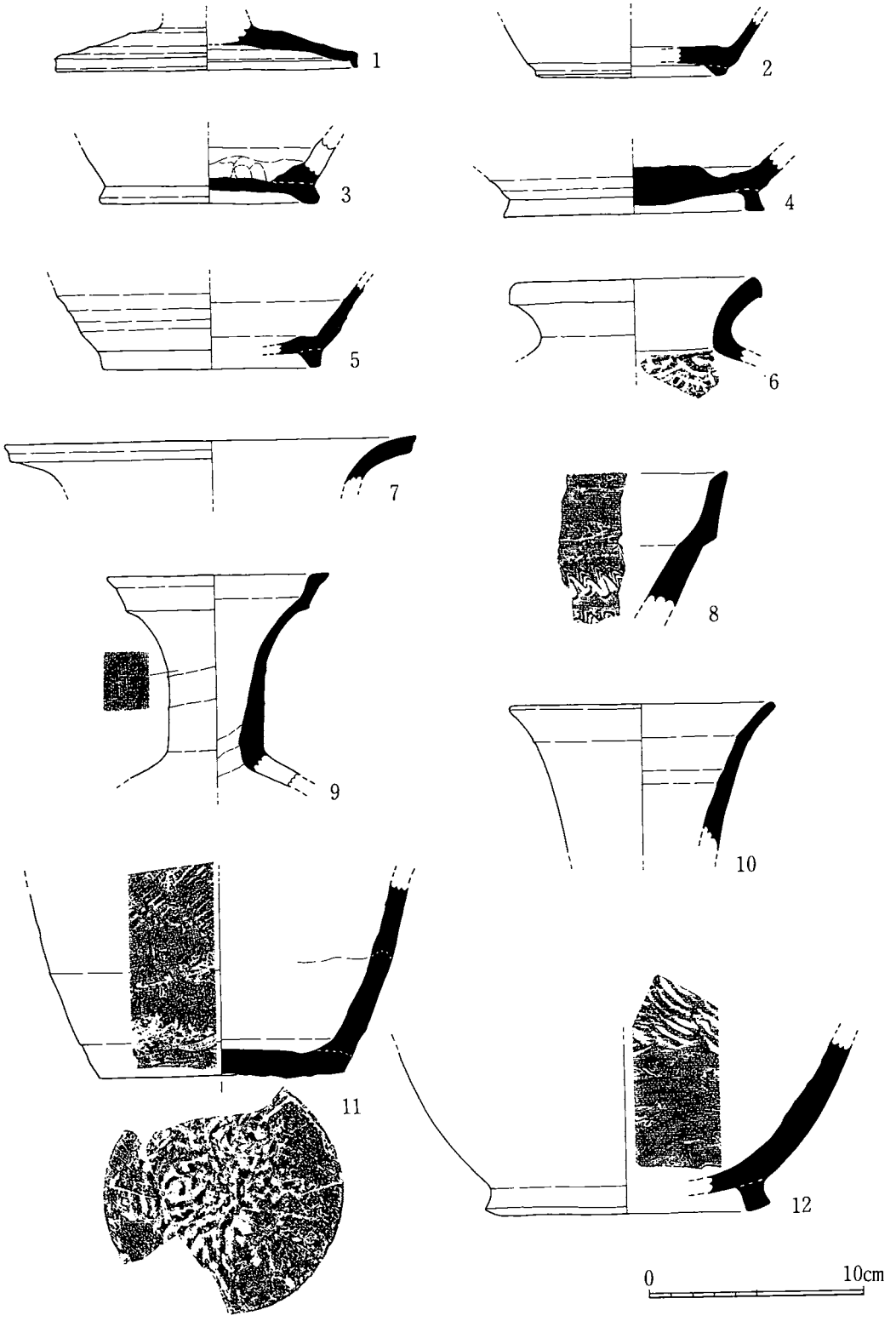
第143図には、鉄製品・スラグ・ふいごの羽口・るつぼの出土地点を示した。出土したのは、III層、12号道路跡の硬化面や覆土及び竪穴住居址の覆土である。分布状況を見ると、33号竪穴住居址の周辺（南東側）が最も密度が高い。この状況は、33号竪穴住居址が他の竪穴住居址と比べて、構造が特異である点に関連すると思われる。それに、道路跡がのびる方向と分布



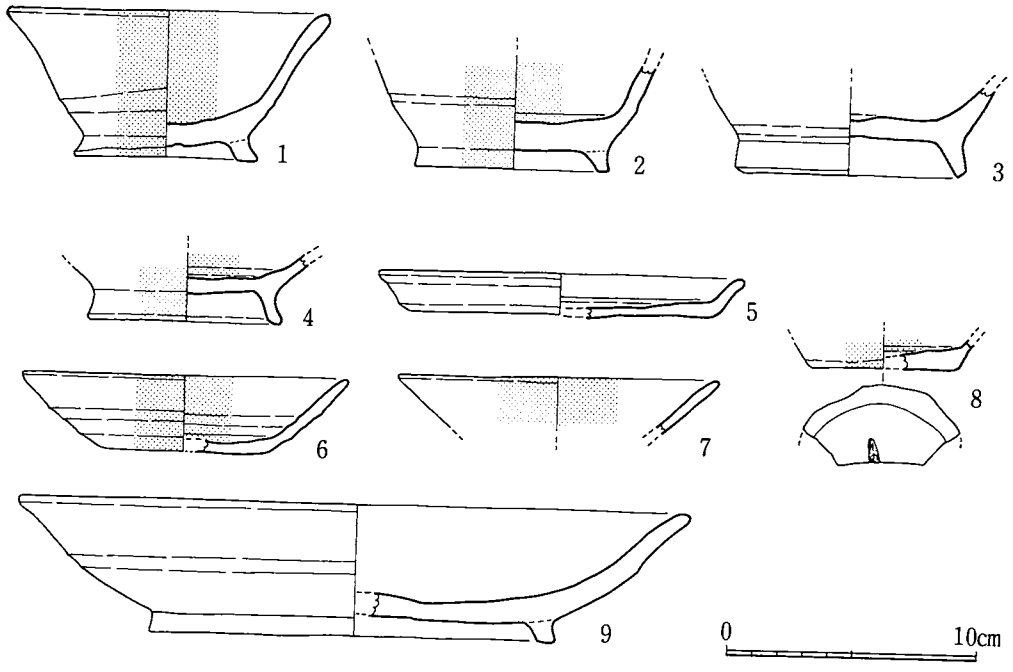
第137図　46号竪穴住居址出土石器実測図



第138図　竪穴住居址出土鉄器実測図



第139図　12号道路跡出土須恵器実測図



第140図　12号道路跡出土土師器実測図

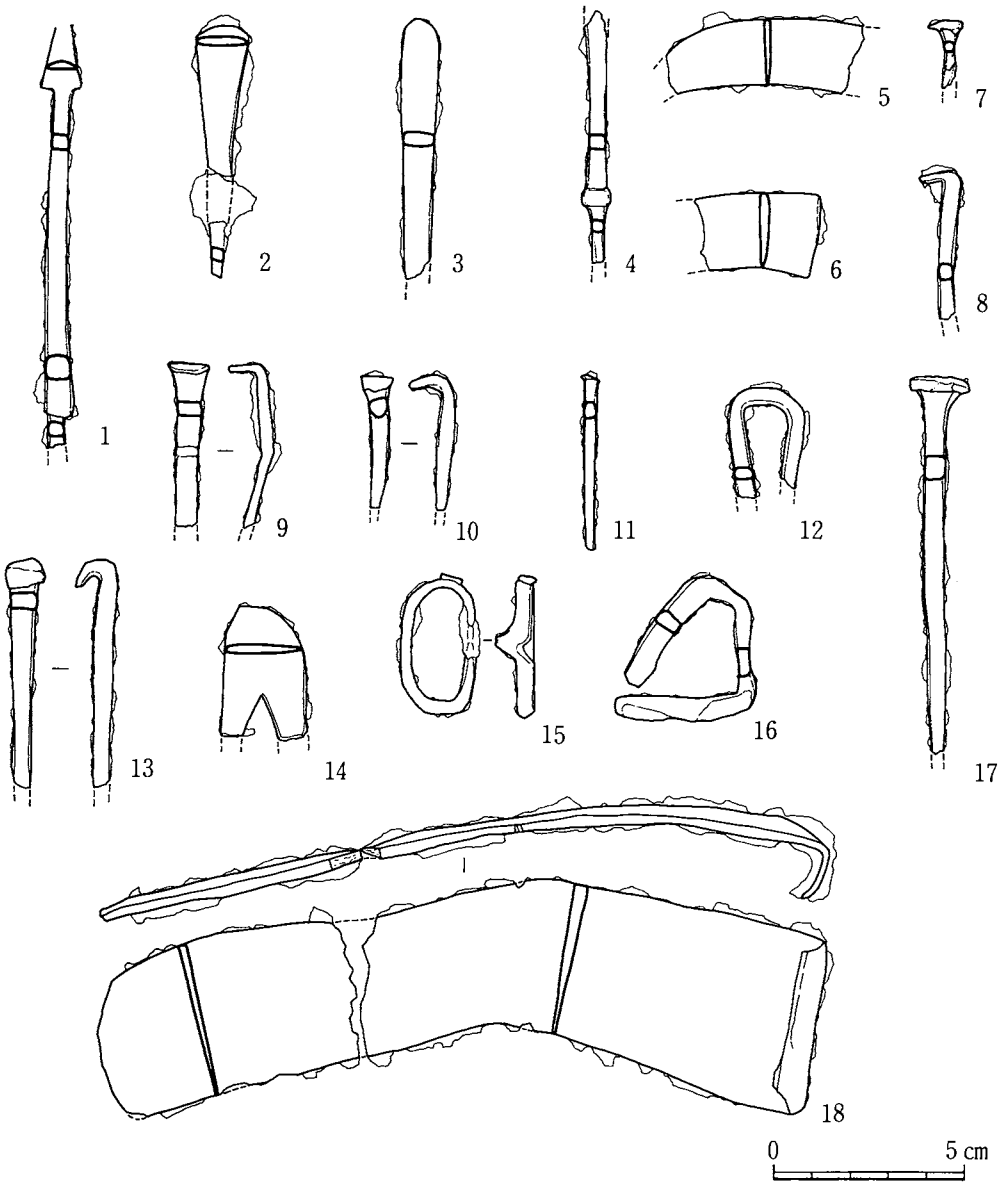
場所がほぼ重なる。これは、道路跡に遺物が流れ込んだものと考えられる。

鉄製品は不明鉄器も含めて192点、ふいごの羽口は44点、スラグは拳大から指頭大まで大小あり、270点（5,664.6 g）、るつぼ1点が出土している。

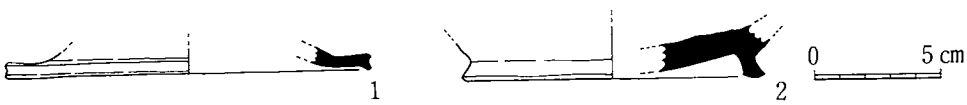
第144図1は、るつぼである。全体に器壁が厚く、口縁端部が丸くなる。内外器面には、細かいひびがはいっている。外器面の口縁部寄りの箇所が部分的に黄褐色に変色し、スラグが付着している。その部位より底部より部分が灰褐色に変色している。

2～10はふいごの羽口である。出土したものが破片であるため、全体の形状が分からない。その中でも、8・9・10は残存部が多く、全体の形状が想定できる。平面形は送風部が大きく、先端部ほど小さくなるハの字形を呈すると思われ、断面形は筒状になる。これらの羽口は成形状態で二つに分けることができる。外器面を面取りしているもの（2～5・7～10）と面取りがないもの（6）とがある。また、孔径（復原孔径も含む）の大きさで二分できる。孔径の大きいもの（3.4、4、6 cm）は、5・6・8で、小さいもの（2.1～2.7 cm）には、2・3・4・7・9・10がある。8・9・10の先端部には、スラグが帯状に付着しており、そこより送風部側が帯状に灰黒色または黒褐色に変色している。9は帯状変色部分が交差しており、差し替えて使用していると思われる。これら以外のものは、先端部に部分的なスラグの付着があり、帯状に灰黒色・黒褐色に変色している。8の帯状変色部分の送風部側は、直線的になっており、垂直方向と約72°の角度になっている。

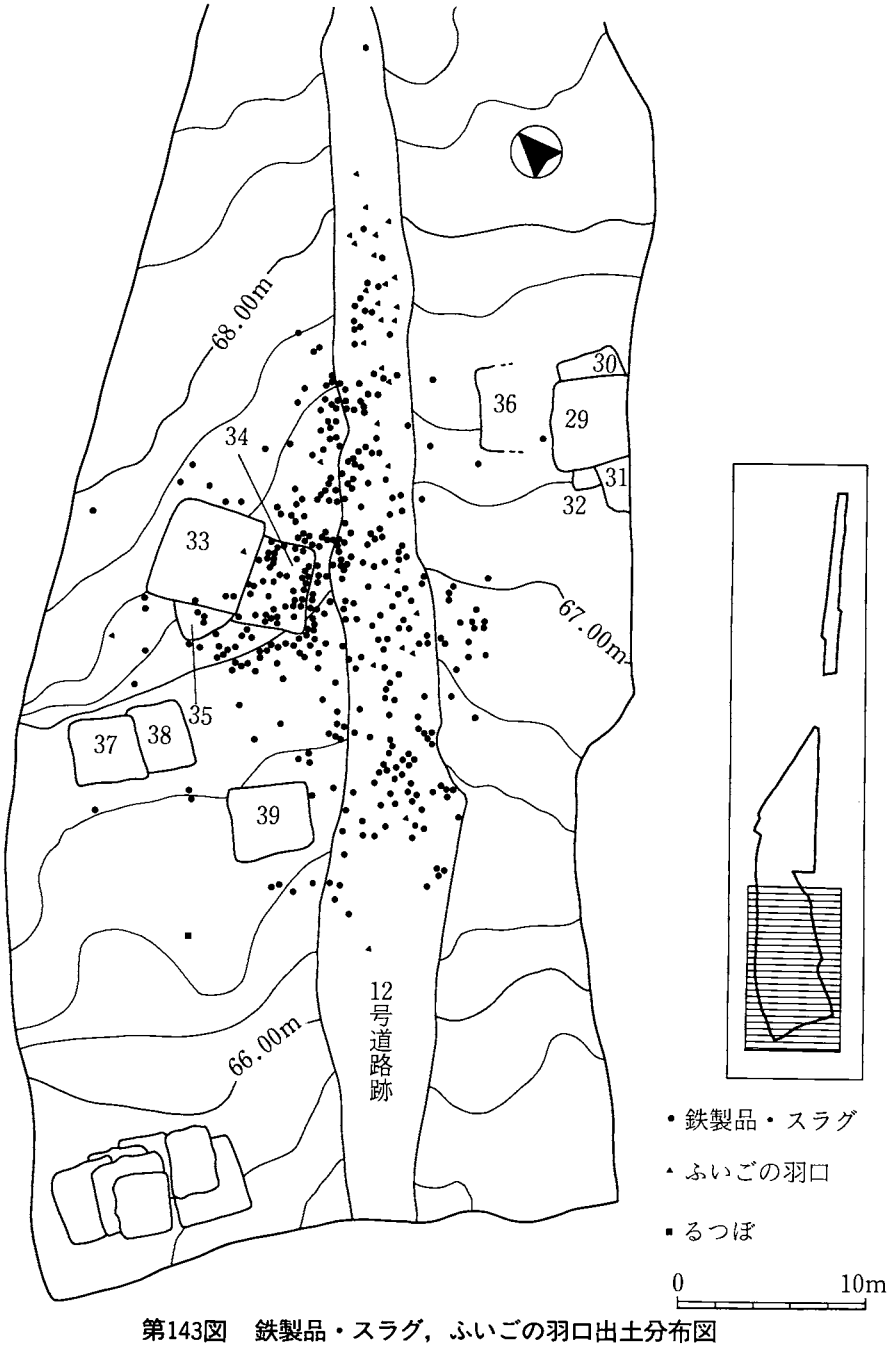
第145図には鉄製品を載せた。1～3は刀子の刃部から身部にかけての破片である。1は2・



第141図　12号道路跡出土鉄器実測図



第142図　1号溝跡出土須恵器実測図



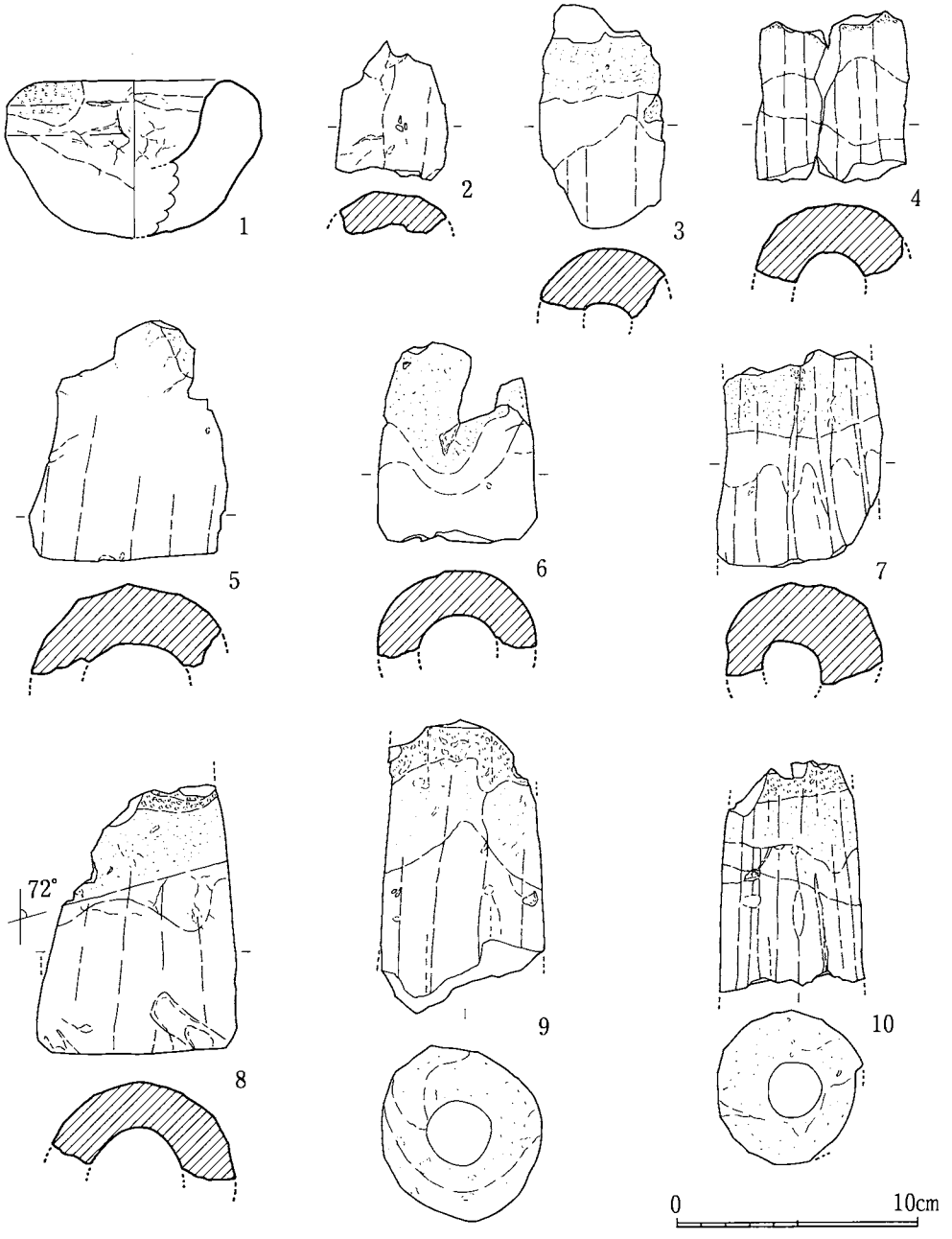
第143図　鉄製品・スラグ，ふいごの羽口出土分布図

3に比べると、先端部の曲がりが急である。4～6は不明鉄製品である。4の形状は楔状である。

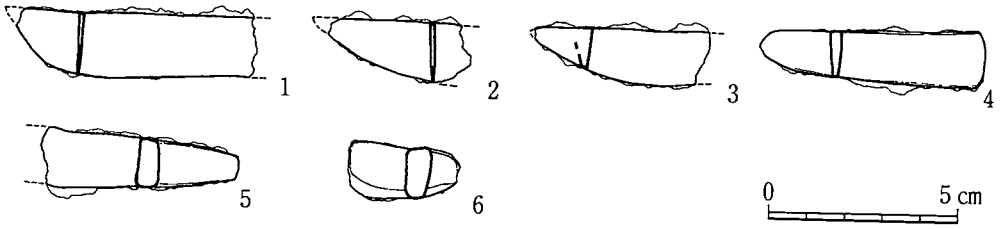
土師器・須恵器について（第146図）

1は土師器の高台付坏で、内外器面に赤色顔料が塗布され、外底部に「大」の字が墨書されている。2～8は土師器の坏である。2は器高が低く、小型である。6は体部がほぼ直線的に

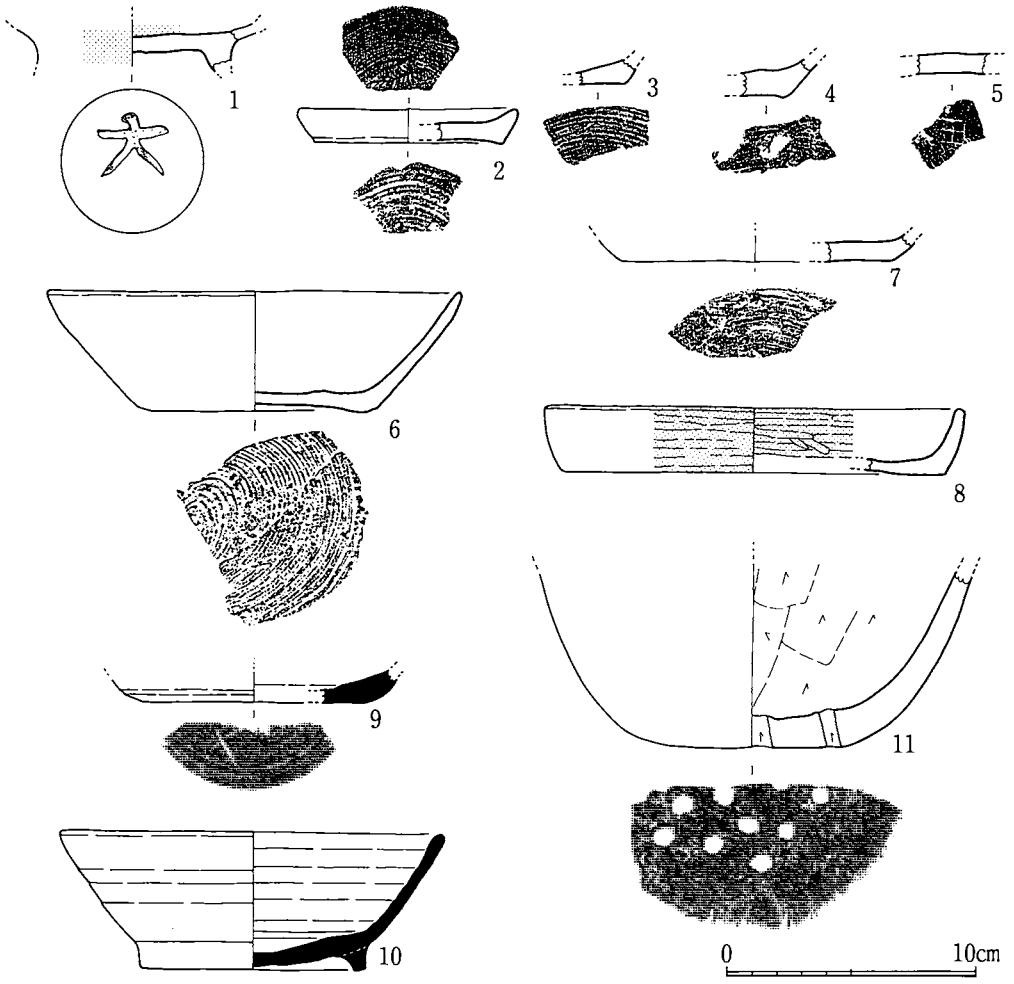
のび、口縁端部が丸くなる。底部が弱い上げ底である。2～4・6・7の外底部には、回転糸きり痕が残っている。2の内底部には、葉脈の圧痕がある。5の外底部には「田」の字状のヘラ記号が施される。8はヘラ切りの底部で、体部が外に丸くなりながら短く立ち上がり、口縁端部が丸くなる。内外器面に赤色顔料が塗布される。9は須恵器の坏で外底部に×字状のヘラ記号がある。10は須恵器の高台付坏で、体部がほぼ直線的にのび、口縁端部が丸くなる。高台



第144図　るつぼ・ふいごの羽口実測図



第145図　Ⅲ層出土鉄器実測図

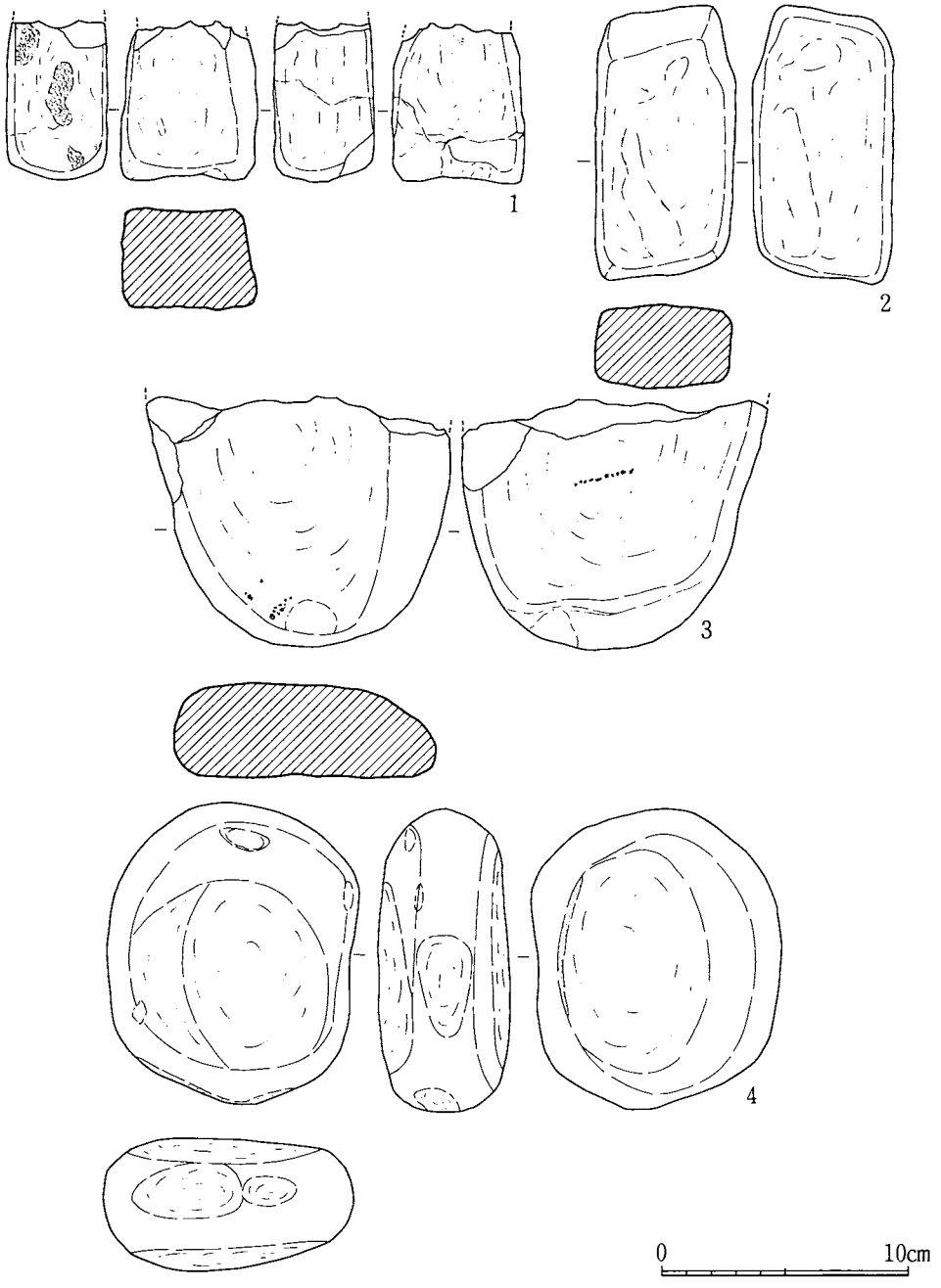


第146図　Ⅲ層出土遺物実測図

はハの字形に外に開く。11は土師器の甑の底部である。底面には外方向から、焼成前の穿孔が認められる。内器面には縦方向のヘラ削りがある。

石器について（第147図）

1・2は砥石である。1は約半分が欠損しており、表裏面及び左右側面に磨痕、表裏面・左側面に敲打痕が残る。左側面の敲打痕は顕著である。2は表裏面に磨痕が残る。3は磨石類で、



第147図　Ⅲ層出土石器実測図

約半分が残存しており、表裏面に磨痕があり、部分的に鉄が付着している。4は磨石類で、表裏面及び側面の一部に磨痕がある。裏面には部分的にススが付着している。

第148図　古銭拓影

古銭について（第148図）

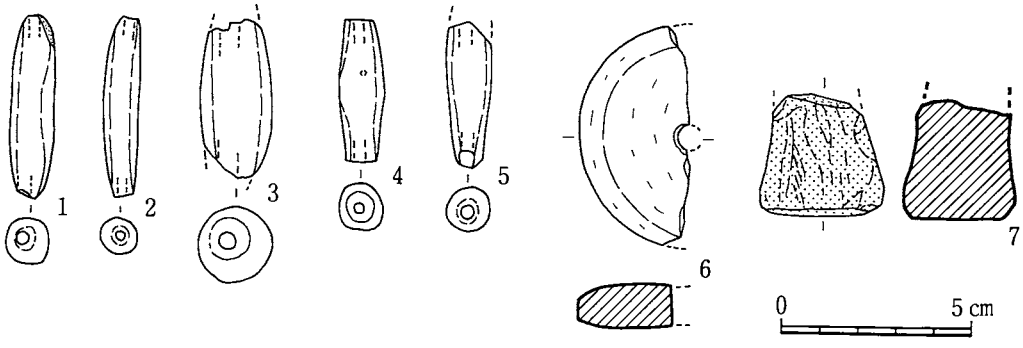
古銭は皇宋通寶である。皇宋通寶の初鋳年は北宋時代の宝元元年（1038年）である。皇宋通寶の書体は篆書で、背の外輪や内郭が消失している。径は2.44cm、重量は1.65gである。

その他の遺物について（第149図）

1～5はⅢ層及び12号道路の覆土より出土した土錘である。2・4は完形で、1は上方の表面の一部が剝落している。1・2は細身・長身である。3は上下端部が欠損しており、胴部が膨らんでいる。4・5は上記両者の中間的な径をもつ。5の上部は欠損している。

6はⅢ層出土の石製紡錘車で、約半分が欠損している。表裏面とも磨痕が著しく、表面には磨研による弱い稜がある。

7は不明土製品である。残存部の下方がハの字形に広がる。表面全体に赤色顔料が塗布される。

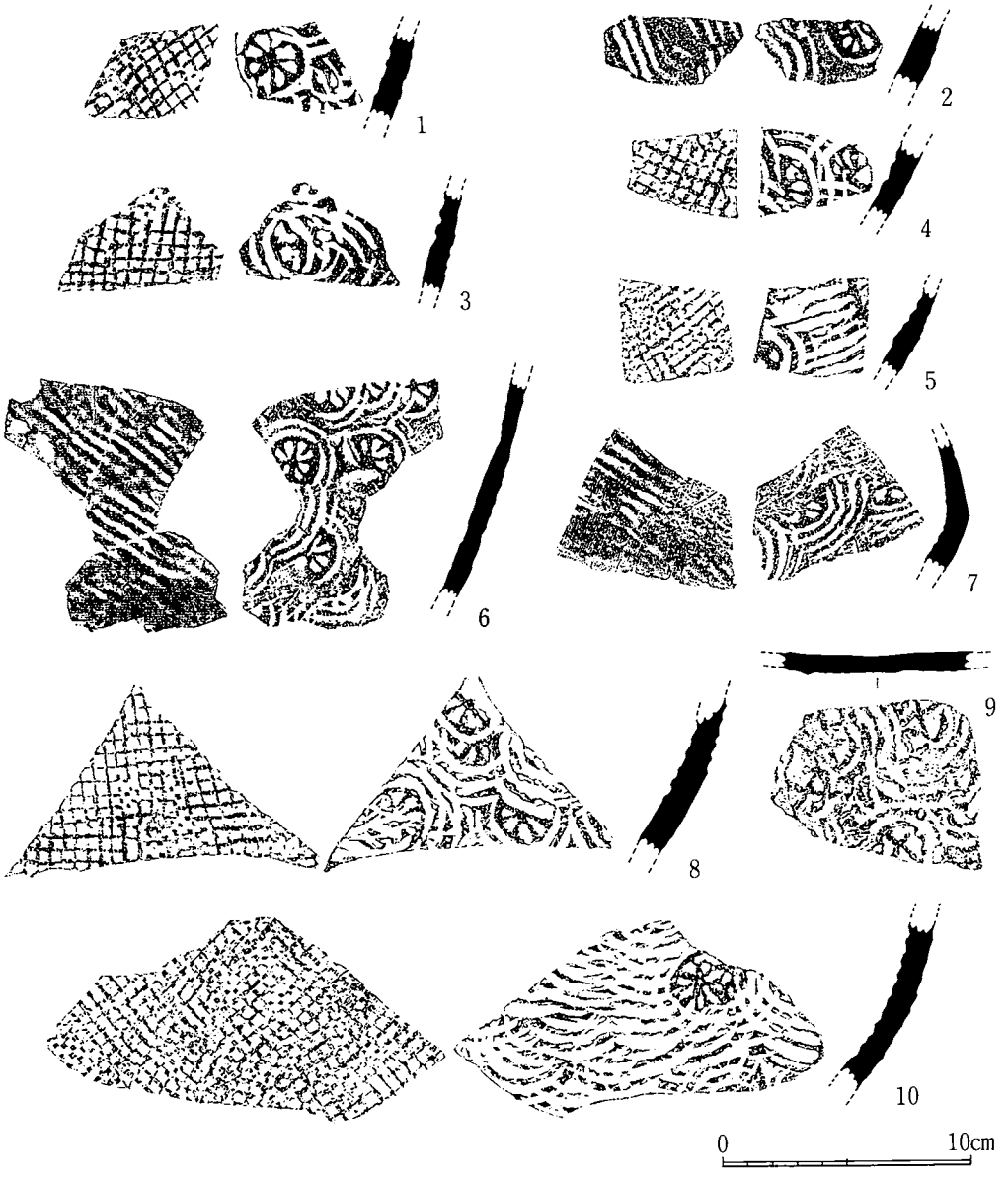


第149図　Ⅲ層出土遺物実測図

⑤車輪文タタキ目のある須恵器（第150図）

車輪文タタキ目のある須恵器は10点あり、3点がⅢ層、5点が12号道路跡覆土、2点が溝跡の攪乱層より出土している。車輪文タタキ目は9が外底部にあり、それ以外は胴部の内器面にある。全体の形状が分かるタタキ目は、6・9にある。9に残されたタタキ目凸部の形状は、中心円内に×字状文があり、その周囲が二重の同心円になっている。6にあるタタキ目凸部の形状は、中心円内に8本の放射線状文があり、その周囲を二重の同心円文が囲む。これら以外

の須恵器は、タタキ目が重なりあっており、タタキ目全体が残っていない。残っているタタキ目より全体の形状を推定すると、6のタタキ目と同様になる。



第150図　車輪文タタキ目をもつ須恵器実測図

6．　鎌倉・室町時代の調査

(1)遺構について

遺構分布（第151図）

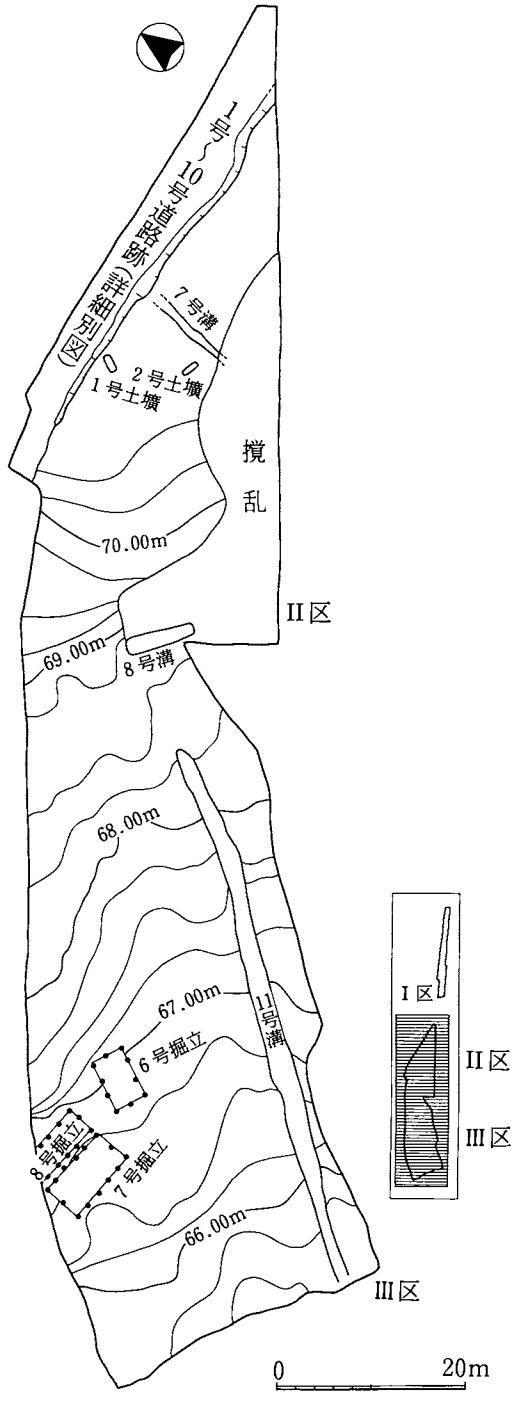
検出した遺構は、6号～8号掘立柱建物跡、1・2号土壙、1号～10号道路跡、7号・8号・11号溝跡である。これらは、II区・III区に分布している。

II区では、北側端部に凹部が帯状に東西方向にのびる。その凹部に、1号～10号道路跡があり、一部は上下に重なっている。凹部に直交する状態で、7号溝跡が位置する。7号溝跡の西側に隣接して、1号・2号土壙がある。7号溝跡、1号・2号土壙は、平坦面に位置している。II区・III区の境には、8号溝跡が北西～南東方向にのびている。

III区の南端部寄りには、11号溝跡が北東～南西方向にのびており、その方向は谷の頂部にほぼ沿っている。11号溝跡の北側で、調査区の北端部に6号～8号掘立柱建物跡が分布している。その箇所は緩傾斜地の中でも、もっとも傾斜が緩やかになっている。掘立柱建物跡の方向と11号溝跡がのびる方向とを比較すると、6号掘立柱建物跡の主軸はほぼ一致するが、7号・8号掘立柱建物跡の主軸は直交状態よりやや南側に振れる。

1号～5号道路跡（第152図～第155図）

1号～5号道路跡は、II区の凹部内にあり、凹部に沿った状態でほぼ東西方向にのびている。1号～5号道路跡の実測図は、東側から西側へA地点～F地点の6箇所に分けて示した。



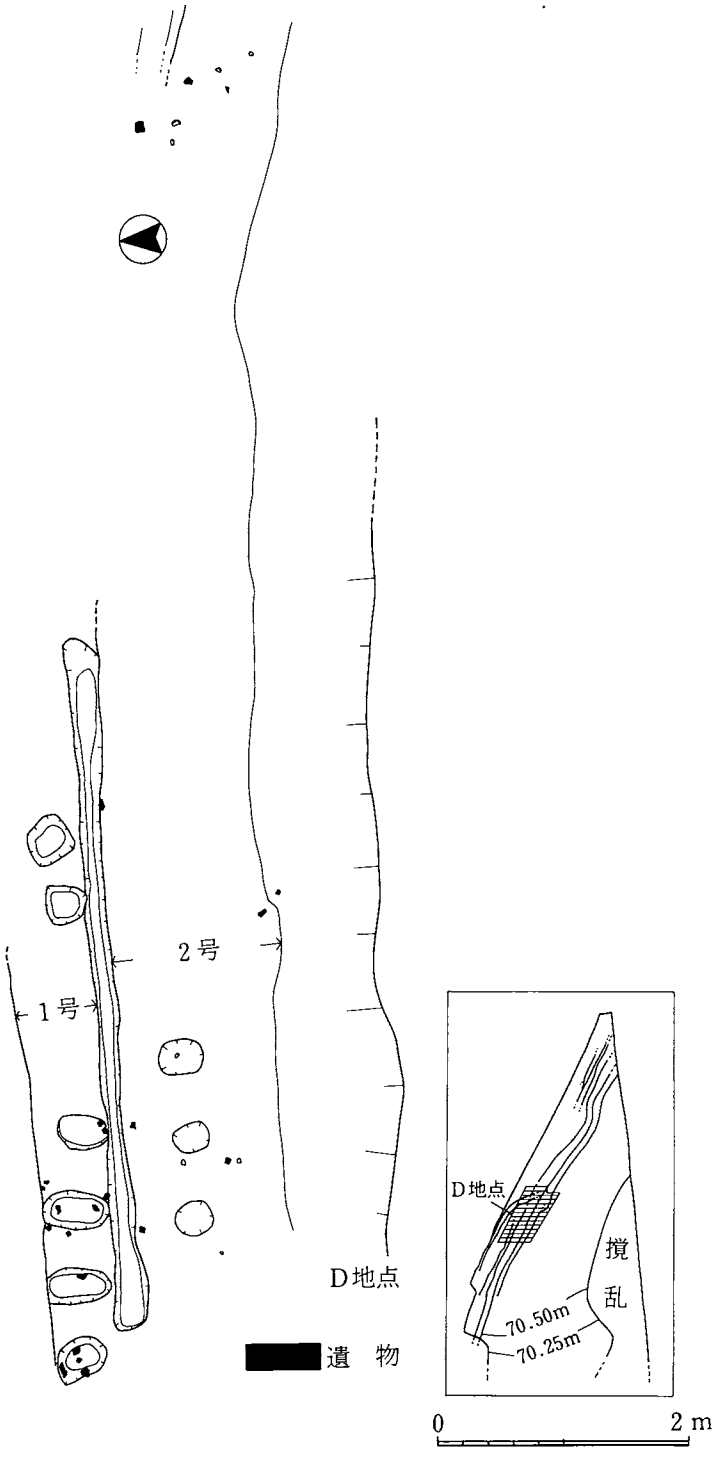
第151図　遺構配置図

1号道路跡

1号道路跡は、D地点・E地点で確認した。1号道路跡は2号道路跡より切られており、1号道路跡→2号道路跡の前後関係がある。1号道路跡は道路幅全体が硬化している（幅約40～80cm）。道路跡は少し蛇行しながら、ほぼ東西方向にのびている。道路跡の中央部には、全面ではないが平面形が楕円形、断面形が皿状を呈する窪みがある（長軸約30～70cm、短軸約24～35cm、深さ約1～3cm）。窪みの内面も硬化している。道路跡の硬化面上や窪み内の一部から、円礫や遺物が出土した。窪み以外の道路跡の断面形はほぼ平坦である。

2号道路跡

2号道路跡は、凹部の南壁に沿った状態でのびており、A地点～F地点で確認した。道路跡の上面は全体が硬化している。道路幅は狭い箇所や広い箇所があり一定でなく（幅約80～160cm）、道路は少し蛇行している。A地点～D地点の一部では、道路両端や片側に側溝がある（幅約18～50cm）。側溝の覆土は道路跡の覆土と違って、粒子の



第152図　1号・2号道路跡実測図

細かい暗褐色砂質土の水成層である。側溝の断面形は皿状になる（深さ約５～10cm）。Ｄ地点の西側端部とＥ地点の東側ほぼ半分の硬化面中央部には、平面形が楕円形、断面形が皿状を呈する窪みがほぼ等間隔にある（長軸約26～34cm、短軸約20～26cm、深さ約１～５cm）。窪みと窪みの間は、約32～40cmである。Ａ地点とＢ地点の東寄り部分、Ｅ地点の西側寄りの部分とＦ地点には、円礫が密集している。円礫の間より、遺物が出土している。上記以外の地点では、円礫や遺物が散在状態で分布している。窪んでいる箇所以外の道路跡の断面形はほぼ平坦である。

３号道路跡

３号道路跡はＡ地点・Ｂ地点で確認できた。検出できたのは、道路全体の一部分である。３号道路跡は２号道路跡の北側に隣接してのび、少し蛇行している（幅約60～110cm）。３号道路跡も他の道路跡と同じように、道路幅全体が硬化しており、硬化面上には礫や遺物が散在している。２号道路跡に伴う側溝がＢ地点の３号道路跡西側端部を切っている。これより、３号道路跡→２号道路跡が分かる。道路跡の断面形は、ほぼ平坦な部分と皿状になる部分がある。

４号道路跡

４号道路跡も３号道路跡と同様に道路の一部分をＡ地点・Ｂ地点で確認した。４号道路跡はＡ地点のほぼ中央から極端に細くなる（幅約20～80cm）。４号道路跡は３号道路跡の北側に隣接してのびており、道路幅全体が硬化している。硬化面上より、少数の遺物や礫が出土した。３号道路跡と４号道路跡の前後関係は不明である。道路跡の断面形は、ほぼ平坦である。

５号道路跡

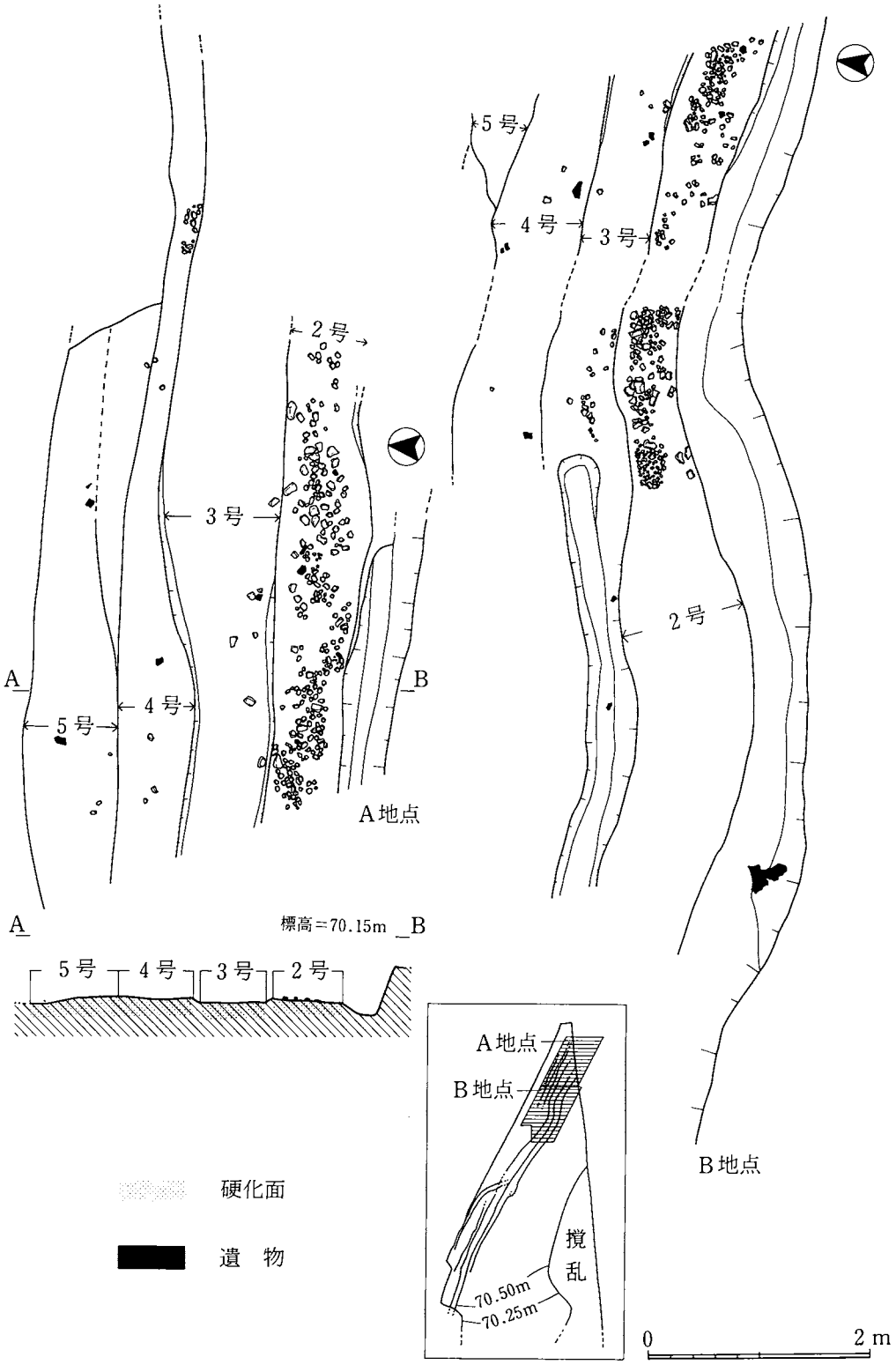
５号道路跡も３・４号道路跡と同じようにＡ地点・Ｂ地点で、道路の一部分を検出した。５号道路跡は４号道路跡の北側に隣接してのびる（幅約50～80cm）。硬化しているのは道路幅全体である。少数の遺物や礫が硬化面上より出土した。５号道路跡と４号道路跡の前後関係は把握できなかった。道路跡の断面形は、ほぼ平坦である。

６号道路跡（第156図）

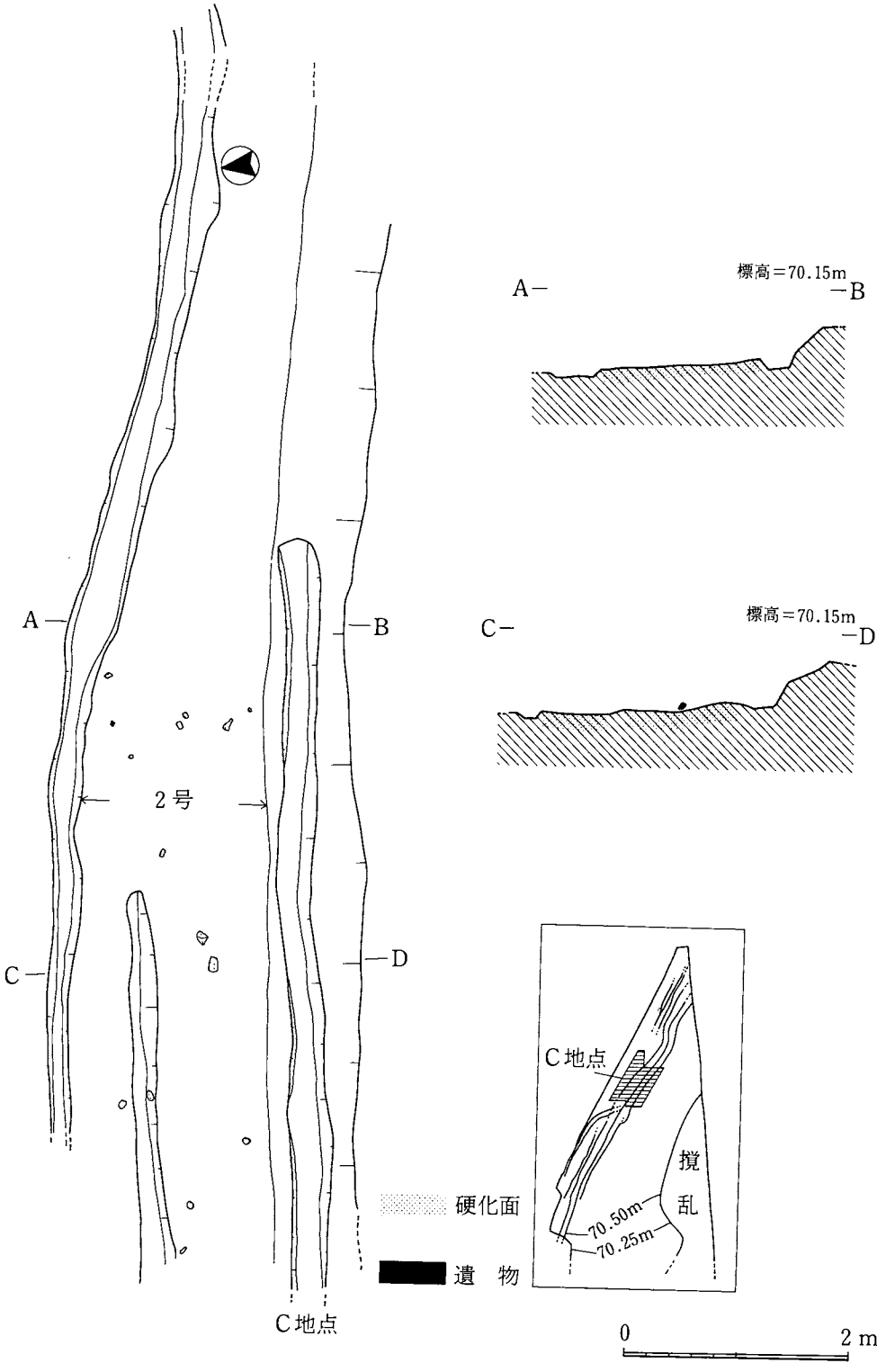
６号道路跡は凹部のほぼ西側半分にある。検出したのは道路の一部分である（Ａ地点・Ｂ地点）。道路跡は検出部の約１／３まではほぼ真っ直ぐにのび、途中から南東方向に曲がる（幅約30～80cm）。道路跡の断面形は、ほぼ平坦な箇所と皿状を呈する箇所がある。６号道路跡は１号・２号道路跡の上に形成されており、１号・２号道路跡→６号道路跡の前後関係がある。道路幅全体が硬化しており、硬化面上より少数の遺物や礫が出土した。

７号道路跡（第157図）

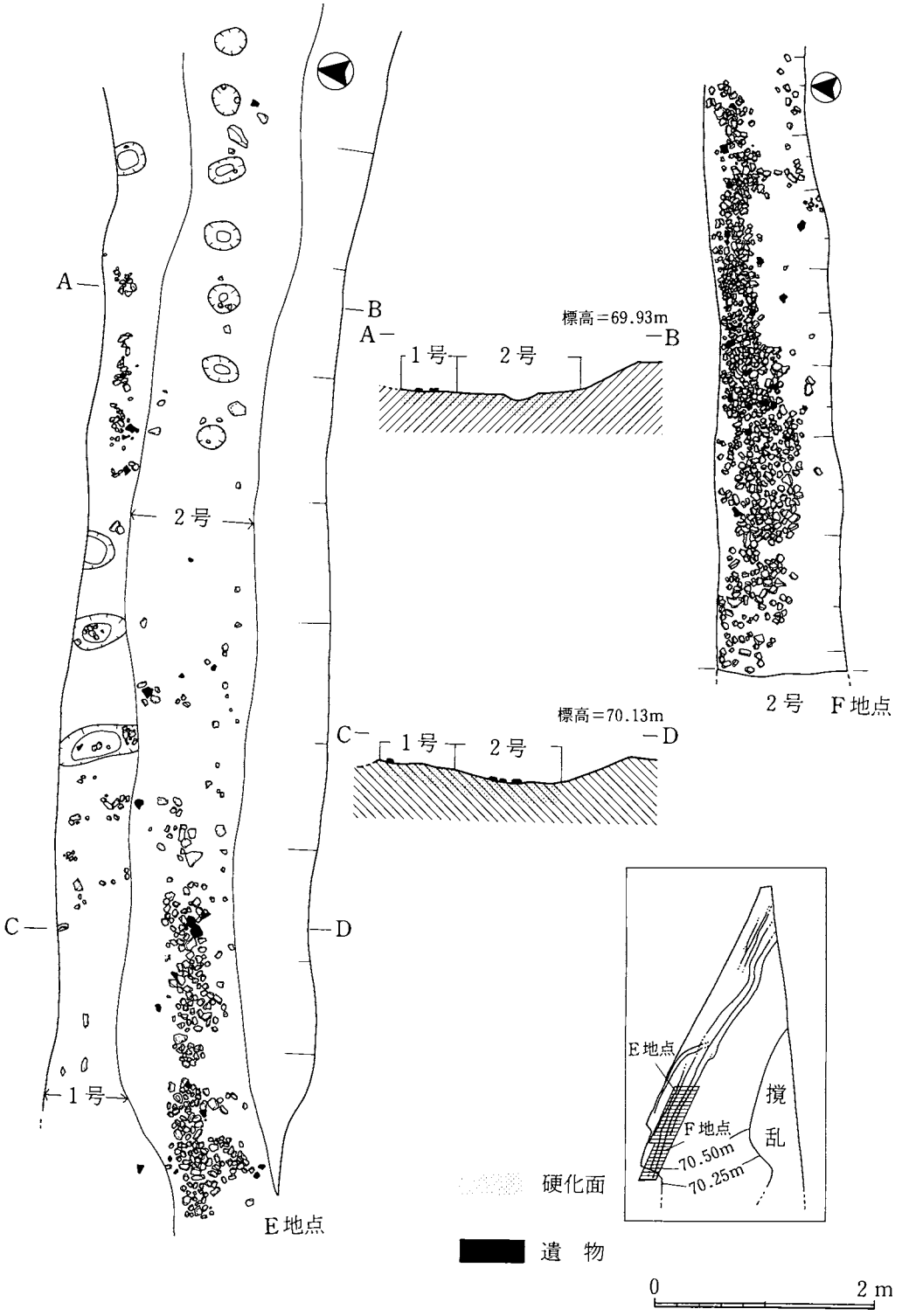
７号道路跡は凹部の南壁に沿った状態でほぼ真っ直ぐのびており、確認できたのは一部分である（Ａ地点・Ｂ地点）。７号道路跡は２号道路跡の下部にあり、７号道路跡→２号道路跡の



第153図　2号～5号道路跡実測図



第154図　2号道路跡実測図



第155図　1号・2号 道路跡実測図

前後関係がある。7号道路跡はB地点の東側寄りの箇所でやや狭くなる（幅約80～160cm）。道路幅全体が硬化しており、硬化面上から礫・遺物が散在状態で出土した。道路跡の断面形は、ほぼ平坦である。

8号道路跡（第158図～第160図）

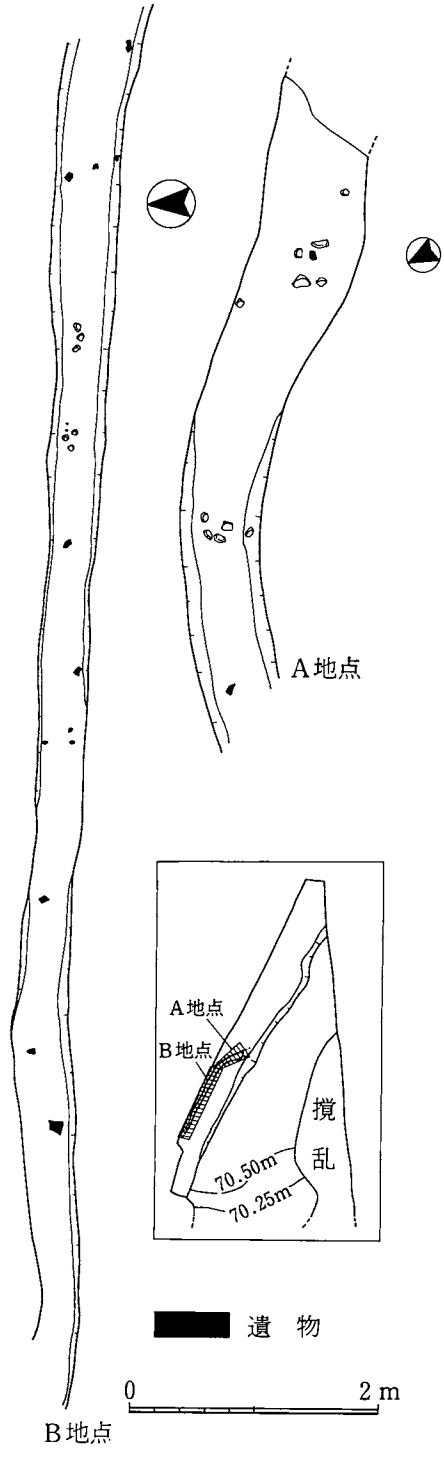
8号道路跡は、7号道路跡の硬化面を掘り下げた後に検出したもので、8号道路跡→7号道路跡の前後関係が把握できた。8号道路跡は凹部の南壁に沿った状態でのびており、確認できたのは道路の一部分である（A地点・B地点・C地点）。A地点・B地点の全体とC地点の東端部には、平面形が楕円形や略楕円形、断面形が皿状の窪みがほぼ等間隔に並ぶ（長軸約50～120cm、短軸約20～60cm、深さ約1～10cm、窪みの間隔約20～40cm）。殆どの窪みが道路の南寄りにあり、窪み内には礫や遺物が入り込んだものがある。8号道路跡は、A地点・B地点がほぼ同じ幅で、C地点がやや狭くなる（幅約120～200cm）。C地点の硬化面上には多くの礫があり、礫の一部は道路外にも分布している。また、礫間から遺物が少数出土した。A地点の窪み外側の硬化面上には、少数の礫・遺物がある。

9号道路跡（第158図・第159図）

9号道路跡は、8号道路跡の北側に隣接してのびており、A地点とB地点の一部で確認できた（幅約40～100cm）。道路幅の全体が硬化している。A地点の道路跡の南側の一部には、側溝がある。この側溝は8号道路跡の硬化面を切っており、8号道路跡→9号道路跡の前後関係が把握できた。A地点の硬化面上から、少数の遺物が出土した。

8号道路跡下部遺構（第161図・第162図）

8号道路跡の硬化面直下に遺構を確認した。この遺構を8号道路跡下部遺構とする（幅約100～200cm）。8号道路跡下部遺構は、8号道路跡とほぼ同じ地点で



第156図　6号 道路跡実測図

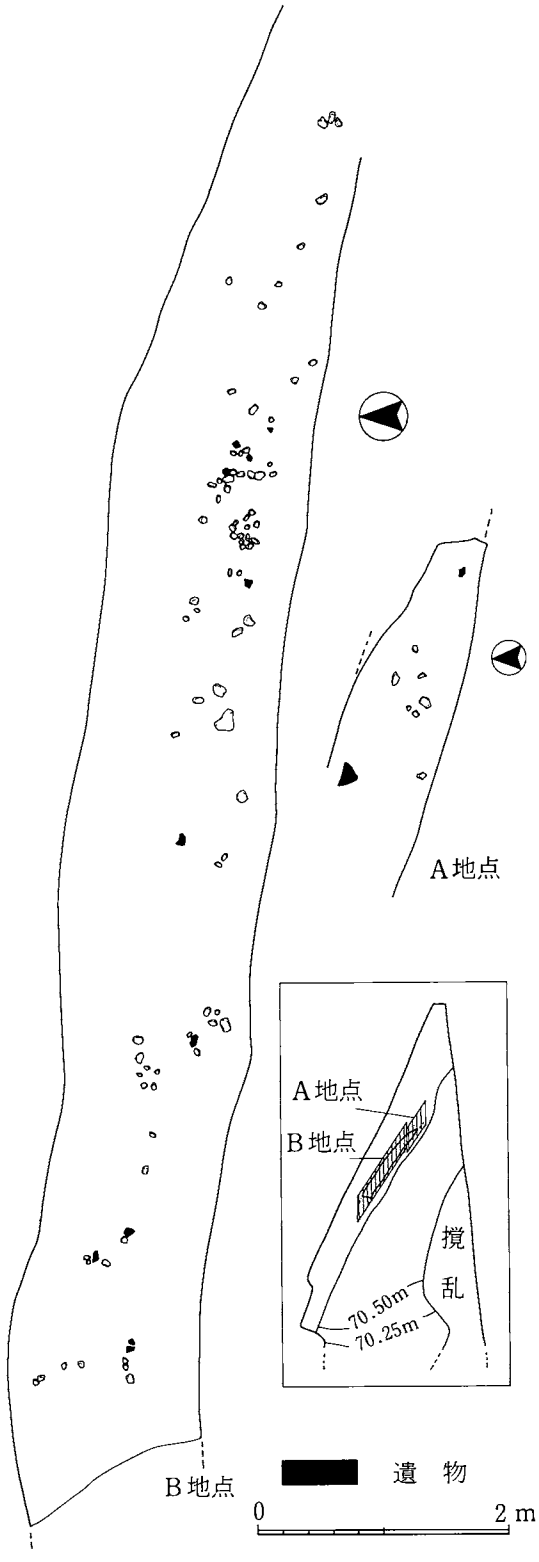
確認した（A地点・B地点・C地点）。A地点の土層断面を観察した結果は次の通りである。Ⅳ層が凹部の基盤になり、Ⅳ層の上面に②層～⑪層を客土している。これらの客土の上に凹部全体を覆うように、さらに①層を載せている。この①層が硬化し、道路跡の硬化面となっている。Ⅳ層上面に礫を配置しており、礫の一部が客土の最下層である⑨～⑪層内に入り込む。これらの礫間より遺物が出土した（土層断面図A－B）。また、B地点の土層断面を観察すると、次のようになる。Ⅳ層が凹部の基盤になっており、Ⅳ層上面に⑥～⑮層を客土し、これらの客土を上から覆う状態で③層を載せている。この③層が硬化し、道路跡の硬化面になっている。③層の上面に①・②層が堆積している。Ⅳ層上面に礫配置が認められ、礫の一部が最下部の⑫～⑮客土層に入り込む。配置礫の間から、遺物が出土した（土層断面図A－B）。C地点でも、A地点・B地点と同様な礫や遺物が確認できた。

10号道路跡（第163図）

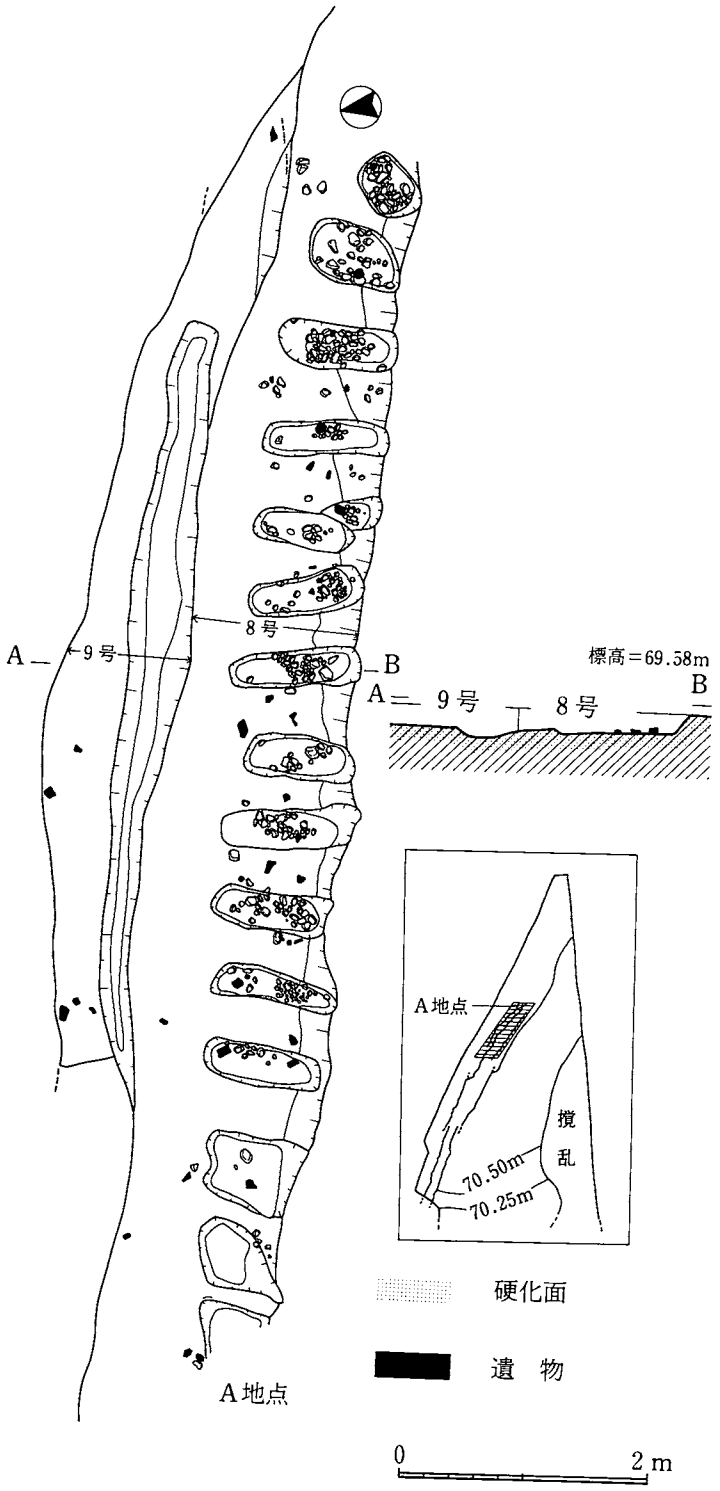
確認できた10号道路跡は、全体のごく一部分である。確認できた部分は、凹部の中央よりやや東側によった箇所で、凹部の南壁に沿ってのびている（幅約100～160cm）。道路幅全体が硬化しており、硬化面のほぼ中央に平面形が楕円形、断面形が皿状の窪みがある（長軸約34～60cm、短軸約20～60cm、深さ約1～4cm）。窪みはほぼ等間隔に並び（間隔約40～50cm）、窪み内には礫が密集しており、礫間や硬化面上より遺物が出土した。

1号土壙（第164図）

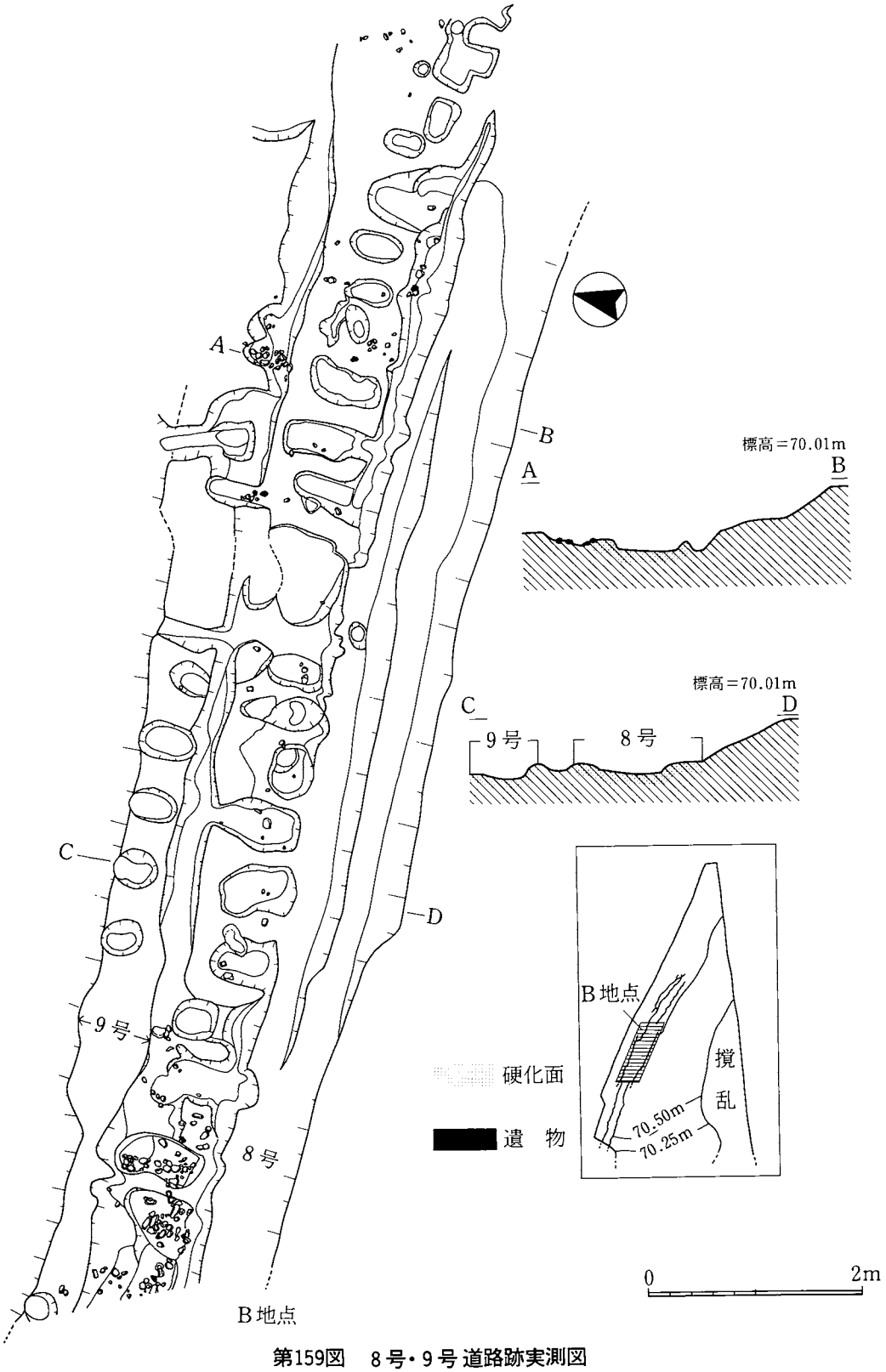
1号土壙の平面形は略長方形



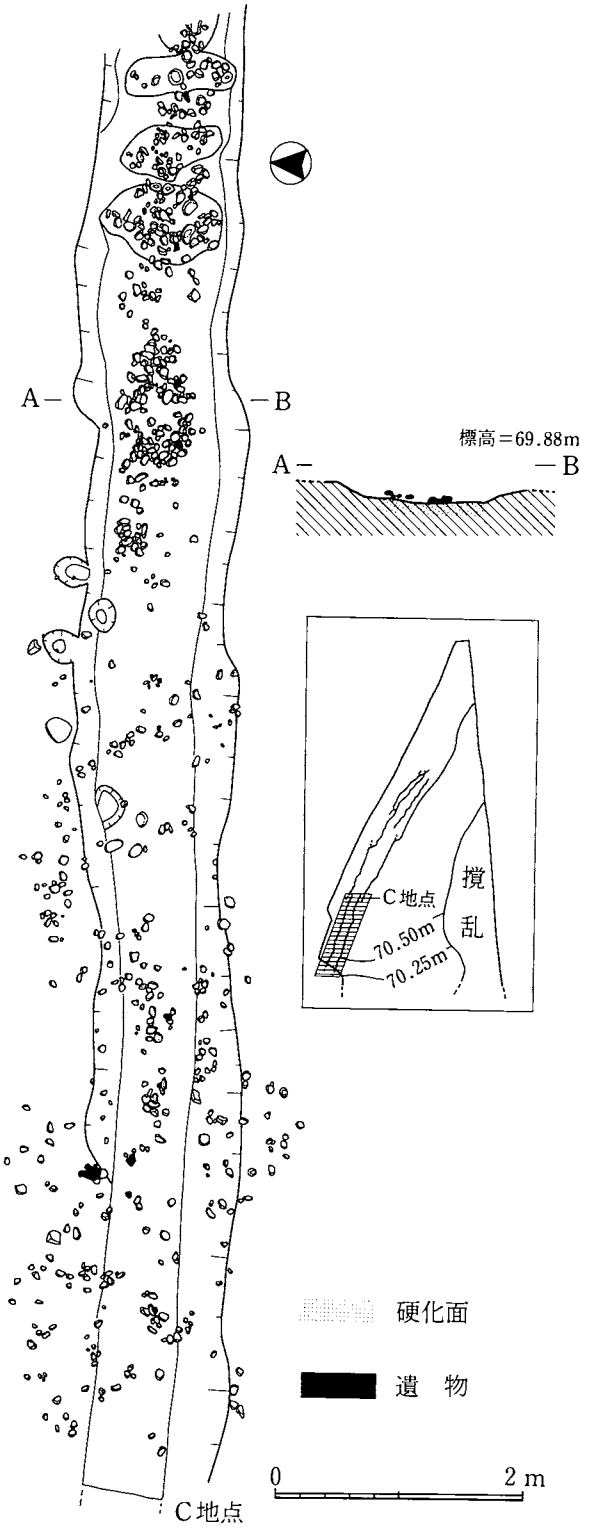
第157図　7号道路跡実測図



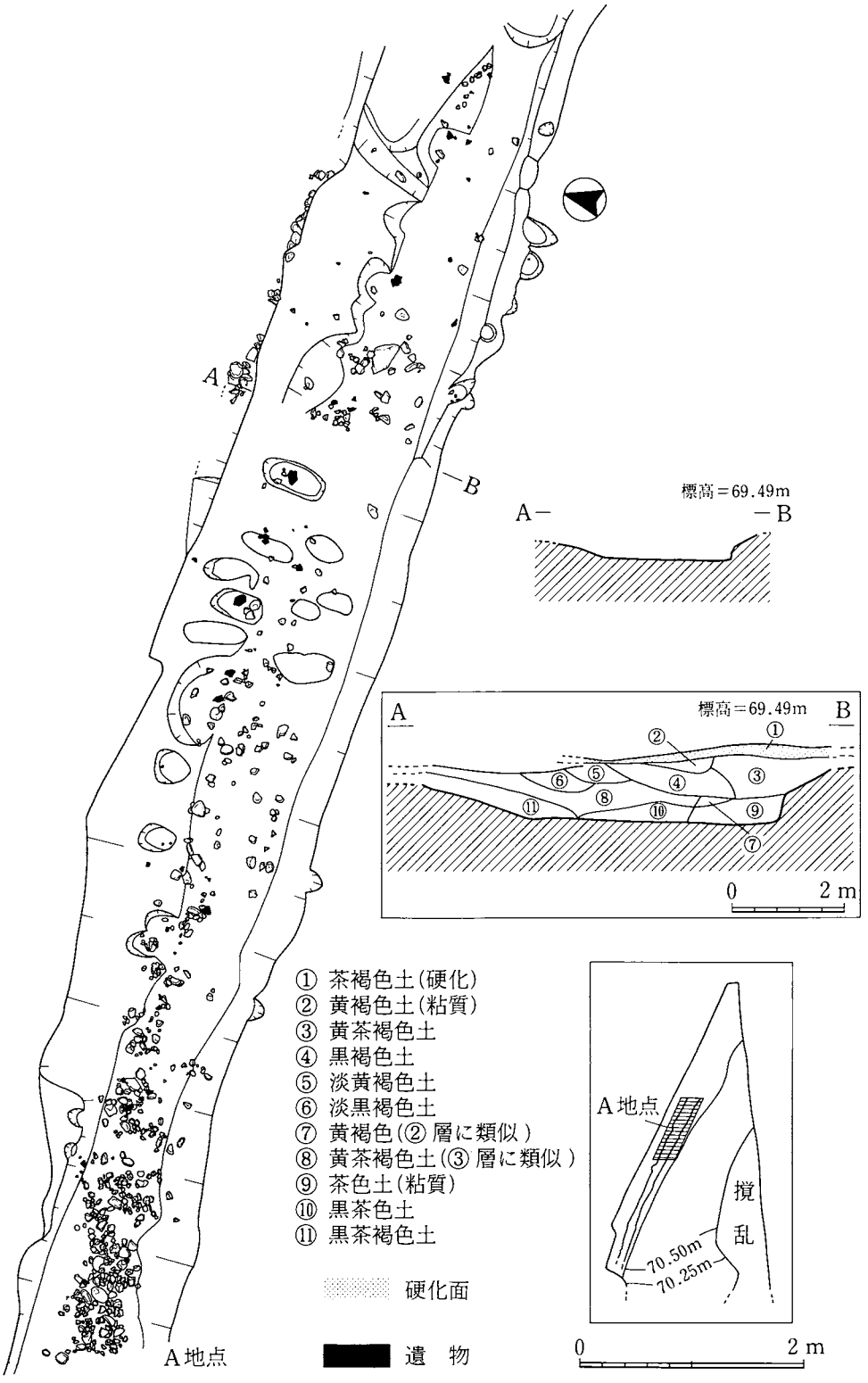
第158図　8号・9号道路跡実測図



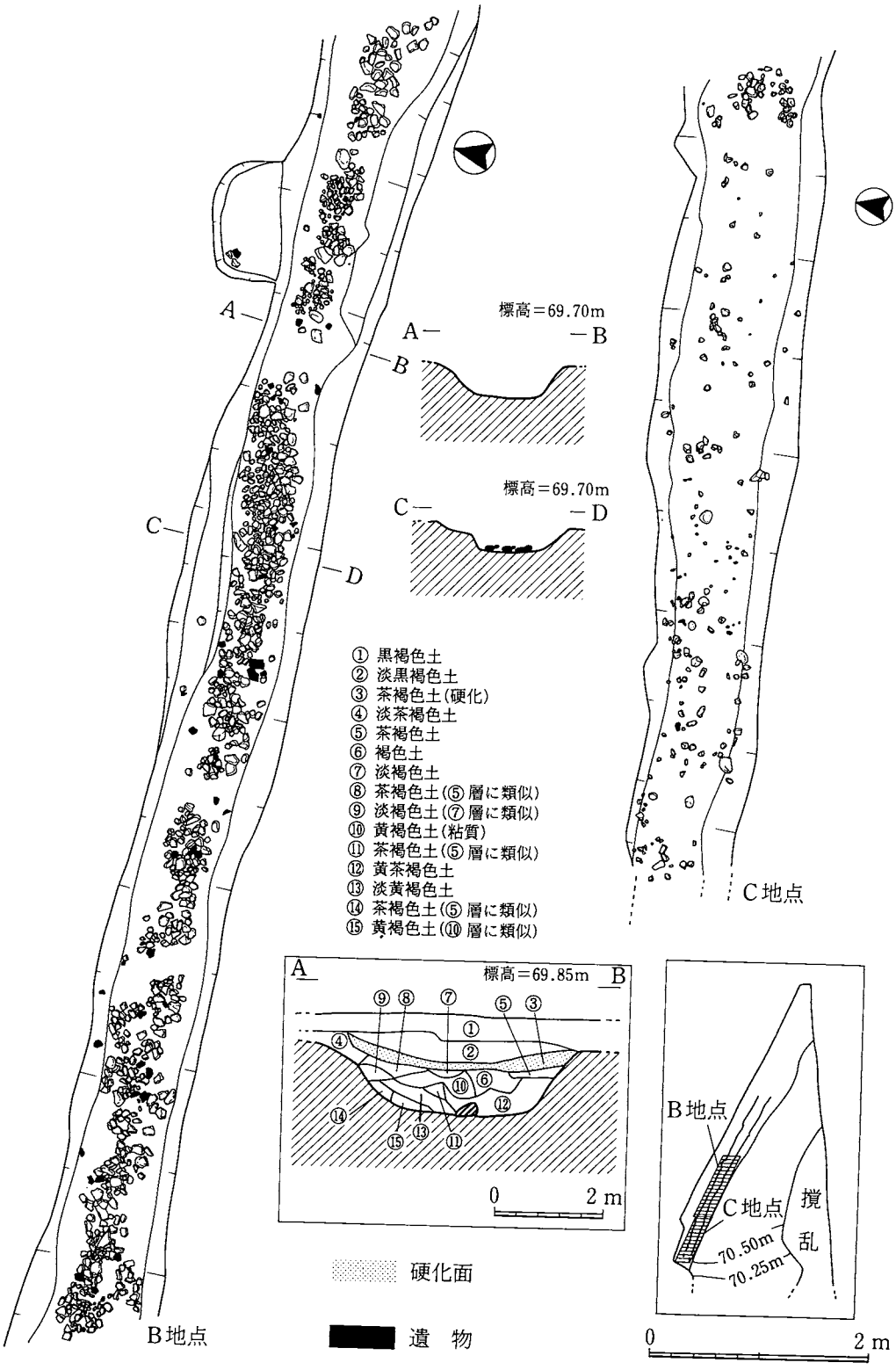
第159図　8号・9号道路跡実測図



第160図　8号道路跡実測図



第161図　8号道路跡下部遺構実測図

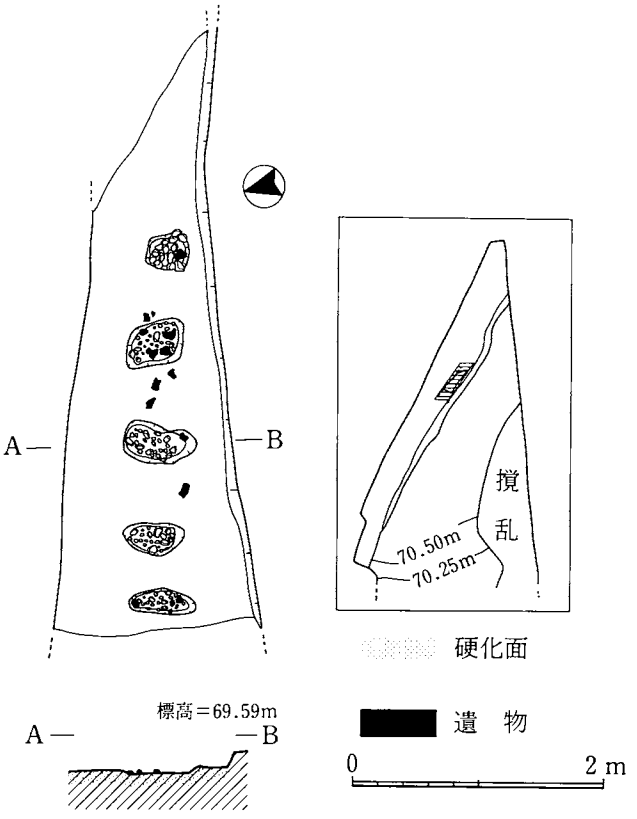


第162図　8号道路跡下部遺構実測図

で（約160×65cm）、断面形は皿状になる（深さ約5～10cm）。土壙内の中央よりやや北東方向に寄った箇所に、赤色顔料を検出した。赤色顔料は床面上にあり、約4cmの厚さがある。覆土は黒褐色土で、分層できない。

2号土壙（第164図）

2号土壙の平面形は略長方形で、短辺は西側が東側よりやや短い（約200×40～45cm）。断面形は皿状になる（深さ約5～8cm）。壁の一部分が2基のピットより攪乱されている。覆土は①・②層に分かれる。①層は暗褐色土。②層は地山（IV層）がブロック状に入った淡黄褐色土である。①層より甑の把手、須恵器の高台付坏片が出土した。



第163図　10号道路跡実測図

7号溝跡（第165図）

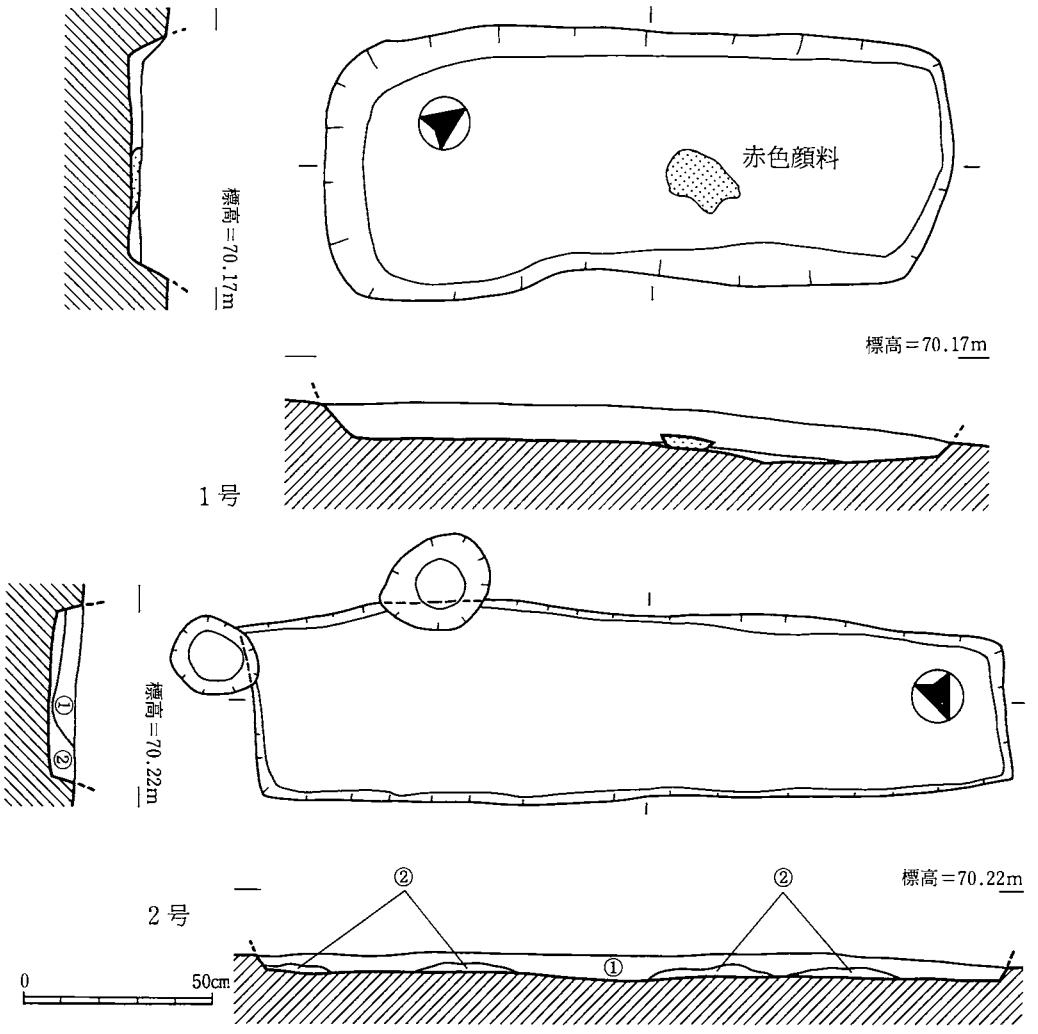
7号溝跡は北側がII区の凹部までのびると思われるが、凹部付近で攪乱を受けており明確にできなかった。また、溝跡の南側は調査区外にのびると考えられる。平面形は少し蛇行しながら帯状にのびる（長さ約780cm、幅約60～90cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約20cm）。覆土は淡黒褐色土で分層できない。遺物が床面上や覆土中より出土した。

8号溝跡（第165図）

8号溝跡は平面形が略長方形であり、南側がやや狭くなる（約740×120～160cm）。断面形は深い皿状を呈する（深さ約40cm）。覆土は①～⑦層に分かれる。①層は黒褐色砂質土。②層は黄黒褐色土で、IV層がブロック状にはいる。③層は暗黒褐色土で、黒色土がブロック状に混入している。④層は黄色土で、硬い。⑤層は軟質の黒色土で、IV層が少量混じる。⑥層は茶褐色砂質土。⑦層はIV層が入り込んだ硬質の黄褐色土である。溝跡の南北両端の覆土中より遺物の多くが出土した。

11号溝跡（第166図～第168図）

11号溝跡は少し蛇行しながら帯状にのびている。溝跡の東端部は閉じており、西端部は谷



第164図　土壙実測図

部に向かってのびる（長さ約54m、幅約120～230cm）。実測図は1地点～6地点に分けて載せた。1地点と2地点北端部の床面に、方形（2基、一辺約90～100cm）及び楕円形（1基、長軸約90cm、短軸約66cm）の掘り込みがある。1地点の断面形は皿状を呈する（断面図A－B、深さ約8～18cm）。2地点での断面形は略台形（深さ約40～50cm）を呈し、覆土は①～③層に分かれる（断面図C－D）。①層は淡茶褐色土。②層は茶褐色土で、黄色の細粒子が少量混じる。③層は黄褐色土で、黄色の細粒子が多量に含まれる。3地点の断面形は略台形を呈する（断面図E－F、深さ約54～60cm）。4地点の断面形は略台形である（断面図A－B、断面図C－D、深さ約40～50cm）。覆土は①～③層に分かれ、これらの層は2地点の断面図C－Dと同じである。5地点の断面形は略台形になる（断面図E－F、深さ約50～60cm）。6地点では溝の幅が狭くなり、断面形は深い皿状を呈する（深さ約26cm）。

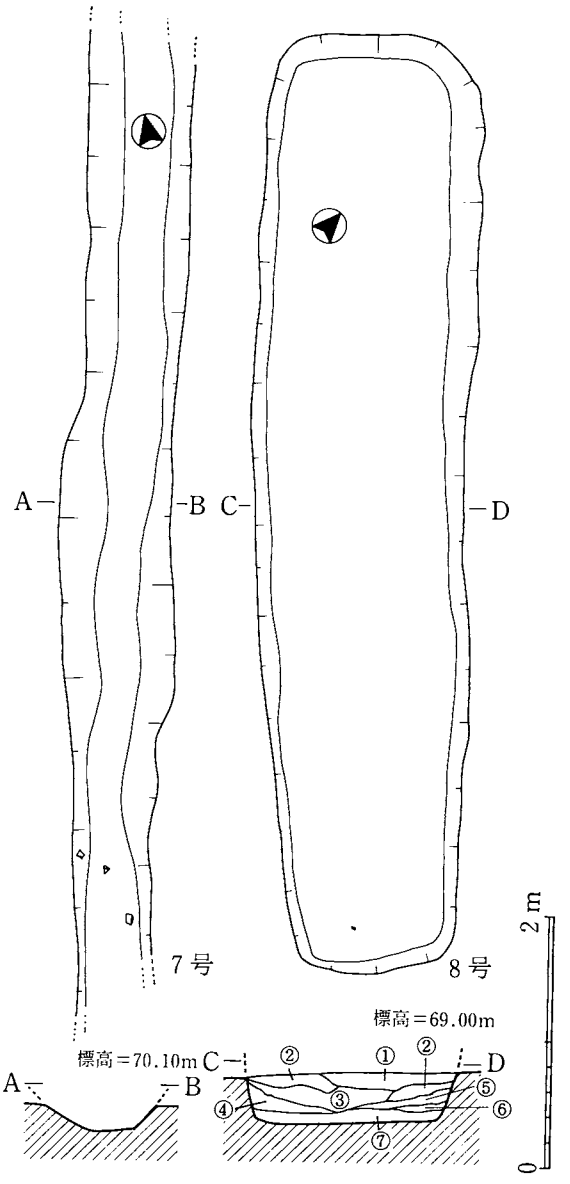
6号掘立柱建物跡（第169図）

6号掘立柱建物跡は2間×3間の規模である。桁行は東西とも約540cm（約18尺）で、東側桁部の柱間寸法は、北側から約180cm（約6尺）、約210cm（約7尺）、約180cm（約6尺）である。西側桁部の柱間寸法は、約180cm（約6尺）の等間である。梁行は南北とも約345cm（約11.5尺）で、柱間寸法は南北梁部とも、西側から約165cm（約5.5尺）、約180cm（約6尺）である。東側桁部の南から2基目の柱穴がやや内側に入り込む。柱穴は平面形がほぼ円形で（径約38～50cm）、断面形が筒状になる（深さ約40～80cm）。柱穴は分層できるものと、できないものがある。分層できるものは①～③層に分けることができた。①層は橙色の焼土を多量に含んだ茶褐色土で、柱痕跡である。②層は暗褐色土。③層は橙色の焼土を多量に含んだ黒褐色土で、柱痕跡である。分層できない柱穴の覆土は暗褐色土である。柱痕跡の部分に焼土が入ることより、6号掘立柱建物跡は焼失したものと思われる。

7号・8号掘立柱建物跡

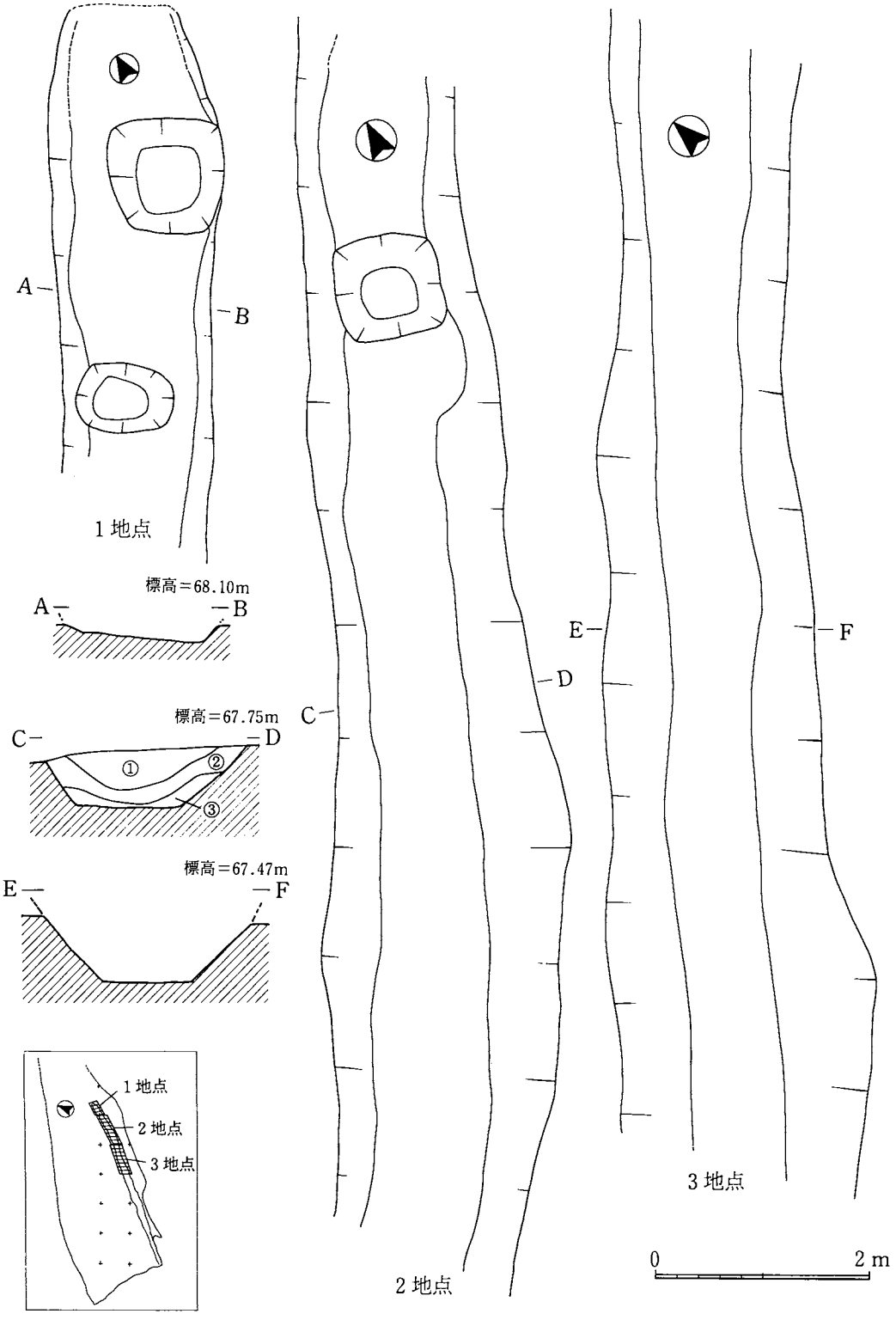
（第170図・第171図）

7号・8号掘立柱建物跡は、二棟が近接し、それぞれの建物の主軸がほぼ東西方向で平行しており、平行型二棟造の構造になる。

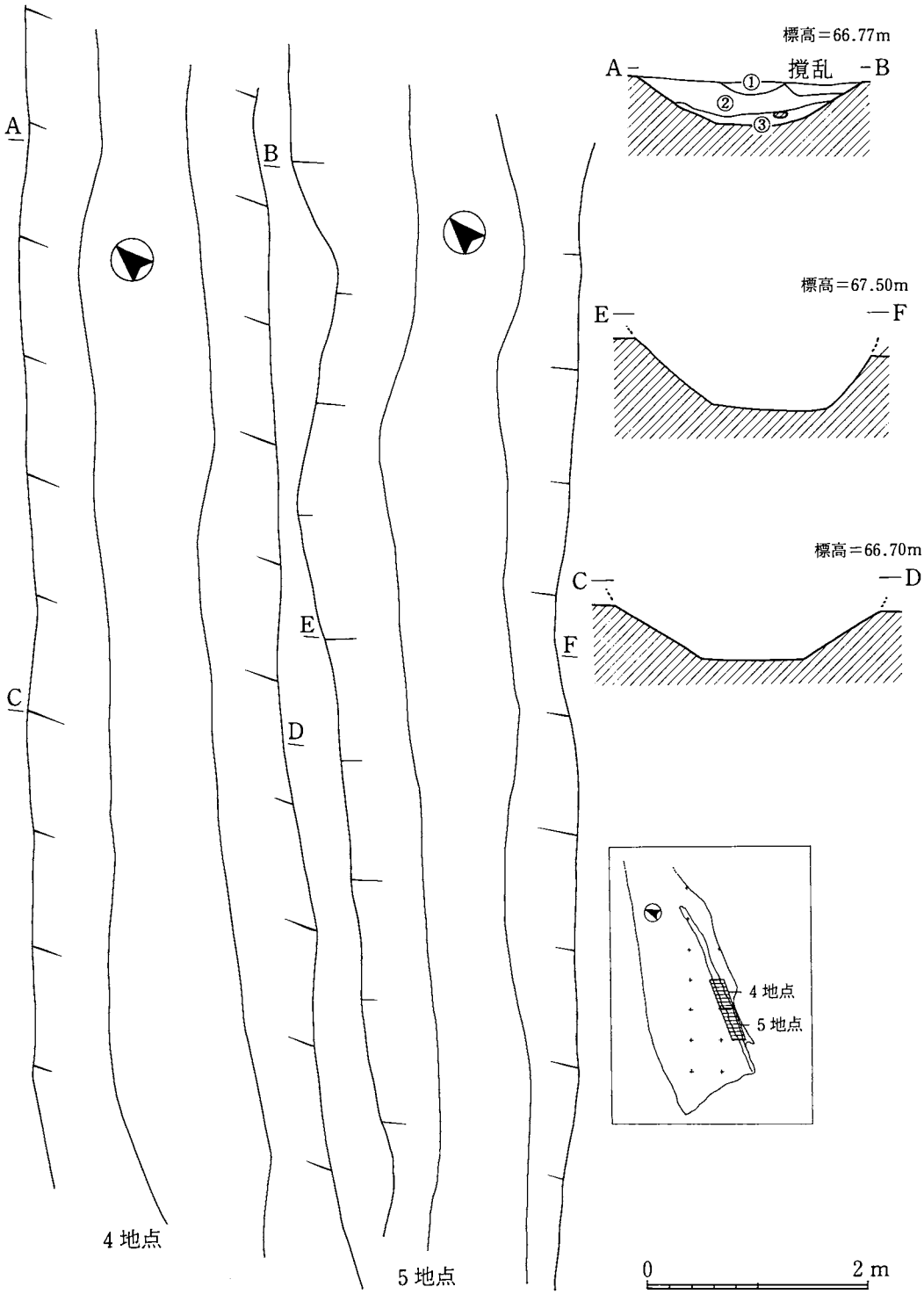


第165図　7号・8号溝跡実測図

7号掘立柱建物跡　7号掘立柱建物跡は2間×5間の規模である。北側桁行は約765cm（約25.5尺）で、柱間寸法は西側から約120cm（約4尺）、約150cm（約5尺）、約165cm（約5.5尺）、約150cm（約5尺）、約150cm（約5尺）である。南側桁行は約840cm（約28尺）で、柱間寸法は西側から約150cm（約5尺）、約180cm（約6尺）、約180cm（約6尺）、約150cm（約5尺）、約180cm（約6尺）である。西側梁行は約450cm（約15尺）で、柱間寸法は約225cm（約7.5尺）の等間である。東側梁行は約390cm（約13尺）で、柱間寸法は南側から約180cm（約6尺）、約210



第166図　11号溝跡実測図

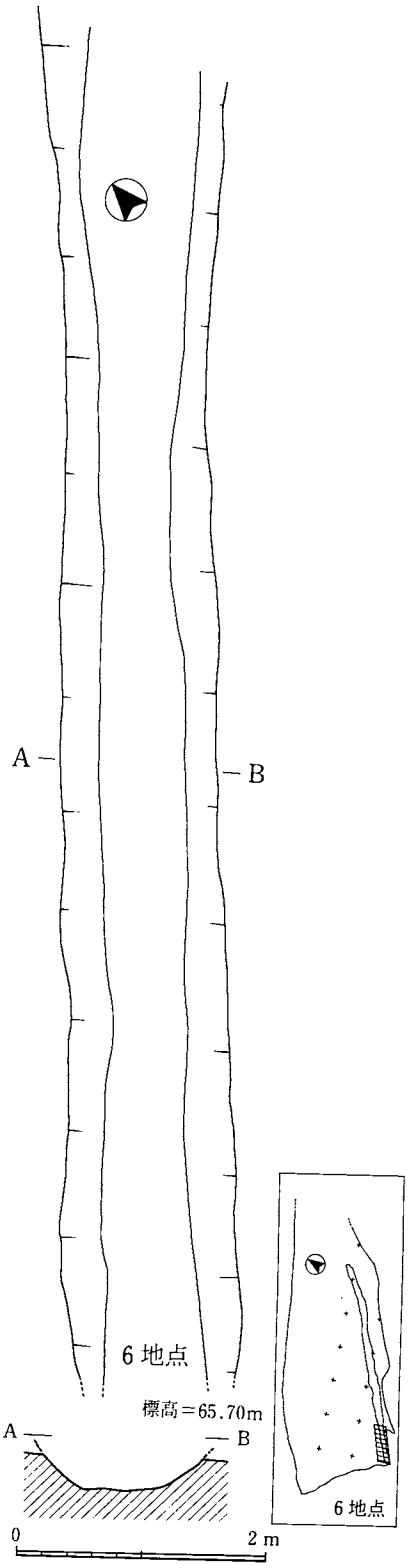


第167図　11号溝跡実測図

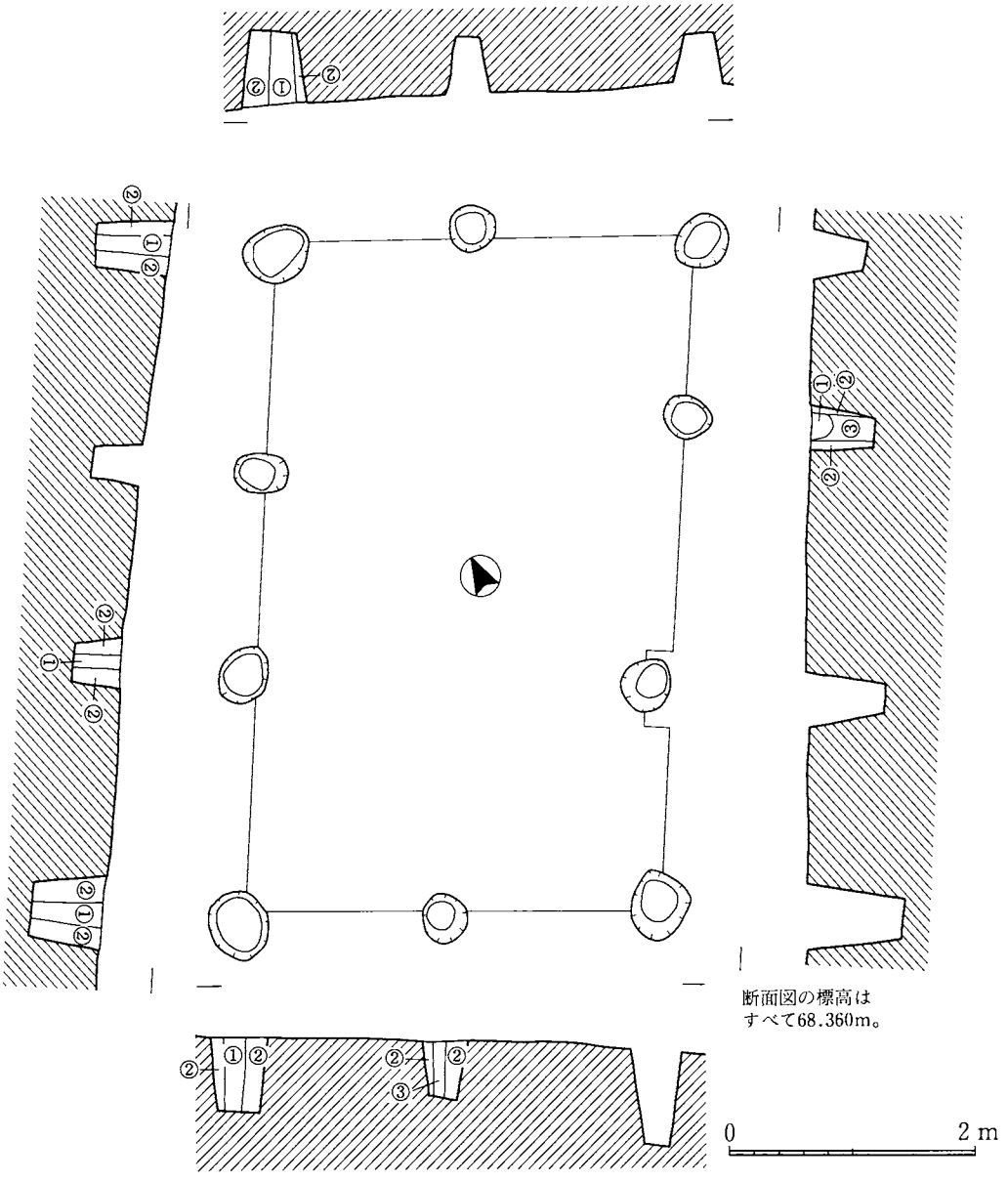
cm(約7尺)である。柱穴は平面形がほぼ円形で（径約28～52cm)、断面形が筒状になる（深さ約28～90cm)。

8号掘立柱建物跡　8号掘立柱建物跡は、柱穴の一部が37号竪穴住居址の床面を切って掘り込んでいる。8号掘立柱建物跡は西側部分が調査区外にのびており、桁行は4間分を確認した。7号掘立柱建物跡との関連で、8号掘立柱建物跡は2間×5間の規模になると考えられる。南側桁行は4間が確認でき、柱穴寸法は西側から約180cm(約6尺)、約150cm(約5尺)、約180cm(約6尺)、約210cm(約7尺)である。北側桁行は3間が確認でき、柱穴寸法は西側から約120cm(約4尺)、約180cm(約6尺)、約180cm(約6尺)である。梁部は東側だけ確認できた。梁行は約300cm(約10尺)で、柱間寸法は南側から約180cm(約6尺)、約120cm(約4尺)である。柱穴は平面形がほぼ円形で（径約30～54cm)、断面形が筒状になる（深さ約34～100cm)。

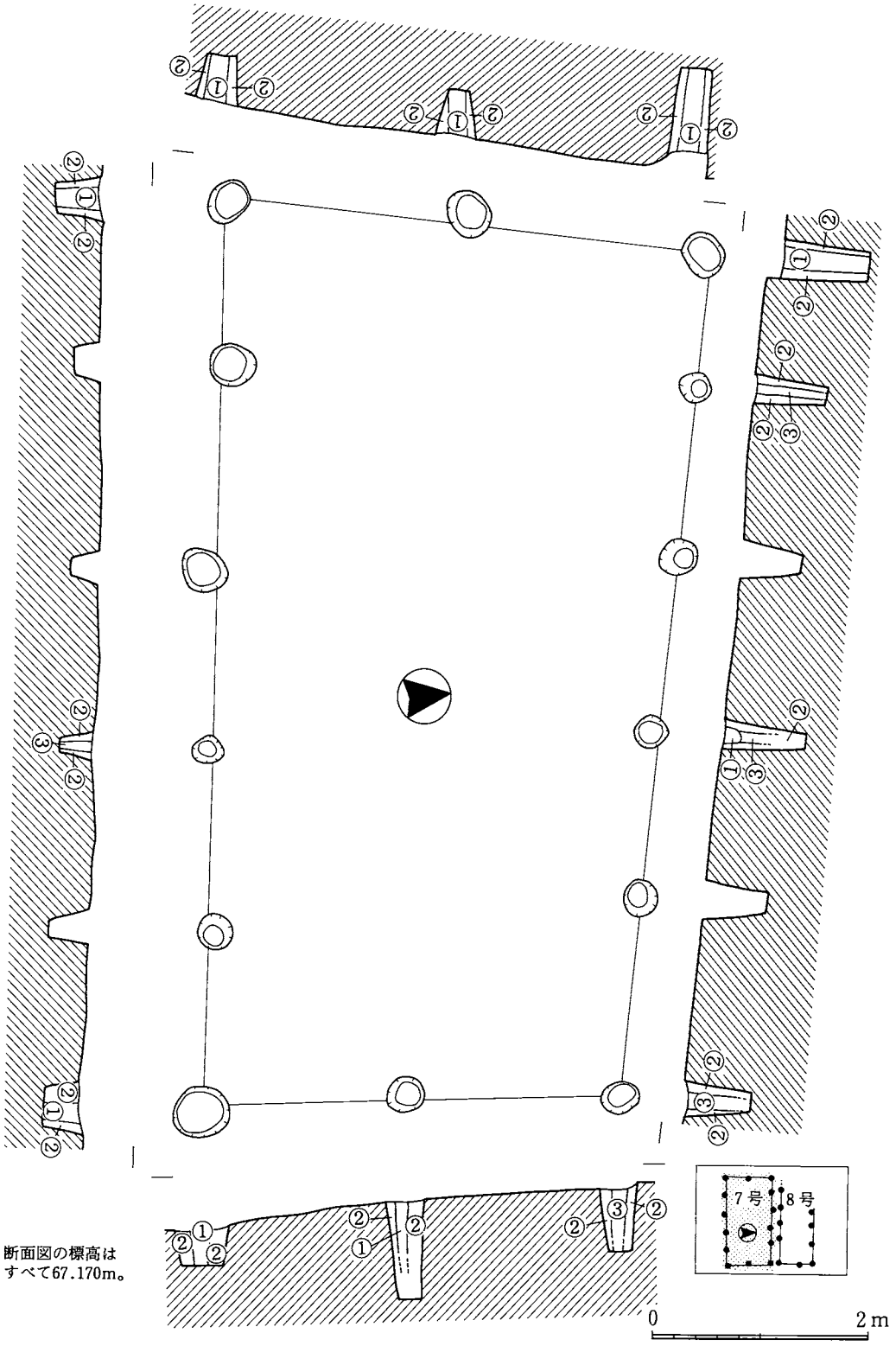
7号・8号掘立柱建物跡の柱穴は分層できるものと、できないものがある。分層できるものは①～③層に分けることができ、6号掘立柱建物跡の柱穴覆土と同じである。7号・8号掘立柱建物跡も柱痕跡部分に焼土が含まれることより、6号掘立柱建物跡と同様に焼失したと考えられる。



第168図　11号溝跡実測図

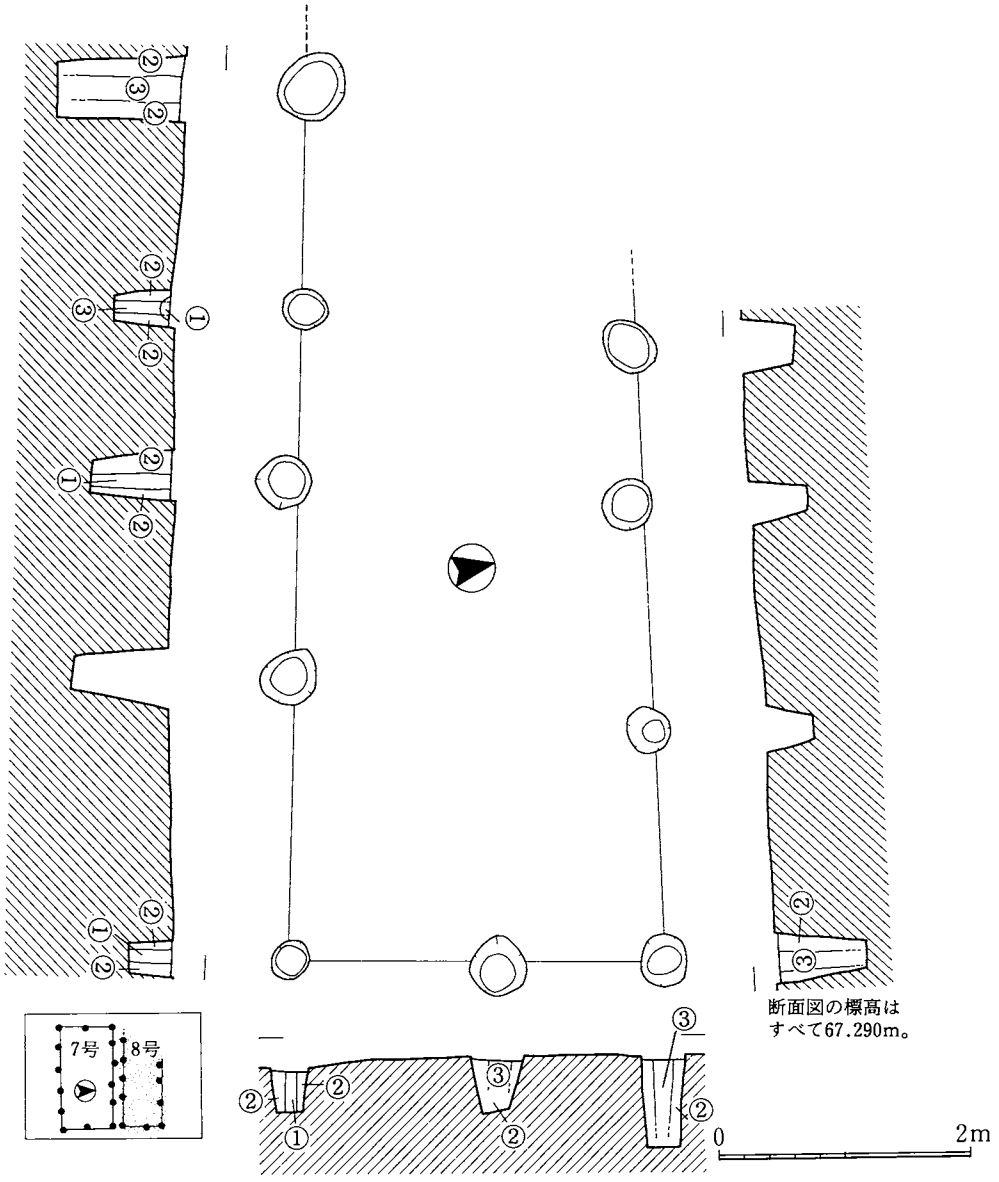


第169図　6号掘立柱建物跡実測図



断面図の標高は
すべて67.170m。

第170図　7号掘立柱建物跡実測図



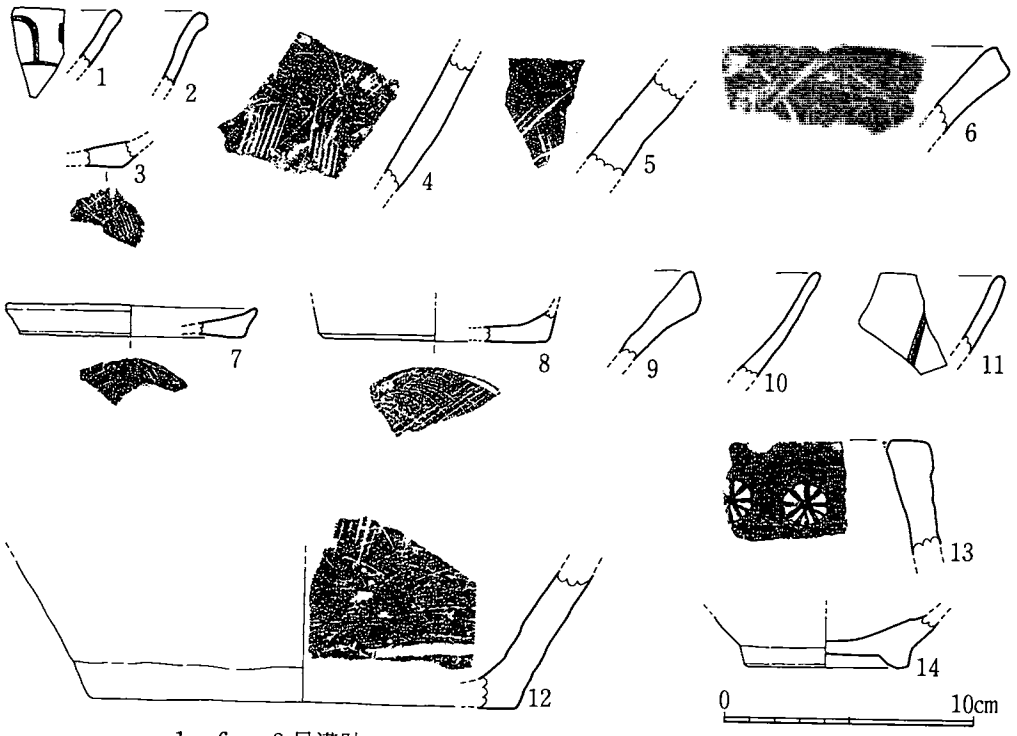
第171図　8号掘立柱建物跡実測図

(2)遺物について

溝跡出土遺物について（第172図）

1～6は8号溝跡覆土より出土した。1・2は青磁の口縁部片である。1は端部が丸くなり、外器面に雷文（？）を描いている。内外器面には緑青色の釉が薄く施される。2は端部が外方向に丸くなりながら僅かに突出している。内外器面には淡緑青色の釉が薄くかけられる。3は外底部に回転糸切り痕を残した土師器の底部片である。4～6は瓦質の擂鉢片である。4は胴部片で、内器面に6～7本の条線が斜め方向に施される。5も胴部片で、内器面に左右斜めの両方向より条線が施される。6は端部がくの字形に角ばる口縁部片で、内器面には斜め方向の条線がある。

7～11は11号溝跡の覆土より出土した。7・8は外底部に回転糸切り痕を残した土師器の皿である。7は弱い上げ底で、8の外底部には板状圧痕がある。9は口縁端部が「く」の字形を呈した瓦質の擂鉢片と思われる。10・11は青磁の口縁部片である。10は端部が丸くなり、内外器面に灰緑色の釉が施される。11は端部が丸くなり、外器面に線文が描かれている。12は7号溝跡の覆土、13・14は7号溝跡の床面より出土した。12は瓦質の擂鉢の胴部から底部片である。胴部と底部の境は角ばり、内器面には斜め方向の条線がある。13は瓦質の火舎口



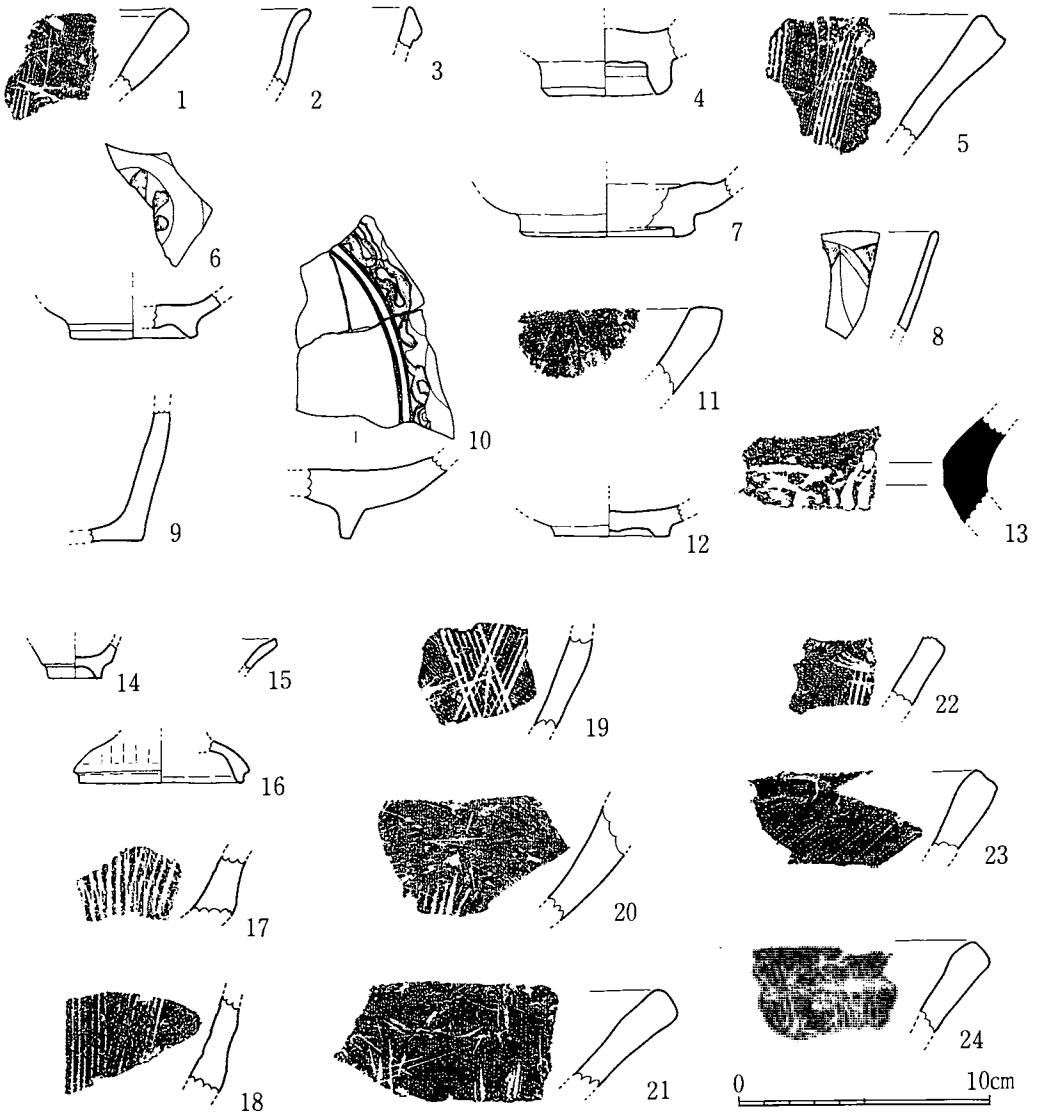
1～6；8号溝跡　7～11；11号溝跡　12～14；7号溝跡

第172図　溝跡出土遺物実測図

縁部片である。体部全体が内側に傾き、端部は平らになっている。外器面には花文のスタンプが施される。14は白磁の底部片で、高台畳付はほぼ平らである。外底部、高台、底部寄りの体部は露胎で、それら以外には釉がかけられている。

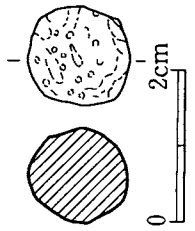
道路跡出土遺物について（第173図・第174図）

第173図1は1・2号道路跡の硬化面上、第173図2～7は2号道路跡の礫間や硬化面より出土した。1は瓦質の擂鉢口縁部片で、端部が「く」の字形に角ばる。内器面に4～5本の条線が斜め方向に施される。2は青磁の口縁部片で、端部寄りが外反し、端部が丸くなる。内外



第173図　道路跡出土遺物実測図

器面に灰緑色の釉が薄くかけられる。3は白磁の玉縁口縁部片である。4は青磁の高台部片で、畳付がやや丸くなる。外底部は露胎で、その他の箇所には灰緑色の釉が施される。5は瓦質の擂鉢口縁部片で、端部が「く」の字形に角ばり、内器面には斜め方向の条線が6本ある。6は染付けの高台部片で、高台がハの字形に外に開く。見込みには藍色の花文がある。高台や外底部は露胎で、それら以外には施釉される。7は青磁の高台部片で、底部が厚い。高台畳付と外底部は露胎で、それら以外は灰緑色の釉が施される。高台外側端部の施釉箇所との境は赤変している。



第174図　鉄砲玉実測図

第174図は2号道路跡の硬化面より出土した鉄砲玉である。玉の表面には、細かな丸い凸部があり、全面が灰白色に変色している。断面形は正円でなく、凹凸が少しある。

第173図8は3号道路跡の硬化面上より出土した。8は外反する青磁の口縁部片で、外器面には鎬連弁が陽刻される。内外器面には淡灰緑色の釉がかけられる。

第173図9は8号道路跡の硬化面上より出土した陶器の底部片である。外器面は薄く施釉される。

第173図10は6号・8号・9号道路跡の硬化面より出土した破片が接合したものである。10は染付けの高台部片で、高台は先端部ほど細くなる。見込みには藍色で2本の線文と花様文が描かれている。

第173図11・12は6号道路跡の硬化面より出土した。11は瓦質の擂鉢口縁部片で、端部が平らで、内器面に条線がある。12は青磁の高台部片である。高台畳付・外底部は露胎で、それら以外には灰緑色の釉が施される。

第173図13は5号道路跡の硬化面より出土した。13は須恵器の頸部片で、屈曲部より下位の内器面には同心円文タタキ目が残る。

第173図14～18は8号道路下部遺構の礫間より出土した。14～16は白磁である。14は坏の高台部片で、高台・外底部以外に施釉される。15は口縁部片で、口禿である。16は合子の蓋で、内器面端部が赤変している。外器面には線の陽刻文がある。17・18は瓦質の擂鉢胴部片で、内器面には斜め方向の条線が施される。

第173図19～21は9号道路跡硬化面より出土した瓦質の擂鉢片である。19・20は胴部片で、21は「く」の字形に角ばる口縁部片である。いずれも内器面には斜め方向の条線がある。

第173図22～24は10号道路跡硬化面より出土した瓦質の擂鉢口縁部片である。いずれも端部が「く」の字形を呈し、角ばり、内器面には斜め方向の条線が施される。

第3表　遺物観察表

第5図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－23	III層	縄文土器	口縁部			(3.2)	淡褐色 茶褐色	細砂粒－多 黒雲母－微	磨研	磨研	磨消縄文 沈線文 刺突文	良
2	12道路 10B溝跡	上 3	〃	〃			(4.4)	褐色 一部黒褐色	〃	〃	磨研	磨消縄文 沈線文	〃
3	21住	覆土	〃	底部		(13.4)	(3.6)	茶褐色	砂粒－多	指押さえ 荒いナデ	荒いナデ	底部円盤	〃

	出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
4	C－21 12道路	下	打製石斧	ヘンマ岩	(9.5)	7.3	(1.5)	(155.4)

第6図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
1	C－25	III	石鏃	頁岩	(2.7)	2.1	0.6	(1.9)
2	11号溝	上	〃	〃	2.5	1.6	0.3	0.9
3	33住	覆土	〃	黒曜石	(1.9)	1.5	0.5	(1.2)
4	C－24	III	〃	チャート	1.8	1.7	0.6	1.1

第23図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	B－22 10A溝跡	2層	甕	脚		脚径 9.2	(6.3)	赤褐色	石英・長石－多 雲母－少	ヨコナデ	ナデ	外底部に 砂粒付着	良
2	B－23 10A溝跡	〃	〃	〃		脚径 9.6	(4.9)	茶褐色	〃	〃	ナデ	〃	〃
3	〃	〃	〃	〃		脚径 10.4	(9.3)	赤茶色 黒・茶褐色	石英・長石－多 雲母・角閃石－少	ハケ目 ヨコナデ	ナデ	〃	〃
4	〃	〃	〃	〃		脚径 13.6	(8.4)	茶褐色 赤褐色	石英・長石・砂粒－多 9㎜小石	〃	ハケ目 ナデ		〃
5	〃	〃	〃	〃		脚径 10.5	(6.6)	赤茶色 茶褐色、黒色	石英・長石－多 雲母－少	ヨコナデ	ナデ		〃
6	C－25 10A溝跡	〃	〃	〃		脚径 10.5	(6.1)	茶褐色 一部黒褐色	石英・長石－多 黒雲母－微	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ナデ		〃
7	B－23 10A溝跡	〃	〃	〃		脚径 7.8	(9.9)	赤褐色 茶褐色	石英・長石－多 雲母－微	〃	ハケ目		〃
8	B－23 B－24 10A溝跡	〃	〃	口～胴	16.7		(14.6)	黒褐色 茶赤色	7㎜白色粒－微 長石－多	ヨコナデ 不定方向の ハケ目	ハケ目 不定方向の ハケ目		〃
9	C－25 10A溝跡	〃	〃	〃	(19.6)		(19.3)	赤茶色 茶褐色	石英・長石－多 角閃石－微	ヨコナデ ハケ目	不定方向 のハケ目	煤付着	〃
10	〃	〃	〃	〃	18.6		(15.8)	茶褐色、黒 褐色、茶赤色	金雲母・長石－多	ハケ目 ナデ	ハケ目	煤一部付着	〃
11	〃	〃	〃	口～脚	16.6	脚径 9.4	26.7	黒褐色 赤褐色	石英・長石－多 金雲母－少	〃	ハケ目 ナデ指痕	煤付着 外底部に 砂粒付着	〃
12	B－23 10A溝跡	〃	〃	〃	(15.6)	脚径 10.7	22.3	茶褐色 赤茶褐色	金雲母－微	ヨコナデ ハケ目	不定方向の ハケ目 ナデ	煤付着	〃

第24図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外/内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－25 10A溝跡	2層	鉢	口～胴	22.9		(7.5)	一部黒褐色 茶赤色	石英・長石－多 金雲母・角閃石－微	ハケ目	ヨコナデ ハケ目		良
2	B－23 10A溝跡	〃	〃	〃	(15.2)		(6.4)	赤茶色	石英・長石－多 黒雲母－少	ヨコナデ ナデ	ハケ目		〃
3	〃	〃		脚	脚頸部径 6.0	脚径 (19.0)		一部黒褐色 赤褐色	石英・長石－多 雲母－微	器面が荒れて調整不明		指頭痕	〃
4	C－25 10A溝跡	〃	壺	口～頸	(19.4)		(8.4)	赤褐色	〃				
5	〃	〃	鉢	口～底	20.1	7.5	14.4	黒褐色 茶褐色	石英・長石・金雲母－多 黒雲母・角閃石－少	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ目		良
6	〃	〃	甕	口～胴	25.0		(11.1)	黒褐色 茶赤色	石英・長石－少 黒雲母－少	ハケ目 ナデ	ハケ目		〃
7	B－23 10A溝跡	〃	壺	口～頸	(24.4)		(12.2)	赤褐色	石英・長石－多 雲母－少	ヨコナデ ハケ	ハケ	施文	
8	B－22 10A溝跡	〃	甕	口～底	(21.9)		(24.4)	黒・赤褐色	石英・長石－多 角閃石－少	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ目		良
9	B－23 10A溝跡	〃	〃	〃	(24.2)		(29.9)	赤茶色 黒褐色	石英・長石－少 角閃石・黒雲母－少	〃	不定方向のハケ目	部分的に煤、脚を欠き使用	〃

第25図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外/内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	B－23 10A溝跡	2層	器台	口～裾		(14.2)	(16.3)	褐色	石英・長石－多 雲母－微	ハケ目 ナデ	ヨコナデ 指押さえ		良
2	B－23 B－24 10A溝跡	〃	〃	〃	10.4	12.6	14.6	茶褐色	石英・長石－多 雲母－少	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ		〃
3	B－23 10A溝跡	〃	〃	〃	(11.7)	13.0	14.2	赤褐色	長石－多、金雲母－少 黒雲母・角閃石－微	ハケ目	ナデ、不定方向のハケ目		〃
4	10A溝跡	〃	小形壺	口～底	7.0		12.4	赤茶色 黒褐色	石英・長石－多 角閃石・黒雲母－微	ヨコナデ 器面荒れ	ナデ		〃

第26図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外/内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－25 10A溝跡	3層	甕	脚		脚径 9.0	(5.7)	茶褐色	石英・長石－多 雲母－少	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目	砂粒付着	良
2	〃	〃	〃	胴～脚		脚径 (11.2)	(13.8)	黒褐色	〃	〃	〃	〃	〃
3	10A溝跡	〃	〃	口～胴	15.0		(9.4)	赤茶色 一部黒褐色	石英・長石・金雲母－多	ヨコナデ ハケ目	〃		〃
4	〃	〃	〃	胴～底		5.6	(7.5)	茶褐色 赤茶褐色	石英・長石－多 雲母－少	ハケ目 ナデ	〃	砂粒付着 脚・打欠	〃
5	B－23 10A溝跡	〃	〃	口～脚	17.2		(21.0)	黒褐色 赤褐色	石英・長石－多 黒雲母－微	ハケ目 ナデ消し	〃	器面荒れ 脚・打欠	〃
6	10A溝跡	〃	〃	〃	(24.4)		37.7	黒褐色 一部赤褐色	石英・長石－多 角閃石・金雲母－微	ハケ目 ナデ	不定方向のハケ目	脚・打欠	〃
7	C－25 10A溝跡	〃	〃	〃	25.1	脚径 11.3	36.3	赤茶褐色 赤茶色	石英・長石－多、金雲母－少 角閃石・黒雲母－微	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	煤付着	〃

第27図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外/内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	B－22 B－23 10A溝跡	3層	甕	口～底	39.0	10.3	53.6	茶赤色 黒褐色	石英・長石・金雲母－多	ハケ目	不定方向のハケ目	凸帯	良

第28図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－25 10A溝跡	3層	注口付小型壺	口～脚	7.8	脚径 8.6	16.6	淡黒褐色 淡茶褐色	石英・長石－少	ヨコナデ ハケ目	ナデ		良
2	〃	〃	鉢	〃	(11.0)		10.0	茶褐色 黒褐色	石英・長石－多 雲母－少	〃	ハケ目	外底部に砂粒付着	〃
3	〃	〃	壺	口～胴	19.8		(10.6)	茶褐色 淡褐色	石英・長石－多 雲母－少	〃	ヨコナデ ハケ目		〃
4	〃	〃	器台	口～裾		(14.0)	18.0	〃	〃	ハケ目	ハケ目 指なで		〃
5	〃	〃	壺	頸～胴	頸部径 (13.2)		(14.7)	赤褐色 一部黒褐色	〃	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ナデ	凸帯に刻目	〃
6	〃	〃	〃	口～底	(15.8)	7.1	24.1	黒褐色 淡茶褐色	石英・長石－多 角閃石－少	ハケ目 ナデ	ヨコナデ ハケ目		〃
7	〃	〃	〃	頸～胴	頸部径 (11.4)	胴部径 (30.4)	(14.9)	明褐色 黒褐色	石英・長石－多 雲母－少	ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ	赤色顔料塗布 凸帯に刻目	〃

第29図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	D－23 10B溝跡	3層	甕	脚		脚径 11.4	(7.3)	茶褐色 褐色	石英・長石－多 雲母－少	ヨコナデ ハケ目	ナデ 砂粒付着		良
2	D－24 10B溝跡	〃	〃	〃		脚径 9.2	(6.8)	褐色	石英・長石－少 雲母－微	ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ 指頭痕		〃
3	〃	〃	〃	〃		脚径 (12.0)	(8.1)	赤褐色 淡褐色	〃	〃	ナデ 砂粒付着		〃
4	〃	〃	〃	〃		脚径 (13.0)	7.8	茶褐色 淡褐色	石英・長石－多	ハケ目	ヨコナデ 砂粒付着		〃
5	C－22 10B溝跡	〃	〃	〃		脚径 11.0	(5.9)	茶褐色 褐色	石英・長石－少 雲母－微	ヨコナデ ハケ目	指頭痕 ヨコナデ		〃
6	E－25 10B溝跡	〃	〃	〃			(8.8)	淡赤褐色 淡茶褐色	石英・長石－少 角閃石・黒雲母－少	ナデ	ハケ目 ナデ		
7	D－23 B－23 10B溝跡	〃	〃	口～脚	(18.8)		(16.8)	黒褐色 一部茶褐色 灰褐色	石英・長石－多 雲母－少	煤付着 ヨコナデ ハケ目	ナデ		良
8	C－22 10B溝跡	〃	〃	頸～脚		11.6	(19.7)	黒褐色 淡赤褐色	石英・長石－多 角閃石－微	ヨコナデ	不定方向のハケ目		〃
9	〃	〃	〃	口～底	13.4		15.1	黒褐色 淡褐色	長石・金雲母－少 黒雲母－微	ヨコナデ タタキ	ヨコナデ ナデ		〃
10	C－23 10B溝跡	〃	〃	〃	15.1		23.2	黒色 淡茶色	石英・長石－多	〃	ヨコナデ ケズリ調整	器面少々荒れ	〃
11	C－22 10B溝跡	〃	〃	〃	22.0		34.2	黒褐色 淡茶褐色	石英・長石－多 角閃石－微、金雲母－少	ハケ目 タタキ	ハケ目	煤付着 底部少し歪	〃
12	B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	14.6		20.8	黒褐色 茶褐色	石英・長石－多 雲母－少	煤付着 タタキ	ナデ ハケ目		〃

第30図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	E－25 10B溝跡	3層	甕	口～底	12.4		19.3	褐色 茶褐色	石英・長石・金雲母－多	タタキ ハケ目	ハケ目		良
2	C－22 10B溝跡	〃	〃	〃	14.6		26.2	淡黒褐色 淡褐色	石英・長石－多	〃	ハケ目 ナデ		〃
3	B－20 10B溝跡	〃	〃	〃	14.2		30.9	茶褐色 底部赤変	石英・長石・黒雲母－少	〃	〃	煤付着	〃
4	D－23 10溝跡	〃	〃	〃	21.8		38.9	茶褐色	石英・長石－多 金雲母－微	タタキ ナデ	〃	〃	〃
5	B－20 10溝跡	〃	〃	口～胴	19.4		(26.0)	黒褐色 赤褐色	長石・金雲母－多	タタキ ハケ目	ハケ目 ナデ		〃

第31図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－22 10B溝跡	3層	甕	口～底近	15.8		(32.1)	淡茶褐色 淡褐色	石英・長石・砂粒－多 金雲母－少	タタキ ハケ目	ハケ目 ナデ	焦げつき跡	良
2	B－22 B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	19.7		(31.5)	淡茶褐色 褐色 黒色	石英・長石－多 金雲母・角閃石－少	〃	〃	煤付着	〃
3	C－23 10B溝跡	〃	〃	口～底	(12.5)		31.2	黒褐色 淡褐色	石英・長石－少 金雲母・角閃石－微	〃	ナデ ハケ目	〃	〃
4	B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	(17.1)		38.3	茶褐色 淡茶褐色	石英・長石－多 金雲母－微	タタキ ナデ	細かい ハケ目 ナデ	煤付着 器面荒れ	〃

第32図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－22 10B溝跡	3層	甕	口～底	20.1		34.7	黒褐色 淡茶褐色	石英・長石－多 金雲母・角閃石－微	ヨコナデ タタキ	ハケ目 ナデ		良
2	D－23 10B溝跡	〃	〃	〃	17.8		33.7	黒褐色 濃・白褐色	金雲母・長石・砂粒	タタキ ハケ目	〃		〃
3	B－22 10B溝跡	〃	〃	〃	19.5		41.0	黒褐色 淡赤褐色	石英・長石－多 金雲母－少、角閃石－微	〃	ナデ ハケ目		〃
4	B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	19.4		41.0	淡茶・黒褐色、褐色	石英・長石－多 金雲母－少	タタキ ナデ	ハケ目 ナデ		〃

第33図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	E－25 10B溝跡	3層	甕	口～底	20.6		46.2	淡褐色 淡茶褐色	黒雲母・長石－微	ハケ目 タタキ	ハケ目 ナデ	煤付着	やや良
2	B－23 10B溝跡	〃	〃	口～胴	(33.6)		(19.3)	赤茶色	石英・長石－多	ハケ目	〃	〃	良

第34図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－22 10B溝跡	3層	壺	口～底	12.8		26.9	黒褐色 茶褐色	石英・長石－多 金雲母・角閃石－少	ハケ目 タタキ	ハケ目 ヨコナデ		良
2	〃	〃	〃	〃	12.8		32.5	褐色 一部黒褐色	石英・長石－多 雲母－少	〃	ヨコナデ ハケ目	刻目 半円文	〃
3	〃	〃	〃	〃	13.6		40.0	淡茶褐色 黒褐色	石英・長石・角閃石－多	〃	ハケ目 ナデ		〃
4	10B溝跡	〃	〃	〃	14.7		(38.0)	淡茶褐色 一部黒褐色	石英・長石－多 金雲母－少	〃	〃		〃

第35図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－25 10B溝跡	3層	壺		14.2		31.0	淡褐色 茶褐色	石英・長石・雲母－多	ヨコナデ タタキ	斜ハケ目 ナデ	頸部に刺突文 器壁荒れ	良
2	B－20 10B溝跡	〃	〃		頸部径 14.1			淡茶褐色	石英・長石－多 黒雲母－少	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ目	指痕	〃
3	B－21 10B溝跡	〃	〃		17.6		(38.7)	淡茶褐色 黒褐色	〃	ハケ目 タタキ	ヨコナデ ハケ目		〃
4	B－21 D－21 10B溝跡	〃	〃		18.6		48.0	茶褐色 一部黒褐色	石英・長石－多 金雲母・角閃石－微	タタキ ハケ目	ヨコナデ 指押さえ	刺突文	〃

第36図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－22 10B溝跡	3層	壺	口～底	19.1		(37.7)	淡茶褐色 一部黒色	石英・長石－多 金雲母－少	ハケ目 タタキ	不定方向 のハケ目	刺突文 沈線文	良
2	〃	〃	〃	〃	(19.7)		40.9	茶褐色 黒褐色	石英・長石－多、金雲母 －少 角閃石・黒雲母－微	ナデ、ハケ 目、タタキ	ナデ ハケ目	煤付着	〃
3	〃	〃	〃	〃	22.9		(43.1)	淡茶褐色 茶褐色	石英・長石－多 金雲母・角閃石－少	ハケ目 タタキ	〃	器面荒れ 沈線文	〃
4	B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	16.6		38.9	淡赤褐色 淡黒茶褐色	石英・長石・黒雲母－多	ハケ目 ナデ	ヨコナデ ハケ目	円文 沈線文	〃

第37図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	E－25 10B溝跡	3層	壺	口～底	(16.5)		37.0	淡白茶褐色 黒褐色	石英・長石・角閃石－多 金雲母－微	ハケ目 ナデ、タタキ	ハケ目 ナデ		良
2	B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	(15.5)		35.0	黒褐色 淡茶褐色	石英・長石－多 角閃石－少	ハケ目 タタキ	ナデ ハケ目	器面少し荒れ	やや良
3	E－25 10B溝跡	〃	〃	〃	20.4		(38.0)	淡茶褐色 淡赤褐色	石英・長石－多 金雲母・角閃石－少	ヨコナデ ハケ目、タタキ	ハケ目 ナデ		良
4	B－21 10B溝跡	〃	〃	頸～底近	頸部径 13.0		(32.5)	淡茶褐色 淡黒褐色	石英・長石－多 金・黒雲母－少	ハケ目 ナデ	ナデ ハケ目	沈線文	〃

第38図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	B－22 C－22 10B溝跡	3層	壺	口～胴	24.8		51.0	茶褐色 一部赤褐色	石英・長石・雲母－多	ハケ目 ヨコナデ タタキ	ハケ目 ヨコナデ	器面荒れ 刻目凸帯 沈線文	良

第39図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	B－21 10B溝跡	3層	小型壺	口～胴	(12.4)		(11.8)	茶褐色 黒褐色	石英・長石－少	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ		良
2	〃	〃	〃	口～底	15.0			黒褐色	石英・長石－少 角閃石・金雲母－微	〃	〃		〃
3	B－22 10B溝跡	〃	〃	〃	13.3		(12.3)	淡茶褐色	長石－微	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ		〃
4	C－22 10B溝跡	〃	〃	口～胴	14.6		(7.6)	朱赤色 茶色	石英・長石－少 黒雲母－微	ハケ目 ナデ	ヨコナデ		〃
5	D－24 10B溝跡	〃	〃	口～底	7.2		11.8	黒褐色	石英・長石－多 角閃石－微	ヨコナデ 一部ハケ目	ヨコナデ 一部ハケ目		〃
6	E－25 10B溝跡	〃	〃	口～胴	(14.6)		(12.0)	赤茶色	石英・長石－多 角閃石－少	ヨコナデ ハケ目	ハケ目 ヨコナデ		〃
7	B－21 10B溝跡	〃	〃	口～底	13.5		13.2	黒褐色 淡茶褐色	石英・長石－多、金雲母 －微、角閃石・黒雲母－少	ハケ目 ヨコナデ	〃		〃
8	D－23 10B溝跡	〃	〃	〃	15.4		12.4	淡褐色 茶褐色	細砂－少 黒・金雲母－微	〃	〃		〃
9	〃	〃	〃	〃	(13.3)		12.8	淡茶褐色	石英－多、金雲母－微 角閃石・黒雲母－少	ヨコナデ ハケ目	〃		〃
10	C－22 10B溝跡	〃	〃	〃	12.6		15.2	淡褐色	石英・長石・黒雲母－中	ヨコナデ 一部ハケ目	〃		〃
11	〃	〃	〃	〃	14.0		17.1	〃	細砂－少	ハケ目 ヨコナデ	〃		〃
12	E－25 10B溝跡	〃	〃	〃	16.0		18.0	茶褐色	石英・長石－多 雲母－多	〃	ヨコナデ ハケ目		〃
13	C－22 10B溝跡	〃	〃	〃	17.2		14.0	淡茶褐色	石英・長石－多 角閃石－微	〃	一部ハケ目 ヨコナデ		〃

第40図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－22 10B溝跡	3層	小型壺	口～底	13.4		13.5	黒褐色 茶褐色	石英・長石・金雲母－多	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ		良
2	B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	11.4		11.4	茶褐色 淡褐色	石英・長石－多 雲母－少	ヨコナデ ハケ目 一部タタキ	ハケ目 ナデ		〃
3	C－22 10B溝跡	〃	〃	〃	11.2		8.2	淡褐色 一部黒褐色	石英・長石・金雲母－多	ヨコナデ 一部ハケ目	ヨコナデ		〃
4	〃	〃	〃	口～胴	9.7		(12.8)	淡茶褐色 淡黒褐色	石英・長石－多 金雲母－微	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ		〃
5	B－21 10B溝跡	〃	〃	口～底	(8.1)		6.0	淡茶褐色 淡褐色	石英・長石－少 金雲母－微	〃	ナデ		〃
6	E－25 10B溝跡	〃	〃	〃	10.8		7.0	褐色 茶褐色	石英・長石－少、石粒－数点 角閃石・黒雲母－少	ヨコナデ	ヨコナデ		〃
7	D－23 10B溝跡	〃	〃	〃	(11.7)		7.0	淡赤褐色	石英・長石・黒雲母－多 金雲母－微	ヨコナデ 一部ハケ目	〃		〃
8	C－22 10B溝跡	〃	〃	〃	11.9		(7.7)	淡茶褐色	石英・砂粒－微 角閃石・黒雲母－微	〃	〃		〃
9	E－25 10B溝跡	〃	鍔付小型壺	胴		胴部径 9.0	(5.3)	淡赤茶色	石英・角閃石－多	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ		〃
10	C－22 10B溝跡	〃	〃	口～底	10.5	胴部径 11.0	7.6	淡赤茶褐色	石英・角閃石－少	ヨコナデ ハケ目	〃		〃
11	E－25 10B溝跡	〃	支脚	天～裾	4.2	6.1	11.3	褐色 淡褐色	石英・長石－多 金雲母－微	ナデ	ハケ目 ナデ	焼けた跡	〃
12	D－22 10B溝跡	〃	〃	〃	脚径 13.4	上端部径 (12.4)	9.2	茶褐色 淡黒褐色	石英・長石－多 雲母－少	タタキ	指頭痕		〃
13	D－24 10B溝跡	〃	グラス形土器	口～脚	12.6	脚径 14.8	20.4	茶褐色	〃	ヨコナデ ハケ目	ハケ目 ナデ		〃
14	B－21 10B溝跡	〃	片口鉢	〃	23.1	脚径 10.4	18.8	黒褐色 淡茶褐色	石英・長石－多 黒雲母－少、茶色粒－多	ナデ ハケ目	〃		〃

第41図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	D－24 10B溝跡	3層	鉢	口～底	11.2		5.6	茶褐色 褐色	石英・長石－少	指頭押さえ	ハケ目 指頭押さえ		良
2	B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	9.6		(3.8)	黒褐色 淡茶褐色	〃	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ		〃
3	C－22 B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	18.0		8.0	茶褐色 一部黒褐色	石英・長石－多 金雲母－少	一部ハケ目 ケズリ	一部ハケ目、ナデ		〃
4	C－22 10B溝跡	〃	〃	〃	15.8		8.4	茶褐色	石英・長石・金雲母－多	ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ		〃
5	〃	〃	〃	〃	18.2		7.8	茶褐色 一部黒褐色	石英・長石－多 雲母－少	ヨコナデ 一部ハケ目	ハケ目 ナデ		〃
6	〃	〃	〃	〃	23.0		8.8	淡赤褐色	長石・金雲母－多	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ		〃
7	E－25 10B溝跡	〃	〃	〃	17.7		9.5	淡茶褐色	石英・長石・角閃石－多 金雲母－少	ハケ目 ナデ	ヨコナデ ハケ目	内器面少し荒れている	〃
8	〃	〃	〃	〃	18.2		9.7	淡茶褐色 一部黒褐色	石英・長石－少、砂粒－数点 角閃石、黒・金雲母－少	〃	ハケ目 ナデ	外器面籾痕	〃
9	〃	〃	〃	〃	20.0		9.2	淡茶褐色	石英・長石－少 角閃石，金・黒雲母－少	〃	ハケ目 ヨコナデ		〃
10	C－22 10B溝跡	〃	〃	〃	19.2		10.2	茶褐色 褐色	石英・長石－多 金雲母－少	ナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ目		〃
11	E－25 10B溝跡	〃	〃	〃	19.0		11.0	淡赤褐色	石英・長石・角閃石－多 金雲母－少	ヨコナデ ハケ目	ナデ ハケ目		〃
12	B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	14.1		15.0	黒褐色	石英・長石－少 金雲母・角閃石－微	ハケ目 ナデ	ヨコナデ ハケ目		〃
13	D－23 10B溝跡	〃	〃	〃	22.6		9.5	淡褐色	石英・長石－多	ヨコナデ ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ		〃
14	B－22 10B溝跡	〃	〃	〃	23.6		15.3	黒褐色 茶褐色	石英・長石－多 雲母－少	ハケ目 ナデ 煤付着	ハケ目		〃

第42図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	D－23 10B溝跡	3層	鉢	口～底	11.8		7.7	淡赤茶色 赤茶・黒褐色	石英・長石－少	ハケ目 ナデ	ヨコナデ ナデ 一部ハケ目		良
2	E－25 10B溝跡	〃	〃		18.2		10.4	茶褐・一部黒褐色 茶褐色	石英・長石－多 雲母－微	ハケ目 タタキ	ハケ目 ナデ		〃
3	C－22 10B溝跡	〃	〃		16.0		14.1	赤褐・褐色 赤褐色	石英・長石－少 黒雲母微	ヨコナデ 一部タタキ	ハケ目 ヨコナデ		〃
4	〃	〃	〃		(18.8)		(12.5)	淡赤褐色 淡茶・茶・黒褐	石英・長石－少 黒雲母－微	一部タタキ ナデ	ハケ目 ナデ		〃
5	〃	〃	〃		18.8		16.4	黒褐色 茶褐色	石英・長石－多 黒雲母－微	ハケ目 ナデ	〃		〃
6	D－24 10B溝跡	〃	〃		10.6		6.1	淡赤褐色	長石・金雲母－多	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ		〃
7	C－22 10B溝跡	〃	〃		13.6		10.4	淡茶褐色	石英・長石・角閃石－多 金雲母－少	タタキ ナデ	ヨコナデ ハケ目	内器面少し荒れている	〃
8	E－25 10B溝跡	〃	〃		長20.8 短18.8		13.7	淡茶褐色 一部黒褐色	石英・長石－少、砂粒－数点 角閃石，黒・金雲母－少	ハケ目 ナデ タタキ	ハケ目 ナデ		〃
9	B－22 C－22 10B溝跡	〃	〃		28.6		15.7	淡茶褐色	石英・長石－少 角閃石，金・黒雲母－少	〃	〃		〃
10	D－24 10B溝跡	〃	〃		38.1		(11.9)	茶褐色 褐色	石英・長石－多 金雲母－少	ナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ目		〃

第43図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C－22 10B溝跡	3層	鉢	口～底	27.5		12.0	淡褐色 一部赤茶色	石英・長石－多 金雲母－少、角閃石－微	ハケ目 一部ヘラケズリ	ハケ目 ナデ		良
2	B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	24.1		7.6	淡茶褐色 白っぽい赤褐色	石英・長石・茶粒子－多 角閃石－少	ヨコナデ ハケ目	ハケ目 ヨコナデ		やや良
3	〃	〃	〃	〃	22.0		7.0	灰黄褐色 黄褐色	石英・長石・金雲母－少	ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ	部分的に煤付着	良
4	C－22 10B溝跡	〃	〃	口～脚	22.6	脚径 17.9	17.4	黒褐色 赤褐色、茶色	石英・長石－多 角閃石・黒雲母－微	ハケ目 ナデ	暗文 ハケ目 ヨコナデ		〃
5	C－22 B－22 10B溝跡	〃	〃	〃	20.0	脚径 15.0	16.7	淡茶褐色	石英・長石－多 角閃石－少、金雲母－微	〃	ナデ ハケ目	内器面荒れはげしい	〃
6	B－21 10B溝跡	〃	〃	口～底	18.9		(8.8)	黒褐色 淡茶褐色	石英・長石・金雲母－多	一部タタキ ハケ目	〃		〃
7	〃	〃	〃	口～脚	(16.8)	脚径 15.3	8.2	淡茶褐色	石英・長石－多、金雲母－少、角閃石・黒雲母－微	ヨコナデ ハケ目	ハケ目 ヨコナデ		〃
8	C－22 10B溝跡	〃	〃	口～底	30.6		24.9	淡茶褐色 黒褐色	石英・長石－多 角閃石・黒雲母－少	タタキ ナデ	〃	内器面荒れ	〃
9	B－22 10B溝跡	〃	〃	口～胴	28.6		15.7	淡茶色	石英・長石－多 角閃石－微	一部タタキ ハケ目	ヨコナデ ハケ目		〃

第44図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	D－23 10B溝跡	3層	高杯	口～脚	21.8	脚径 14.8	14.0	淡茶褐色 一部黒褐色	石英・長石－多、金雲母－少、角閃石・黒雲母－微	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 指抑え		良
2	〃	〃	〃	〃	20.6	脚径 13.0	13.1	褐色 一部黒褐色	石英・長石－多 雲母－少	〃	ハケ目 ヨコナデ		〃
3	〃	〃	〃	〃	20.6	脚径 14.2	13.2	茶褐色 一部黒褐色	〃	〃	ヨコナデ ハケ目		
4	B－21 10B溝跡	〃	〃	〃	(26.5)	脚径 (15.1)	15.6	赤茶色	砂粒（白・黒）－数点	ハケ目 ヘラミガキ	〃	内外器面暗文	良
5	D－23 10B溝跡	〃	〃	〃	27.6		(9.5)	淡褐色 一部黒・茶褐色	石英・長石・雲母－多	一部ハケ目 ヨコナデ	ナデ ハケ目	刻目 内器面暗文	〃
6	B－22 C－21 C－22 10B溝跡	〃	〃	〃	(25.0)	脚径 16.2	22.0	淡茶褐色 白茶褐色	石英・長石－多 金雲母－微	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ナデ	内面に赤彩 刻目	〃
7	C－22 10B溝跡	〃	〃	〃	25.9	脚径 (14.5)	19.5	淡赤褐色 淡茶褐色	石英・長石－多、石粒－数点、角閃石・黒雲母－多	ハケ目 ナデ	ヨコナデ ハケ目	内器面暗文	〃
8	E－25 10B溝跡	〃	〃	〃	24.8	脚径 14.4	20.3	淡褐色 一部黒褐色	石英・長石・雲母－多	ヨコナデ ハケ目	〃		〃
9	10B溝跡	〃	〃	〃	26.2	脚径 14.8	22.4	褐色 一部黒・茶褐色	石英・長石・雲母－多	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目	内外器面暗文	〃

第45図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−22 10B溝跡	3層	器台	口〜裾	20.1	20.5	18.2	淡白褐色 淡褐色	石英−多、金雲母−少 角閃石−微	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	櫛描文 透かし	良
2	C−22 B−22 10B溝跡	〃	〃	〃	(20.0)	(21.0)	13.4	淡茶褐色	石英・長石・金雲母−少 角閃石−微	〃	〃	櫛描文 沈線文 透かし	〃
3	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	22.4	(21.6)	22.4	淡褐色 一部茶褐色	石英・長石−多 雲母−少	〃	ハケ目	櫛描文 透かし	〃

第46図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−22 10B溝跡	4層	甕	口〜胴	(11.0)		(6.8)	茶褐色 淡褐色	石英・長石−多 金雲母−少	ヨコナデ ハケ目	ナデ		良
2	〃	〃	〃	脚		脚径 11.4	脚高 6.7	淡褐色 黒褐色	石英・長石−多 雲母−微	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ナデ		〃
3	B−20 10B溝跡	〃	〃	〃		脚径 12.4	脚高 6.3	茶褐色 一部黒褐色	石英・長石・黒雲母−多 赤色砂粒−微	ヨコナデ ハケ目	ナデ ハケ目		〃
4	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃		脚径 11.2	(7.6)	褐色 淡褐色	石英・長石−多 雲母−微	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ		〃
5	B−20 10B溝跡	〃	〃	〃		脚径 12.0	(6.5)	灰茶褐色 茶褐色	石英・長石 黒・金雲母−中	ヨコナデ	ナデ 部分ハケ目		〃
6	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃		脚径 12.0	(6.1)	茶褐色	石英・長石−多 雲母−微	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	煤付着	〃
7	C−23 10B溝跡	〃	〃	〃		脚径 12.6	(8.4)	茶褐色 褐色	石英・長石−中 雲母−微	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ	砂粒付着	〃
8	〃	〃	〃	胴〜脚	脚径 11.2	脚高 5.0	(18.8)	淡茶褐色	石英・長石 金・黒雲母−中	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ		〃
9	C−22 10B溝跡	〃	〃	口〜底	12.2		26.0	淡黒褐色 淡赤褐色	石英・長石−少 黒雲母−微	タタキ 部分ハケ目	〃		〃
10	C−23 10B溝跡	〃	〃	脚		脚径 (12.8)	(9.2)	褐色 茶褐色	石英・長石−多 雲母−微	ハケ目 ナデ	〃		〃
11	〃	〃	〃	〃		脚径 12.4	(9.5)	淡褐色	〃	ハケ目	ナデ ハケ目		〃
12	〃	〃	〃	口〜底	16		29.9	茶褐色 一部黒褐色	石英・長石−少 角閃石−微	ハケ目 ナデ タタキ	ハケ目 ナデ		〃
13	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	(15.7)		26.9	黒褐色 淡茶褐色	石英・長石−多 金・黒雲母−少	タタキ ハケ目	〃	煤付着	〃

第47図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−22 10B溝跡	4層	甕	口〜胴	20.0		(32.2)	黒褐色 赤・淡茶褐色	石英・長石−多 金雲母−少	ハケ目 タタキ	ハケ目 ナデ	器面荒れ	良
2	〃	〃	〃	口〜底	17.6		33.4	黒褐色 茶・淡黒褐色	石英・長石・黒雲母−多	タタキ ナデ	〃	煤付着 器面はがれ	〃
3	B−20 10B溝跡	〃	〃	〃	19.0		38.4	黒褐色 淡茶・淡黒褐色	細石−多 石英・黒雲母・細石−少	タタキ ナデ ハケ目	〃		〃
4	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	18.0		38.5	黒褐色 褐色	石英・長石−多 雲母−少	ヨコナデ タタキ ハケ目	〃	煤付着 器面荒れ	〃

第48図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−23 10B溝跡	4層	甕	口〜底	(18.2)		34.2	黒褐色 淡赤褐色	角閃石，黒・金雲母−微	ハケ目 ナデ タタキ	ハケ目 ナデ 器面荒れ	煤付着	良
2	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	17.5		(36.9)	赤褐色 黒褐色	石英・長石−多	タタキ ナデ	ハケ目 ヨコナデ	〃	〃
3	〃	〃	〃	〃	21.8		44.6	淡褐色 淡黒褐色	長石・金雲母−多 石粒−数点	タタキ ハケ目	ハケ目 ナデ 器面荒れ	〃	〃
4	〃	〃	〃	〃	20.0		(36.5)	淡茶褐色 一部淡黒褐色	石英・長石−多 金雲母−微	ヨコナデ ハケ目 タタキ	ハケ目 ナデ	〃	〃

第49図

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−22 10B溝跡	4層	甕	口〜底	17.6		(34.7)	淡赤褐色 一部黒褐色	石英・長石−多、金雲母−微、角閃石・黒雲母−少	ハケ目 ナデ タタキ	ハケ目 ナデ		良
2	〃	〃	壺	口〜胴	18.3		17.1	黒褐色 淡黒褐色	石英・長石・黒雲母−多 金雲母−微	ハケ目 ヨコナデ	〃		〃
3	〃	〃	〃	口〜底	16.0		35.3	淡茶褐色 一部黒褐色	石英・長石−多 金雲母−微	ハケ目 ナデ	〃		〃
4	〃	〃	〃	〃	12.2		36.5	淡白茶褐色 淡褐色	〃	ハケ目 タタキ ナデ	〃		〃

第50図

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	B−21 10B溝跡	4層	壺	口〜底	15.9		34.4	淡赤褐色 淡茶褐色	石英・長石−多 金・黒雲母、角閃石−少	ヨコナデ タタキ ハケ目	ハケ目 ナデ	煤付着 外器面 刺突文	良
2	C−23 10B溝跡	〃	〃	〃	(11.3)		36.5	淡茶褐色 黒褐色	石英・長石−多 金雲母−少、角閃石−微	ハケ目 ナデ	〃		〃
3	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	(12.6)		36.8	淡茶色 淡黒褐色	石英・長石−少 金・黒雲母、角閃石−微	ハケ目 ナデ タタキ	ハケ目 ヨコナデ		
4	C−23 10B溝跡	〃	〃	〃	14.1		37.8	淡茶褐色 一部黒褐色	石英・長石−多 金雲母−微 角閃石・黒雲母−少	ハケ目 ヨコナデ タタキ	ハケ目 ナデ		良

第51図

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−23 10B溝跡	4層	壺	口〜底	18.2		(43.1)	淡茶褐色 淡褐色	石英・長石−多、茶色粒−少、金雲母・角閃石−少	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ	沈線文	良
2	C−22 10B溝跡	〃	〃	頸〜胴	胴部径 31.8	頸部径 16.8		淡茶褐色 茶褐色	石英・長石・黒雲母−多	タタキ ナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ目	刻目突帯 粘土円盤貼付	〃

第52図

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−22 10B溝跡	4層	小型壺	口〜底	(8.2)		(5.3)	赤褐色 褐色	石英・長石・金雲母−中	ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ		良
2	〃	〃	〃	〃	9.1		6.3	淡黒褐色 黒褐色	長石−多 金・黒雲母−少	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ		〃
3	C−23 10B溝跡	〃	〃	口〜脚	15.5	脚径 (8.9)	10.8	赤褐色 淡灰茶褐色	石英・長石−多 金雲母−少、黒雲母−微	ヨコナデ ハケ目	〃	煤付着	〃
4	〃	〃	〃	頸〜胴	頸部径 9.4		(11.5)	淡褐色 茶褐色	石英・長石・黒雲母−中	〃	ヨコナデ ハケ目	刺突文	〃
5	〃	〃	〃	口〜底	頸部径 7.0	胴部径 (15.2)	(16.2)	茶褐色 一部黒褐色	石英・長石・金雲母−多	ハケ目 ナデ	ナデ ハケ目		〃
6	〃	〃	〃	〃	11.3		15.7	淡褐色	石英・長石−多 角閃石・黒雲母−少	ナデ	ヨコナデ ハケ目	内外器面 暗文	〃
7	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	13.0		(14.2)	赤褐色 淡茶褐色	石英・長石−少 角閃石・黒雲母−少	ヨコナデ	〃	器面荒れ	〃
8	C−23 10B溝跡	〃	〃	〃	12.6		11.6	褐色 一部黒褐色	石英・長石−多 金雲母−少	ナデ ハケ目	〃		〃
9	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	14.8		12.2	淡茶褐色	長石・金・黒雲母−少	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ	焼成後の穿孔	〃
10	B−19 10B溝跡	〃	〃	〃	17.4		(12.5)	淡褐色 淡赤褐色	石英・長石−多 金雲母−少	〃	〃		〃
11	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	14.4		13.9	黒色 淡褐色	石英・長石−多 黒・金雲母−微	〃	〃		〃
12	C−23 10B溝跡	〃	〃	〃	12.4		(13.6)	淡褐色 一部黒褐色	石英・長石−多 金雲母−少	〃	ヨコナデ ハケ目		〃
13	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	12.5		9.8	淡赤褐色 一部黒色	石英・長石−多 黒雲母−少	〃	ハケ目 ナデ		〃

第53図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−22 10B溝跡	4層	小型壺	口〜底	18.2		15.0	黒褐色 淡赤褐色	石英・長石−多 金・黒雲母−少	ハケ目	ハケ目	煤付着	良
2	〃	〃	〃	〃	15.2		19.9	茶褐色 一部黒褐色	石英・長石−多 金雲母−多	ハケ目 ナデ	ハケ目		〃
3	C−23 10B溝跡	〃	〃	〃	(19.6)		22.8	淡茶褐色 一部黒褐色	石英−少 金雲母−微	〃	ハケ目 ヨコナデ		〃
4	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	(25.6)		(21.4)	茶褐色 一部黒褐色	石英・長石・金雲母−多	ハケ目 タタキ	ハケ目 ナデ		〃
5	C−23 10B溝跡	〃	鉢	〃	20.6		12.0	淡褐色 一部黒褐色	〃	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ	煤付着	〃
6	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	13.8		(7.6)	褐色 黒褐色	石英・長石−少 雲母−微	〃	ハケ目 ナデ		〃
7	〃	〃	〃	〃	19.2		(10.3)	褐色 一部黒褐色	石英・長石・金雲母−多	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ		〃
8	〃	〃	〃	〃	15.8		9.6	茶褐色 一部黒褐色	石英・長石・金雲母−中	ヨコナデ 部分ハケ目	〃	外器面に籾痕	〃

第54図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−23 10B溝跡	4層	鉢	口〜底	11.8		(6.4)	茶褐色 黒褐色	石英・長石−中 金雲母−少	ヨコナデ	部分ハケ目 ナデ		良
2	10B溝跡	〃	〃	〃	9.3		4.9	黒褐色 淡褐色	石英・長石・金雲母−多	ナデ タタキ	ハケ目 ナデ		〃
3	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	11.4		5.5	茶褐色 淡褐色	〃	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ		〃
4	〃	〃	〃	〃	(17.7)		9.5	淡赤褐色 淡茶赤褐色	石英・長石−多 金雲母・黒色粒−少	ナデ タタキ	タタキ ハケ目 ナデ		〃
5	〃	〃	〃	〃	20.6		9.2	褐色 淡褐色	石英・長石−多 黒雲母−少	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ 暗文		〃
6	〃	〃	〃	〃	19.1		11.5	淡褐色 灰黄白色	長石−多 金雲母・石英	〃	ナデ ヨコナデ		〃
7	C−23 10B溝跡	〃	〃	〃	24.1		12.6	淡褐色 淡茶褐色	石英・長石−少 黒雲母−微	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ナデ		〃
8	C−22 10B溝跡	〃	〃	〃	17.0		(7.8)	淡赤褐色 赤褐色	石英・長石−多 角閃石、黒・金雲母−少	〃	〃	焼成後に穿孔	〃
9	〃	〃	〃	〃	24.1		(10.8)	淡茶褐色 淡茶色	石英・金雲母−少 角閃石・黒雲母−微	ヨコナデ ハケ目	〃	籾痕	〃
10	C−23 10B溝跡	〃	〃	口〜脚	(20.4)	脚径 13.3	20.5	褐色 一部黒褐色	石英・長石−多 雲母−少	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ		〃
11	10B溝跡	〃	〃	〃	17.4	脚径 11.2	12.9	淡黄褐色 淡褐色	石英・長石・角閃石	ヨコナデ ハケ目	ハケ目 ナデ		〃

第55図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−22 10B溝跡	4層	鉢	口〜脚	(22.8)	脚径 (18.1)	16.8	淡茶褐色 黒褐色	石英・長石−多 角閃石−少	ハケ目 ナデ	ハケ目 ヨコナデ	内器面荒れ	
2	C−23 10B溝跡	〃	〃	〃	20.4	脚径 18.2	13.3	白褐色	石英・長石・金雲母−多	〃	ナデ ハケ目	赤色顔料塗布 暗文 穿孔	良
3	B−21 10B溝跡	〃	〃	〃	(25.0)	脚径 21.4	16.7	淡白茶褐色 淡茶褐色	石英・長石−多 金雲母−少、角閃石−微	〃	〃	穿孔	〃
4	C−23 10B溝跡	〃	器台	口〜裾		(22.1)	(18.7)	白褐色	石英・長石・金雲母	ナデ	ハケ目 ナデ	孔 沈線文 透かし	〃
5	C−22 10B溝跡	〃	大型鉢	口〜底	43.0		31.5	茶褐色 黒褐色	石英・長石−多 砂粒−少	ハケ目 ナデ	〃	凸帯	〃

第56図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−22 10B溝跡	4層	高杯	口〜脚	24.9		(12.2)	淡褐色 一部黒褐色	石英・長石−少 雲母−微	タタキ ハケ目 ナデ	ヨコナデ		良
2	〃	〃	〃	〃	(24.1)		(16.0)	淡褐色 淡茶褐色	石英・長石−多 角閃石・黒雲母−少	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	内脚部器面荒れ	〃
3	〃	〃	〃	〃	27.8	脚径 15.2	21.2	白褐色 一部黒褐色	石英・長石・金雲母−多	〃	ヨコナデ ハケ目	穿孔	やや良
4	B−20 10B溝跡	〃	〃	胴〜脚	20.0		(36.5)	淡茶褐色	石英・長石−多 角閃石・黒雲母−少	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ		良
5	C−22 10B溝跡	〃	〃	口〜脚	28.6	脚径 15.4	22.1	淡白褐色	角閃石・金雲母−多 茶褐色粒・砂粒−多	ナデ ハケ目	ヨコハケ目	穿孔	〃
6	C−23 10B溝跡	〃	支脚	天〜裾	脚台部 7.2	脚径 9.3	脚高 9.7	淡褐色	石英・長石−少 角閃石−微	タタキ ナデ	ハケ目 ナデ		〃

第57図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	体部厚	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−22 10B溝跡	4層	土製匙		5.15	4	(9)	淡褐色 褐色	石英・長石・金雲母−多	ナデ	ナデ		良

第58図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	B−20 10B溝跡	3層	ミニチュア土器	口〜底	6.8	3.4	3.8	淡褐色 茶・黒褐色	石英・長石−少 黒雲母−微	ナデ	ナデ		良
2	C−22 10B溝跡	4層	〃	〃	6.1	2.7	5.9	黒褐色 淡黒色	長石，金・黒雲母−少	刺突 ナデ	〃		〃
3	〃	〃	〃	胴〜底		3.3	5.8	淡茶褐色	石英・長石−少 角閃石・金雲母−微	ナデ	ハケ目 ナデ		〃
4	E−25 10B溝跡	〃	〃	口〜底	8.5	3.0	5.6	淡茶褐色 一部黒褐色	石英・長石−少 金雲母−少	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ		〃
5	C−22 10B溝跡	〃	〃	胴〜脚	脚部径 (3.7)		6.6	黒・淡赤褐色 黒・淡黒褐色	石英・長石・角閃石−少	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ		〃

第59図

No.	出土地点	層	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
1	10号−A溝跡	2層	鉄製刀子	6.6	1.2	0.2	6.9
2	10号−B溝跡	3層	〃	(3.5)	(0.65)	(0.2)	(1.5)
3	〃	〃	鉄製摘鎌	7.6	(2.2)	(0.1)	(12.7)
4	〃	〃	鉄製ヤリガンナ	(3.3)	(2.4)	(0.3)	(6.7)
5	〃	〃	鉄鏃(?)	(4.1)	(0.3)	(0.4)	(1.9)

第60図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
1	D−24 10B溝跡	3層	磨石類	砂岩	8.6	9.0	3.55	380
2	E−25 10B溝跡	〃	〃	〃	10.3	9.7	6.8	1000
3	B−22 10B溝跡	〃	〃	〃	13.0	11.0	3.6	860
4	D−24 10B溝跡	〃	〃	〃	11.7	10.7	6.8	1370
5	B−20 10B溝跡	〃	〃	〃	(12.1)	10.1	6.5	(1288)
6	〃	4層	〃	〃	8.5	6.8	4.6	396.8

第61図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	C－23 10B溝跡	4層	磨石類 片面部に鉄付着	砂岩	9.3	7.8	6.0	574.1
2	C－22 10B溝跡	〃	磨石類	〃	10.5	9.9	7.0	1004.7
3	〃	〃	〃	〃	13.5	8.8	7.6	1120
4	〃	〃	〃	〃	11.1	9.0	7.0	950

第62図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	C－23 10B溝跡	3層	石斧	蛇紋岩	(11.2)	(6.2)	(3.0)	(312.5)
2	E－25 10B溝跡	〃	石皿 台石	砂岩	14.3	9.1	5.8	1080
3	D－24 10B溝跡	〃	〃	〃	(11.0)	(11.4)	(6.5)	(930)
4	D－23 10B溝跡	〃	〃	〃	15.2	7.5	5.5	1150
5	D－24 10B溝跡	〃	〃	〃	19.9	10.8	4.4	2120

第63図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	D－23 10B溝跡	3層	石皿 台石	砂岩	18.2	6.5	6.3	1260
2	〃	〃	〃	〃	19.2	(9.1)	7.5	2550
3	B－20 10溝跡	〃	〃	〃	19.2	(16.1)	(10.2)	(5570)

第64図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	C－22 10B溝跡	3層	石皿 台石	砂岩	16.6	(5.6)	4.7	680
2	B－20 10溝跡	〃	〃	〃	15.9	17.5	5.3	2085
3	B－22 10B溝跡	〃	〃	〃	18.7	12.8	7.0	2880

第65図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	D－23 10B溝跡	3層	石皿 台石	砂岩	(19.8)	24.2	(8.0)	(4510)
2	〃	〃	〃	〃	29.5	23.0	10.3	9510

第66図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	D－23 10B溝跡	3層	石皿 台石	砂岩	(16.2)	(15.3)	(9.8)	(5200)
2	D－24 10B溝跡	〃	〃	〃	26.5	18.5	11.4	7540

第67図

No.	出土地点	層	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	10A溝跡	2層	小形仿製鏡	1.95	1.22	1.29	0.19

第68図

No.	出土地点	層	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	10A溝跡	2層	銅鏃	2.3	0.9	2.2	0.3

第69図

No.	出土地点	層	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大高 (cm)	重量 (g)
1	10B溝跡	3層	凝灰岩製腰掛け	30.6	33.2	14.7	(2.9)

第85図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	1号方形周溝墓	溝覆土7	壺	口～胴	18.0		(18.5)	淡赤褐色 一部黒色	長石・黒雲母－多	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヘラ削り ナデ		良

第86図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	2号方形周溝墓	溝覆土3	壺	胴～底		最大胴部径(29.4)		赤褐色	石英・長石－多 黒雲母－少	タタキ ハケ目	指跡 ハケ目 ヘラケズリ		良
2	〃	溝覆土2、3	〃	口～底近	17.4	最大胴部径(29.1)	(31.8)	灰褐色 赤褐色	石英・長石－多 雲母－微	タタキ ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヘラケズリ ナデ	赤色顔料塗布	
3	〃	溝床面	〃	頸～底	頸部径10.6	最大胴部径28.4	(32.9)	灰褐色 褐色	石英・長石－多 赤色砂粒－微	〃	ハケ目 ヘラケズリ 指頭痕 ヨコナデ		
4	〃	溝覆土	〃	口～胴	15.6		(16.0)	淡赤褐色	石英・長石・黒雲母－多 金雲母－微	ヨコナデ ハケ目	ハケ目 ヘラケズリ ヨコナデ		

第87図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	2号方形周溝墓	溝覆土1		口～底	12.4		7.6	淡黄褐色 一部赤褐色	石英・長石－多 金雲母－少	ヨコナデ ヘラナデ	ハケ目 ヘラケズリ ヨコナデ	赤色顔料塗布	良
2	〃	溝覆土3	壺	〃	19.4		(39.4)	黒褐色 茶褐色	石英・長石－多 雲母－少	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ヘラケズリ		〃
3	〃	溝覆土1	〃	口～胴	18.0		(13.1)	赤彩 淡白褐色	石英・長石－多 雲母－微	ハケ目 ヨコナデ	器面剝落 ハケ目 ヘラケズリ	赤色顔料塗布	〃

第88図

No.	出土地点	層	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	2号方形周溝墓溝内	上	鉄製摘鏃	(3.7)	(3.8)	(0.1)	(13.2)
2	〃	2	鉄製ヤリガンナ	(4.7)	(1.6)	(0.2)	(6.4)
3	〃	上	鉄釘	6.1	0.9	0.2	4.8
4	〃	2	銅鏃	(2.9)	1.2	(0.4)	(2.8)

第89図

No.	出土地点	器種	色調	径 (cm)	孔径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	1号木棺内 No.1	ガラス製小玉	緑青色	0.3	0.1	0.3	0.06
2	1号木棺内 No.2	〃	〃	0.4	0.2	0.4	0.08
3	1号木棺内 No.3	〃	濃緑青色	0.5	0.2	0.6	0.15
4	1号木棺内 No.4	〃	緑青色	0.5	0.2	0.4	0.10
5	1号木棺内 No.6	〃	濃緑青色	0.6	0.15	0.5	0.16
6	1号木棺内 No.7	〃	〃	0.5	0.1	0.4	0.10
7	1号木棺内 No.8	〃	青緑色	0.5	0.2～0.3	0.6	0.14
8	1号木棺内 No.10	〃	緑青色	0.4	0.1～0.2	0.4	0.09
9	1号木棺内 No.11	〃	青緑色	0.5～0.6	0.25	0.5	0.15
10	1号木棺内 No.12	〃	〃	0.3～0.4	0.1～0.2	0.45	0.07
11	1号木棺内 No.13	〃	〃	0.5	0.15～0.2	0.4	0.12
12	1号木棺内 No.14	〃	〃	0.6	0.2～0.3	0.5	0.16
13	1号木棺内 No.15	〃	緑青色	0.45～0.5	0.2	0.6	0.21
14	1号木棺内 No.16	〃	〃	0.4～0.5	0.1～0.2	0.4	0.08
15	1号木棺内 No.17	〃	〃	0.5	0.1～0.2	0.4	0.09
16	1号木棺内 No.18	〃	青緑色	0.4	0.1	0.5	0.08
17	1号木棺内 排土	〃	〃	0.3～0.4	0.1～0.2	0.4	0.05
18	〃	〃	緑青色	0.3	0.1	0.25	0.02
19	〃	〃	青緑色	0.4	0.1	0.3	0.05
20	〃	〃	〃	0.3	0.1	0.15	0.02
21	〃	〃	〃	0.3	0.15	0.3	0.03
22	〃	〃	〃	0.4～0.5	0.2	0.5	0.10
23	〃	〃	〃	0.3	0.2	0.25	0.04
24	〃	〃	〃	0.3	0.1	0.2	0.04
25	〃	〃	緑青色	0.3	0.1～0.15	0.25	0.03
26	〃	〃	青緑色	0.3	0.15	0.4	0.05
27	〃	〃	緑青色	0.35	0.15	0.2	0.03
28	〃	〃	〃	0.4	0.15～0.2	0.3	0.06
29	〃	〃	青緑色	0.3	0.1	0.25	0.03

No.	出土地点	器種	色調	径 (cm)	孔径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
30	1号木棺内排土	ガラス製小玉	濃緑青色	0.3	0.2	0.3	0.04
31	〃	〃	青緑色	0.3	0.1	0.3	0.04
32	〃	〃	緑青色	0.5	0.25	0.4	0.12
33	〃	〃	〃	0.4～0.5	0.1～0.25	0.55	0.12
34	〃	〃	〃	0.5～0.55	0.1	0.4	0.15
35	〃	〃	〃	0.5	0.1	0.3	0.12
36	〃	〃	〃	0.4～0.45	0.15	0.3	0.09
37	1号木棺内 No.5	碧玉製管玉	淡黄緑色	最大長2.3	径0.6	重量1.03（g）	孔径0.2（cm）
38	1号木棺内 No.7	〃	濃緑色	最大長2.1	径0.5	重量1.15（g）	孔径0.05～0.2(cm)
39	1号木棺内排土	〃	淡黄緑色	最大長2.3	径0.6	重量1.37（g）	孔径0.3（cm）

第90図

No.	出土地点	器種	色調	径 (cm)	孔径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	3号木棺内排土	ガラス製小玉	緑青色	0.45	0.15～0.02	0.35	0.07
2	〃	〃	〃	0.45	0.2	0.25	0.06
3	〃	〃	〃	0.4	0.01	0.3	0.04
4	〃	〃	濃緑青色	0.4	0.15	0.55	0.11
5	〃	〃	緑青色	0.5	0.1	0.3	0.08
6	〃	〃	〃	0.35～0.4	0.15	0.3	0.03
7	3号木棺内 No.5	〃	〃	0.5	0.15	0.5	0.10
8	3号木棺内 No.7	〃	濃緑青色	0.45	0.15	0.3	0.08
9	3号木棺内排土	〃	〃	0.55	0.15～0.2	0.3	0.15
10	〃	〃	青緑色	0.5	0.25	0.4	0.12

第91図

No.	出土地点	層	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	4号木棺	棺身上端部	鉄製刀子	(15.6)	1.4～1.8	0.35～0.4	(40.2)
2	3号木棺	棺内床面	鉄製鎌	15.2	2.3～3.1	0.3	(46.4)

第92図

No	出土地点	器種	色調	径 (cm)	孔径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	4号木棺内 No.1	ガラス製小玉	青緑色	0.45～0.55	0.25	0.3	0.08
2	4号木棺内 No.2	〃	濃緑青色	0.55	0.15～0.2	0.5	0.1
3	4号木棺内 No.3	〃	〃	0.5	0.15～0.25	0.35	0.09
4	4号木棺内 No.4	〃	緑青色	0.45	0.2	0.25	0.04
5	4号木棺内 No.5	〃	青緑色	0.6	0.25	0.45	0.16
6	4号木棺内 No.6	〃	濃緑青色	0.55	0.25	0.45	0.12
7	4号木棺内 No.7	〃	〃	0.55	0.15	0.35	0.14
8	4号木棺内 No.8	〃	青緑色	0.45	0.2	0.35	0.08
9	4号木棺内 No.9	〃	〃	0.6	0.2	0.5	0.16
10	4号木棺内 No.10	〃	濃緑青色	0.5～0.6	0.15	0.3	0.12
11	4号木棺内 No.11	〃	青緑色	0.5～0.6	0.2～0.25	0.35	0.09
12	4号木棺内 No.12	〃	〃	0.55	0.25	0.40	0.10
13	4号木棺内 No.13	〃	濃緑青色	0.5～0.6	0.2～0.25	0.45	0.18
14	4号木棺内 No.14	〃	緑青色	0.5	0.25	0.25	0.07
15	4号木棺内 No.15	〃	濃緑青色	0.5～0.6	0.2	0.6	0.20
16	4号木棺内 No.16	〃	青緑色	0.5	0.15	0.45	0.07
17	4号木棺内 No.17	〃	緑青色	0.5	0.2	0.25	0.08
18	4号木棺内 No.18	〃	青緑色	0.4	0.15	0.35	0.05
19	4号木棺内 No.19	〃	〃	0.6	0.25	0.3	0.10
20	4号木棺内 No.20	〃	濃緑青色	0.55	0.2	0.4	0.12
21	4号木棺内 No.22	〃	青緑色	0.45～0.55	0.2	0.5	0.18
22	4号木棺内 No.23	〃	〃	0.55	0.2	0.45	0.13
23	4号木棺内 No.24	〃	〃	0.5	0.2	0.55	0.15
24	4号木棺内 No.25	〃	〃	0.55	0.15～0.2	0.35	0.10
25	4号木棺内 No.26	〃	〃	0.55	0.15～0.2	0.55	0.18
26	4号木棺内 No.28	〃	濃緑青色	0.5	0.2	0.5	0.16
27	4号木棺内 No.29	〃	青緑色	0.5	0.15～0.2	0.45	0.13
28	4号木棺内 No.30	〃	〃	0.55	0.25	0.4	0.12
29	4号木棺内 No.31	〃	〃	0.5	0.15～0.2	0.35	0.10
30	4号木棺内 No.32	〃	緑青色	0.4	0.15	0.4	0.09
31	4号木棺内 No.33	〃	青緑色	0.55	0.1	0.4	0.12
32	4号木棺内 No.34	〃	濃緑青色	0.45～0.5	0.2～0.25	0.45	0.11
33	4号木棺内 No.35	〃	青緑色	0.55	0.15～0.25	0.55	0.16
34	4号木棺内 No.36	〃	〃	0.55	0.25～0.3	0.45	0.14
35	4号木棺内 No.37	〃	〃	0.5	0.15	0.35	0.09
36	4号木棺内 No.38	〃	〃	0.6	0.2～0.3	0.5	0.15

No	出土地点	器種	色調	径 (cm)	孔径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
37	4号木棺内 排土	ガラス製小玉	青緑色	0.4	0.1～0.15	0.3	0.06
38	4号木棺内 〃	〃	緑青色	0.45	0.15～0.25	0.5	0.12
39	4号木棺内 〃	〃	青緑色	0.6	0.2～0.3	0.5	0.16
40	4号木棺内 〃	〃	緑青色	0.45	0.15～0.2	0.3	0.06
41	4号木棺内 〃	〃	濃緑青色	0.55	0.2	0.45	0.16
42	4号木棺内 〃	〃	緑青色	0.35～0.45	0.15～0.2	0.35	0.05
43	4号木棺内 〃	〃	青緑色	0.45	0.15	0.35	0.07
44	4号木棺内 〃	〃	濃緑青色	0.4～0.45	0.2	0.45	0.08
45	4号木棺内 〃	〃	青緑色	0.55	0.2～0.3	0.4	0.12
46	4号木棺内 〃	〃	濃緑青色	0.55	0.15～0.2	0.5	0.17
47	4号木棺内 〃	〃	青緑色	0.6	0.3	0.6	0,2
48	4号木棺内 〃	〃	〃	0.45	0.2～0.25	0.45	0.12
49	4号木棺内 〃	〃	〃	0.45～0.55	0.25	0.55	0.18
50	4号木棺内 〃	〃	緑青色	0.45～0.55	0.15	0.4	0.11
51	4号木棺内 〃	〃	青緑色	0.45	0.15～0.2	0.45	0.12
52	4号木棺内 〃	〃	〃	0.45	0.15～0.2	0.5	0.14
53	4号木棺内 〃	〃	〃	0.55	0.2	0.45	0.15
54	4号木棺内 〃	〃	〃	0.45	0.15～0.2	0.55	0.14
55	4号木棺内 〃	〃	緑青色	0.45	0.15	0.3	0.09
56	4号木棺内 〃	〃	濃緑青色	0.45	0.2	0.3	0.08
57	4号木棺内 〃	〃	淡灰緑色	0.55	0.2	0.7	0.24
58	4号木棺内 〃	〃	緑青色	0.4	0.15	0.3	0.05
59	4号木棺内 〃	〃	濃緑青色	0.5	0.2	0.35	0.09
60	4号木棺内 〃	〃	青緑色	0.45	0.2	0.35	0.09

第93図

No	出土地点	部位	法量(cm)			色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成
			口径	底径	器高			外器面	内器面	その他	
1	1号壺棺	口～底近	(20.6)		(69.0)	茶褐色・黒斑 灰褐色	石英・長石－多 雲母－少	沈線文 ハケ目 ヨコナデ	ヘラ削り ハケ目 ヨコナデ		良
2	〃	胴～底		胴部径 (47.4)	(28.8)	灰褐色・黒斑 黒褐色	〃	ハケ目 ナデ	ハケ目		〃

第120図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	3住	床面	須恵器高台	口～底	(11.7)	(8.9)	3.5	灰白色	石英－少	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	不良
2	〃	〃	土師器坏	〃	(13.8)	(11.6)	3.7	淡赤褐色	径0.1cmの砂粒	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ切り の後ナデ	良
3	4住	〃	土師器甕	口～胴上	(21)	－	(10.4)	茶色 淡褐色	0.1～0.2cmの石英－多	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラ削り	胴部に 煤付着	〃
4	5住	〃	〃	口縁	－	－	(2.9)	褐色 淡赤褐色	長石・雲母・石英	〃	ヘラ削り		〃
5	〃	〃	土師器	〃	(14.0)	－	(3.5)	淡赤褐色	石英・雲母	〃	ヨコナデ	煤付着	〃
6	7住	〃	土師器坏	口～底	(13.0)	(10.6)	3.9	淡赤褐色	角閃石・雲母・石英	ヘラ磨き	ヘラ磨き		〃
7	〃	〃	〃	〃	(13.8)	(8.8)	3.4	褐色 淡褐色	角閃石・石英	〃	〃	ヘラ切り	〃
8	〃	〃	〃	〃	(13.8)	(9.0)	3.3	淡褐色	金雲母－少	ヨコナデ	ヨコナデ	内器面 煤付着	〃
9	〃	〃	〃	〃	(13.2)	(9.1)	5.8	〃	細砂粒	〃	〃	ヘラ切り	〃
10	〃	〃	土師器甕	口～胴上	(24.2)	－	(6.5)	淡黄褐色 淡赤褐色	角閃石－多 石英・長石	〃	ヘラ削り ヨコナデ		〃
11	〃	〃	〃	〃	(18.4)	－	(5.3)	淡赤褐色 茶褐色	角閃石・石英	〃	〃		〃
12	〃	〃	〃	〃	(19.8)	－	(6.1)	〃	角閃石・石英・長石	〃	〃		〃
13	〃	〃	〃	〃	(18.4)	－	(5.6)	淡赤褐色 暗茶褐色	0.1cm程の石英・長石	〃	〃		〃
14	8住	〃	土師器坏	口～底	(14.5)	(10.8)	3.4	赤色彩色 赤褐色	細砂粒－少 黒雲母－微	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ切り 赤色彩色	〃
15	〃	〃	須恵器坏	胴～底	－	(9.5)	(3.9)	灰色 褐色	細砂粒－少	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラ切り ヘラナデ	やや良

第121図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	9住	ピット	須恵器高台	胴～底	－	(9.0)	(2.8)	灰白色	径2mmの砂粒	ヨコナデ	ヨコナデ		良
2	〃	床面	須恵器蓋坏	胴～口	(13.4)	－	(1.6)	灰黒緑色 褐色		〃	〃		〃
3	〃	〃	須恵器高台	口～底	(13.6)	(8.3)	4.4	灰白色	白い砂粒－多	〃	〃	ヘラ切り	〃
4	〃	〃	土師器甕	口～胴	(24.6)	－	(4.4)	赤褐色	細砂粒・黒雲母－少	ヘラ削り ヨコナデ	〃	内一部 煤付着	〃
5	〃	〃	〃	〃	(26.6)	－	(5.6)	淡赤褐色	径1mm 石英・黒雲母－多	タテハケ ヨコナデ	ヘラ削り ヨコナデ	外一部 煤付着	〃
6	〃	〃	〃	〃	－	－	(6.4)	淡赤褐色 淡褐色	1～4mm石英－少	〃	〃		〃
7	13住	ピット覆土	須恵器高台	口～底	(13.1)	(9.5)	3.3	灰色	細砂粒－少	ヨコナデ	ヨコナデ		〃
8	〃	床面	須恵器蓋坏	胴～口	(15.7)	－	(1.2)	〃	砂粒－中	〃	〃		〃
9	〃	〃	〃	〃	－	－	(0.8)	〃	細砂粒－少	〃	〃		〃
10	〃	ピット	〃	〃	－	－	(1.4)	灰白色一部 灰色	〃	〃	〃		〃
11	14住	床面	土師器坏	口～底	(10.4)	(8.4)	3.2	赤褐色	〃	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ切り	〃
12	〃	ピット覆土	須恵器高台	〃	(14.0)	(10.8)	(3.7)	灰白色	1mm以下の白色粒－少 1mm以下の黒色粒－微	ヨコナデ	ヨコナデ		〃
13	〃	〃	須恵器蓋坏	胴～口	－	－	(2.3)	灰白色 口縁部黒色	1～2mmの砂粒－少	〃		内面一部に自然釉	〃
14	〃	床面	土師器甑	把手				淡赤褐色	1～2mmの石英－多 1mmの角閃石－少				〃
15	18住	〃		口～底	(16.7)	(12.4)	3.4	褐色 茶褐色	細砂粒－少	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ切り	〃
16	〃	ピット覆土	土師器坏	胴～底	－	(8.5)	(2.4)	赤橙色	細砂粒－微	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 赤色彩色	〃
17	〃	床面	黒色土器A	口～底	－	－	2.9	茶褐色 黒色	〃	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ切り	〃
18	19・20住	〃	須恵器	〃	(13.3)	(9.4)	3	灰黒色 灰色	〃	ヨコナデ	ヨコナデ		〃

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外/内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
19	19・20住	床面	須恵器	口～底	(13.0)	(8.9)	3.3	灰色	細砂粒－微	ヨコナデ	ヨコナデ		良
20	〃	〃	土師器坏	〃	(13.4)	(11.0)	1.5	赤褐色	細砂粒－少	〃	〃	赤色彩色 ヘラ切り	〃
21	〃	〃	須恵器蓋坏	胴～口	－	－	1.9	灰色	〃	〃	〃		〃

第122図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外/内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	18住	床埋設	須恵器甕	胴	頸部径 (40.1)	－	(39.5)	灰色	細砂粒－少	格子目タタキ	同心円タタキ 平行タタキ		

第123図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
1	18住	床面	磨石類	砂岩	10.8	11.3	3.7	(520)

第124図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外/内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	19・20住	床面	土師器甕	口～胴	(19.2)	－	(5.5)	赤褐色 黒褐色	細砂粒・黒雲母－少	タテハケ ヨコナデ	ヘラ削り ヨコナデ	外一部煤付着	良
2	〃	〃	〃	〃	(19.7)	－	(4.5)	茶褐色 一部煤付着	〃	〃	〃		〃
3	〃	〃	〃	〃	(23.2)	－	(7.0)	茶褐色 灰褐色	〃	タテハケ ヨコナデ 下ナデ	〃	外一部煤付着	〃
4	〃	〃	〃	〃	(23.5)	－	(8.7)	茶褐色 黒褐色	細砂粒・黒雲母－中	ヨコナデ タテハケ	ヨコナデ ヘラ削り	外器面煤付着	〃
5	〃	〃	〃	〃	(21.3)	－	(10.6)	淡茶褐色 褐色	細砂粒－多 径1～2mmの砂粒－少	タテハケ ヨコナデ	ヘラ削り ヨコナデ		〃
6	〃	ピット	須恵器高台	胴～高台		(7.7)	(2.7)	灰黒色	細砂粒－微	ヨコナデ	ヨコナデ		〃
7	21住	床面	〃	〃	(18.4)	(13.4)	4.6	赤色彩色	細砂粒・赤色彩色－少 径2～3mmの砂粒－微	〃	〃	ヘラ切り	〃
8	24住	〃	土師器坏	口～底	－	－	1.8	赤褐色	金雲母	〃	〃	ヘラ切り 赤色彩色	〃
9	〃	〃	土師器	口縁部	－	－	(3.6)	淡黄褐色 淡赤褐色	石英・金雲母	〃	〃	赤色彩色	〃
10	〃	〃	土師器坏	口～底	(13.2)	(8.0)	3.2	淡黄褐色 赤褐色	石英・雲母	〃	〃	ヘラ切り 赤色彩色	〃
11	〃	〃	土師器高台	高台	－	(8.2)	(1.6)	赤褐色	金雲母	〃	〃	高台付 内－赤彩	〃
12	〃	〃	〃	〃	－	(9.0)	(1.8)	〃	角閃石・金雲母・石英	ナデ			〃
13	25住	〃	土師器坏	口～底	(14.8)	(9.8)	3.8	〃	径1～2mm砂粒－微	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 外煤付着	〃
14	〃	〃	〃	〃	(14.0)	(9.4)	4.1	〃	径1～2mm砂粒－少	〃	〃	ヘラ切り	〃
15	〃	〃	須恵器甕	口～胴	(14.5)	－	(5.3)	灰色	径1mm程の白色砂粒－少	〃	〃	頸部下に自然釉	〃
16	〃	〃	須恵器蓋坏	胴～口	(16.8)	－	(2.2)	〃	径1～2mm程の白色砂粒	〃	〃		〃

第125図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	28住	床面	土師器甕	口縁部	—	—	(4)	赤褐色	径1mm大の石英・角閃石	タテハケ ヨコナデ	ヘラ削り ヨコナデ		良
2	〃	〃	〃	〃	—	—	(5)	淡茶褐色	角閃石－微 長石・石英－少	ヨコナデ	〃		〃
3	〃	〃	〃	〃	—	—	(5)	暗茶褐色	角閃石・石英・長石－少	ハケ調整 ヨコナデ	〃		〃
4	〃	〃	〃	〃	—	—	(4.9)	茶褐色	屈曲部より下に煤付着 金雲母・長石	〃	〃		〃
5	〃	〃	〃	口～胴	(16)	—	(7.6)	茶褐色 赤褐色	石英・長石・角閃石－少 煤付着	ヨコナデ	〃		〃
6	〃	〃	土師器坏	口～底	(15)	(9.8)	3.5	赤褐色	径3mmの石粒－少	〃	ヨコナデ	ヘラ切り	〃
7	〃	〃	〃	〃	(13.5)	(9)	3.25	淡赤褐色	1～2mmの褐色の粒子－多	〃	〃	〃	やや良
8	〃	〃	土師器甕	口～胴	(20.2)	—	(16.1)	赤褐色 淡赤褐色	角閃石・長石・石英	斜めハケ ヨコナデ	ヘラ削り	外器面 赤色彩色	良
9	29住	〃	須恵器蓋坏	天井～口	(13.6)	(10.6)	2.1	灰白色	1mm程の白色粒・黒色粒－少	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	〃
10	〃	〃	土師器甕	口縁部	(20)	—	(3.7)	茶	2mmの角閃石－多 1mmの石英質－少	〃	ヨコナデ ヘラ削り	内外 赤色彩色	〃
11	〃	〃	〃	口～胴	(29)	—	(6.9)	黒褐色 淡灰褐色	1mm以下の角閃石白色の粒－多	ナデ ヨコナデ	ヘラ削り ヨコナデ		〃
12	30住	〃	〃	〃	(28)	—	(4.8)	淡褐色	細砂粒－多 径2,3mm－微	ヨコナデ	〃		〃

第126図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	32住	床面	須恵器高台	高台	—	(10.2)	(1.4)	灰白色	金雲母－少 石英－少	ヨコナデ	ナデ		不良
2	33住	覆土	土師器甕	口縁部	—	—	(3.4)	赤褐色 淡褐色	砂粒－少	〃	ヘラ削り ヨコナデ		良
3	〃	〃	〃	〃	—	—	(3.6)	黒灰色 淡褐色	白砂粒－少	〃	〃		〃
4	〃	〃	〃	〃	—	—	(3.7)	淡褐色	細砂粒－少	〃	ヨコナデ		〃
5	〃	〃	〃	〃	—	—	(2.5)	赤褐色	角閃石、石英－微	〃	ヘラ削り ヨコナデ		〃
6	〃	床面	〃	口～胴	(22.6)	—	(5.6)	茶褐色	細砂粒－少	〃	〃		〃
7	〃	〃	〃	〃	(20.1)	—	(11.8)	淡褐色 茶褐色	〃	ナデ	ヨコナデ ヘラ削り		〃
8	〃	〃	土師器坏	口～底	(12.6)	(8.2)	3.6	灰褐色	細砂粒－微 黒雲母－微	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	〃
9	〃	〃	〃	〃	(18.4)	(13.4)	4.6	褐色	細砂粒－少 赤色砂粒－微	〃	〃	赤色彩色	〃
10	〃	〃	土師器高台	高台	—	高台径 (13.4)	高台高 (0.7)	灰褐色 赤褐色	細砂粒－少 赤色砂粒－少	〃	〃	〃	〃
11	〃	〃	〃	〃	—	高台径 (9.3)	高台高 1.3	褐色	細砂粒－少 黒雲母－少	〃	〃		〃
12	〃	覆土	須恵器	口縁部	—	—	(3.5)	淡褐色	白色砂粒－少	〃	〃		〃
13	〃	床面	須恵器蓋坏	天井～口	(15.5)	—	2.0	灰白色	細砂粒－微	〃	〃		〃
14	〃	〃	須恵器坏	底部	—	(8.2)	(2.1)	淡茶褐色	〃	〃	〃		〃
15	〃	〃	須恵器高台	高台	—	(9.6)	(1.7)	灰色 黒灰色	細砂粒－少	〃	不定方向のナデ		やや良
16	34住	〃	土師器甕	口～胴	(18.3)	—	(5.2)	黒褐色 外煤付着	細砂粒－多、微砂粒－少 1～2mmの砂粒	〃	ヘラ削り ヨコナデ		良
17	〃	覆土	土師器坏	〃	(12.0)	—	(2.5)	赤褐色	細砂粒－微	〃	ヨコナデ	内外 赤色彩色	〃
18	〃	床面	土師器高台	高台	—	(14.1)	(2.75)	茶褐色	細砂粒－少 赤色砂粒－少	〃	〃	ヘラ切り	〃
19	36住	〃	土師器甕	口～胴	(18.0)	—	(5.3)	赤褐色 暗茶褐色	角閃石－少 白色砂粒－少	〃	ヘラ削り ヨコナデ		〃
20	〃	〃	〃	口縁部	—	—	(3.4)	淡赤褐色	長石・角閃石－少 金雲母・石英－少	〃	ヨコナデ		〃

第127図

No.	出土地点	層	器種	石材	径 (cm)	孔径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	33住	床面	紡錘車	砂岩	(5.3)	0.9	(1.9)	(25.9)

第128図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	33住	床面	磨石類	砂岩	(4.5)	(4.6)	(5.5)	(152)
2	〃	〃	〃	〃	10.3	6.9	3.8	440
3	〃	〃	〃	〃	(16.7)	(11.2)	(10.3)	(2,570)
4	〃	〃	〃	〃	13.1	11.7	7	1,530
5	〃	〃	〃	〃	16.7	15.1	4.7	1,900

第129図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	33住	床面	磨石類	砂岩	(15.4)	(12.2)	(4.5)	(1,400)
2	〃		〃	〃	(7.9)	(10.5)	(3.5)	(530)

第130図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)
1	34住	ピット	土錘	−	3.2	1.4	3～4	(5.2)

第131図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm)			色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成
					口径	底径	器高			外器面	内器面	その他	
1	37住	床面	土師器 坏	底部	−	(8.0)	(1.8)	赤褐色	1～2mmの褐色粒－少 1mm以下の金雲母－多	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	良
2	〃	〃	〃	口～底	(15.5)	(9.3)	3.1	黒・赤褐色 煤付着	細砂粒・赤色粒－少	〃	〃	〃	〃
3	〃	〃	〃	〃	(13.0)	(9.0)	3.2	茶褐色 灰褐色	細砂粒－少 白色砂粒－微	〃	ヘラ磨き	〃	〃
4	〃	〃	〃	〃	13.2	3	11	赤褐色 黒褐色	微砂粒－少	ヘラ磨き	〃	〃	〃
5	〃	〃	〃	〃	−	−	(2.5)	淡赤褐色	1mmの石英－微	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 赤色彩色	〃
6	〃	〃	〃	〃	(12.5)	(6.9)	2.5	赤褐色	砂粒－少 赤色砂粒－少	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	土師器 高台	高台	−	(9.6)	(2.5)	〃	細砂粒－少	〃	〃	〃	〃
8	〃	〃	土師器 坏	口～底	(15.1)	(9.5)	2.3	〃	金雲母・細砂粒－少	〃	〃	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃	(15.3)	(10.7)	2.6	赤褐色 一部黒褐色	細砂粒－微	〃	〃	〃	〃
10	〃	〃	土師器 甕	口～胴	(18.9)	−	(5.2)	淡褐色 黒褐色	石英・長石－多 角閃石－少	〃	〃		〃
11	〃	〃	須恵器	胴部	−	−	(7.1)	灰黒色	1～2mmの黒色粒	格子目 タタキ	同心円 タタキ		〃
12	〃	〃	土師器 甕	頸～胴	頸部径 (38.0)	−	(9.8)	褐色	1～2mmの砂粒－少	ヨコナデ タテハケ	ヨコナデ タテハケ		〃
13	38住	〃	土師器 甑	把手	−	−	(8.9)	赤褐色	石英・長石－多 雲母・角閃石－微	ナデ	ヘラ削り		〃
14	〃	〃	土師器 甕	口～胴	(26.2)	−	(7.2)	褐色 黒褐色	径2～3mmの砂粒－少	ヨコナデ タテハケ	ヨコナデ ヘラ削り		〃

第131図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
15	38住	床面	土師器坏	口～底	(13.0)	(7.4)	2.8	赤褐色 一部黒褐色	細砂粒－少	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 赤色彩色	良
16	〃	〃	〃	口～胴	(12.4)	－	(1.9)	赤褐色	細砂粒－少	〃	〃	赤色彩色	〃
17	〃	〃	〃	口～底	－	－	(2.35)	褐色	褐色・口縁部赤褐色	ヨコナデ 底部ヘラ削り	〃	〃	〃
18	〃	〃	〃	口～胴	(12.0)		(2.0)	赤褐色	細砂粒－微	ヨコナデ	〃	〃	〃
19	〃	〃	土師器高台	高台	－	－	残存高 (2.2)	褐色	細砂粒－微	〃	〃		〃

第132図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	37住	床面	磨石類	砂岩	(10.1)	(3.9)	(2.9)	(107.4)
2	〃	〃	〃	〃	8.6	4.6	2.6	151.7

第133図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	39住	床面	須恵器蓋坏	胴～口	－	－	(1.1)	灰色	白色細砂粒－少	ヨコナデ	ヨコナデ		良
2	〃	〃	〃	〃	－	－	(1.9)	灰白色	白色細砂粒－多	〃	〃		〃
3	〃	覆土	土師器坏	口～底	－	－	(1.9)	淡褐色 淡赤褐色	角閃石－少 長石－少	〃	〃		〃
4	〃	〃	土師器甕	口縁部	－	－	(3.5)	〃	〃	〃	ヘラ削り ヨコナデ		〃
5	〃	床面	〃	〃	－	－	(4.3)	淡灰褐色	角閃石－少 石英・長石－少	〃	〃	内外赤彩	〃
6	〃	〃	〃	〃	(16)	－	(3.5)	淡赤褐色 暗褐色	角閃石－少 長石－少 石英－少	〃	〃		〃
7	40住	〃	土師器坏	口～底	－	－	1.7	赤褐色	石英・長石－少 1mmの茶色粒－少	〃	ヨコナデ	ヘラ切り 赤色彩色	〃
8	〃	〃	須恵器	口～胴	－	－	(4.8)	赤褐色 灰白色	1～2mmの褐色粒－少	〃	〃		〃
9	〃	〃	須恵器高台	高台	－	－	－	灰白色	1mmの白色粒－微 1mmの黒雲母－微	〃	〃		やや良
10	41住	〃	土師器甕	口～胴	(24)	－	(4.3)	茶褐色	細砂粒－中、金雲母－少 径1～2mm－微	〃	ヘラ削り ヨコナデ	外器面 煤付着	良
11	〃	〃	須恵器	〃	(18.6)	－	(4.6)	灰黒色	細砂粒－少	〃	ヨコナデ		〃
12	〃	〃	土師器坏	口～底	(13.5)	(8.5)	3	褐色	細砂粒－少 赤色砂粒－微	〃	〃	ヘラ切り 内外赤彩	〃
13	〃	〃	〃	〃	(15)	(10)		赤褐色	〃	〃	〃	〃	〃
14	42住	〃	土師器甕	口縁部	(29)	－	4	淡黄褐色 乳灰色	角閃石－少、雲母－少 石英－少	斜めハケ ヨコナデ	ヘラ削り ヨコナデ		〃
15	43住	〃	〃	〃	－	－	(4.6)	淡黄褐色 乳灰色	金雲母－少 角閃石－少	ナデ	ヘラ削り ナデ		〃
16	〃	〃	土師器坏	〃	－	－	(2.1)	赤褐色	金雲母	〃	ナデ	赤色彩色	〃
17	〃	〃	〃	底部	－	－	(1.3)	〃	〃	〃	〃	ヘラ切り 赤色彩色	〃

第134図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	44住	床面	土師器坏	口～底	(15.6)	(12.3)	1.5	赤褐色	白(金)雲母－微 細砂粒－少	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 赤色彩色	良
2	〃	〃	土師器高台	〃	(19.8)	(11.9)	3.9	〃	細砂粒－少	〃	〃	内外一部煤付着 赤色彩色	〃
3	〃	〃	土師器坏 墨書	〃	－	－	2.3	淡褐色	〃	〃	〃	暗文 ヘラ切り	〃
4	〃	〃	〃	〃	(13.5)	(9.6)	3.3	茶褐色	細砂粒－少 赤色砂粒－少	〃	〃	ヘラ切り ナデ	〃
5	〃	〃	須恵器蓋坏	天井～口	(18.4)	－	(1.6)	灰色 茶褐色	細砂粒－少	〃	〃		〃
6	〃	〃	須恵器高台	胴～高台	－	(11)	(2.8)	灰黒色	細砂粒－微	〃	一部ナデ ヨコナデ		〃
7	〃	〃	須恵器坏	口～底	(14.2)	(9)	(3.8)	灰白色	細砂粒－少	〃	ヨコナデ		不良
8	〃	〃	〃	口～胴	(14.8)	－	(4)	〃	〃	〃	〃		〃
9	〃	〃	土師器甕	〃	(23.5)	－	(5.9)	褐色	細砂粒－多 径1～2mm 砂粒－少	ナデ ヨコナデ	ヘラ削り ヨコナデ		良
10	〃	〃	〃	〃	(20)	－	(7.5)	黒褐色 茶褐色	細砂粒－多	斜めハケ ヨコナデ	〃		〃
11	〃	〃	須恵器壺	口～肩	(10.1)	－	(11)	灰色	細砂粒－微	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ記号 自然釉	〃
12	〃	〃	須恵器甕	〃	(23)	－	(10.2)	茶褐色 灰色	細砂粒－少	格子目 タタキ ヨコナデ	円心円 タタキ ヨコナデ	〃	〃

第135図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	45住	床面	土師器坏	口～底	(11.6)	(6.4)	(2.2)	赤褐色	1～5mm の白色粒－少 1mm の茶色粒－多	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り	やや良
2	〃	〃	〃	〃	(15.0)	(10.0)	(1.8)	〃	1～5mmの白色粒－少 茶色粒－多	〃	〃	ヘラ切り 内面煤付着	良
3	〃	〃	〃	〃	(12.9)	(8.0)	(2.5)	淡赤褐色	1mm以下黒色粒－微	〃	ヘラ磨き	〃	〃
4	〃	覆土	〃	〃	(13.2)	(8.0)	(3.2)	赤褐色	石英・金雲母	〃	ヨコナデ	赤色彩色 ヘラ切り	〃
5	〃	〃	土師器高台・墨	高台	－	(9.7)	(1.8)	〃	細砂粒－少 金雲母－微	〃	〃	〃	〃
6	〃	床面	土師器高台	〃	－	(9.8)	(3.1)	茶褐色	砂粒－少 赤色砂粒－少	〃	〃	ヘラ切り	〃
7	〃	〃	土師器壺	口～胴	(8.5)	－	(3.8)	黒褐色 淡赤褐色	1～2mm の黒雲母 石英－多	〃	ヘラ削り ヨコナデ		〃
8	〃	〃	土師器甕	〃	(21)	－	(7.8)	淡茶褐色	1～2mm の長石－少 1mm の黒雲母－少	ヨコナデ 斜めハケ	〃		〃
9	46住	〃	須恵器坏	口～底	(13.3)	(8.2)	3.7	灰色	細砂粒－少	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り の後ナデ	〃
10	〃	〃	土師器甕	口～胴	(15.6)	－	(3.7)	淡褐色 褐色	細砂粒－多 黒雲母－少	〃	ヘラ削り ヨコナデ		〃

第136図

No.	出土地点	層	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	孔径(mm)
1	45住	床面	土錘	(4.1)	2	(12.7)	4～5

第137図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
1	46住	床面	台石	砂岩	(19.15)	(13.4)	(15.2)	(6,050)

第138図

No	出土地点	層	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	38号住	床面	鉄斧	(3)	(5.2)	(0.9)	(23.4)
2	13号住	〃	鉄製刀子	(12)	(1.5)	(0.4)	(16.3)
3	33号住	〃	不明	(2.9)	(1.2)	(0.5)	(3.3)
4	〃	〃	鉄製刀子	(2.7)	(1.0)	(0.3)	(2.5)
5	38号住	〃	鉄鏃	(5.4)	(1.8)	(0.3)	(6.9)
6	9号住	〃	〃	(5.8)	(0.7)	(0.5)	(5.6)
7	34号住	〃	〃	(4.6)	(0.5)	(0.3)	(2.3)
8	29号住	〃	〃	(3.4)	(0.5)	(0.3)	(1.2)
9	33号住	〃	〃	(6.7)	(1.1)	(0.8)	(15.5)

第139図

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm)			色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成
					口径	底径	器高			外器面	内器面	その他	
1	12道路	硬化面上	須恵器蓋坏	天井～口	(14.2)	—	(2.2)	灰茶褐色 灰黒色	細砂粒－少	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ		良
2	〃	〃	須恵器高台	胴～高台	—	(8.9)	(2.6)	灰色	〃	〃	ヨコナデ		〃
3	〃	〃	〃	高台	—	10.3	(3.1)	〃	細砂粒－微	〃	〃 指オサエ		〃
4	〃	〃	〃	〃	—	(12.2)	(2.7)	灰黒色 灰茶褐色	細砂粒－少	ヨコナデ 指オサエ	ヨコナデ 底部ナデ		〃
5	〃	4層	〃	胴～高台	—	(10.2)	(3.9)	灰色	〃	ヨコナデ	ヨコナデ		〃
6	〃	下層	須恵器甕	口縁部	(12.0)	—	(3.9)	灰色 暗赤褐色	石英	〃	同心円 タタキ		〃
7	〃	硬化面上	須恵器壺	〃	(19.4)	—	(2.2)	灰褐色	細砂粒－少	〃	〃		〃
8	〃	下層	〃	〃	—	—	(6.2)	暗茶褐色 淡灰色	石英・黒色粒	〃	〃	自然釉	〃
9	〃	硬化面上	〃	口～肩	(10.4)	—	(9.9)	灰褐色	細砂粒－少	〃	ヨコナデ シボリ		〃
10	〃	〃	〃	口縁部	(12.2)	—	(6.8)	灰褐色 茶褐色	〃	〃	ヨコナデ		〃
11	〃	〃	〃	胴～底	—	11.4	(9.1)	黒赤色 灰黒色	〃	平行タタキ 後ナデ消	底部指オサエ ナデ ヨコナデ	外底車輪文タタキ	〃
12	〃	〃	〃	胴～高台	—	(13.4)	(8.1)	灰色	〃	ヨコナデ	円心円タタキ ナデ		〃

第140図

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm)			色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成
					口径	底径	器高			外器面	内器面	その他	
1	12道路	硬化面上	土師器高台	口～高台	(13)	(6.6)	(3)	赤褐色	細砂粒－少 赤色砂粒－微	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切り 赤色彩色	良
2	〃	〃	〃	胴～高台	—	7.8	(4.1)	〃	細砂粒－多	〃	〃	〃	〃
3	〃	〃	〃	〃	—	(8.6)	(3.6)	褐色	細砂粒－少 赤色砂粒、金雲母－微	〃	〃	ヘラ切り	〃
4	〃	〃	〃	〃	—	(7.6)	(2.7)	赤褐色 赤色彩色	細砂粒－少 赤色砂粒－微	〃	〃	ヘラ切り 赤色彩色	〃
5	〃	〃	土師器皿	口～底	(14.7)	(12.2)	1.6	赤褐色 淡褐色	〃	〃	〃	ヘラ切り	〃
6	〃	〃	土師器坏	〃	(13)	(6.6)	3	赤褐色	〃	〃	〃	ヘラ切り 赤色彩色	〃
7	〃	下層	土師器	口縁部	(13)	—	(2.1)	〃	細砂粒－少 金雲母－微	〃	〃	赤色彩色	〃
8	〃	上層	土師器坏・墨書	底部	—	(6)	(1.3)	〃	〃	〃	〃	ヘラ切り 赤色彩色	〃
9	〃	下層	土師器高台	口～底	(27)	(16.4)	(5.3)	〃	細砂粒－少 黒雲母－微	〃	〃	ヘラ切り ナデ	〃

第141図

No	出土地点	層	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	12道路	上層	鉄鏃	(11.8)	1.1	(0.7)	(13.5)
2	〃	硬化面	〃	(6.6)	1.4	(0.45)	(10.2)
3	〃	下層	〃	(6.8)	(1.0)	(0.3)	(8.9)
4	〃	上層	〃	(6.6)	(0.5)	(0.4)	(4.8)
5	〃	〃	鉄鎌	(5.15)	(1.9)	(0.25)	(7.7)
6	〃	〃	鉄鏃？	(3.2)	(2.0)	(0.3)	(6.3)
7	〃	〃	鉄釘	(1.8)	(0.3)	(0.35)	(1.0)
8	〃	〃	〃	(4.1)	(0.6)	(0.5)	(3.5)
9	〃	〃	〃	(4.3)	(0.9)	(0.4)	(4.3)
10	〃	〃	〃	(3.5)	(0.55)	(0.45)	(2.9)
11	〃	3層	〃	(4.7)	(0.4)	(0.4)	(1.9)
12	〃	〃	不明	(2.8)	(0.6)	(0.4)	(5.0)
13	〃	上層	鉄釘	(6.0)	(0.7)	(0.55)	(7.4)
14	〃	〃	不明	(3.4)	(2.1)	(0.3)	(6.1)
15	〃	3層	〃	(3.7)	(0.4)	(0.8)	(5.2)
16	〃	上層	〃	3.9	0.7	0.4	(9.9)
17	〃	〃	鉄釘	(9.8)	1.1	0.7	(0.7)
18	〃	下層	鉄鎌	(19.2)	(4.7)	(0.4)	(0.4)

第142図

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm)			色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成
					口径	底径	器高			外器面	内器面	その他	
1	1号溝	床面	須恵器蓋坏	口縁部	(14.5)	−	(1)	灰色	細砂粒−微	ヨコナデ	ヨコナデ		良
2	〃	〃	須恵器高台	高台	−	(11.2)	(0.9)	黒赤色 灰色	〃	〃	〃		〃

第144図

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm)			色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成
					口径	底径	器高			外器面	内器面	その他	
1	C−25	III	るつぼ	口〜底	(7.5)	−	(6.5)	黄褐色 灰黒色 茶褐色 スラグ付着	1〜3mmの大型の砂粒−多	荒いナデ	ナデ	内外面共にひび	

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm)			色調 2だけ(外／内) 他は外器面	重量 (g)	調整・文様			焼成
					外径	孔径	残存長			外器面	内器面	その他	
2	33住	床面	ふいごの羽口		(7)	−	(6.5)	灰黒・褐色 黒褐・茶褐色	(32.7)	面取り			
3	B−24	III層	〃		(6.5)	(2.4)	(8.6)	灰黒・淡褐色 赤褐色	(186.3)	〃		部分的にスラグ付着	
4	C−22	III層上層	〃		(6.6)	(2.7)	(7.0)	〃	(111.7)	〃		〃	
5	12道路	硬化面	〃		(10.0)	(6.0)	(9.7)	〃	(170.2)	〃			
6	〃	〃	〃		(6.7)	(3.4)	(8.1)	灰黒・褐色 一部赤褐色	(112.2)				
7	B−24	III層	〃		(6.5)	(2.4)	(8.6)	灰黒・淡褐色 赤褐色	(186.3)	面取り		スラグ付着	
8	D−23	〃	〃		(7.6)	(4.0)	(10.9)	〃	(231.6)	〃		〃	
9	C−22	溝撹乱	〃		(6.8)〜(7.2)	2.7	(11.5)	黒褐色 赤褐色	(348.2)	〃		〃	
10	12道路	上層	〃		(6.2)	2.1〜2.3	(9.1)	灰黒・淡褐色 赤褐色	(230.1)	〃		〃	

第145図

No.	出土地点	層	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	C−24	III層	鉄製刀子	(6.2)	(1.8)	(0.2)	(8.2)
2	C−23	〃	〃	(3.5)	(1.6)	(0.2)	(4.0)
3	D−23	〃	〃	(4.6)	(1.5)	(0.4)	(8.4)
4	〃	〃	不明	6.0	1.5	0.4	17.5
5	D−24	〃	〃	(5.2)	(1.6)	(0.6)	(18.2)
6	C−22	〃	〃	3.0	1.5	0.7	8.6

第146図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 (外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	C−23	III層	土師器 高台	高台	−	(5.6)	(1.9)	赤褐色 (赤色彩色)	細砂粒−中 黒雲母−微	ヨコナデ	方定方向のナデ	ヘラ切り 外底面に墨書	良
2	D−22	〃	土師器坏	底部	(8.3)	(7.6)	1.4	茶褐色	細砂粒−少	〃	ヨコナデ	回転糸切り 内底葉脈痕	〃
3	D−23	〃	〃	〃	−	−	(1.0)	褐色 赤褐色	〃	〃	〃	回転糸切り	〃
4	〃	〃	〃	〃	−	−	(1.5)	茶褐色	〃	〃	〃	〃	〃
5	〃	〃	土師器	〃	−	−	−	褐色	砂粒−少		ナデ	ヘラ記号	〃
6	D−25	〃	土師器坏	口〜底	(16.6)	(9.0)	4.7	茶褐色 一部黒褐色	細砂粒−多 赤色砂粒−少	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	〃
7	D−23	〃	〃	底部	−	(11.0)	(1.1)	赤褐色 褐色	細砂粒−多 黒雲母−微	〃	〃	〃	〃
8	C−23	〃	〃	口〜底	(16.7)	(15.3)	2.6	赤褐色 (赤色彩色)	細砂粒−少	底面不定方向ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ切り	〃
9	C−24	〃	須恵器坏	底部	−	(8.8)	(1.3)	赤灰色 明褐色	細砂粒−微	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ記号	やや良
10	B−21	〃	須恵器 高台	口〜底	(15.4)	(9.0)	5.5	灰色	〃	〃	〃	ヘラ切り の後ナデ	良
11	D−22	〃	土師器甑	胴〜底	−	7.4	(7.0)	淡茶褐色 茶褐色	径1〜2mm の砂粒−多	ナデ	ヘラケズリ	底部穿孔有	〃

第147図

No.	出土地点	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	C−23	III層	砥石	砂岩	(6.5)	(5.5)	(3.9)	(253.1)
2	D−22	〃	〃	〃	10.9	5.6	3.4	410
3	〃	〃	磨石類	〃	(10.1)	(12.3)	(3.8)	(1,710)
4	D−24	〃	〃	〃	12.2	10.3	5.4	1,070

第148図

No.	出土地点	層	器種	最大径 (cm)	重量 (g)
1	D−24	III層	古銭	2.44	1.65

第149図

No	出土地点	層	器種	色調	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)
1	12道路	上層	土錘	褐色	4.8	1.1	(2.5)	0.3
2	C－23	III層	〃	黒褐色	4.7	0.9	0.6	0.2
3	D－24	〃	〃	淡褐色	(4.1)	1.9	(9.5)	0.4
4	D－23	〃	〃	茶褐色 一部茶褐色	3.7	1.2	2.1	0.3
5	C－23	〃	〃	淡褐色 一部赤褐色	(3.8)	(1.2)	(0.7)	0.3
6	C－24	〃	紡錘車	砂岩	復元径 (5.4)	最大厚 (1.2)	(21.0)	0.7
7	D－25	〃	土製品	赤色彩色	(3.1)	(3.2)	(27.7)	－

第150図

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm)			色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成
					口径	底径	器高			外器面	内器面	その他	
1	12道路	上層	須恵器	胴部	－	－	(3.4)	灰色	細砂粒－微	格子目タタキ	車輪文タタキ		良
2	〃	〃	〃	〃	－	－	(2.8)	灰白色 灰黒色	〃	平行タタキ	〃		〃
3	〃	〃	〃	〃	－	－	(4.1)	灰色	細砂粒－少	格子目タタキ	〃		〃
4	D－23	III層	〃	〃	－	－	(3.3)	〃	密	〃	〃		〃
5	C－21	溝撹乱	〃	〃	－	－	(3.6)	灰白色 灰色	〃	〃	平行・車輪文タタキ		〃
6	12道路	上層	〃	〃	－	－	(8.7)	黒褐色 灰緑色	〃	平行タタキ	車輪文タタキ	外自然釉	〃
7	B－21	III層	〃	〃	－	－	(5.4)	灰黒色 灰色	やや密	〃	〃		〃
8	E－25	撹乱	〃	〃	－	－	(6.3)	灰色	〃	格子目タタキ	〃		〃
9	D－23	III層	〃	底部	－	－	－	灰色 灰黒色	密			外底 車輪文タタキ	〃
10	12道路	上層	〃	胴部	－	－	(6.9)	灰色	〃	格子目タタキ	車輪文・同心円文タタキ		〃

第172図

No	出土地点	層	器種	部位	法量(cm)			色調 (外／内)	胎土	調整・文様			焼成
					口径	底径	器高			外器面	内器面	その他	
1	8号溝	覆土	青磁	口縁部	－	－	(3.5)	緑青色	密	雷文(?)			良
2	〃	上層	〃	〃	－	－	(3.0)	淡緑青色	〃				〃
3	〃	〃	土師器	底部	－	－	(1.1)	褐色	細砂粒－少	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	〃
4	〃	覆土	瓦質土器	胴部	－	－	(5.4)	灰白色	〃	〃	ヨコナデ 条線		〃
5	〃	上層	〃	〃	－	－	(4.1)	灰色	〃	ナデ	〃		〃
6	〃	1層	〃	口縁部	－	－	(3.4)	灰色 灰黒色	細砂粒－微		条線		〃
7	11号溝	〃	土師器皿	口～底	(10.0)	(9.0)	1.2	茶褐色	細砂粒－少 金雲母－中	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	〃
8	〃	2層	〃	胴～底	－	(9.0)	(1.3)	〃	細砂粒－少	〃	〃	〃	〃
9	〃	〃	瓦質土器	口縁部	－	－	(3.6)	灰色	細砂粒－多 径1～2mm砂粒—微	〃	〃		〃
10	〃	覆土	青磁	〃	－	－	(4.2)	灰緑色	密				〃
11	〃	〃	〃	〃	－	－	(3.2)	淡青緑色	〃	線文			〃
12	7号溝	〃	瓦質土器	胴～底	－	(17.1)	(5.5)	灰色 灰白色	細砂粒－多	ヨコナデ	ヨコナデ 上部に 条線有		〃
13	〃	床面	〃	口縁部	－	－	(4.6)	灰白色 灰黒色	細砂粒－少	花文スタンプ			〃
14	〃	〃	白磁	底部	－	6.5	(2.2)	淡灰白色 灰白色	密	露胎			〃

第173図

No.	出土地点	層	器種	部位	法量(cm) 口径	底径	器高	色調(外／内)	胎土	調整・文様 外器面	内器面	その他	焼成
1	1・2道路	硬化面	瓦質土器	口縁部	—	—	(3.2)	灰白色		ヨコナデ	条線有(4本)		やや良
2	2道路	礫間	青磁	〃	—	—	(3.1)	灰緑色	密				良
3	〃	〃	白磁	〃	—	—	(1.7)	白色	〃				〃
4	〃	硬化面	青磁	高台	—	高径5.4	(2.6)	灰緑色	疎	外底は露胎			〃
5	〃	礫間	瓦質土器	口縁部	—	—	(5.0)	灰黒色 灰白色	径1mm白色粒－少 黒雲母－微	ナデ	条線	瓦質土器	〃
6	〃	硬化面	染付	高台	—	高径(5.0)	(1.7)	灰白色 淡ベージュ		外底は露胎			〃
7	〃	〃	青磁	〃		高径(7.0)	(0.9)	灰緑色	密				〃
8	3道路	〃	〃	口縁部	—	—	(3.9)	淡灰緑色	〃	蓮弁文の文様有り			〃
9	8道路	〃	陶器	胴～底	—	—	(5.0)	小豆色 赤褐色	やや密 角閃石		ケズリのあとナデ		〃
10	6・8・9道路	〃	染付	高台	—	—	(3.4)	白色	密	畳付き露胎		内外面に貫入が入る	〃
11	6道路	〃	瓦質土器	口縁部	—	—	(3.6)	灰褐色	金雲母・石英		条線		〃
12	〃	〃	青磁	高台	—	(4.7)	(1.3)	灰黄緑色 淡緑色	密				〃
13	5道路	〃	須恵器	頸部	—	—	(3.2)	黒褐色 灰色・淡黒赤色	1mmの白色粒－少	ヨコナデ	同心円文タタキ		〃
14	8道路下部	礫間	白磁	高台	—	2.1	(1.4)	白色	密			底部畳付釉 釉厚0.2mm 貫入有	〃
15	〃	〃	〃	口縁部	—	—	(1.2)	淡茶褐色 釉色・白色	〃			釉厚0.2mm	〃
16	〃	〃	〃	合子蓋	(6.4)	—	(1.7)	白色	〃	陽刻？			〃
17	〃	〃	瓦質土器	胴部	—	—	(2.1)	灰色		ヨコナデ	条線		〃
18	〃	〃	〃	〃				灰白色 灰黒色	径3mmの白色粒－多	ナデ	〃		〃
19	9道路	硬化面	〃	〃	—	—	(3.4)	赤褐色	金雲母・石英	〃	〃		〃
20	〃	〃	〃	〃	—	—	(4.6)	淡黄褐色 淡茶褐色	白色粒	〃	〃		〃
21	〃	〃	〃	口縁部	—	—	(4.0)	灰色	〃	ヨコナデ	〃		〃
22	10号道路	〃	〃	〃	—	—	(2.8)	〃		〃	〃		〃
23	〃	〃	〃	〃	—	—	(3.2)	灰色 淡灰色	白色粒	〃	〃 ヨコナデ	器面は荒れている	〃
24	〃	〃	〃	〃	—	—	(3.7)	灰白色	1mm黒雲母・白色粒－微	〃	条線	〃	〃

第174図

No.	出土地点	層	器種	径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
1	2号道路	硬化面	鉄砲玉	1.3	1.3	8.9

第IV章　まとめ

1．縄文時代について

縄文時代の調査では、遺物のみ出土し、遺構は検出できなった。

縄文時代の遺物包含層が残っているのは、ごく一部分であった。遺物はIII層や遺構覆土より、少数の土器・石器が出土した。土器は縄文時代後期の西平式土器・三万田式土器である。石器には打製石斧・石鏃がある。

今回の調査区があるうてな台地の西側は、縄文時代の中心地域でなく、台地の東側に中心地域があると考えられる。代表的な遺跡としては、船元式土器が出土した岡田遺跡、水次遺跡などがある[1]。

註（1）　県文化課調査。江本直氏の御教示による。

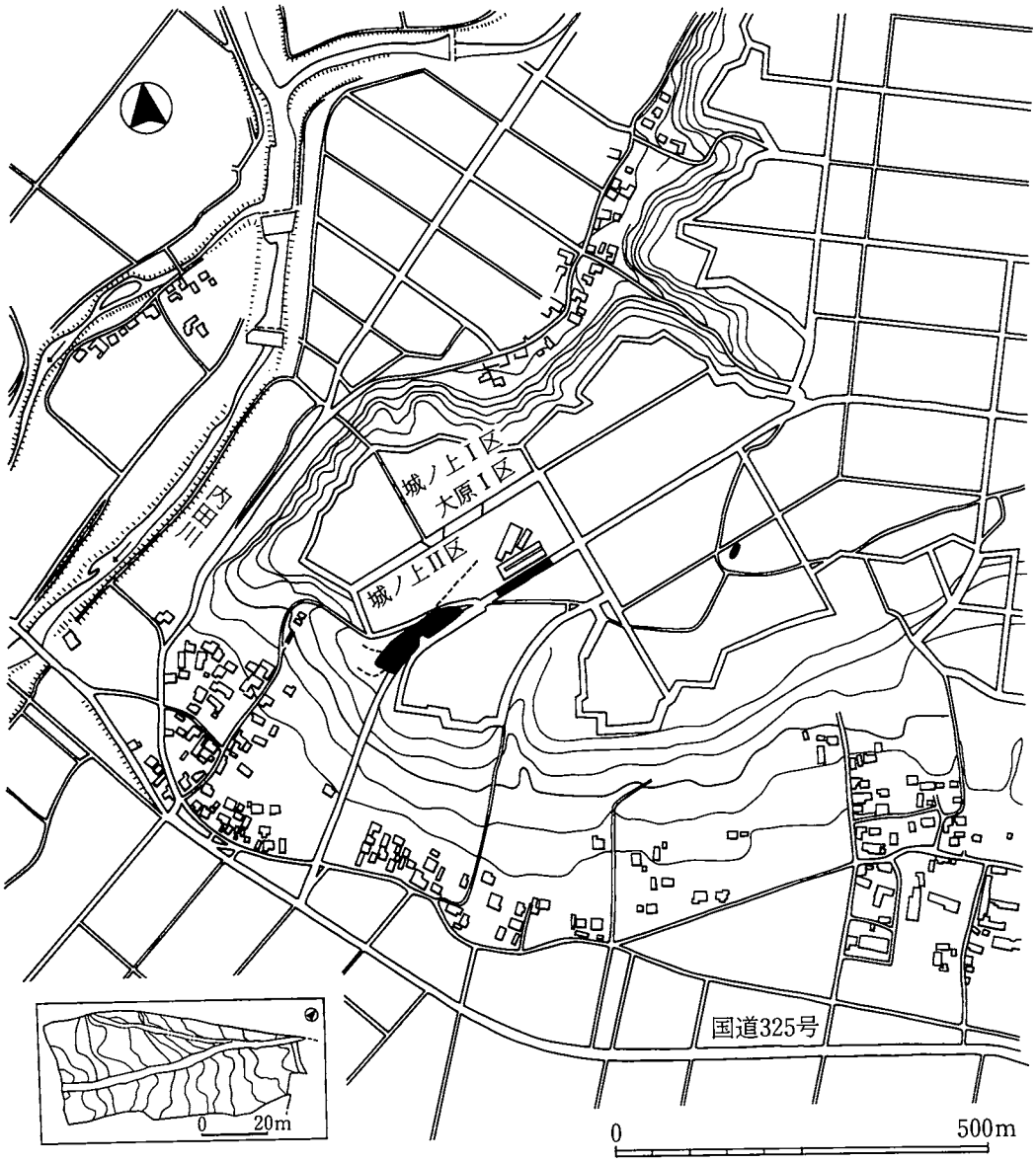
2．弥生時代について

1．環濠について（第175図・第176図）

検出したのは、環濠の一部である10号－A溝跡・10号－B溝跡の二本である。10号－B溝跡が10号－A溝跡を切っている。新しい10号－B溝跡の時期に、環濠の規模が拡張されている。

10号－A溝跡の北西端部は、北側に曲がり始めており、調査区外では台地の縁に沿ってのびると考えられる。また、10号－B溝跡の北西端部は、ほぼ真っ直ぐにのびており、調査区外でもしばらく真っ直ぐにのび、台地縁辺部付近でのびる方向が北側に変わると思われる。検出した溝跡の北東端部より先は、そのままのび、途中で北側にのびる方向を変え、台地を横切ると推定できる。城ノ上I・II区と大原I区で検出した溝跡は古墳時代前期のもので[1]、今回検出した溝跡とは繋がらない。また、古墳時代前期の2号方形周溝墓の周溝が10号－A溝跡を切っている。

環濠は台地全体から見ると、西側端部に寄った箇所に位置している。環濠内の状況は、城ノ上I区・II区の調査結果でその一部が分かる。竪穴住居址は長方形プランを呈し、中央部に炉、長壁に接して貯蔵穴がある。主柱穴は二つで、長軸方向に沿っている。また、壁に沿って地山を掘り残したベッド状遺構が長方形・L字形・コ字形に巡る。城ノ上I区の31号住居址より、貨泉が出土した。城ノ上I区の52号住居址は大型の住居址であり、炉・貯蔵穴がなく集会所と考えられている[2]。



第175図　うてな遺跡弥生時代の全体図

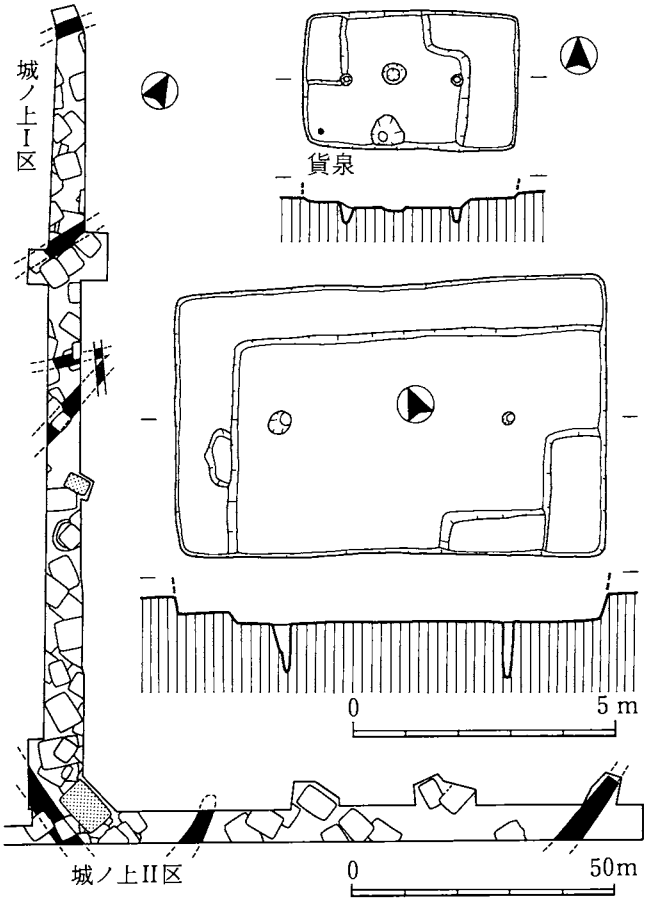
2．出土遺物について

10号－A溝跡の覆土②層・③層と10号－B溝跡の覆土②層・③層・④層より、遺物が出土した。10号－B溝跡では、②層出土遺物は少数で、③層・④層より出土した遺物が殆どである。10号－B溝跡と比べると、10号－A溝跡の出土遺物は少ない。二本の溝跡より出土した遺物の殆どは土器である。その他の遺物には、小型仿製鏡片・銅鏃・鉄製品（刀子・摘鎌など）・石製品（凝灰岩製腰掛け）・石斧・磨石類・石皿・台石がある。

3．凝灰岩製腰掛けについて

凝灰岩製腰掛けは、10号－B溝跡の③層より土器と伴に出土した。腰掛けは一塊の凝灰岩

を加工している。他の遺跡より出土した木製の腰掛けには、一木造りと組合せ式とがある。組合せ式は受部（腰掛け部）に脚部を挿入するものである。一木造りも組合せ式も脚部はやや外側に開いた「八」の字形を呈する。受部（腰掛け部）は平らなものと丸みをもつものとがある。今回出土した凝灰岩製腰掛けは木製品と同じ構造をしている。中でも、徳島大学敷地内の庄遺跡出土の木製腰掛け（熊本日日新聞 1992年9月25日）に酷似している。



第176図　城ノ上Ⅰ・Ⅱ区遺構配置と貨泉出土住居および大型住居跡（高木正文『日本考古学年報』41 1990年より）

凝灰岩製腰掛けは、他の出土例がなく、今回が初めての発見である。木製腰掛けは実用品であるが、凝灰岩製はもろく、実用とは考えられない。凝灰岩製腰掛けは、何らかの祭祀品であると考えられる。時代的には異なるが、古墳に樹立される凝灰岩製表飾品と精神的に繋がるものを感じる。凝灰岩製腰掛けと古墳時代の凝灰岩製表飾品との空白期間を埋める資料の発見を期待したい。

4．環濠集落について

県内の環濠集落は、菊池川流域・白川流域・緑川流域に分布している。菊池川流域には、諏訪原遺跡・桜町遺跡・蒲生上の原遺跡・津袋大塚遺跡・うてな遺跡・八反田遺跡の六箇所がある。白川流域には運動公園遺跡・西弥護免遺跡・狩尾湯ノ口遺跡（木崎康弘氏の御教示による）の三箇所が分布している。緑川流域には宇土城址前期・西岡台遺跡・二子塚遺跡の三箇所がある[3]。分布状況を見ると、菊池川流域の環濠集落が最も多く、まとまっている。

県内の弥生時代青銅器は、菊池川流域・白川流域・緑川流域・球磨川流域に分布している。中でも、菊池川流域・白川流域に多く分布しており、その大半が菊池川流域にある[4]。青銅器の分布を見ても、菊池川流域の優位性は指摘できる。菊池川流域に分布する六箇所の環濠集落

は弥生時代後期のもので、優位性をもつ一つのまとまりのある地域として把握することができる。

5．溝跡出土の土器について（第177図）

ここでは、10号－A溝跡の覆土②層・③層と10号－B溝跡の覆土③層・④層より出土した土器についてまとめる。

10号－A溝跡の覆土②層と③層より出土した土器間には接合関係があり、両者の土器には形態的な違いが認められない。10号－A溝跡出土土器を一括資料として、うてなA期とする。また、10号－B溝跡の覆土③層・④層より出土した土器にも接合関係があり、形式学的な違いがない。10号－B溝跡出土土器を一括資料と判断し、うてなB期とする。

前記1でも述べたように、10号－B溝跡が10号－A溝跡を切っており、うてなA期→うてなB期になる。また、2号方形周溝墓は10号－A溝跡を切って築造しており、方形周溝墓築造時期の土器をうてなC期とし、参考資料にする。

うてなA期

甕

小型・中型の甕（1・2）は、口縁部が「く」の字形に屈曲し、胴部の最大径は中程より上位にある。底部には「八」の字形に開いた脚が付く。3は1・2と同様な形態であるが、脚が意識的に打ち欠かれている。

大型の甕（4）は口縁部が「く」の字形に屈曲し、頸部に断面形が三角形の凸帯を貼り付ける。底部はやや丸みをもった平底である。

甕の内外器面には、ハケ調整・ヨコナデ調整が施される。

壺

大型の壺には5・6・7と9・10の二種類がある。前者には口縁端部外器面に文様を施したり、頸部に断面三角形の凸帯を貼り付けたりするのがある。後者は胴部の最大径が中程にあり、その部分に凸帯を1～2条貼り付けたり、頸部に1～2条の凸帯がある。

小型の壺には8・11・12がある。8は口縁部が「く」の字形に屈曲し、丸底気味の平底である。11は注口をもち、脚が付く。12は無頸で算盤玉状である。

壺の内外器面には、ハケ調整・ヨコナデ調整が施される。

鉢

鉢には脚が付くもの（14・15・16）と無脚（13）のものがある。前者の鉢部を見ると、口縁部が屈曲するものとしないものがある。13は口縁部が「く」の字形に屈曲し、平底である。内外器面の調整はハケ目・ヨコナデである。

器台

器台には二種類ある。17は口縁部と裾部の両方が開く。18は口縁部が「く」の字形に屈曲し、裾部は外に開きながらのびる。18の方が新しい形態である。内外器面の調整はハケ目・ヨコナデである。

うてなB期

甕

小型・中型の甕には二種類ある。19・20には長くて高い脚が付き、21～25は脚がなく丸底である。後者の方が出土量が多い。この二種類の他に、脚を意識的に打ち欠いたものが少数ある。19・20の内外器面にはハケ調整が施される。21～25は口縁部が「く」の字形に屈曲し、胴部は長胴であり最大径は中位にある。外器面にはタタキ目が明瞭に残り、その他にハケ調整・ヨコナデ調整が施される。内器面の調整はハケ目・ヨコナデである。

大型の甕（26）は口縁部が「く」の字形に屈曲する。残存部の内外器面の調整は、ハケ目・ヨコナデである。

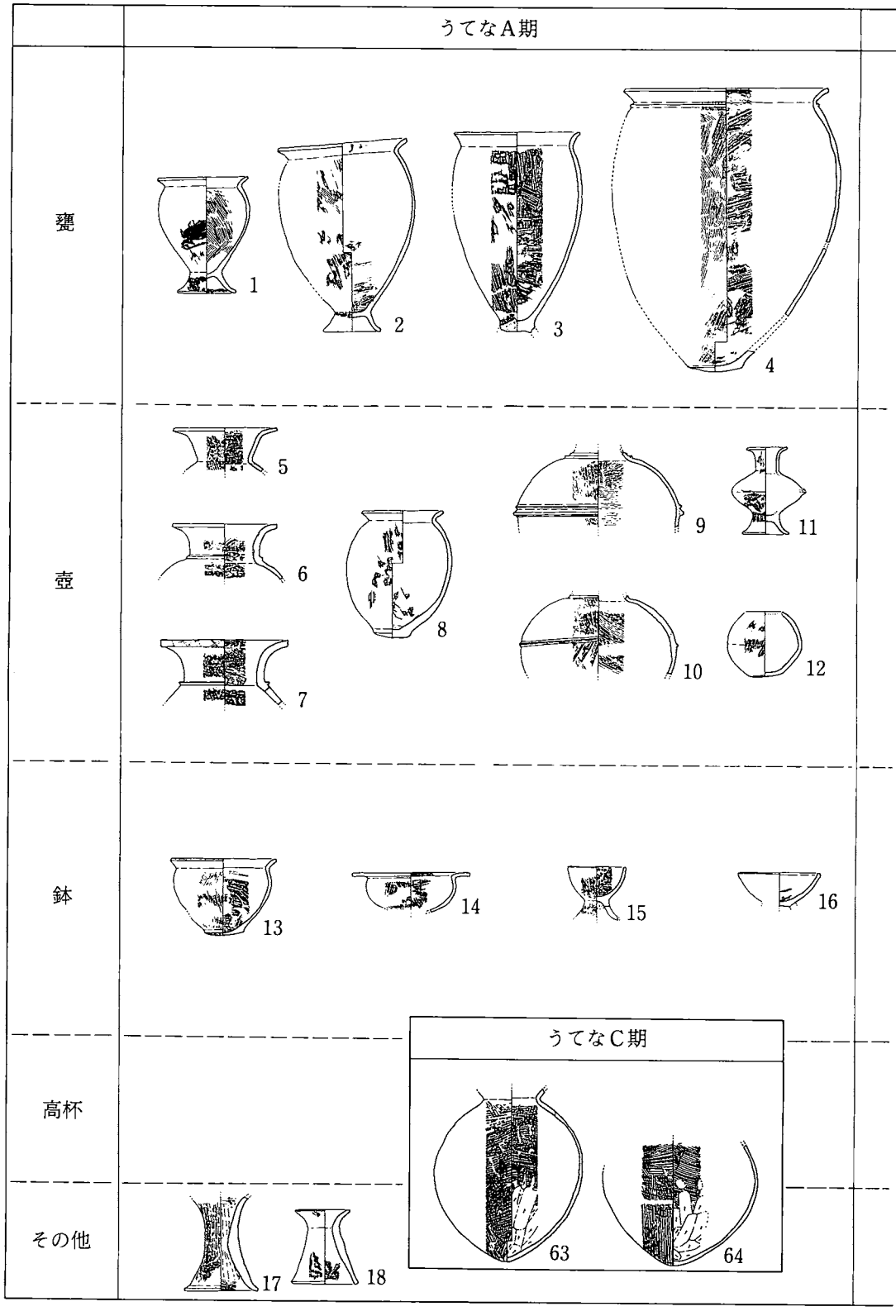
壺

壺には中型・大型と小型の二つがある。中型・大型の壺の胴部は長胴で、最大径は中位にある。内外器面の調整はハケ目とヨコナデであるが、外器面にタタキ目を残すものもある。口縁部・頸部の形態にバリエーションがある。27・28は頸部が外反しながら立ち上がり、口縁端部でさらに強く屈曲する。口縁端部や頸部の外器面に文様をもつものもある。29は頸部が短く外反しながら立ち上がり、口縁部が「く」の字形に強く屈曲する。37は外反しながら直線的に立ち上がる長頸壺である。頸部外器面に文様がある。38は頸部が短く外反しながら直線的に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部や頸部の外器面に文様をもつものもある。39は内傾気味の頸部に、三角形の凸帯をもち外反する口縁部が続く。口縁端部外器面に文様が施され、頸部に三角形の凸帯を貼り付ける。32の頸部には三角形の凸帯があり、胴部上位には釦状のものが添付される。

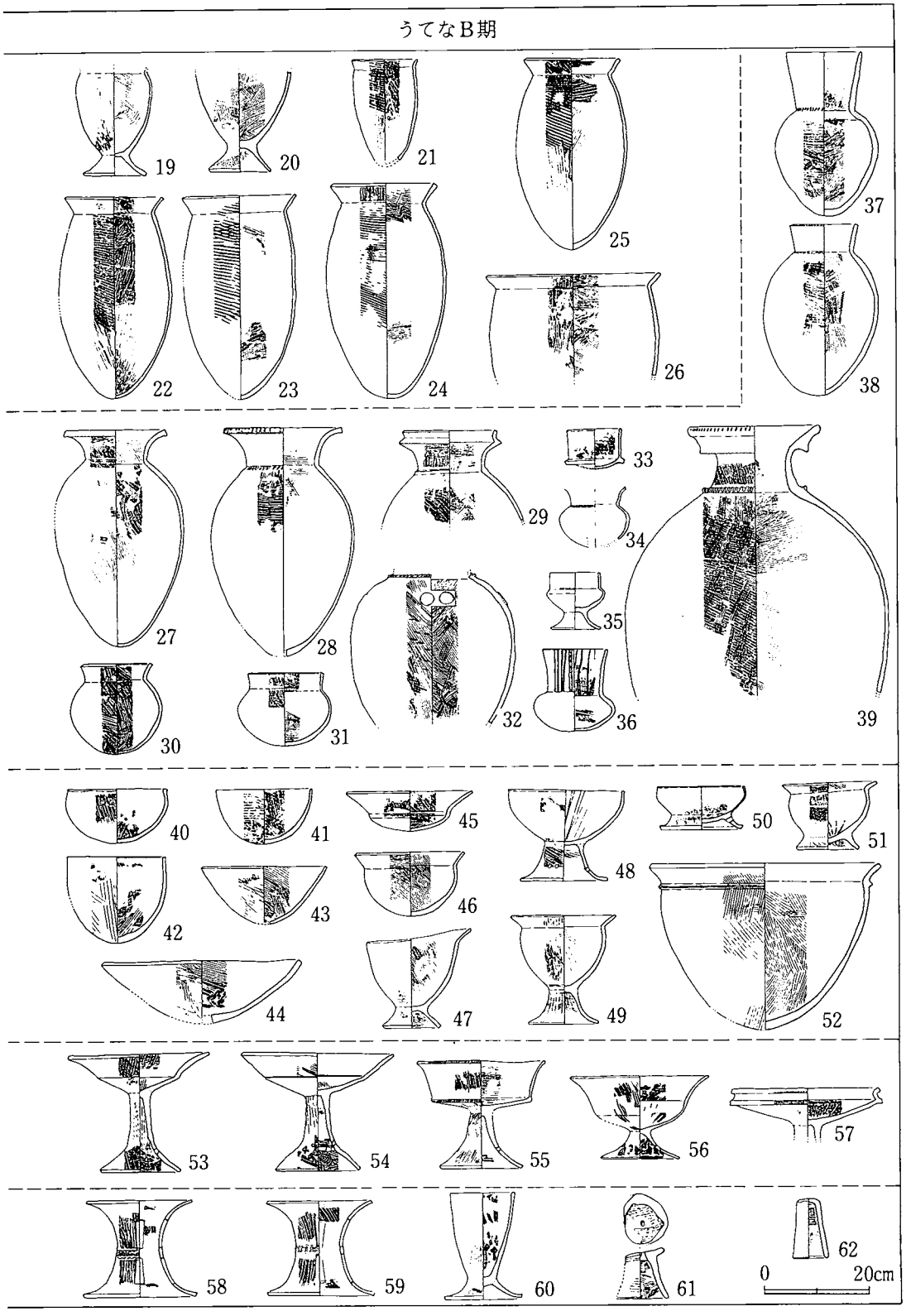
小型の壺の内外器面の調整はハケ目・ヨコナデであるが、底部付近の外器面に部分的にタタキ目を残すものが少数ある。30・31は口縁部が「く」の字形に屈曲し、胴部が丸く、丸底である。胴部は30が縦長で、31が横長である。33は胴部に鍔状のものが付く。34は丸い胴部に外反する頸部が続き、頸部に文様が施される。35は丸い胴部から頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部に至る。底部には「八」の字形に開く脚が付く。36は丸い胴部に外反する長頸部・口縁部が続き、口縁部・頸部の内外器面に暗文が施される。

鉢

鉢には小型・中型と大型のものがある。小型・中型の鉢には、次のようなものがある。40



第177 図　うてな遺跡土器編年図(案)


うてなB期
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
0
20cm

第177図

は丸い胴部に内傾気味の口縁部が続く。41 は丸い胴部にやや外反する口縁部が続く。42 は丸い胴部がほぼ直立する口縁部に続き、体部が深い。43・44 は全体の形状が略三角形を呈する。44 の方が口径が大きく、底部付近に部分的なヘラケズリがある。45 は体部のほぼ中央部で「く」の字形に屈曲し、口縁部まで直線的に伸びる。46 は口縁部が「く」の字形に屈曲し、胴部が丸くなる。47 は「八」の字形に開いた脚が付き、片口である。48 は 40・41 のような鉢部に脚が付く。脚は「八」の字形を呈し、端部付近でさらに外に開き、穿孔が施される。49・51 は 46 のような鉢部に脚が付く。49 の脚は端部付近でさらに外に開く「八」の字形を呈する。51 の脚は短く「八」の字形に開く。50 は 40 を浅くしたような鉢部に脚が付く。脚は短く「八」の字形に開き、端部がやや跳ね上がり、穿孔がある。小型・中型の鉢の内外器面の主な調整は、ハケ目・ヨコナデであり、外器面にタタキ目を残すものが少数ある。

52 は大型の鉢である。口縁部が「く」の字形に屈曲し、丸い胴部に続く。頸部には断面三角形の凸帯が巡る。内外器面の調整はハケ目・ヨコナデである。

高坏

53・54・55 の脚部は体部が外に開きながら直線的に伸び、裾部付近でさらに外に開き、穿孔が施される。坏部は 53 が中央部で「く」の字形に屈曲し、口縁部が外反しながら伸びる。54 は屈曲部よりほぼ直線的に口縁部まで伸びる。55 は坏部下位で強く「く」の字形に屈曲し、垂直に近い状態で立ち上がり、口縁端部で外反する。56 は坏部の屈曲が弱く、口縁部が外反しながら伸びる。深い坏部に「八」の字形を呈した短い脚が付き、穿孔がある。57 の坏部は口縁部が強く「く」の字形に屈曲し、屈曲部が段になる。高坏の内外器面の調整はハケ目・ヨコナデである。高坏の胎土は甕・壺・鉢などの胎土と異なる。

器台

58・59 は体部中央より上下端部に向けて「八」の字形に開き、略長方形の透かしが上下二段に四箇所ある。透かしの間には櫛描文などが施される。内外器面の調整はハケ目・ヨコナデである。器台の胎土は高坏と同様に他の器種と異なる。器台・高坏は搬入品の可能性が高い。

グラス形土器

60 はグラス状の体部に「八」の字形に開く脚が付く。内外器面の調整はハケ目・ヨコナデである。

支脚

61 の上端部は略円形の一部が突出し、中心部に穿孔され、外器面にタタキ目が残る。脚は「八」の字形に開いている。上端部以外の内外器面の調整はハケ目・ヨコナデである。62 はコップを逆さにしたような形を呈する。内外器面の調整はハケ目・ヨコナデである。

うてなＣ期

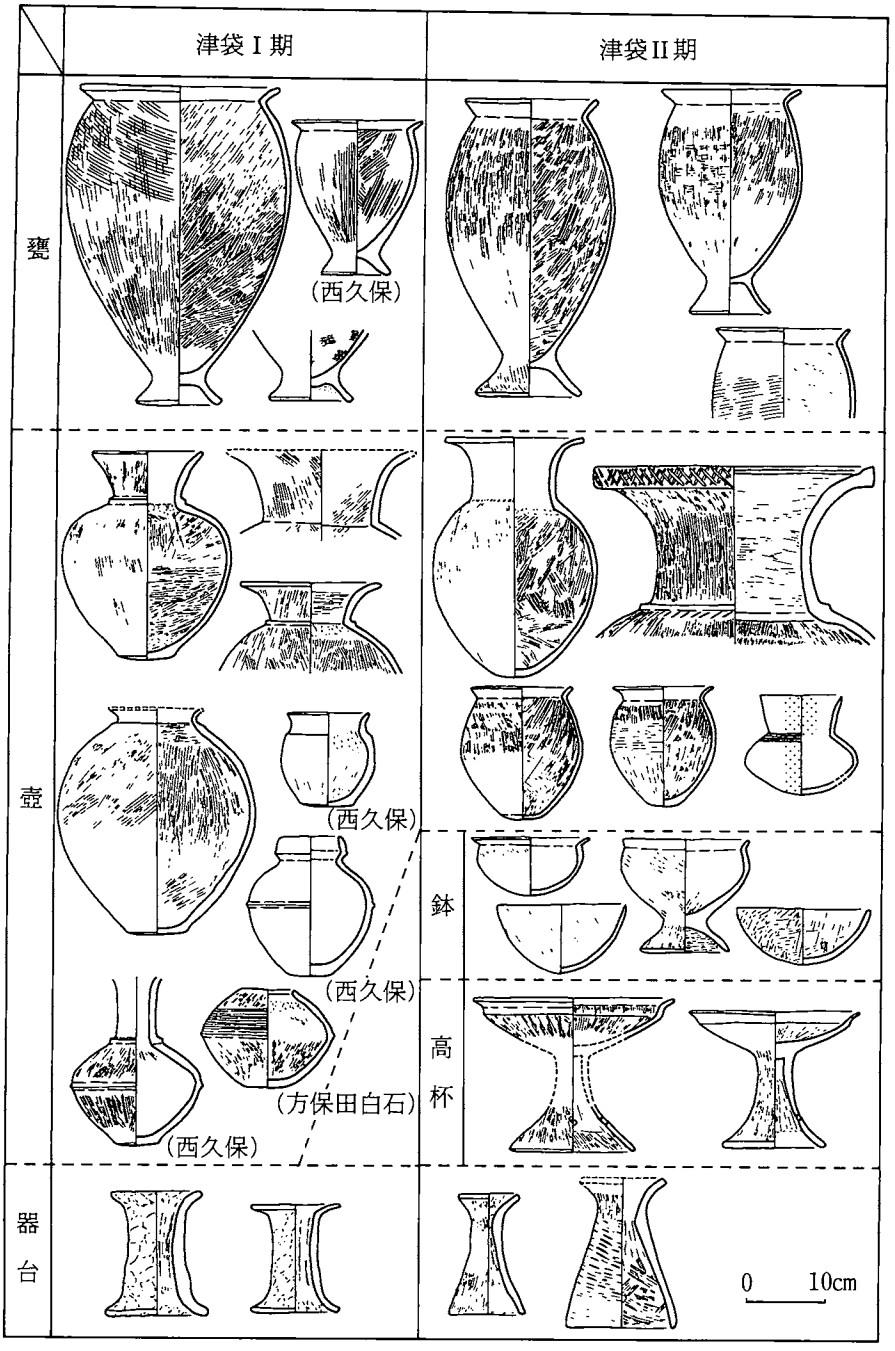
63・64は2号方形周溝墓より出土したもので、古閑期[5]（庄内式併行期）に位置づけることができる。

6．津袋大塚遺跡の土器編年との関連（第178図）

津袋大塚遺跡は鹿本郡鹿本町大字津袋字大塚にある。津袋大塚遺跡は、うてな遺跡と同じ菊池川流域に分布し、直線距離で2～3ｋｍ離れた箇所にあり、類似する土器をもつ遺跡である。津袋大塚遺跡出土土器は、津袋Ⅰ期（弥生時代後期前半）と津袋Ⅱ期（弥生時代後期後半）に分けて把握されている[6]。この時期とうてなＡ期・うてなＢ期との関連を考えてみる。うてなＡ期は津袋Ⅰ期と同時期であり、うてなＡ期とうてなＢ期の中間に津袋Ⅱ期が位置すると考えられる。まとめると、次のようになる。

うてなＡ期・津袋Ⅰ期（弥生時代後期前半）
↓
津袋Ⅱ期（弥生時代後期後半）
↓
うてなＢ期（弥生時代後期終末）
↓
うてなＣ期（古墳時代初め）

註（1）　高木正文　「熊本県菊池郡七城町うてな遺跡」『日本考古学年報』42（1988年度版）1990年
（2）　註(1)に同じ。
（3）　古森政次　「環濠集落蒲生上の原遺跡」『熊本史学会例会資料』1992年
（4）　島津義昭　「巴形銅器二例」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年
（5）　野田拓治　「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年
（6）　高木正文　「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集　1979年



第178図　津袋大塚遺跡の土器編年図
（高木正文『古文化談叢』第6集 1979年より）

3．古墳時代について

1．1号方形周溝墓について

（1）周溝について

検出できた周溝は一部分であり、他は削平されている。検出部はＬ字形を呈しており、周溝が閉じている箇所の西側が陸橋部と考えられる。陸橋部の南側延長線上に主体部がある。検出部より復原すると、東西方向の周溝規模は約22mになる。

（2）主体部について

主体部も削平を受けており、検出したのは床面付近である。痕跡より、木棺と考えられる。

（3）遺物について

第85図の土師器は沈目II期・塚原I期（4世紀末～5世紀初頭）に比定できる[1]。

2．2号方形周溝墓について

（1）周溝について

周溝の北側一部分が調査区外にのびる。周溝の規模は、計測可能な箇所で、東西方向約19m、南北方向約15mある。陸橋部は周溝角部の南西隅にある。陸橋部より北側の周溝では、陸橋部寄りの床面に壺形土器が据えられていた。

（2）主体部について

主体部は削平されており、検出できなかった。

（3）遺物について

第86図1・3は古閑期（4世紀初め）、第86図2は沈目I期（4世紀中頃～後半）、第86図4・第87図は沈目II期・塚原I期に比定できる[2]。

（4）築造時期について

古閑期（4世紀初め）に比定できる土師器が周溝の床面に据わった状態で出土した。この土師器より、2号方形周溝墓の築造時期を4世紀初めに考えることができる。現在のところ、2号方形周溝墓は、県内最古の方形周溝墓である[3]。

3．3号方形周溝墓について

（1）周溝について

周溝の削平が著しく、検出できたのは全体の一部分であり、陸橋部の正確な位置も把握できない。検出した周溝の深さは浅い。計測可能な箇所での周溝の規模は、東西方向で約12.6mある。

（2）主体部・遺物について

主体部も削平を受けており、検出できなかった。残存部が少ないため、遺物も出土しなかった。

4．1号木棺～4号木棺・1号壺棺について

（1）1号木棺

1号木棺は1号壺棺に切られている。遺物は棺内の原位置で、ガラス製小玉（16点）・碧石製管玉（2点）が出土した。棺内排土よりの出土は、ガラス製小玉（20点）・碧石製管玉（1点）である。棺内の原位置で出土した玉類は、棺の南西部に集まる。また、棺内の二短辺を比較すると、南西側が広い。このことより、南西向きの頭位であったと考えられる。

（2）2号木棺

2号木棺は1号木棺の西側に近接しており、棺の主軸も1号木棺とほぼ同じである。攪乱が著しく、2号木棺の詳細は不明である。出土遺物はない。

（3）3号木棺

3号木棺の南側短辺寄りの床面より、鉄製鎌が出土した。南側短辺はもう一方の短辺より長く、南向きの頭位と推定できる。棺内の排土より、ガラス製小玉（10点）が出土した。

（4）4号木棺

4号木棺の短辺は東側が西側より長く、東側短辺寄りの箇所に赤色顔料が集中している。また、棺身の上端部と考えられる部分より出土した刀子の先端部も東側短辺を向いている。このことより、東向きの頭位と思われる。棺内原位置で出土したガラス製小玉は、東側短辺寄りの箇所で5点、棺内のほぼ中央部より33点である。33点のガラス製小玉は、出土位置より腕輪と考えられる。また、棺内排土より、ガラス製小玉22点が出土した。

（5）1号壺棺

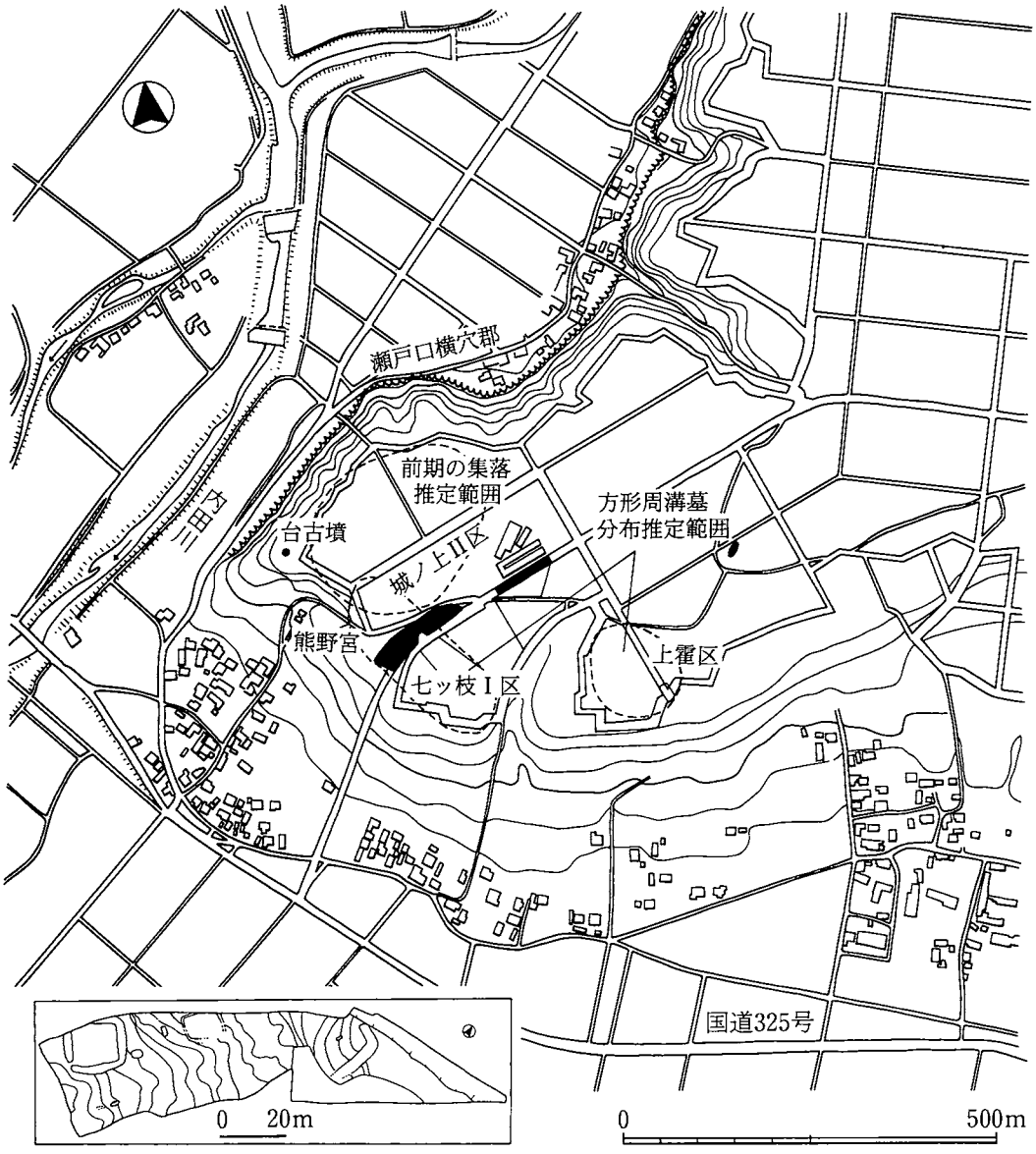
1号壺棺は1号木棺を切っている。壺棺は二個体の壺よりなる。底部を打ち欠き、口縁部も打ち欠いた可能性のある壺の底部を被うように、別個体の壺底部が置かれていた。前者の壺は県内に類例がないが、5世紀初頭～中頃に考えたい。

（6）木棺の築造時期

1号木棺と1号壺棺との切り合い関係より、1号木棺は1号壺棺より古い。（5）の時期が正しければ、1号木棺は5世紀初頭～中頃以前の築造とすることができる。方形周溝墓と並行して木棺も築造されていたと考えた方が理解しやすい。

5．古墳時代のうてな遺跡について（第179図）

1986年～1988年に実施した県営畑地帯総合土地改良事業に伴う調査では、城の上I区・II



第179図　うてな遺跡古墳時代の全体図

区より、古墳時代前期の竪穴住居址が検出された[4]。今回の調査区には、古墳時代の竪穴住居址は分布していない。このことより、古墳時代前期の集落の範囲は第　図の点線部分に推定することができる。

また、1986年～1988年の調査で、七ッ枝I区の南端より方形周溝墓1基（主体部・箱式石棺と推定)、上霍区より方形周溝墓1基（主体部・舟形石棺）を確認した[5]。1992年の調査では、城の上II区の西側端部より方形周溝墓1基（主体部・箱式石棺）が検出された[6]。今回の調査結果を合わせて考えると、第179図の点線が方形周溝墓の分布範囲と推定できる。

さらに、台地北西端部にうてな古墳、台地北東部に北上原古墳があり[7]、台地の縁辺部に古墳が立地する。その後、台地の北側崖面に瀬戸口横穴墓群が築造される[8]。

註（1）　野田拓治　「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年

（2）　註（1）に同じ。

（3）　下益城郡城南町大字今に所在する今西原遺跡より、うてな遺跡の2号方形周溝墓とほぼ同時期の方形周溝墓が検出された。清田純一氏の御教示による。

（4）　高木正文　「熊本県菊池郡七城町うてな遺跡」『日本考古学年報』42（1988年度版）1990年

（5）　註（4）に同じ。

（6）　県文化課調査。高木正文氏の御教示による。

（7）　松本健郎・西住欣一郎　『北上原古墳・瀬戸口横穴墓群』熊本県文化財調査報告第104集　1989年
高木正文

（8）　註（7）に同じ。

4．奈良・平安時代について

1．遺構・遺物について（第180図・第181図）

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居址46・掘立柱建物跡5・土坑2・溝跡3・道路跡1である。1986年～1988年に行われた県営畑地帯総合土地改良事業に伴う発掘調査では、約150の竪穴住居址、20数棟の掘立柱建物跡が検出された。注目できる遺物として、三彩壺の破片・銅鋺片・墨書土器などが七ッ枝II区より出土した。建物全体の配置状態が不明であるが、官衙関連の遺構があると考えられる[1]（第181図）。

1986年～1988年に実施した調査、今回の調査、1992年に実施した大原II区西側の調査の結果により[2]、奈良時代・平安時代の集落は、台地の南西部に寄った範囲にあると推定できる（第180図の点線部分）。その集落への道が今回の調査で検出した12号道路跡である。

2．集落の存続期間について

竪穴住居址より出土した遺物は、8世紀後半～9世紀前半である[3]。供膳容器には、土師器・須恵器があり、貯蔵容器に須恵器の甕が見られる。

竪穴住居址の切り合い関係を整理すると、次のようになる。

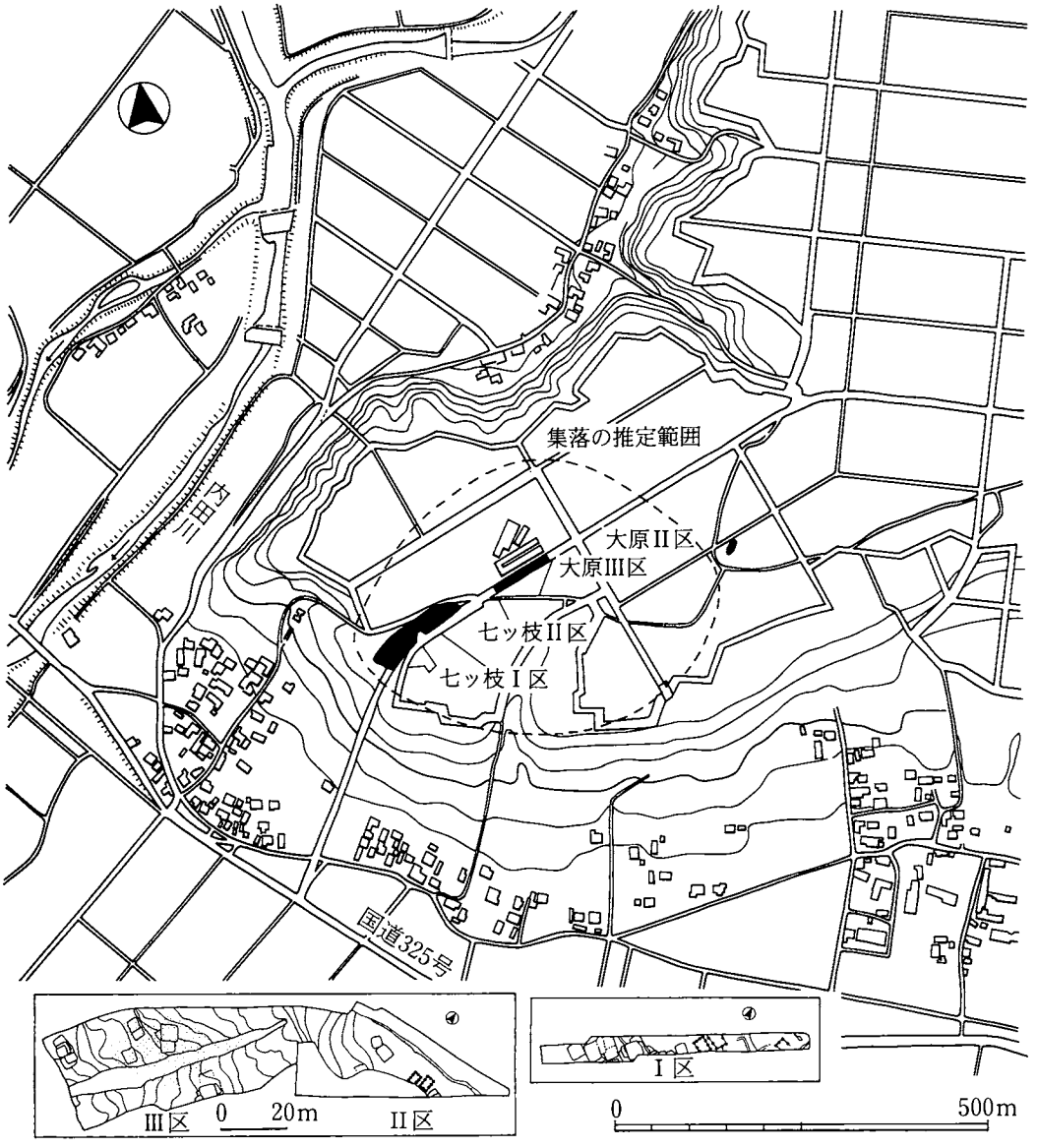
①8号→6号→7号。②5号→6号→7号→4号→22号。③12号→11号→23号→9号。④15号→14号。⑤17号→16号。⑥17号→19・20号。⑦18号→19・20号。⑧25号→24号。⑨26号→27号。⑩30号→29号。⑪32号→31号→29号。⑫34号→35号→33号。⑬38号→37号。⑭46号→45号→43号→42号→40号→41号→44号。

竪穴住居址の切り合いは、少ないもので2回、多いもので7回である。最も切り合いの多い竪穴住居址（⑭）も8世紀後半～9世紀前半の時期幅で、7回の建て替えを行っている。

集落全体を調査していないので、全集落の存続期間は不明であるが、8世紀後半～9世紀前半の前後の時期に集落が存続していたと思われる。

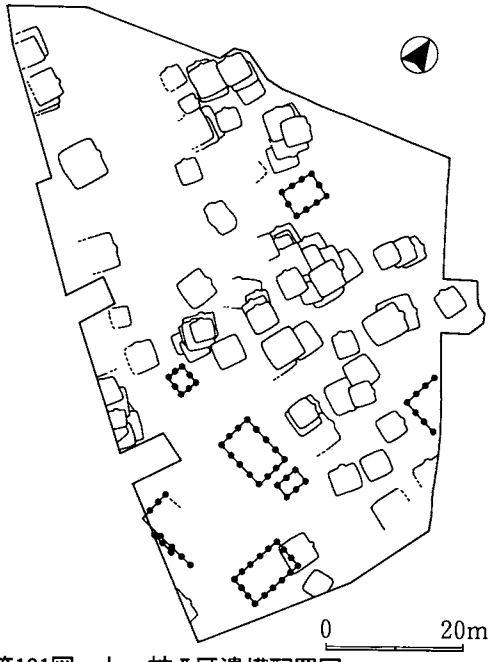
3．12号道路跡について（第180図）

この道路跡は、台地の南西端部より台地の平坦面に登るもので、集落内に入ると道路跡は終わっている。道路跡より出土した遺物は、8世紀後半～9世紀前半であり、今回調査した集落



第180図　うてな遺跡奈良・平安時代の全体図

の存続期間と同じである。また、道路跡と竪穴住居址・掘立柱建物跡との切り合いがないことより、道路の使用が集落の存続期間と同じであることを確認できる。



第181図　七ッ枝Ⅱ区遺構配置図
（高木正文『日本考古学年報』41 1990年より）

4．33号竪穴住居址について

33号竪穴住居址は、他の竪穴住居址と異なった構造である。壁に沿った箇所に作り付けの竈がなく、内部に焼土・カーボンを含んだ掘り込み2基がある。覆土中であるが、この2基の掘り込みの上部に集中した状態で、石器（砥石を含む）・鉄製品・スラグ・ふいごの羽口が出土した。また、33号竪穴住居址の周辺のIII層中より、鉄製品・スラグ・ふいごの羽口・るつぼが出土している。このような状況より、2基の掘り込みは、鍛冶関連の遺構と考えられる。

出土したふいごの羽口で、孔径が分かるものと孔径が復原できるものが8点ある。これらの中で、1点の孔径が極端に大きく（約6cm）、他は比較的近似している。大きい孔径をもつものを除いた7点の孔径平均値は、約2.8cmである。

荒尾市の小岱山麓にある金山・樺製鉄遺跡群では、9世紀代に製鉄が開始され、12世紀後半～13世紀前半に最盛期を迎えている。ここでは、製錬系遺構と鍛冶系遺構とがあり、ふいごの羽口は孔径の違いにより、製錬系と鍛冶系と別れて捉えられている。製錬系羽口が大きく、鍛冶系羽口が小さい。鍛冶系羽口の孔径平均値は、大藤1号谷遺跡で2cm、大藤2号谷遺跡で2.32cm、狐谷遺跡で2.9cmである[4]。これらの数値は、うてな遺跡出土の羽口孔径平均値と近似している。

33号竪穴住居址が集落の中心から外れた場所にあるのは、鍛冶関連の遺構があることで、集落を火災から守るための立地と考えられる。また、12号道路跡の西側に近接しているのは、鍛冶に関する用材の運搬のためだと思われる。

福岡市柏原M遺跡では、古代の製鉄遺構が確認されている。この製鉄は出土遺物などから「郷長」の指揮下で行われていたと考えられている[5]。うてな遺跡でも、七ッ枝II区の遺構・遺物より、柏原M遺跡と同様なことが想定できる。

5．車輪文タタキ目をもつ須恵器について

車輪文タタキ目をもつ須恵器は、12号道路跡・III層より出土した。12号道路跡より出土したものは、車輪文タタキ目の詳細な形状が分からない。III層より出土したものには、二種類の車輪文タタキ目がある。(1)中心円内に×字状文があり、その周囲に二重の同心円文を施すもの。(2)中心円内に8本の放射線状文があり、その周囲を二重の同心円文が囲むもの。(1)に類似するものが、熊本県荒尾窯跡群中の樺万城窯跡・下谷窯跡より出土している。(2)は樺万城窯跡より出土したものに類似している[6]。

12号道路跡より出土した須恵器の壺外底部にタタキ目がある。これと同様なものが熊本県荒尾窯跡群中の薬師前窯跡・北山浦窯跡・下谷窯跡より出土している[7]。

註(1)　高木正文　「熊本県菊池郡七城町うてな遺跡」『日本考古学年報』41（1988年度版）1990年

(2)　県文化課調査。丸山伸治氏の御教示による。

(3)　松本健郎　『生産遺跡基本調査報告書II』熊本県文化財調査報告　第48集　1980年

中島恒次郎　「第10章　大宰府の遺物特論」『太宰府市史　考古資料編』　1992年

(4)　勢田広行　『金山・樺製鉄遺跡群調査報告書・上巻』荒尾市文化財調査報告　第7集　1992年

(5)　山崎純男　『柏原遺跡群VI』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第191集1988年

板楠和子　「文献から見た金山・樺山製鉄遺跡」『金山・樺製鉄遺跡群調査報告書・下巻』荒尾市文化財調査報告　第7集　1992年

(6)　横山浩一　「須恵器に見える車輪文叩き目の起源」『九州分化史研究所紀要第26号』1981年

(7)　註(5)に同じ。

松本健郎　『生産遺跡基本調査報告書II』熊本県文化財調査報告　第48集　1980年

5．鎌倉・室町時代について

1．道路跡について

検出した道路跡は1号～10号である。これらの中で、最下部で検出したのが8号であり最も古く、最上部で新しいグループである1号～6号を検出した。これらの道路跡の切り合い関係や上下関係は、次のようになる。①1号→2号。②3号→2号。③1・2号→6号。④7号→2号。⑤8号→7号。⑥8号→9号。

2．8号道路跡下部遺構について

最古の8号道路跡は、他の道路跡とは異なった構造をもつ。道路として使用した硬化面の下部に、暗渠様の施設がある。この施設が8号道路跡下部遺構である。この遺構は、凹部下面に礫を配置し、その上面に客土を行っている。非常に丁寧な構造が下部にある8号道路跡は、計画的な道路と考えることができる。8号道路跡より新しい道路跡は、計画的に作ったのでなく、8号道路が埋まり、その埋まった面を道路として使用したと思われる。

3．道路跡の時期について

8号道路跡下部遺構より出土した白磁は13世紀中頃に考えられる[1]。また、最も新しい道路跡の一つである2号道路跡出土遺物の中に、明代の青磁があり、15～16世紀に比定できる[2]。このことより、13世紀中頃に8号道路跡が作られ、その後、15～16世紀まで道路として使用されたと考えることができる。

4．道路跡と観音塚について（第182図・第183図）

1号～10号の道路跡は、東西方向にのびている。この道路跡がのびる方向の西側端部には熊野宮が位置している。熊野宮には鎌倉・室町時代と考えられる五輪塔があり、熊野宮の東側には道路として使用していた凹部がある。この凹部と今回検出した道路跡とは、のびる方向が一致する。また、1号～10号の道路跡の東側には、鎌倉・室町時代の墳墓である観音塚（吉祥寺）がある。大原II区の調査では、1号～10号の道路跡と繋がる可能性のある道路跡が検出されており、1号～10号の道路跡がのびる方向に観音塚がある。これらのことより、今回検出した道路跡は、観音塚への道と考えられる（第182図）。

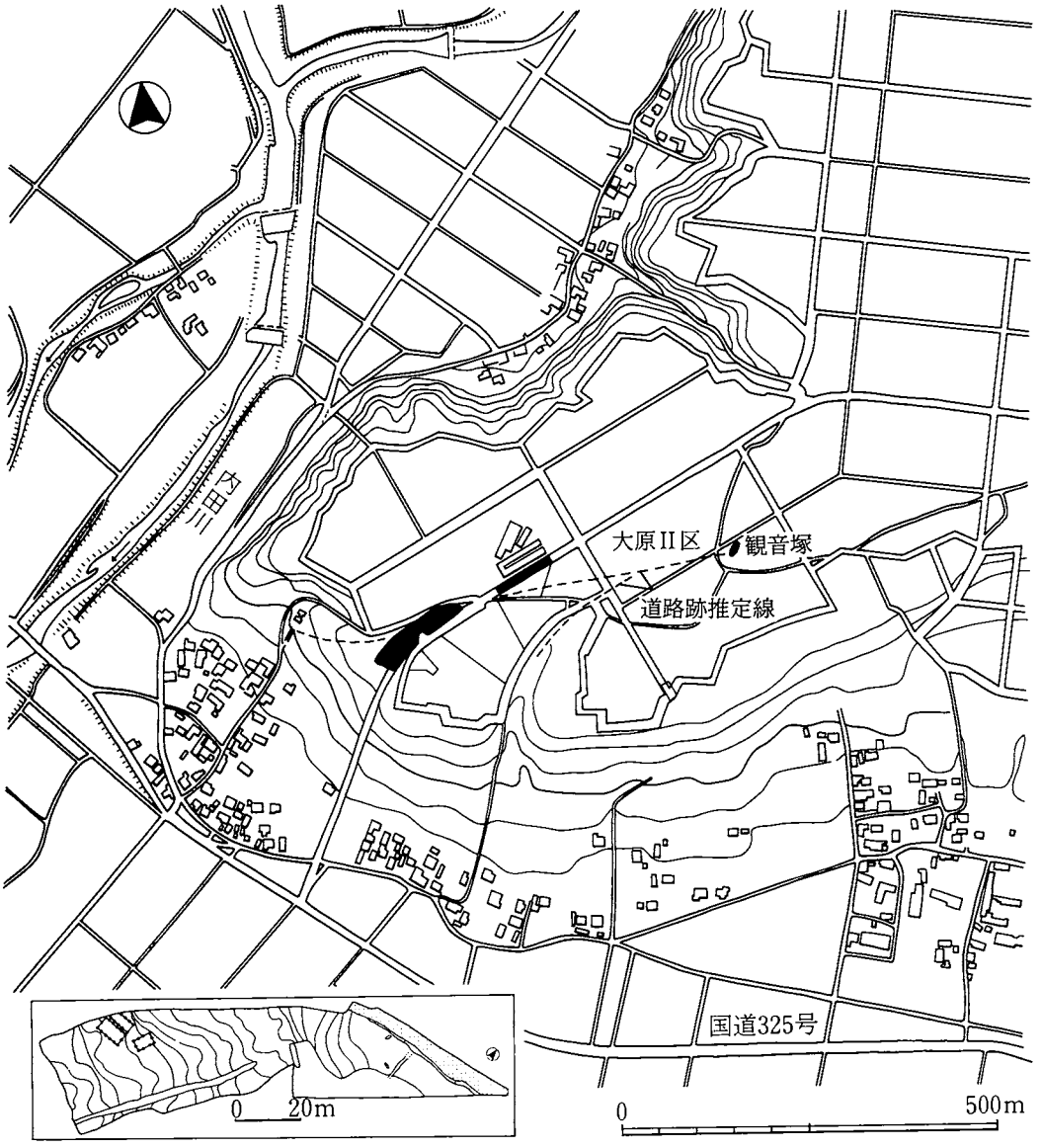
観音塚（吉祥寺）は、河原石を積み上げた塚である。その一部が水路になるため、調査が行われた。河原石を除くと、方形・楕円形に石で区画した火葬墓71基が検出された。また、塚の上部から五輪塔や宝篋印塔の残欠が多く出土した。火葬墓は武士等を埋葬した室町時代の墳墓と考えられている（第183図）。さらに、火葬墓の下部からは、土壙5基が検出された。土壙は火葬墓に先行する鎌倉時代の墳墓とされている[3]。

今回検出した最古の8号道路跡は、観音塚（吉祥寺）の築造に伴って作られたと考えることができる。前記2で述べたような8号道路跡下部遺構の特殊性も理解できる。

また、1992年に実施した大原II区の西側の調査では、うてな台地南側の谷部より登って来て、観音塚へたどり着くと考えられる道路跡が検出されている[4]（第182図）。

5．7号・8号掘立柱建物跡について

7号・8号掘立柱建物跡は、平行型二棟造の構造をしている。平行型二棟造の民家は、このうてな遺跡が所在する熊本県菊池郡を中心に分布している[5]。現在、この構造をもつ建物では、

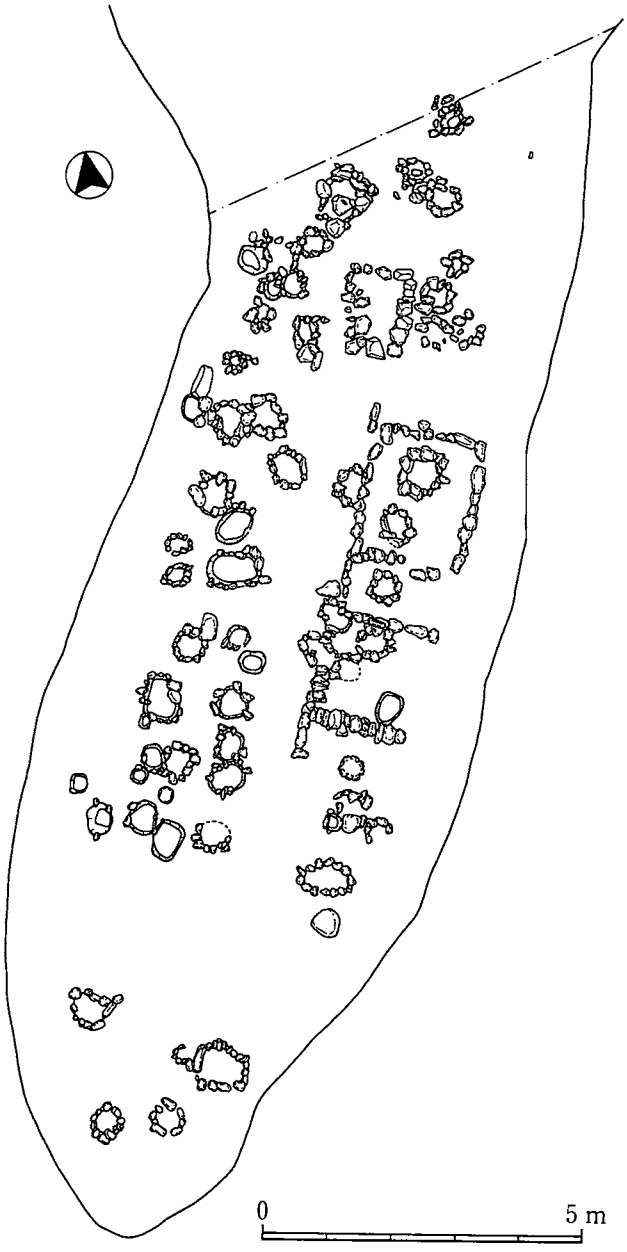


第182図　うてな遺跡鎌倉・室町時代の全体図

同じく菊池郡七城町亀尾にある上鶴頭遺跡のSB05・06が最も古い。上鶴頭遺跡は、平安時代初期の合志郡郡衙と考えられている[6]。7号・8号掘立柱建物跡は、正確な時期を決める資料を欠くが、鎌倉時代～室町時代の幅に入る。つまり、うてな遺跡の7号・8号掘立柱建物跡は、平安時代初期の上鶴頭遺跡のSB05・06と近世初期の分棟型民家[7]との中間に位置し、その空白を埋める資料である。

註（1）　横田賢次郎・森田勉　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　1978年

（2）　亀井明徳　『日本貿易陶磁史の研究』　同朋社出版　1986年



第183図　観音塚の火葬墓配置図
（高木正文『日本考古学年報』41 1990年より）

（3）　高木正文　「熊本県菊池郡七城町うてな遺跡」『日本考古学年報』41（1988年度版）1990年

（4）　県文化課調査。丸山伸治氏の御教示による。

（5）　太田静六　「熊本県の民家－貴重な平行型二棟造」『九州のかたち　民家』西日本新聞社 1977年

（6）　橋本康夫・鶴島俊彦『上鶴頭遺跡』熊本県文化財調査報告第63集 1983年

（7）　吉田　靖　「近世初期における熊本県地方の分棟型民家－肥後人畜改帳による」『文化財論叢奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』1982年

註（5）に同じ。

図　　版

うてな遺跡遠景（南から）

10号-A溝跡・C-25②層遺物出土状況（東から）

図版 2

10号-Ａ溝跡ＣＤ地点土層断面（西から）

10号-Ａ・10号-Ｂ溝跡Ａ地点土層断面（西から）

10号-B溝跡・D-23③層遺物出土状況（南から）

10号-B溝跡・D-23③層遺物出土状況（東から）

図版 4

10号-B溝跡・D-24③層遺物出土状況（南から）

10号-B溝跡・C-22③層遺物出土状況（東から）

10号-Ｂ溝跡・Ｃ-22③層遺物出土状況（北から）

10号-Ｂ溝跡・Ｃ-20③層遺物出土状況（南から）

図版 6

10号-Ｂ溝跡・Ｃ-20③層遺物出土状況（南西から）

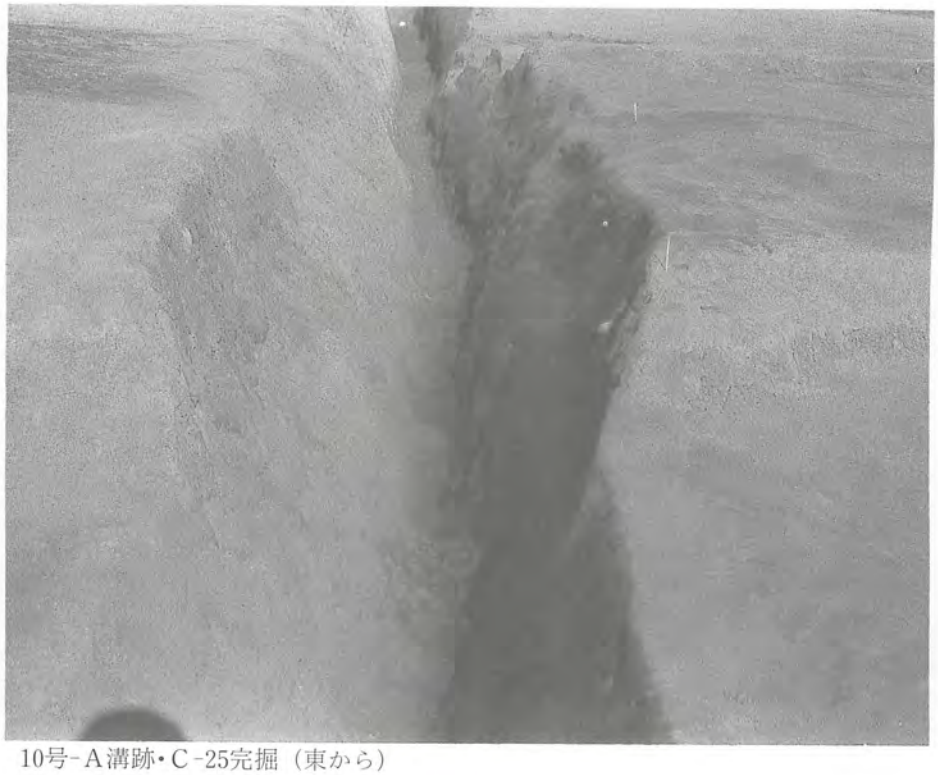
10号-Ｂ溝跡・Ｃ-22④層遺物出土状況（東から）

10号-B溝跡・C-22④層遺物出土状況（南西から）

10号-B溝跡・C-22④層遺物出土状況（南から）

図版 8

10号-A溝跡・10号-B溝跡完掘全景（西から）



10号-A溝跡・C-25完掘（東から）

10号-A溝跡・B-23完掘（西から）

10号-B溝跡完掘全景（東から）

図版10

1号方形周溝墓遺物出土状況（北から）

1号方形周溝墓土層断面（南から）

1号方形周溝墓主体部（南西から）

2号方形周溝墓全景（西から）

図版12

2号方形周溝墓周溝内掘り込み（南東から）

2号方形周溝墓立橋部北側土師器出土状況（南から）

1号木棺検出状況（西から）

1号木棺完掘（西から）

図版14

1号木棺掘り込み（東から）

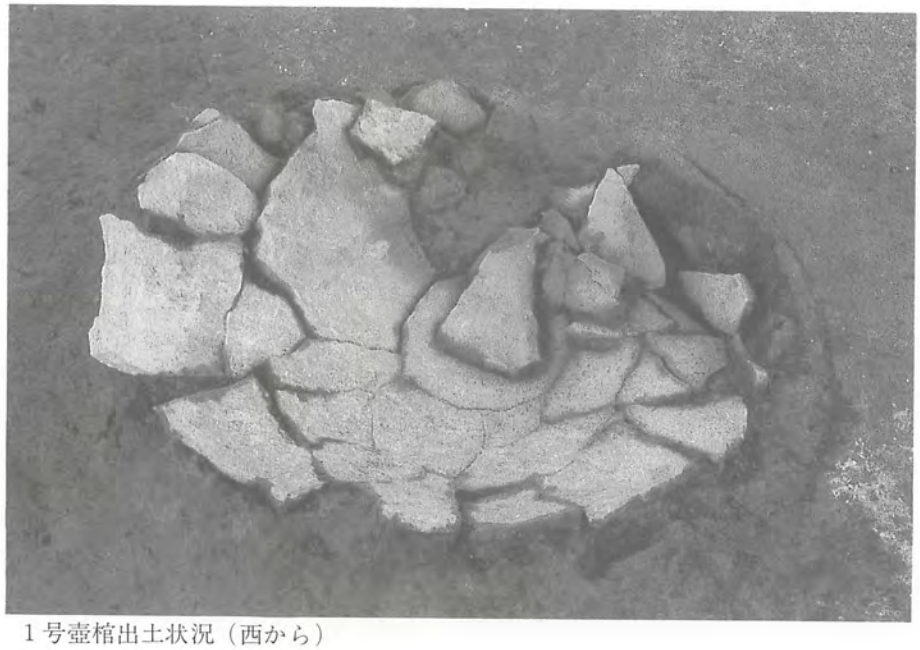
3号木棺完掘（南から）

4号木棺完掘（東から）

4号木棺刀子出土状況（西から）

図版16

1号壺棺検出状況（北から）



1号壺棺出土状況（西から）

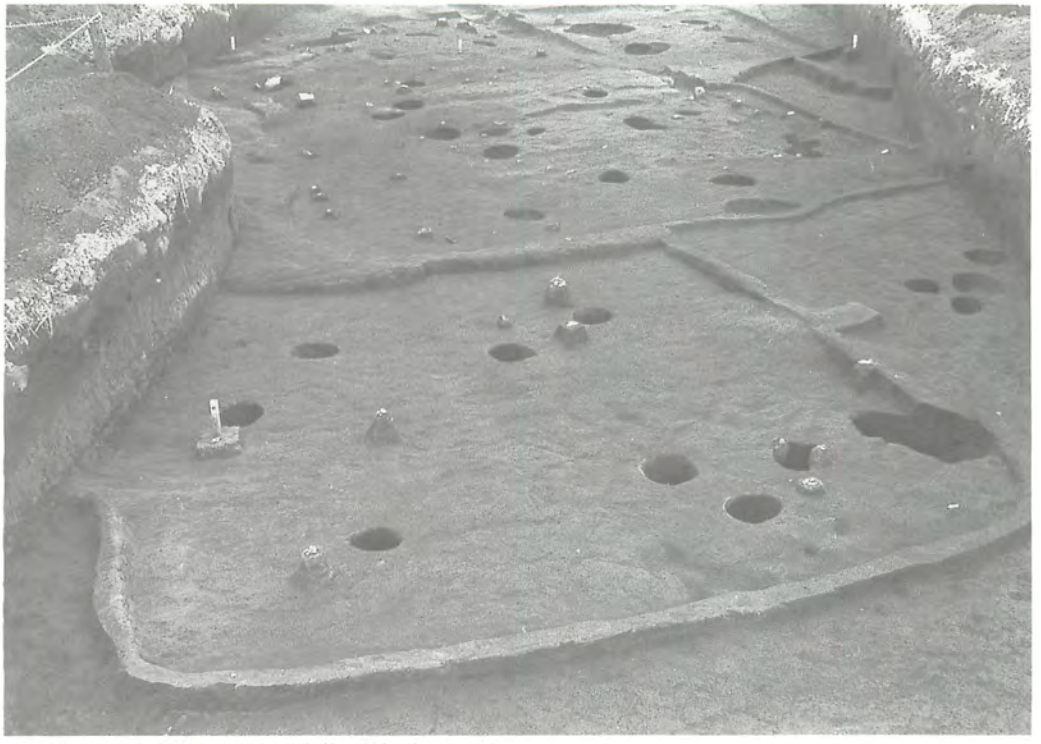
1号壺棺掘り込み（西から）

I区全景（西から）

図版18

1号竪穴住居址（北から）

4号～12号竪穴住居址（西から）



13号～19号・22号・23号竪穴住居址（西から）

18号竪穴住居址内甕出土状況（西から）

図版20

24号竪穴住居址（東から）

25号竪穴住居址（東から）

29号～31号竪穴住居址（東から）

33号～35号竪穴住居址（東から）

図版22

33号竪穴住居址遺物出土状況（南から）

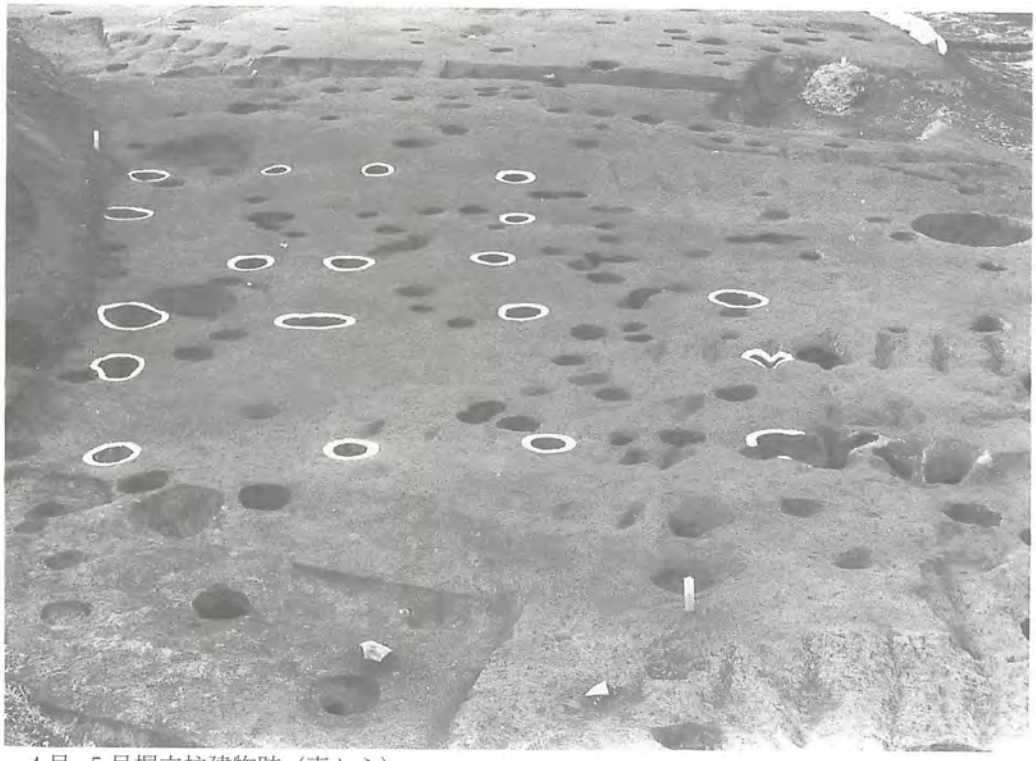
33号竪穴住居址（東から）

40号～46号竪穴住居址（南から）

1号掘立柱建物跡（北から）

図版24

2号・3号掘立柱建物跡（南西から）

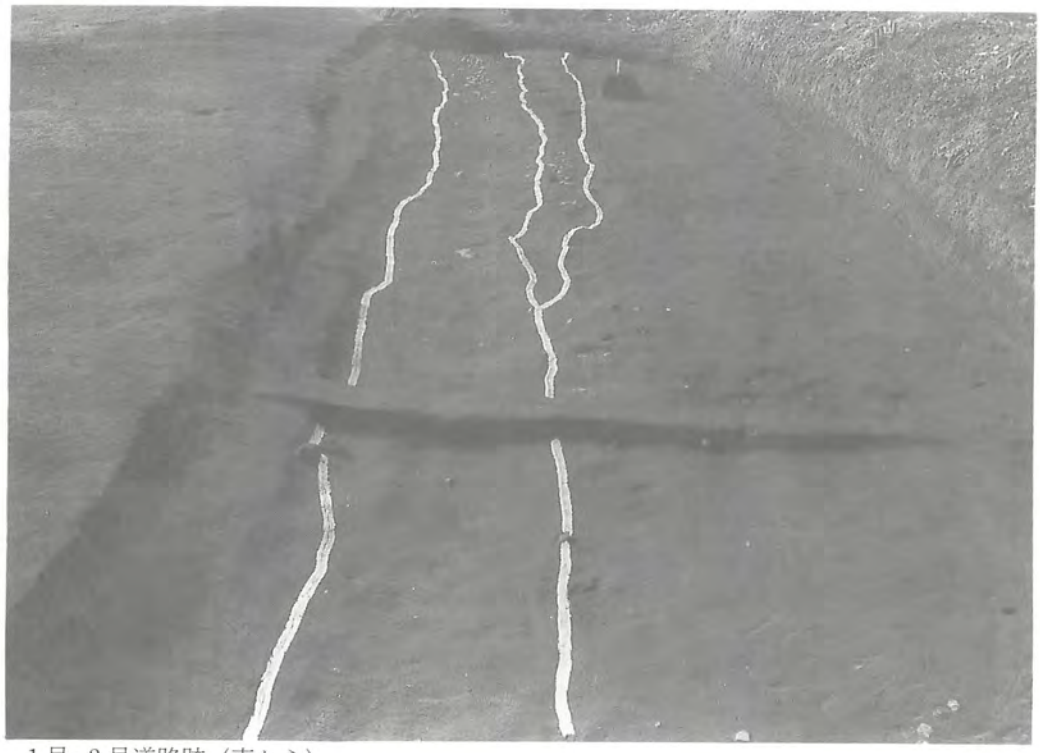


4号・5号掘立柱建物跡（東から）

12号道路跡・D-24（東から）

12号道路跡・D-25（西から）

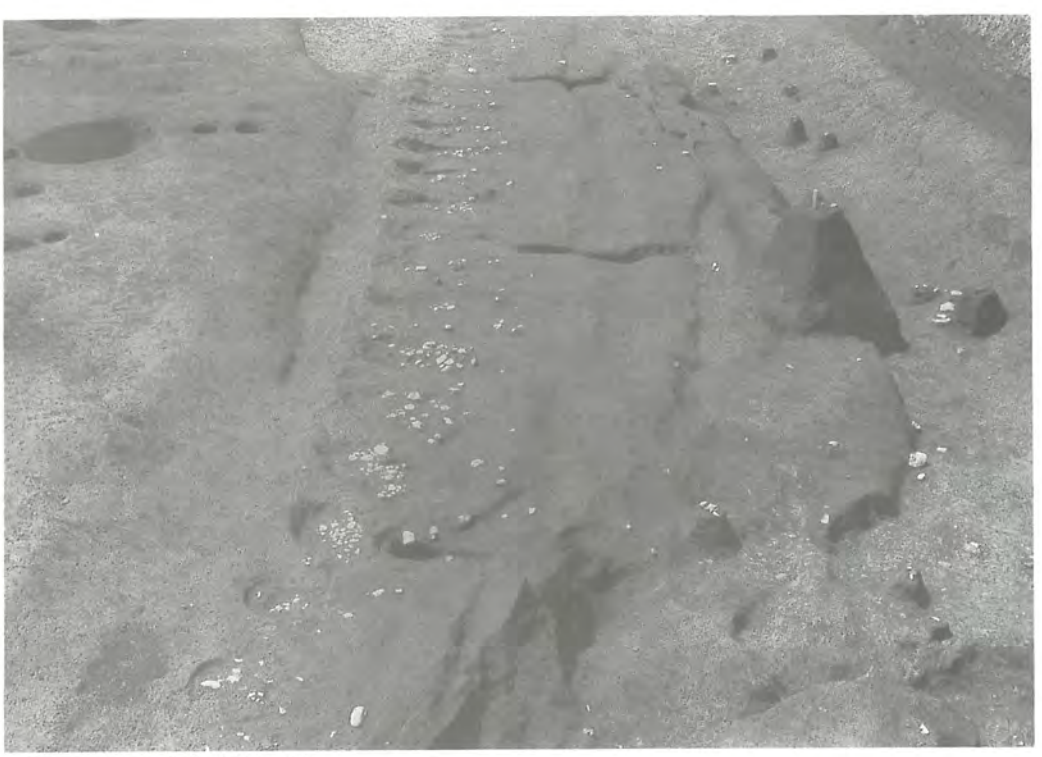
図版26



1号・2号道路跡（東から）

2号～4号道路跡（東から）

6号道路跡（東から）



8号・9号道路跡（東から）

図版28

8号道路跡の凹部（北から）

8号道路跡下部遺構（東から）

8 号道路跡下部遺構礫配置状況（東から）

8 号道路跡下部遺構礫配置状況近景（東から）

図版30

11号道路跡凹部検出状況（東から）

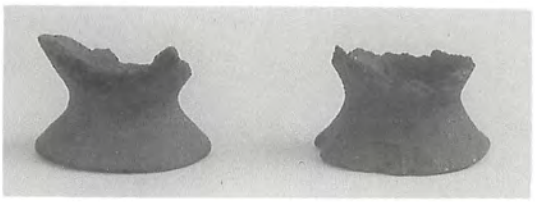
6号～8号掘立柱建物跡（南東から）

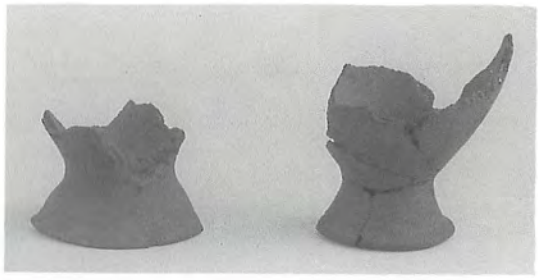
7号・8号掘立柱建物跡（南西から）

11号溝跡（東から）

図版32

縄文時代の遺物
後期土器・石鏃・石斧(約$\frac{1}{3}$)



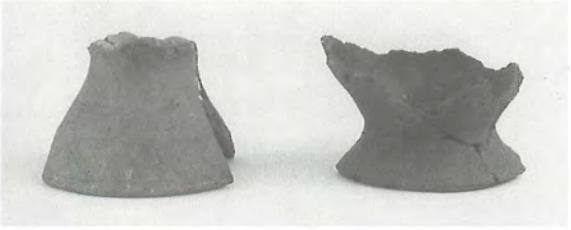


10号-A溝跡
②層出土土器
(約$\frac{1}{4}$)

10号-A溝跡②層出土土器(約$\frac{1}{4}$)

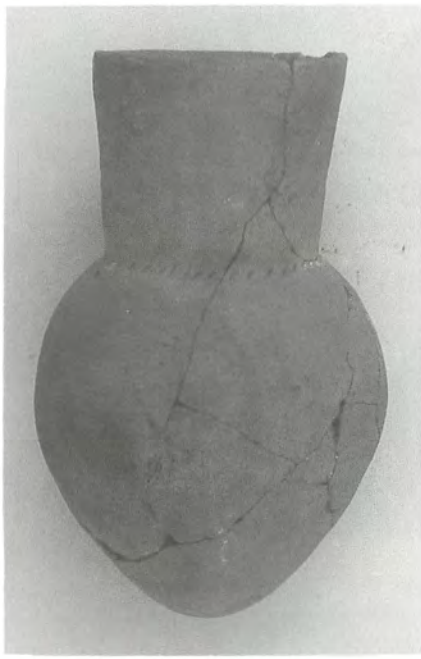
図版34

10号-A溝跡③層出土土器(約$\frac{1}{4}$)



10号-B溝跡③層出土土器(約$\frac{1}{4}$)

10号-B溝跡③層出土土器(約$\frac{1}{4}$)



10号-B溝跡
③層出土土器
(約$\frac{1}{4}$)

図版38

10号-B溝跡③層出土土器(約$\frac{1}{4}$)

10号-B溝跡
③層出土土器
(約$\frac{1}{4}$)

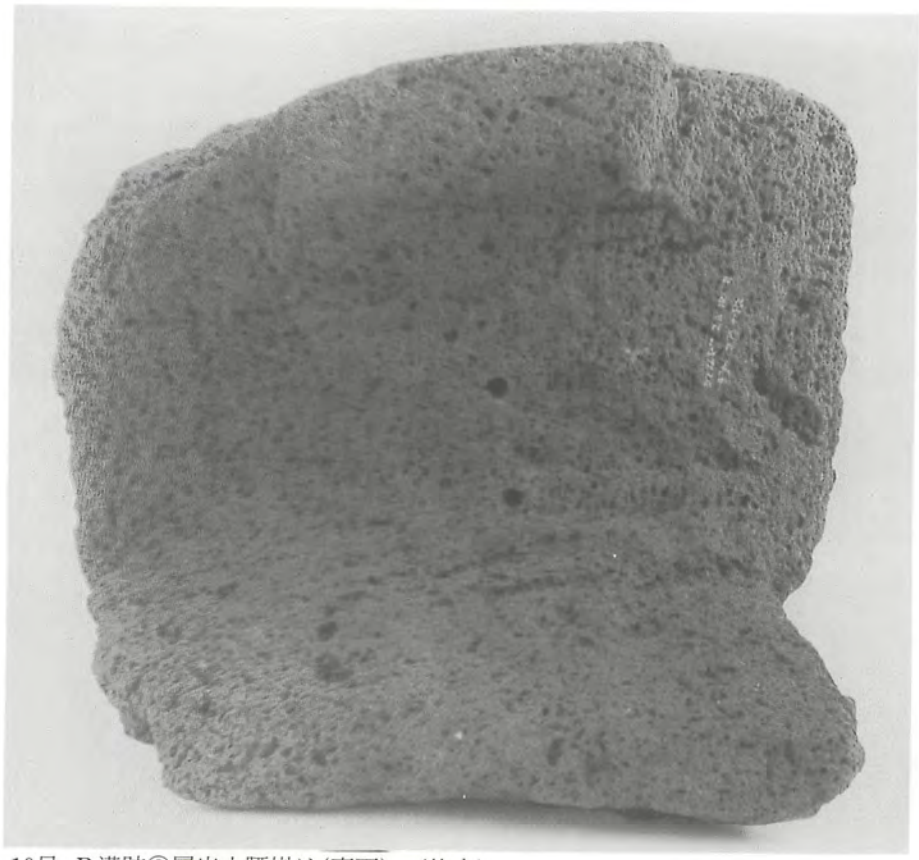
図版40

10号-B溝跡
③層出土土器(約$\frac{1}{4}$)

10号-B
溝跡③層
出土土器
(約$\frac{1}{4}$)

10号-B
溝跡③層
出土腰掛け
(約$\frac{1}{3}$)

図版42



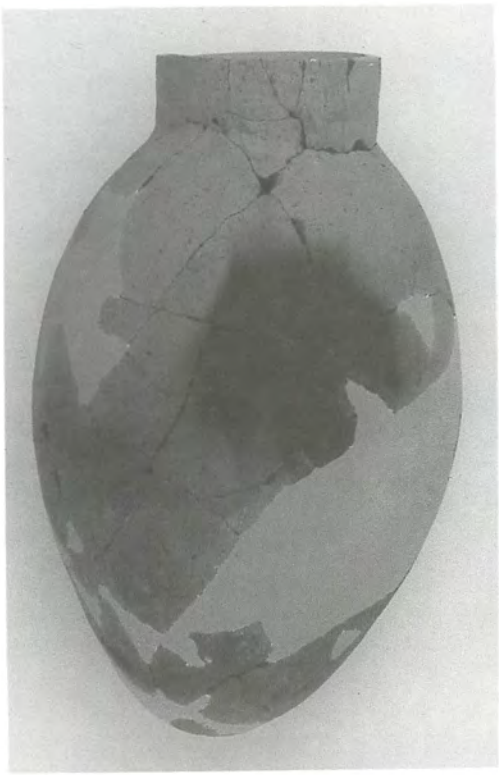
10号-B溝跡③層出土腰掛け(裏面)・(約$\frac{1}{3}$)

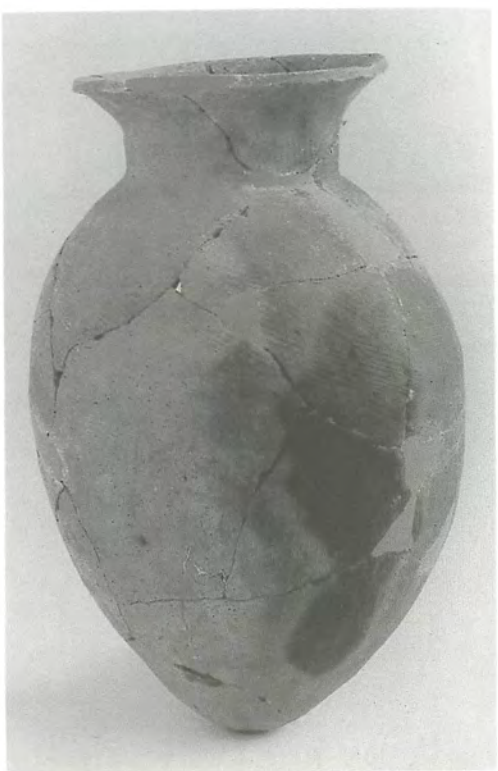
10号-B溝跡④層出土土器(約$\frac{1}{4}$)

10号-B溝跡④層出土土器(約$\frac{1}{4}$)

図版44

10号-B溝跡④層出土土器(約$\frac{1}{4}$)

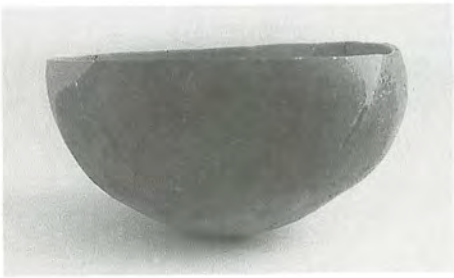




10号-B溝跡④層出土土器(約$\frac{1}{4}$)

図版46

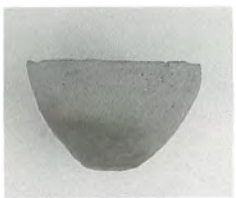
10号-B溝跡④層出土土器(約$\frac{1}{4}$)



10号-B
溝跡④層
出土土器
(約$\frac{1}{4}$)

図版48

10号-B溝跡④層
出土土器(約$\frac{1}{4}$)



10号-B溝跡
④層出土土器
(約$\frac{1}{4}$)

10号-A溝跡
②層出土銅製品
(約$\frac{1}{2}$)

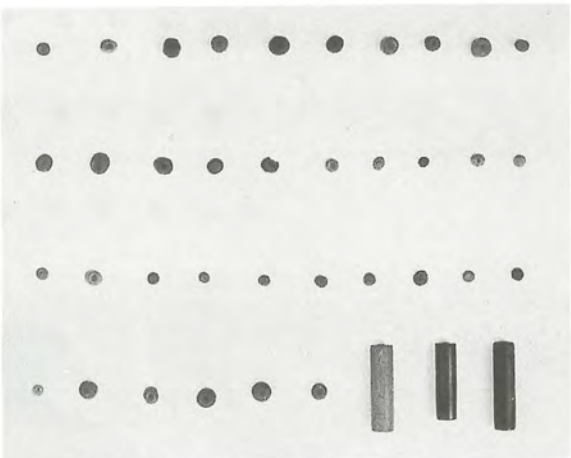
1号方形周溝墓出土土師器(約$\frac{1}{3}$)

図版50

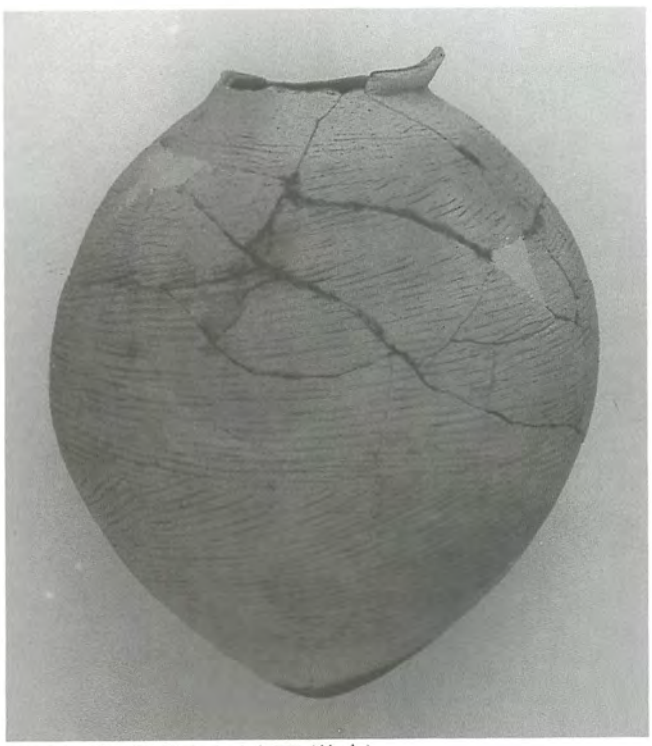
(約$\frac{1}{2}$)

2号方形周溝墓
出土遺物(約$\frac{1}{3}$)

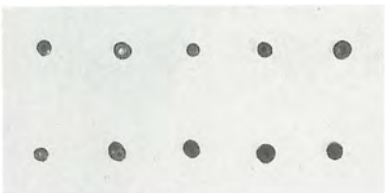
2号方形周溝墓出土土師器(約$\frac{1}{3}$)



1号木棺出土玉(約$\frac{1}{2}$)



2号方形周溝墓出土土師器(約$\frac{1}{3}$)

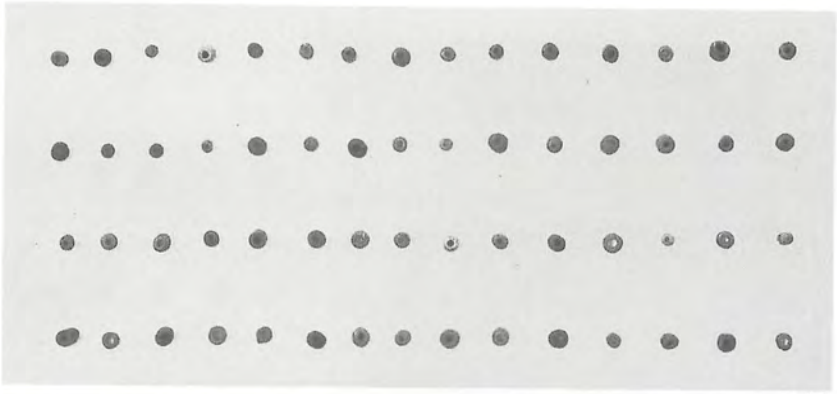


3号木棺出土玉(約$\frac{1}{2}$)

3号木棺出土鉄鎌(約$\frac{1}{3}$)

4号木棺出土刀子(約$\frac{1}{3}$)

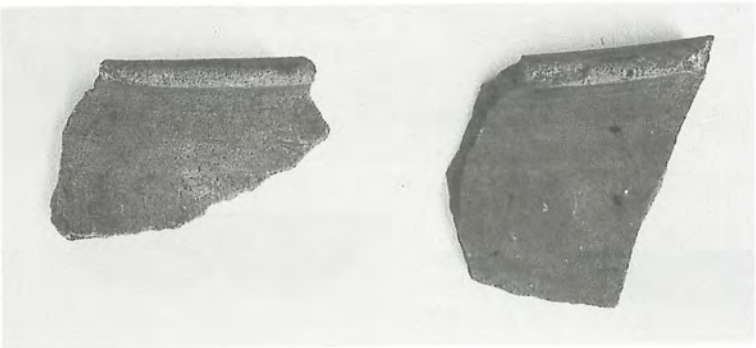
図版52



4号木棺
出土玉
(約$\frac{1}{2}$)

1号壺棺
(上)(約$\frac{1}{7}$)

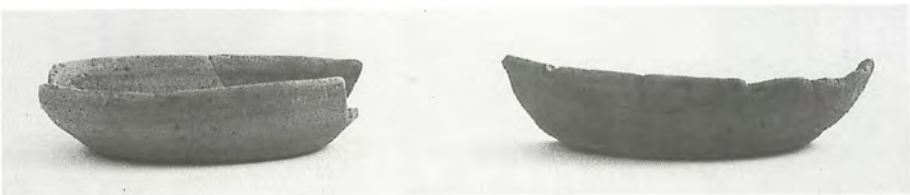
1号壺棺(下)(約$\frac{1}{7}$)



7号竪穴
住居址
出土遺物

9号竪穴住居址
出土遺物

20号竪穴住居址
出土遺物



28号竪穴
住居址
出土遺物

（約$\frac{1}{3}$）

図版54

25号竪穴住居址出土遺物

36号竪穴住居址出土遺物

28号竪穴住居址
出土遺物

33号竪穴住居址
出土遺物

38号竪穴
住居址
出土遺物

39号竪穴
住居址
出土遺物

44号竪穴住居址
出土遺物

44号竪穴住居址
出土遺物

46号竪穴住居址
出土遺物

（約$\frac{1}{3}$）

12号道路跡出土遺物

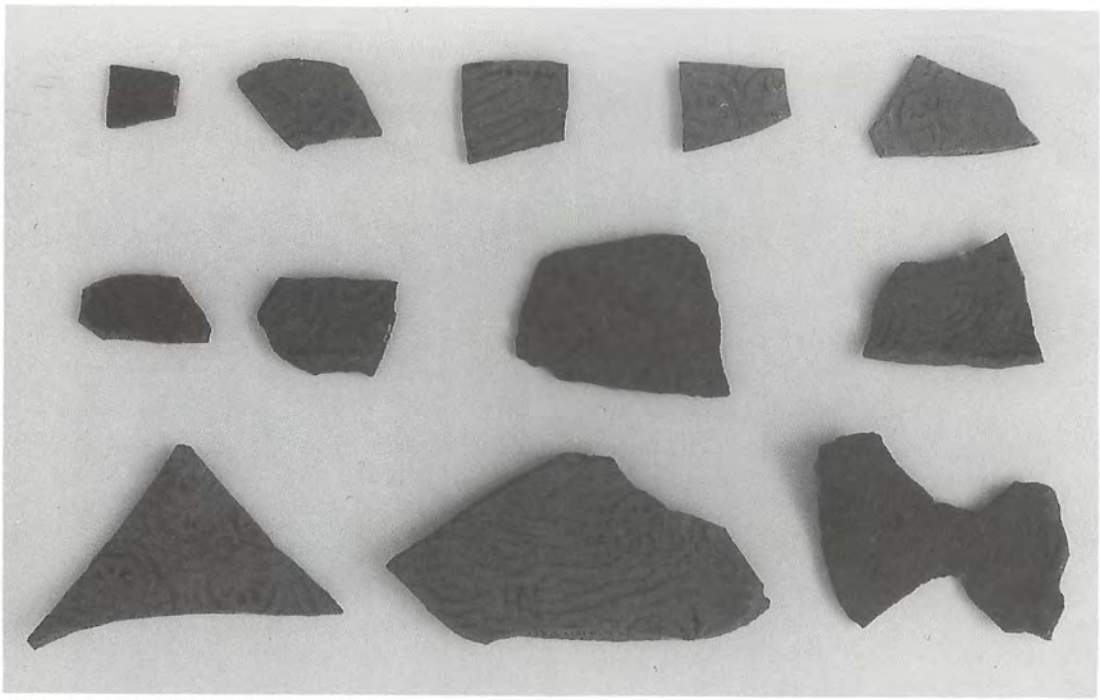
ふいごの羽口

(約$\frac{1}{3}$)

図版56

皇宋通宝(約$\frac{1}{2}$)

2号道路跡
出土鉄砲玉
(約$\frac{1}{2}$)



車輪文タタキ目をもつ須恵器(約$\frac{1}{3}$)

あ と が き

10号-A・B溝跡(南西から)

うてな遺跡の報告書を作成するには、発掘現場のつらい仕事や根気のいる整理作業を経てきました。

発掘調査から報告書作成までのさまざまな過程において、お世話になった方々の努力のお陰で、一冊の報告書が完成しました。ここに、感謝の意を表します。

熊本県文化財調査報告　第121集

うてな遺跡

1992年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　印刷協業組合サン・カラー

〒862 熊本市御領町730

03 教委・教文

② 001

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 121 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：うてな遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日